宮城県埋蔵文化財調査報告書第191集

新田東遺跡

―― 三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ ――

平成15年3月

宮城県教育委員会
国土交通省東北地方整備局

1．新田東遺跡（中央右側）と桃生城跡（中央）の遠景（南東から）

2．新田東遺跡調査区全景（北東から）

１．百萬塔（左側）とＳＩ24竪穴住居跡出土の三重小塔（右側）

２．三重小塔の出土状況（ＳＩ24竪穴住居跡）

1．ＳＩ８焼失竪穴住居跡（奈良時代）

2．ＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡（奈良時代）

１．ＳＩ８焼失竪穴住居跡出土の土器（奈良時代）

２．ＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡出土の土器（奈良時代）

1．ＳＩ21竪穴住居跡出土の土器（奈良時代）

2．ＳＩ20焼失竪穴住居跡出土の土器（平安時代）

1．奈良時代の各種土器

2．奈良・平安時代の鉄製品

序　　文

新たな世紀、21世紀を迎え、携帯電話やパソコンなど高度情報通信機器が普及し、これらなくしての社会生活は考えられない時代となりました。これらの情報通信技術や情報処理技術はこれからも進歩し、われわれの社会生活や世の中の仕組みまでも変えていくことでしょう。このような日々変化していく時代の中にあって私たちの行く末を考えるとき、来し方を正確に知ることの重要性がますます増してきております。

歴史は、過去に起こった事実の積み重ねから明らかにされていかねばなりません。県内各地域は情報の共有化により均質化しておりますが、特に地域との結びの強い埋蔵文化財は各地域の個性溢れる歴史を明確にするためにも欠くことのできない重要な位置を与えられてきております。しかし、埋蔵文化財は道路や宅地の造成、ほ場整備などの大規模開発により年々破壊され、消滅の危機にさらされています。

このような中にあって、宮城県教育委員会では、開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には積極的に保護することに努めてきております。

本書は、国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所との保存協議に基づき、三陸自動車道路－矢本石巻道路－建設工事に先立って実施した河北町新田東遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、隣接する奈良時代の著名な城柵官衙遺跡である桃生城を支えた大規模な集落跡の様子が明らかとなりました。この成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保存に理解を示され、調査に際しては多大なる御協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際に調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成15年3月

宮城県教育委員会

教育長　千　葉　眞　弘

例　　言

1．本書は国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所との保存協議に基づき、三陸自動車道－矢本石巻道路－建設工事に先立って平成13年度に実施した発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．発掘調査の測量は、新田東遺跡地内の基準杭№1:国家座標第X系X＝－162,830.133、Y＝39,281.710、H＝43.887、と基準杭№2:X＝－162,925.908、Y＝39,397.161、H＝31.609の2点を結ぶ直線を基準線とし、3m方眼のグリッドを設定して行った。この基準線と磁北との偏差は西に50°19'19"で、磁北の真北との偏差は7°10'である。検出した遺構の実測図は、グリッドを基準に平面図・断面図とも原則として1/20の縮尺で作成した。

4．本書の遺構番号は、遺構の種別ごとに調査現場で検出順に番号を付したものを使用した。
遺構の種別については次の略号を使用した。
掘立柱建物跡（SB)、竪穴住居跡（SI)、井戸跡（SE)、土壙（SK)、柱列（SA)、溝（SD)、焼成遺構・遺物包含層・その他性格の不明な遺構（SX）

5．本書で扱う遺構は、縮尺1/400の全体図に示した（第3図)。また、各遺構の個別の平面図・断面図は、原則として掘立柱建物跡は平面図が1/100、断面図が1/50、竪穴住居跡・井戸跡・土壙は平面図・断面図とも1/60の縮尺で図示した。また、遺物実測図は土器・土製品・鉄製品が1/3、石器が2/3、石製品が1/3または1/6、鏡・ガラス小玉が1/1の縮尺で図示した。

6．遺構の記録写真は35mmフィルムのリバーサル・カラー、モノクロと6cm×7cmのモノクロ、ネガカラーを使用して撮影した。また、遺構全体写真は無人ラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影業務を㈱日本特殊撮影に委託して行った。

7．土色については『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄，1976）を参照した。

8．本調査で得られた遺物、図面、写真などの諸資料は、宮城県教育委員会で一括して保管している。

9．出土遺物は報告書掲載図面No.を付記し、掲載「収納」番号と一致させて平箱に収納した。

10．鉄製品の保存処理については、東北歴史博物館の及川規氏の協力を得た。

11．鉄滓の分析は㈱川崎テクノリサーチに業務委託し、その成果を付章2に掲載した。

12．珠文鏡の保存処理・復元は、㈱東都文化財研究所に業務委託し、その成果の一部を付編に掲載した。

13．炭化材・種子の分析は㈱古代の森研究舎が行い、その成果を付章2に掲載した。

14．遺物の写真撮影は、㈱アートプロフィールに業務委託して実施した。

15．本調査成果の一部は、『現地説明会資料』、『平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』、『第28回古代城柵官衙遺跡発表会資料』、『発掘された日本列島展2002』にすでに概要を一部報告しているが、本書の内容がすべてに優先する。

16. 報告書作成のための整理作業は、遺構図面を柳澤和明が担当し、そのトレースを柳澤、大沼美代子が行った。遺物整理は柳澤和明、茂木好光、西村力が担当した。遺物実測は柳澤の指導のもとで古代の土器については主に佐藤悦子があたり、トレースを柳澤、大沼が行った。縄文土器については茂木、鉄製品と石器などについては西村が担当した。遺構・遺物写真の整理は茂木が担当した。
17. 本書の第3章8の縄文土器・弥生土器・続縄文土器・古墳時代前期土器の項と写真図版の作成を茂木好光、縄文石器の項を西村力が担当し、それ以外の図版作成と本文執筆・編集は柳澤和明が担当した。
18. 調査の実施及び報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力、御指導を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい。

相澤清利、池田敏宏、井上喜久男、及川規、金子裕之、金田明大、坂井秀弥、佐川正敏、佐藤敏幸、鈴木三男、巽淳一郎、田中宏明、辻秀人、深澤敦仁、藤沢敦、望月精司、森下章司、八木光則、山口明、渡辺博人；河北地区教育委員会、奈良国立文化財研究所平城京跡調査部・飛鳥藤原京跡調査部・文化財調査センター、東北歴史博物館、長野市立博物館、文化庁記念物課、宮城県多賀城跡調査研究所

目　　次

巻頭カラー図版
序文
例言
調査要項
目次
はじめに……1
1．遺跡の位置と地理的環境……1
2．周辺の遺跡……1
第2章　調査の方法と経過……1
第3章　Ⅰ区で発見された遺構と遺物……7
1．掘立式建物跡……7
2．竪穴住居跡……21
3．井戸跡……148
4．炉跡……154
5．焼成遺構……155
6．土壙……155
7．遺物包含層……162
8．その他の出土遺物……166
第4章　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区で発見された遺構と遺物……171
第5章　考察……176
1．古代の土器類の分類……176
(1)　土師器……176
(2)　須恵器……183
(3)　須恵系土器……189
(4)　製塩土器……190
(5)　灰釉陶器……190
2．土器群の設定と年代的位置付け……190
(1)　基準資料による土器群の設定……190
(2)　その他の主要遺構出土土器を含めた工器群の設定……192
(3)　Ⅰ群土器の特徴……194
(4)　Ⅰ群土器の年代……202

(5)　ⅡA群土器の特徴……203
(6)　ⅡA群土器の年代……206
(7)　ⅡB群土器の特徴……206
(8)　ⅡB群土器の年代……208
3．遺構期の設定と集落の変遷……209
(1)　遺構期の設定……209
(2)　B期の集落の様相……212
(3)　桃生城廃絶以降の平安時代の集落……222
4．特殊遺物……223
(1)　三重小塔……223
(2)　珠文鏡……227
第6章　まとめ……228
註・引用文献……229
付章……237
1．新田東遺跡より出土した炭化材・種子の分析……237
2．新田東遺跡出土製鉄関連遺物の分析・調査……243
写真図版……259
抄録
奥付

調　査　要　項

1．遺　跡　名：新田東遺跡（宮城県遺跡地名表記載番号66073）

2．遺 跡 記 号：SE

3．遺跡の性格：集落跡

4．所　在　地：宮城県桃生郡河北町飯野字新田

5．事 業 主 体：国土交通省東北地方整備局仙台工事事務所

6．調 査 主 体：宮城県教育委員会

7．調 査 担 当：宮城県教育庁文化財保護課

8．調 査 協 力：国土交通省東北整備局仙台工事事務所、河北地区教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所

9．調 査 期 間：確認調査　平成12年11月27日～12月 5 日
事前調査　平成13年 4 月23日～12月10日

10. 調査対象面積：約10,000㎡

11. 調 査 面 積：8,500㎡

12. 調　査　員

〔確認調査〕佐藤則之，佐久間光平

〔事前調査〕柳澤和明，茂木好光，西村力，佐藤則之，佐久間光平，須田良平，吉野武，引地弘行

第１章　はじめに

１．遺跡の位置と地理的環境

新田東遺跡は河北町飯野字新田に所在し、河北町の中心部である成田（通称飯野川）から北西に約2.5kmの距離にある。本遺跡は南東に向かって傾斜する丘陵上に立地する。この丘陵の北・西・南に沢が入り、南には沖積面が広がる。沖積面の標高は３ｍ前後で、本遺跡は44ｍ付近から３ｍ付近まで広がり、比高差が約40ｍと大きい。丘陵裾部の傾斜は急峻で、丘陵尾根も約５°と比較的傾斜がある。本遺跡は東西約300ｍ、南北約350ｍ、約６万㎡の広がりをもつ（巻頭図版１－１・２）。

本遺跡は東西約3.5km、南北約４kmの独立丘陵の南西端に位置する。この独立丘陵は北上山地の末端部をなし、東が南流する北上川によって分断され、北・西・南が沖積面となっている。さらに北・西・南には旧北上川がこの独立丘陵を抱き込むように弧状に南流している。

２．周辺の遺跡

本遺跡の西隣、同じ独立丘陵上には奈良時代の城柵官衙遺跡として著名な桃生城跡がある。『続日本紀』によれば、桃生城は天平宝字２年（758）頃から造営が開始され、翌３年（759）秋頃には完成し、15年後の宝亀５年（774）７月に海道蝦夷の攻撃によって西郭が敗られたことなど、造営から廃絶までの経緯がよく知られている。桃生城跡については、宮城県多賀城跡調査研究所が昭和49年～平成13年度まで10カ年計画で調査し、遺跡の概要が次第に明らかになってきた（宮城県多賀城跡調査研究所，1975・1976・1995～2002；柳澤，2001；白鳥他，2002）。

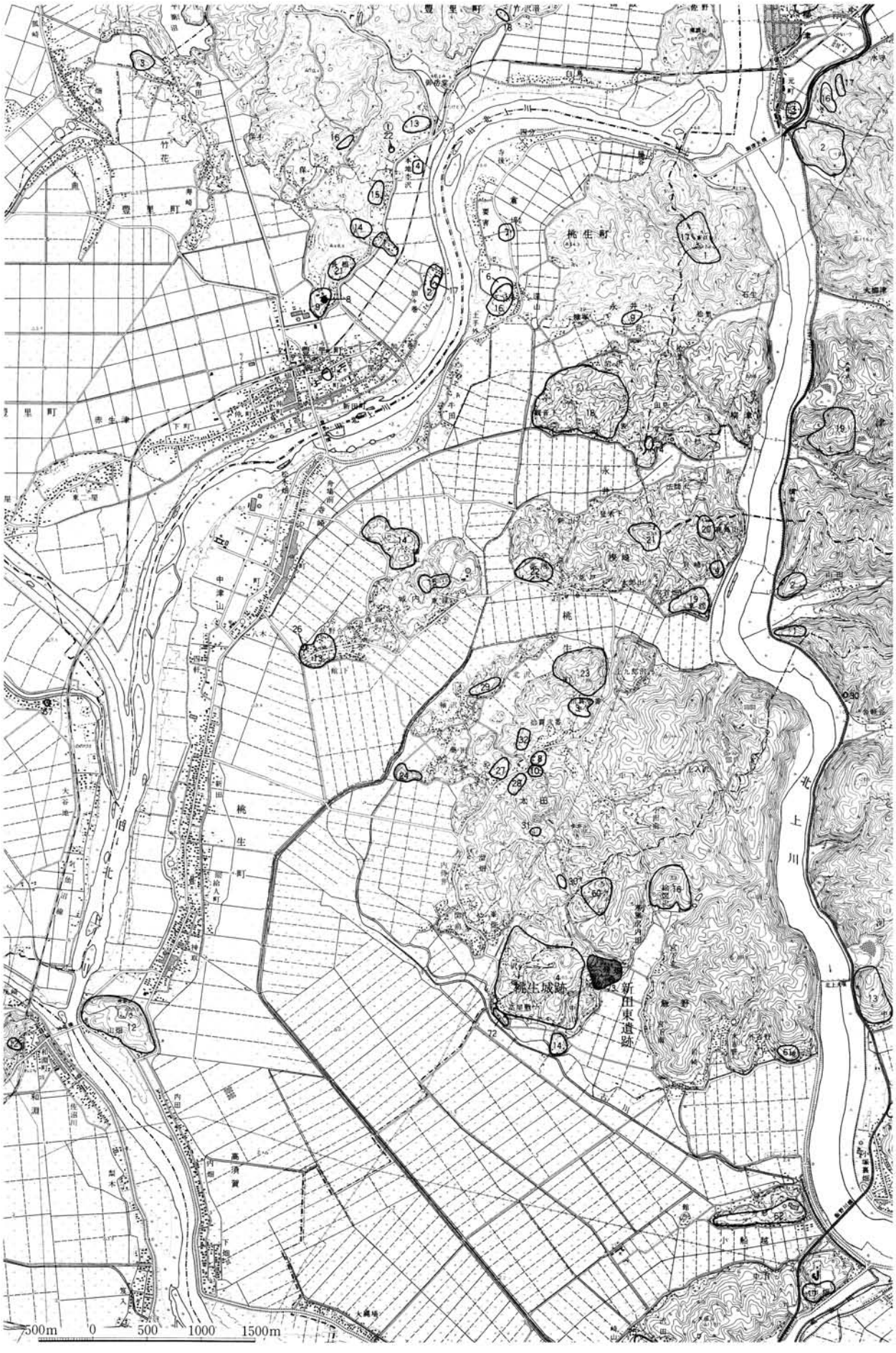
新田東遺跡はこの桃生城跡の外郭東辺から約50ｍの至近距離にあり、本遺跡のある丘陵を登って行くと、桃生城跡の外郭東辺北部にある土橋状の通路部分（桃生城跡第４次調査区）に到る（第151図）。本遺跡は桃生城跡と同じ奈良時代を中心としており、年代的・位置的にみて本遺跡は桃生城跡と密接に関連する。

新田東遺跡、桃生城跡の立地するこの独立丘陵上には、高屋敷遺跡（72）、問答山遺跡（60）、外吉野遺跡（61）、後谷地遺跡（62）、万歳山Ｂ遺跡（31）、細谷Ｂ遺跡（28）、細谷遺跡（10）、宗全山遺跡（８）、拾貫壱番遺跡（32）、角山遺跡（29）など古代の集落跡が多くあり、桃生城跡に瓦を供給したとみられる太田窯跡（27）もある。

第２章　調査の方法と経過

新田東遺跡は、三陸自動車道の路線策定に先立つ分布調査で平成２年に発見された。この時に建設省と宮城県教育委員会との間で協議が行われ、桃生城跡の城内を通る計画であった路線を東に大きく振ったため、新田東遺跡の中央を路線が縦断することになった（第２図；巻頭図版１－１）。

三陸自動車道の建設の進捗に伴い、国土交通省の要請を受け、平成13年度に確認調査を行い、その結果をみてから事前調査の時期、期間などを協議することになった。確認調査は、平成12年11月27日



第１図　新田東遺跡と周辺の遺跡（１/50,000）

～12月５日の延べ７日間行った。確認調査の際には調査対象地の大部分が杉林であったため、杉林の間をぬうようにして９本のトレンチを設定し確認調査を行った。その結果、古代の竪穴住居跡数棟、掘立柱建物跡、土壙など古代を中心とする遺構が多数検出された。そして、これを受けた再協議で、平成14年度当初より４ヶ月間の予定で事前調査を行うことになった。

三陸自動車道建設に伴う事前調査は、平成13年４月23日～12月10日の延べ132日間行った。

三陸自動車道の路線内で、標高25m～45mまで広がる丘陵頂部が遺跡中心部にあたる。この主要調査区をＩ区とした。調査対象面積は約10,000㎡で、発掘調査面積は8,500㎡である。

４月23日より発掘機材を搬入し、７月24日までに重機によるＩ区全体の表土除去を終え、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、土壙など主要遺構の検出作業をほぼ終えた。Ｉ区で検出した主要遺構には、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡49棟（建て替えを含めると60棟）、井戸跡３基、焼成遺構２基、炉跡１基、土壙20基、平場１などがあり、この他に遺物包含層２箇所がある（第３図）。

表土除去と遺構検出作業の進捗に併せ、光波測距儀による３ｍ方眼のグリッド設定とレベル基準点設定を行った。遺構平面図の作成も主要遺構の精査の進捗に併せて随時行ったが、10月以降に精査と併行しながら平面図の作成とレベル測定を集中して行った。Ｉ区の調査区は細長いため、各主要遺構の精査が終了した時点で、写真撮影を行った。そして、調査区全体と遺跡全景の写真撮影については、無人ラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を10月31日に行った。

９月29日には一般を対象とする現地説明会を開催し、発掘調査現場を公開して調査成果の概要を説明した。約200名の方が遺跡を訪れ、見学された。

Ｉ区の調査区の斜面下方は、標高16m～25mまで傾斜がきつくなっていて、その下に南東に向けて入る比較的大きな沢がある。その沢頭にあたる標高15m～17mまでの間に比較的緩やかな斜面があり、ここにⅡ区を設定した。

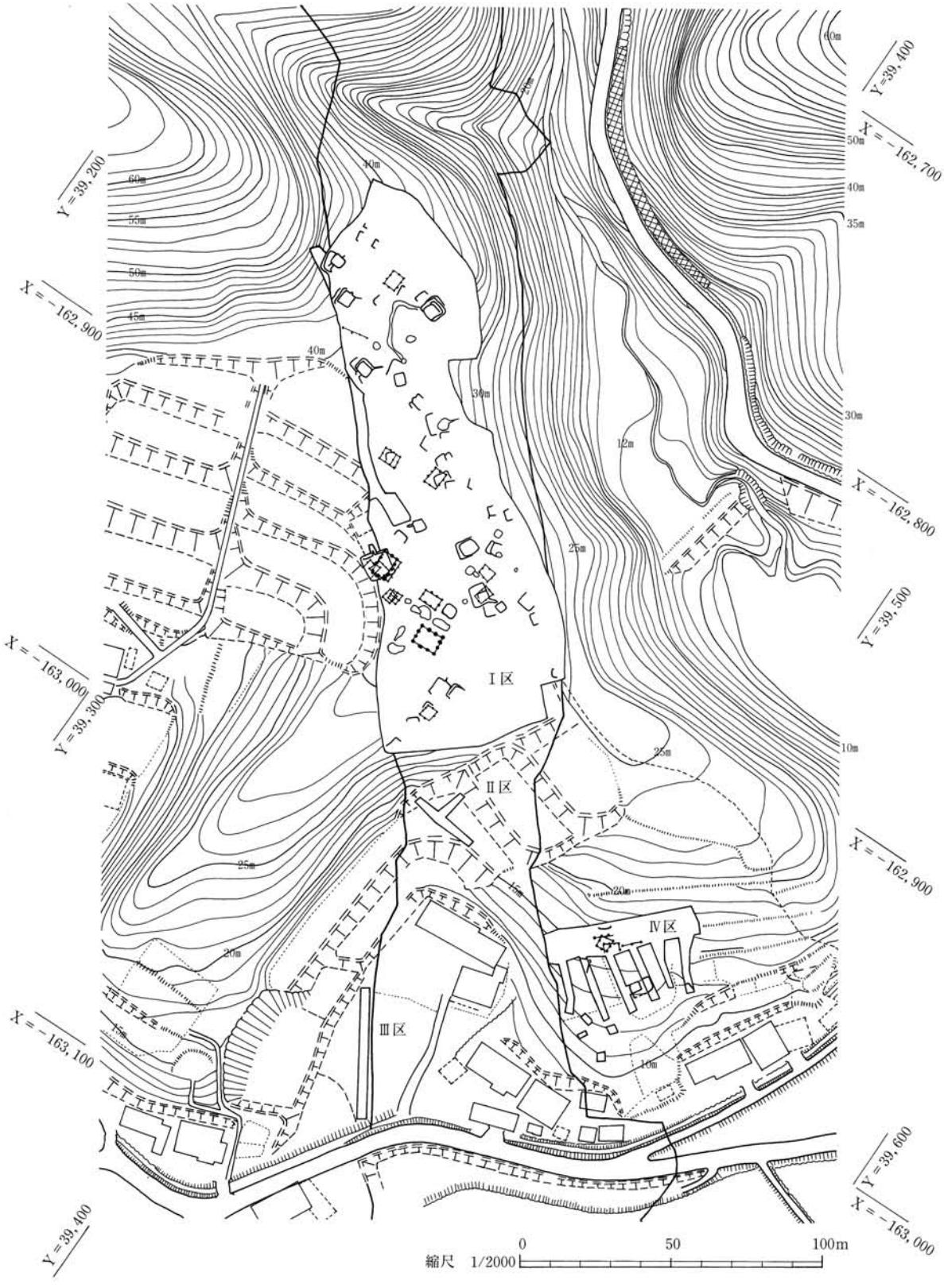
Ⅱ区では遺物包含層（ＳＸ３遺物包含層）の北西端部を検出した。Ⅱ区の下方の斜面も三陸自動車道の計画路線の範囲内に入り、そこまでＳＸ３遺物包含層が広がると考えられる。しかし、この斜面に面した三陸自動車道の計画路線の範囲内で、まだ買収契約が完了せず、移転が行われていない民家もあったため、この民家跡地を含めた確認調査を来年度以降に行うこととし、Ⅱ区については危険防止のため、それ以上は発掘調査面積を拡げなかった。

なお、Ⅱ区の南西斜面下にある三陸自動車道計画路線内の民家については、三陸自動車道計画路線の両脇に移転することになったため、宮城県教育庁文化財保護課、河北地区教育委員会、地権者で協議し、確認調査を行うことにし、その結果をみて再度協議することにした。そして、Ⅱ区の南側をⅢ区、東側をⅣ区とし、国庫補助の緊急調査費を用いて、Ⅲ・Ⅳ区の確認調査を行った。

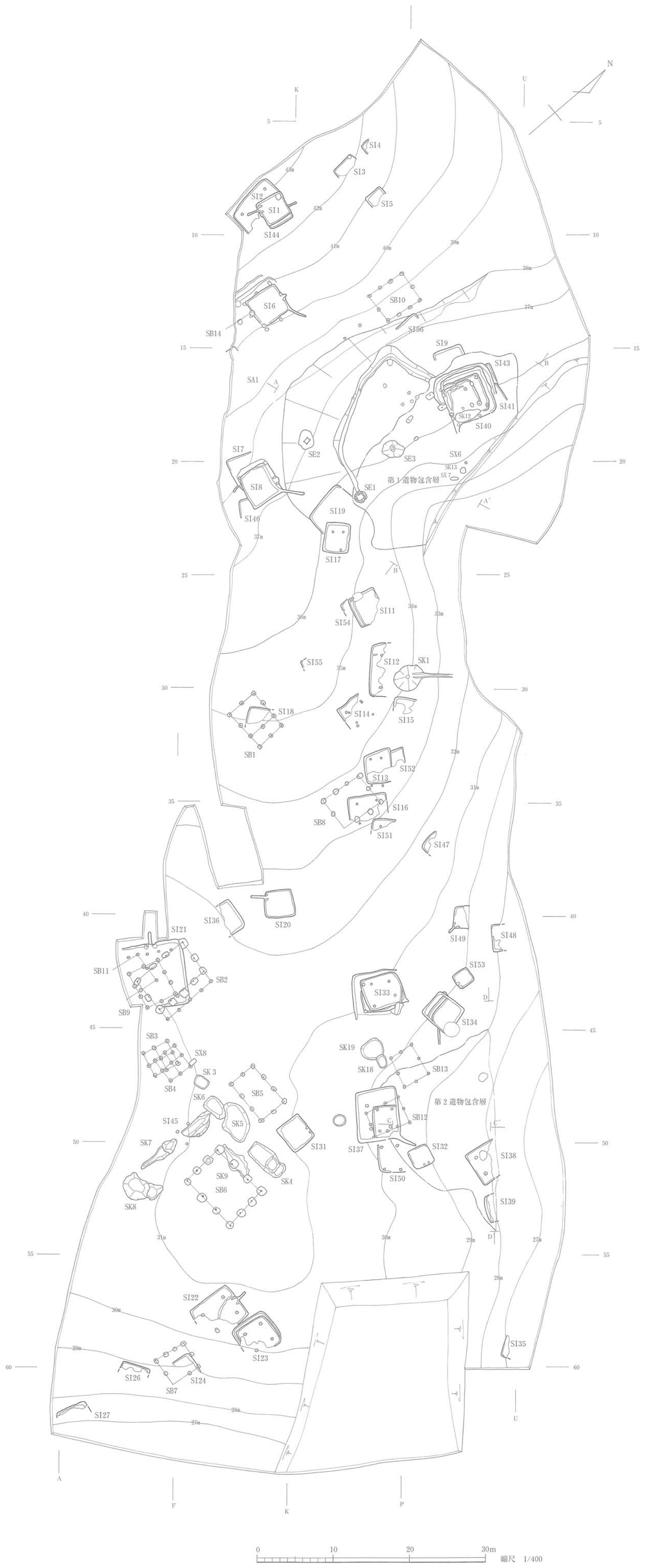
Ⅲ区は丘陵斜面が大きく削平を受けた人為的な平坦面であったため、遺構は検出されなかった。表土から古代の遺物が少数出土した。

Ⅳ区で掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されたので、事前調査を行い、掘立柱建物跡２棟、柱列跡２条、竪穴住居跡３棟、遺物包含層１箇所を検出した（第２・127図）。宮城県教育庁文化財保護課、河北地区教育委員会、地権者で協議し、遺構面を土盛り保存した後に民家を移転・建設するよう

地権者に指導して、了承が得られた。そのため、遺構の掘り下げは掘立柱建物跡、柱列跡について必要最小限に留め、竪穴住居跡、遺物包含層の掘り下げは行わなかった。Ⅳ区の概要については、一連の遺跡であるため、本報告書に記すことにした。



第２図　新田東遺跡の調査区配置図　（１/2,000）



第3図　新田東遺跡Ⅰ区検出主要遺構全体図

第３章　Ｉ区で発見された遺構と遺物

Ｉ区は本調査の主体となる調査区である。検出された主な遺構には、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡49棟（建て替えを含めると60棟）、井戸跡３基、焼成遺構２基、炉跡１基、土壙20基、平場１などがあり、この他に遺物包含層２箇所がある（第３図、図版１・２）。

１．掘立柱建物跡

【ＳＢ１掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第４図、遺物：第５図、図版３－１）

〔位置〕調査区中央部西際、丘陵尾根上の標高35m付近に位置する。柱穴の残存状況と地形からみて、南半部は上部を大きく削平されている。

〔重複〕ＳＩ18竪穴住居跡と重複するが、ＳＩ18竪穴住居跡の残りが悪く、新旧関係は不明である。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の東西棟で、東妻より西に１間目に間仕切りがある。

〔柱穴〕一辺40～50cm程の方形で、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で37cm、最も残りの悪い東妻棟通り下柱穴で10cmある。間仕切りの柱穴は一辺45cmの正方形で、深さ20cmある。埋土は地山粘板岩礫片を多く含む褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕直径約18cmの円形で、しまりの悪い褐色土である。

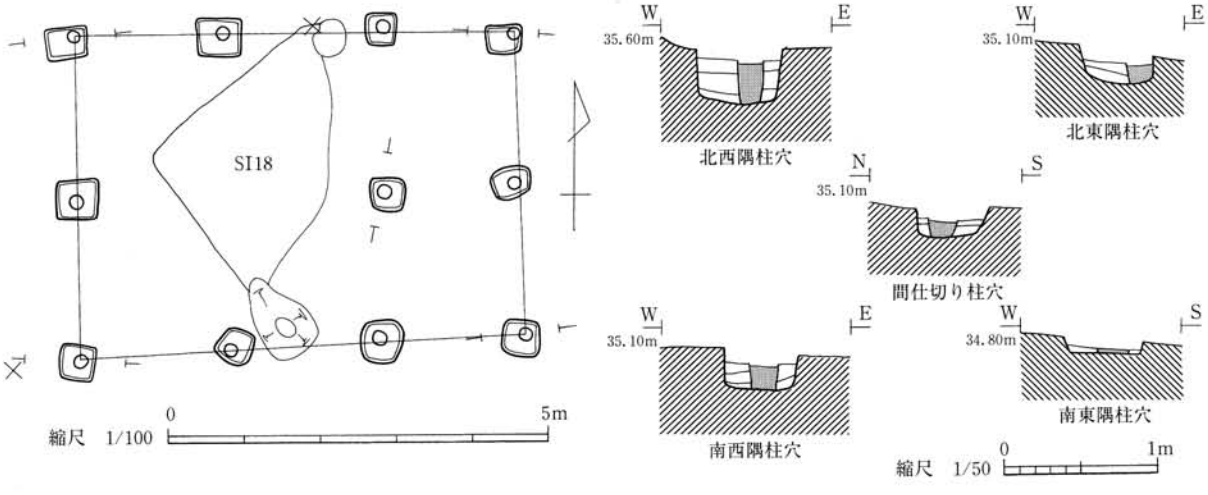
〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約5.8m、柱間寸法は西から2.0m・2.1m・1.7mである。梁行総長は東妻で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。

〔方向〕東妻でみると北で西に約３°偏る。建物の方向は丘陵尾根・等高線とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から土師器坏・甕、須恵器坏、縄文土器深鉢の破片が少数出土した。土師器はいずれも製作にロクロを使用しないもの（以下、「非ロクロ調整」と略称する）で、坏は体部に段のあるものである。須恵器坏（１）は静止糸切り後に体下部～底部を回転ヘラケズリしたものである。また、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕の破片が少数出土した。

【ＳＢ２掘立柱建物跡】（平面図：第６・59図、断面図：第７図、遺物：第８図、図版３－２～４）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31.5m付近に位置する。柱穴の残存状況と地形からみて、南半部は大きく削平されているとみられる。



第４図　ＳＢ１掘立柱建物跡平面図（１/100）・断面図（１/50）

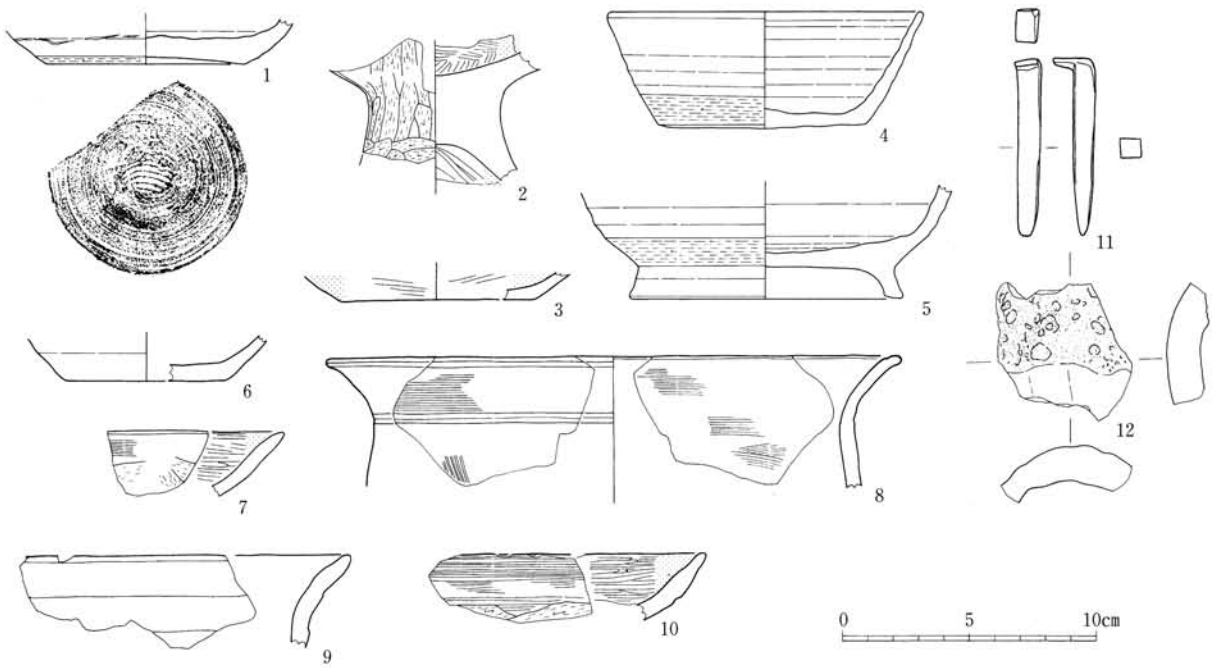
〔重複〕ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ９・11掘立柱建物跡と重複する。ＳＩ21竪穴住居跡よりも新しく、ＳＢ９・11掘立柱建物跡よりも古い。

〔柱間数・棟方向〕桁行４間、梁行３間の南北棟で、東側に廂が付く。東側柱列と東廂が桁行４間、西側柱列が桁行３間と変則的である。

〔柱穴〕身舎の柱穴は一辺1.1m前後の正方形または長辺約1.1m、短辺約0.7mの長方形で、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で90cm、最も残りの悪い南妻棟通り下柱穴で54cmある。南西隅柱穴を除く身舎柱穴はいずれも柱痕跡部分を深く段掘りしている。また、身舎の柱穴では斜面側にあたる南妻柱穴３箇所とそれ以外の柱穴３箇所で板状の粘板岩礫片や須恵器甕の大きめの体部破片(11～13)を礎盤に入れている。廂の柱穴は一辺約40cmの正方形のものが多く、身舎の柱穴よりかなり小さい。深さも、最も残りのよい北端から１間目柱穴でも43cmと、身舎の柱穴よりも約50cm浅い。段掘りはなく、礎盤も入れていない。身舎・廂の柱穴とも埋土は粘板岩礫片を多く含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕身舎は径約30cmの円形、廂は径約24cmの円形である。堆積土は粘板岩礫片、明黄褐色土を含む褐色土で、しまりが悪い。

〔平面規模〕桁行総長は東側柱列で約7.7m、柱間寸法は北から1.9m・1.9m・2.1m・1.8mである。

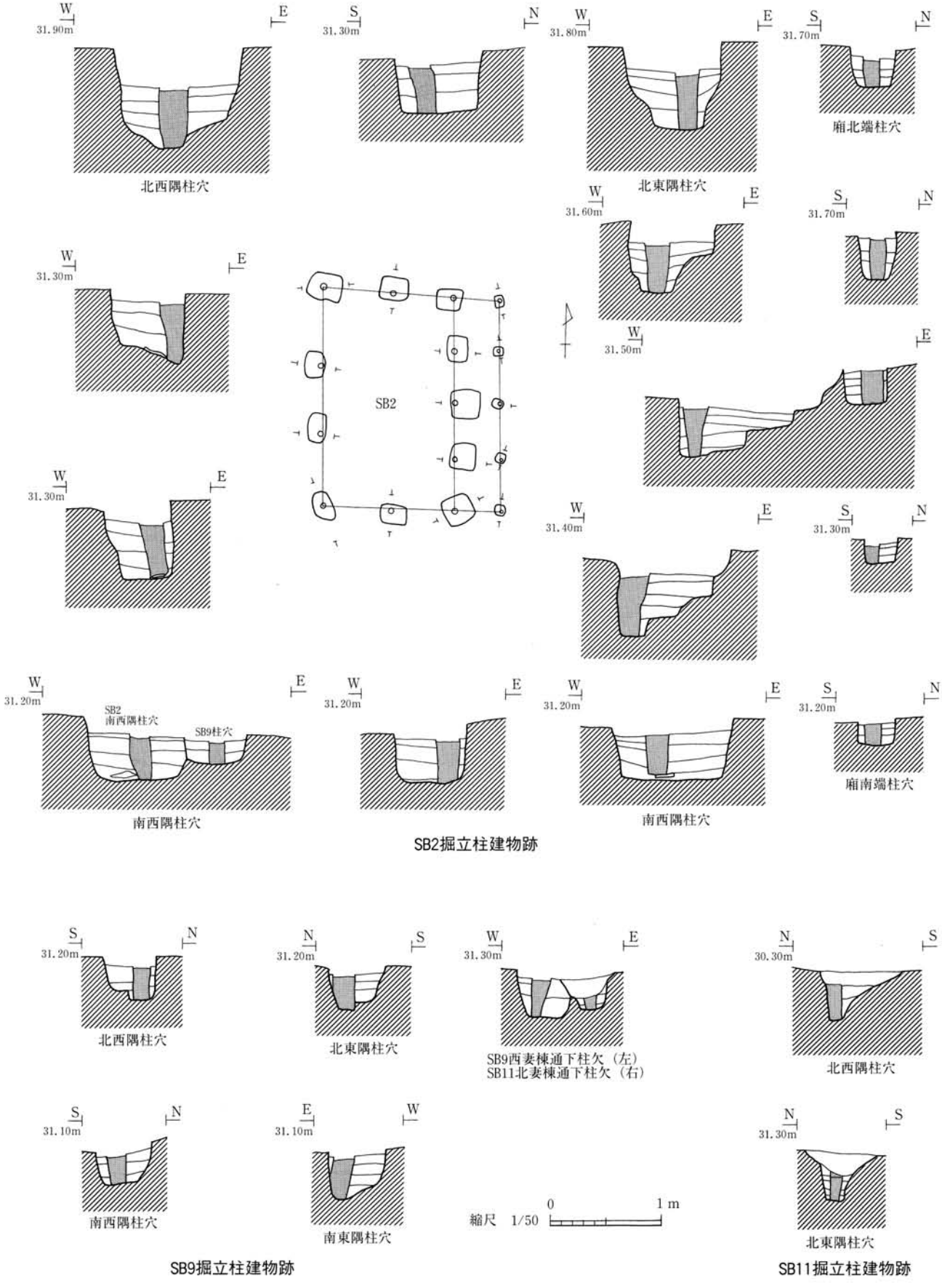


番号	種　類	分類	遺構	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	須恵器坏	A3	SB1	北西隅柱穴掘方	2/3	底径7.8cm。外面：底部静止糸切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。断面サンドイッチ状。		001
2	土師器高坏		SB6	西妻南より１間目柱穴掘方	破片	非ロクロ調整。外面：手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	34-4	001
3	土師器坏	ＩC1	SB6	北西隅柱穴掘方	破片	底径7.6cm。非ロクロ調整。平底。外面：ヘラミガキ→黒色処理。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		001
4	須恵器坏	B4	SB6	西妻南より１間目柱穴抜取穴	完形	口径12.4、底径8.2、器高4.7cm。外面：底部ヘラ切り→底部ナデ・体下部回転ヘラケズリ。	34-5	001
5	須恵器高台坏	AorB2	SB6	東妻南より１間目柱穴掘方	1/2	高台径10.8cm。底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台→再びロクロナデ。		001
6	須恵器坏	B2	SB3	北側柱列中央柱穴柱痕跡	破片	体下部～底部1/4破片。底径6.4cm。外面：回転糸切り無調整。		001
7	土師器坏	ＩB2	SB9	北西隅柱穴掘方	破片	口縁部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		001
8	土師器甕	ＩA	SB9	北西隅柱穴掘方	破片	口径22.6cm。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部ハケメ。内面：口縁ヨコナデ、体部ナデ。		001
9	土師器甕	ＩA	SB7	北西隅柱穴掘方	破片	口縁部破片。非ロクロ調整。外面：ナデ、摩滅。内面：ナデ、摩滅。		001
10	土師器坏	ＩB1	SB11	北妻棟通り下柱穴柱抜取穴	破片	口縁～体部破片。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部に段、体下部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		001
11	鉄釘		SB6	層位不明	完形	方頭釘。長さ7.1cm。頭部1.3×0.8cm長方形。体部断面0.8cm方形。	37-24	031
12	鞴羽口		SB5	南側柱列西より1間目柱穴掘方	破片	残存長5.5cm。残存幅5.3cm。推定幅6.8cm。		028

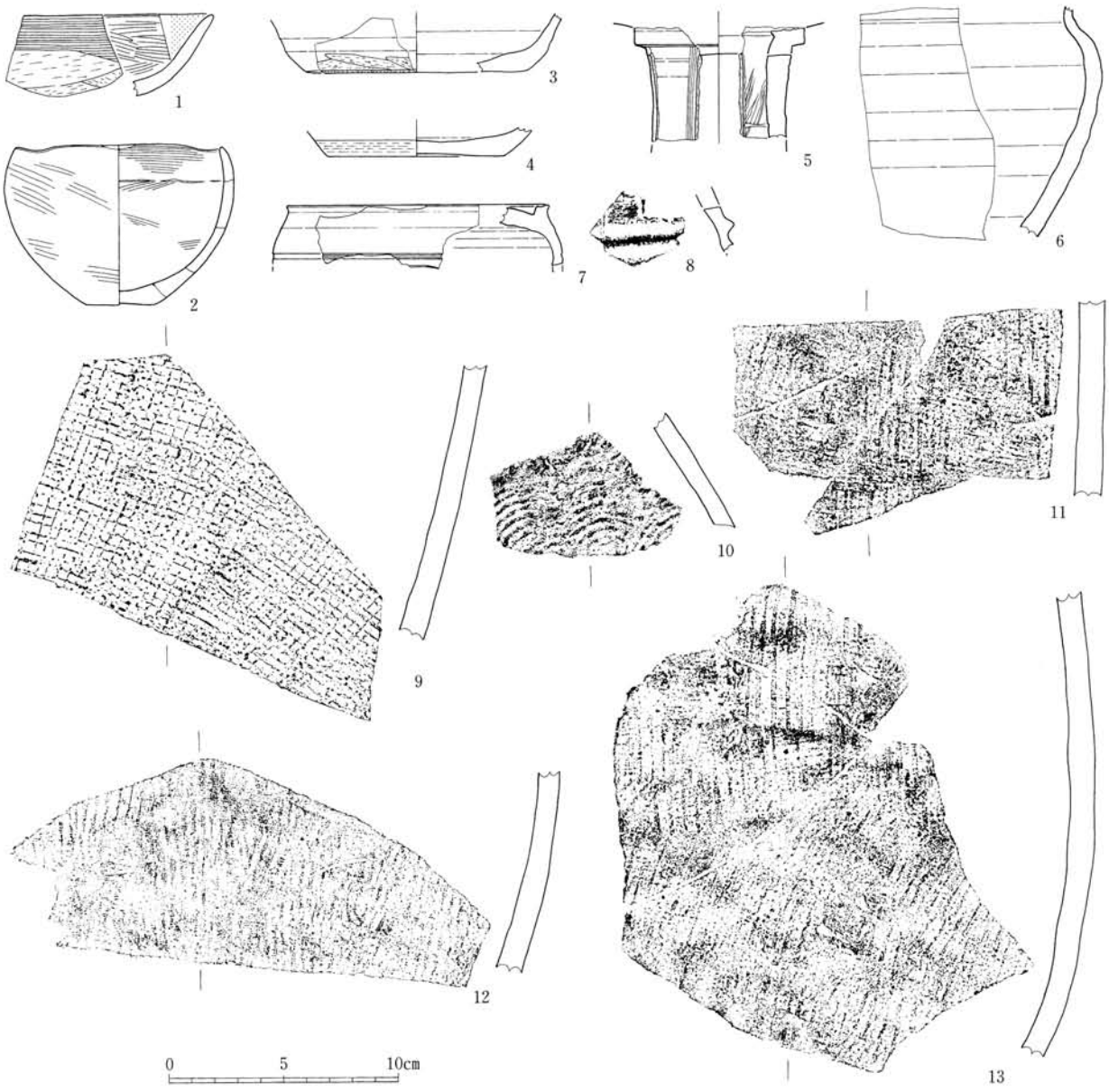
第５図　SB1・3・5・6・7・9・11掘立柱建物跡出土遺物

SB2掘立柱建物跡堀り上げ状況

第6図　ＳＢ２・３・４・９・11掘立柱建物跡平面図（１/100）



第７図　ＳＢ２・９・11掘立柱建物跡断面図（１/50）



番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	I B2	東側柱列北より1間目柱穴掘方	破片	非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		001
2	土師器椀	I C	新ピット	3/5	口径9.1、底径3.0、器高7.0cm。非ロクロ調整。外面：体部ヘラミガキ、摩滅。底部ケズリ→ヘラミガキ？、摩滅。内面：口縁ヨコナデ、体部ナデ、摩滅。	33-24	001
3	須恵器坏	A5	身舎南東隅柱穴掘方。	破片	底径9.6cm。外面：底部ヘラ切り→体下部～底部手持ちヘラケズリ。焼成良好。		001
4	須恵器坏	B3	西側柱列北より2間目柱穴掘方	破片	底径7.8cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。		001
5	須恵器高坏	B3	西側柱列北より2間目柱穴掘方	破片	坏部が接合面で剥落した脚部破片。接合面に2条の隆線巡る。坏部底面2段構成。脚部に長方形透かし4単位。外面：ロクロナデ→透かし→ナデ、透かし面手持ちヘラケズリ。内面：絞り目、ロクロナデ。焼成堅緻。	33-25	001
6	須恵器鉢	B	西側柱列北より1間目柱穴	破片	頸下部～体下部破片。口縁部欠。鉄鉢形。両面ロクロナデ。焼成堅緻。	33-28	001
7	円面硯		西側柱列北より2間目柱穴礎板	破片	須恵質。硯部径約11.4cm。硯面部径約10.4cm。陸部と海部との境に堤がないタイプ。縁の上端が窪む。脚部に横位の沈線1条と透かし。焼成堅緻。		001
8	円面硯		西側柱列北より2間目柱穴掘方	破片	須恵質。脚部破片。外面：ロクロナデ、十字透かし、縦位沈線。横位隆帯。内面：ロクロナデ。焼成堅緻。SI21-40（第63図40）と同一個体か。	33-26	001
9	須恵器甕		身舎北西隅柱穴掘方	破片	胴部破片。外面：正格子叩き目。内面：平行当て具痕→ナデ。焼成堅緻。		001
10	須恵器甕		東側柱列北より2間目柱穴掘方	破片	外面：同心円状叩き目痕。内面：同心円状当て具痕。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北関東系。	33-27	001
11	須恵器甕		身舎南東隅柱穴礎板	破片	胴部破片。外面：平行叩き目。内面：無文当て具痕、ナデ。焼成普通。	34-1	001
12	須恵器甕		西側柱列北より2間目柱穴礎板	破片	胴部破片。外面：平行叩き目。内面：ナデ。焼成普通。	34-2	001
13	須恵器甕		身舎南東隅柱穴礎板	破片	胴部破片。外面：平行叩き目。内面：ナデ。焼成普通。	34-3	001

第8図　ＳＢ２掘立柱建物跡出土遺物

また、西側柱列で約7.9m、柱間寸法は北から2.8m・2.5m・2.6mである。梁行総長は北妻で約4.7m、柱間寸法は西から2.5m・2.2mである。また、南妻で総長約4.7m、柱間寸法は西から2.4m・2.3mである。廂の出は北妻から1.7m、南妻から1.7mである。平面形は東側柱列が西側柱列より0.2m短いため、やや歪んでいる。

〔方向〕東妻でみると北で西に約1°偏り、ほぼ磁北を向く。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏（1）・甕、須恵器坏（3・4）・高台坏・蓋・高坏（5）・甕（9～13)、円面硯（7・8）、縄文土器深鉢の破片が少数出土した。土師器坏には丸底気味のもの（1)、体下部に段のあるものがある。須恵器坏には体下部～底部を手持ちヘラケズリしたもの（3)、体下部～底部を回転ヘラケズリしたもの（4）がある。また、柱痕跡などから非ロクロ調整の土師器坏・椀（2）・甕、須恵器坏・鉢（6）・甕の破片の破片が少数出土した。須恵器甕の体部破片の中には体部外面に同心円状叩き目痕のあるもの（10）が1点あり、北関東系のものとみられる。

【ＳＢ３掘立柱建物跡】（平面図：第6図、断面図：第9図、遺物：第5図）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31m付近に位置する。

〔重複〕ＳＢ４掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

〔柱間数・棟方向〕桁行2間、梁行2間の総柱建物である。

〔柱穴〕一辺40～50cmの方形または隅丸方形を基調とし、深さは最も深い北東隅柱穴で65cm、最も浅い南西隅・北西隅柱穴で35cmである。北西隅柱穴と西側柱列中央柱穴では、柱位置を段掘りしている。埋土は地山土ブロックを含む明褐色土・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕南西隅柱穴と南側柱列中央柱穴では柱が抜き取られているが、それ以外の7箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径16～18cmの円形で、堆積土は地山粒・炭化物を少量含むしまりの悪い暗褐色土である。

〔平面規模〕西側柱列で総長3.50m、柱間寸法は北から1.80m・1.70mである。また、北側柱列で総長3.40m、柱間寸法は西から1.70m・1.70mである。

〔方向〕西妻でみると北で東に約10°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、縄文土器深鉢の破片が少数出土した。このうち土師器坏には体下部に段のあるものがある。また、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、縄文土器深鉢の破片が少数出土した。このうち土師器坏には平底のもの、須恵器坏には回転糸切り無調整のもの（6）がある。

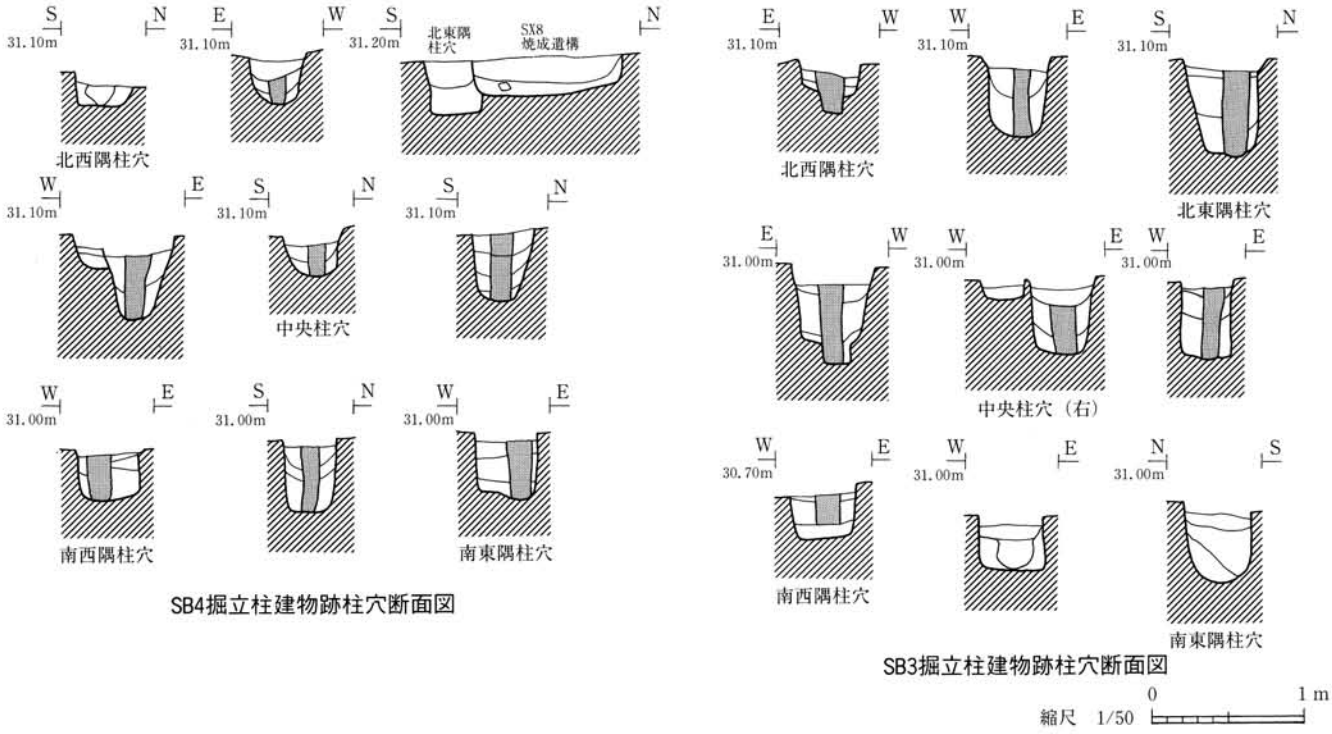
【ＳＢ４掘立柱建物跡】（平面図：第6図、断面図：第9図）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31m付近に位置する。

〔重複〕ＳＢ３掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。また、北西隅柱穴はＳＸ８焼成遺構と重複し、これよりも古い。

〔柱間数・棟方向〕桁行2間、梁行2間の総柱建物である。

〔柱穴〕一辺40～50cmの方形または隅丸方形を基調とし、深さは最も深い西側柱列中央柱穴で56cm、



第９図　ＳＢ３・４掘立柱建物跡柱穴断面図

最も浅い北西隅柱穴で32cmである。埋土は地山土ブロックを含む明褐色土・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕すべての柱穴で柱痕跡を確認した。北西隅柱穴と北側柱列中央柱穴では柱が切り取られている。柱痕跡は直径14～16cmの円形で、堆積土は地山粒・炭化物を少量含むしまりの悪い暗褐色土である。

〔平面規模〕北側柱列で総長3.55m、柱間寸法は西から1.65m・1.90mである。西側柱列で総長3.35m、柱間寸法は北から1.60m・1.75mである。

〔方向〕西側柱列でみると北で東に約２°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、縄文土器深鉢の破片が少数出土した。このうち須恵器坏には体下部～底部を回転ヘラケズリした底部小破片がある。また、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏の破片が少数出土した。

【ＳＢ５掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第10図、遺物：第５図、図版４－１）

〔位置〕調査区南半部、丘陵尾根上の標高31m付近に位置する。

〔重複〕重複はない。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の東西棟である。

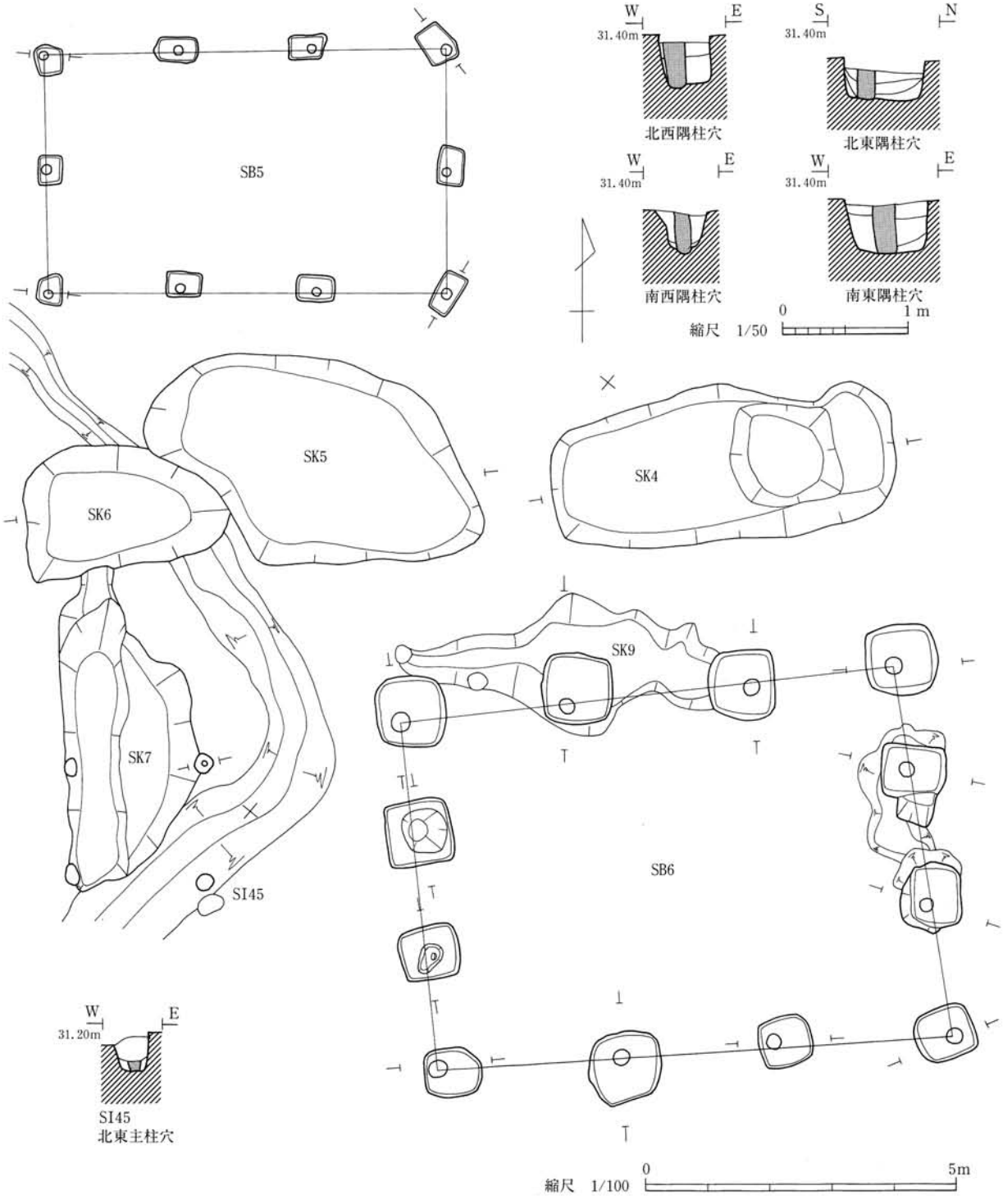
〔柱穴〕長辺60～70cm、短辺約40cmの長方形または一辺40～50cmの方形を基調とし、深さは最も深い南東隅柱穴で56cm、最も浅い北東隅柱穴で34cmある。埋土は明黄褐色土ブロックを多く含む暗褐色土・明褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕直径約15～18cmの円形で、堆積土はしまりの悪いにぶい黄褐色土である。

〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約6.4m、柱間寸法は西から2.1m・2.1m・2.1mである。梁行総長は東妻で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。

〔方向〕東妻でみると北で東に約1°偏り、磁北とほぼ一致する。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏・甕、縄文土器深鉢、鞴羽口（12）の破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕の破片が少数出土した。



第10図　ＳＢ５・６掘立柱建物跡平面図（１/100）、ＳＢ５掘立柱建物跡柱穴断面図（１/50）

【ＳＢ６掘立柱建物跡】（平面図：第10図、断面図：第11図、遺物：第５図、図版４－２）

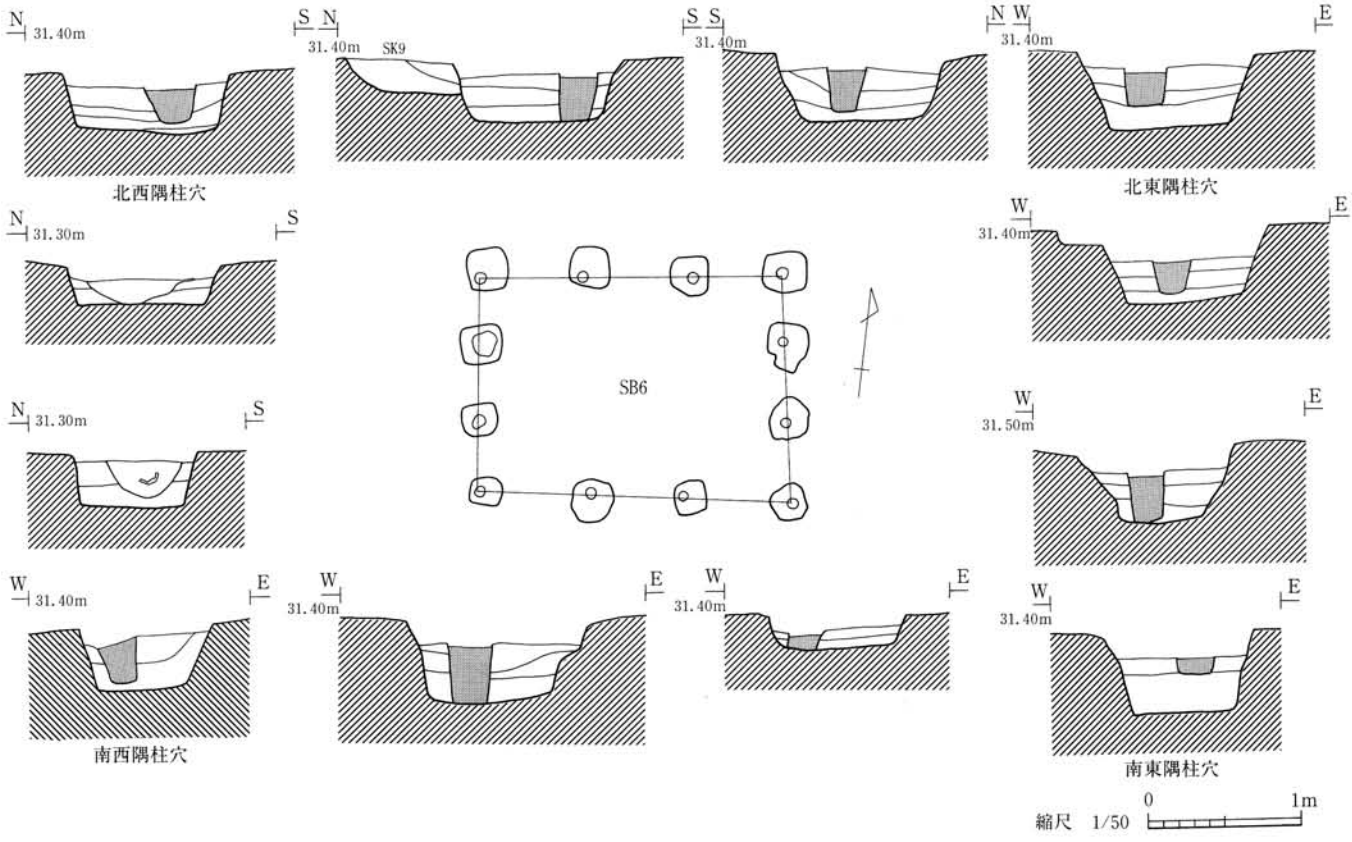
〔位置〕調査区南半部に位置し、標高31m付近の丘陵尾根上にある。

〔重複〕ＳＫ９土壙と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行３間の東西棟である。

〔柱穴〕一辺約0.8～1.2mのほぼ正方形または長方形を基調とし、深さは最も残りのよい南東隅柱穴で64cm、最も残りの悪い西妻北から１間目柱穴で26cmある。東側柱列の北から１間目柱穴では南側を段掘りしている。埋土は径１～８cmの粘板岩礫片を多く含む暗褐色土・褐色土の互層でしまりがよい。

〔柱痕跡〕柱が抜き取られている西妻の北から１・２間目柱穴を除く10箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。直径24cm前後の円形で、堆積土は径１cm以下の粘板岩礫片を少量含み、しまりの悪い黒褐色土である。北東隅柱穴、東側柱列の北から１間目柱穴、南東隅柱穴、南西隅柱穴、西妻の北から２間目柱穴、北西隅柱穴、北側柱列の東から１間目柱穴の７箇所の柱穴では、柱痕跡の底面が掘方の底面に接していない。このうち東側柱列の北から１間目柱穴、南西隅柱穴、西妻の北から２間目柱穴、北西隅柱穴、北側柱列の東から１間目柱穴の５箇所の柱穴では、柱痕跡の底面が掘方の底面より６～8cm上にあり、北東隅柱穴では16cm、南東隅柱穴では26cm上にあり、掘方底面との差が大きい。しかし、柱痕跡の底面レベルは30.8m前後とほぼ同じ標高にあり、本建物を建てる際に柱の高さを調節したことによるものと考えられる。



第11図　ＳＢ６掘立柱建物跡柱穴断面図（１/50）

〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約8.0m、柱間寸法は西から2.7m・3.0m・2.3mである。梁行総長は東妻で約6.0m、柱間寸法は北から1.7m・2.2m・2.1mである。

〔方向〕東妻でみると北で西に約9°偏る。建物の方向は丘陵尾根とは無関係である。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏（3）・高坏（2）・甕、須恵器坏・高台坏（5）・甕の破片、炭化した種子（モモ）破片が少数出土した。このうち須恵器坏・高台坏（5）は体下部～底部を回転ヘラケズリしている。柱抜取穴からは底部をヘラ切り後に体下部を回転ヘラケズリした完形の須恵器坏（4）1点の他、非ロクロ調整の土師器甕の破片が少数出土した。また、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器坏・甕の破片が少数出土した。他に鉄釘（11）が1点出土した。

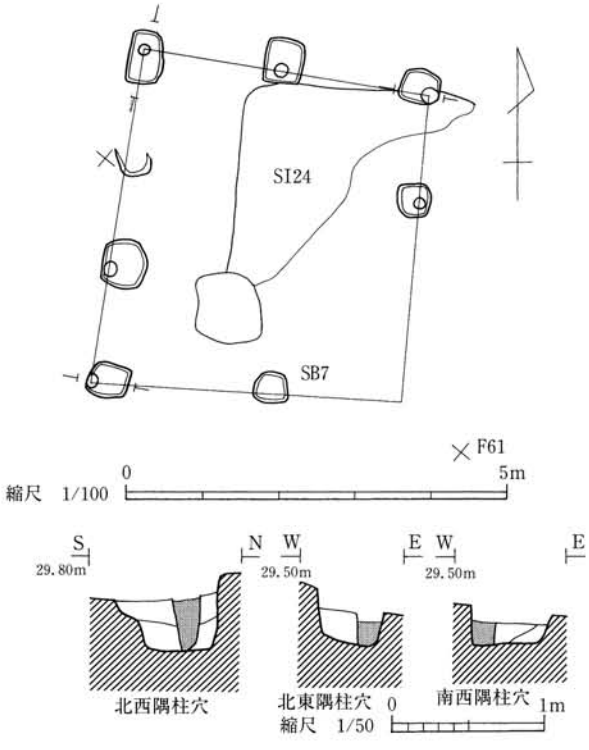
【ＳＢ７掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第12図、遺物：第５図）

〔位置〕調査区南半部南端、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。

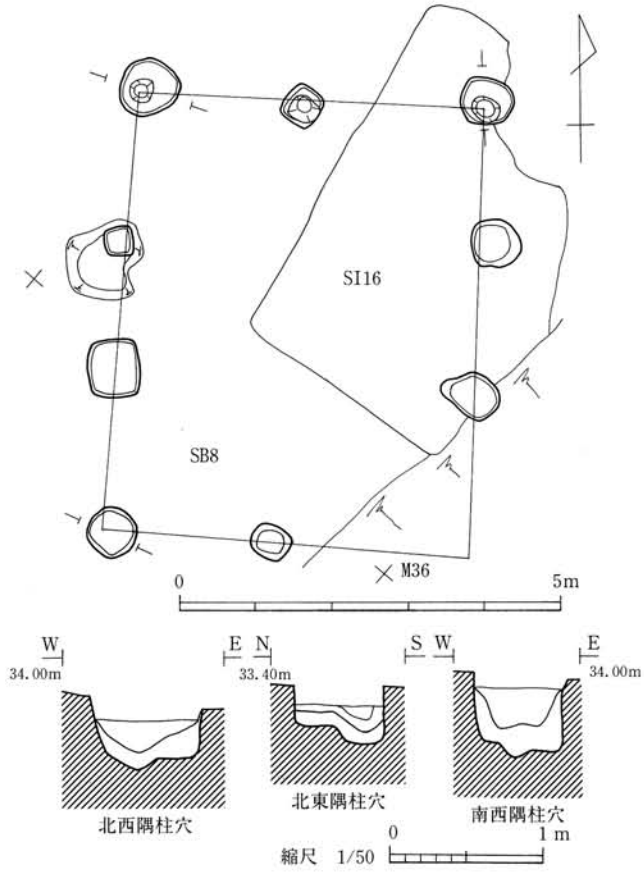
〔重複〕SI24竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の南北棟である。

〔柱穴〕一辺40～60cmのほぼ正方形または長辺70cm前後、短辺45～60cmの長方形を基調とし、最も残りのよい北西隅柱穴で深さ52cmある。東側柱列の北から２間目柱穴、南東隅柱穴は削平されて残存していない。埋土は径１～8cmの粘板岩礫片を多く含む暗褐色土・にぶい黄褐色土の互層で、しまりがよい。



第12図　ＳＢ７掘立柱建物跡平面図・断面図



第13図　ＳＢ８掘立柱建物跡平面図・断面図

〔柱痕跡〕直径約16cmの円形で、堆積土は暗褐色またはにぶい黄褐色土で、しまりが悪い。

〔平面規模〕桁行総長は西側柱列で約4.4m、柱間寸法は北から2.9m（２間分）・1.5mである。梁行総長は北妻で約3.8m、柱間寸法は西から1.8m・2.0mである。

〔方向〕東妻でみると北で東に約９°偏る。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕（９）の破片、柱痕跡から須恵器甕の破片が少数出土した。

【ＳＢ８掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第13図、図版４－３）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ16竪穴住居跡と重複する。ＳＩ16竪穴住居跡より新しい。ＳＩ13竪穴住居跡との新旧関係は不明である。また、ＳＩ13竪穴住居跡と近接し、これと同時には存在しえない。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の南北棟である。

〔柱穴〕一辺40～80cmのほぼ正方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で52cmある。南東隅柱穴は削平されて残存していない。各柱穴の多くは柱抜取穴が大きく入り、埋土がほとんど残っていない。柱抜取穴の堆積土は地山土ブロックを含む褐色土・にぶい黄褐色土で、しまりがない。

〔柱痕跡〕柱はいずれも抜き取られ、柱痕跡の大きさは不明であるが、各柱穴の底面には円形の窪みがあり、柱痕跡を反映しているとみられる。

〔平面規模〕桁行総長は西側柱列で約5.8m、柱間寸法は北から約1.9m・約1.8m・約2.2mと推定される。梁行総長は北妻で約4.4m、柱間寸法は西から約2.1m・約2.4mと推定される。

〔方向〕西側柱列でみると北で東に約５°偏ると推定される。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が少数出土した。

【ＳＢ９掘立柱建物跡】（平面図：第６・59図、断面図：第７図、遺物：第５図、図版３－２）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ２・11掘立柱建物跡と重複する。ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ２掘立柱建物跡よりも新しく、ＳＢ11掘立柱建物跡よりも古い。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の東西棟である。

〔柱穴〕一辺約50cmの正方形を基調とし、深さは最も残りのよい南東隅柱穴で46cm、最も残りの悪い南側柱列東より２間目柱穴で26cmある。埋土は径２～６cmの粘板岩礫片、明黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕すべての柱穴で柱痕跡を確認した。直径約16cmの円形で、堆積土は径１cm以下の粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを多く含む褐色土で、しまりが悪い。

〔平面規模〕桁行総長は南側柱列で約5.2m、柱間寸法は西から1.8m・1.5m・1.9mである。梁行総長は東妻で約4.3m、柱間寸法は北から2.1m・2.2mである。なお、北側柱列の桁行総長が約5.2mと南側柱列より0.1m短いため、平面形はやや歪んでいる。

〔方向〕東妻でみると北で東に約12°偏る。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏（7）・甕（8）、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。このうち須恵器坏には体下部～底部を手持ちヘラケズリしたもの、回転ヘラケズリしたものがある。柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・蓋・甕の破片が少数出土した。

【ＳＢ10掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第14図、図版５－１）

〔位置〕調査区北半部、丘陵尾根上やや北寄りの標高39m付近に位置する。

〔重複〕重複関係はない。西に隣接するＳＩ56住居とは同時には存在しえない。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の南北棟である。

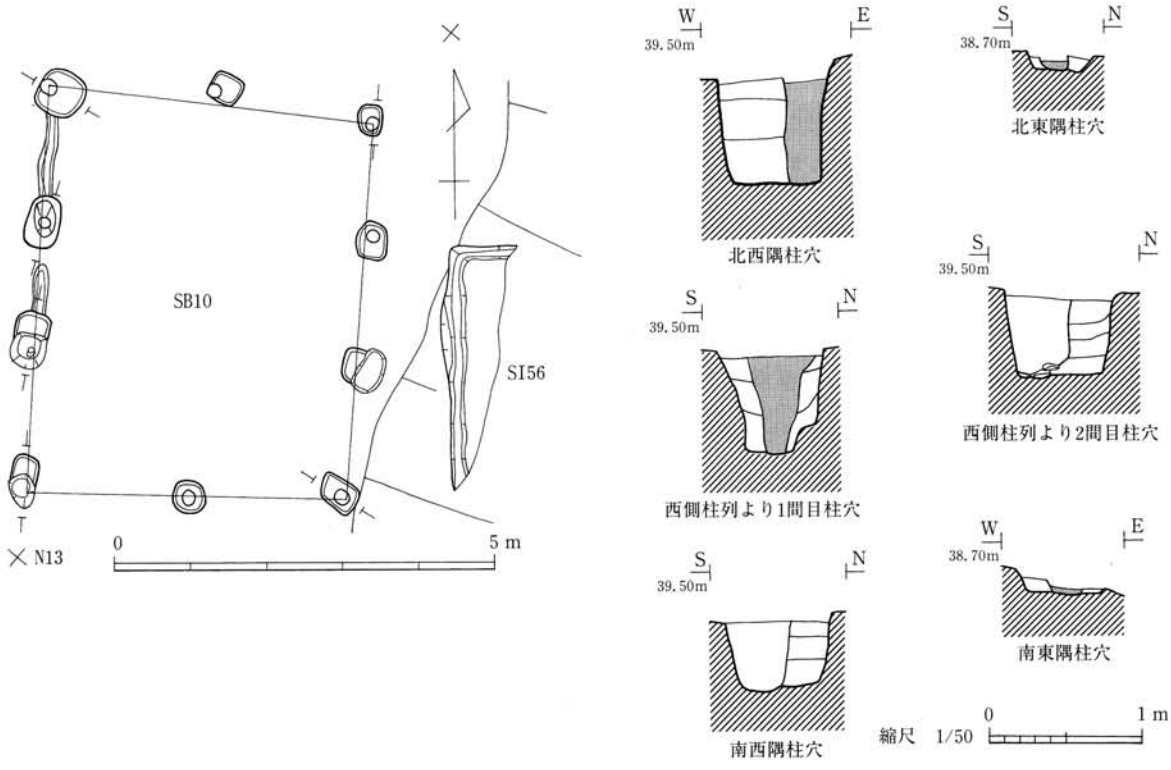
〔柱穴〕一辺40～50cmの隅丸方形または長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴、西側柱列の北から１間目柱穴で68cm、最も残りの悪い北東隅柱穴で14cmある。埋土は径１～３cmの地山土ブロックを含む灰黄褐色・明黄褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕北東隅柱穴、東側柱列の北から１間目柱穴、南東隅柱穴、南妻棟通り下柱穴、北西隅柱穴の５箇所で柱痕跡を確認した。それ以外の５箇所の柱穴では柱が抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。柱痕跡は径約17cmの円形である。柱痕跡と柱抜取穴の堆積土は、しまりの悪い灰黄褐色土である。

〔平面規模〕桁行総長は西側柱列で約5.0m、柱間寸法は北から1.5m・3.5m（２間分）である。梁行総長は北妻で約4.3m、柱間寸法は西から2.2m・2.1mである。

〔方向〕東側柱列でみると北で東に約５°偏る。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕の破片、柱抜取穴から須恵器坏の破片が少数出土した。



第14図　ＳＢ10掘立柱建物跡平面図（１/100）・断面図（１/50）

【ＳＢ11掘立柱建物跡】（平面図：第６・59図、断面図：第７図、遺物：第５図、図版３－２）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ２・９掘立柱建物跡と重複し、これらよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕桁行２間以上、梁行２間の南北棟と推定される。

〔柱穴〕北妻、東側柱列北から１間目柱穴の３箇所の柱穴を検出した。長辺約25～35cm、短辺約20～25cmの長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北西隅柱穴で45cm、最も残りの悪い東側柱列北から１間目柱穴で18cmある。埋土は径２～６cmの粘板岩礫片、明黄褐色土ブロックを多量に含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕北妻の３箇所の柱穴には柱切取穴が大きく入り、その下で柱痕跡を検出した。柱痕跡は直径約14cmの円形で、堆積土はしまりが悪い褐色土である。東側柱列北から１間目柱穴では柱が大きく抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。

〔平面規模〕桁行の柱間寸法は北から約2.4mである。梁行総長は北妻で約4.4m、柱間寸法は西から2.2m・2.2mである。

〔方向〕北妻は西で北に約４°偏るので、東側柱列は北で東に約４°偏ると推定される。

〔出土遺物〕柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕の破片が少数出土した。このうち土師器坏には丸底気味で体下部に段のあるもの（11）、平底のものがある。

【ＳＢ12掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第15図、図版５－２）

〔位置〕調査区南半部東寄り、丘陵尾根上北寄りの標高30m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ37竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の南北棟である。

〔柱穴〕すべての柱穴を検出したが、西側柱列北から１間目柱穴は本建物よりも新しいＳＩ37Ｂ竪穴住居跡北西主柱穴に大きく壊されている（第91図）。長辺約40cm、短辺約30cmの隅丸長方形を基調とし、深さは最も残りのよい北妻棟通り下柱穴で53cm、最も残りの悪い南西隅柱穴で16cmある。埋土は径２cm以下の地山ブロックを多く含む暗褐色土の互層で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕西側柱列北から１間目柱穴以外の９箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径約15cmの円形で、堆積土は炭・焼土粒・地山粒を少し含むしまりのない暗褐色土である。

〔平面規模〕桁行総長は東側柱列で約5.0m、柱間寸法は北から1.7m・1.4m・1.9mである。梁行総長は北妻で約3.7m、柱間寸法は西から1.8m・1.9mである。西側柱列の桁行総長が東側柱列より約0.2m短く、西妻の梁行総長が北妻より約0.2m短いため、平面形はやや歪んでいる。

〔方向〕東側柱列でみると北で東に約16°偏る。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕の破片が少数出土した。

【ＳＢ13掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第15図、図版５－３）

〔位置〕調査区南半部東寄り、丘陵尾根上北寄り、標高30m付近に位置する。

〔重複〕重複はない。近接するＳＩ37竪穴住居跡、ＳＢ12掘立柱建物跡とは同時に存在しえない。

〔柱間数・棟方向〕桁行２間、梁行２間の東西棟である。

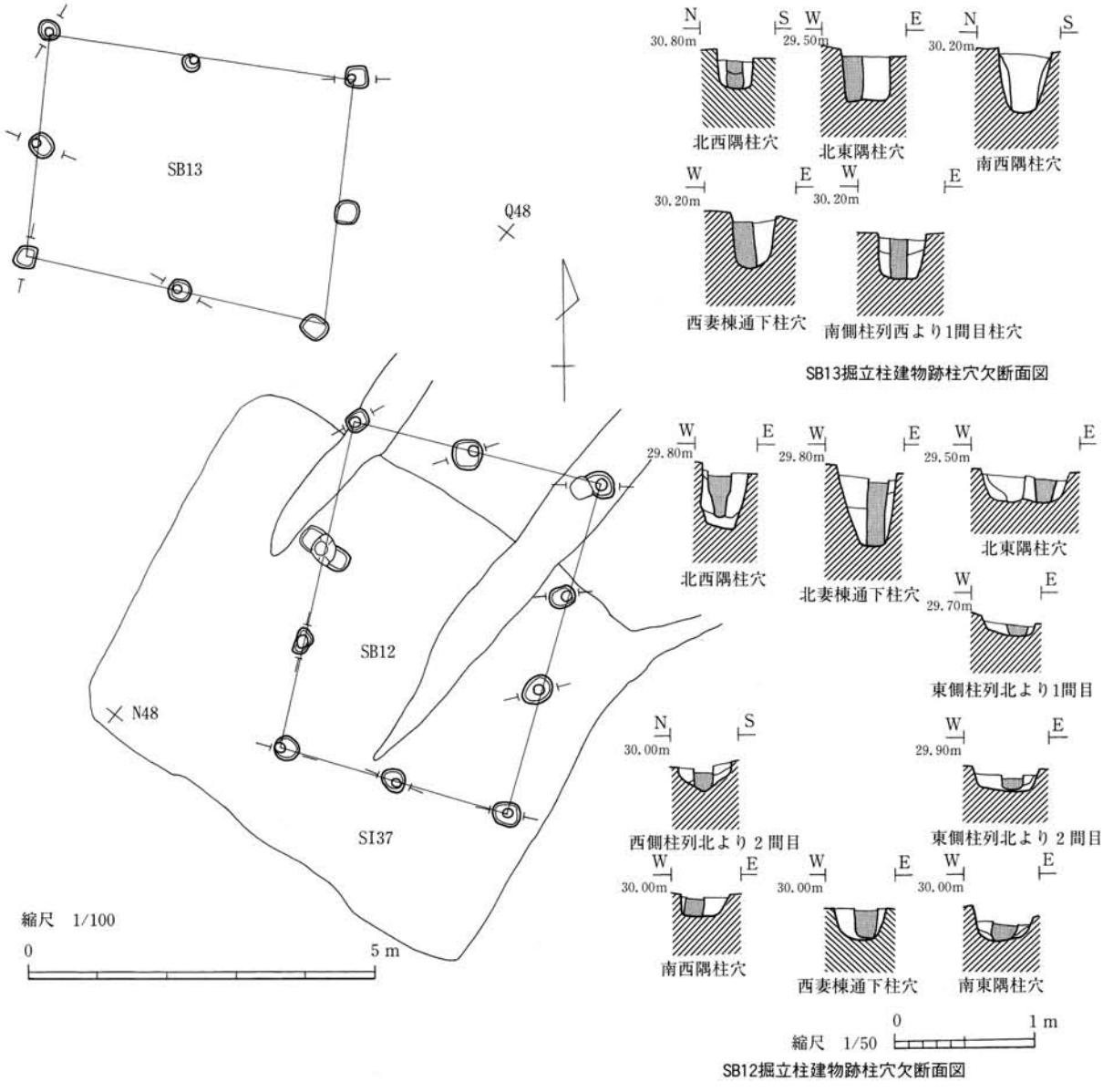
〔柱穴〕８箇所の柱穴すべてを検出した。一辺30cm前後の隅丸正方形を基調とし、深さは最も残りのよい西妻棟通り下柱穴で51cm、最も残りの悪い北側柱列中央柱穴で17cmある。埋土は褐色土・黄褐色土で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕東妻棟通り下柱穴、南東隅柱穴、南西隅柱穴を除く５箇所の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡は直径約12cmの円形で、堆積土は暗褐色土で、しまりが悪い。

〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約4.4m、柱間寸法は西から2.1m・2.3mである。梁行総長は西妻で約3.3m、柱間寸法は北から約1.6m・約1.7mと推定される。東妻の梁行総長が西より0.3m長いと推定されるため、平面形はやや歪む。

〔方向〕西側柱列でみると北で東に約６°偏る。

〔出土遺物〕掘方から縄文時代前期の縄文土器深鉢の破片が少数出土した。



第15図　ＳＢ12・13掘立柱建物跡平面図（１/100）・断面図（１/50）

【ＳＢ14掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第16図）

〔位置〕調査区北半部西寄り、丘陵尾根上やや北寄りの標高40m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ6竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・棟方向〕東西２間以上、南北２間以上の建物跡で、北・西側の柱列にあたる柱穴３箇所を検出した。調査区外に延び、東半部が大きく削平されているため、棟方向は不明である。

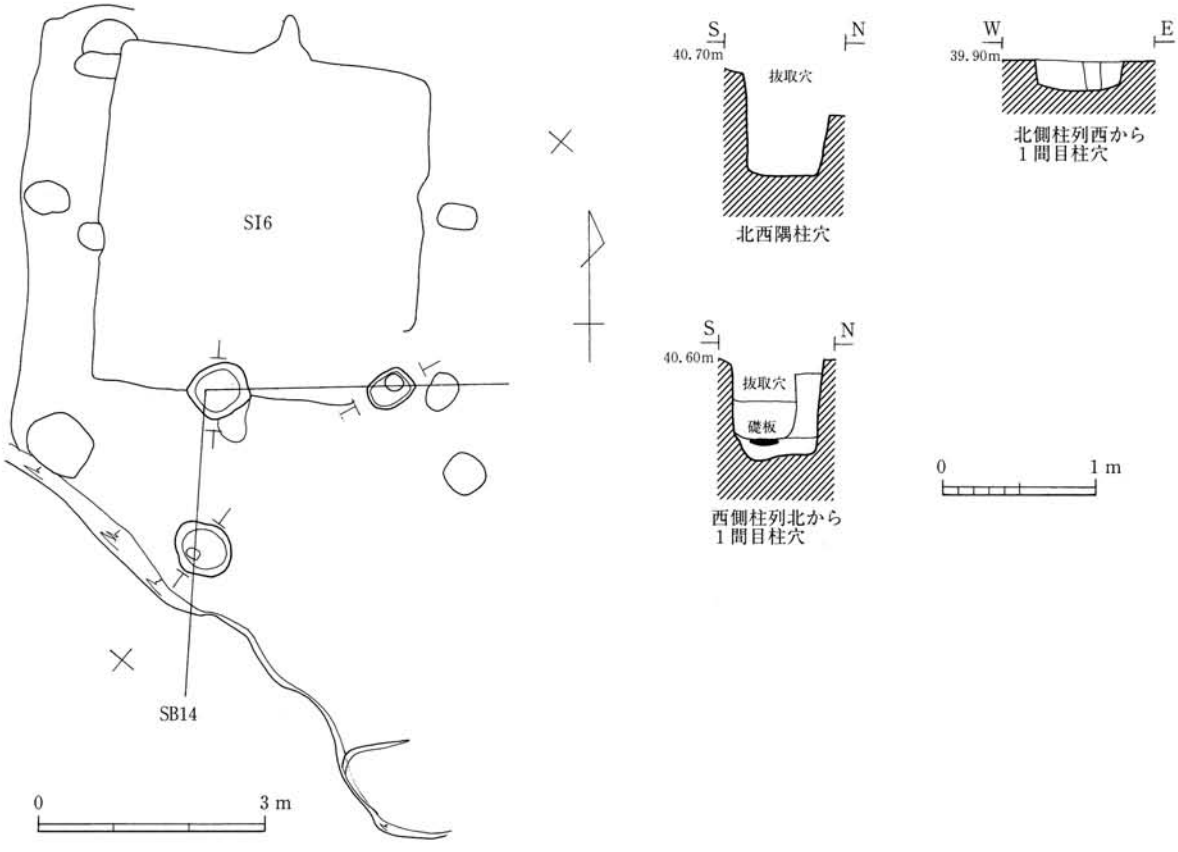
〔柱穴〕長辺60～80cm、短辺45～70cmの長方形を基調とし、深さは最も残りのよい西側柱列北から１間目柱穴で70cm、最も残りの悪い北側柱列西から１間目柱穴で20cmある。埋土は黄褐色土で、しまりがよい。

〔柱痕跡〕北側柱列西から１間目柱穴で直径13cmの円形の柱痕跡を確認した。堆積土はにぶい黄褐色土でしまりが悪く、焼土粒を少量含む。西側柱列は柱が抜き取られている。また西側柱列北から１間目柱穴では、柱抜取穴底面で粘板岩板状礫片（長さ20cm、幅14cm、厚さ５cm）を用いた礎盤を検出した。

〔平面規模〕柱間寸法は北側柱列で約2.5m、西側柱列で約2.2mと推定される。

〔方向〕西側柱列でみると北で東に約４°偏ると推定される。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片が少数出土した。



第16図　ＳＢ14掘立柱建物跡平面図（１/100）・断面図（１/50）

２．竪穴住居跡

57軒の竪穴住居跡を検出した。住居番号が一部順不同になるが、丘陵斜面の上方から下方に向かっ

て以下記載する。なお、索引のために以下の表を参照されたい。

住居	本文	遺構平面面	遺構断面図	遺物図面	住居	本文	遺構平面面	遺構断面図	遺物図面
SI1	p.22	第17図	第17・18図	第19図	SI31	p.118	第89図	第89図	第90図
SI2	p.27	第17図	第18図	第19図	SI32	p.129	第93図	第93図	第94図
SI3	p.28	第20図	第20図	なし	SI33	p.98	第68～70図	第69・70図	第71～73図
SI4	p.29	第20図	第20図	なし	SI34	p.107	第76・77図	第69・70図	第79～88図
SI5	p.29	第20図	第20図	第19図	SI35	p.135	第99図	第99図	第99図
SI6	p.30	第21・22図	第22図	第23図	SI36	p.82	第58図	第58図	第58図
SI7	p.46	第25図	第26図	第32図	SI37	p.124	第91図	第91図	第92図
SI8	p.35	第25・27図	第26・27図	第28～31図	SI38	p.131	第95図	第95図	第96・97図
SI9	p.48	第34図	第35図	第33図	SI39	p.135	第98図	第98図	第98図
SI11	p.66	第46図	第46図	第46図	SI40	p.49	第34・36・37・39・41図	第35～37・39図	第36・38・40・42・43図
SI12	p.69	第48図	第48図	第48図	SI41	p.48	第34図	第33図	第33図
SI13	p.72	第51図	第52図	第53図	SI43	p.47	第34図	第35図	第33図
SI14	p.69	第48図	第48図	なし	SI44	p.23	第17図	第18図	なし
SI15	p.71	第49図	第49図	第49図	SI45	p.117	第10図	第10図	なし
SI16	p.76	第51図	第52図	第53図	SI46	p.47	第25図	第26図	なし
SI17	p.63	第44図	第44図	第45図	SI47	p.78	第54図	第54図	なし
SI18	p.72	第50図	第50図	第50図	SI48	p.94	第66図	第66図	第67図
SI19	p.65	第44図	第44図	第45図	SI49	p.96	第66図	第66図	第67図
SI20	p.79	第55図	第55図	第56・57図	SI50	p.127	第93図	第93図	なし
SI21	p.85	第59図	第60図	第61～65図	SI51	p.78	第51図	第52図	第53図
SI22	p.137	第100図	第101図	第102図	SI52	p.76	第51図	第52図	なし
SI23	p.140	第100図	第101図	第103図	SI53	p.105	第74図	第74図	第75図
SI24	p.143	第104図	第104図	第105図	SI54	p.68	第46図	第46図	第46図
SI26	p.146	第106図	第106図	なし	SI55	p.68	第47図	第47図	なし
SI27	p.146	第107図	第107図	第107図	SI56	p.34	第24図	第24図	なし

Ⅰ区検出の竪穴住居跡の一覧

【ＳＩ1竪穴住居跡】（平面図：第17図、断面図：第17・18図、遺物：第19図、図版６－２・３）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ２・44竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。ＳＩ44竪穴住居跡の位置を西側に約60cm移し、カマドの位置もＳＩ44竪穴住居跡とは正反対の南に移している。床面のレベルも一致していることから、ＳＩ44竪穴住居跡の建て替えの可能性が高い。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で3.7m、東西が南辺で3.4mである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約８°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺で約40cmで、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。東半部が大きく削平され、残りが悪い。

〔床面〕ＳＩ44竪穴住居跡と同じく、大部分は地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。ただし、東辺・南辺に沿って、ＳＩ44竪穴住居跡の掘方埋土が一部にあり、この上面も床面としている。

〔カマド〕南辺の中央から約１m西寄りに付設されている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、左側壁、右側壁、燃焼部、煙道、煙出しピットが残されていた。左側壁は長さ75cm、高さは奥で35cm、焚き口で12cm、右側壁は長さ70cm、高さは奥で30cm、焚き口で12cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.15mある。焚き口は下部幅約50cm、高さ12cm以上である。

燃焼部は奥行き60cm、幅45cm、奥壁高15cmで、深さ6cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、カマド奥壁より外に向かって上向きに約4°傾斜しながら1.2m延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅19cm、最大幅27cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ12cm残存する。煙出しピットは長径35cm、短径25cmの楕円形状で、深さ18cm残存し、煙道底面よりも3cm程深く窪めている。

カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られている。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に3点、右側壁に2点残存していた。カマド天井部崩壊土にも粘板岩板状礫片が10点含まれていたので、カマド天井部にも粘板岩板状礫片が構築材として用いられていたと考えられる。これらの粘板岩板状礫片のうち、最も大きなものは右側壁奥に残るもので、長さ43cm、幅18cm、厚さ7cmあり、平坦面を内側に向けて立てられている。左側壁にもこれとほぼ同じ大きさのものが2点用いられており、平坦面を内側に向け、内側に傾けて立てられている。この他、天井崩壊土に含まれる粘板岩板状礫片には長さ20cm前後、幅15cm前後、厚さ5cm程のものが多い。

カマド前面床下には、長さ61cm、幅43cm、深さ14cmの浅い床下土壙が掘られ、中に粘板岩板状礫片4点（最も大きなものは長さ36cm、幅32cm、厚さ5cm）を入れて、人為的に埋め戻して床面としている。また、カマド下の掘方は長さ約1.5m、幅約0.7m、深さ15cmの半円形の土壙状となっている。これら床下土壙やカマド下の掘方は、熱の遮断や水よけを考慮したものとみられる。

〔周溝〕各辺に幅20～30cm、深さ10～15cmの周溝が巡り、カマドの下は暗渠となる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔堆積土〕にぶい黄褐色土で、住居廃絶後に自然堆積している。

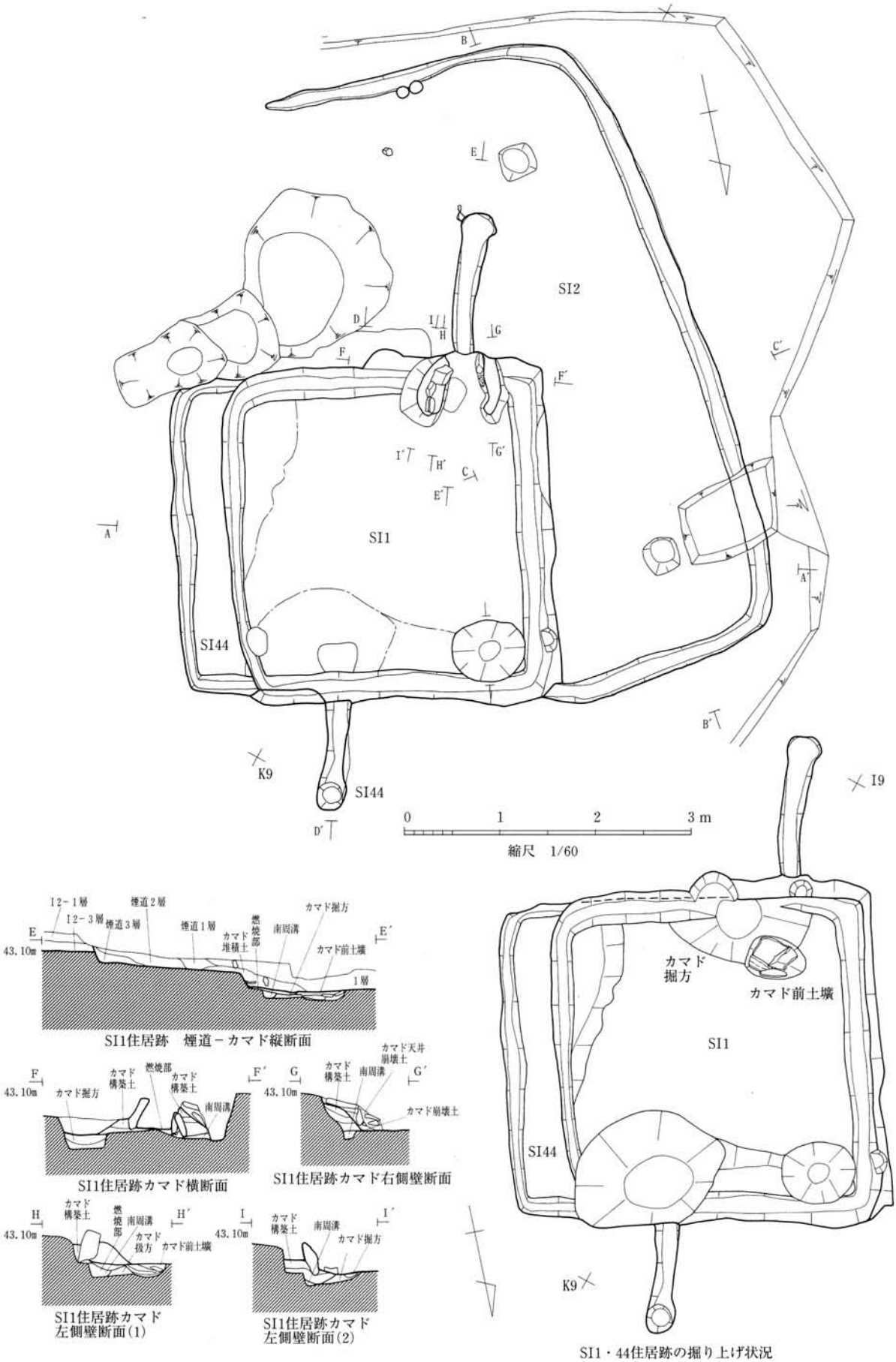
〔出土遺物〕カマド右脇床面近くから土師器甕（4）の破片、カマド内崩壊土から土師器甕、須恵器甕の破片、煙道から土師器坏・甕の破片、堆積土から土師器坏（1）・高台坏・甕（3）、須恵器坏・甕・短頸壺の破片が少数と円板状土製品（2）が1点出土した。土師器の多くはロクロ調整だが、甕には非ロクロ調整のものが少数ある。土師器坏には底部回転糸切り無調整のものが4点、底部回転糸切り後に体下部を手持ちヘラケズリしたもの（1）が1点ある。また、堆積土から土製支脚（9）、砥石（11・12）が出土している。

【ＳＩ44竪穴住居跡】（平面図：第17図、断面図：第18図・図版6－2）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ１・２竪穴住居跡と重複する。ＳＩ１竪穴住居跡よりも古い。ＳＩ２竪穴住居跡との新旧関係はないが、前述のようにＳＩ44竪穴住居跡からＳＩ1竪穴住居跡に建て替えられている可能性が高いこと、ＳＩ１竪穴住居跡がＳＩ２竪穴住居跡よりも新しいことから、ＳＩ44竪穴住居跡はＳＩ２竪穴住居跡よりも新しいと考えられる。

〔平面形・規模〕平面形は長方形、規模は南北が東辺で3.2m、東西はカマド左側の土壙の存在から



第17図　ＳＩ１・２・４竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

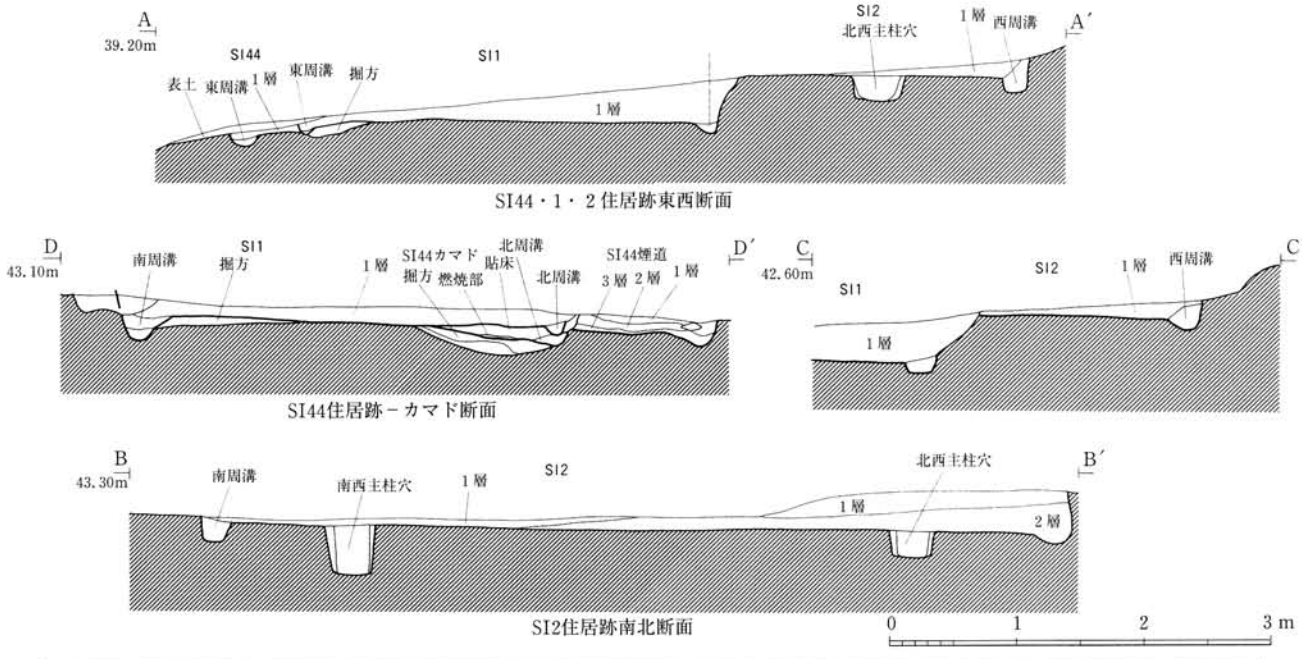
みて北辺で3.6m以上と推定される。

〔方向〕東辺でみると北で西に約８°偏る。

〔壁〕ＳＩ１竪穴住居跡に大きく壊され、東辺も上部を大きく削平されているため、検出面から床面までの壁の高さは5cm以下と残りが悪い。

〔床面〕新しいＳＩ１竪穴住居跡に大きく壊されているが、床面レベルはＳＩ１竪穴住居跡と同じであり、大部分は地山面（黄褐色粘質土）を床面としていると考えられる。ただし、北辺に沿って掘方があり、掘方埋土上面も床面としている。

〔カマド〕カマドは北辺の中央やや東寄りに付設されている。カマド側壁・天井部はＳＩ１竪穴住居跡構築時にほぼ完全に取り払われていたが、燃焼部の一部と煙道、煙出しピット、カマド下の掘方を確認できた。燃焼部は奥行き30cm、幅42cm残存する。床面より約６cm低い位置にあり、床より



住居跡	層位	特徴
SI1	掘方	褐色（7.5YR4/4）土に黄褐色（10YR5/6）土ブロック、径1～3cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド掘方	黄褐色（10YR5/6）土。径1～5cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド構築土	黄褐色（10YR7/8）～褐色（7.5YR4/4）粘質土。径1～2cmの粘板岩礫片、黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
	カマド燃焼部	暗赤褐色（2.5R3/6）土。焼土を多量に含む。
	カマド前土壙	下部は暗赤褐色（2.5YR3/6）土で、焼土・炭を多く含む。その上に粘板岩を敷き、褐色（7.5YR4/4）土で埋める。最上部には厚さ５～8mmの薄炭層。
	カマド崩壊土	下部は焼土混じりの暗赤褐色（2.5YR3/4）土、上部は褐色（7.5YR4/4）で黄色土ブロックを含み、しまりがあまりない。
	煙道１層	褐色（10YR4/4）土。径5～10mmの焼土を多く、炭を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	煙道２層	褐色（10YR4/4）土。径2～10mmの粘板岩礫片、2～5mmの焼土・炭を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	煙道３層	暗褐色（10YR3/3）土。径2～5mmの炭を多く、2～5mmの粘板岩礫片を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	カマド下周溝	褐色（10YR4/4）土。径1～2cmの粘板岩礫片を多く含む。カマド下の南周溝は人為堆積土。
	周溝	褐色（10YR4/4）土。径5～15mmの粘板岩礫片を含む。しまりややあり。粘性なし。自然堆積土。
	埋土１層	にぶい黄褐色（10YR4/3）土。径5～15mmの粘板岩礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
SI2	主柱穴掘方	黄褐色（10YR4/6）土。径2～4cmの粘板岩礫片を多く含む。人為堆積土。
	主柱穴抜取穴	褐色（7.5YR4/4）土。径1～2cmの粘板岩礫片をやや多く含む。しまりあまりない。
	周溝	黄褐色（10YR5/8）土。拳大前後の粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	埋土１層	にぶい黄褐色（10YR5/4）土。径2～4cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	埋土２層	黄褐色（10YR5/8）土。拳大前後の粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
SI44	掘方	黄褐色（10YR5/6）土。径1～3cmの粘板岩礫片、褐色土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド下周溝	黄褐色（10YR5/6）土。人為堆積土。
	周溝	黄褐色（10YR5/6）土。
	カマド燃焼部	暗赤褐色（2.5R3/6）土。焼土を多量に含む。
	煙道１層	にぶい黄褐色（10YR4/3）土。径5～15mmの粘板岩礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	煙道２層	にぶい黄橙色（10YR6/4）土。径5～15mmの粘板岩礫片を含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
	煙道３層	暗褐色（7.5YR3/4）土。径5mm以下の炭・焼土・粘板岩礫片を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	埋土１層	褐色（7.5YR4/4）土に黄褐色（10YR5/6）土ブロック、径1～3cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。

第18図　ＳＩ１・２・44竪穴住居跡断面図（1/60）

番号	種　類	分類	遺構	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ⅡA	SI1	埋土1層	<1/2	底径6.0cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→体下部手持ちヘラケズリ。内面：粗い放射状ヘラミガキ→黒色処理。		002
2	円板状土製品		SI1	埋土1層		土師器高台坏の口縁～体下部を打ち欠いて円板状土製品に転用。高台径8.0cm。外面：底部回転糸切り→高台接合→再びロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	22-1	002
3	土師器甕	Ⅱ	SI1	埋土1層	破片	口径13.2cm。ロクロ調整。口縁部受け口状。		002
4	土師器甕	Ⅱ	SI1	埋土1層	破片	口径18.2cm。ロクロ調整。口縁部受け口状。カマド右脇、1層下部より出土。		002
5	土師器坏	ⅠB1	SI2	床面	9/10	口径12.4cm。器高3.4cm。非ロクロ調整。丸底気味。外面：体下部に沈線状の段。口縁～体下部ヘラミガキ。底部摩滅。内面ヘラミガキ→黒色処理。	22-2	002
6	土師器高坏		SI2	床面	ほぼ完形	口径14.4cm。器高6.1cm。脚部径7.2cm。脚部高2.4cm。坏部は丸底気味で、体下部に段がある。脚部は裾が開き、縦長凸レンズ状透かしが3単位ある。非ロクロ調整。外面：坏体部ハケメ→口縁ヘラミガキ。坏体下部に沈線状の段。坏体下部～脚部手持ちヘラケズリ→脚部裾ヨコナデ？。内面：坏部ヘラミガキ→黒色処理、脚部手持ちヘラケズリ。	22-3	002
7	土師器椀	ⅠA	SI2	床面	1/4	口径14.0cm。底径4.0cm。器高7.1cm。丸底気味。外面：体下部手持ちヘラケズリ→口縁～体下部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		002
8	須恵器蓋	A2	SI5	堆積土1層	<1/2	平頂蓋。つまみなし。頂部平坦。頂部径8.2cm。頂部～体部回転ヘラケズリ。		002
9	須恵器高台坏	AorB2	SI5	堆積土1層	1/4	高台径12.6cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。		002
10	カマド支脚？		SI1	埋土1層	破片	土師質。残存長4.5cm。径4.7cm。外面：オサエ、ナデ。		028
11	砥石		SI1	埋土1層	完形	粘板岩製。4面研磨。長さ16.8cm。幅6.6cm。厚さ2.8cm。	39-9	033
12	砥石		SI1	埋土1層	完形	粘板岩製。1面研磨。長さ20.3cm。幅6.8cm。厚さ2.8cm。	39-15	033

第19図　ＳＩ１・２・５竪穴住居跡出土遺物

やや窪められていたものとみられる。燃焼部の残存状況からみて、ＳＩ１竪穴住居跡と同程度のカマドと推定される。煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、カマド奥壁より竪穴住居外に向かって水平に85cm延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅25cm、最大幅26cmで、トンネル式の煙道天井部はほとんど削平され、深さ15cm残存する。煙出しピットは直径28cmの円形で、深さ20cm残存し、煙道底面よりも５cm深く窪めている。カマド下の掘方はわずかに残る燃焼部の下で検出された。長さ1.4m、幅1.1m、深さ13cmの浅い土壙状となっており、人為的に埋め戻された後にカマドが構築されている。

〔周溝〕東辺・北辺・南辺で幅15～25cm、深さ５～８cmの周溝を検出した。ＳＩ１竪穴住居跡と同様に、各辺に巡ると考えられる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

〔土壙〕住居の北西隅付近に１基ある。長径77cm、短径64cmの楕円形で、深さ34cmある。人為的に埋め戻されている。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴などの施設は認められない。

〔堆積土〕ＳＩ１竪穴住居跡構築時に、カマドを取り払ってから人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕土壙からロクロ調整の土師器坏、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、ロクロ調整の土師器坏の破片が少数出土した。このうち、堆積土出土のロクロ調整の土師器坏には、回転糸切り無調整の底部破片が１点ある。

【ＳＩ２竪穴住居跡】（平面図：第17図、断面図：第18図、遺物：第19図、図版６－２・４）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ１・44竪穴住居跡と重複する。ＳＩ１竪穴住居跡よりも古い。ＳＩ44竪穴住居跡との新旧関係はないが、ＳＩ44竪穴住居跡からＳＩ１竪穴住居跡に建て替えられている可能性が高いこと、ＳＩ２竪穴住居跡よりも古いことから、ＳＩ44竪穴住居跡よりも古いと考えられる。

〔平面形・規模〕平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で6.7m、東西は南辺で3.3m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約10°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは残りのよい南西隅付近で40cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。そこから離れるにつれて高さを減じ、北辺・南辺で周溝が途切れる箇所ではほとんど高さがない。

〔床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。

〔主柱穴〕西辺から1.0m離れて北西主柱穴と南西主柱穴を検出した。掘方は一辺約40cmのほぼ正方形である。深さは北西主柱穴で20cm、南西主柱穴で60cmあり、南西主柱穴が深く掘られている。いずれも住居廃絶時に柱が抜き取られている。対角線上の位置に主柱穴が４箇所あったものと推定される。

〔カマド〕東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明であるが、西辺には付設されていないことは確実である。北辺で周溝が内側にわずか屈曲しており、ほぼ正方形と仮定するとこの箇所が北辺のほぼ中央にあたることから、北辺に付設されていた可能性がある。

〔周溝〕西辺・北辺・南辺で幅20～25cm、深さ７～10cmの周溝を検出した。北辺・南辺の一部と東

辺は削平されているが、各辺に巡ると考えられる。住居構築時に人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕住居廃絶時に人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕床面から土師器有段坏（5）・高坏（6）・埦（7）の他、土師器坏破片、堆積土から土師器坏・甕の破片が少数出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。

【ＳＩ３竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図）

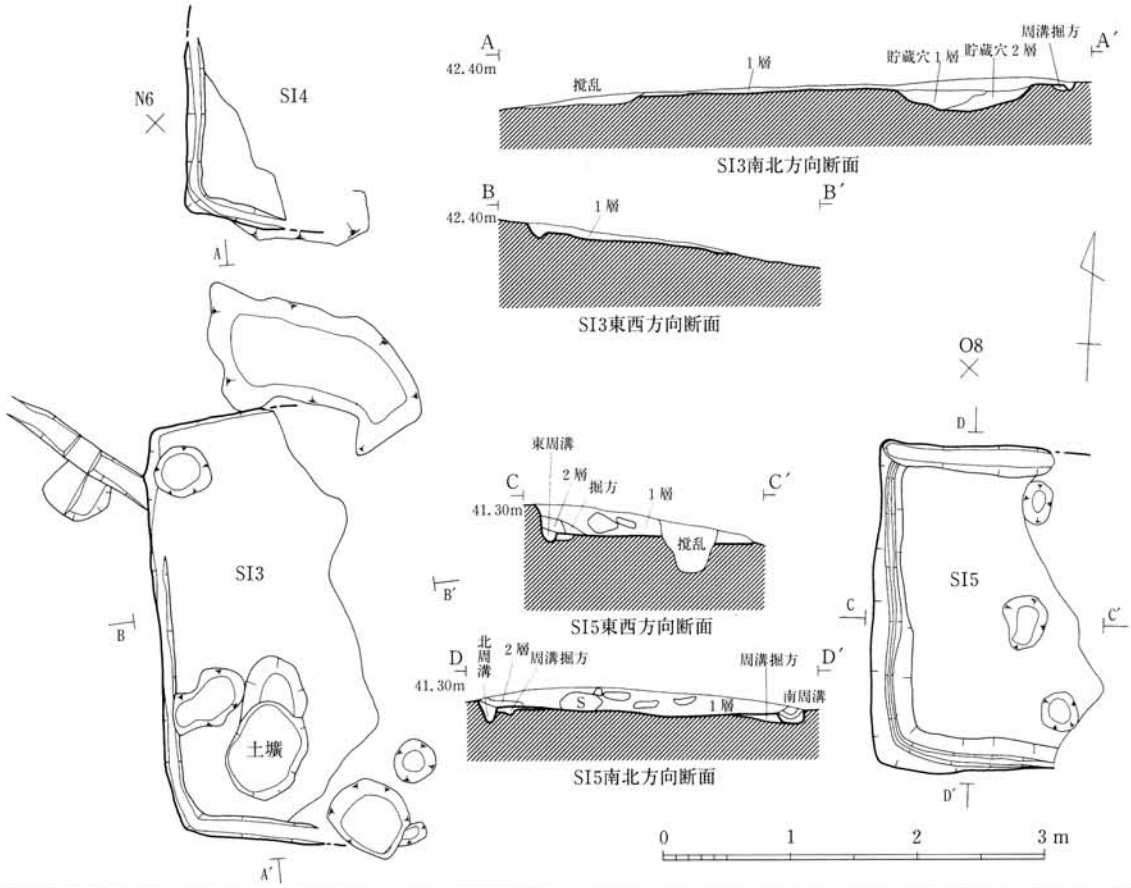
〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕新しい溝や土壙状の攪乱に一部壊されるが、主要遺構との重複はない。北に隣接するＳＩ３竪穴住居跡とは1.4m離れており、同時には存在しない可能性もある。

〔平面形・規模〕平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で3.2m、東西は南辺で1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約９°偏る。

〔壁〕東半部が床面下まで大きく削平され、西半部も上部を床面近くまで大きく削平されるため、検出面から床面までの壁の高さは５cm以下と残りが悪い。



住居跡	層　位	特　　徴
SI3	土壙１層	にぶい黄褐色（10YR5/4）土。地山土ブロック、径3～20mmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	土壙２層	暗褐色（10YR3/4）土。径5～20mmの焼土、炭、地山土ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	周溝掘方	褐色（10YR4/4）土。地山粒を多く含む。人為堆積土。
	堆積土１層	暗褐色（10YR3/4）土。径3～20mmの粘板岩礫片、5mm以下の焼土・炭を含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
SI4	埋土	褐色（10YR4/4）土。地山粒・炭を多く含む。人為堆積土。
SI5	周溝掘方	にぶい黄褐色（10YR5/4）土。地山土ブロック、径1～3cmの粘板岩礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	周溝	明黄褐色（10YR6/8）土。炭、地山土ブロックを含む。自然堆積土。
	堆積土１層	黄褐色（10YR5/6）土。径1cm程の粘板岩礫片を含む。自然堆積土。
	堆積土２層	褐色（10YR4/4）土。地山粒・炭を少量含む。自然堆積土。

第20図　ＳＩ３・４・５竪穴住居跡平面図・断面図　（１／60）

〔床面〕地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔カマド〕東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。西辺に付設されていないことは確実である。

〔周溝〕西辺・南辺で幅10～15cm、深さ4～13cmの周溝を検出した。西辺の一部と北辺は削平され残っていない。南辺で周溝掘方を検出し、住居構築時に人為的に埋め戻されている。壁材の痕跡は確認できなかったが、住居廃絶時に床と一連に人為的に埋め戻されている。

〔土壙〕貯蔵穴ないし床下土壙とみられる土壙を南西部で１基検出した。平面形は達磨形で、長径1.15m、短径0.6m、深さ15cmあり、人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕住居廃絶後に自然堆積している。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕の体部小破片、攪乱から非ロクロ調整の甕体部小破片が少数出土した。

【ＳＩ４竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高42m付近に位置する。

〔重複〕土壙状の攪乱に一部壊されるが、主要遺構との重複はない。南に隣接するＳＩ３竪穴住居跡とは1.4m離れており、同時には存在しない可能性もある。

〔平面形・規模〕南東部が遺存するのみで、他は床面下まで大きく削平されている。平面形は長方形と推定される。規模は南北が西辺で1.4m以上、東西は南辺で0.8m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約３°偏る。

〔壁〕大きく削平されているため、検出面から床面までの壁の高さは全体的に残りが悪い。最も残りのよい南西隅では22cmある。

〔床面〕地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔カマド〕全体的に大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。

〔周溝〕西辺・南辺で幅15cm、深さ５cm以下の周溝を検出した。住居廃絶時に床と一連に人為的に埋め戻されている。

〔堆積土〕人為的に埋め戻されている。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【ＳＩ５竪穴住居跡】（平面図・断面図：第20図、遺物：第19図）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上北寄りの標高41m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構とは重複しない。

〔平面形・規模〕東半部が床面下まで大きく削平されているが、平面形は長方形と推定される。規模は南北が西辺で2.6m以上、東西は南辺で1.4m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約２°偏る。

〔壁〕最も残りのよい政変中央部で、検出面から床面までの壁の高さは27cmある。東半部が床面下まで大きく削平されているため、その近くの北辺・南辺の壁は残りが悪い。

〔床面〕地山面（粘板岩礫層）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕東半部が大きく削平されているため、カマドの位置は不明である。西辺に付設されていないことは確実である。

〔周溝〕西辺・北辺・南辺で幅15～20cm、深さ５～10cmの周溝を検出した。周溝の周囲には周溝掘方がある。周溝内堆積土はこれより新しく、住居廃絶時もしくはそれ以降に自然堆積したものである。壁材の痕跡を検出していないため、住居機能時に周溝がオープンであったか、壁材があったのを抜き取ったか不明である。

〔堆積土〕住居廃絶以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器高台坏（８）・平頂蓋（７）・甕の破片が少数出土した。このうち土師器坏には体下部に段のある口縁～体部破片が１点ある。

【ＳＩ６竪穴住居跡】（平面図：第21・22図、断面図：第22図、遺物：第23図、図版７）

〔位置〕調査区北西隅、丘陵尾根上の標高40.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で4.6m、東西が南辺で4.2mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約６°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺と北辺西半で55～60cmあり、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。南東部は上部を削平され、壁の高さは5cm以下と残りが悪い。

〔床面〕西辺より1.2～1.5m幅は地山面（黄褐色粘質土）を、それより東側は掘方埋土を床面としている。床面は平坦である。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕北辺の中央からに付設されている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、左側壁、右側壁、燃焼部、煙道が残されていた。左側壁は長さ55cm、高さは奥で36cm、焚き口で23cm、右側壁は長さ56cm、高さは奥で35cm、焚き口で27cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.2mある。また両側壁は北辺の縁より20cm外側に張り出している。左側壁－右側壁横断面をみるとわかるように、左側壁は天井部が一部残存し、燃焼部と焚き口の規模（幅・高さ）が推定できた。焚き口は下部幅49cm、高さ11cmである。燃焼部は奥行き60cm、幅49cm、奥壁高18cmで、深さ5cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱•赤変していた。また、左側壁の内側は厚さ10cm、右側壁の内側は厚さ15cm、天井部は厚さ７cmの部分が被熱し、赤色に硬化していた。

煙道は丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、カマド奥壁より外に向かって40cmと短く延び、煙道底面の傾斜は上向き約24°と比較的急である。煙道は入り口幅30cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ11cm残存する。煙道の先端には煙出しピットは付設されていない。

カマドの両側壁は黄褐色～褐色粘質土を用いて作られ、左側壁は長さ35cm、幅12cm、厚さ5cmの粘板岩板状礫片を芯材としている。

また、カマド両側壁・燃焼部の下には、北辺の周溝が幅20cm、深さ５～９cmの暗渠となって横

断している。そして、その埋土の上に長さ13～19cm、幅10～16cm、厚さ5cm程の粘板岩板状礫片3点を縦長に置いてからその上に長さ10～16cm、幅10～14cm、厚さ5cm程の粘板岩板状礫片4点を置き（図版7－4）、さらにその上を黄褐色粘質土で整地して燃焼部としている。

〔周溝〕残りのよい西辺、南辺、北辺西半でみると、周溝の掘方は幅約20cm、深さ約12cmあり、壁面下部より奥に6cm程抉り込むように掘られている。そして掘方埋土が残る部分では、掘方埋土を掘り込んで作られている。堆積土は2～3層に分かれ、構築時に人為的に埋め戻されており、住居の機能時には暗渠として機能していたとみられる。また、カマド両側壁・燃焼部の下には、北辺の周溝が幅20cm、深さ5～9cmの暗渠となって横断している。

〔外延溝〕北辺・東辺の周溝が合流する北東隅から、幅15～30cm、深さ15～20cmの外延溝が丘陵斜面下方に向けて2.5m延びる。外延溝の入り口部分の底面は、北東隅の周溝底面よりも約10cmレベルが低い。北東隅から長さ約20cmはトンネル式で、天井部が残っていた。それより先については上部が削平されており、どこまでトンネル式であったか不明である。また、天井部が残っていた箇所に接して長さ約30cm、幅約10cm、厚さ約8cmの粘板岩板状礫片2点が暗渠の構築材として据えられていた。外延溝の底面は住居外に向かって下方に約5°傾き、堆積土の下部には砂が薄く自然堆積していた。排水施設として機能していたことがわかる。

〔西側の外周溝と段〕本住居の西側には、幅約6m、奥行き1.0mの平坦面がある。この段は西辺の床面より55～60cm高い位置にあり、西際に幅20～55cm、深さ5cm程の浅い外周溝が巡る。外周溝の北端と南端は、本住居の北辺・南辺と平行するように曲がり、その先は削平されている。この段と外周溝が本住居と一連に人為的に埋め戻されていることから、本住居の機能時にはこの段と外周溝の底面が当時の地表面であり、西辺の壁の高さが60cmであったと推定できる。

なお、この段の西側のさらに約30cm高い位置に奥行き0.9mの平坦面がある。この平坦面には住居内の最上部に自然堆積した1層が一連に堆積している。本住居に伴う段の可能性もあるが断定できない。

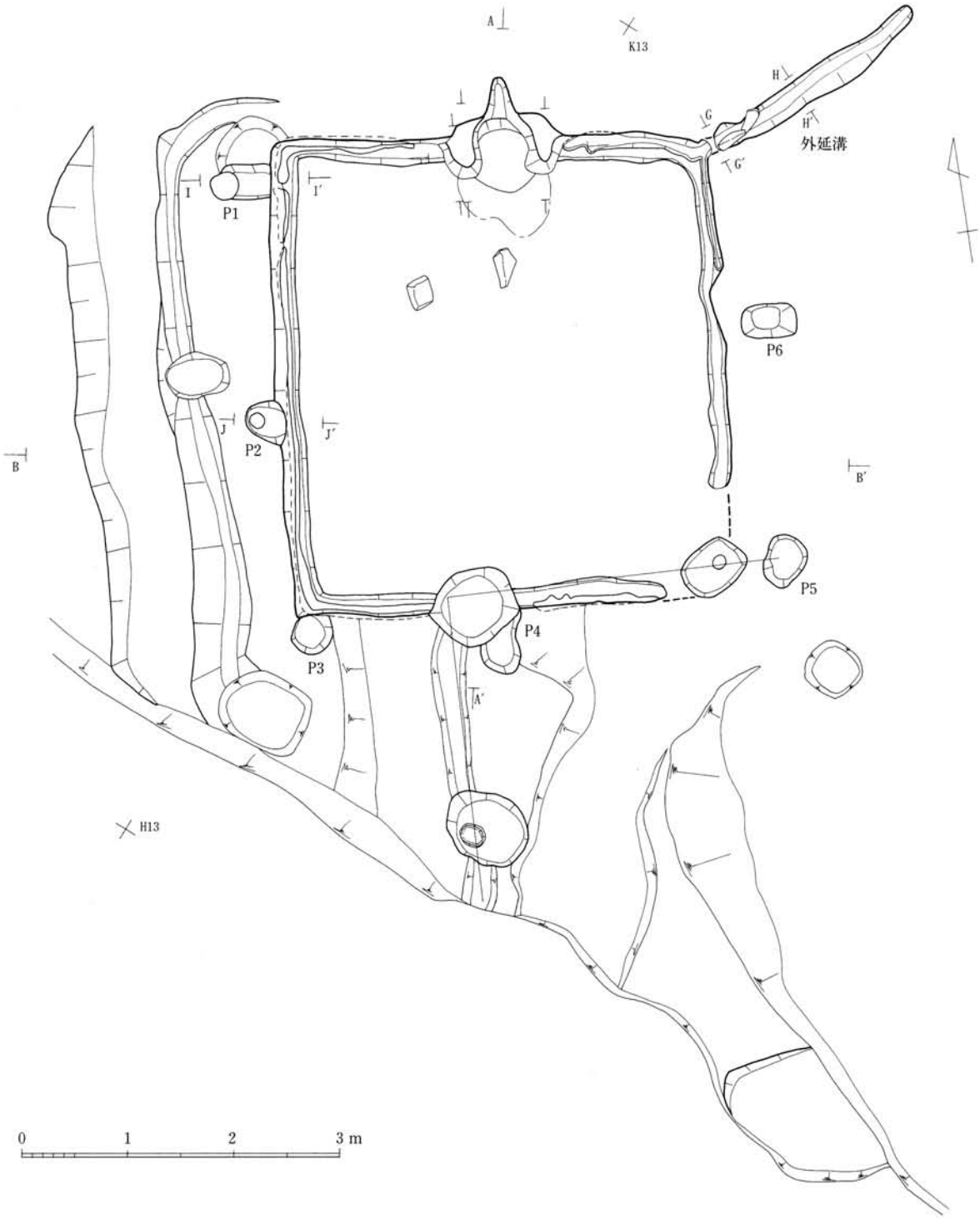
〔壁外柱穴〕西辺・南辺・東辺の壁からやや離れた位置で、北西隅（P1）、西辺中央（P2）、南西隅（P3）、南辺中央（P4）、南東隅（P5）、東辺中央（P6）の6箇所の壁外柱穴を検出した。掘方は長さ40～55cm、幅30～40cmの長方形を基調とし、深さは残りのよい北西隅柱穴（P1）で60cmある。掘方の埋土は一気に埋められている。P1、P2で直径15～20cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔堆積土〕住居廃絶時に褐色土で人為的に埋められている。この埋土下部に焼土・炭化物を含む層（5層）があり、その上も人為的に埋め戻されている。途中にやや間隙を置きながら埋め戻していることがわかる。そして、西側の段と住居西半部の最上部の窪みににぶい黄褐色土が自然堆積している。

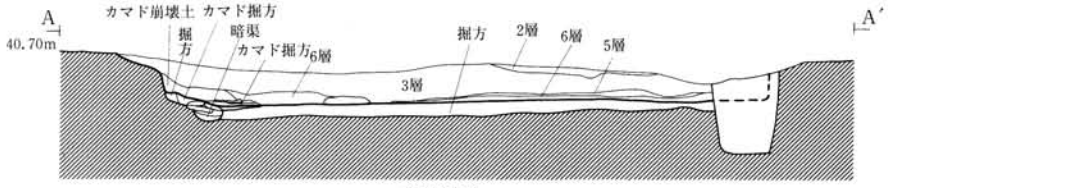
〔出土遺物〕出土遺物は少なく、土器はすべて破片である。掘方から土師器甕、カマド崩壊土から土師器甕（3）、須恵器坏（5）、埋土6層から須恵器坏、埋土5層から土師器甕、須恵器坏、埋土3層から土師器坏・高坏（2）・鉢（4）、須恵器坏（7）、埋土2層から須恵器坏（6）、堆積土1層から土師器高坏（1）、須恵器坏（8）、鉄製辻金具（9）などが出土した。このうち土師器はすべ

て非ロクロ調整のもので、土師器坏には底部が平底のもの、体下部に段をもつものが含まれる。また、須恵器坏には体下部～底部を回転ヘラケズリしたもの（5～7）が7点、手持ちヘラケズリしたもの（8）が1点ある。前者には焼成前に「大」？（5）、「三」？（7）と刻書したものがある。

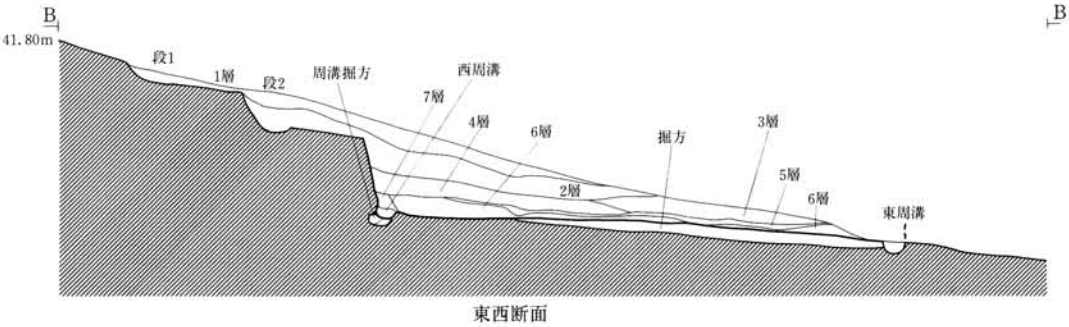
鉄製辻金具（9）は、径4mmの鉄棒で三叉状の三脚を作り、その一脚に薄い鉄板（長さ8cm、幅3.5cm、厚さ1mm）を二つ折りにして2箇所鋲留めにし、幅3.5cmの帯革に取り付けたと推定されるものである。脚が三脚であることから、長さの短い他の二脚にもこれとほぼ同じ幅の帯革が取り付けられ、三方向に引っ張ったものと考えられる。馬具の胸懸または面懸の辻金具とみられる。



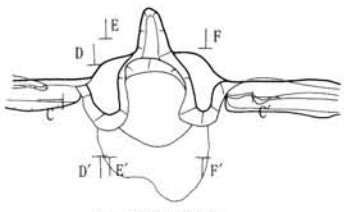
第21図　ＳＩ６竪穴住居跡平面図　（1/60）



南北断面



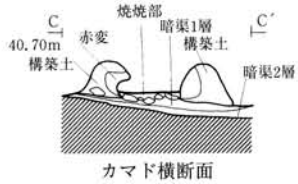
東西断面



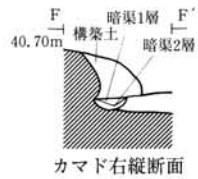
カマド検出状況

カマド燃焼部下の配石

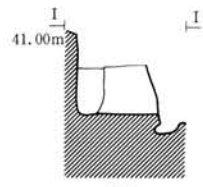
カマド下の暗渠



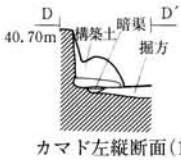
カマド横断面



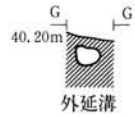
カマド右縦断面



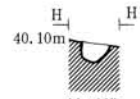
P1



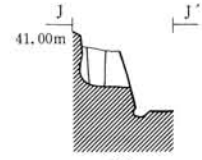
カマド左縦断面(1)



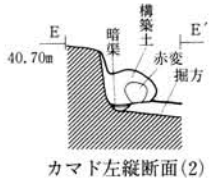
外延溝



外延溝



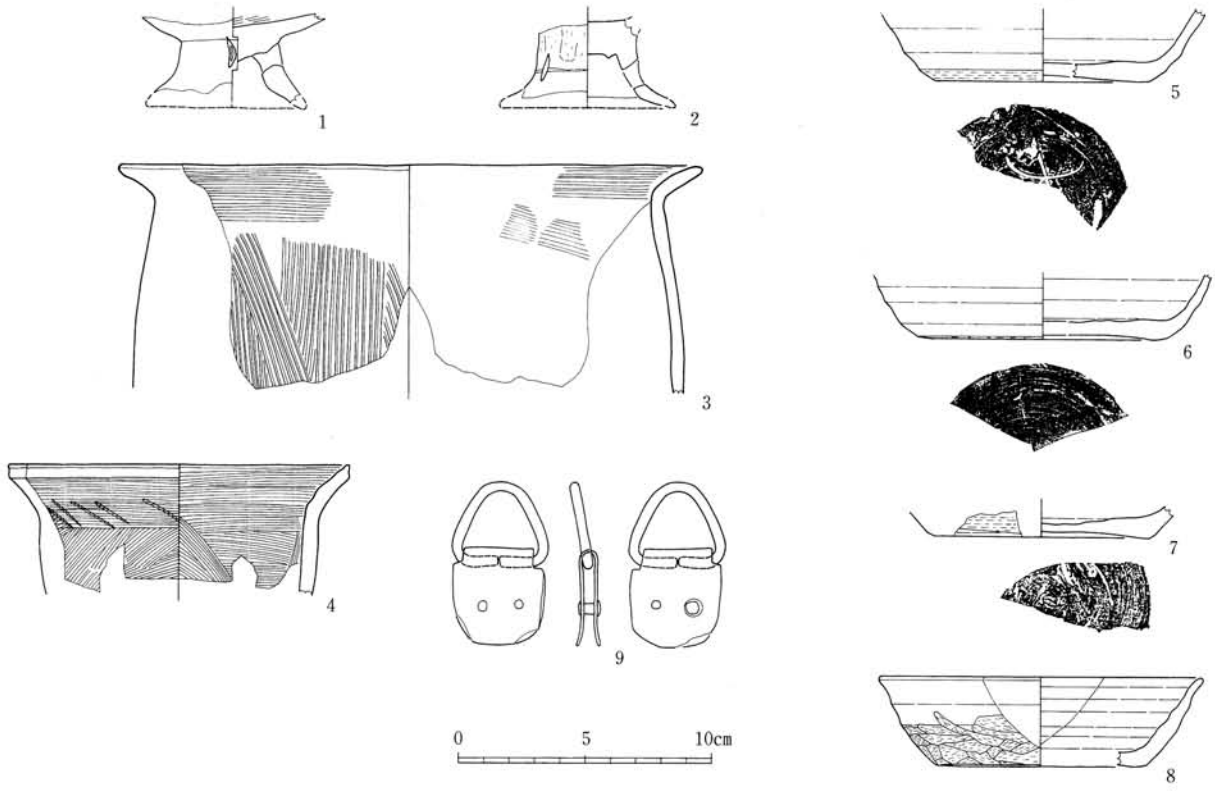
P2



カマド左縦断面(2)

層　位	特　　徴
掘方	黄褐色(10YR5/6)土。しまりあり。人為堆積土。
カマド掘方	黄褐色(10YR5/6)土。10～35cmの粘板岩板状礫9点を底面に敷き詰める。しまりあり。人為堆積土。
カマド構築土	明黄褐色(10YR6/8)土。しまり強い。人為堆積土。側壁内側10～20cmが赤褐色に固く焼き締まる。
カマド燃焼部	暗赤褐色(2.5R3/6)土。焼土を多量に含む。
カマド崩壊土	上部はにぶい黄褐色(10YR5/8)土、下部は焼土を多く含む赤褐色(2.5YR4/6)土。
カマド下暗渠	上部は黄褐色(10YR5/6)土で、焼土粒・炭片を多く含む。下部は黄褐色(10YR5/8)土で、焼土粒・炭を含まない。人為堆積土。
周溝掘方	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。上部は黄褐色(10YR5/8)土で、マンガン粒を多く、炭片を少量含む。下部は黄褐色(10YR6/8)土。マンガン粒を多く含む。
周溝	褐色(10YR4/6)土。径3cm程の明黄褐色地山粘質土ブロックを少量含む。
外延溝	褐色(10YR4/6)土。下部に砂が自然堆積。住居北東隅から少なくとも約1.2mはトンネル式で、天井部が残る。
P1・2掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1～3cmの地山土ブロックを多く含む。人為堆積土。
P1・2柱痕跡	暗褐色(10YR3/4)土。地山土ブロックを多く、炭片を少量含む。しまり・粘性ない。
埋土1層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片を多く含む。自然堆積土。
埋土2層	褐色(10YR4/4)土。炭片、径1～5cmの明黄褐色地山粘質土ブロックを多く含む。人為堆積土。
埋土3層	明黄褐色(10YR4/4)粘質土。褐色土ブロックを不均一に含む。人為堆積土。
埋土4層	褐色(10YR4/4)土。炭片、径1～5cmの明黄褐色地山粘質土ブロックを多く含む。人為堆積土。
埋土5層	厚さ2～8cmの炭・焼土層。
埋土6層	褐色(10YR4/6)土。径5～8cmの明黄褐色地山粘質土ブロックを多く含む。人為堆積土。
埋土7層	褐色(10YR4/4)土。地山ブロックをあまり含まない。西周溝上の人為堆積土。

第22図　SI6竪穴住居跡断面図　(1/60)



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器高坏		埋土１層				破片	透かし２個。外面：摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	22-4	002
2	土師器高坏		埋土３層				破片	透かし３個。外面：ケズリ、摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	22-5	002
3	土師器甕	ＩＡ	カマド崩土	23.0			破片	外面：口縁ヨコナデ、胴部ハケメ。内面：ナデ、摩滅。		002
4	土師器鉢	ＩＢ	埋土３層	13.4			破片	外面：ヘラナデ→口縁ヨコナデ。内面：ヨコナデ、ナデ。煤付着。		002
5	須恵器坏	A3	カマド内		8.4		1/3	両面ロクロナデ→底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→焼成前刻書「大」か。	35-10	002
6	須恵器坏	A3	埋土２層		8.6		1/3	両面ロクロナデ→底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。断面サンドイッチ状。		002
7	須恵器坏	B3	埋土３層		8.4		1/6	両面ロクロナデ→底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→焼成前刻書「三」か。	35-13	002
8	須恵器坏	B4	埋土１層	12.8	8.0	3.5	1/3	両面ロクロナデ→底部ヘラ切り→体下部手持ちヘラケズリ。		002
9	帯金具		埋土１層					鉄製馬具。長さ6.6cm、幅3.7cm、厚さ0.8cm。	37-3	029

第23図　ＳＩ６竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ56竪穴住居跡】（平面図・断面図：第24図）

〔位置〕調査区北西隅に位置する。

〔重複〕ＳＸ５平場と重複し、これよりも古い。ＳＸ５平場の造成によって大半が大きく削平され、西辺際が一部残存する。

〔平面形・規模〕平面形は長方形と推定され、規模は南北が西辺で3.0m以上である。

〔方向〕西辺は磁北とほぼ一致する。

〔壁〕ＳＸ５平場の造成によって大半が大きく削平され、西辺際が一部残存する。検出面から床面までの高さは、残りのよい北西隅で60cmあり、ほぼ垂直に立ち上がるが、上部がやや崩れている。

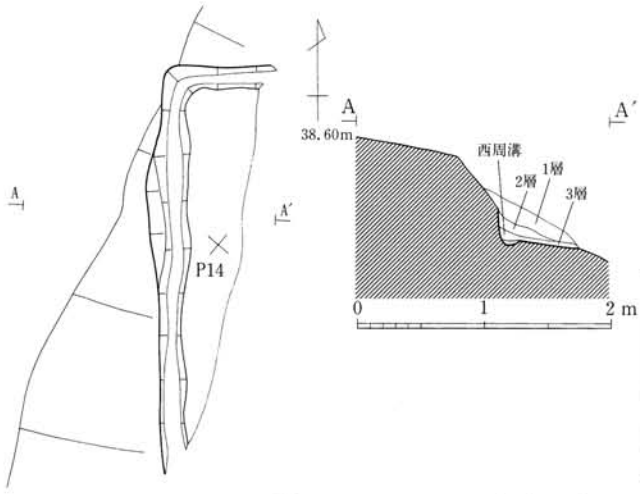
〔床面〕ほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔周溝〕西辺・北辺で幅15～20cm、深さ5cm程の周溝を検出した。人為的に埋め戻されており、住居機能時に開口していたか、住居廃絶時に壁材を抜き取って埋め戻したかは不明である。

〔その他〕大きく削平されているため、カマドの位置、主柱穴の有無などは不明である。

〔堆積土〕３層に分かれ、竪穴住居廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。



層　位	特　　徴
埋土１層	灰黄褐色(10YR4/2)土。径5～10mmの地山ブロック、炭粒を含む。人為堆積土。
埋土２層	明黄褐色(10YR7/6)土。地山ブロックを主体とし、炭粒を含む。人為堆積土。
埋土３層	灰黄褐色(10YR5/2)土。径1cm程の地山ブロックを多く、炭粒を少し含む。人為堆積土。
周溝	褐灰色(10YR4/1)土。径1cm程の地山ブロックを多く、炭粒を少し含む。人為堆積土。

第24図　ＳＩ56竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

【ＳＩ８竪穴住居跡】（平面図：第25・27図、断面図：第26・27図、遺物：第28～31図、図版８）

〔位置〕調査区北半西際、丘陵尾根上の標高37.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ７・46竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が東辺で4.5m、東西が南辺で4.7mである。

〔方向〕東辺でみると北で東に約８°偏る。丘陵尾根の方向とほぼ一致し、等高線に沿っている。

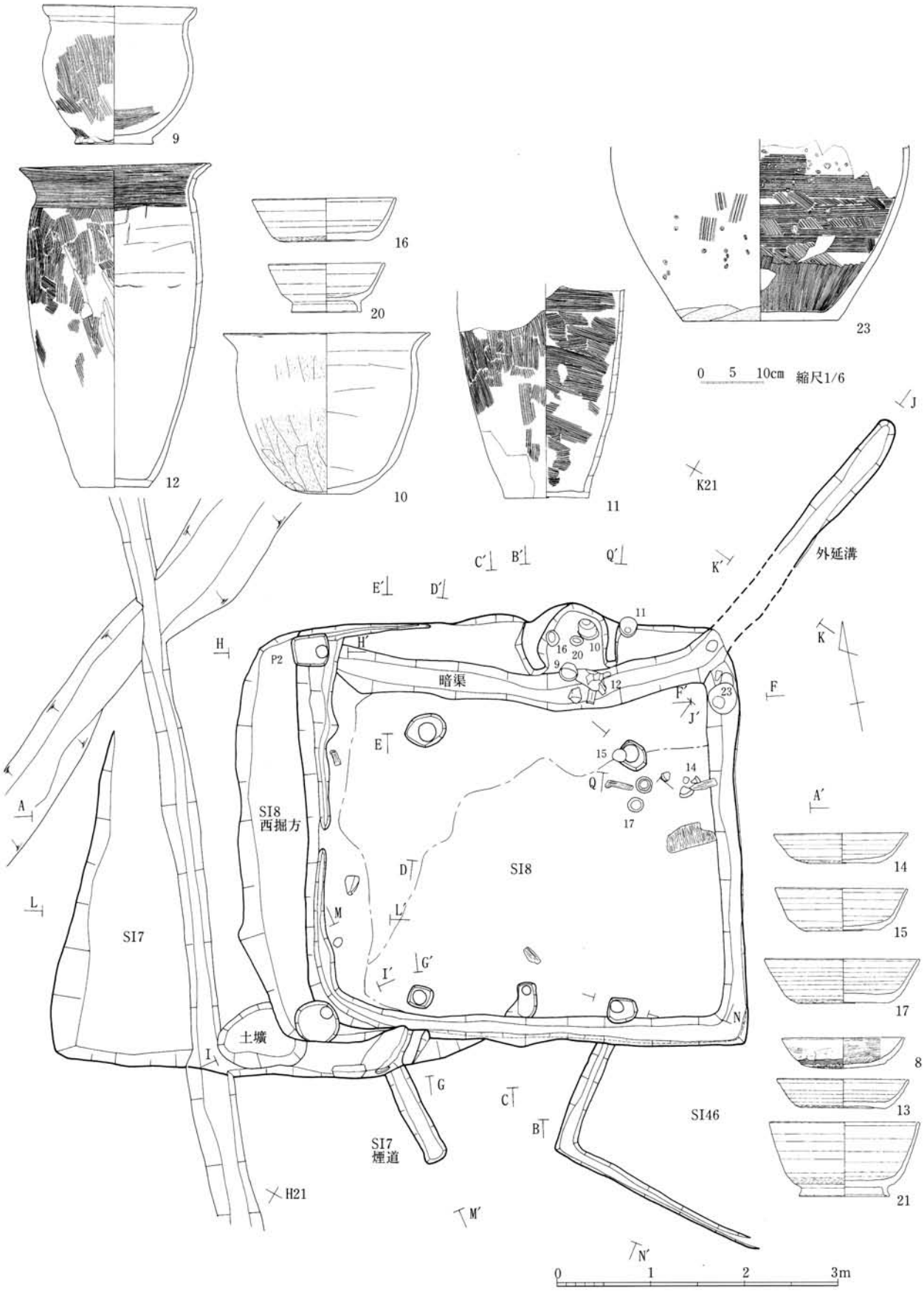
〔検出状況〕焼土塊を多量に含む暗赤褐色土（堆積土第７層）が床面全体やカマドの上、周溝、暗渠を覆うことから、火災にあって焼失したことがわかる。残りがよく、竪穴住居の構造や焼失時の竪穴住居内の様子がよくわかった。

〔壁〕北東部が上部を削平されているものの、全体として残りがよい。最も残りのよい西辺では壁の高さは60～70cmあり、105～120°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。次いで残りのよい北辺・南辺の西寄りでは壁の高さは50～60cmあり、西辺と同様に105～110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。残りの悪い東辺中央では壁の高さは10cm、北東隅では10～15cmある。

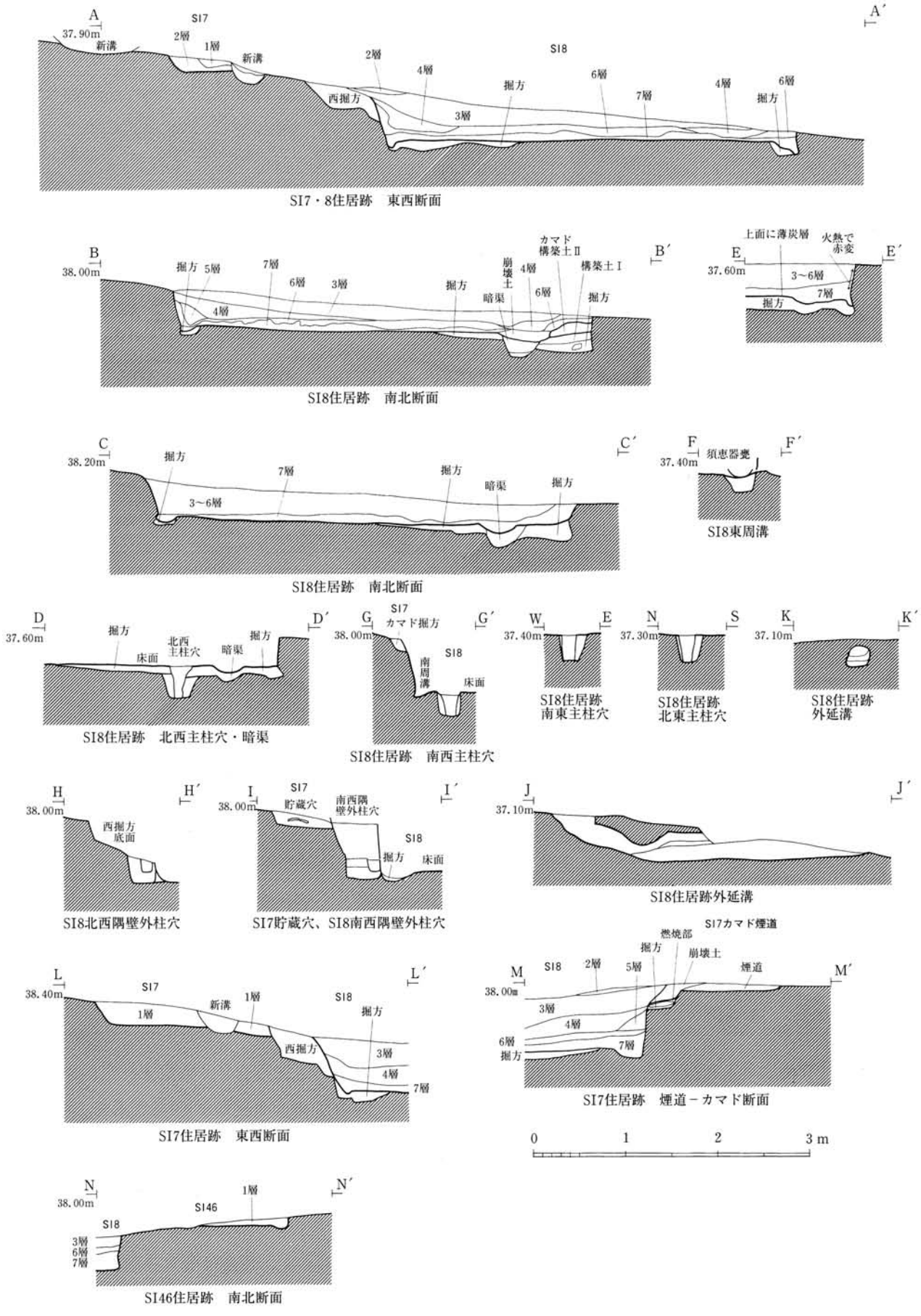
〔床面〕北半部は貼床、南半部は地山面の粘板岩岩盤を床面としている。床面はほぼ平坦だが、南半部から北半部に向かってほんのわずか傾斜している。

〔柱穴〕北辺から1.2m離れた北西隅－南東隅対角線上にＰ１北西主柱穴、北辺から1.3m離れた南東隅－南西隅対角線上にＰ２北東主柱穴、南辺周溝際にＰ１北西主柱穴に対応するＰ３南西主柱穴、南辺周溝際にＰ２北東主柱穴に対応するＰ４南東主柱穴、Ｐ３南西主柱穴とＰ４南東主柱穴を結ぶ中間にＰ５南辺中央柱穴、北西隅の壁際にＰ６北西壁際柱穴、南西隅の壁際にＰ７南西壁際柱穴の７箇所の柱穴を検出した。これら相互の位置関係、掘方の規模、柱痕跡の大きさからみて、Ｐ１～Ｐ４柱穴が主柱穴、Ｐ６・Ｐ７柱穴がそれに準じて重要な柱穴、Ｐ５尚円中央柱穴が補助的な柱穴とみられる。主柱穴ではＰ１北西主柱穴、Ｐ２北東主柱穴がＰ３南西主柱穴、Ｐ４南東主柱穴よりも柱痕跡が２cm太く、カマドの位置する北辺がより重視されたことが窺える。

また、焼失住居であるにもかかわらず、これら各柱穴には柱材が炭化して残らずに焼土・炭が充満していたこと、床面にも柱材がほとんど残っていなかったことから、柱材がほとんど生焼けの状態で住居が焼失したため、これらの各柱穴に用いられた柱が焼失後に腐り、その間隙部に焼土・炭



第25図　ＳＩ７・８・46竪穴住居跡平面図（１/60）



第26図　ＳＩ７・８・46竪穴住居跡断面図（１/60）

住居跡	層位	特徴
SI8	掘方	褐色(7.5YR4/4)土。径1～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	西掘方	西辺の西側で一段高く段掘りされた箇所。褐色(10YR4/6)土で、径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。人為堆積土。
	貼床	カマド右脇貼床。褐色(7.5YR4/4)土。径2～4mmの炭片、径1～3cmの粘板岩風化礫片を含む。しまりよい。人為堆積土。
	カマド掘方	橙色(7.5YR6/8)土。褐色土ブロック、1～6cmの粘板岩礫片を多く含む。10～43cmの粘板岩板状礫17点を奥壁に並べる。しまりよい。人為堆積土。
	カマド構築土Ⅰ	旧カマド。黄褐色(10YR5/6)粘質土。径0.5～3cmの粘板岩風化礫片をやや多く含む。
	カマド構築土Ⅱ	新カマド。明黄褐色(7.5YR5/8)粘質土。径5～10mmの粘板岩風化礫片をやや多く含む。下部に焼土をやや多く含み、厚さ5mmの薄炭層がある。
	カマド燃焼部	2層に分かれる。上部はにぶい赤褐色(2.5YR4/4)～明赤褐色(5YR5/8)焼土で、固く焼き締まる。下部は赤褐色(2.5YR4/6)焼土で、炭片を少し含む。
	カマド崩壊土	2層に分かれる。上部は明黄褐色(10YR6/8)粘質土に褐色土ブロックが不均一に混じる。下部は明赤褐色(5YR3/4)土で、焼土を多く含む。
	カマド前面暗渠	カマドより西側では掘方とともに粘板岩風化礫片を含む褐色（7.5YR4/4）土で整地。カマドより東側では掘方を掘り直し、下部をにぶい褐色(10YR5/4)土、上部を焼土粒・地山粒を多く含む暗赤褐色(5YR3/6)土で整地。火災時には窪んだ溝状となる。
	南周溝	火災時には炭片を少量含む褐色(7.5YR4/4)土が自然堆積し、窪んだ状態。その上部に7層が堆積。
	東周溝	褐色(10YR4/4)土。径1～3cmの粘板岩礫片を多く含む。人為堆積土で、火災時にはほとんど埋められており、北西隅近くには須恵器甕が上部に据えられている。
	外延溝	北東隅から北東に約1.2mまでトンネル式となる。3層に分かれ、1層が焼土・粘板岩礫片を多く含む赤褐色(5YR4/6)土、2層が明黄褐色(10YR6/6)粘質の天井崩壊土、3層が3cm以下の礫片を多く含むにぶい褐色(7.5YR5/4)土。自然堆積土。
	主柱穴掘方	褐色(7.5YR4/4)土。径3～5cmの粘板岩礫片を多量に含む。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。焼土・炭を多量に含む。しまり・粘性ない。完全に焼けないで腐った柱の空間に7層起源の焼土が崩れ落ちたもの。
	壁外柱穴掘方	褐色(7.5YR4/4)土。径3～5cmの粘板岩礫片を多量に含む。人為堆積土。
	壁外柱穴柱痕跡	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。焼土・炭を多量に含む。しまり・粘性ない。完全に焼けないで腐った柱の空間に7層起源の焼土が崩れ落ちたもの。
	堆積土1層	表土。黒色土。自然堆積土。
	堆積土2層	灰白色火山灰。自然堆積土。
	堆積土3層	褐色(10YR4/6)土。径5mm前後の焼土粒・粘板岩風化礫片、径2mm程の炭片をやや多く含む。自然堆積土。
	堆積土4層	褐色(10YR4/6)土。径1～5cmの黄褐色粘質土ブロック、径5mmの炭片・粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあまりない。住居内南西部に分布。自然堆積土。
	堆積土5層	褐色(10YR5/8)土。径5cm前後の粘板岩風化礫片を多く、褐色土ブロックを少量含む。ややしまる。南壁際の壁崩落土。
	堆積土6層	暗褐色(5YR3/4)土。径5～10mmの焼土粒・炭片を多く含む。自然堆積土。
	堆積土7層	暗赤褐色(5R3/3)土。焼土・地山ブロック・粘板岩風化礫小片を多量に含む。火災で焼け落ちた屋根の葺土。自然堆積土。
SI7	カマド掘方	黄褐色(10YR5/6)土。62×24×5cmの粘板岩板状礫を底面に敷く。しまりよい。人為堆積土。
	カマド燃焼部	暗赤褐色(2.5R3/6)土。焼土を多量に含む。
	カマド崩壊土	暗褐色(7.5YR3/4)土。径5mmの焼土・粘板岩風化礫片を多く含む。
	貯蔵穴	暗赤褐色(5YR3/6)土。径5～10mmの焼土、径5mmの炭片を多量に含む。人為堆積土。
	煙道	明黄褐色(10YR6/6)土。径1～2cmの焼土・粘板岩風化礫片を多く含む。
	埋土1層	黄褐色(10YR5/8)土。褐色(10YR4/6)土ブロックを多く含む。しまりよい。人為堆積土。
	埋土2層	褐色(10YR4/6)土。黄褐色(10YR5/8)土ブロックを多く含む。しまりよい。人為堆積土。
SI46	埋土1層	褐色(7.5YR4/3)土。径1～4cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりよい。人為堆積土。

ＳＩ８・７・46竪穴住居跡土層一覧

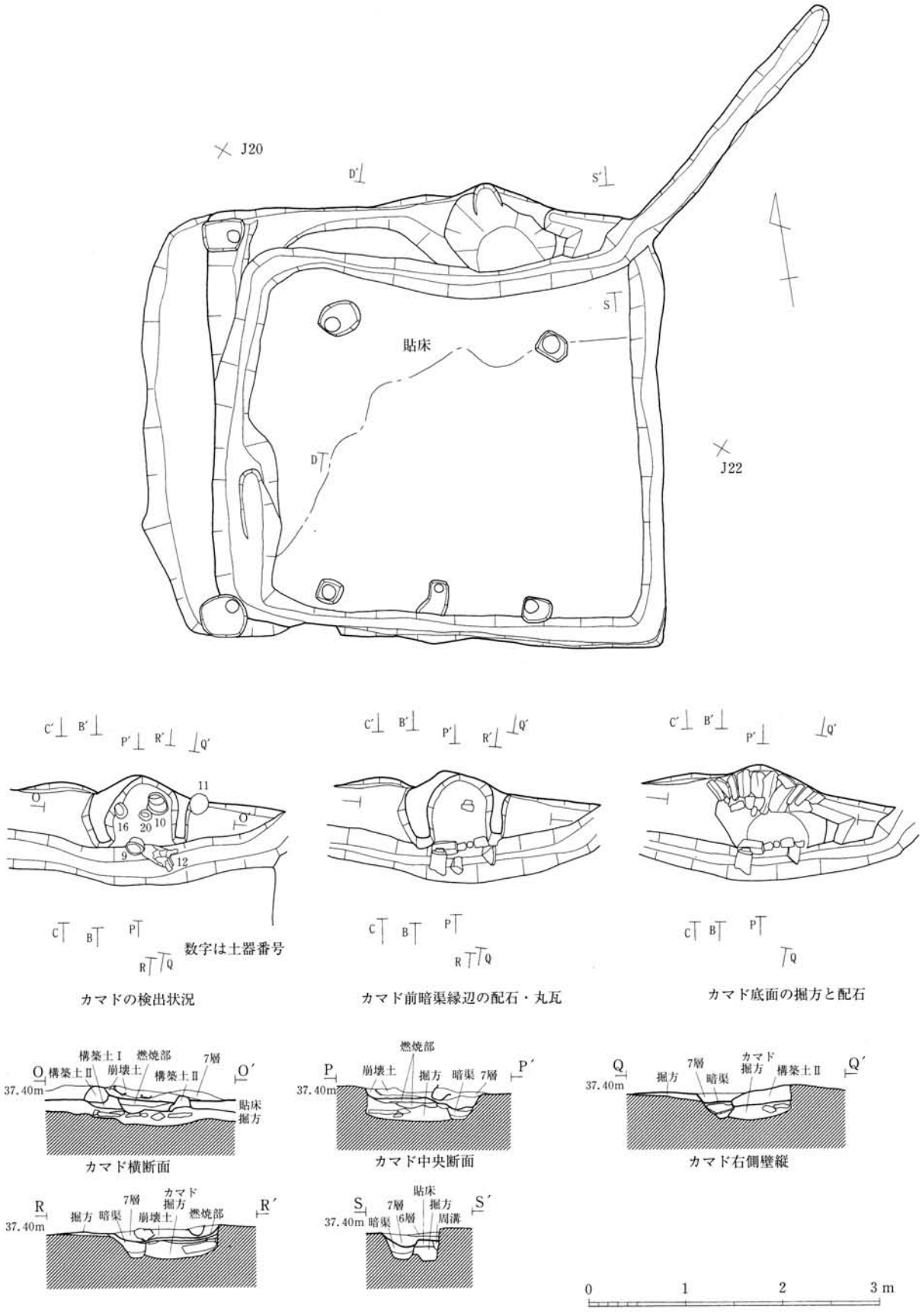
が崩れ落ちたものと考えられる。

各柱穴の掘方の平面形・規模、柱痕跡の規模・形状は以下のとおりである。

柱穴	平面形	長辺	短辺	深さ	柱痕跡	備考
P1北西主柱穴	隅丸方形	45cm	35cm	35cm	径16cmの円形	床面（貼床上面）からは柱痕跡のみ検出され、焼土・炭片が充満。掘方は貼床を除去後に検出
P2北東主柱穴	長方形	33cm	28cm	30cm	径16cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満
P3南西主柱穴	正方形	25cm	25cm	26cm	径14cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満
P4南東主柱穴	隅丸方形	30cm	27cm	30cm	径14cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満
P5南辺中央柱穴	長方形	38cm	20cm	5cm	径9cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満
P6北西壁際柱穴	長方形	45cm	33cm	32cm	径13cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満
P7南西壁際柱穴	隅丸長方形	48cm	44cm	60cm	径13cmの円形	柱痕跡に焼土・炭片が充満

柱間寸法はＰ１北西主柱穴－Ｐ２北東主柱穴が2.2m、Ｐ３南西主柱穴－Ｐ４南東主柱穴が2.1m、Ｐ２北東主柱穴－Ｐ４南東主柱穴が2.7m、Ｐ１北西主柱穴－Ｐ３南西主柱穴が2.9mである。

〔カマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように北を向いて設けられ、北辺中央から約60cm東寄りの位置にに付設されている。カマドの天井部は住居焼失時に崩壊していたが、左側壁、右側壁、燃焼部が良好な状態で残っていた。両側壁は北辺の縁と一致するが、燃焼部奥壁は北辺の縁より23cm外側に張り出している。焼失竪穴住居跡で残りがよいのにもかかわらず、煙道は竪穴住居跡の外に長く延びてはいないこと、また燃焼部奥壁が屋外に23cm張り出すことから、煙道は燃焼部奥壁より斜め上に短く立ち上げて屋外に導くような構造であったと考えられる。



第27図　ＳＩ８竪穴住居跡の掘り上げ状況とカマドの細部（1/60）

左側壁は長さ58cm、高さは奥で18cm、焚き口で15cm、右側壁は長さ57cm、高さは奥で16cm、焚き口で12cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.1mある。また、左側壁で新旧の構築土（構築土Ⅰ・Ⅱ）を検出し（第26図の断面図Ｂ－Ｂ'、第27図の断面図Ｏ－Ｏ'）、カマド側壁は一度作り替えられていることがわかる。カマドの両側壁は黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、カマド右側壁端部には土師器甕体下部～底部破片（１）が芯材に用いられている。

焚き口は下部幅55cm、内面の高さは18cm以上で、20cm程と考えられる。燃焼部は奥行き65cm、幅55cm、奥壁高10cmで、深さ10cmの浅い皿状に掘り窪められ、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部にも新旧２回の重複が認められる。

カマド側壁と燃焼部の下は、竪穴住居構築時に長さ1.15m、幅0.8m、深さ15cmの土壙状に掘り窪められている。そして、奥壁から35cm離して横長になるように、扁平な粘板岩板状礫片３点（長さ24～25cm、幅10～16cm、厚さ４～７cm）が横一列に並べられている。さらにその上に奥壁下の壁に沿って扇形になるように縦に並んで、扁平な粘板岩板状礫片13点（長さ15～31cm、幅8～16cm、厚さ３～９cm）が両側から中心に向けて敷き並べられている（第27図中段、図版８－６）。そして、その上が15～20cmの厚さで堅く整地されている。カマドの両側も広く掘り窪められ、同様の厚さで堅く整地されている。

〔カマド前暗渠〕カマド前面では、カマド下およびカマド両側が整地された後、北西隅から北東隅に向けて、長さ4.2mにわたって弧状に通じる幅約30cm、深さ15～20cmの溝がやや傾斜しながら掘られている。さらにその後、カマド燃焼部と溝の接する縁辺に、粘板岩板状礫片２点、丸瓦２点（６・７）、土師器甕体部破片１点、須恵器鉢口縁部破片１点、土師器甕体下部～底部破片１点（１）が土留めとして並べられてから、この溝が埋め戻されている（第27図中段）。埋め戻された溝の上面は火災時には浅く窪んでおり（第26図の断面図Ｂ－Ｂ'、Ｃ－Ｃ'、Ｄ－Ｄ'；第27図の断面図Ｐ－Ｐ'、Ｑ－Ｑ'、Ｒ－Ｒ'）、北西隅で西辺周溝、北東隅で東辺周溝と接続して外延溝に続いている。本竪穴住居の火災時にはこの状態で暗渠として機能していたとみられ、外延溝のトンネル部分では焼土混じりの土が堆積していた（第26図の断面図Ｊ－Ｊ'）。

〔周溝〕西辺・南辺・東辺の３辺で幅20～35cm、深さ６～15cmの周溝を検出した。南辺・東辺では壁際を壁の奥に抉るように溝状に深く掘り込み、その上を嵩上げして埋め戻してから溝状にもう一度掘り窪め、機能面としている（第26図の断面図Ａ－Ａ'、Ｂ－Ｂ'、Ｃ－Ｃ'、Ｌ－Ｌ'）。西辺では掘方が幅広く、その上を嵩上げ整地してから溝状に掘り窪め、機能面としている（第26図の断面図Ａ－Ａ'）。また、北辺の西寄り約１mも西辺と幅は狭いが西辺と同様の方法で周溝を作って機能面としている（第26図の断面図Ｅ－Ｅ'）。各周溝とも火災時には溝状に空いており、焼土塊を多量に含む暗赤褐色土（堆積土第７層）が堆積していた。なお、東辺で暗渠と合流する付近では周溝はほとんど埋め戻されており、その上に須恵器甕（23）が正位の状態で置かれ、甕の内部には焼土塊を多量に含む暗赤褐色土（堆積土第７層）が堆積していた（第26図の断面図Ｆ－Ｆ'）。この甕は口縁～体上部を欠くが、この付近で竪穴住居跡上部が削平を受けたためと思われ、本来は完形であった可能性が高い。

〔外延溝〕南西隅－北東隅の対角線の延長上、東辺周溝とカマド前暗渠の合流する北東隅から丘陵斜面下に向かって、幅25～33cm、深さ15～30cmの外延溝が3.0m延びる。北東隅から1.1mはトンネル式の天井部が残存していた。外延溝の底面は北西隅から1.1mは約27°の傾斜で下り、そこからほぼ水平となる（第26図の断面図Ｊ－Ｊ'）。トンネル式の天井部は底面の傾斜変換点から前後1.1m程の間で残っており、竪穴住居内部と竪穴住居外部の両側から掘削されていた。底面がほぼ水平となった箇所の側から、トンネル式で長く掘削するのはかなり無理があり、トンネル式となっていたのは天井部が残存していた箇所付近までで、それより先については天井部がない構造であったと考えられる。

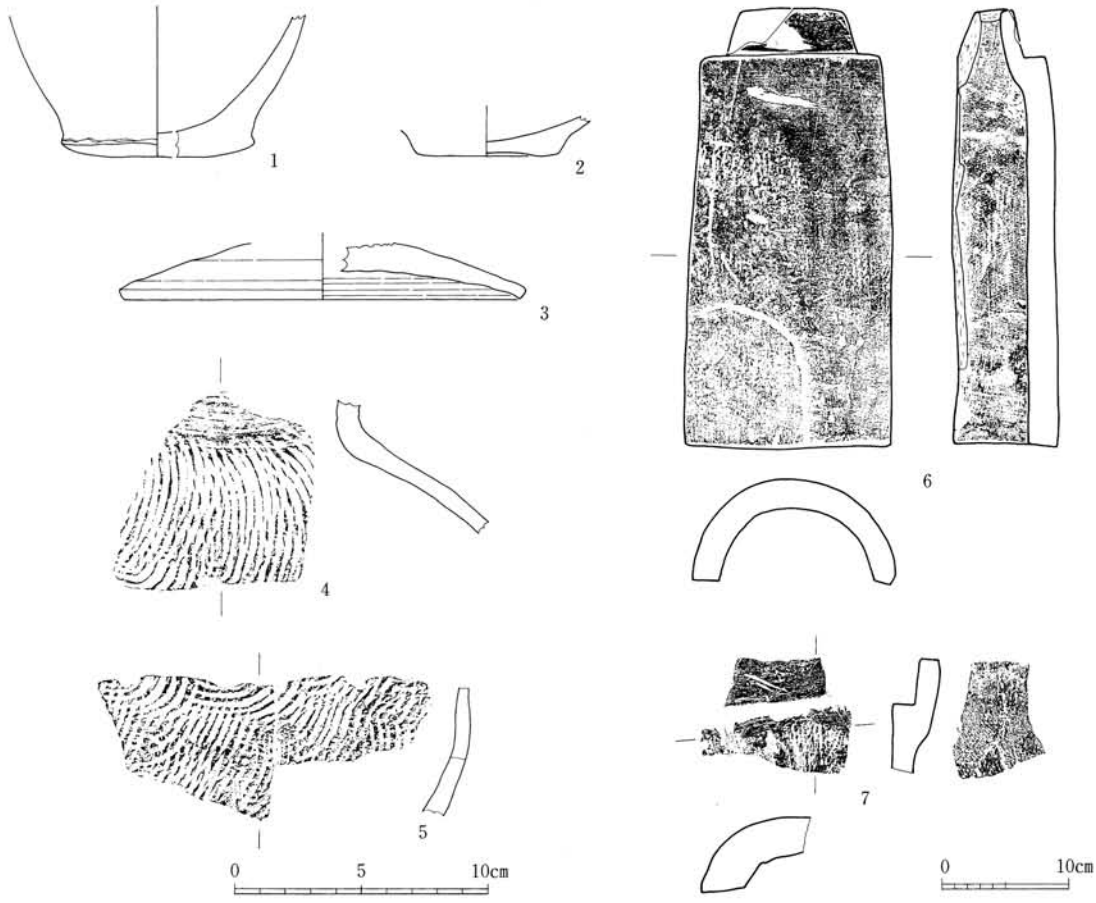
外延溝内の堆積土は３層に分かれ、１層が火災後の堆積土、２層が火災以前の天井崩壊土、３層が竪穴住居機能時の自然堆積土である。３層の厚さは15～25cmあり、火災時までにかなり埋まっていたことがわかる。

〔西辺西側掘方〕丘陵斜面上方にあたる西辺の西側に、西辺と平行するように長さ4.5m、幅0.8mの掘方がある。西辺の床面から15～25cm高い位置にあり、掘方底面は傾斜し、やや凹凸がある。そしてこの掘方を人為的に一気に埋め戻して西辺の壁としていた（第26図の断面図Ａ－Ａ'、Ｌ－Ｌ'）。Ｐ６北西壁際柱穴とＰ７南西壁際柱穴も西側掘方を埋め戻した後に設置されている。竪穴住居構築時に人為的に埋め戻されていること、西辺での高さが60～70cmあることから、竪穴住居を掘削して掘削土を周囲に排土する際の足場と考えられる。

〔堆積土〕床面上の堆積土は７層に分かれ、本竪穴住居が火災で焼失した以降に自然堆積したものである。最下層の堆積土第７層は焼土塊を多量に含む暗赤褐色土で、床面全体やカマドの上、周溝、暗渠を覆い、その上面は起伏に富む。壁際では20～25cmと最も厚く堆積し、中央部の厚い箇所では12cm前後あり、薄い箇所では３cmと薄い。平均の厚さは12cm程とみられる。本竪穴住居跡の規模は南北4.5m、東西4.7m、床面積は21.15㎡なので、焼土塊を多量に含むこの層の堆積は約2.5㎥となる。埋蔵文化財関係で一般的に用いられているテン箱（内法54cm×34cm×15cm、0.0275㎥）に換算すると、約92箱分と多量になる。本竪穴住居跡の屋根に葺かれていた葺土が焼失して崩れ落ちたものと推定される。この層直下の床面上に炭化材があまり多く認められなかったことは、本竪穴住居が火災に遭って焼け落ちるまでにあまり時間がかからず、焼け落ちた葺土にパックされて柱材や建築部材が生焼けであったため、その後にこれらの材が腐って残っていないものと推定される。堆積土第６層～第３層は焼失後の流入土で、堆積土第２層は10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰である。

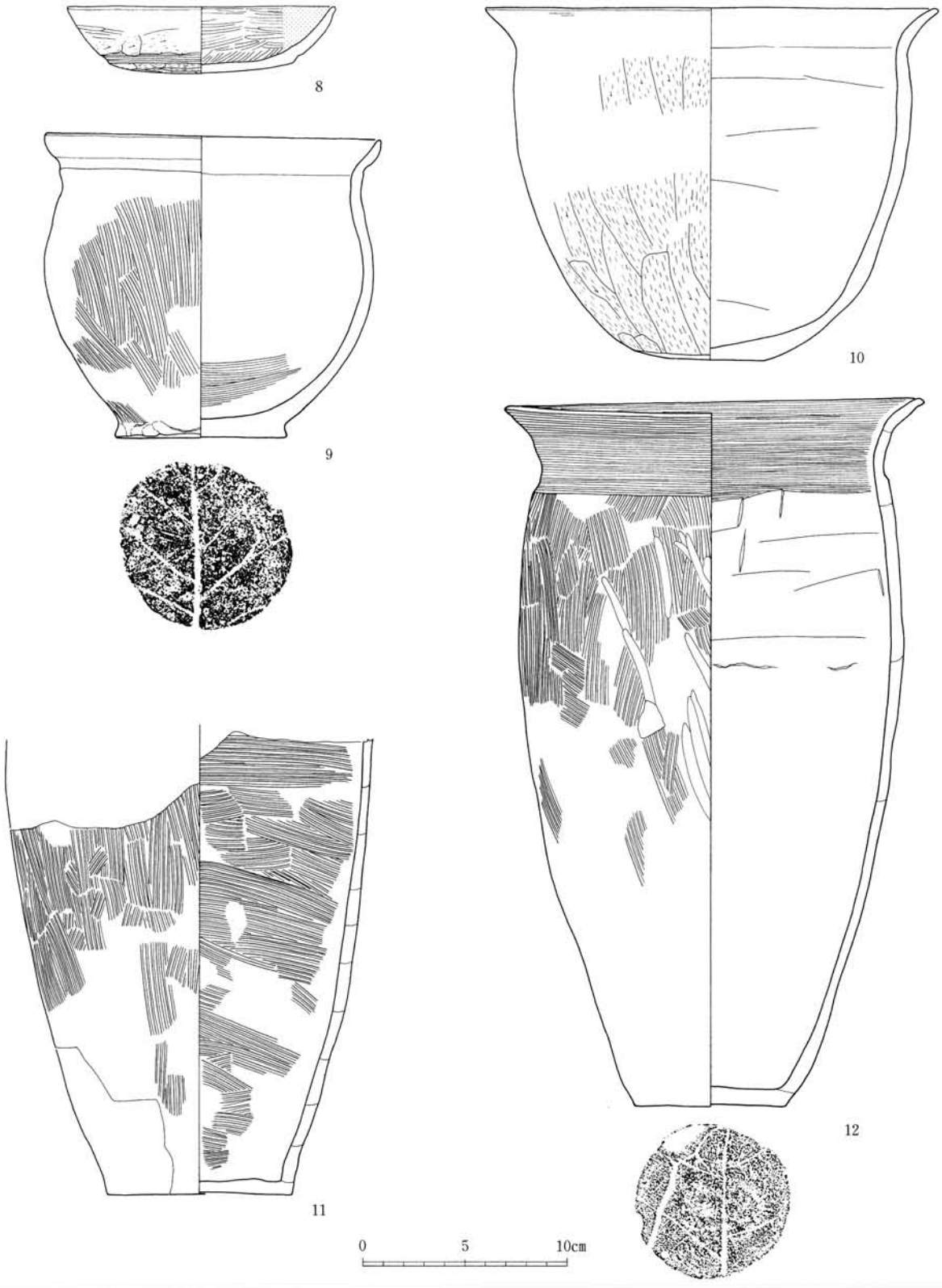
〔出土遺物〕竪穴住居構築時の遺物には、カマド右側壁端部構築材に用いられた非ロクロ調整の土師器甕体下部～底部破片（１）、カマド前暗渠に入れられた須恵器蓋破片（３）、カマド燃焼部下で暗渠との縁に並べられた丸瓦（６・７）、カマド下の整地から出土した土師器甕、須恵器坏の破片、掘方から出土した須恵器甕体部破片（４）、西掘方より出土した須恵器甕体部破片（５）、主柱穴掘方から出土した土師器甕破片などがある。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもの、須恵器甕体部破片（４・５）は体部外面に同心円状叩き目痕のある北関東系のものである。

竪穴住居焼失時の遺物には、カマド内崩壊土上面から出土した完形の須恵器坏（16）・高台坏（16）各１点、カマド内崩壊土中から出土した完形の土師器鉢（９・10）２点と土師器甕（12）１点、カマド右脇床面に据えられていた土師器甕（11）１点、北東部の東周溝上に据えられた須恵器甕（23）１点、床面から出土した完形の土師器坏（８）１点、須恵器坏（13～15・17・18）５点、須恵器高台坏（21）１点、須恵器鉢・蓋破片（22）各１点、カマド天井崩壊土上面から出土し、カマドの上に置かれていたとみられる完形の須恵器坏（16）・高台坏（20）各１点、完形の鉄鎌（32）１点、刀子とみられる鉄製品破片（31）１点、磨石（33）１点、周溝内から出土した須恵器高台坏破片（19）１点などがある。



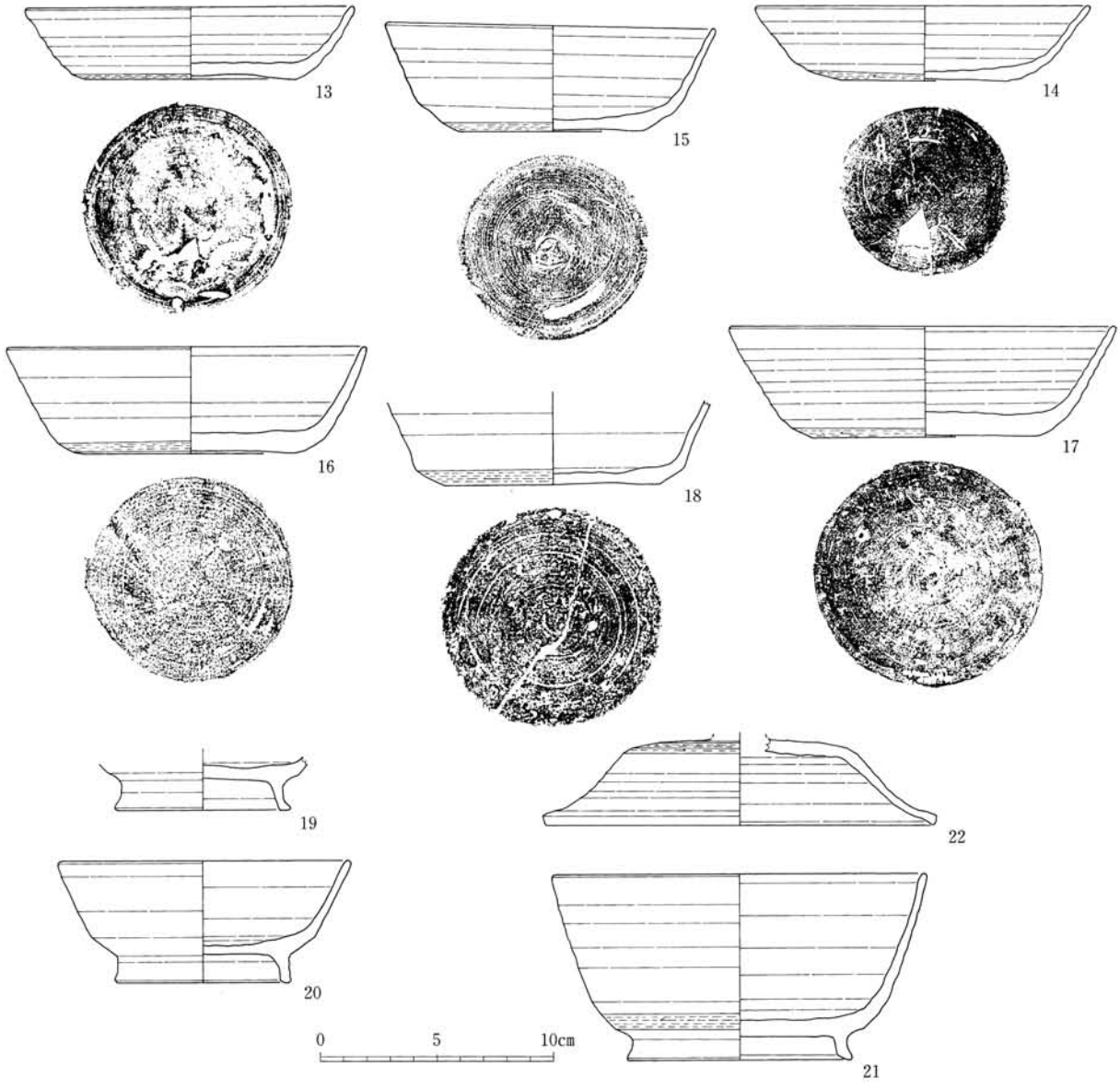
番号	種　類	分類	層　位	残　存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕	I	カマド右袖構築材	破片	底径7.6cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕。体部摩滅。内面：摩滅。		003
2	土師器甕	I	西掘方	破片	底径5.6cm。非ロクロ調整。外面：底部ナデ。体部ナデ、摩滅。内面：摩滅。		003
3	須恵器蓋	A1a	カマド前暗渠	1/3	口径15.6cm。つまみ欠損。つまみとの接合面に５条の沈線。外面：ロクロナデ→体部回転ヘラケズリ→つまみ接合→ロクロナデ。内面：ロクロナデ→中央一部にヘラミガキ。	23-10	003
4	須恵器甕	C	貼床	破片	外面：頸部ロクロナデ、胴部同心円状叩き目痕。内面：頸部ロクロナデ、胴部ナデ。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北関東系。	23-14	003
5	須恵器甕	C	西掘方	破片	外面：同心円状叩き目痕。内面：ナデ。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北関東系。	23-16	003
6	有段丸瓦		カマド前暗渠	ほぼ完形	全長34.6cm。広端幅16.3cm。狭端幅14.3cm。玉縁部長3.6cm。玉縁基部幅10.3cm。厚さ2.3cm。粘土紐巻き作り。凸面：縄叩き目→ロクロナデ→部分的ヘラケズリ。凹面：粘土紐痕、布目、布合わせ目。側面・小口面：ヘラケズリ。瓦円筒を二分割した後に玉縁先端から玉縁基部両側端にかけて斜めに切り落とす。黄褐色～橙褐色。胎土に径1mmの砂・ガラス、径2～4mmの岩片を含む。焼成あまい。	36-2	027
7	有段丸瓦		カマド内貼床Ｉ	破片	凸面：縄叩き目→ロクロナデ。凹面：布目。側面・小口面：ヘラケズリ。黄褐色～灰色。胎土に径1mmの砂・ガラス、径2～4mmの岩片を含む。焼成あまい。	36-3	027

第28図　ＳＩ８竪穴住居跡出土遺物(1)－構築時の遺物



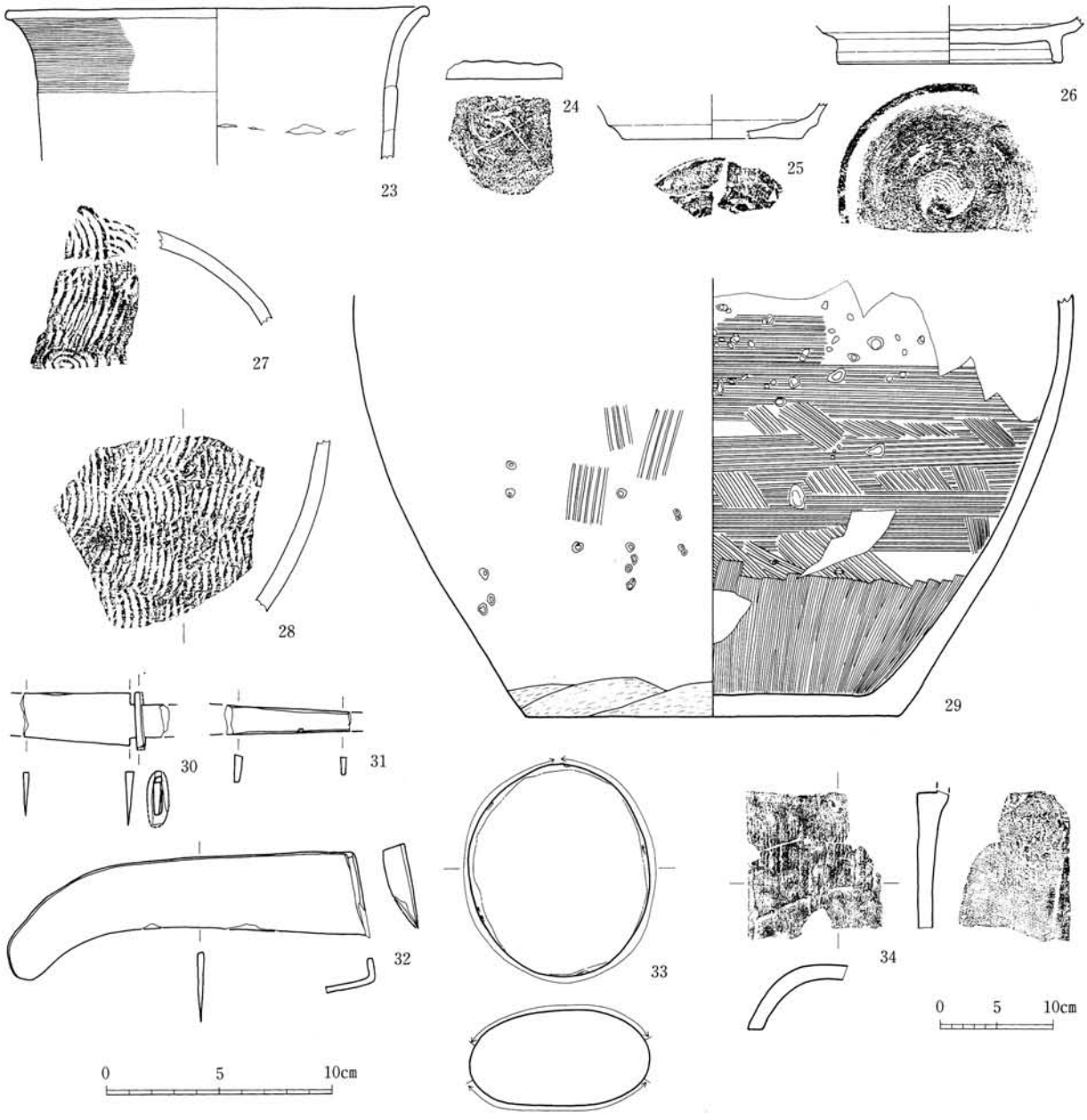
番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
8	土師器坏	ＩB1	床面	13.1	9.1	3.3	完形	非ロクロ調整。外面：体下部に沈線で段。底部手持ちヘラケズリ。口縁～体部手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。21－13－８の順に三枚重ねされ、内面を上にして北東主柱穴南から出土。	22-7	003
9	土師器鉢	ＩA	カマド天井崩壊土	16.4	8.4	14.8	4/5	非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ？、体部ハケメ・摩滅、体下部指オサエ、底部木葉痕。内面：口縁ヨコナデ？、体部ヘラナデ・炭化物付着。カマド前暗渠上に横倒しになって出土。	22-10	004
10	土師器鉢	ＩB2	カマド内	22.2	6.5	17.3	2/3	非ロクロ調整。外面:口縁ヨコナデ、体部～底部手持ちヘラケズリ。体部にカマドの粘土付着。内面：口縁ヨコナデ？、体部ナデ。両面摩滅。	22-11	005
11	土師器甕	ＩA	カマド右脇床面		9		口縁欠	非ロクロ調整。外面：胴部ハケメ。底部ナデ。内面：ハケメ。二次加熱により両面の所々剥落。	22-9	004
12	土師器甕	ＩA	カマド天井崩壊土	20.5	7.4	34.5	3/5	非ロクロ調整。外面:底部木葉痕・胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。胴中央部に炭化物広く付着。胴下部摩滅。内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ。カマド前暗渠上に横倒しになって出土。	22-8	004

第29図　ＳＩ８竪穴住居跡出土遺物(2)－火災時の遺物



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
13	須恵器坏	A3	床面	14.1	9	3.1	完形	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。外面火襷痕、両面重ね焼き痕。21－13－8の順に三枚重ねされ、内面を上にして北東主柱穴南から出土。	23-1	003
14	須恵器坏	A3	床面	13.3	7.2	3.2	完形	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面火襷痕・重ね焼き痕。東周溝脇床面より割れて近くに散乱した状態で出土。	23-3	003
15	須恵器坏	A3	床面	14.2	7.9	4.6	完形	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。外面に火襷痕。北東主柱穴際床面から内面を上にして出土。	23-2	003
16	須恵器坏	A3	カマド天井崩壊土	15.43	9	4.6	完形	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面火襷痕。カマド内天井崩壊土上から内面を上にして出土。	23-4	003
17	須恵器坏	A3	床面	16.6	9.7	4.8	完形	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面を上にして北東部床面から出土。	23-5	003
18	須恵器坏	A3	床面		9.2		破片	外面：底部ヘラ切り？→体下部～底部回転ヘラケズリ。二次加熱を受け、橙色に変色、全体的に摩滅。内面を上にして北東隅・暗渠上の床面から出土。	23-6	003
19	須恵器高台坏	B1	周溝				破片	高台径7.5cm。外面：底部切り離し不明→底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。内面に火襷痕。	23-7	003
20	須恵器高台坏	B1	カマド天井崩壊土	12.4		5.3	3/5	高台径7.5cm。外面：底部ヘラ切り?→体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ、体下部の回転ヘラケズリ消滅。両面のロクロナデは平滑。カマド内天井崩壊土上から内面を上にして出土。	23-9	003
21	須恵器高台坏	B2	床面	16		8	7/8	高台径9.6cm。外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。21－13－8の順に三枚重ねされ、内面を上にして北東主柱穴南から出土。二次加熱を受け、橙色に変色。	23-12	003
22	須恵器蓋	A1d	床面	16.6			2/5	つまみ欠。外面：体部回転ヘラケズリ、火襷痕、重ね焼き痕。	23-11	003

第30図　SI8竪穴住居跡出土遺物(3)－火災時の遺物



番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
23	土師器甕	I A	堆積土４層	1/4	口縁～胴上部破片。口径18.8cm。外面：口縁ヨコナデ、胴部摩滅。内面：摩滅、粘土紐積み上げ痕。		003
24	須恵器坏	A1	堆積土	破片	底部中央破片。外面：底部回転ヘラケズリ→底部に焼成前刻書「×」。		003
25	須恵器坏	A1	堆積土３層	1/4	底部破片。底径8.0cm。外面：底部ヘラ切り。		003
26	須恵器高台坏	AorB2	堆積土３層	>1/2	高台径10.0cm。底部回転糸切り→底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。内面底部中央手擦れ痕。	23-8	003
27	須恵器甕	C	堆積土４層	破片	外面：同心円状叩き目痕。内面：ナデ。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北関東系。	23-15	003
28	須恵器甕	C	堆積土４層	破片	外面：同心円状叩き目痕。内面：無文当て具痕→ナデ。灰白色。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。北関東系。	23-17	003
29	須恵器甕	A	東周溝上	1	胴部～底部破片。底径16.5cm。外面：胴部平行叩き目、胴下部手持ちヘラケズリ、底部ナデ？。内面：胴部カキメ・ハケメ、胴下部ナデ。両面に二次加熱による火はね痕。	23-13	005
30	刀子		堆積土７層	破片	身～茎破片。平造り角棟。棟関・刃関。細一部残存。残存長6.6cm。刃元幅2.4cm。厚さ3mm。茎元幅1.5cm。 長約2.5cm。	37-15	029
31	刀子？		床面	破片	刀子の茎破片か。残存長5.7cm。最大幅1.4cm。厚さ4mm。14の須恵器坏の脇の床面から出土。		029
32	鉄鎌		床面	完形	右利き用の曲刃鎌。無茎で基部折り返し。柄と身の装着角度約100°。全長15.9cm。最大幅3.9cm。厚さ3mm。北西隅の周溝際の床面より出土。	37-22	029
33	磨石		床面	完形	閃緑岩製。饅頭形。長さ9.4cm。幅8.1cm。厚さ4.3cm。ほぼ全面研磨。		033
34	有段丸瓦		堆積土３層	破片	玉縁部欠損。凸面：叩き目→ロクロナデ→ヘラケズリ。凹面：布目。側面：ヘラケズリ。瓦円筒を二分割した後に玉縁先端から玉縁基部両側端にかけて斜めに切り落とす。暗灰色。胎土に径1mmの砂・ガラス・長石粒・黒色粒、径2～4mmの岩片を含む。焼成比較的良い。	36-5	027

第31図　ＳＩ８竪穴住居跡出土遺物(4)－火災時と火災後の遺物

竪穴住居焼失後に竪穴住居跡内に流入した遺物は比較的少なく、堆積土７層から土師器甕、須恵器坏、刀子（30）破片、堆積土６層から土師器甕、須恵器坏・甕破片、堆積土４層から土師器甕（23）、須恵器坏・鉢・甕（27・28）・壺破片、堆積土３層から土師器坏・甕、須恵器坏（25）・高台坏（26）・蓋・甕、有段丸瓦（34）破片、堆積土２層から土師器甕、須恵器坏・甕、堆積土１層から土師器甕、須恵器坏・甕破片が少数出土した。

【ＳＩ７竪穴住居跡】（平面図：第25図、断面図：第26図、遺物：第32図）

〔位置〕調査区北半西際、丘陵尾根上の標高38m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ８竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。ＳＩ46竪穴住居跡とも重複するか近接するとみられ、これとは同時には存在しえない。また新しい溝２条に一部壊され、北部も削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で3.6m以上、東西が4.7m以上ある。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは残りのよい西辺で約20cmある。

〔床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、平坦である。床面レベルはＳＩ８竪穴住居跡よりも約65cm高い位置にある。

〔カマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、南辺中央から東寄りに付設されている。新しいＳＩ８竪穴住居跡の構築に伴ってカマドの天井部・側壁が大きく壊されており、左側壁の一部、燃焼部奥壁、煙道、燃焼部掘方が残されているものの、残りが悪い。

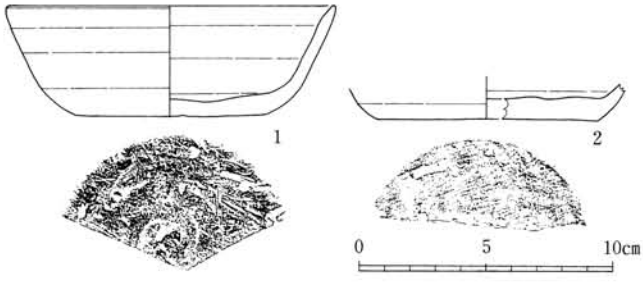
左側壁は地山黄褐色粘質土を用いて構築されており、右側壁には芯材に用いられた粘板岩板状礫片１点（長さ35cm、幅15cm、厚さ５cm）が残る。右側壁の芯材の位置と左側壁からみて、カマド側壁外面の幅は1.1～1.2m程であったとみられる。燃焼部奥壁は高さ10cmあり、竪穴住居外に向けて幅25cmの煙道が長さ約1.1m延びる。煙道は上部が削平され、深さ8cm程残存する。煙出しピットは削平されて残っていない。

燃焼部の下は深さ10cmの土壙状の掘方がある。燃焼部掘方の上部には扁平な粘板岩板状礫片１点（長さ62cm、幅24cm、厚さ5cm）が据えられ、その上を整地して燃焼部としている。

〔土壙〕カマド右側の南辺際に長さ95cm、幅70cm、深さ12cmの土壙が１基あり、焼土・炭片を多量に含む暗赤褐色土で人為的に埋め戻されている。

〔その他〕周溝、主柱穴、壁柱穴は認められない。

〔堆積土〕新しいＳＩ８竪穴住居跡の構築に伴って、人為的に埋められている。



番号	種　類	分類	層　位	特　　徴	写真	収納
1	須恵器坏	A1	貯蔵穴	底部：ヘラ切り。口径13.0、底径7.4、器高4.4cm。	22-6	002
2	須恵器坏	A4	貯蔵穴	底部：手持ちヘラケズリ。底径8.6cm。		002

第32図　ＳＩ７竪穴住居跡出土遺物

〔出土遺物〕土壙から土師器甕、須恵器坏（1・2）、煙道から土師器甕、埋土から土師器甕の破片が少数出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、須恵器坏には底部の切り離しがヘラ切りのもの（1）と底部切り離し後に底部を手持ちヘラケズリしたもの（2）とがある。

【ＳＩ46竪穴住居跡】（平面図：第25図、断面図：第26図）

〔位置〕調査区北半西際、丘陵尾根上の標高37.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ８竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。ＳＩ７竪穴住居跡とも重複するか近接するとみられ、これとは同時には存在しえない。北半～東半部は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.3m以上、東西が南辺で2.3m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約32°偏る。

〔壁〕上部が大きく削平され、残りが悪く、検出面から床面までの高さは比較的残りのよい南西部でも12cmしかない。

〔床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、平坦である。床面レベルはＳＩ８竪穴住居跡よりも約40cm高い位置にある。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの有無、位置は不明である。

〔周溝〕幅約20cm、深さ約５cmで、西辺・南辺で検出した。北辺・東辺は床面下まで大きく削平されていたため、検出できなかった。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土から摩滅した土師器甕体部破片が少数出土した。

【ＳＩ43竪穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第35図、遺物：第33図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ40・41竪穴住居跡と重複し、これらよりも古い。ＳＩ９竪穴住居跡と重複するか近接するとみられ、これと同時には存在しえない。南半部と東部は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.2m以上、東西が北辺で3.0m以上である。

〔方向〕北辺でみると西辺は北で東に約18°偏るとみられる。

〔壁〕検出面から床面までの高さは残りのよい北西部で40cmある。

〔床面〕地山面（粘板岩）を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルは新しいＳＩ40Ａ竪穴住居跡よりも約50cm高い位置にある。また、新しいＳＩ41竪穴住居跡よりも約20cm高い位置にある。近接して同時には存在しえないＳＩ９竪穴住居跡よりも約80cm低い位置にある。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕北辺・西辺で検出し、幅15～20cm、深さ約5cmである。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土１層から土師器坏（1・2）・甕、平瓦（3）の破片が少数出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整のものである。そして、土師器坏には平底のもの（1）、平底気味の

もの（２）とがあり、いずれも体部～低部を手持ちヘラケズリされている。平瓦（３）は桃生城跡出土のものと同様である。

【ＳＩ41竪穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第33図、遺物：第33図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ40竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、ＳＩ43竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。東半部・南半部は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.0m以上、東西が北辺で2.7m以上である。

〔方向〕北辺でみると西辺は北で東に約９°偏るとみられる。

〔壁〕検出面から床面までの高さは比較的残りのよい北西部で33cmある。

〔床面〕地山面（粘板岩）を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルは新しいＳＩ40Ａ竪穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。また、古いＳＩ43竪穴住居跡よりも約20cm低い位置にある。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕北辺・西辺で検出し、幅15～20cm、深さ約10cmである。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土１層から土師器坏（４）・甕、須恵器坏（５）・高坏（６）の破片少数と刀子破片（７）１点が出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器坏（４）は平底気味のものである。須恵器坏（５）は体下部～底部を回転ヘラケズリし、内面底部に「善」？と墨書されている。

【ＳＩ９竪穴住居跡】（平面図：第34図、断面図：第35図、遺物：第33図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ40竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、ＳＩ43竪穴住居跡と重複するか近接するとみられ、これと同時には存在しえない。東半部は新しいＳＩ40竪穴住居跡、ＳＸ５平場に伴う造成によって床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で3.9m、東西が北辺で1.8m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る。

〔床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、平坦である。床面レベルは新しいＳＩ40Ａ竪穴住居跡よりも約1.3m高い位置にある。また、近接するＳＩ43竪穴住居跡よりも約80cm高い位置にある。

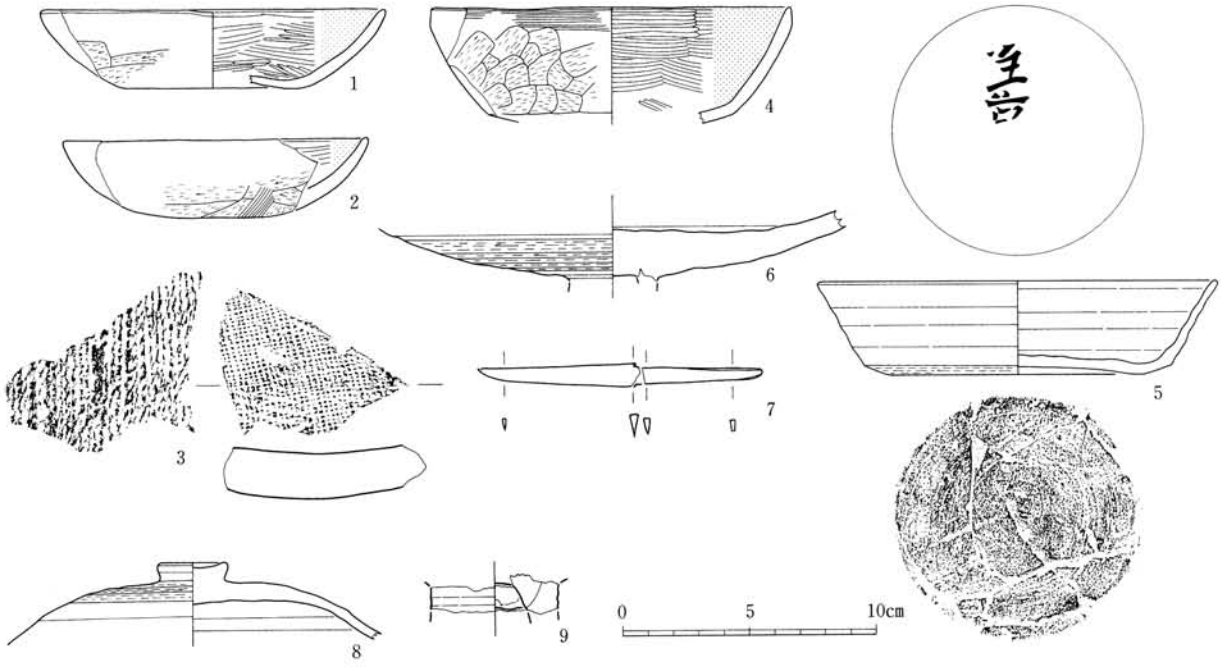
〔壁〕上部が大きく削平され、残りが悪く、検出面から床面までの高さは比較的残りのよい北西部でも17cmしかない。

〔周溝〕北辺・南辺の一部と西辺で幅20～30cm、深さ約5cmの周溝を検出した。周溝内には堆積土２層が堆積し、竪穴住居の機能時にはオープンであったことがわかる。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕北西部の対角線上の位置で主柱穴とみられる柱穴を焼土の下面から検出した。

〔壁柱穴〕北辺・西辺・南辺の周溝内や壁際に壁柱穴とみられる小ピット４を検出した。



番号	種類	分類	住居	層位	残存	特徴	写真	収納
1	土師器坏	I B2	SI43	埋土1層	1/4	口径13.6cm。底径6.7cm。器高3.1cm。非ロクロ調整。平底。外面：体下部手持ちヘラケズリ・摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	33-10	022
2	土師器坏	I A2	SI43	埋土1層	1/4	口径12.0cm。器高3.1cm。非ロクロ調整。平底気味。外面：体下部手持ちヘラケズリ・摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	33-11	022
3	平瓦		SI43	埋土1層	破片	一枚作り。凸面：縦縄叩き目。凹面：布目。淡灰色。焼成あまい。『桃生城跡』分類の平瓦1類に相当。		027
4	土師器坏	I B2?	SI41	埋土1層	1/4	口径14.2cm。器高9.6cm。非ロクロ調整。平底気味。外面：口縁ヨコナデ、体部手持ちヘラケズリ・摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	33-14	022
5	須恵器坏	A3	SI41	埋土1層	2/3	口径15.8cm。底径9.7cm。器高3.7cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面：底部に墨書「善」か。両面：火襷痕。焼成不良。	33-12 35-21	022
6	須恵器高坏	A	SI41	埋土1層	破片	口縁・高台欠損。坏部外面：体下部回転ヘラケズリ→沈線状刻み→高台接合。	33-13	022
7	刀子		SI41	周溝		同一・非接合の身部破片と茎破片。平造り角棟。棟関・刃関。身部長5.1cm。刃幅9mm。厚さ3mm。		031
8	須恵器蓋	A1d	SI9	堆積土1層	破片	つまみ～体部破片。口縁欠。つまみ径2.8cm。外面：体部回転ヘラケズリ。内面：火襷痕。	23-19	002
9	須恵器高坏	A	SI9	検出面	破片	脚部破片。外面：ロクロナデ。内面：指オサエ、ナデ。坏部との接合面に沈線。	23-18	002

第33図　ＳＩ９・41・43竪穴住居跡出土遺物

〔堆積土〕２層に分かれ、堆積土２層には焼土粒・炭片を多く含む。いずれも本竪穴住居の火災後に自然堆積したものである。火災した竪穴住居跡であるが、床面には炭化材はほとんど残っていなかった。

〔出土遺物〕主柱穴から土師器甕、須恵器坏・甕、周溝から土師器甕、堆積土から土師器甕、須恵器坏・蓋（８）・甕、検出面から須恵器高坏（９）の破片が少数出土した。これらのうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、須恵器蓋（８）は体部が回転ヘラケズリされている。

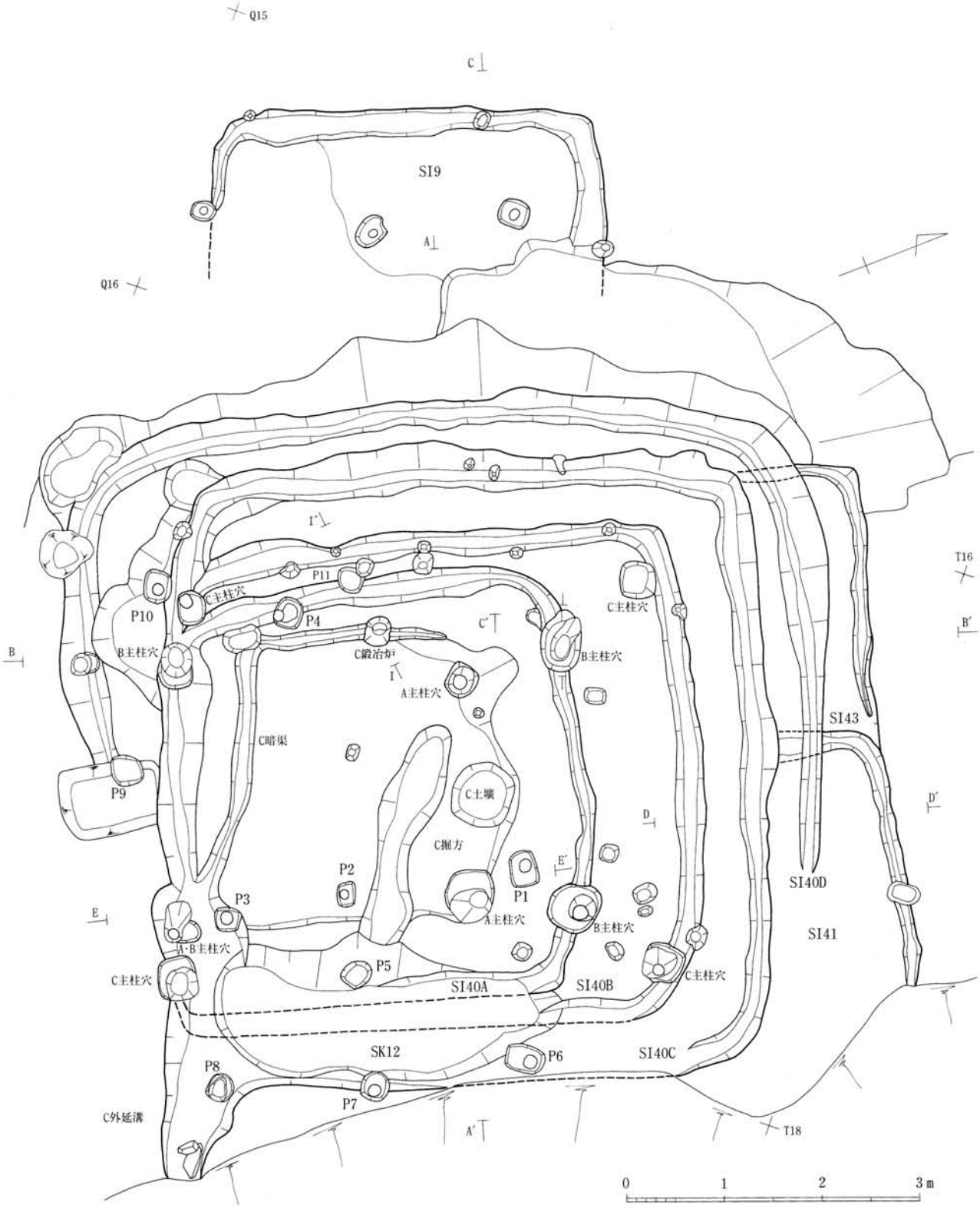
【ＳＩ40竪穴住居跡】（平面図：第34・36・37・39・41図、断面図：第35～37・39図、遺物：第36・38・40・42・43図、図版18）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

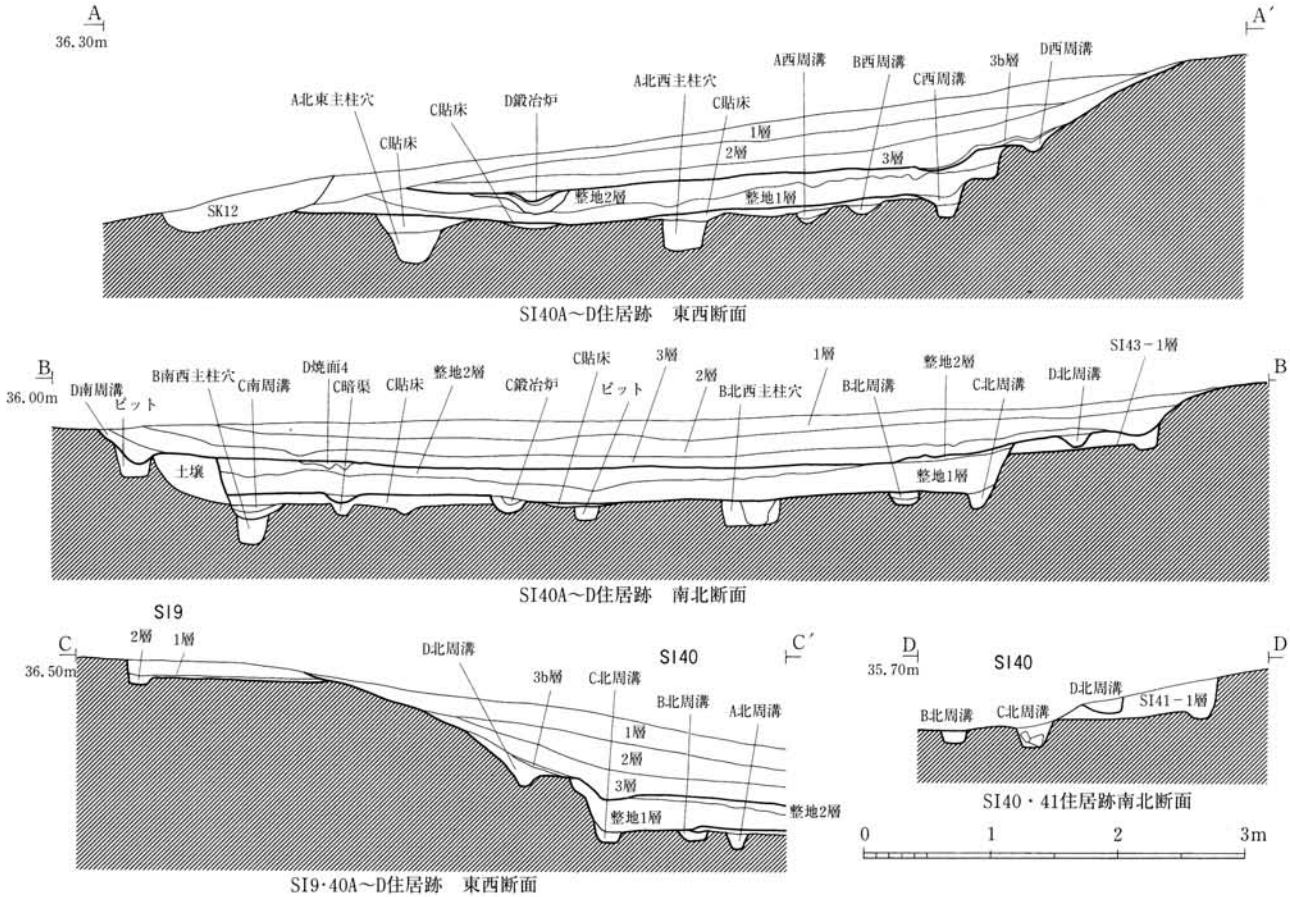
〔重複〕ＳＩ43・41・９竪穴住居跡と重複し、これらよりも新しい。また、ＳＩ40竪穴住居跡は３回拡張されており、ＳＩ40Ａ竪穴住居跡→ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡→ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡→ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡と変遷している。ＳＩ40Ａ竪穴住居跡→ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡→ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡への変遷は、床面レベルを変えずに、南辺・東辺をほぼ一致させ、斜面上側にあたる西辺・北辺を拡張させ

たものである。また、ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡はＳＩ40Ｃ竪穴住居跡を20～30cm嵩上げ整地し、斜面上側にあたる西辺・北辺を拡張させている。ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡はＳＫ12土壙と重複し、これよりも古い。

《ＳＩ40Ａ竪穴住居跡》（平面図：第34・36図、断面図：第35・36図、遺物：第36図）



第34図　ＳＩ40Ａ～Ｄ・９・41・43竪穴住居跡平面図（１/60）



住居跡	層　位	特　　徴
SI40A	A主柱穴掘方	褐色(10YR4/6)土。径1～5cmの粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを多く含む。しまりよい。
	A主柱穴柱痕跡	褐色(7.5YR3/4)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを含む。しまり悪い。
	A主柱穴抜取穴	褐色(7.5YR4/3)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを含む。しまり悪い。
	A周溝	下部はにぶい黄褐色(10YR5/4)土、上部は明黄褐色(10YR3/3)土で、いずれも径1～3cmの粘板岩風化礫片、黄褐色土ブロックを多く含む。人為堆積土。
SI40B	B主柱穴掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。地山粒を含む。しまりよい。
	B主柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒・炭片を少量含む。しまり悪い。
	B主柱穴抜取穴	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒・炭片を少量含む。しまり悪い。
	B周溝	褐色(10YR4/4)土。人為堆積土。
SI40C	C貼床	褐色(7.5YR4/4)土。黄褐色(10YR6/6)土ブロック、径1～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりよい。粘性なし。人為堆積土。
	C主柱穴掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1～2cmの地山ブロックを多く含む。しまりあり。粘性なし。
	C主柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒を少量含む。しまり・粘性なし。
	C主柱穴抜取穴	にぶい黄褐色(10YR5/3)土。径1～2cmの地山ブロックを少量含む。しまり・粘性なし。
	C鍛冶炉	壁・炉床は著しく赤色(7.5R4/8)硬化し、その下位は赤褐色に変質硬化。炭片・焼土ブロックを多く含むにぶい赤褐色(5YR4/4)土が炉床上に堆積。
	Cカマド掘方	C西周溝とC暗渠がカマド燃焼部下で合流する。底面に人頭大の粘板岩礫2点を据え、その上に縁辺を整形した45×42×4cmの粘板岩板状礫を敷く。そして径5mm以下の炭片・焼土粒を含む褐色(7.5YR4/3)土で整地している。
	Cカマド構築土	褐色(7.5YR4/4)土。径1～3cmの黄褐色(10YR6/6)土ブロック、粘板岩風化礫小片を多く含む。しまりよい。人為堆積土。
	Cカマド燃焼部	暗赤褐色(2.5R3/6)土。焼土を多量に含む。底面に縁辺を整形した45×42×4cmの粘板岩板状礫を敷く。
	C暗渠	C貼床と一連の土層で整地。上部が窪み、焼土粒・炭片・粘板岩風化礫小片を多く含む黒褐色(7.5YR3/2)土が機能時に自然堆積。
	C周溝	下部はにぶい黄褐色(10YR4/5)土、上部は暗褐色(10YR3/3)土で、いずれも径5mm以下の地山粒・炭片を少量含む。C南周溝のカマド下～カマド西側1.2mは粘板岩礫片を敷き詰めて暗渠としている。SK12に壊されるカマド東も暗渠であった可能性がある。
SI40D	整地1層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片を少量含む。しまりよい。C住居の嵩上げ整地。
	整地2層	黄褐色(10YR5/6)土を主ににぶい黄褐色(10YR4/3)土が不均一に混ざる。しまりよい。C住居の嵩上げ整地で、D住居の床面となる。
	D鍛冶炉	住居内中央に位置する。整地2層を掘り窪めて炉床とする。壁・炉床は著しく赤色(7.5R4/8)硬化し、その下位は赤褐色に変質硬化。炭片・焼土ブロックを多く含むにぶい赤褐色(5YR4/4)土が炉床上に堆積。
	D周溝	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。炭片・焼土粒、径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を少量含む。自然堆積土。
	堆積土1層	暗褐色(7.5YR3/4)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片を少量含む。しまりあまりない。自然堆積土。
	堆積土2層	黒褐色(10YR2/3)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片を少量含む。しまりあまりない。SX1包含層2層に対応。自然堆積土。
	堆積土3層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片を少量含む。SX1包含層4層に対応。自然堆積土。
	堆積土3b層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。炭片・焼土粒を含む。自然堆積土。
SI41	埋土1層	褐色(10YR4/3)土。径1～3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
SI43	埋土1層	褐色(10YR4/4)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
SI9	堆積土1層	暗褐色(7.5YR3/4)土。しまりあまりない。自然堆積土。
	堆積土2層	暗褐色(7.5YR3/3)土。径2cm以下の焼土粒、径5～10mmの炭片を多く、炭化材と径5～10mmの粘板岩風化礫片を少し含む。しまりあまりない。自然堆積土。

第35図　SI40A～D・9・41・43竪穴住居跡断面図（1/60）

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約4.2m、東西が北辺で約4.5mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約12°偏る。丘陵尾根の方向とほぼ一致し、等高線に沿っている。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ40Ｂ竪穴住居跡・ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡と２度拡張されているため、壁の高さはない。

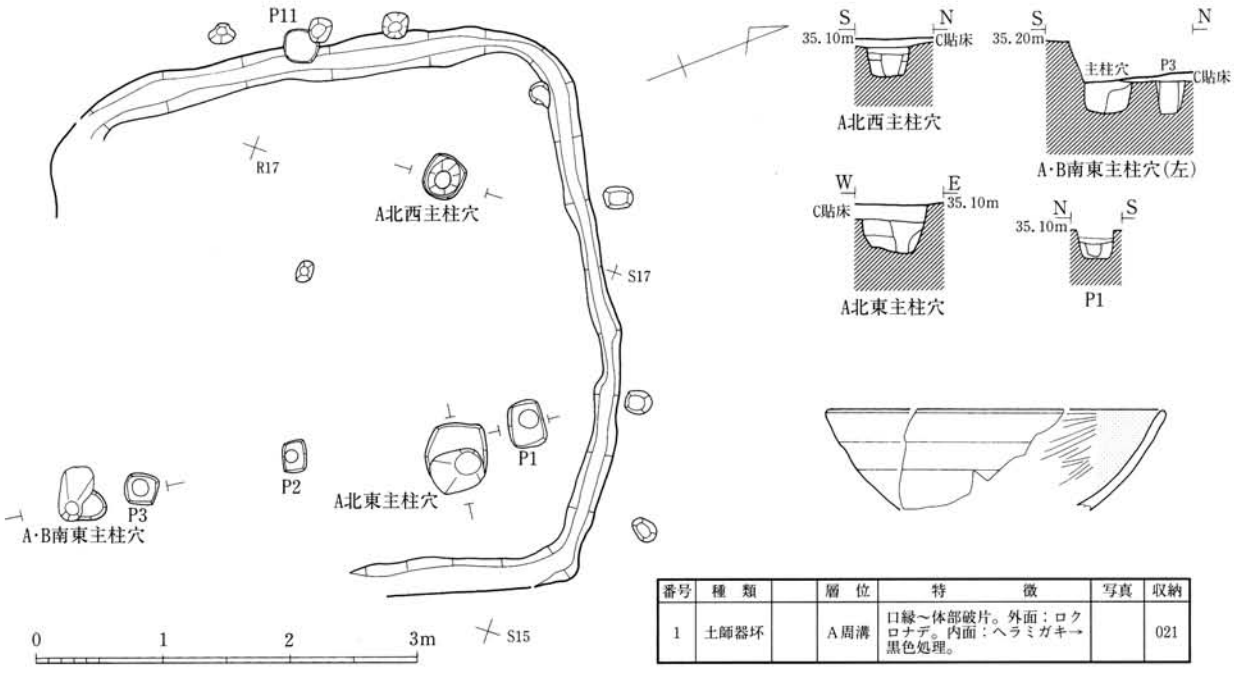
〔Ａ床面〕地山面（粘板岩岩盤とその風化した黄褐色粘質土）を床面とし、ほぼ平坦である。

〔Ａ主柱穴〕ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の貼床の下から、北西・北東主柱穴を検出した。北西・北東主柱穴は、ＳＩ40Ａ竪穴住居跡の対角線上で、北辺から40cm離れた等距離、対称位置にある。掘方は北西主柱穴が長辺36cm、短辺30cmの隅丸長方形で、深さ20cmあり、北東主柱穴が長辺約50cm、短辺約45cmの隅丸長方形で、深さ28cmある。柱はいずれもＳＩ40Ｂ竪穴住居への拡張時に抜き取られており、柱痕跡の大きさは不明である。柱抜取穴も掘方と同様にＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の貼床に覆われている。柱抜取穴の中心でみると、北西主柱穴－北東主柱穴の柱間寸法は2.25mである。

なお、周辺の柱穴の検出状況からみて、Ａ南東・南西主柱穴はＢ南東・南西主柱穴と完全に一致し、南周溝上にあるとみられる。Ｂ南東主柱穴の柱抜取穴の中心でみると、北東主柱穴－南東主柱穴の柱間寸法は約3.2mとみられる。

〔その他の柱穴とピット〕東辺の内側でＰ１～３の３箇所の柱穴、中央付近で１箇所のピット、西辺と北辺の外側でそれぞれ３箇所のピットを検出した。位置関係や人為的に埋められていることなどから、これらはＳＩ40Ａ竪穴住居跡もしくはＳＩ40Ｂ竪穴住居跡に伴うとみられる。

〔Ａカマド〕カマドの位置は不明である。ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡のカマドが南辺東寄りに付設されていること、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡がＳＩ40Ａ・Ｂ竪穴住居跡と床面レベル、南辺の位置を同じくして拡張されおり、南辺の機能が踏襲されていると考えられることから、ＳＩ40Ａ竪穴住居跡のカマドも南辺に付設されていた可能性がある。



番号	種　類		層　位	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏		Ａ周溝	口縁～体部破片。外面：ロクロナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		021

第36図　ＳＩ40Ａ竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

〔A周溝〕西辺・北辺、および東辺の一部で、幅15～30cm、深さ約10cmの周溝を検出した。南辺はＳＩ40Ｂ・Ｃ竪穴住居跡の南周溝と一致するため、幅、深さは不明である。ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕A周溝から土師器坏（1）・甕、須恵器坏・甕の破片、主柱穴柱抜取穴から土師器坏・甕の破片が少数出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。

《ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡》（平面図：第34・37図、断面図：第35・37図、遺物：第38図）

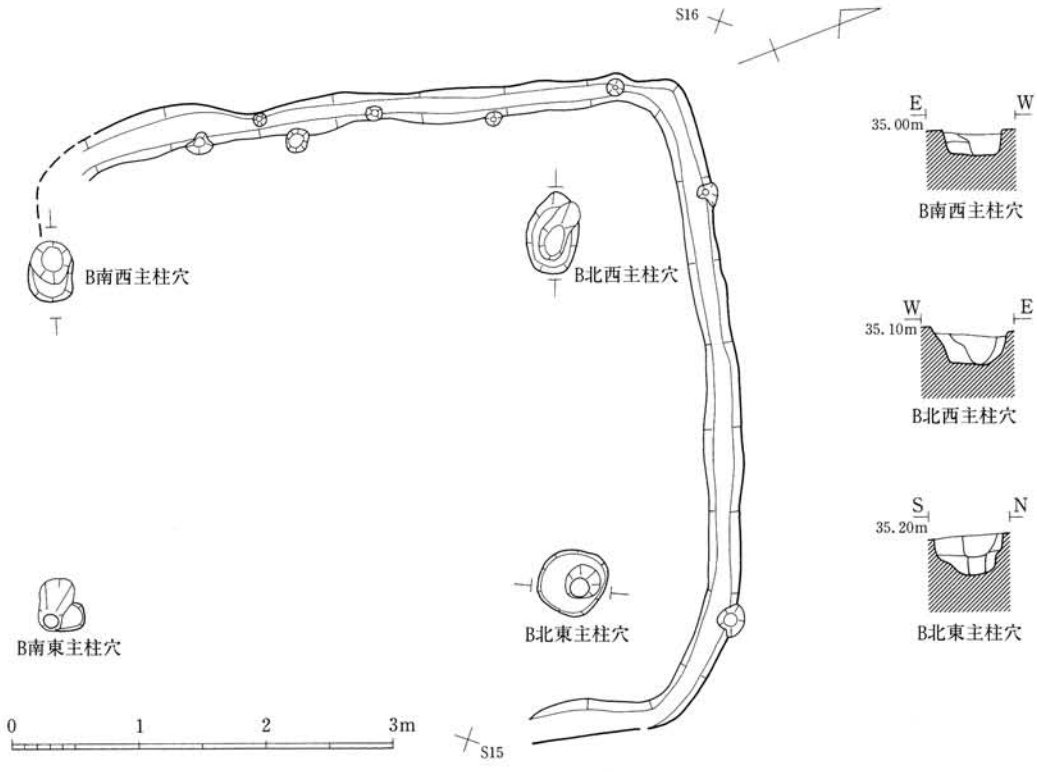
〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約5.3m、東西が北辺で約5.2mである。床面レベルを同じくしてＳＩ40Ａ竪穴住居跡を北に約1.2m、西に約0.4m、東に約0.3m拡張している。

〔方向〕西辺でみると北で東に約15°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ40Ｃ竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔Ｂ床面〕地山面（黄褐色粘質土）を床面とし、ほぼ平坦である。床面レベルはＡ床面と同じである。

〔Ｂ主柱穴〕北西・北東・南西・南東主柱穴４箇所を検出した。北西・北東主柱穴は、ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡の対角線上で、北辺から約1.3m離れた等距離、対称位置にある。また、南西・南東主柱穴は南周溝上にあって、北西・北東主柱穴と線対称の位置にある。南東主柱穴はＳＩ40Ｄ竪穴住居跡のカマド燃焼部掘方に覆われ、その下で検出した。掘方は北西主柱穴が長辺62cm、短辺42cmの楕円形で、深さ23cm、北東主柱穴が径約57cmの円形で、深さ34cm、南西主柱穴が一辺35cmの隅丸正方形で、深さ20cm、南東主柱穴が長辺35cm、短辺約23cmの長方形で、深さ56cmある。



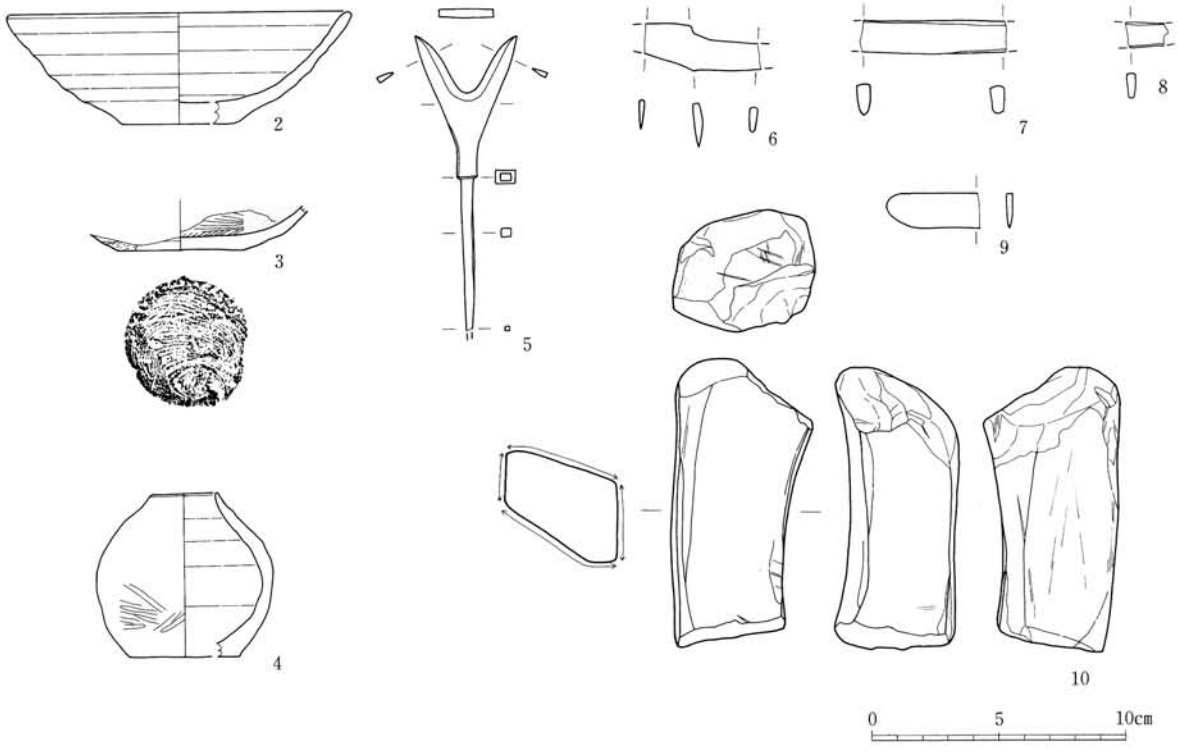
第37図　ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡平面図・断面図（1／60）

柱はいずれもＳＩ40Ｃ竪穴住居への拡張時に抜き取られており、柱痕跡の大きさは不明である。柱抜取穴の中心でみると、北西主柱穴－北東主柱穴の柱間寸法は約2.3m、北東主柱穴－南西主柱穴の柱間寸法は約4.0mである。

〔ピット〕西辺と南辺の際や周溝底面、周溝の縁の８箇所でピットを検出した。位置関係や人為的に埋められていることなどから、これらはＳＩ40Ｂ竪穴住居跡もしくはＳＩ40Ａ竪穴住居跡に伴うとみられる。

〔Ｂカマド〕カマドの位置は不明である。ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡のカマドが南辺東寄りに付設されていること、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡がＳＩ40Ａ・Ｂ竪穴住居跡と床面レベル、南辺の位置を同じくして拡張されおり、南辺の機能が踏襲されていると考えられることから、ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡のカマドも南辺に付設されていた可能性がある。

〔Ｂ周溝〕西辺・北辺、および東辺の一部で、幅25～30cm、深さ10～15cmの周溝を検出した。南辺はＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の南周溝と一致するため、幅、深さは不明である。ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の構築に伴い、人為的に埋められている。



番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
2	須恵系土器坏		B周溝	1/3	口径13.6、底径4.6、器高4.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。にぶい黄橙色。胎土に砂粒含む。	33-1	021
3	土師器坏	ⅡA	B周溝	破片	底径5.0cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→体下部一部手持ちヘラケズリ。内面：やや崩れた放射状ヘラミガキ→黒色処理。		021
4	土師器壺	Ⅱ	B周溝	3/4	口径2.6、底径4.4、器高6.5、最大径6.9cm。ロクロ調整。外面：体部ヘラミガキ・摩滅、底部調整不明。内面：ロクロナデ。	32-18	021
5	鉄鏃		B周溝	完形	雁股式鉄鏃。箆被に両関。現存長11.7cm。鏃身部～箆被部長5.6cm。鏃身幅4.0cm。茎部現存長6.0cm。	37-5	030
6	刀子		B周溝	破片	身部～茎部破片。平造り角棟。棟関・刃関。現存長4.7cm。刃元幅1.8cm。茎元幅1.5cm。棟厚3mm。	37-31	030
7	刀子		B周溝	破片	刀子の茎部破片か。現存長5.8cm。幅1.3cm。棟厚5.5mm。	37-28	030
8	刀子		B周溝	破片	刀子の茎部破片か。現存長1.7cm。幅1.0cm。棟厚4mm。		030
9	刀子		B周溝	破片	身部破片。現存長3.6cm。刃幅1.4cm。棟厚2mm。	37-37	030
10	砥石		B周溝	完形	極細粒砂岩製。直方体状。４面研磨。長さ11.5cm。幅5.4cm。厚さ4.8cm。	39-13	035

第38図　ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡出土遺物

《ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡》（平面図：第34・39図、断面図：第35・39図、遺物：第40図）

〔出土遺物〕Ｂ周溝から須恵系土器坏（２）、土師器坏（３）・小型壷（４）・甕、須恵器鉢・甕の破片、主柱穴掘方から土師器坏・甕の破片、主柱穴柱抜取穴から土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のものである。他にはほぼ完形の雁股式鉄鏃（５）１点、刀子（６～９）破片４点、砥石（10）１点が出土した。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約6.3m、東西が北辺で約6.5mである。床面レベルを同じくしたまま、ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡を北に約0.7m、西に約0.8m、東に約0.6m拡張している。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る。

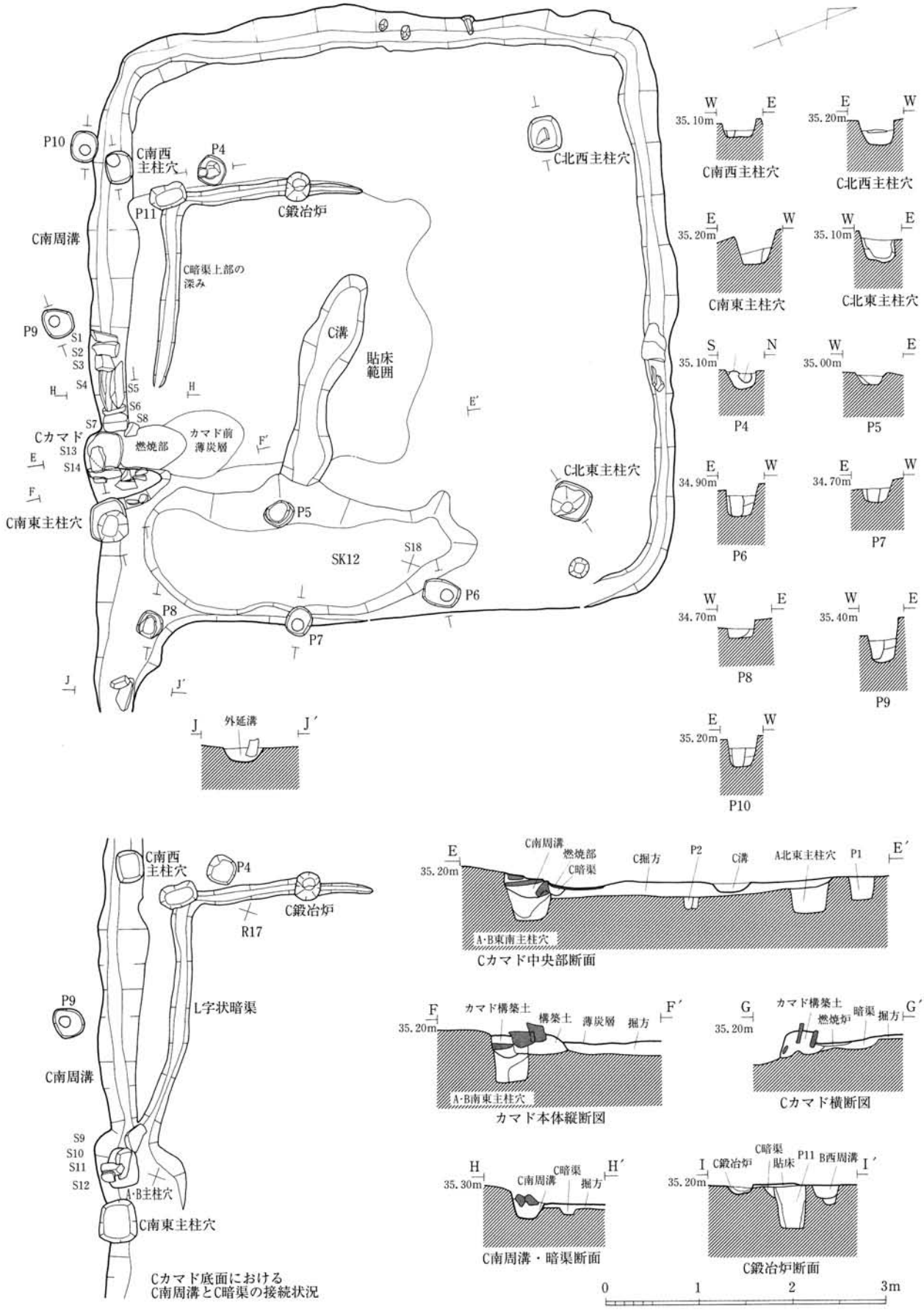
〔壁〕残りのよい西辺と北西隅、南西隅では検出面から床面までの壁の高さは32～38cmあり、約110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。東辺は床面下まで大きく削平され、壁の高さはない。北辺・南辺の東寄りは上部を大きく削平され、北東隅・南東隅に向かうにつれて次第に残りが悪くなる。

〔Ｃ床面〕ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡を拡張する際に、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡床面の大部分（西辺・北辺・東辺に沿った幅20～80cmのコ字状部分を除く）を浅く掘り窪め、そこをさらに貼床して床面としている。それ以外の拡張部分はＳＩ40Ｂ竪穴住居跡床面レベルまで掘削した掘方底面の地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。床面はほぼ平坦である。床面レベルはＡ・Ｂ床面と同じである。

〔Ｃ主柱穴〕北西・北東・南西・南東主柱穴４箇所を検出した。北西・北東主柱穴は、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の対角線上で、北辺から1.2～1.3m離れたほぼ等距離、対称位置にある。また、南西主柱穴は南周溝上、南東主柱穴は南周溝上のカマド左隣にあって、北西・北東主柱穴と線対称の位置にある。掘方は北西主柱穴が長辺40cm、短辺36cmの隅丸長方形で、深さ27cm、北東主柱穴が一辺40cmのほぼ正方形で、深さ35cm、南西主柱穴が長辺35cm、短辺30cmの隅丸長方形で、深さ20cm、南東主柱穴が長辺35cm、短辺23cmの長方形で、深さ40cmある。柱はいずれもＳＩ40Ｄ竪穴住居への拡張時に抜き取られるか切り取られている。柱痕跡はＣ南西主柱穴でみると15cmの円形である。北東主柱穴の柱抜取穴の中心、北西主柱穴の礎盤、南西主柱穴の柱痕跡でみると、北西主柱穴－北東主柱穴の柱間寸法は約4.0m、北西主柱穴－南西主柱穴の柱間寸法は約4.6mである。

〔その他の柱穴〕Ｃ北西主柱穴とＣ南西主柱穴を結ぶ線上の南寄りでＰ４柱穴、Ｃ北東主柱穴とＣ南東主柱穴を結ぶ線上の南寄りでＰ５柱穴、東辺際に沿ってＰ６～８柱穴、南辺の屋外でＰ９・10柱穴、西周溝内と西辺壁際の３箇所で小ピットを検出した。位置関係や埋土、Ｐ４柱穴がＳＩ40Ｄ竪穴住居の嵩上げ整地に覆われることなどから、これらはＳＩ40Ｃ竪穴住居跡に伴うとみられる。Ｐ４～10柱穴の掘方は、長辺30～40cm、短辺25～30cmの隅丸長方形で、深さ12～30cmある。Ｐ６・７・９・10柱穴では径12cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｐ４・５・８柱穴、ピットは柱が抜かれて埋められている。

〔Ｃカマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように南を向いて設けられ、南辺中央から約1.4m東寄りに付設されている。ＳＩ40Ｄ竪穴住居の構築に伴って、カマドの右側壁、天井部は完全に撤去されていたが、左側壁、奥壁、燃焼部、燃焼部下の掘方が残っていた。煙道、煙出しピットは削平されて



第39図　ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

残っていないため、その構造は不明確だが、奥壁が南辺より25cm外側に張り出すため、煙道が外に長く延びるタイプではない可能性が高いと考えられる。

左側壁は粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られている。左側壁は長さ85cm、奥で高さ24cm、中程で芯材に用いられた粘板岩板状礫片の天端まで高さ34cmある。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ12cmある。カマド左側壁の芯材に用いられた粘板岩板状礫片は８点ある。最も大きいものは長さ28cm、幅23cm、厚さ7cm、次いで大きいのは長さ26cm、幅20cm、厚さ4cm、次に大きいものは長さ18cm、幅11cm、厚さ５cmで、これらは縦方向に立てられて芯材とされている。このうち内側を向いた１点は熱を受けてカマド内側が黒く焦げている。

カマド燃焼部の下にはＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の南東主柱穴があり、ＳＩ40Ｃ竪穴住居とそのカマド構築に伴い、柱を抜き取ってその柱抜取穴を埋め戻している。そしてその上に粘板岩の板状礫片や角柱状礫片４点（Ｓ９～12）を敷き、その上に縁辺を剥離によってホームベース形に整形した粘板岩の大型扁平板状礫片１点（Ｓ13)、粘板岩板状礫片１点（Ｓ14）を置き、その上を整地して燃焼部としている。

カマド燃焼部の下、およびＣ南周溝の暗渠に用いられた板状や角柱状の粘板岩礫片は14点あり（Ｓ１～14)、その大きさは以下のとおりである。

No.	長さ	幅	厚さ	No.	長さ	幅	厚さ	No.	長さ	幅	厚さ
Ｓ１	39cm	10cm	5cm	Ｓ５	49cm	13cm	10cm	S10	43cm	15cm	14cm
Ｓ２	33cm	18cm	7cm	Ｓ６	26cm	15cm	6cm	S11	38cm	17cm	6cm
Ｓ３	23cm	22cm	10cm	Ｓ７	30cm	20cm	8cm	S12	22cm	15cm	3cm
Ｓ４	51cm	15cm	12cm	Ｓ８	18cm	12cm	5cm	S13	45cm	42cm	4cm
Ｓ５	49cm	13cm	10cm	Ｓ９	30cm	15cm	13cm	S14	33cm	16cm	5cm

カマド構築の手順は以下のように復元される。

①ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の南東主柱穴の柱を抜き取り、柱抜取穴を埋め戻す。②ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡の床面の大部分を浅く掘り窪め、カマド前にはＬ字状に溝を掘削し、カマド右側壁の下でＣ南周溝と接続させ、埋め戻して暗渠とする（Ｌ字状暗渠)。③カマド燃焼部の下を掘り窪め、奥壁も作り出す。④カマド燃焼部の下からＣ南周溝とＬ字状暗渠の合流点にかけて、板状や角柱状の粘板岩礫片４点（Ｓ９～12）を並べる。⑤Ｓ９～12の上を整地し、その上に扁平で大型の粘板岩板状礫片１点（Ｓ13)、粘板岩板状礫片１点（Ｓ14）を置き、さらにその上を整地して燃焼部とする。⑥燃焼部と接する箇所から長さ1.2mにわたってＣ南周溝を整地し、その上部に角柱状・板状の粘板岩礫片８点（Ｓ１～８）を置いて暗渠とする。⑦燃焼部の両脇に側壁、その上に天井部を築き上げ、カマドを構築する。

〔Ｃ周溝〕西辺・北辺・南辺で幅20～40cm、深さ10～15cmの周溝を検出した。東辺では上部を削平されたり、新しいＳＫ12土壙で壊されていたため一部を検出したにすぎないが、本来は四周を巡っていたとみられる。そして、南周溝と東周溝の合流点から斜面下方に向けて外延溝が延びている。

前述のように、Ｃカマドの燃焼部の下、およびカマド右側約1.2mまでは板状や角柱状の粘板岩礫片12点（Ｓ１～12）を入れて暗渠としている。この他の部分については、人為的に埋められているが、ＳＩ40Ｄ竪穴住居を構築した際に嵩上げ整地しているので、ＳＩ40Ｃ竪穴住居の機能時に暗渠

となっていたのか開渠となっていたのか区別できない。しかし、カマド右側の南周溝が少なくとも長さ約1.2mにわたって暗渠となっていること、周溝の底面に自然堆積した砂薄層が認められなかったことから、この他の部分についても暗渠となっていた可能性が高いと考えられる。

〔L字状暗渠〕カマドの右側、竪穴住居内部の南西部で、南周溝・西周溝と平行し、Cカマド右側壁下で南周溝と合流するL字状暗渠を検出した。西周溝と平行する部分は長さ2.1m、南周溝と平行する部分は長さ2.7mで、いずれも幅は15～20cm、深さは10cmある。西周溝と平行する部分にはC鍛冶炉、L字状に屈曲する箇所にはピット（P11）が設けられている。

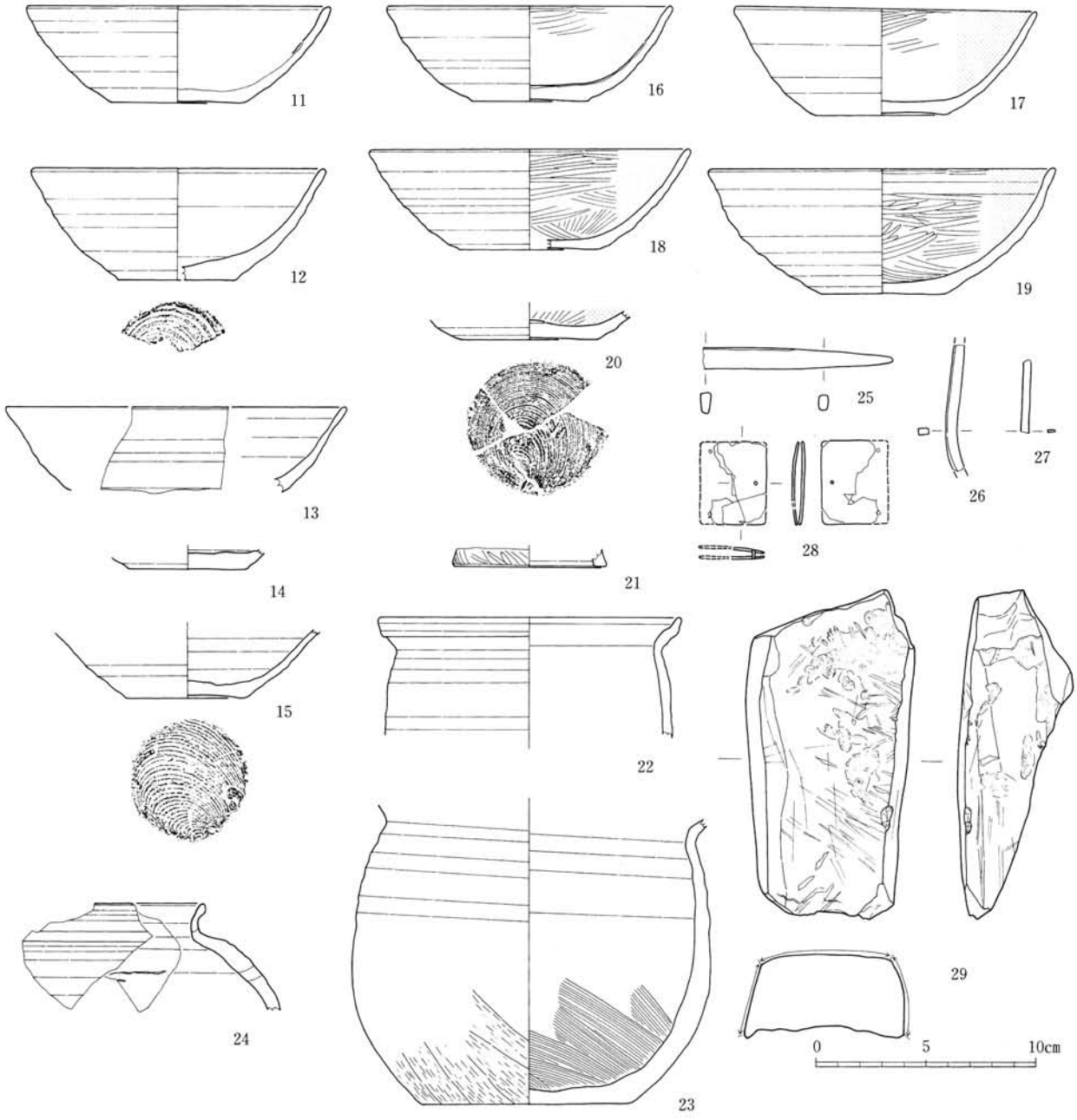
このL字状暗渠はC貼床とともに埋め戻され、SI40C竪穴住居の機能時には暗渠の中心部分がわずかに窪んだ状態で機能していた。窪みは南周溝との合流点と屈曲部までの中間部分が深さ2～3cmと最も深くなっており、この窪んだ箇所に焼土粒・炭片を含む褐色土が堆積していた。C鍛冶炉の操業中に生じた焼土粒・炭片がこの暗渠上面の窪みに流れ込んだか、掃き出されたものとみられる。

〔C溝〕竪穴住居ほぼ中央部から南東隅に斜めに向かう溝が1条ある。新しいSK12土壙に壊されているが、南東隅で外延溝と接続するとみられ、長さ約2.4m検出した。幅は30～60cmと一定しない。深さは5～10cmと浅い。C掘方を貼床してから掘削しており、SI40C竪穴住居の機能時には開渠であったとみられる。C鍛冶炉の東約90cmに隣接し、南東隅に向けて傾斜することから、鍛冶炉の操業と関連すると考えられる。

〔C外延溝〕南周溝と東周溝の合流点から斜面下方に向けて外延溝が延びている。外延溝は南周溝の延長線上にあり、長さ約1.1m検出した。その先は底面よりさらに大きく削平され、残っていない。幅は合流点で1.0mあるが、次第に狭くなって、先では35cmとなる。深さは10～26cmある。粘板岩板状礫片2点が入れ込まれており、人為的に埋め戻されている。

〔C鍛冶炉〕西周溝と平行する部分のL字状暗渠の上に、暗渠を掘り込んでC鍛冶炉が設けられている。長径31cm、短径25cmの楕円形で、深さ10cmある。西側の炉壁はアメーバ状に起伏した熔着滓が分厚く付着している。鞴羽口は検出されなかった。また、C鍛冶炉内部の土壌を水洗洗浄したが、磁着する小土塊・小石が検出されたのみで、鉄滓（流動滓、粒状滓など）や鍛造剥片は検出されなかった。

〔出土遺物〕カマド構築土から須恵系土器坏（13）、土師器坏（19）・高台坏・甕、須恵器坏・甕の破片、C貼床から土師器坏・甕、須恵器坏の破片、床面から土師器坏破片（20）・甕、須恵器甕の破片、Cカマドから銅製帯金具（28）1点、カマド前炭層から土師器坏、須恵器甕の破片、P4柱穴からほぼ完形の須恵系土器坏（11）と土師器甕（23）、C暗渠から土師器高台坏（21）、C周溝から須恵系土器坏（12・14）、土師器坏（16～18）、須恵器短頸壺（24）の破片、刀子？（25）1点、不明鉄製品（26・27）2点、砥石（29）1点、外延溝から須恵系土器坏（15）の破片などが少数出土した。これらのうち土師器はいずれもロクロ調整のもので、土師器坏で底部の切り放しと調整のわかるものはいずれも回転糸切り無調整である（16～20）。須恵系土器坏も回転糸切り無調整である（11・12・14・15）。



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
11	須恵系土器坏		P 4	13.8	6	4.4	1/2	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。白色粒・赤色粒を多く含む。焼成不良。	33-3	021
12	須恵系土器坏		C周溝	13.4	5.4	5.1	1/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。白色粒・長石粒を多く含む。焼成良好。		021
13	須恵系土器坏		カマド構築土	15.5			破片	ロクロ調整。にぶい橙色。白色粒を多く含む。焼成良好。		021
14	須恵系土器坏		C周溝		5.4		3/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。灰白色。細かい白色粒を多く含む。焼成良好。		021
15	須恵系土器坏		外延溝		5.5		1	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。灰白色。細かい砂粒をやや多く含む。焼成良好。	32-21	021
16	土師器坏	ⅡB	C周溝	13	5.4	4.3	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整、重ね焼き痕。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	32-11	021
17	土師器坏	ⅡB	C周溝	13.7	7	4.8	1/2	ロクロ調整。外面：底部摩滅・回転糸切り？。重ね焼き痕。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	32-12	021
18	土師器坏	ⅡB	C周溝	14.6	6.4	4.6	1/5	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	32-13	021
19	土師器坏	ⅡB	カマド構築土	15.8	5.7	5.7	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整、黒斑。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	32-10	021
20	土師器坏	ⅡB	床面		6.2		破片	ロクロ調整。外面:底部回転糸切り無調整、体下部～底部に黒斑。内面:ヘラミガキ→黒色処理。胎土に海綿骨針を含む。		021
21	土師器高台坏	ⅡD	C暗渠				1/4	高台部小破片。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理。内面：ロクロナデ→黒色処理。		021
22	土師器甕	Ⅱ	C周溝	13.8			1/5	口縁部受け口状。ロクロ調整。		021
23	土師器甕	Ⅱ	P 4		9.5		3/5	外面：体部ロクロナデ、胴下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ、胴下部ナデ。	32-17	021
24	須恵器壺	A	C周溝				破片	口頸部～体上部破片。短頸壺。外面：ロクロナデ、体上部に稜。内面：ロクロナデ。	33-8	021
25	刀子？		C周溝				破片	刀子の茎部破片か。現存長8.6cm。幅1.0cm。棟厚5mm。		030
26	不明鉄製品		C周溝				破片	現存長5.9cm。断面5×3mm長方形。		030
27	不明鉄製品		C周溝				破片	現存長3.3cm。断面3.5×1.5mm長方形。		030
28	帯金具		Cカマド					銅製。巡方。長さ3.8cm。幅2.5cm。厚さ5mm。3箇所に鋲穴あり、うち1箇所に鋲足残る。	37-40	030
29	砥石		C周溝					細粒砂岩製。直方体状。長さ15.0cm。幅7.7cm。厚さ5.2cm。	39-14	035

第40図　S I 40C竪穴住居跡出土遺物

《ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡》（平面図：第34・41図、断面図：第35図、遺物：第42・43図）

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で約7.8m、東西が北辺で4.8m以上である。ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡を20～30cm嵩上げ整地し、さらに北に約0.7m、西に約0.6m拡張している。東へも拡張していると考えられるが、削平されて不明確である。

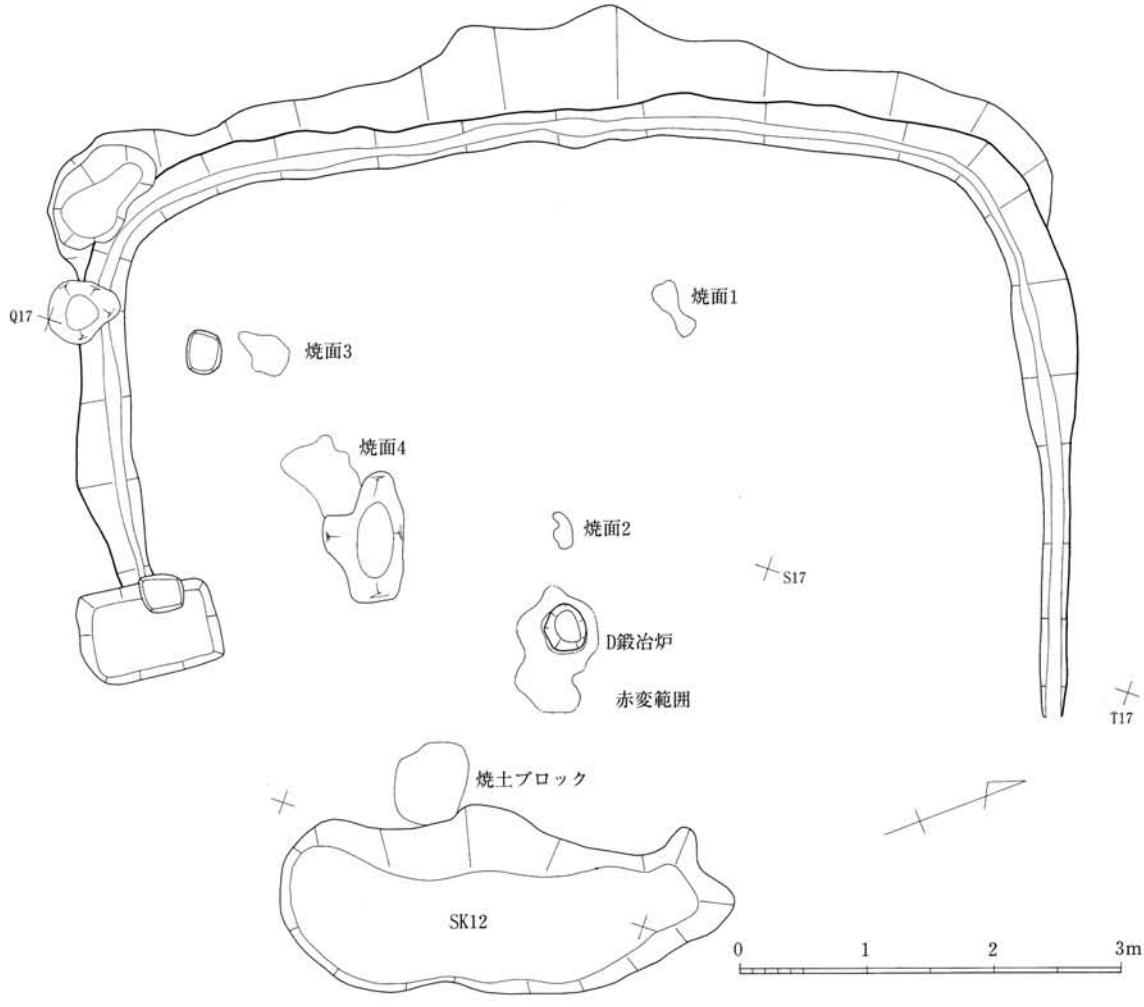
〔方向〕西辺でみると北で東に約17°偏る。

〔壁〕残りのよい西辺では検出面から床面までの高さは70～80cmあり、25～30°の傾斜で斜めに立ち上がる。東半部は床面下まで大きく削平され、壁は残っていない。

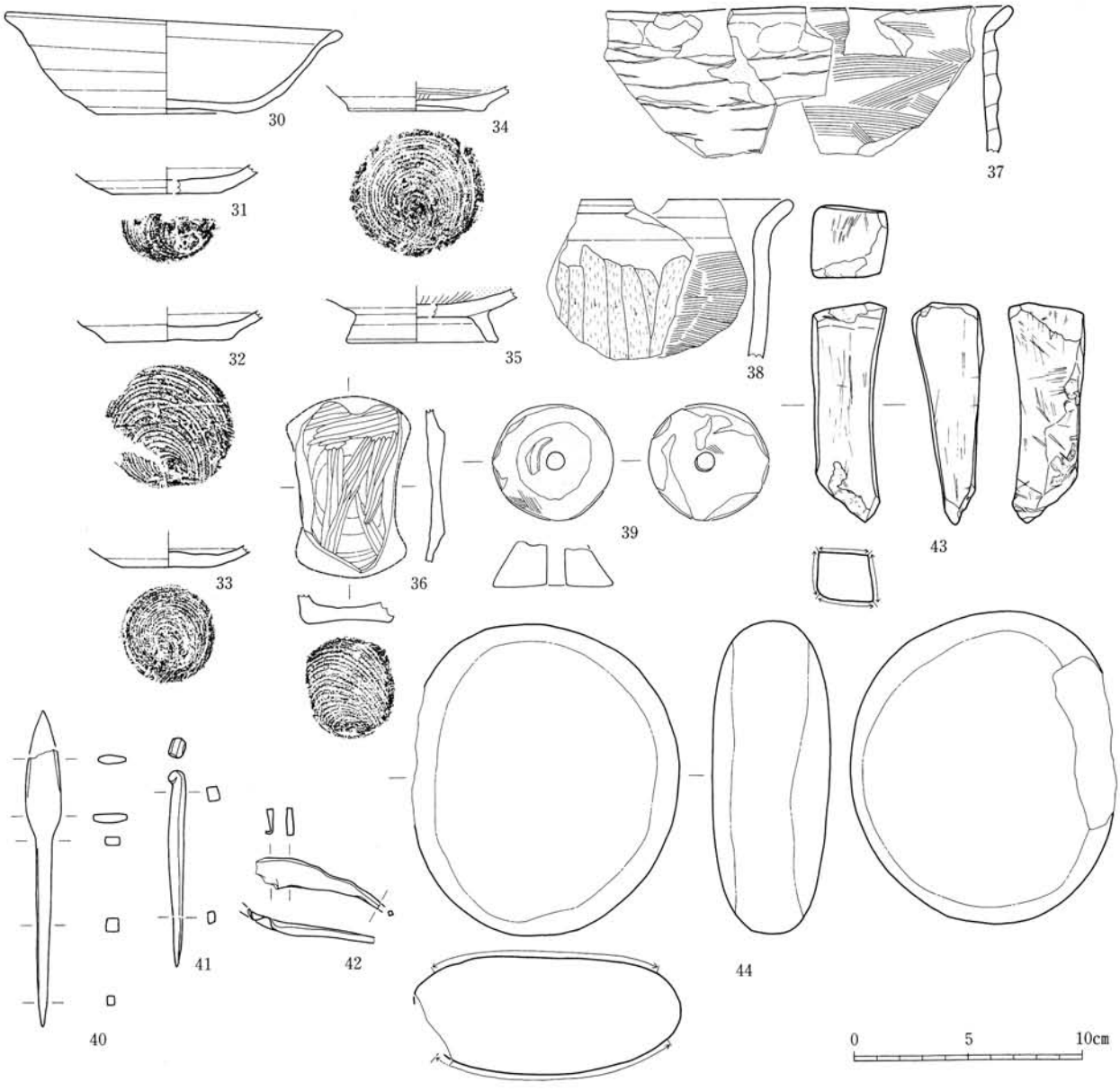
〔Ｄ床面〕ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡を20～30cm嵩上げ整地し、西辺を約1.2m斜面上側に、北辺を約60cm斜面上側に拡張させている。Ｄ西周溝の底面は床面中央部より約30cm高い位置にあり、埋め戻したＣ西周溝の上もＣ西周溝を反映して窪んでいる（第34図断面Ａ－Ａ'、Ｃ－Ｃ'）。Ｄ北周溝の底面も床面中央部より約15cm高い位置にあり、Ｄ南周溝の底面も３cm高い位置にある（第34図断面Ｂ－Ｂ'）。このように、Ｄ床面は中央部が窪み、各辺の縁辺に近づくにつれてレベルが高くなっており、全体としてみれば断面が浅い擂り鉢状になっている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。



第41図　ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡平面図

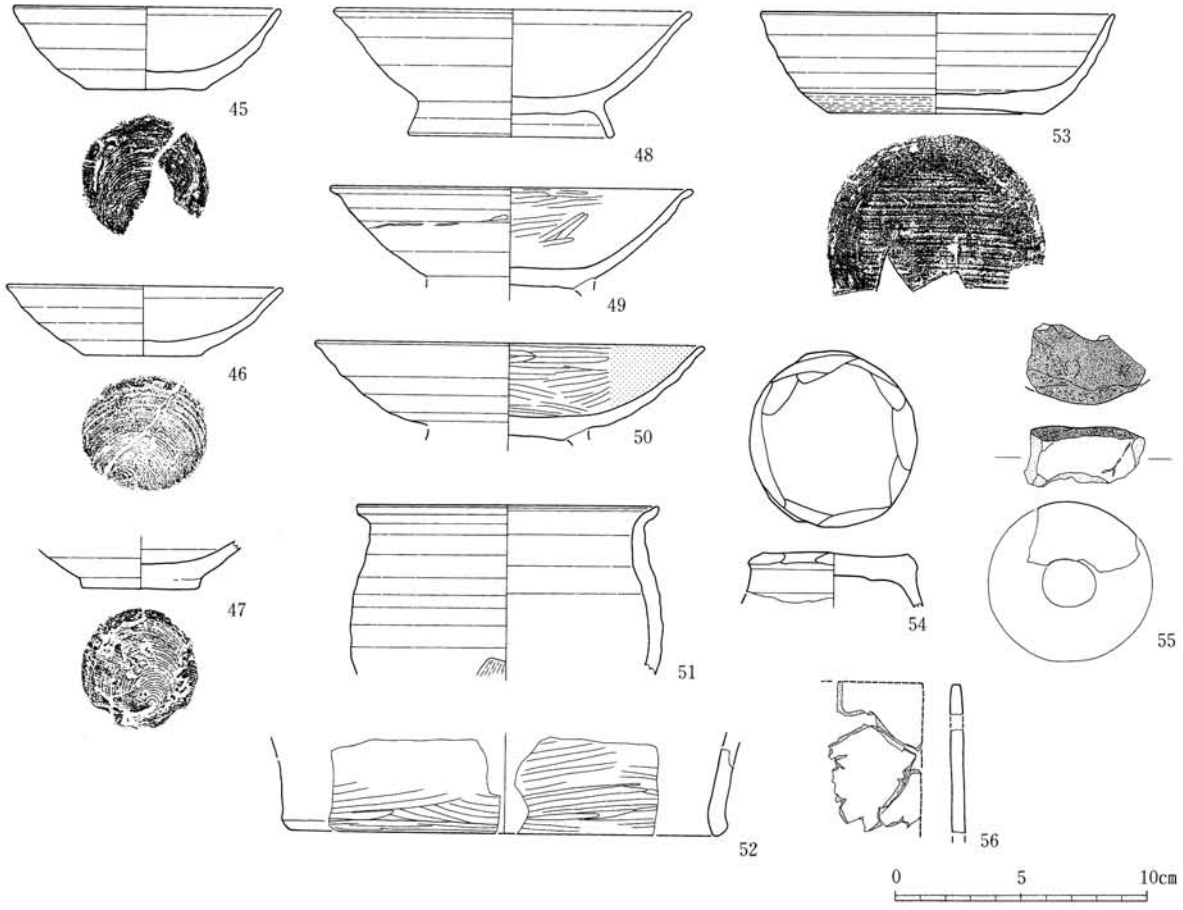


番号	器　種	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
30	須恵系土器坏		D整地	1/2	口径13.8、底径6.0、器高4.1cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。砂粒を含む。焼成不良。	33-4	021
31	須恵系土器坏		D整地	破片	底径5.0cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。黄褐色。白色粒を多く含む。焼成不良。		021
32	須恵系土器坏		D整地	破片	底径5.5cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。灰褐色。白色粒を多く含む。焼成良好。		021
33	須恵系土器小型坏		D整地	破片	底径4.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。砂粒・ガラスを多く含む。焼成不良。		021
34	土師器坏	ⅡB	D整地	破片	底径6.0cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		021
35	土師器高台坏	Ⅱ	D整地	破片	高台径7.2cm。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→底部切り離し不明→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		021
36	土師器耳皿	ⅡB	D整地	破片	口縁欠。無高台。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→底部回転糸切り無調整→口縁折り曲げ→燻し焼成。内面：ロクロナデ→ロクロナデを一部残した雑なヘラミガキ→燻し焼成。	32-19	021
37	製塩土器		D整地	破片	口縁部破片。非ロクロ調整。外面：粘土紐積み上げ痕→指オサエ。内面：ナデ。黄褐色。径2～5mmの砂粒を含む。焼成良好。	33-9	026
38	土師器鉢?	Ⅱ?	D整地	破片	口縁部破片。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→体部手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ→体部ナデ。		021
39	土製紡錘車		D整地	完形	土製。土師質。裁頭円錐形。断面薄台形。頂部・底面剥落。ナデ。頂部は沈線状に窪む。広径5.3cm。狭径約3.1cm。現存厚2.0cm。軸孔径0.8cm。重量45ｇ。焼成良好。側面・下面に黒斑。胎土に微細な長石粒・ガラス粒・砂粒を多く含む。	36-11	026
40	鉄鏃		D整地	破片	長頸柳葉式。鏃身の先端欠損。鏃身断面は両丸造。頸部は箆被による茎を作らない。現存長12.2cm。鏃身幅1.6cm。頸部断面6×5mm方形。	37-8	030
41	鉄釘		D整地	完形	頭部8×3mm長方形。長さ8.7cm。断面6×5mm長方形。	37-25	030
42	刀子		D整地	破片	身部～茎部破片。無関。現存長5.7cm。幅1.4cm。棟厚3mm。		030
43	砥石		D整地	完形	極細粒砂岩製。直方体状。4面研磨・擦痕。長さ4.7cm。幅3.3cm。厚さ3.0cm。	38-6	035
44	磨石		D整地	完形	安山岩製。扁平な饅頭形。長さ13.7cm。表裏両面を全体に研磨。幅11.7cm。厚さ5.3cm。		035

第42図　ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡出土遺物(1)－構築時の遺物

〔D周溝〕西辺・北辺・南辺で幅25～50cm、深さ５～12cmの周溝を検出した。東半部は床面下まで大きく削平され、新しいＳＫ12土壙に壊され、周溝は残っていない。ＳＩ40Ａ～Ｃ竪穴住居跡でそれぞれ東周溝の一部を検出しているため、最終的に拡張されたＳＩ40Ｄ竪穴住居跡にも東周溝があったと考えられる。周溝は自然堆積しており、ＳＩ40Ｄ竪穴住居の機能時には周溝は開渠であったとみられる。

〔D鍛冶炉〕D床面の中央やや東寄りで鍛冶炉１基を検出した。このD鍛冶炉は長径37cm、短径32cmの不整楕円形で、深さは８cmと浅い。炉壁は２～３cmの厚さで全体が著しく赤色硬化していた。炉の周囲の床面も長径100cm、短径65cmの不整瓢箪形に熱を受けて赤褐色に変化しており、D鍛冶



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　徴	写真	収納
45	須恵系土器小型坏		堆積土３層	10.6	5.0	3.3	1/2	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。微細な砂粒を少量含む。	32-22	021
46	須恵系土器小型坏		堆積土３層	10.9	4.7	2.8	4/5	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。砂粒をほとんど含まない。	33-2	021
47	須恵系土器坏		堆積土３層		4.7		破片	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。底部の中位に回転糸切り痕があり、底部円柱作りを示す。にぶい橙色。砂粒をほとんど含まない。		021
48	須恵系土器高台坏	A	堆積土３層	14.2		5.1	1/3	外面：粘土紐積み上げ痕→ロクロナデ→底部切り離し不明→付高台→ロクロナデ。内面：平滑なロクロナデ。	33-5	021
49	土師器高台坏	ⅡB	堆積土１層	14.4			2/3	高台欠。外面：ロクロナデ、底部回転糸切り→付高台。内面：ロクロナデ→ヘラミガキ。	32-20	021
50	土師器高台坏	ⅡB	堆積土１層	15.5			1/2	高台欠。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→底部回転糸切り→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	32-14	021
51	土師器甕	Ⅱ	堆積土３層	12.0			1/6	口縁部受け口状。外面：ロクロナデ→胴下部手持ちヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	32-15	021
52	土師器甑		堆積土２層		16.6		破片	外面：ロクロナデ→ヘラミガキ→煤付着。内面：ヘラミガキ。	32-16	021
53	須恵器坏	A3	堆積土３層	14.1	8.5	4.0	1/2	外面：底部静止糸切→体下部～底部外周回転ヘラケズリ。火襷痕。内面中央に手擦れ痕。	33-7	021
54	円板状土製品		堆積土３層					須恵系土器高台坏の口縁～体下部を高台に沿って円形に打ち欠き、転用。径6.8cm。	33-6	021
55	鞴羽口		堆積土２層				破片	先端部破片。先端部に熔着滓付着。残存長2.4cm。先端部外径6.4cm。先端部内径2.1cm。		028
56	不明鉄製品		堆積土２層				破片	板状。現存長5.9cm。現存幅3.7cm。厚さ5mm。	38-26	030

第43図　ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡出土遺物(2)－廃絶後の遺物

炉の下も8cm程の厚さで赤褐色に変化していた。鞴羽口は検出されなかった。また、D鍛冶炉内部の土壌を水洗洗浄したが、磁着する小土塊・小石が検出されたのみで、鉄滓（流動滓、粒状滓など）や鍛造剥片は検出されなかった。

〔焼面〕D床面の西半部で焼面1～4の4箇所の焼面を検出した。いずれも不整形で、焼面1は長径47cm、短径23cm、焼面2は長径30cm、短径15cm、焼面3は長径45cm、短径32cm、焼面4は長径70cm以上、短径45cmある。また、D鍛冶炉の南約1.0mの床面上には長径1.5m、短径1.1mの不整形の範囲に焼土が堆積していた。

〔堆積土〕竪穴住居跡廃絶後に自然堆積している。

〔出土遺物〕ＳＩ40D竪穴住居跡構築時の遺物には、須恵系土器坏（30～33）、ロクロ調整の土師器坏（34）・高台坏（35）・耳皿（36）・甕（38）、製塩土器（37）、須恵器坏・高台坏・高坏・蓋・甕などの破片がやや多くと、土製紡錘車（39）、鉄鏃（40）、鉄釘（41）、刀子（42）、砥石（43）、磨石（44）各1点がある。また、廃絶以降の遺物には、須恵系土器小型坏（45・46）・坏（47）・高台坏（48・49）、ロクロ調整の土師器坏・高台坏（50）・甕（51）・甑（52）、非ロクロ調整の土師器甕、製塩土器、須恵器坏（53）・高台坏・甕・壷などの破片がやや多くと、円板状土製品（54）、鞴羽口破片（55）、不明板状鉄製品（56）各1点、鉄滓3点がある。

【ＳＩ17竪穴住居跡】（平面図・断面図：第44図、遺物：第45図、図版9－1）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ19竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は西辺（長辺）が約4.5m、北辺（短辺）が約3.3mである。

〔方向〕西辺（長辺）でみると北で西に約42°偏る。

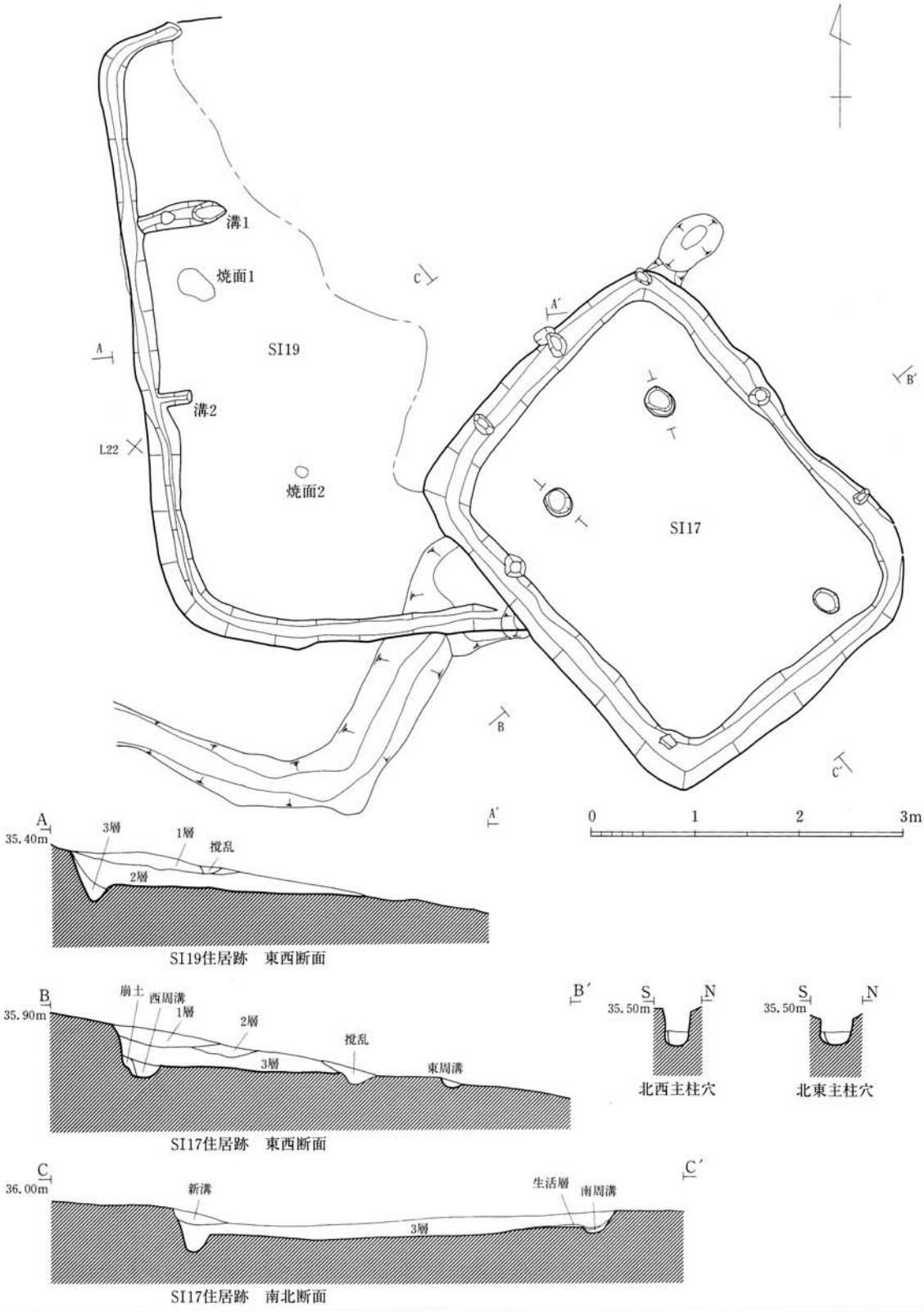
〔壁〕比較的残りのよい丘陵斜面上側にあたる西辺（長辺）・北辺（短辺）でも、検出面から床面までの高さは30～40cmしかない。丘陵斜面下側にあたる東辺（長辺）では床面下まで削平され、残っていない。

〔床面〕床面は平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面とする。

〔周溝〕各辺を幅30～40cm、深さ約10cmの周溝が巡る。周溝内は自然堆積土である。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。丘陵斜面下側にあたる東辺（長辺）では床面下まで削平されていることから、この辺に付設されていた可能性がある。

〔主柱穴〕北西・北東・南東の3箇所の主柱穴を検出した。北西主柱穴は北辺（短辺）から約1.2m、西辺（長辺）から約1.0m離れ、北東主柱穴は北辺（短辺）から約1.2m、東辺（長辺）から約0.9m離れており、竪穴住居跡の対角線上にある。また、南東主柱穴は南辺（短辺）から約0.5m、東辺（長辺）から約1.0m離れ、竪穴住居跡の対角線上にはなく、北西・北東主柱穴よりも短辺寄りに位置している。南西主柱穴はなかった。主柱穴は平面形が長径30cm程、短径25cm程の楕円形で、深さは北西主柱穴で45cm、北東主柱穴で25cm、南東主柱穴で10cmある。柱はいずれも抜き取られている。柱抜取穴の中心でみると、柱間寸法は北西主柱穴－北東主柱穴間が約1.4m、北東主柱穴－南



住居跡	層　位	特　　徴
SI17	周溝	褐色(7.5YR4/3)土。径1～3cmの粘板岩風化礫片を含む。自然堆積土。西周溝では壁際が崩落。
	堆積土1層	褐色(7.5YR4/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片を少量含む。自然堆積土。
	堆積土2層	褐色(7.5YR4/3)土。黄褐色(10YR5/6)粘質土ブロックを含む。自然堆積土。
	堆積土3層	褐色(7.5YR4/3)土。灰白色火山灰ブロックを不均一に含む。しまりない。自然堆積土。
	主柱穴掘方	黄褐色(10YR5/6)土。地山土ブロックを多く含む。人為堆積土。
	主柱穴抜取穴	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。地山土ブロックを含む。しまりあまりない。
SI19	埋土1層	褐色(10YR4/4)土。黄褐色地山粒を少量含む。しまりあり。人為堆積土。
	埋土2層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。黄褐色地山粒を多く、炭片を少し含む。しまり強い。人為堆積土。
	埋土3層	明褐色(7.5YR5/6)土。地山ブロックを含む。人為堆積土。

第44図　ＳＩ17・19竪穴住居跡平面図・断面図（1/60）

東主柱穴間が約2.5mである。

〔壁柱穴〕北辺（短辺）で２箇所、東辺（長辺）で２箇所、西辺（長辺）で１箇所、北東隅で１箇所のピットを検出した。これらのピットは径15～25cm程の小さなもので、周溝中央、壁際、周溝と床面との境などにあり、本竪穴住居に伴う可能性がある。いずれも竪穴住居内と同様の土が堆積していた。

〔堆積土〕３層に分けられ、いずれも自然堆積土である。最下層の第３層には10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰のブロックが含まれている。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整の土師器坏（１・２）の破片、完形に近い土師器高台坏（３・４）、砥石（５）１点、鉄滓（椀形滓２点、発泡した塊状滓26点）の他、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕の破片など少数の遺物、主柱穴柱抜取穴から刀子破片（６）１点が出土した。

【ＳＩ19竪穴住居跡】（平面図・断面図：第44図、遺物：第45図、図版９－１）

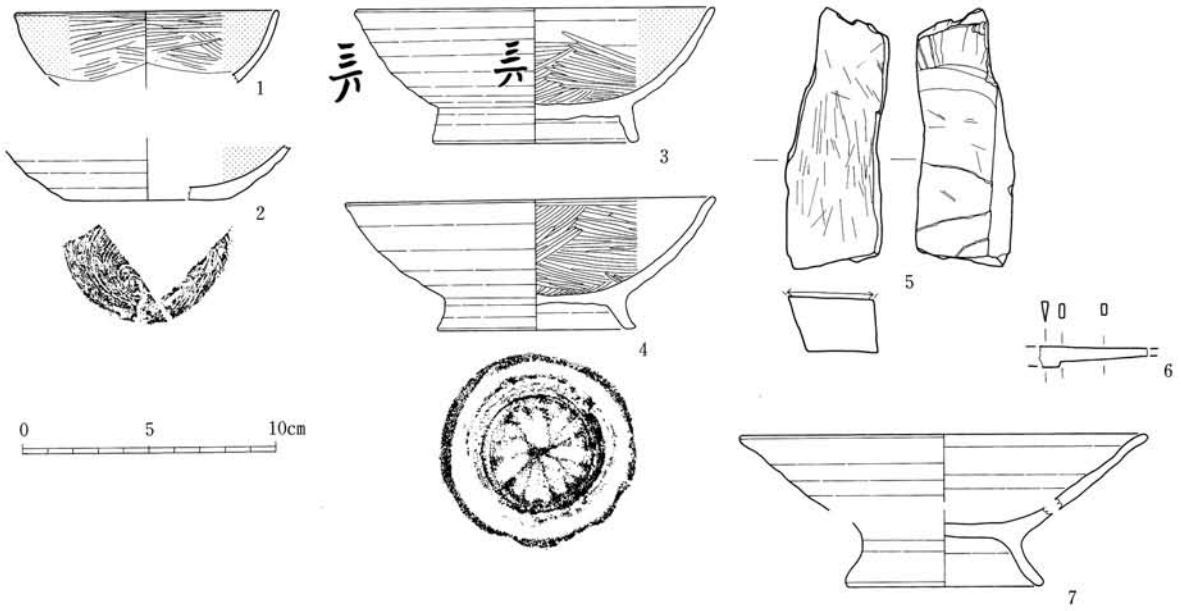
〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ17竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。

〔平面形・規模〕北部・東部が床面下まで大きく削平されている。平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺で約6.0m、南辺で3.4m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約８°偏る

〔床面〕床面は平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面とする。



番号	種　類	分類	遺構	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器高台坏or坏		SI17	堆積土３層	破片	口縁1/4～体部破片。口径10.4cm。ロクロ調整→両面ヘラミガキ→両面黒色処理。		006
2	土師器坏	ⅡB	SI17	堆積土３層	破片	体部～底部1/2破片。底径6.3cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。		006
3	土師器高台坏	ⅡB	SI17	周溝	7/8	口径14.2、高台径8.1、器高5.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→菊花状オサエ→ロクロナデ。黒斑。体部中央に墨書「三万」。内面：ロクロナデ→体部～底部ヘラミガキ（口縁部はロクロナデを残す）→黒色処理。	24-7 35-22	006
4	土師器高台坏	ⅡB	SI17	周溝	4/5	口径14.6、高台径7.8、器高5.2cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→付高台→菊花状オサエ→ロクロナデ。黒斑。内面：ロクロナデ→ヘラミガキ→黒色処理。	24-8	006
5	砥石		SI17	堆積土３層	完形	粘板岩製。直方体状。１面研磨。長さ10.3cm。幅3.9cm。厚さ2.2cm。	38-5	033
6	刀子		SI17	北東主柱穴	破片	身部～茎部破片。平造り角棟。刃関。残存長4.2cm。刃元幅8mm。茎元幅6mm。棟厚3mm。		029
7	須恵系土器高台坏	B	SI19	埋土２層	破片	口径16.0、高台径7.8、器高約5.0cm。ロクロ調整。底部切り離し不明→付高台。	24-9	006

第45図　ＳＩ17・19竪穴住居跡出土遺物

〔周溝〕西辺、南辺で幅25～30cm、深さ10～15cmの周溝を検出した。住居廃絶時に人為的に埋め戻されており、機能時に開渠であったかどうか不明である。北辺、東辺は床面下まで削平され、残っていない。西周溝の西辺をほぼ3等分する位置で、西周溝と直交して東側に短く延びる溝2条を検出した。北側の溝1は幅23cm、深さ8cmで、長さ80cm延びる。南側の溝2は幅12cm、深さ7cmで、長さ25cm延びる。溝1・2の埋土は西周溝と同様である。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外の3辺のいずれかに付設されていたと考えられる。

〔焼面〕床面上で2箇所の焼面を検出した。焼面1は溝1と溝2の間にあり、長径30cm、短径25cmの不整形である。焼面2は溝2の南東約1.3mにあり、長径12cmの楕円形である。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴などは認められない。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土から須恵系土器高台坏（7）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕などの破片が少数出土した。このうち土師器坏・須恵器坏で底部の切り離し・再調整のわかるものは、いずれも回転糸切り無調整である。

【ＳＩ11竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第46図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ11竪穴住居跡は床面レベルを同じくして南に拡張して建て替えられている（ＳＩ11Ａ竪穴住居跡→ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡）。また、ＳＩ54竪穴住居跡と重複するが、ＳＩ54竪穴住居跡の堆積土が周溝にしか残っていないため、新旧関係は不明である。床面レベルはＳＩ54竪穴住居跡がＳＩ11竪穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。

《ＳＩ11Ａ竪穴住居跡》

〔平面形・規模〕南東部の一部を検出したのみだが、新しいＳＩ11Ｂ竪穴住居跡と同様に平面形は長方形とみられ、規模はそれよりも南北が40cm程短いと推定される。

〔方向〕新しいＳＩ11Ｂ竪穴住居跡と同様に、西辺でみると北で東に約14°偏ると考えられる。

〔壁〕拡張されたＳＩ11Ｂ竪穴住居跡に壊され、残っていない。

〔床面〕床面は平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。南東部に一部残る床面のレベルは、拡張されたＳＩ11Ｂ竪穴住居跡と一致する。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南東隅で幅20cm、深さ3cmの周溝を検出した。他辺は削平されて残っていない。

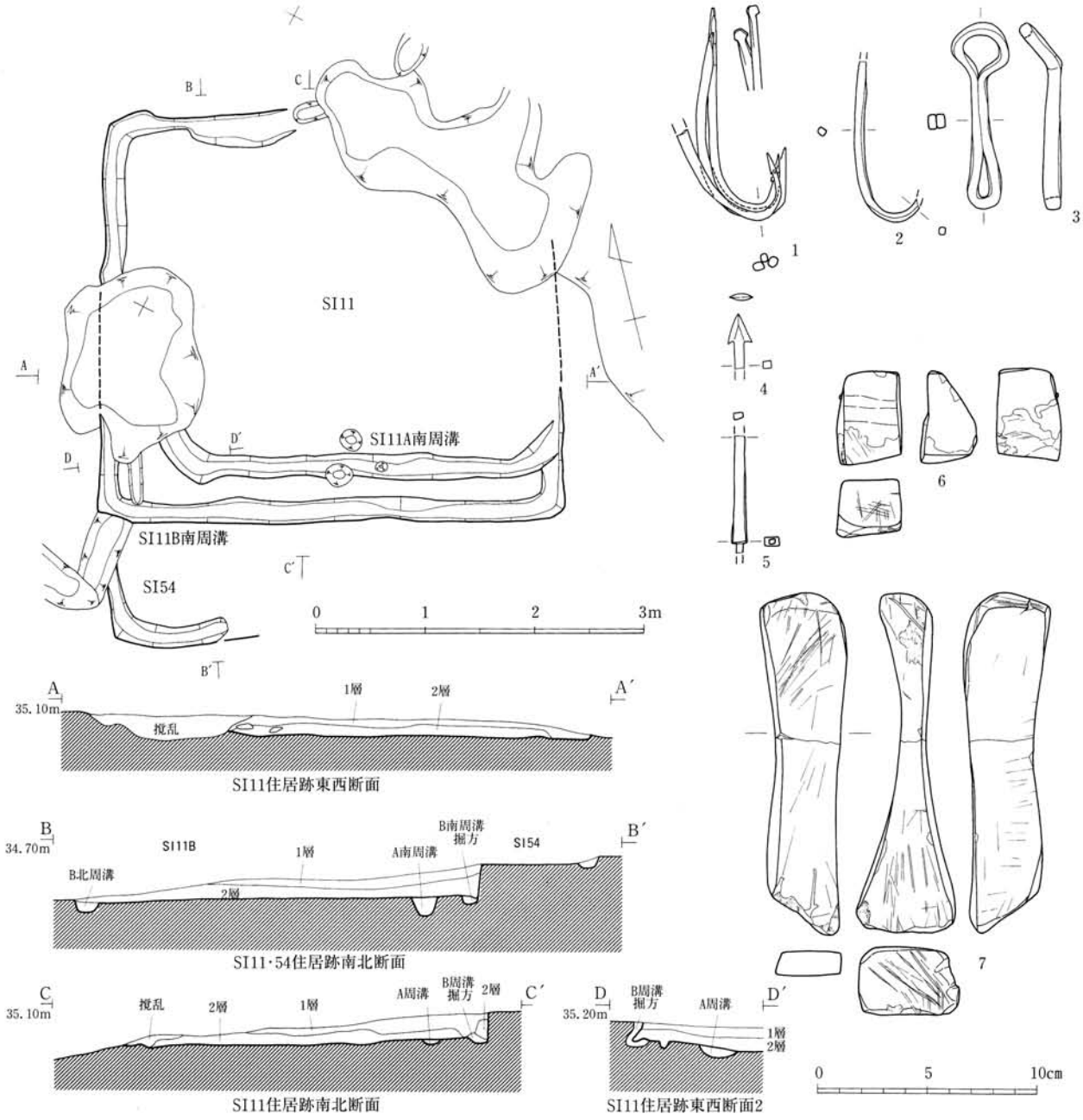
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡》

〔平面形・規模〕北東部が大きな攪乱で壊され、東部が床面下まで大きく削平されている。平面形は長方形とみられ、規模は西辺で約3.7m、南辺で4.3mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約14°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい南東隅で25～30cm、南辺で10～20cm、西辺で



住居跡	層　位	特　　徴
SI11A	南周溝	褐色(10YR4/6)土。径0.5～1.5cmの地山ブロックを多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
SI11B	周溝掘方	黄褐色(10YR5/8)土。地山ブロック、地山風化砂を含む。人為堆積土。
	堆積土１層	褐色(10YR4/6)土。径1cm程の地山粒を多量に、炭片を少量含む。火災以後の自然堆積土。
	堆積土２層	明褐色(10YR3/4)土。焼土ブロック・炭片・地山粒を多量に含む。炭化材を含む。火災時の自然堆積土。
SI54	南周溝	明黄褐色(10YR6/6)土。

番号	種　類	遺構	層　位	特　　徴	写真	収納
1	鉄製釣針	SI11B	床面	完形品２本、破損品１本の３本がくっついた鉄製鍛造の単式釣針。いずれも軸部断面約4mmの隅丸方形で、逆刺が内側に付いた内撓式。チモトは扁平で、くびれがある。完形品は長さ9.7cmのものと8.9cmのものとがあり、破損品は現存長5.3cm。	37-31	029
2	鉄製釣針	SI11B	床面	チモトと逆刺を欠いた破損品。現存長7.6cm。断面約4mmの隅丸方形。	37-30	029
3	引手	SI11B	床面	馬具。一体造り「く」の字状二条線引手。鍛造品。完形。断面7×4mmの長方形の鉄棒を二つに折り曲げて、両端に環状の壺を作り、一端を鏡板に連結される引手先、他端を「く」字状に折り曲げて手綱に付ける引手壺とする（柄と引手壺のなす角度140°）。全長8.6cm。引手壺外径2.6cm、内径1.6cm。	37-1	029
4	鉄鏃	SI11B	埋土１層	鏃身～柄部破片。三角形式。現存長2.6cm。鏃身長1.4cm。鏃身幅1.1cm。鏃身断面両丸造。柄断面4×3mm方形。		029
5	鉄鏃	SI11B	埋土１層	鏃身を欠いた柄部破片。現存長5.4cm。柄元断面7×4mm長方形。関部が直角となる。茎断面3mm方形。		029
6	砥石	SI11B	床面	砂岩製。手持ち砥石。５面研磨。長さ4.3cm。幅3.0cm。厚さ2.6cm。	38-3	033
7	砥石	SI11B	攪乱	極細粒砂岩製。直方体状。６面研磨。長さ15.8cm。幅4.5cm。厚さ4.0cm。	38-7	033

第46図　ＳＩ11・54竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡出土遺物

10cm前後あり、約95°の傾斜でほぼ直に立ち上がる。南東隅では壁の奥に抉れるように周溝が掘削され、さらにその掘方に沿うように上まで埋められている。竪穴住居機能時には周溝は開渠であったとみられる。

〔床面〕床面は平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、南辺にはないので、南辺以外に付設されていたと考えられる。

〔堆積土〕2層に分かれ、堆積土2層は焼土・炭片を多量に含む。床面には炭化材はなかった。火災にあって焼失した竪穴住居跡であり、火災以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕床面から鉄製の大型釣針4点（1・2）、馬具の引手（3）1点、砥石（6）1点、埋土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕の破片少数と鉄鏃破片（4・5）2点、攪乱から砥石（7）1点が出土した。このうち非ロクロ調整の土師器坏は平底気味のものである。また、大型釣針（1）は3点が銹着しており、内鐖式の単式釣針である。引手（3）は轡の一部をなす鉄製金具で、銜先・鏡板に取り付けられて手綱を連結させるためのものである。直線的で捩りのない2本線の柄の一端に鏡板に取り付けられる引手先、もう一端に手綱が付けられる引手壷を一体となって造りだした鍛造品で、「一体造くの字状引手壷無捩二条線引手」と呼ばれる型式（岡安、1984・1998）である。

【ＳＩ54竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第46図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高35m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ11竪穴住居跡と重複するが、ＳＩ54竪穴住居跡の堆積土が周溝にしか残っていないため、新旧関係は不明である。

〔方向〕ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡と同様に、西辺でみると北で東に約14°偏ると考えられる。

〔壁〕残りのよい箇所でも検出面から床面までの高さは8cmしか残っていない。

〔床面〕床面は平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。床面レベルはＳＩ54竪穴住居跡がＳＩ11竪穴住居跡よりも約30cm高い位置にある。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南東隅で幅20cm、深さ4cmの周溝を検出した。他辺は削平されて残っていない。

〔堆積土〕周溝内に残るのみで、人為堆積土か自然堆積土か区別できなかった。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

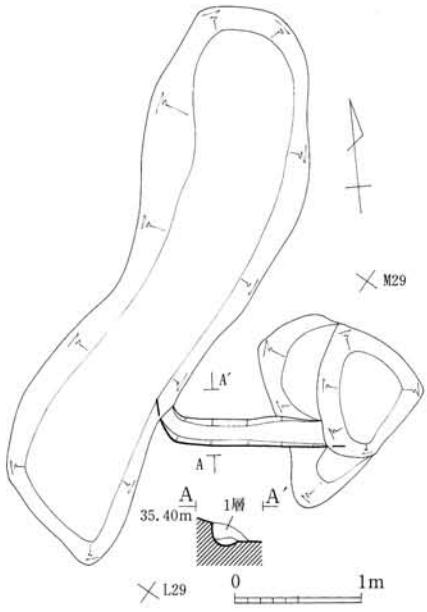
【ＳＩ55竪穴住居跡】（平面図・断面図：第47図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上の標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕杉の根の攪乱が大きく入り、南東隅・南周溝を一部検出したのみで、それ以外は床面下まで大きく削平されている。残りがきわめて悪い。

〔平面形〕方形とみられ、規模は東西が南辺で1.3m以上ある。

〔方向〕南辺の方向からみて西辺は北で東に約17°偏ると推定される。



層位	特徴
堆積土１層	褐色(10YR4/4)土。径1cm以下の地山粒を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
周溝	明黄褐色(10YR6/8)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。

第47図　ＳＩ55竪穴住居跡平面図・断面図

〔壁〕検出面から床面までの高さは残りのよい箇所でも14cmしかない。

〔周溝〕南東隅と南辺の一部で、幅20cm、深さ６cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕周溝内より非ロクロ調整で平底の土師器坏底部破片が１点出土した。

【ＳＩ12竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第48図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高34.5m付近に位置する。

〔重複〕東半部は床面下まで、西辺は上部を大きく削平され、杉の根の攪乱も大きく入り、残りが悪い。ＳＫ１土壙と重複するが、堆積土の重複がないため、新旧関係は不明である。ＳＩ14•15竪穴住居跡と近接しているため、同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕隅丸方形とみられ、規模は南北が西辺で約6.7m、東西は北辺で1.8m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約48°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは残りのよい箇所でも10cmしかない。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕北西・南西主柱穴を検出した。竪穴住居跡の対角線上にあると考えられ、いずれも西辺から約1.5m離れた位置にある。掘方は長辺35～40cm、短辺30cmの方形で、深さ27cmある。廃絶時に柱が抜き取られている。北西主柱穴－南西主柱穴間の柱間寸法は約4.3mである。

〔周溝〕西辺、および北辺・南辺の一部で幅15～25cm、深さ10cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。西周溝から北西主柱穴に向けて直交するように幅10cm、深さ５cmの浅い溝が延びている。内部は周溝と一連の自然堆積土である。

〔カマド〕カマドの位置は不明であるが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔堆積土〕２層に分けられ、廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕検出面から非ロクロ調整で脚部に透かしのある土師器高坏脚部破片（１）、須恵器蓋破片が各１点出土した。

【ＳＩ14竪穴住居跡】（平面図・断面図：第48図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上の標高34.5m付近に位置する。

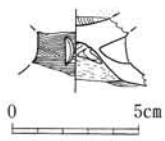
〔重複〕北部～東半部は床面下まで、遺存する箇所も上部を大きく削平され、残りが悪い。新旧２時期の主柱穴を検出し、それらの配置関係からみて拡張されているとみられる。ＳＩ14・15竪穴住居跡と近接しているため、同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で3.5m以上、東西が南辺で1.9m以上である。主柱穴と周溝の位置関係からみると、南北約4.0m、東西約4.3mの長方形と推定される。

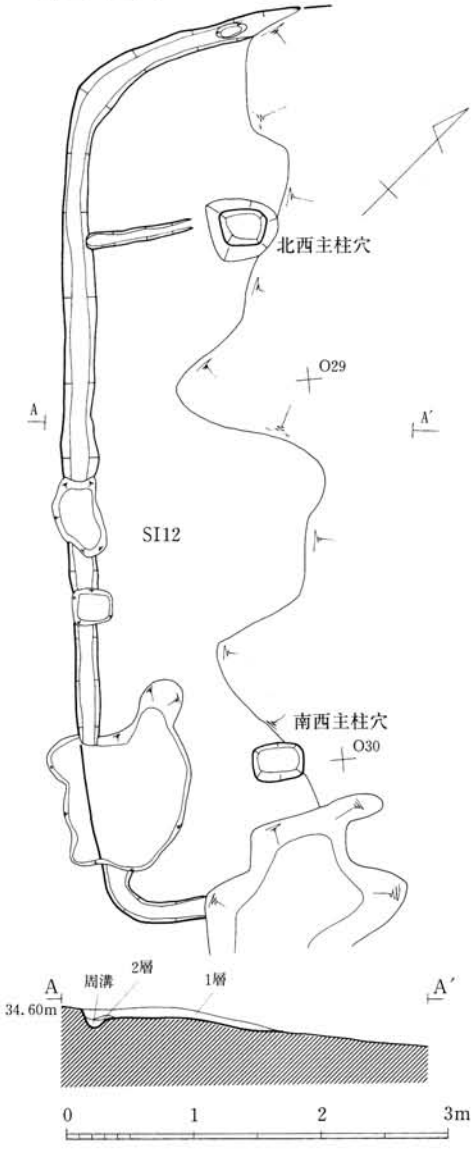
〔方向〕西辺はほぼ北に一致する

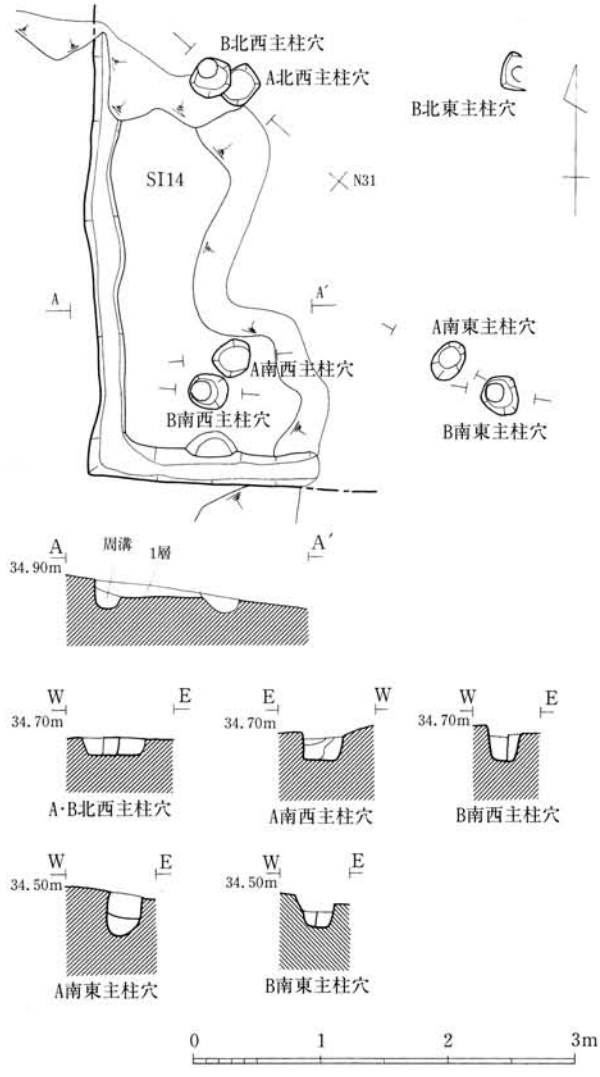
〔壁〕検出面から床面までの高さは、西辺で15cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。



番号	種　類	分類	層　位	特　　徴	収納
1	土師器 高坏		SI12 検出面	底部完形～高台部1/4破片。非ロクロ調整。外面：ナデ→盲孔1・貫通孔1。内面：底部へラミガキ→黒色処理。高台部ケズリ。	002





層　位	特　　徴
堆積土1層	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。径4mm以下の粘板岩風化礫片を含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
堆積土2層	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。径4mm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
周溝	褐色(10YR4/4)土。径5mm程の粘板岩風化礫片を少量含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。

SI12竪穴住居跡

層　位	特　　徴
掘方	褐色(10YR4/6)土。径3～10mmの粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。
A主柱穴抜取穴	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。粘板岩風化礫小片を多く含む。しまりない。
B主柱穴掘方	黄褐色(10YR5/6)土。粘板岩風化礫小片を多く含む。しまりあり。
B主柱穴柱痕跡	黄褐色(10YR5/6)土。しまり・粘性ない。
堆積土1層	黄褐色(10YR5/6)土。粘板岩風化礫小片を含む。しまりあまりない。
周溝	黄褐色(10YR5/6)土。粘板岩風化礫小片を少し含む。しまりあまりない。

SI14A・B竪穴住居跡

第48図　SI12・14竪穴住居跡平面図・断面図（1/60）、出土遺物

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の４箇所で、新旧２時期の主柱穴を検出した。古いＡ主柱穴は北西で検出できなかったが、新しいＢ主柱穴は北西・北東・南西・南東の４箇所を検出した。掘方はＡ・Ｂ主柱穴とも長辺30cm前後の隅丸方形を基調とし、深さは15～30cmある。Ａ主柱穴の柱はいずれも建て替え時に抜き取られているが、Ｂ主柱穴では計2～15cmの円形の柱痕跡を確認した。Ｂ主柱穴の柱間寸法は、北西主柱穴－南西主柱穴間が2.6m、南西主柱穴－南東主柱穴間が2.3mである。また、Ａ主柱穴の柱間寸法は、北西主柱穴－南西主柱穴間が約2.2m、南西主柱穴－南東主柱穴間が約1.7mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されていたと考えられる。

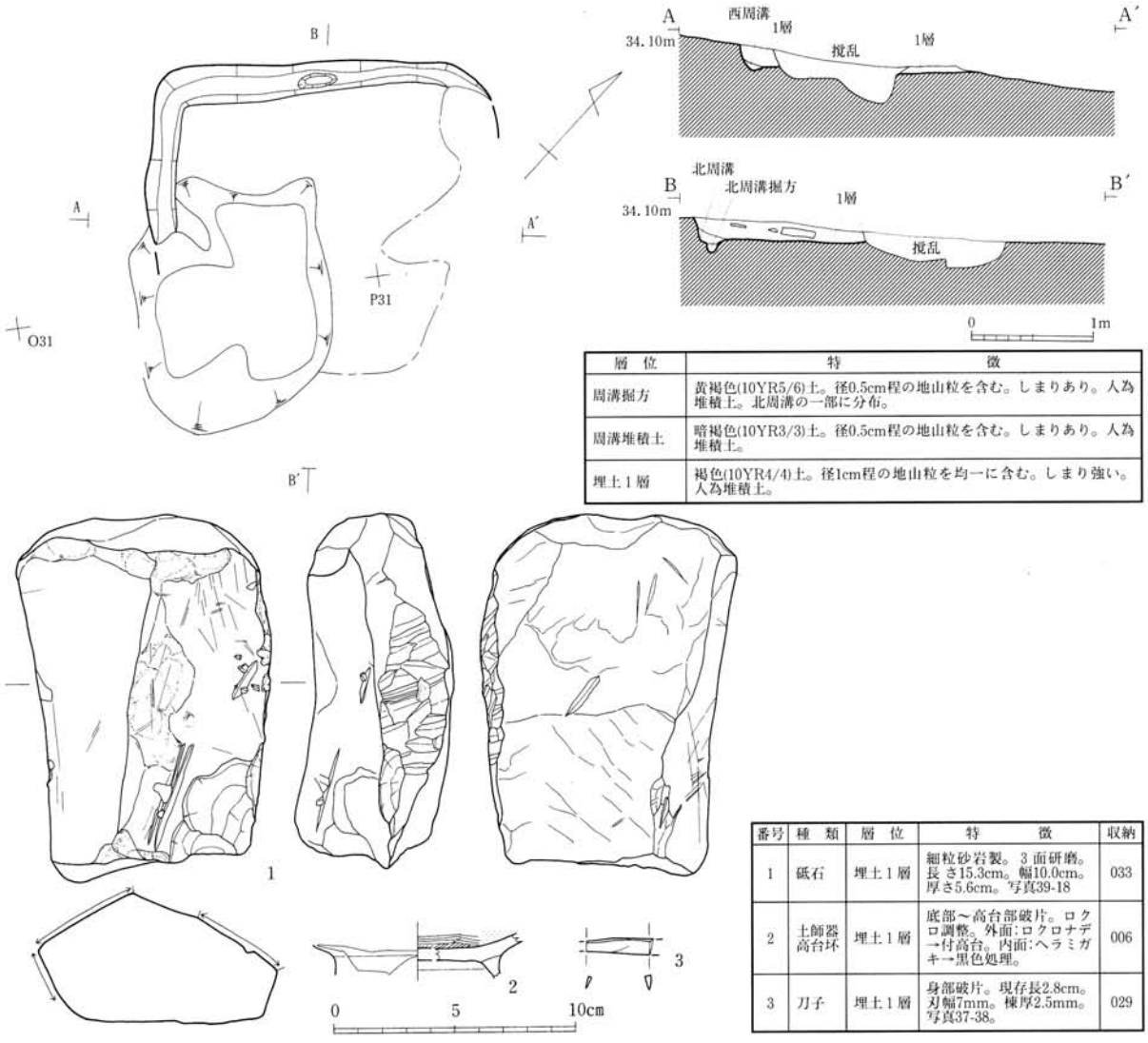
〔周溝〕西辺と南辺の一部で幅20～25cm、深さ９cmの周溝を検出した。自然堆積土である。

〔堆積土〕自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【ＳＩ15竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第49図）

〔位置〕調査区北部中央、丘陵尾根上やや北寄り、標高33.5m付近に位置する。



層　位	特　　徴
周溝掘方	黄褐色(10YR5/6)土。径0.5cm程の地山粒を含む。しまりあり。人為堆積土。北周溝の一部に分布。
周溝堆積土	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5cm程の地山粒を含む。しまりあり。人為堆積土。
埋土１層	褐色(10YR4/4)土。径1cm程の地山粒を均一に含む。しまり強い。人為堆積土。

番号	種　類	層　位	特　　徴	収納
1	砥石	埋土１層	細粒砂岩製。３面研磨。長さ15.3cm。幅10.0cm。厚さ5.6cm。写真39-18	033
2	土師器高台坏	埋土１層	底部～高台部破片。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	006
3	刀子	埋土１層	身部破片。現存長2.8cm。刃幅7mm。棟厚2.5mm。写真37-38。	029

第49図　ＳＩ15竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

〔重複〕南東部には床面下まで、西辺は上部を大きく削平され、残りが悪い。ＳＩ14竪穴住居跡と近接しているため、同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は南北が西辺で1.5m以上、東西が北辺で約2.8mである。主柱穴と周溝の位置関係からみると、南北約4.0m、東西約4.3mの長方形と推定される。

〔方向〕西辺でみると北で西に約33°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい箇所で15～20cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕主柱は認められない。

〔周溝〕北辺と西辺の一部で幅15～39cm、深さ４cmの周溝を検出した。廃絶時に人為的に埋められており、機能時に開渠であった可能性がある。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕埋土１層からロクロ調整の土師器坏・高台坏（２）・甕、須恵器甕の破片少数と砥石（１）１点、刀子破片（３）１点が出土した。

【ＳＩ18竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第50図、図版３－１）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高35.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＢ１掘立柱建物跡と位置的に重複するが、堆積土と柱穴との重複がないため、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕平面形は方形で、規模は東西が北辺で約2.8m、南北が西辺で2.5m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約37°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りが比較的よい北西隅で16cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺・西辺以外に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕北辺、西辺で幅15～20cm、深さ５～10cmの周溝を検出した。堆積土は自然堆積土で、床面上と一連である。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

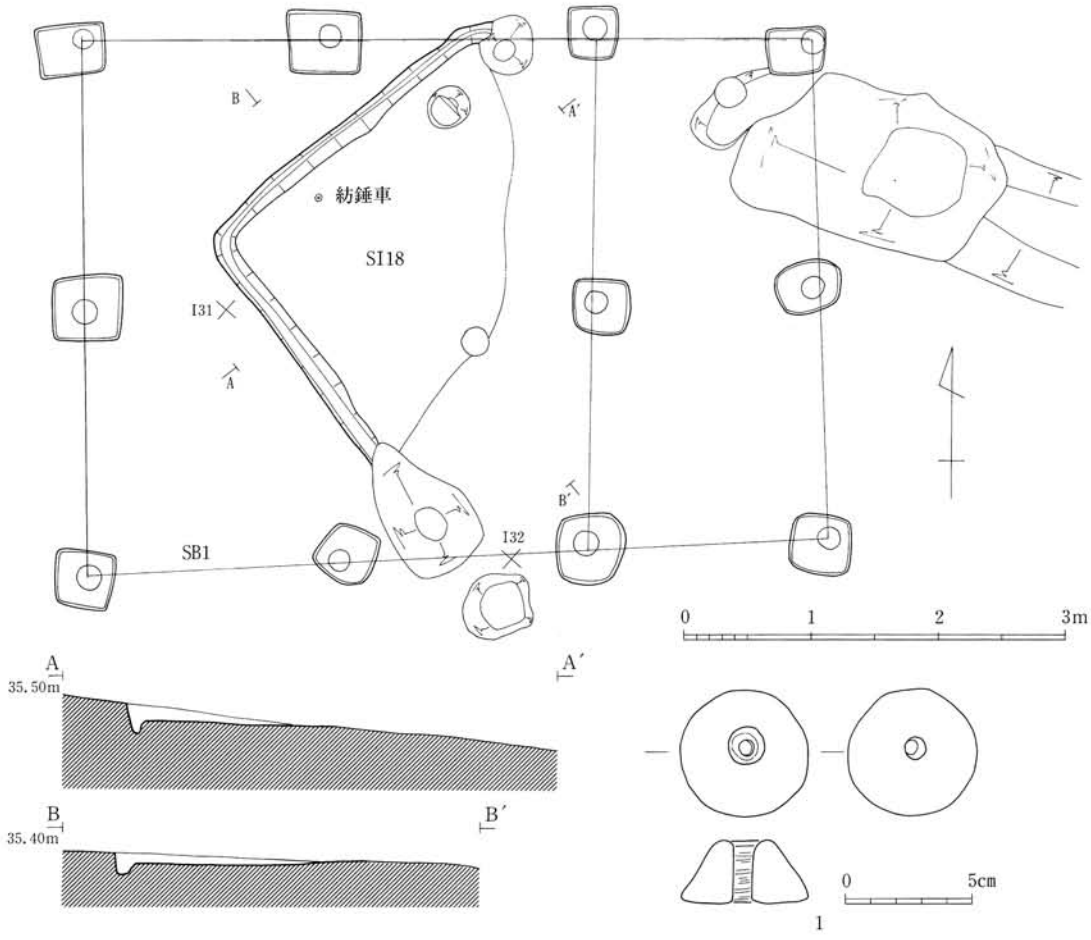
〔出土遺物〕床面から土製紡錘車（１）１点、堆積土から非ロクロ調整の土師器甕の破片などが少数出土した。

【ＳＩ13竪穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図、遺物：第53図）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ52竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。また、ＳＩ16竪穴住居跡、ＳＢ８掘立柱建物跡と近接し、これらと同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は長辺（南辺）が約4.1m、短辺（西辺）が約3.5mである。



層　位	特　　徴
堆積土１層	暗褐色(10YR3/4)土。径5mm程の地山風化礫片を少量含む。しまりあまりない。自然堆積土。

番号	種　類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土製紡錘車	床面	完形	土製。土師質。裁頂円錐形。断面厚台形。広径5.0cm。狭径2.3cm。厚さ2.5cm。軸孔径0.8cm。重量44ｇ。全面摩滅、一部にナデ残る。軸孔内に軸と直行する横方向の擦痕あり。橙色。胎土に微細な長石粒・ガラス粒・砂粒を多く含む。焼成不良。	36-8	026

第50図　ＳＩ18竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

〔方向〕東辺でみると、北で東に約32°偏る。

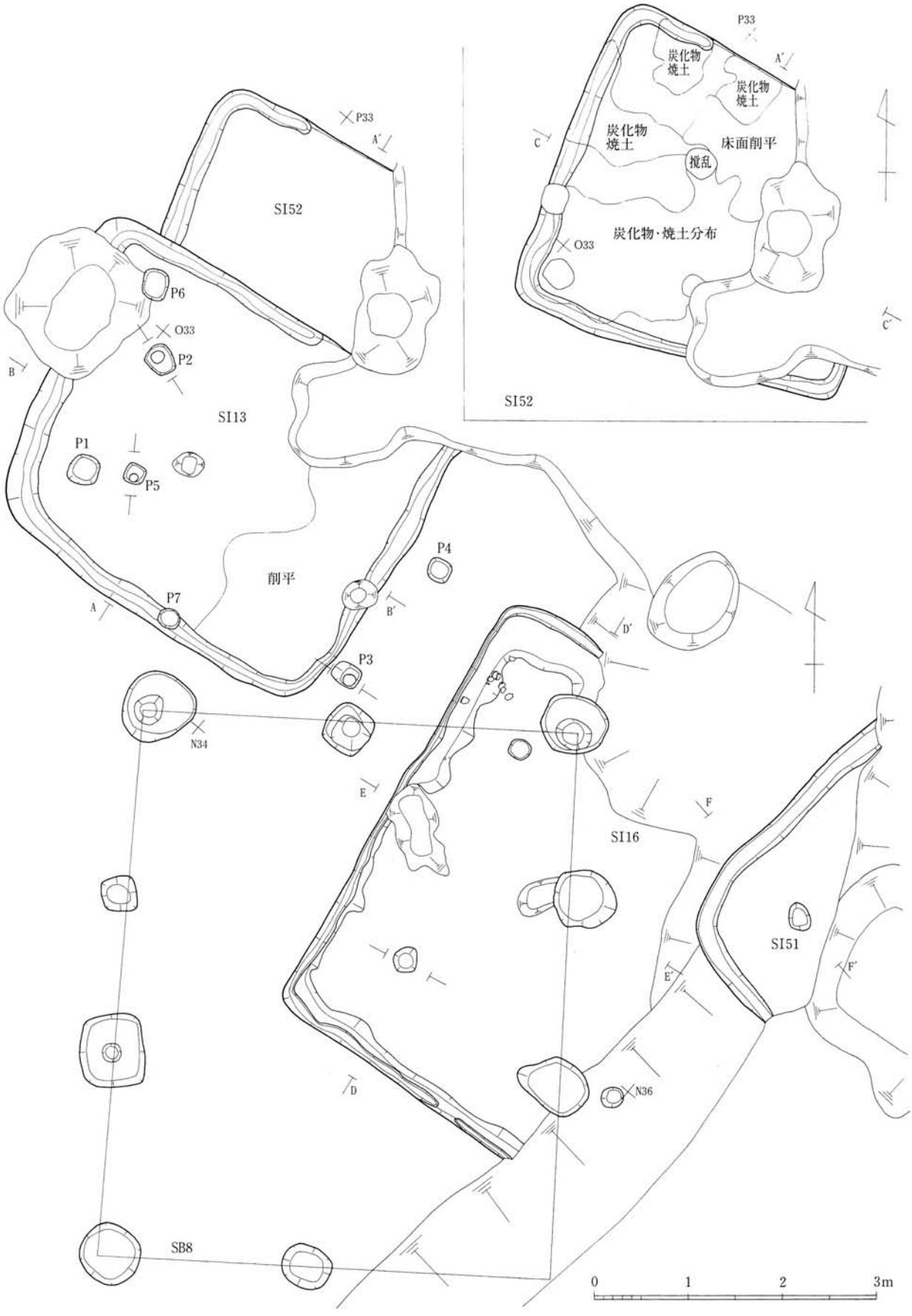
〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい北西隅で24cm、西辺で20～10cmだが、他辺では10cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。東半部は床面下まで削平されている。

〔周溝〕各辺で幅15～30cm、深さ５～10cmの周溝を検出した。北辺中央東寄りでは周溝が途切れている。周溝内は自然堆積土である。

〔カマド〕カマドの位置は不明確だが、北辺周溝が途切れ、杉の根の攪乱が大きく入っている北辺中央から東寄りに付設されていたと考えられる。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置で南西主柱穴（Ｐ１）と北西主柱穴（Ｐ２）を検出した。南西主柱穴（Ｐ１）は西辺から約0.8m、南辺から約0.9m離れた位置にあり、北西主柱穴（Ｐ２）は西辺から約1.1m、北辺から約1.1m離れた位置にある。また、これと向き合う東辺の外側30～40cmの位置で柱穴（Ｐ３・４）２箇所を検出した。Ｐ３・４は通常であると屋外に位置することになる

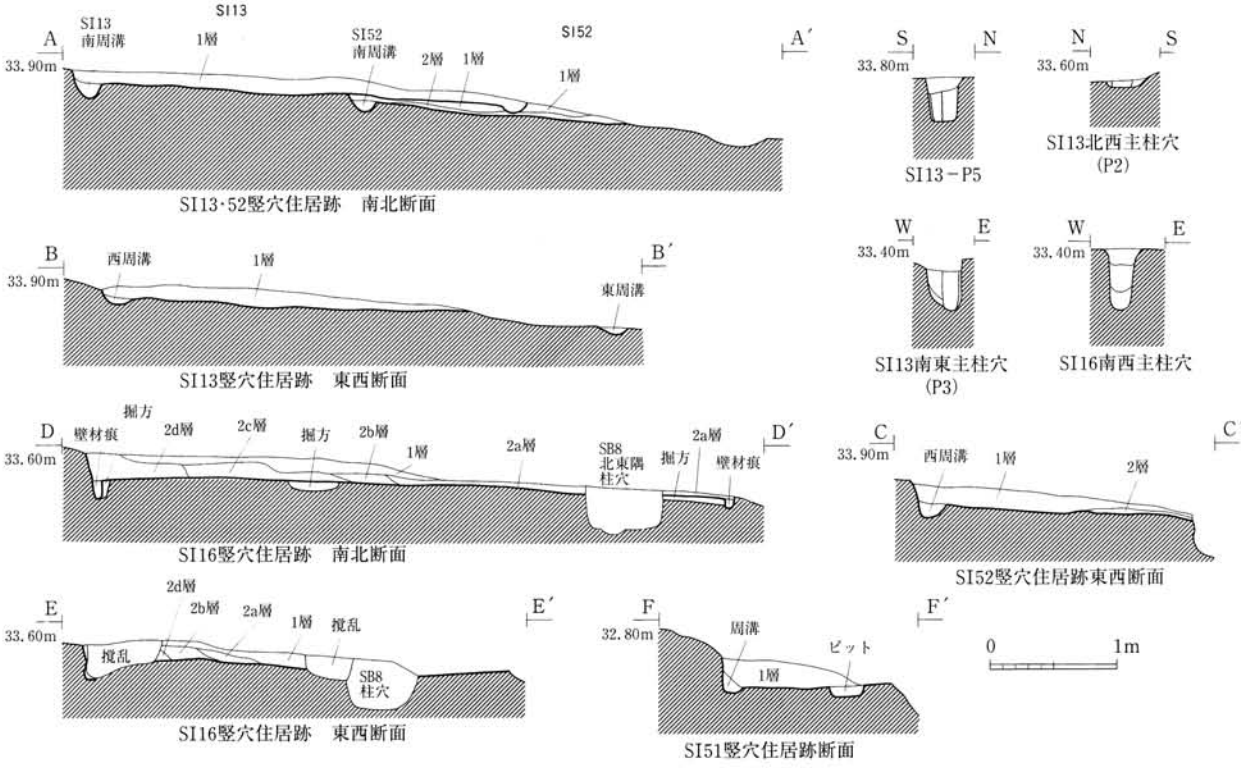


第51図　ＳＩ13・16・51・52竪穴住居跡平面図（1/60）

が、南西主柱穴（Ｐ１）と北西主柱穴（Ｐ２）と対称の位置にあり、かつ東辺と平行して隣接することから、これらと対応する本竪穴住居跡に伴う主柱穴とみられる。掘方はいずれも一辺30cm前後の隅丸長方形を基調とし、深さは30～40cmある。北西主柱穴（Ｐ２）、南東主柱穴（Ｐ３）で径13cmの円形の柱痕跡を確認し、南西主柱穴（Ｐ１）、南東主柱穴（Ｐ４）は柱が抜き取られていた。柱間寸法は、南西主柱穴（Ｐ１）－南東主柱穴（Ｐ３）間が約3.6m、南西主柱穴（Ｐ１）－北西主柱穴（Ｐ２）間が約1.4mである。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土からロクロ調整で底部が回転糸切り無調整の土師器坏２点（９・10）、鉄製の大型単式釣針（11）１点の他、ロクロ調整と非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕の破片などが少数出土した。



住居跡	層位	特徴
SI13	主柱穴掘方	黄褐色(10YR5/8)土。径3～5cmの地山礫片を多く含む。しまり・粘性ない。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	褐色(10YR4/4)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	主柱穴柱抜取穴	褐色(10YR4/6)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～1cmの地山凝灰岩ブロックをやや多く含む。しまりあまりない。粘性ない。自然堆積土。
	周溝	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。径0.5～1cmの地山凝灰岩ブロックをあまり含まない。しまりあまりない。粘性ない。自然堆積土。
SI16	掘方	黄褐色(10YR5/6)土。径1～5cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりあり。粘性ない。人為堆積土。
	主柱穴柱抜取穴	褐色(10YR4/6)土。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	壁材掘方	周溝状となる。黄褐色(10YR5/6)土。径1～5cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりあり。粘性ない。人為堆積土。
	壁材痕	暗褐色(10YR3/4)土。しまり・粘性ない。自然堆積土。
	堆積土１層	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。地山粒をやや多く含む。しまりあり。粘性ない。自然堆積土。
	堆積土２a層	暗褐色(10YR3/4)土。地山粒をやや多く含む。しまり・粘性ない。自然堆積土。
	堆積土２b層	暗褐色(10YR3/4)土。第２ａ層より赤味が強い。地山粒をやや多く含む。しまりあり。粘性ない。自然堆積土。
	堆積土２c層	暗褐色(10YR3/4)土。第２ｂ層より赤味が強い。焼土・炭・地山粒を多く含む。しまりあり。粘性ない。自然堆積土。
	堆積土２d層	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒を少し含む。しまりあり。粘性ない。自然堆積土。
SI51	周溝	暗褐色(7.5YR3/4)土。径1～3cmの粘板岩礫片を多く含む。しまり・粘性ない。自然堆積土。
	堆積土１層	暗褐色(7.5YR3/4)土。しまり・粘性ない。自然堆積土。
SI52	周溝	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mm以下の地山凝灰岩ブロックを少し含む。しまりややなく、粘性ない。自然堆積土。
	堆積土１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mm以下の地山凝灰岩ブロックを比較的多く、径5mm以下の炭片・焼土粒を少し含む。しまりあり。粘性ない。自然堆積土。
	堆積土２層	暗褐色(10YR4/3)土。径1～5cmの炭片・焼土ブロック、径5mmの地山凝灰岩ブロックを多く含む。しまりややあり。粘性ない。自然堆積土。

第52図　ＳＩ13・16・51・52竪穴住居跡断面図（1/60）

【ＳＩ52竪穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ13竪穴住居跡と重複し、これよりも古い。また、ＳＩ16竪穴住居跡、ＳＢ８掘立柱建物跡と近接し、これらと同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南辺が3.6m、西辺が3.5mである。

〔方向〕西辺でみると、北で東に約21°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、比較的残りのよい西辺で10～18cmだが、他辺では５cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北東部は床面下まで削平されている。床面のほぼ全面と周溝内の一部には炭化物・焼土が薄く堆積しており、火災したことが知られる。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明確だが、北辺周溝が途切れている北辺中央に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕西辺・南辺・北辺、南東隅で幅15～25cm、深さ４～８cmの周溝を検出した。北辺中央では周溝が途切れている。周溝内は自然堆積土であり、一部では床面と同様に炭化物・焼土が薄く堆積していることから、火災時には開渠であったことが知られる。

〔堆積土〕火災以後の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕の破片、堆積土から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕の破片などが少数出土した。このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、坏には体下部に段のある有段坏の破片が１点ある。また、須恵器坏破片には底部をヘラ切りしたもの、体下部～底部を回転ヘラケズリしたもの各１点がある。いずれも小破片で、図示できる遺物はない。

【ＳＩ16竪穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図、遺物：第53図、図版４－３、９－２・４）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＢ８掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。ＳＩ51竪穴住居跡とも重複するが、重複部分で堆積土が削平されているため、新旧関係は不明確である。ただし、南東主柱穴の底面レベルがＳＩ51竪穴住居跡の床面レベルとほぼ同じであること、ＳＩ51竪穴住居跡と重複する位置で北東主柱穴が検出できなかったことから、ＳＩ51竪穴住居跡が新しいと考えられる。また、ＳＩ13竪穴住居跡と近接し、これと同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で、規模は南北が西辺で5.0m、東西が南辺で3.1m以上である。主柱穴と周溝との位置関係から推定すると、東西は約4.6mと推定される。

〔方向〕西辺でみると、北で東に約30°偏る。

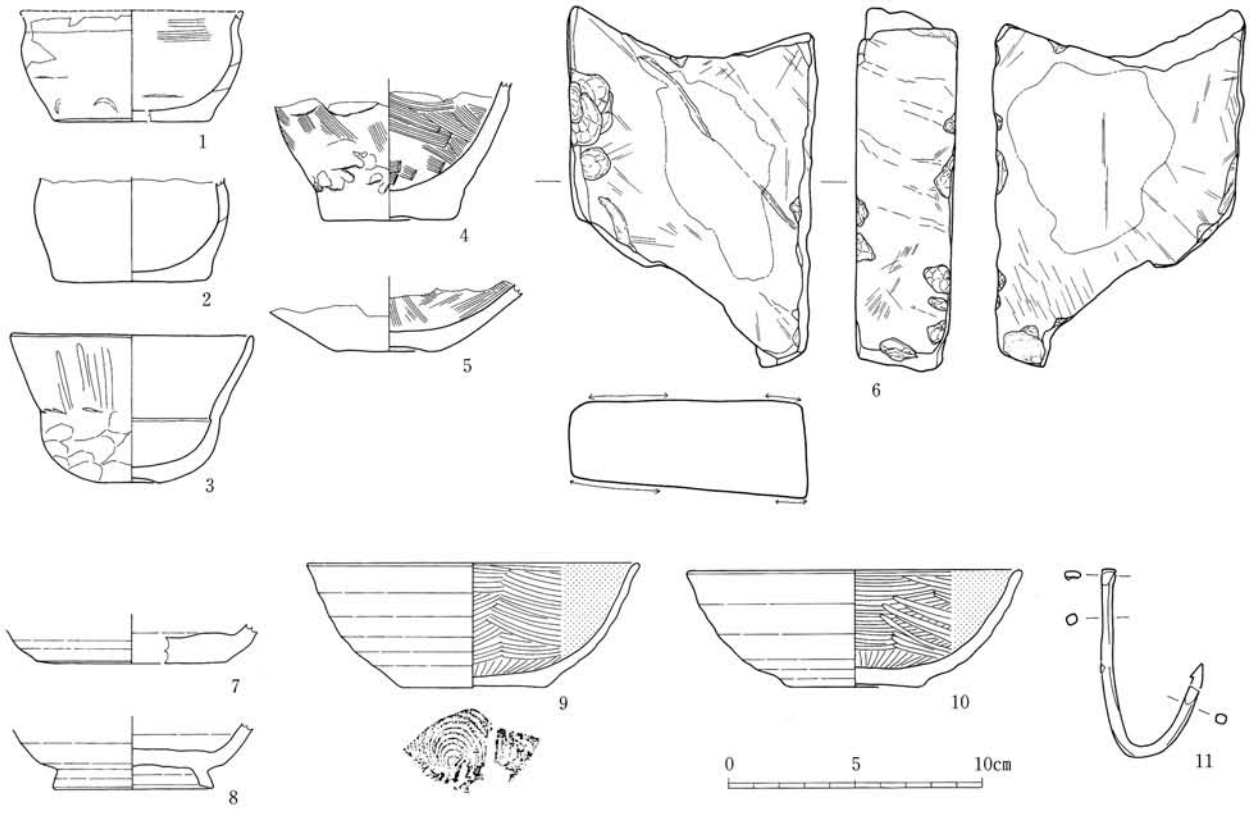
〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南西隅で30cm、南辺で23cm前後、西辺で15cm前後ある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北東部～東部は床面下まで削平されている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置で北西・南西・南東主柱穴を検出した。北東主柱穴はＳＩ51竪穴住居跡に壊されたとみられ、検出できなかった。南西主柱穴は西辺から約1.0m、南辺から約1.1m離れた位置にあり、北西主柱穴は西辺から約0.9m、北辺から約1.4m離れた位置にある。掘方は径25cm前後の楕円形で、深さは北西主柱穴で53cm、南西主柱穴で47cm、南東主柱穴で49cmある。いずれも柱が抜き取られ、柱痕跡は検出できなかった。柱間寸法は、北西主柱穴－南西主柱穴間が約2.6m、南西主柱穴－南東主柱穴間が約2.7mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺または東辺に付設されていたと考えられる。

〔壁材〕西辺、南辺、北西隅で壁際に寄せた壁材の痕跡を検出した。壁材痕跡は幅５～７cm、深さ10



番号	種　類	分類	遺構	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	手捏土器坏		SI16	検出面	1/2	口径約8.6cm。底径6.0cm。器高約4.4cm。口縁短く外反。外面：指オサエ、摩滅。内面：ナデ、摩滅。	24-5	006
2	手捏土器坏		SI16	堆積土２層	1/2	口径約9.6cm。底径6.0cm。器高約4.4cm。口縁短く外反。両面：摩滅。	24-6	006
3	土師器坩		SI16	堆積土１層	完形	非ロクロ調整。口径9.6cm。底径1.5cm。器高5.9cm。外面：口縁ヘラミガキ。体部ケズリまたはミガキ、摩滅。内面：摩滅。	24-3	006
4	土師器鉢		SI16	堆積土２層	破片	非ロクロ調整。底径5.3cm。外面：体部～底部ナデ。内面：ヘラナデ。	24-4	006
5	土師器甕		SI16	床面	破片	非ロクロ調整。底径4.2cm。外面：体部～底部ナデ。内面：ナデ。		006
6	砥石		SI16	床面	完形	細粒砂岩製。２面研磨。長さ14.3cm。幅9.8cm。厚さ3.8cm。	39-12	033
7	須恵器坏	A1	SI51	堆積土１層	1/4	底径7.4cm。外面：底部ヘラ切り。		022
8	須恵器高台坏	B1	SI51	堆積土１層	>1/2	高台径6.4cm。外面：底部ヘラ切り→付高台。	33-23	022
9	土師器坏	ⅡB	SI13	堆積土１層	1/4	口径13.2cm。底径5.6cm。器高4.9cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-1	006
10	土師器坏	ⅡB	SI13	堆積土１層	1/2	口径13.2cm。底径5.5cm。器高4.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-2	006
11	鉄製釣針		SI13	堆積土１層	破損	鉄製鍛造の単式釣針。チモトの一部と逆刺を欠損。チモトは扁平で、くびれがある。現存長7.5cm。軸部断面は径5mmの隅丸方形。	37-29	029

第53図　ＳＩ13・16・51竪穴住居跡出土遺物

～15cmで、南辺で一部途切れるが、検出した各辺を巡る。壁材掘方は幅20～60cm、深さ５～15cmの周溝状となる。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器甕破片（５）、砥石（６）１点、碧玉製の管玉１点、堆積土から完形の土師器坩（３）、土師器甕（４）、手捏土器（２）の破片などが少数出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、古墳時代前期の塩釜式期のものである。

【ＳＩ51竪穴住居跡】（平面図：第51図、断面図：第52図、遺物：第53図、図版９－４）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の標高32.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ16竪穴住居跡と重複するが、重複部分でＳＩ16竪穴住居跡の堆積土が削平されているため、新旧関係は不明確である。ただし、ＳＩ16竪穴住居跡の南東主柱穴の底面レベルがＳＩ51竪穴住居跡の床面レベルとほぼ同じであること、ＳＩ51竪穴住居跡と重複する位置でＳＩ16竪穴住居跡の北東主柱穴が検出できなかったことから、ＳＩ51竪穴住居跡が新しいと考えられる。また、ＳＢ８掘立柱建物跡と近接し、これと同時には存在しえない。大半が床面下まで大きく削平され、南東部を一部検出したにすぎない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺で3.1m以上、南辺で1.5m以上である。

〔方向〕西辺は北で東に約44°偏る。

〔壁〕西辺は上部が斜めに崩れているが、検出面から床面まで高さ22cm前後残っており、ＳＩ16竪穴住居跡床面が掘り込み面であるならば、本来は高さ47cm程であったと考えられる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。南東部以外は床面下まで大きく削平されている。

〔主柱穴〕西辺から約1.0m、南辺から約1.0m離れた位置で、南西主柱穴を検出した。それ以外の主柱穴は削平されて残っていないが、本来は竪穴住居跡の対角線上に４本の主柱穴が配されていたと推定される。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南西隅を中心とする西辺・南辺の一部で、幅約20cm、深さ約５cmの周溝を検出した。周溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏（７）・高台坏（８）・甕の破片が少数、鉄滓（椀形滓）が１点出土した。このうち土師器には非ロクロ調整の甕が含まれるが、坏は小破片で摩滅しており、ロクロ調整使用の有無は不明である。須恵器坏（７）は底部がヘラ切りである。

【ＳＩ47竪穴住居跡】（平面図・断面図：第54図）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上のやや東寄り、標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。杉の根の攪乱が大きく入り、北部～東半部が床面下まで大きく削平され、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形とみられ、規模は西辺が約2.9m、南辺が1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約13°偏る。丘陵尾根の方向と一致せず、等高線に沿っている。

〔壁〕検出面から床面までの高さは西辺で15～20cm、南辺で10cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。北部～東部は床面下まで大きく削平され、西部も杉の根の攪乱で大きく壊されている。

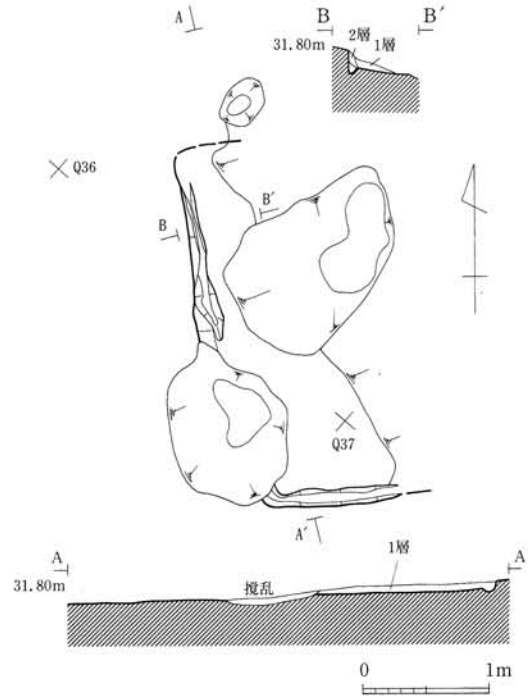
〔周溝〕西辺・南辺で幅14cm、深さ５cmの周溝を検出した。南周溝内は床面上と一連の土層、西周溝内は異なる土層が廃絶以降に自然堆積している。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴はない。

〔堆積土〕廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



層位	特徴
堆積土１層	褐色(10YR4/4)土。径5mm程の粘板岩風化礫片、炭片を少量含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
堆積土２層	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。径5mm程の粘板岩風化礫片、焼土を少量含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
西周溝	暗褐色(10YR3/4)土。径3mm程の粘板岩風化礫片を少量含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。

第54図　ＳＩ47竪穴住居跡平面図・断面図

【ＳＩ20竪穴住居跡】（平面図・断面図：第55図、遺物：第56・57図、図版10）

〔位置〕調査区中央部南東寄り、丘陵尾根上の標高32.5m付近に位置する。

〔重複〕竪穴住居跡、掘立柱建物跡との重複はないが、内部中央北東寄りは杉の根の攪乱で壊されている。

〔廃絶の原因〕火災によって焼失した竪穴住居跡である。

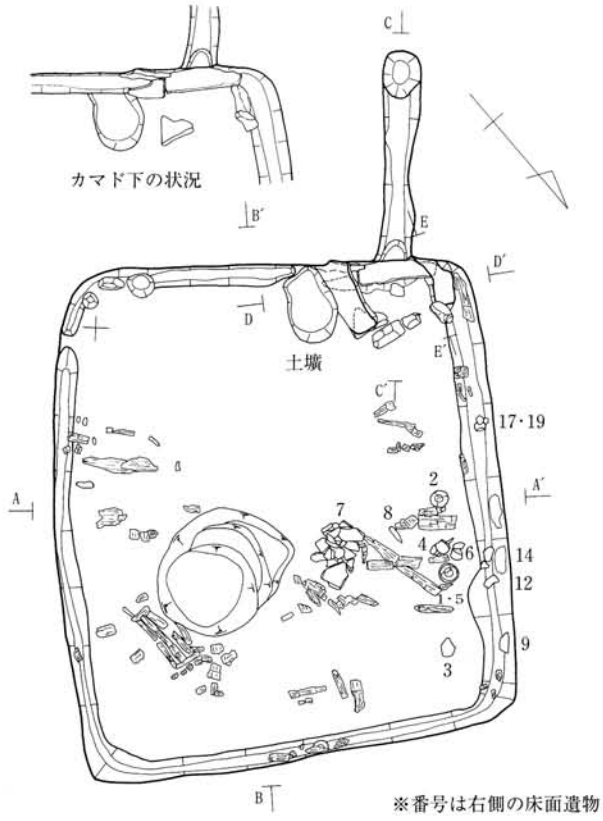
〔平面形・規模〕平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は南北が東辺で4.1m、西辺で3.7m、東西が北辺で3.5m、南辺で3.6mである。

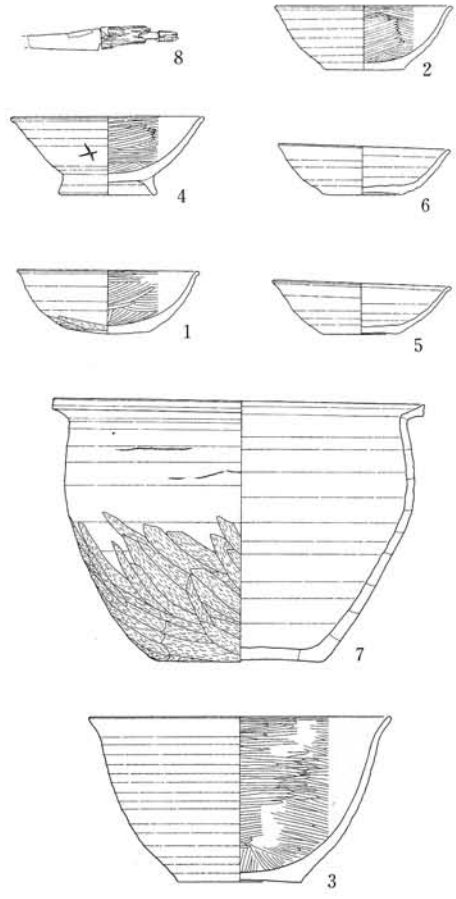
〔方向〕東辺でみると北で東に約33°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りが比較的よい西辺・北辺で30～35cm、残りの悪い東辺で12cm前後、南辺東側で10cm以下である。西辺では壁は約110°の傾斜でやや斜めに立ち上がり、北辺ではほぼ垂直に立ち上がる。東辺でもほぼ垂直に立ち上がるが、中央部では奥に抉るようにして立ち上がる。

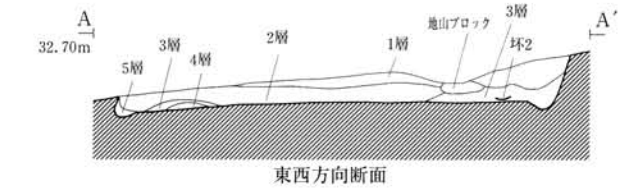
〔床面〕床面はほぼ平坦だが、北から南に向けてわずかに傾斜する。地山面（粘板岩礫層）を床面とする。南東部を除く床面上には炭化材が散在している。このうち４点の樹種同定を行い、北西部床面出土の土師器坏（１）・須恵器坏（５）と接した垂木材とみられる炭化材がムクノキ近似、攪乱近くの炭化材がネムノキ属、東周溝と床面と接する箇所の炭化材がカエデ属、北周溝内中央の炭化材がクリと同定された（付章１参照）。

北西部（カマドを上にみた場合、住居の右下側）の床面上から、完形の土師器坏（１・２）・高台坏（４）・埦（３）、須恵器坏（５・６）・鉢（７）、刀子（８）が火災当時の現位置をほぼ保ったま

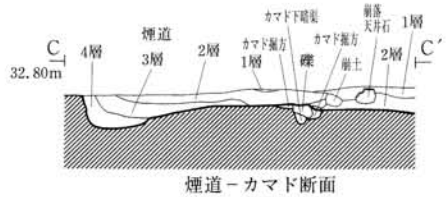




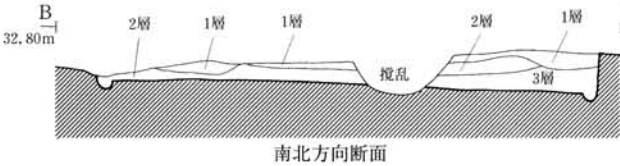
火災時の床面遺物（縮尺１/６）



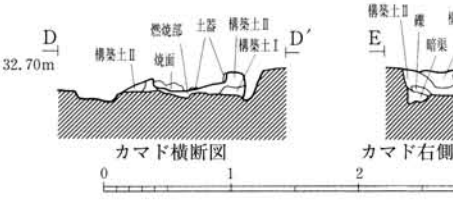
東西方向断面



煙道－カマド断面



南北方向断面



カマド横断図　カマド右側壁断面

住居跡	層　位	特　　徴
SI20	暗渠	カマド下の暗渠。にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1～3cmの炭片、焼土ブロックを多量に含む。長さ5cmの角材状の炭化材もある。人為堆積土。
	カマド掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。しまり・粘性あり。人為堆積土。
	カマド構築土Ⅰ	作り替え前のカマド構築土。黄褐色(10YR5/6)土。粘板岩礫片を構築材に用いる。径1～3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。
	カマド構築土Ⅱ	作り替えたカマド構築土。褐色(10YR4/4)土。径1～3cmの焼土ブロック・炭片、径1cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。
	カマド燃焼部	赤褐(2.5YR4/6)土。焼土を多量に含む。しまりあり。粘性なし。
	煙道１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。地山粒・炭化物を少量含む。しまりなし。自然堆積土。
	煙道２層	褐色(10YR4/4)土。径1～2cmの地山ブロック、炭化物を多量に含む。火災後の人為堆積土。
	煙道３層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。地山ブロックを多量に、炭化物を少量含む。しまりなし。火災後の天井崩落土。
	煙道４層	暗褐色(10YR3/4)土。地山ブロックを多量に含む。しまりなし。カマド使用中の自然堆積土。
	堆積土１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。地山粒・炭化物を少量含む。しまりなし。自然堆積土。
	堆積土２層	褐色(10YR4/4)土。地山小ブロック、炭化物を多量に含む。火災後の人為堆積土。
	堆積土３層	褐色(10YR4/4)土。地山小ブロック、炭化物をやや多く含む。火災後の人為堆積土。
	堆積土４層	黒褐色(10YR2/3)土。地山ブロックを多量に含む。火災時の自然堆積土。
	堆積土５層	炭化物層。火災時の自然堆積土。

第55図　ＳＩ20竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

まとみられる状態で出土した。西周溝底面から出土した完形の須恵器坏（16・17・19）もこれと接した箇所から出土したものであり、西辺壁際の棚に置かれていた坏が火災で焼け落ちたものである可能性がある。堆積土出土の土器もこの付近の上層から出土したものが多い。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕丘陵尾根の中軸線に直交するように、南辺の南西隅に寄せて付設されている。焼失住居跡なので、カマドの左側壁、右側壁、燃焼部、煙道、煙出しピットがよく残っていた。ただし、カマドの天井部は崩壊していた。

左側壁は長さ65cm、高さは奥で13cm、焚き口で13cm、右側壁は長さ53cm、高さは奥で20cm、焚き口で16cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.05mある。右側壁の外面は南西隅の壁と一連に著しく赤色に変化し、焼土化していた。本竪穴住居跡が火災によって焼失していることから、この赤変は火災によるものと考えられる。

カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、一度作り替えられている（古いカマドの構築土Ⅰ、新しいカマドの構築土Ⅱ）。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に4点、右側壁に2点残存していた。左側壁・右側壁の焚き口部の芯材に用いられた粘板岩板状礫片は、左側壁のものが長さ30cm、幅25cm、厚さ6cm、左側壁のものが長さ34cm、幅12cm、厚さ6cmで、それぞれ径約8cmの据穴に入れられて内側に傾くように設置されていた。

焚き口の燃焼部上からは、細長い粘板岩板状礫片1点（長さ45cm、幅14cm、厚さ6cm）が両側壁と直交するような状態で出土した。カマド天井部の芯材に用いられた粘板岩板状礫片が崩落したものとみられる。両側壁の焚き口に粘板岩板状礫片が内傾するように設置されていたことを考え併せると、焚き口は下部幅約85cm、内面の高さ約20cm、外面の高さ約28cm以上のかまくら状になっていたと考えられる。

カマド内の天井崩壊土には、カマド天井部本体やその構築材とみられる黄褐色粘質土ブロックや粘板岩板状礫片が含まれていた。この黄褐色粘質土ブロックの厚さは8cmあり、下面が赤く焼けて天井内側の壁が残っていた。天井部はこれよりもあまり厚くならない程度であったと考えられる。

燃焼部は奥行き55cm、幅55cm、奥壁高5cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてなだらかに窪み、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部奥壁の下にはカマド両側の周溝（幅16cm、深さ10cm）が一連で続く。それをカマド構築時にカマド奥壁に近いカマド掘方とともに人為的に埋め戻して暗渠としてから、その上に燃焼部奥壁に沿うように粘板岩板状礫片（長さ58cm、幅17cm、厚さ8cm）を横置きに据えている。そして土師器甕体部破片を入れ込むとともに、その上を黄褐色粘質土で薄く整地し、その上を燃焼部としていた。

煙道はカマド奥壁より外に向かって1.4m延び、その先に煙出しピットが付設されている。煙道は入り口幅27cm、最大幅28cmで、トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ12cm残存する。煙道の底面はほぼ水平に延びた後、煙出しピットに向けて傾斜している。煙道の入り口から長さ20cm

にわたって底面と側壁が被熱のために著しく赤色硬化していた。煙出しピットは長径37cm、短径30cm、深さ27cmあり、煙道底面よりも17cm程深く窪めている。

〔周溝〕各辺に深さ５～７cmの周溝が巡る。北辺・東辺・南辺は幅15cm前後だが、西辺は25cm前後とやや幅広い。周溝内からは火災時に焼け落ちた炭化材・炭化物や完形に近い須恵器坏（16・17・19）が出土し、西周溝の底面は西側壁と一連に焼け焦げていた。本竪穴住居の火災時には周溝は開渠であったことがわかる。なお、周溝はカマド両側壁の際で途切れるが、カマドの下にも周溝が続く。この箇所はカマド構築時に人為的に埋め戻され、その上に粘板岩板状礫片が置かれてからさらに整地され、暗渠となっている。

〔土壙〕カマド左側、カマド左側壁に接して１基検出された。平面形は長径60cm、短径40cmの楕円形で、深さ８cmある。

〔堆積土〕５層に分けられ、堆積土４・５層が火災時に焼け落ちた自然堆積層、堆積土２・３層が火災後に埋め戻した人為堆積層、堆積土１層がその後の自然堆積層とみられる。

〔出土遺物〕床面から完形の土師器坏２点（１・２）、土師器椀１点（３）、土師器高台坏１点（４）、須恵器坏２点（５・６）、須恵器鉢１点（７）、刀子１点（８）が出土した。これらはいずれも火災時に床面上に置かれていたものであり、ほぼ現位置を保っているとみられ、北西部に集中している。また、西周溝底面からは完形の須恵器坏３点（16・17・19）が出土した。これらは火災時に西辺の棚の上に置かれていたと考えられる土器である。このうち土師器はいずれもロクロ調整で、土師器坏・椀、須恵器坏は底部が回転糸切り無調整（２・３・５・６・16・17・19）のものが主体を占める。

火災後に人為的に埋められた堆積土２・３層からは、ほぼ完形や残存率の高い土師器坏２点（９・10）、土師器高台坏２点（12・13）、土師器椀１点（14）や刀子破片１点（20）の他、土師器坏・甕（15）、須恵器坏・甕の破片などが少数出土した。堆積土１層からは残存率の高い土師器坏１点（11）、須恵器坏１点（18）の他、土師器坏、須恵器坏・蓋・甕の破片が少数出土した。このうち土師器坏はいずれもロクロ調整であるが、甕にはロクロ調整のものの他、非ロクロ調整のものも少数含まれる。土師器坏、須恵器坏は底部が回転糸切り無調整のもの（９・10・18）が主体を占める。

カマド下暗渠からはロクロ調整の土師器甕口縁部破片、カマド燃焼部下整地からはロクロ調整調整の土師器甕体部破片、カマド崩壊土からはロクロ調整の土師器甕体部破片、煙道部１層からは須恵器甕破片が各１点出土した。

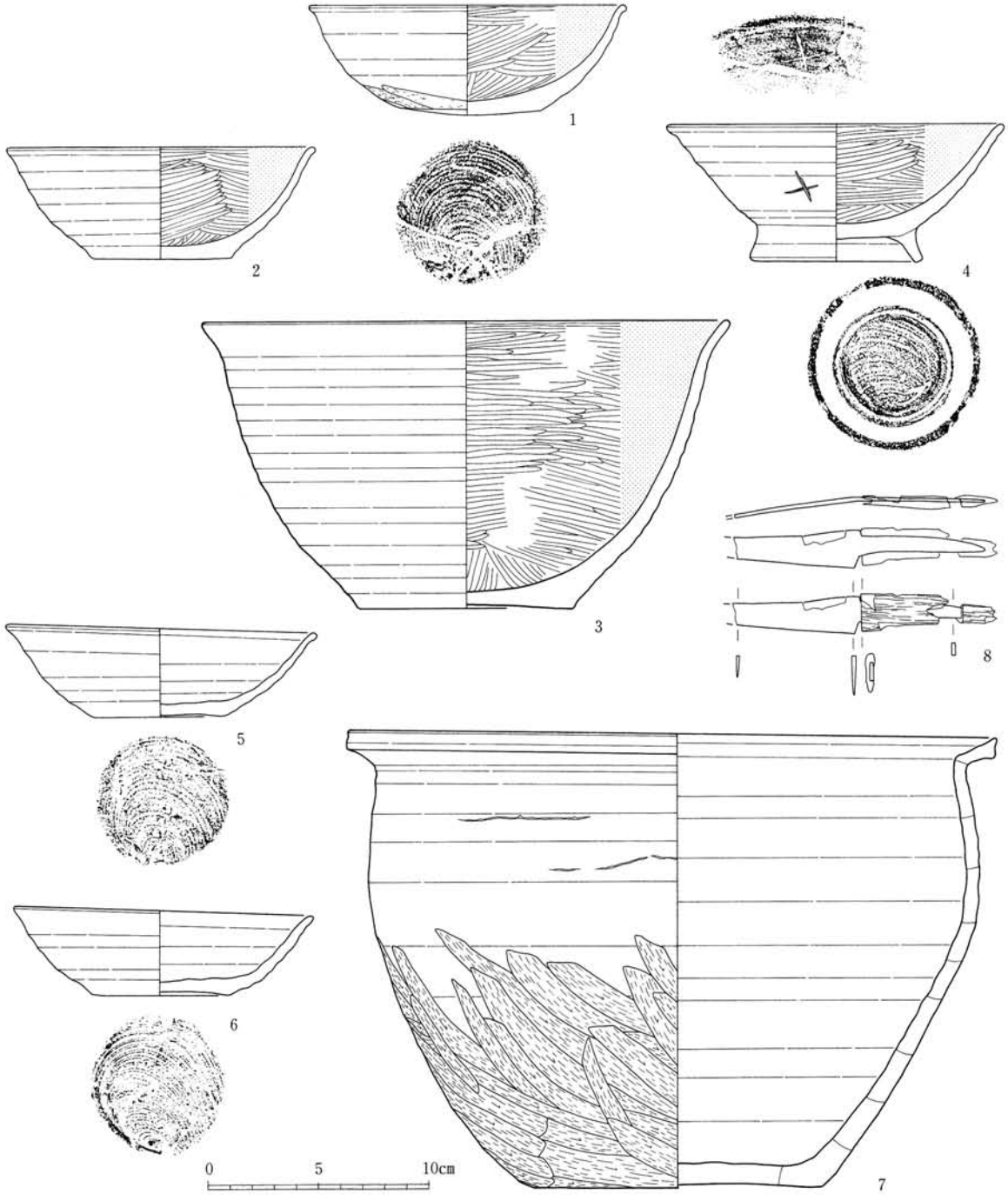
他には堆積土１・２層から炭化した種子（モモ、クリ）破片が少数出土した。

【ＳＩ36竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第58図）

〔位置〕調査区中央部南東寄り、丘陵尾根上やや西寄りの標高32m付近に位置する。ＳＩ20竪穴住居跡の南約３mに位置する。

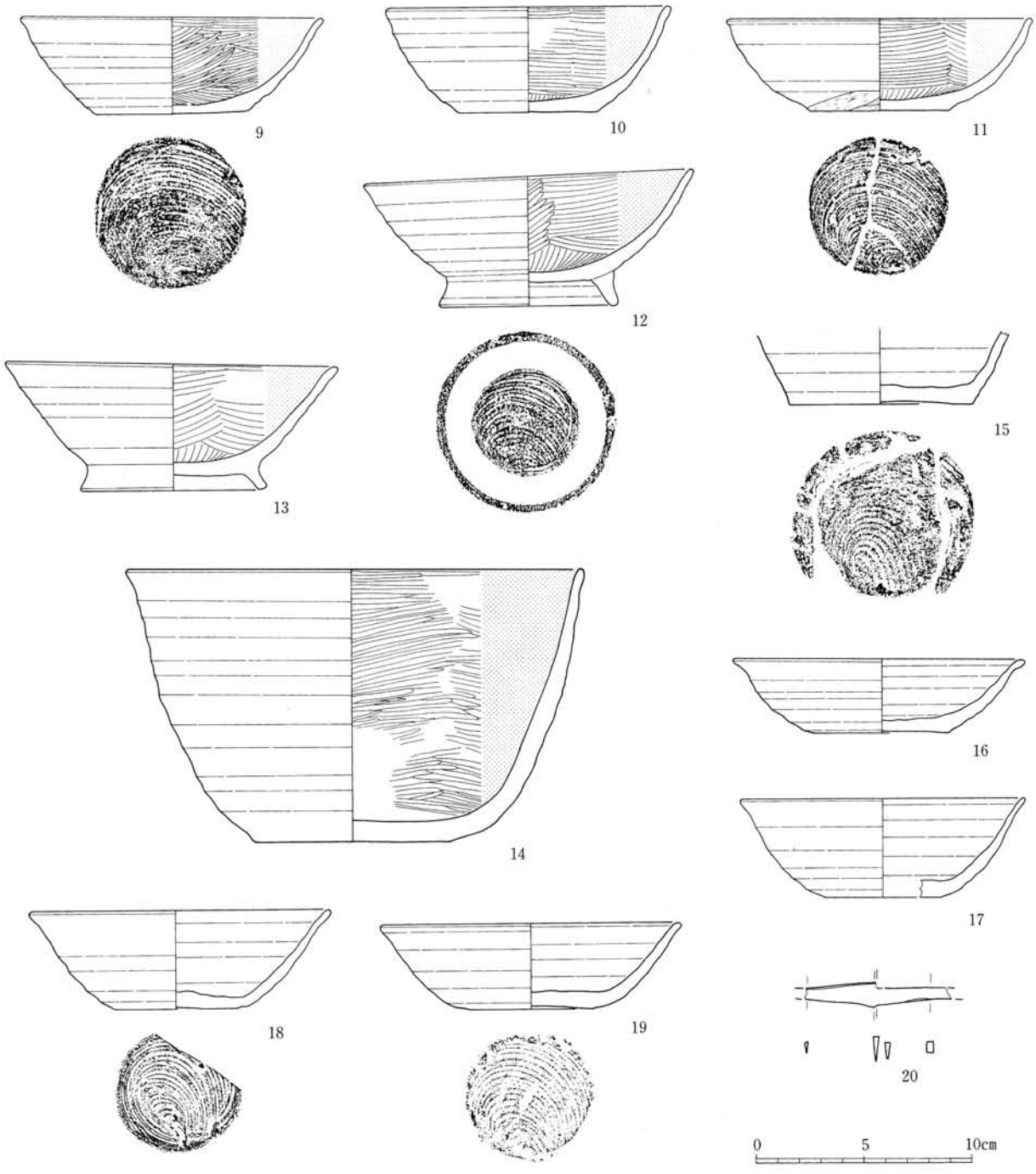
〔重複〕竪穴住居跡、掘立柱建物跡との重複はない。南半部は床面下まで大きく削平され、残された北半部にも杉の根の攪乱が大きく入っている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形とみられ、規模は東西が北辺で約4.0m、南北が東辺で2.3m以上ある。



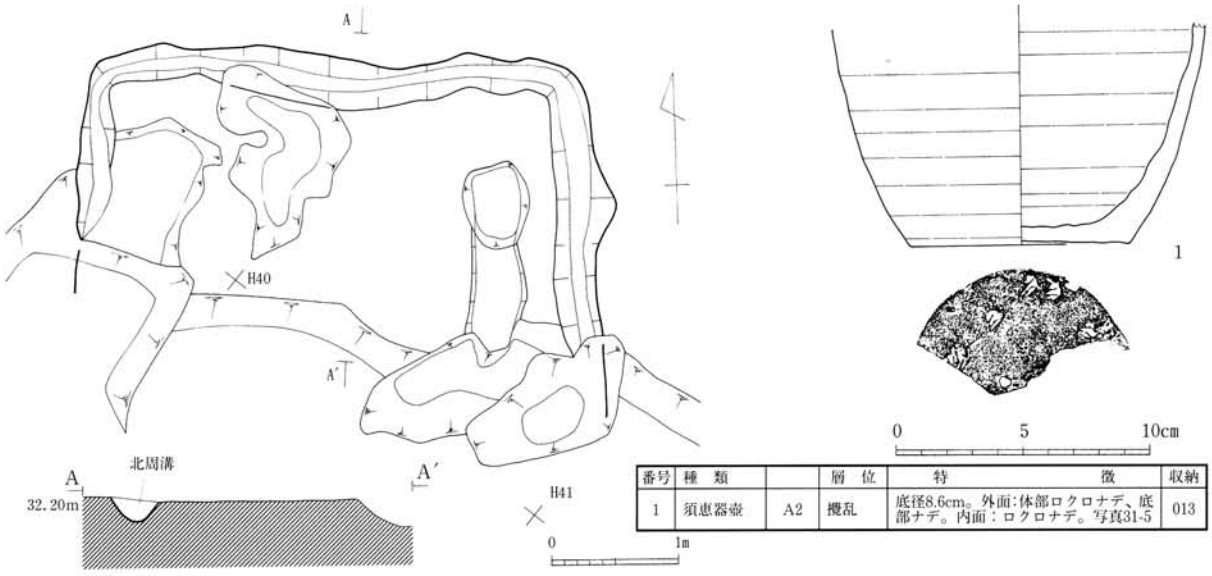
番号	種　類	分類	層位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ⅡA	床面	14.4	6.4	5.0	完形	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→体下部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-10	007
2	土師器坏	ⅡB	床面	14.0	6.2	5.1	完形	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-11	007
3	土師器甕	Ⅱ	床面	24.0	9.7	13.1	2/3	ロクロ調整。外面：底部摩滅、一部に手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-18	008
4	土師器高台坏	ⅡB	床面	15.3		6.3	完形	高台径7.8cm。ロクロ調整。外面:底部回転糸切り→付高台→ロクロナデ→体中央に焼成前刻書「×」。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-15 35-16	007
5	須恵器坏	D1	床面	14.1	6.0	4.0	完形	外面：底部回転糸切り無調整。重ね焼き痕・炭化物。焼成堅緻。	24-21	007
6	須恵器坏	D1	床面	13.6	6.2	3.9	完形	外面：底部回転糸切り無調整。炭化物。著しく焼き歪む。焼成堅緻。	24-22	007
7	須恵器鉢	A3	床面	29.3	13.1	20.6	完形	外面：ロクロナデ→体下部手持ちヘラケズリ、底部ナデ。内面：ロクロナデ→体下部～底部指ナデ。	25-5	008
8	刀子		床面				破片	身部～茎部破片。刃先欠損。茎部に木質一部残存。平造り角棟。棟関・刃関。現存長11.9cm。刃元幅1.7cm。茎元幅0.9cm。茎部長5.6cm。棟厚2mm。	37-14	029

第56図　ＳＩ20竪穴住居跡出土遺物(1)－火災時の床面遺物



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
9	土師器坏	ⅡB	西周溝壁際	14.0	7.1	4.5	完形	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成やや不良。	24-12	007
10	土師器坏	ⅡB	堆積土3層	13.2	6.4	4.9	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良。	24-13	007
11	土師器坏	ⅡA	堆積土1層	14.2	6.4	4.3	3/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→体下部一部に手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	24-14	007
12	土師器高台坏	ⅡB	周溝内3層	15.3		6.1	3/5	高台径8.3cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→再びロクロナデ。内面：口縁～底部ヘラミガキ→黒色処理。焼成良好。	24-16	007
13	土師器高台坏	ⅡB	堆積土2層	15.4		5.9	1/2	高台径8.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→再びロクロナデ。内面：口縁～底部ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良。	24-17	007
14	土師器甕	Ⅱ	周溝内3層	21.3	9.0	12.7	1/2	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→一部ナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良。	24-19	008
15	土師器甕	Ⅱ	堆積土2層		8.5		破片	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。焼成不良。	24-20	007
16	須恵器坏	D1	西周溝底面	13.5	6.2	3.5	3/4	外面：底部回転糸切り無調整。焼成堅緻、重ね焼き痕。	25-1	007
17	須恵器坏	D1	西周溝底面	13.2	5.4	4.6	1/3	外面：底部回転糸切り無調整。焼成不良。	25-2	007
18	須恵器坏	D1	堆積土1層	14.4	5.7	4.6	2/5	外面：底部回転糸切り無調整。焼成不良。	25-3	007
19	須恵器坏	D1	西周溝底面	14.0	5.7	4.0	2/5	外面：底部回転糸切り無調整。重ね焼き痕。焼成堅緻。	25-4	007
20	刀子		周溝内3層				破片	身部～茎部破片。刃先と茎を一部欠損。平造り角棟。棟関・刃関。現存長6.8cm。刃元幅1.1cm。茎元幅0.8cm。棟厚3mm。		029

第57図　ＳＩ20竪穴住居跡出土遺物(2)－火災後の床面遺物



番号	種　類		層　位	特　　徴	収納
1	須恵器壺	A2	攪乱	底径8.6cm。外面:体部ロクロナデ、底部ナデ。内面：ロクロナデ。写真31-5	013

周溝堆積土	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.3～3cmの焼土ブロック・粘板岩風化礫片を多く含む。上部に大きめの地山ブロックを含む。

第58図　ＳＩ36竪穴住居跡平面図・断面図（１/60)、出土遺物

〔方向〕東辺でみると北で西に約３°偏る。

〔壁〕床面まで完全に削平され、壁は残っていない。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩礫層）を床面とする。

〔周溝〕北辺と東辺・西辺の一部で幅約30cm、深さ20～25cmの周溝を検出した。周溝内は焼土ブロックを多く含む自然堆積土である。火災で焼失した竪穴住居跡であり、機能時には周溝は開渠であったとみられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されていたとみられる。

〔その他〕主柱穴、壁柱穴はない。

〔堆積土〕壁が残っていないため、周溝内にのみ堆積する。

〔出土遺物〕周溝内から摩滅した土師器甕体部破片、須恵器甕体部破片、攪乱から須恵器壷破片（１）が少数出土した。

【ＳＩ21竪穴住居跡】（平面図：第59図、断面図：第60図、遺物：第61～65図、図版３－２、11－１～３）

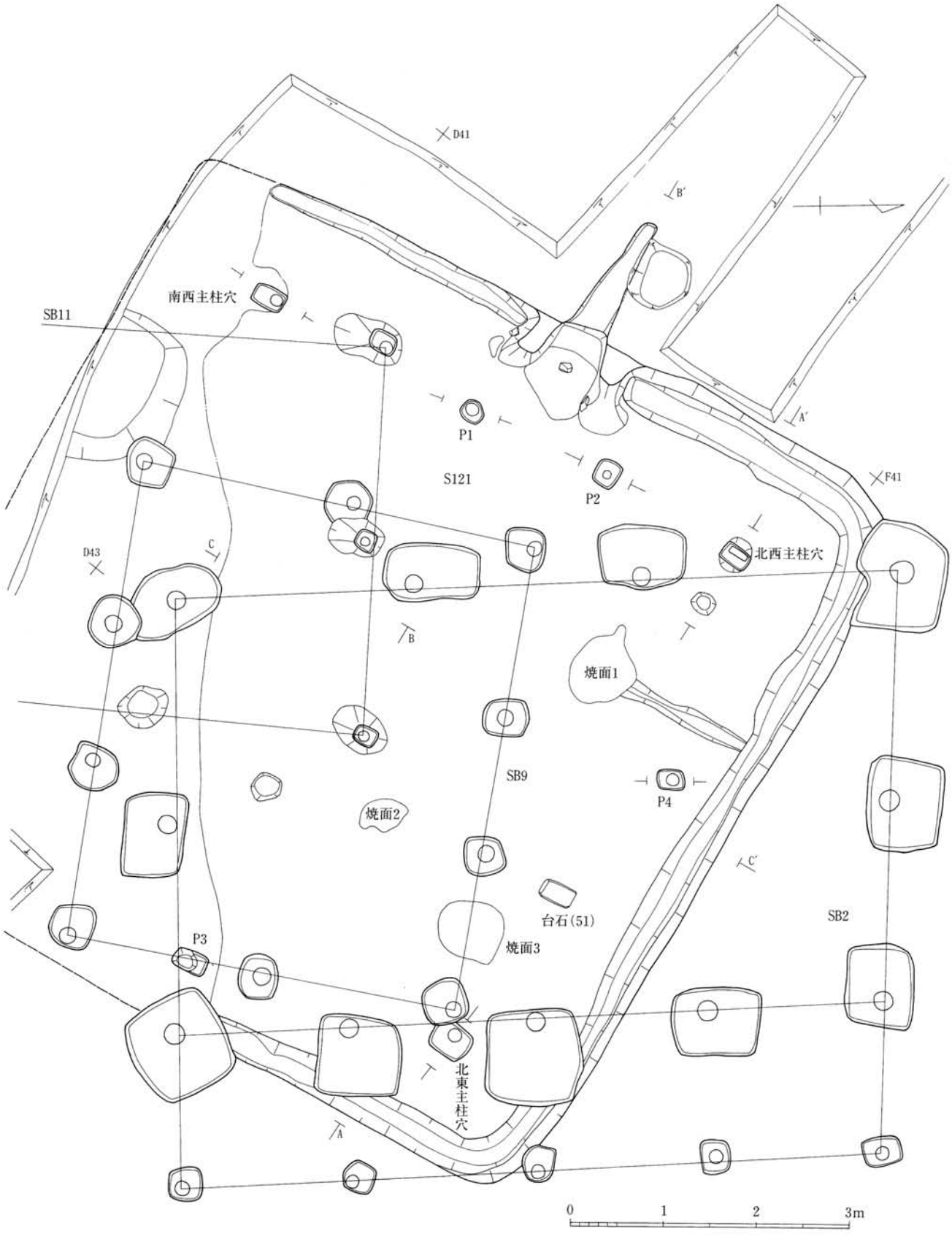
〔位置〕調査区南半部、丘陵尾根上西寄りの標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕SB2・9・11掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形とみられ、規模は南北が西辺（カマドの付設された辺）で7.8m以上、東西が北辺で約8.8mである。主柱穴と周溝との位置関係からみて、南北は約8.7mと推定される。

〔方向〕西辺でみると北で東に約31°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい北西隅で63cm、北辺で30～60cm、西辺のカマド右脇で37cm、北東隅で26cmある。北辺中央で壁は約110°の傾きでやや斜めに立ち上がる（第60図断面Ｃ－Ｃ'）。西辺の北西隅寄りでは約100°の傾きでやや斜めに立ち上がる（第60図断面Ａ－Ａ'）。西辺のカマド左側では17cm以下、東辺では15cm以下となり、東辺の南半部、南西隅、南辺は床面

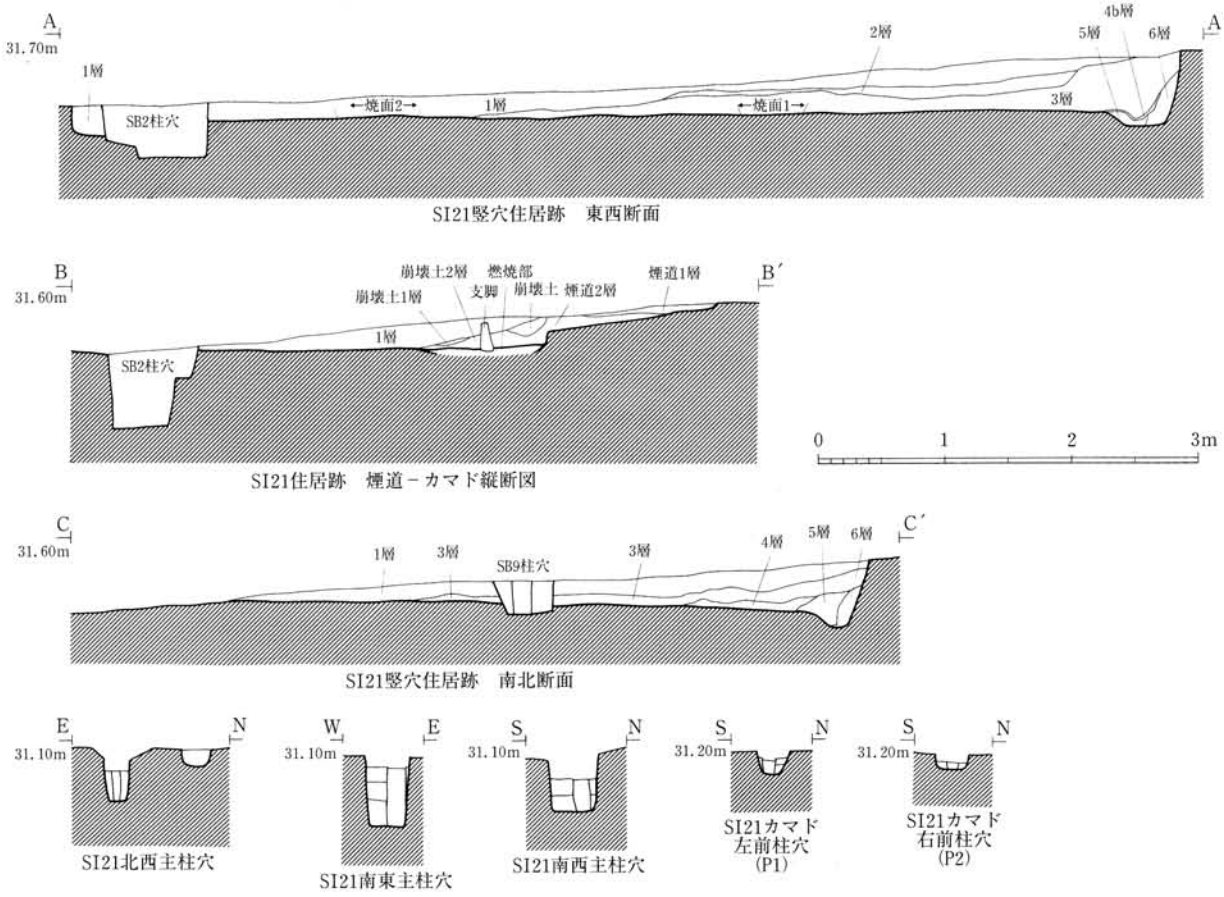


第59図　ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ２・9・11掘立柱建物跡平面図（１/60）

下まで削平され、壁は残ったいなかった。この箇所では周溝も底面以下まで削平され、検出されなかった。

〔床面〕地山面（径５～10cmの粘板岩板状礫片を主体とし、その隙間に褐色土を少し含む粘板岩風化礫層、または粘板岩岩盤）を床面とする。北東隅に向けてわずかに傾斜するが、床面はほぼ平坦である。

〔主柱穴〕南西・北西・北東主柱穴３箇所を検出した。南東主柱穴は調査区外に位置し、竪穴住居跡の対角線上に４箇所の主柱穴があるとみられる。北西主柱穴は西辺から約1.4m、北辺から約1.4m離れ、北東主柱穴は東辺から約1.3m、北辺から約1.5m離れ、南西主柱穴は西辺から約1.2m離れて



住居跡	層　位	特　　徴
SI21	主柱穴掘方	褐色(7.5YR3/3)土。径2～6cmの粘板岩礫片、径2～5cmの地山明黄褐色(10YR6/6)土ブロックを多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	褐色(7.5YR4/3) 土。径0.5～1cmの粘板岩礫片、地山明黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまり悪い。自然堆積土。
	カマド前柱穴掘方	褐色(7.5YR3/3)土。径2～6cmの粘板岩礫片、径2～5cmの地山明黄褐色(10YR6/6)土ブロックを多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
	カマド前柱穴柱痕跡	褐色(7.5YR4/3) 土。径0.5～1cmの粘板岩礫片、地山明黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまり悪い。自然堆積土。
	カマド構築土	黄褐色(10YR5/6)土。粘板岩礫片を構築材に用いる。径1～3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。
	カマド燃焼部	赤褐色(2.5YR4/6)土。焼土を多量に含む。しまりあり。粘性なし。
	カマド崩壊土１層	褐色(7.5YR4/6)土。径2～4cmの地山黄色粘土ブロックを多く、径５mmの焼土粒を少し含む。
	カマド崩壊土２層	暗赤褐色(5YR3/6)土。径1～3cmの焼土ブロックを多く含む。
	煙道１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1～3cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりなし。
	煙道２層	褐色(7.5YR4/3)土。径1～2cmの焼土粒、粘板岩風化礫片を多く含む。
	埋土１層	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土２層	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。炭片、焼土粒を含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土３層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～4cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土４層	暗褐色(10YR3/3)土。径0.3～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土４b層	暗褐色(7.5YR3/3)土。炭片、焼土粒を多く含む。径0.3～1cmの粘板岩風化礫片を少し含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。
	埋土５層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.3～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土６層	黒褐色(10YR3/2)土。径0.5～4cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。

第60図　ＳＩ21竪穴住居跡断面図（１/60）

いる。掘方は南西主柱穴が長辺35cm、短辺25cmの長方形で、深さ50cm、北西主柱穴が長辺33cm、短辺22cmの長方形で、深さ43cm、北東主柱穴が長辺45cm、短辺35cmの隅丸長方形で、深さ55cmある。柱痕跡は南西主柱穴が径13cmの円形、南東主柱穴が径15cmの円形である。北西主柱穴の柱痕跡は長方形で、幅21cm、厚さ6cmの角材を用いているとみられ、廃絶時に切り取られている。柱間寸法は南西主柱穴－北西主柱穴間が5.8m、北西主柱穴－北東主柱穴間が6.1mである。

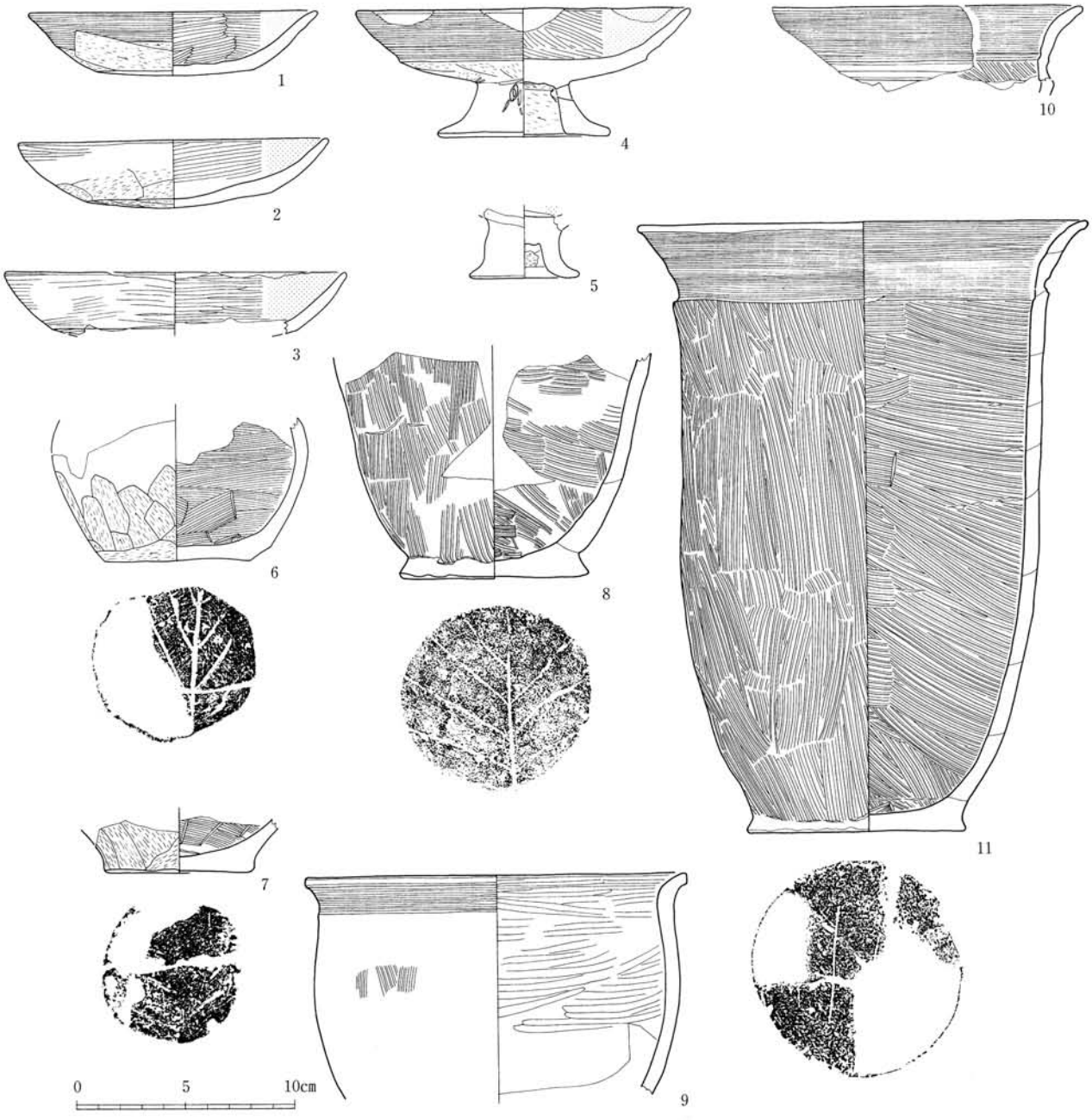
〔その他の柱穴〕主柱穴以外の柱穴として、カマド左前でP1柱穴、カマド右前でP2柱穴、東辺中央に近い箇所でP3柱穴、北辺中央に近い箇所でP4柱穴を検出した。掘方はP1柱穴が長径27cmの歪んだ円形に近く、深さ19cm、P2柱穴が長辺30cm、短辺27cmの隅丸正方形に近く、深さ12cm、P3柱穴が長辺約30cm、短辺25cmの長方形で、深さ18cmある。P1柱穴で径12cm、P2柱穴で径8cmの柱痕跡を確認した。P3柱穴は廃絶時に柱が抜き取られ、柱痕跡を確認できなかった。掘方の平面規模は主柱穴とさほど変わらないが、深さは主柱穴よりも30cm程浅く、柱痕跡の径も小さい。P1・2柱穴間の柱間寸法は1.6mで、P1・2柱穴は南西主柱穴－北西主柱穴を結ぶ線上にあり、カマド中軸線から80cmの等距離にある。また、P3柱穴はカマド中軸線の延長線上にある。そして、北東主柱穴と未検出の南東主柱穴を結ぶ線上からやや東辺近くに寄ると推定される。

〔カマド〕西辺のほぼ中央に付設されている。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ一致する。三陸自動車道路計画路線幅の際にあり、削平されない箇所なので、断ち割り調査は行わなかった。カマドの左側壁、右側壁、燃焼部、煙道がよく残っていたが、カマドの天井部は廃絶時に壊されていた。煙出しピットは削平されて検出されなかった。

左側壁は長さ67cm、高さは奥で22cm、焚き口で8cm、右側壁は長さ92cm、奥で31cm、焚き口で22cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.55mある。燃焼部は奥行き1.0m、幅65cm、奥壁高12cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてなだらかに窪み、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部の中央には支脚石（50）が据えられていた。この支脚石は砂岩製で、2面を大きく分割して頂部が平坦な四角錐状に整形している。燃焼部内に2cm埋め込んでいたので、燃焼部上面から支脚石の天端までの高さは22cmであった。支脚石は重量感あふれ、硬質なためか、被熱による表面の変色はほとんど認められない。

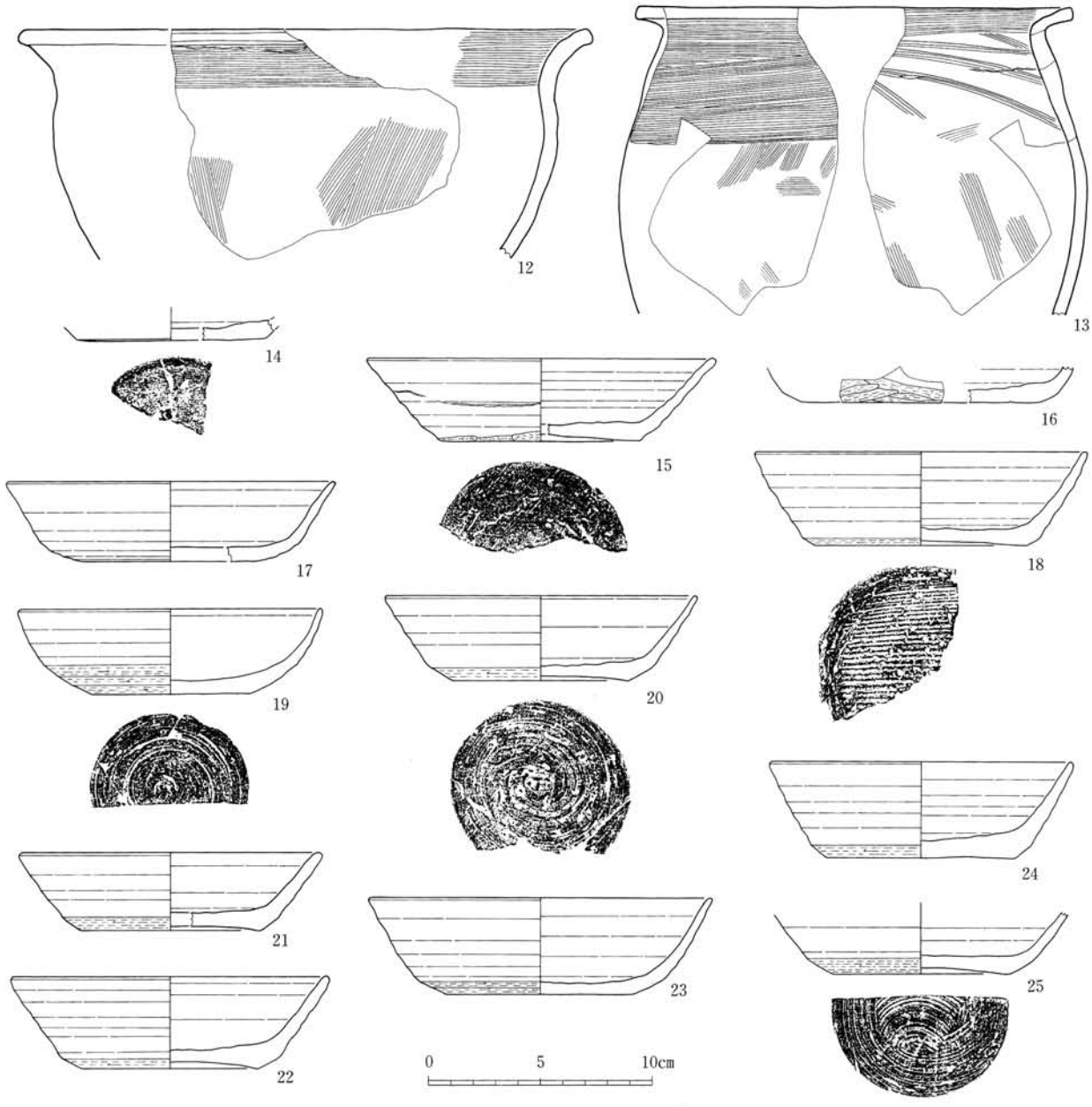
煙道の向きは北西で、丘陵尾根の中軸線線とほぼ一致する。煙道はカマド奥壁より外に向かって上向きに約7°傾斜しながら1.35m延びる。煙道の最大幅の位置は入り口にある。ここで幅42cmあり、次第に先細りとなる。煙道入り口付近の側壁は、火熱のために赤色硬化していた。トンネル式の煙道天井部は削平され、深さ10cm残存する。煙出しピットは検出されなかったが、残存する煙道先端部の底面が3cm程深く窪むことから、ここに煙出しピットが付設されていたと考えられる。

〔周溝〕北辺、西辺、東辺で、幅40～50cm、深さ10cm前後の周溝を検出した。西辺ほぼ中央に付設されているカマドの両側で周溝が途切れている。カマドの断ち割りを行っていないため、カマド下に周溝が連続していたか不明である。カマド左側の西辺では幅25cm程だが、上部を削平されて残りが悪いためと考えられる。周溝内の堆積土は2層に分かれ（堆積土5・6層）、人為堆積土である。堆積状況からみて、堆積土6層は周溝の掘方の可能性もある。



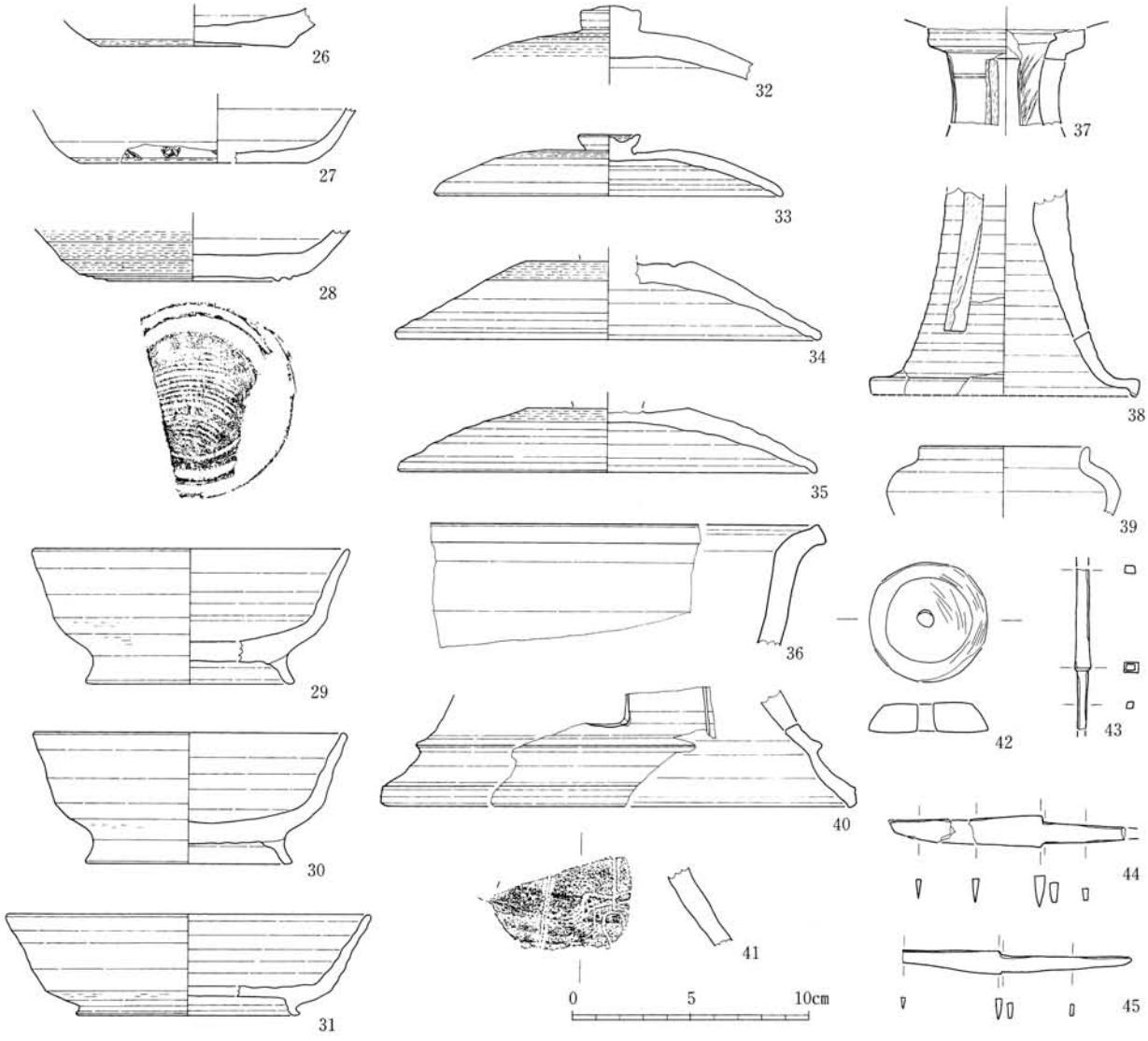
番号	器　種	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ＩB2	埋土２層	1/2	口径13.2cm。底径7.1cm。器高2.9cm。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ→体下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良。	25-6	009
2	土師器坏	ＩB2	埋土２層	3/5	口径14.2cm。底径8.4cm。器高3.1cm。丸底。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良。	25-7	009
3	土師器坏	ＩB2	埋土２層	1/4	口径15.6cm。底径10.1cm。器高約3.3cm。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁～底部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。胎土に海綿骨針を含む。焼成不良。		009
4	土師器高坏		周溝	3/5	口径15.3cm。脚部径7.8cm。脚部高2.5cm。器高5.9cm。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体下部手持ちヘラケズリ。脚部ナデ→透かし。縦長凸レンズ状の透かし４単位。脚部接地面ヨコナデ。内面：口縁～底部ヘラミガキ→黒色処理。脚部手持ちヘラケズリ。焼成不良。	25-8	009
5	土師器高坏		埋土１層	破片	底部～脚部破片。外面：脚部ケズリ、摩滅。裾部ヨコナデ。内面：底部ヘラミガキ→黒色処理。脚部ヘラケズリ、ナデ。	25-9	009
6	土師器壺	Ｉ	埋土２層	1/2	体部～底部完形破片。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕。体下部手持ちヘラケズリ、体上部ナデ。内面：ヘラナデ。	25-10	009
7	土師器甕	ＩA	埋土１層	破片	胴下部～底部破片。底径6.8cm。外面：ナデ状のヘラケズリ。胴部ヘラケズリ。内面：ヘラナデ→黒色処理。		009
8	土師器甕	ＩA	カマド崩壊土２層	破片	長胴甕胴下部～底部破片。底径8.6cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕。胴部ハケメ。内面：胴部～底部ハケメ。内面胴部に炭化物付着。		009
9	土師器鉢	ＩB2	埋土１層	1/4	口縁～体部破片。口径17.6cm。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部ハケメ。内面：ヘラミガキ。	25-11	009
10	土師器甕	ＩA	周溝	破片	口縁部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ。内面：口縁ヨコナデ＋横位沈線、胴部ハケメ。		009
11	土師器甕	ＩA	埋土１層	3/4	長胴甕。口径20.6cm。底径10.0cm。器高28.0cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕。胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面：胴部～底部ハケメ→口縁ヨコナデ。胴部に煤・炭化物付着。焼成良好。	25-12	016

第61図　ＳＩ21竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
12	土師器鉢	I B2	埋土２層	25.6			破片	口縁～体部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部ナデ。内面：口縁ヨコナデ、体部摩滅。	25-14	009
13	土師器甕	I B1	埋土１層	19.2			破片	口縁～胴部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、胴上部ヨコナデ、胴下部ナデ。内面：口縁ヨコナデ、胴上部ヘラナデ、胴下部ナデ。	25-13	009
14	須恵器坏	A1	埋土２層		8.4		破片	外面：底部ヘラ切り→ナデ。焼成不良。		009
15	須恵器坏	B4	埋土１層	15.6	8.8	3.7	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部手持ちヘラケズリ。体部に粘土紐積み上げ痕。焼成良好。	26-1	009
16	須恵器坏	A5	埋土１層		10.8		破片	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部手持ちヘラケズリ。		009
17	須恵器坏	A2	埋土２層	14.7	7.6	3.6	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。火襷痕。焼成堅緻。	26-2	009
18	須恵器坏	A3	埋土２層	14.8	9.4	4.2	2/5	外面：底部静止糸切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。	26-3	009
19	須恵器坏	D2	埋土１層	13.6	7.0	3.8	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面：平滑なロクロナデ。焼成良好。	26-4	009
20	須恵器坏	A3	埋土１層	14.0	7.8	3.8	1/2	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。	26-5	009
21	須恵器坏	A3	埋土２層	13.6	8.0	3.5	1/2	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。	26-6	009
22	須恵器坏	A3	埋土３層	14.2	7.8	4.1	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。	26-7	009
23	須恵器坏	A3	埋土２層	15.4	8.4	4.4	1/4	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。	26-8	009
24	須恵器坏	A3	埋土１層	13.6	8.4	4.3	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。	26-9	009
25	須恵器坏	A3	埋土１層		7.8		<1/2	外面：底部回転糸切り→体下部～底部外周回転ヘラケズリ。焼成良好。		009

第62図　ＳＩ21竪穴住居跡出土遺物(2)



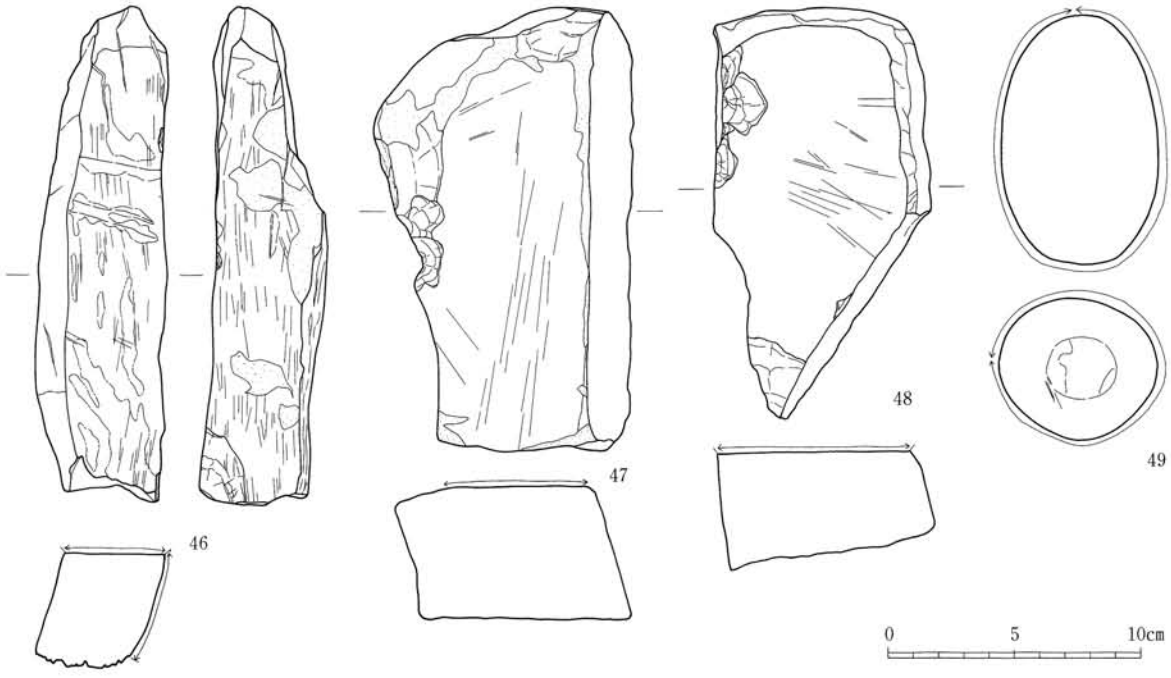
番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
26	須恵器坏	A3	埋土２層	破片	底部完形破片。底径8.0cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。		009
27	須恵器坏	A3	埋土１層	破片	底径7.6cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。体下部にヘラ記号？。焼成良好。	26-10	009
28	須恵器高台坏	C	埋土２層	破片	外面：底部回転糸切り→体下部回転ヘラケズリ→削り出し（深いロクロメ）による二重の疑高台。焼成不良。	26-11	009
29	須恵器高台坏	B1	埋土２層	1/4	口径13.4cm。高台径8.8cm。器高5.8cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。火襷痕。焼成堅緻。		009
30	須恵器高台坏	B1	埋土１層	1/2	口径13.2cm。高台径8.7cm。器高5.6cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。火襷痕。重ね焼き痕。焼成堅緻。	26-12	009
31	須恵器高台坏	A1	埋土２層	1/4	口径15.4cm。高台径9.4cm。器高4.3cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。灰かぶり。焼成良好。	26-13	009
32	須恵器蓋		埋土１層	破片	つまみ（完形）～体部破片。頂部の丸い宝珠状つまみ（径2.6cm、高1.0cm）。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成不良。	26-14	009
33	須恵器蓋	A1 a	埋土２層	1/4	口径14.8cm。器高2.6cm。低い宝珠状つまみ（径2.6cm、高7mm）。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成堅緻。	26-15	009
34	須恵器蓋	A1 a	埋土２層	1/4	口径18.0cm。つまみ欠損。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成堅緻。	26-16	009
35	須恵器蓋	A1 a	埋土２層	1/3	口径17.6cm。つまみ欠損。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成堅緻。	26-17	009
36	須恵器鉢	A2	埋土１層	破片	口縁～体部破片。両面：ロクロナデ。焼成良好。	26-18	009
37	須恵器高坏	B	検出面	破片	坏部が接合面で剥落した脚部破片。接合面に２条の隆線巡る。坏部底面２段構成。脚部に長方形透かし４単位。外面：ロクロナデ→透かし→ナデ、透かし面手持ちヘラケズリ。内面：絞り目、ロクロナデ。焼成堅緻。	26-19	009
38	須恵器高坏		埋土２層	破片	脚部破片。ロクロナデ→縦長長方形の透かし（幅1.4cm、ヘラケズリ）３単位。焼成不良。	26-20	009
39	須恵器壺	B1	埋土１層	破片	口縁～体部破片。口径7.2cm。最大径9.8cm。口頸部が短く（高8mm）直立する。両面：ロクロナデ。焼成堅緻。	26-21	009
40	円面硯		埋土１層	破片	脚部破片。脚部径16.0cm。ロクロナデ、横位隆帯、長方形透かし、縦位沈線。焼成堅緻。	26-22	009
41	円面硯		埋土１層	破片	脚部破片。外面：ロクロナデ→ヘラ状工具による蓮花の蕾と縦位沈線、十字？透かし（拓本左上角隅に左横方向に延びる透かしの右下隅が残存）。内面：ロクロナデ。焼成堅緻。40と同一固体か。	26-23	009
42	土製紡錘車		埋土３層	完形	土製。土師質。裁頂円錐形。断面薄台形。広径5.0cm。狭径3.7cm。厚さ1.3cm。軸孔径0.7cm。重量29ｇ。表面摩滅、ヘラミガキ。胎土に海綿骨針を含む。焼成不良。	36-7	026
43	鉄鏃		埋土３層	破片	箆被～茎部破片。鏃身欠損。箆被に両関。現存長6.7cm。箆被断面6×4mm方形。茎断面4×3mm方形。		029
44	刀子		埋土３層	破片	身部～茎部破片。平造り角棟。棟関・刃関。現存長9.6cm。刃元幅1.4cm。茎元幅0.9cm。棟厚4mm。	37-17	029
45	刀子		埋土３層	破片	身部～茎部破片。平造り角棟。棟関・刃関。現存長9.6cm。刃元幅1.0cm。茎元幅0.7cm。棟厚3mm。		029

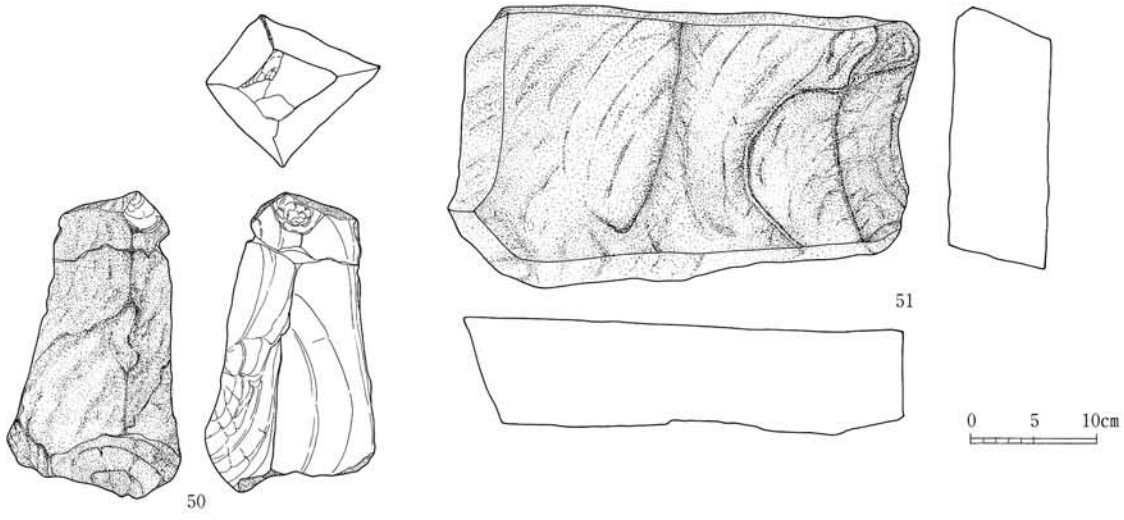
第63図　ＳＩ21竪穴住居跡出土遺物(3)

〔焼面〕北半部の３箇所で焼面（焼面１～３）を検出した。焼面１は長径80cm、短径70cmの不整形で、焼面から北周溝に向けて幅15～21cm、深さ5cm以下の浅い溝が長さ1.4m延びている。焼面２は長径55cm、短径35cmの不整形、焼面３は長径72cm、短径63cmの不整形である。焼面２の北西50cmの床面上から、台石１点（51）が出土した。焼面２と関連があるのかもしれない。

〔堆積土〕６層に分かれ、廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕床面からは台石１点（51）、非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏の破片が数点出土し





番号	種　類	層　位	特　　徴	写真	収納
46	砥石	埋土１層	粘板岩製。角柱状。中砥。２面研磨・擦痕。長さ19.6cm。幅5.3cm。厚さ4.7cm。	38-8	033
47	砥石	埋土１層	細粒砂岩製。角柱状。中砥。１面研磨・擦痕。長さ17.8cm。幅10.3cm。厚さ5.3cm。	38-16	033
48	砥石	埋土３層	砂岩製。角柱状。中砥。１面研磨・擦痕。長さ16.4cm。幅8.6cm。厚さ4.7cm。	38-17	033
49	磨石	埋土１層	細粒砂岩製。楕円体。全面研磨。長さ10.0cm。幅6.3cm。厚さ5.6cm。		033
50	支脚石	カマド内	硬質で重量のある砂岩製。四角錐状。２面分割面、２面自然面。長さ24.0cm。幅13.5cm。厚さ12.0cm。		037
51	台石	床面	凝灰質砂岩製。扁平な直方体状。長さ26cm。幅21.5cm。厚さ13.0cm。全面自然面。		037

第64図　ＳＩ21竪穴住居跡出土遺物(4)

た。周溝内（堆積土5・6層）、カマド崩壊土、堆積土3～1層からは非ロクロ調整の土師器坏（1～3）・高坏（4・5）・甕（7・8・10・11・13）・鉢（9・12）・壷（6）、須恵器坏（14～28）・高台坏（28　～31）・高坏（37・38）・蓋（32～35）・鉢（36）・短頸壺（39）・壷・甕などが少数出土した。多くは破片であり、完形のものや残存率の高いものはやや少ない。この他、円面硯破片2点（40・41）、土製紡錘車1点（42）、刀子2点（44・45）、鉄鏃1点（43）、砥石3点（46～48）、磨石1点（49）、ガラス小玉1点（52）、珠文鏡1点（53）、炭化した種子（モモ）、縄文土器片、縄文時代の石器（剥片、チップ）などが出土した。

これらのうち土師器坏（1～3）はいずれも非ロクロ調整で丸底か丸底気味のものである。土師器高坏（4）も坏部は丸底気味で、脚部には透かしが4個入れられている。

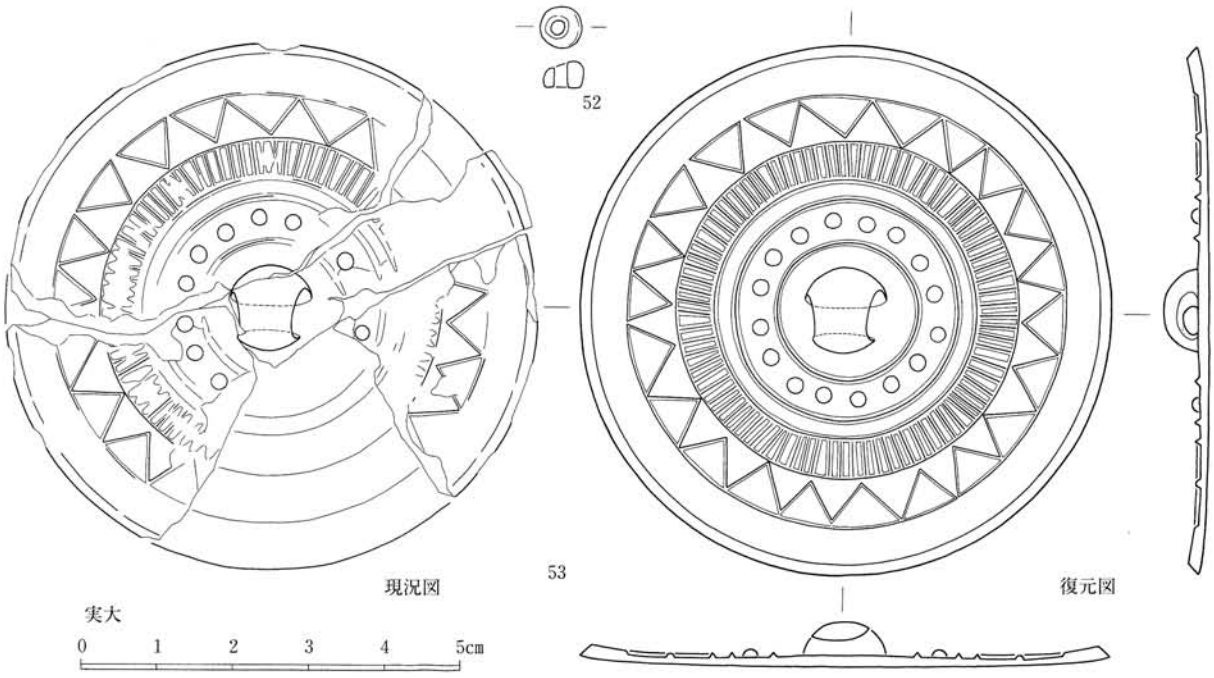
須恵器坏の多くは体下部～底部が回転ヘラケズリされており（18～27）、体下部～底部が手持ちヘラケズリされたもの（15・16）や底部がヘラ切り無調整のもの（14）は少ない。須恵器坏で回転ヘラケズリされたものの中には底部の切り離し痕跡が大きく残されているものがあり、静止糸切りのもの（18）と回転糸切りのもの（25）が各1点ある。

須恵器高台坏の中にも底部の回転糸切り痕が大きく残された削り出し高台のもの（28）がある。これは29～31のような付高台が一般的な陸奥国では特異なものである。また、須恵器高坏（37）も底部の下に円盤状に貼り付けて高台を接合しており、これもあまり例のないものである。

円面硯破片2点（40・41）は同一個体の可能性のあるものである。脚部破片（41）は、外面に蓮花の蕾を逆位に線刻している。花弁は両側に3枚ずつ表現されている本例はモチーフとしては、多賀城廃寺跡出土の重弁蓮花文鬼板950B、多賀城跡出土の重弁蓮花文鬼板950Cの両脚部に施されている文様に類似している。これらは多賀城政庁第Ⅰ期〔神亀元年（724）～天平宝字6年（762）〕のもので、いずれも鬼板両脚部に蓮花の蕾が逆位に陽刻されている（宮城県多賀城跡調査研究所，1980・1982）。花弁は両側に2枚ずつ表現されている。

ガラス小玉（52）は完形のもので、珠文鏡と同一層位、約50cm離れて竪穴住居跡ほぼ中央の堆積土1層から出土した。エネルギー分散型蛍光X線分析装置（HORIBA　MESA-500）によるNa（ナトリウム）以上の元素分析を行った結果、Pb（鉛）含有量が3.01Wt%と少なく、Si（ケイ素）含有量が60.76Wt％、Ca（カルシウム）含有量が15.62Wt％と多かった。精度の高い分析を行っていないため、不確実ではあるが、鉛含有量の多い奈良時代の鉛ガラスではなく、古墳時代のアルカリガラスとみられる。

珠文鏡（53）は竪穴住居跡ほぼ中央の堆積土1層から出土した。破片4点が接合し、約2／3が残存する。“ブロンズ病”が進行し、遺存状態は劣悪である。周囲の土壌を篩にかけたが、残りの破片は検出されなかった。4点のうち3点はほぼ半分の遺存状態であり、まとまって出土した。残りの1点（53の右下破片）はこれらから約20cm離れて出土した。面径は7.0cmと小型である。外区文様は鏡の縁部より素文＋鋸歯文＋櫛歯文＋突線で、内区文様は珠文16個を一列に整然と配している。古墳時代前期の小型仿製鏡で、樋口（1979）、中山・林原（1994）分類による珠文鏡Ⅰ類、森下（1991）分類による珠文鏡2式、小林（1979）分類による珠文鏡A式に相当する。



番号	種　類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
52	ガラス小玉	埋土１層	完形	アルカリガラス。透明で深いスカイブルー。直径5.0mm。厚さ3.5mm。直径／厚み比1.4。孔径1.5mm。古墳時代のものと推定。	36-14	011
53	珠文鏡	埋土１層	2/3	“ブロンズ病”が進行し、遺存状態劣悪。面径7.0cm。縁厚2mm。最大厚6mm。鏡面はわずかに反る。紐：径1.1cm、鏡面からの高さ4mm、断面半球形。紐孔：扁平な楕円形で、中軸線は鏡中軸線より1.5mmずれている。外区文様：鏡の縁部より素文＋鋸歯文＋櫛歯文＋突線。内区文様：径2mmの珠文16個を突線で囲まれた中央に一列に整然と配する。16個の珠文はおおよそ鏡の中軸線に対して左右対称に配されているが、外区文様の22個の鋸歯文は左右対称に配されていない。樋口隆康(1997)分類による珠文鏡Ⅰ類、森下章司(1991)分類による珠文鏡２式、中山清隆・林原利明(1994) 分類による珠文鏡Ⅰ類に相当。古墳時代前期の仿製鏡。	36-16	011

第65図　ＳＩ21竪穴住居跡出土遺物(5)－珠文鏡・ガラス小玉

【SI48竪穴住居跡】（平面図・断面図：第66図、遺物：第67図）

〔位置〕調査区中央部の北斜面落ち際、丘陵尾根上の北寄り、標高29.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。東半部は床面下まで大きく削平され、遺存する西半部全体にも杉の根の攪乱が大きく入り、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南辺で3.5m、西辺で1.2m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約36°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南西隅で38cmある。それ以外では17cm以下と残りが悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩礫層）を床面とする。一部に貼床されている。

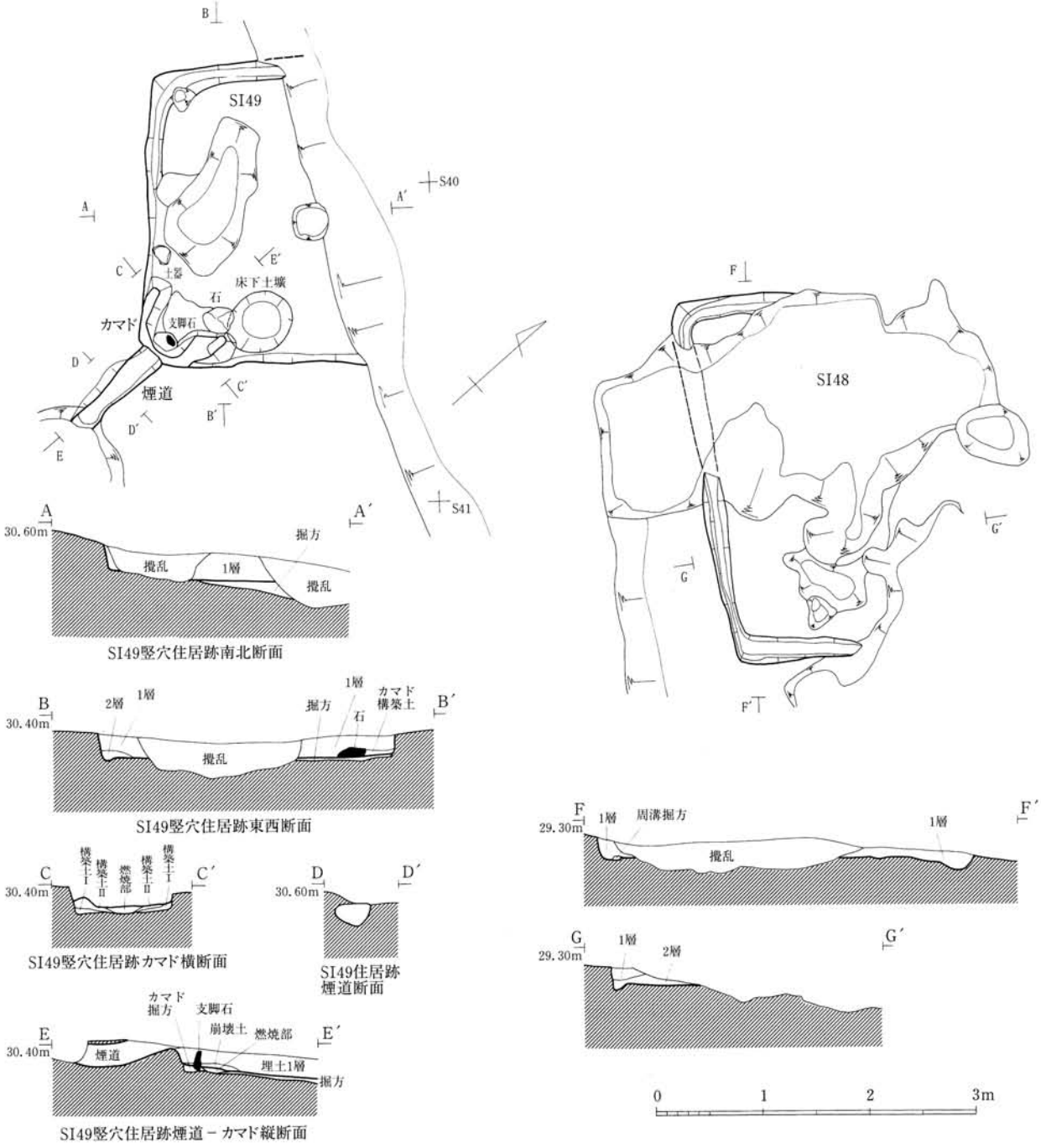
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕西辺、南辺、東辺で幅10～20cm、深さ６cmの周溝を検出した。西周溝の一部に周溝掘方が残存する。廃絶時に床面と一連に人為的に埋められており、開渠であったかどうか不明確である。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕貼床から須恵器甕破片、床面から非ロクロ調整の土師器甕破片、埋土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（１）・高台坏（２）の破片が各１点出土した。このうち須恵器坏（１）・高



SI49竪穴住居跡南北断面

SI49竪穴住居跡東西断面

SI49竪穴住居跡カマド横断面

SI49住居跡煙道断面

SI49竪穴住居跡煙道－カマド縦断面

住居跡	層位	特徴
SI48	周溝掘方	暗褐色(10YR3/4)土。地山土ブロックを多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土1層	暗褐色(10YR3/3)土。径2cm以下の地山粒を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	埋土2層	暗褐色(10YR3/4)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片をやや多く、径3cmの地山土ブロックを少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	撹乱	暗褐色(10YR3/3)土。灰白色火山灰ブロック、地山土ブロックを少し含む。自然堆積土。
SI49	掘方	褐色(10YR4/4)土。径3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性ややあり。人為堆積土。
	床下土壙	褐色(7.5YR4/3)土。径3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	カマド掘方	暗褐色(10YR3/4)土。炭・焼土粒・地山粒を少し含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド構築土Ⅰ	改修前のカマド構築土。明黄褐色(10YR6/6)土。地山土・粘板岩風化礫片を多く、暗褐色土ブロックを少し含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド構築土Ⅱ	改修したカマド構築土。暗褐色(10YR3/3)土。焼土・地山土・粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド支脚石	長さ21cm、幅10cm、厚さ6cmの角柱状の粘板岩礫片。
	カマド燃焼部	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。焼土を多量に含む。自然堆積土。
	カマド崩壊土	暗赤褐色(5YR3/4)土。焼土を多量に含む。
	煙道	暗褐色(7.5YR3/4)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片、径5mmの炭片・焼土粒を多く含む。トンネル式で、天井部が一部残る。
	埋土1層	暗褐色(7.5YR3/4)土。径5mmの炭片・焼土粒、径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土2層	黄褐色(10YR5/8)土。暗褐色土ブロック、径2～4cm程の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。

第66図　ＳＩ48・49竪穴住居跡平面図・断面図（1/60）

台坏（2）は体下部～底部が回転ヘラケズリされ、高台坏（2）は焼成前に底部に「×」と刻書されている。

【ＳＩ49竪穴住居跡】（平面図・断面図：第66図、遺物：第67図、図版13－３、14－２）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高30.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。東半部は床面下まで大きく削平され、遺存する西半部全体にも杉の根の攪乱が大きく入り、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南辺で2.8m、東辺で2.2m以上である。

〔方向〕東辺でみると北で東に約40°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で32cm、その他の箇所では20～30cmある。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、掘方埋土上面を床面とする。掘方は南西隅を除く残存床面のほぼ全面に及ぶ。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕丘陵尾根に直交せず、等高線に沿って南東隅に設けられている。廃絶時にカマドの天井部が壊され、煙道の先端と煙出しピットが攪乱で壊されていたが、両側壁、燃焼部、煙道がよく残っていた。

左側壁は長さ63cm、高さは奥で18cm、焚き口で14cm、右側壁は長さ70cm、高さは奥で27cm、焚き口で９cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.1mある。カマドの両側壁は、粘板岩板状礫片を芯材として黄褐色～褐色粘質土を用いて作られており、一度作り替えられている（古いカマドの構築土Ⅰ、新しいカマドの構築土Ⅱ；第66図断面Ｃ－Ｃ'）。カマドに用いられた粘板岩板状礫片は左側壁に２点残存し、天井崩壊土中に１点あった。焚き口は下部幅約1.1mで、高さは14cm以上である。燃焼部は奥行き52cm、幅60cm、奥壁高13cmで、奥壁から燃焼部中央にかけてなだらかに窪み、焼土が堆積し被熱・赤変していた。

カマド奥壁から手前15cm、カマド中軸線上の位置には支脚石（９）が残されていた。この支脚石は長さ21cm、幅11cm、厚さ６cmで、粘板岩礫片の下端を分割し、側面を剥離して角柱状に整形している。支脚石の天端となる上端は長軸５cm、短軸３cmの菱形状で、平坦である。底面となる下端は長辺８cm、短辺5cmの平行四辺形状である。支脚石の天端から火床までの高さは15cmで、支脚石は長軸をほぼ直にして据方（長径23cm、短径17cm、深さ６cm）の端に寄せて立てられている。支脚石はほぼ全面にわたって褐色～赤色に変化しており、特に奥壁側（第67図９左面）中央側面（同９右面中央）と手前側中央が著しく赤色に変色していた。

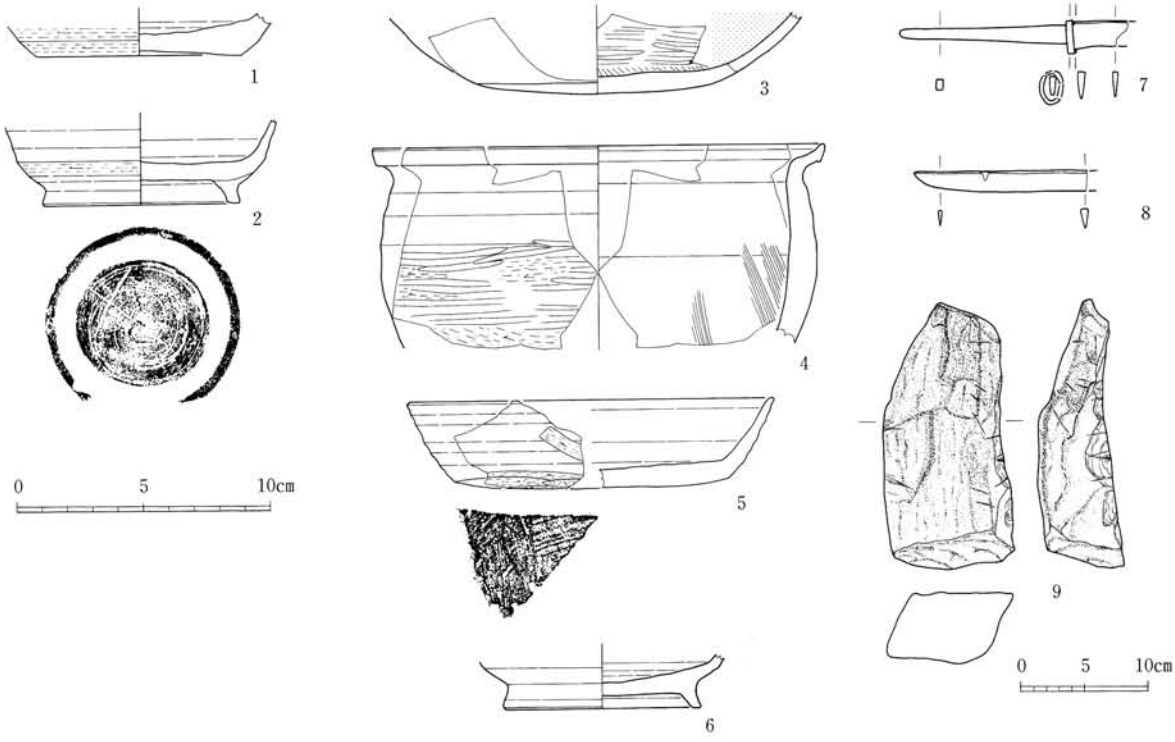
煙道はカマド奥壁よりほぼ南に向かって外に1.0m以上延びる。煙道はトンネル式で、一部天井が残されていた。この残りのよい箇所で幅35cm、深さ20cmある。煙道は中央の底面レベルが最も低くなるように、竪穴住居跡の内部と煙出しピット側の両側より掘削されたことが窺える（第66図断面Ｅ－Ｅ'）。先端の煙出しピットは攪乱に壊され、残っていないが、煙道縦断面の状況からみて、煙道の長さは残存する長さをさほど超えない程度であったと考えられる。

〔周溝〕南辺の西半と西辺で幅15～20cm、深さ３cmの浅い周溝を検出した。周溝は南辺の中央で途切れ、東辺にも設けられていない。

〔床下土壙〕カマド左脇の東辺際にある。長径65cm、短径55cmの楕円形で、深さ17cmある。本竪穴住居跡の掘方とともに人為的に埋め戻され、一部はカマド左側壁に上を覆われている。本竪穴住居跡の機能時には埋められていたとみられる。

〔堆積土〕廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕掘方から須恵器坏破片、カマド右前の床面から須恵器甕体部破片、埋土から非ロクロ調整の土師器坏（３）・甕、ロクロ調整の土師器鉢（４）、須恵器坏・高台坏（６）・蓋・甕・壷、刀子（７・８）の破片、カマド燃焼部から非ロクロ調整の土師器甕破片、煙道から非ロクロ調整の土師器甕破片、攪乱から須恵器坏（５）破片などが少数出土した。土師器には非ロクロ調整の坏（３）・甕、ロクロ調整の鉢（４）がある。須恵器坏には体下部～底部が回転ヘラケズリのもの、底部静止糸切り後に体下部～底部手持ちヘラケズリのもの（５）がある。



番号	種　類	分類	遺構	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	須恵器坏	A3	SI48	埋土２層	1/2	底径8.0cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→底部部分的にナデ。焼成不良。	33-15	022
2	須恵器高台坏	B1	SI48	埋土２層	破片	体部～底部・高台部（7/8）破片。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台→底部に焼成前ヘラ書き「×」。両面に火襷痕。焼成堅緻。	33-16	022
3	土師器坏	ⅠB2	SI49	埋土１層	破片	体下部～底部破片。丸底気味。非ロクロ調整。外面：体部～底部ケズリ→ナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		022
4	土師器鉢	Ⅱ	SI49	埋土２層	破片	口縁～体部破片。口縁部受け口状。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→体下部手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ。内面：ロクロナデ→部分的ナデ。	33-18	022
5	須恵器坏	C2	SI49	攪乱	破片	口縁～底部小破片。外面：底部静止糸切り→体下部～底部外周手持ちヘラケズリ。焼成堅緻。		022
6	須恵器高台坏	B1	SI49	埋土１層	破片	体下部～底部・高台部完形破片。高台径7.8cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台→再びロクロナデ。重ね焼き痕。焼成堅緻。	33-17	022
7	刀子		SI49	埋土１層	破片	刀身元部～茎部破片。鋒残る。平造り角棟。両関（棟関・刃関）。茎胴部：中細（関から茎尻にかけてやや幅を狭める）。茎尻：栗尻（茎端が曲線をなす）。残存長9.0cm。茎胴部長6.9cm。刃元幅1.1cm。茎元幅7mm。棟厚3mm。鋒長1.3cm。鋒外径9mm。鋒内径6mm。鋒厚1.5mm。		031
8	刀子		SI49	埋土１層	破片	刀身部破片。平造り。残存長6.9cm。刃幅8mm。棟厚3mm。		031
9	支脚石		SI49	カマド内	完形	粘板岩製。角柱状。ほとんど自然面だが、１面を剥離によって整形。長さ21.0cm。幅10.0cm。厚さ6.0cm。		037

第67図　ＳＩ48・49竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ33竪穴住居跡】（平面図：第68～70図、断面図：第69・70図、遺物：第71～73図、図版14－３～７）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上のやや北寄り、標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。東半部は上部が大きく削平され、残りが悪い。２度建て替えられて拡張されている。古い方からＳＩ33Ａ竪穴住居跡、ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡、ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡とする。ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡は床面レベルを同じくしながらＳＩ33Ａ竪穴住居跡を西に拡張し、方向をずらしている。ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡はＳＩ33Ｂ竪穴住居跡を埋めて嵩上げ整地し、西・南に拡張し、方向をずらしている。カマド、主柱穴の位置も変えている。

《ＳＩ33Ａ竪穴住居跡》（平面図：第68・69図、断面図：第69・70図）

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形とみられ、規模は南北が東辺で3.4m以上、東西が南辺で3.1mである。

〔方向〕東辺でみると北で東に約31°偏る。

〔壁〕新しいＳＩ33Ｂ・Ｃ竪穴住居跡に壊され、壁の高さはほとんどない。

〔Ａ床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面とする。

〔主柱穴〕主柱穴はない。

〔Ａカマド〕カマドの位置は不明だが、西辺または北辺に設けられていたと考えられる。

〔Ａ周溝〕南辺・東辺・北辺で幅15～30cm、深さ６cm前後の周溝を検出した。人為的に埋められている。西辺・北辺は新しいＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に壊され、検出できなかった。

〔堆積土〕ＳＩ33Ｂ竪穴住居の構築に際して、床面レベルをほぼ同じくして拡張しているため、Ａ周溝を埋めている以外には埋土はない。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡》（平面図：第68・69図、断面図：第69・70図、遺物：第71図）

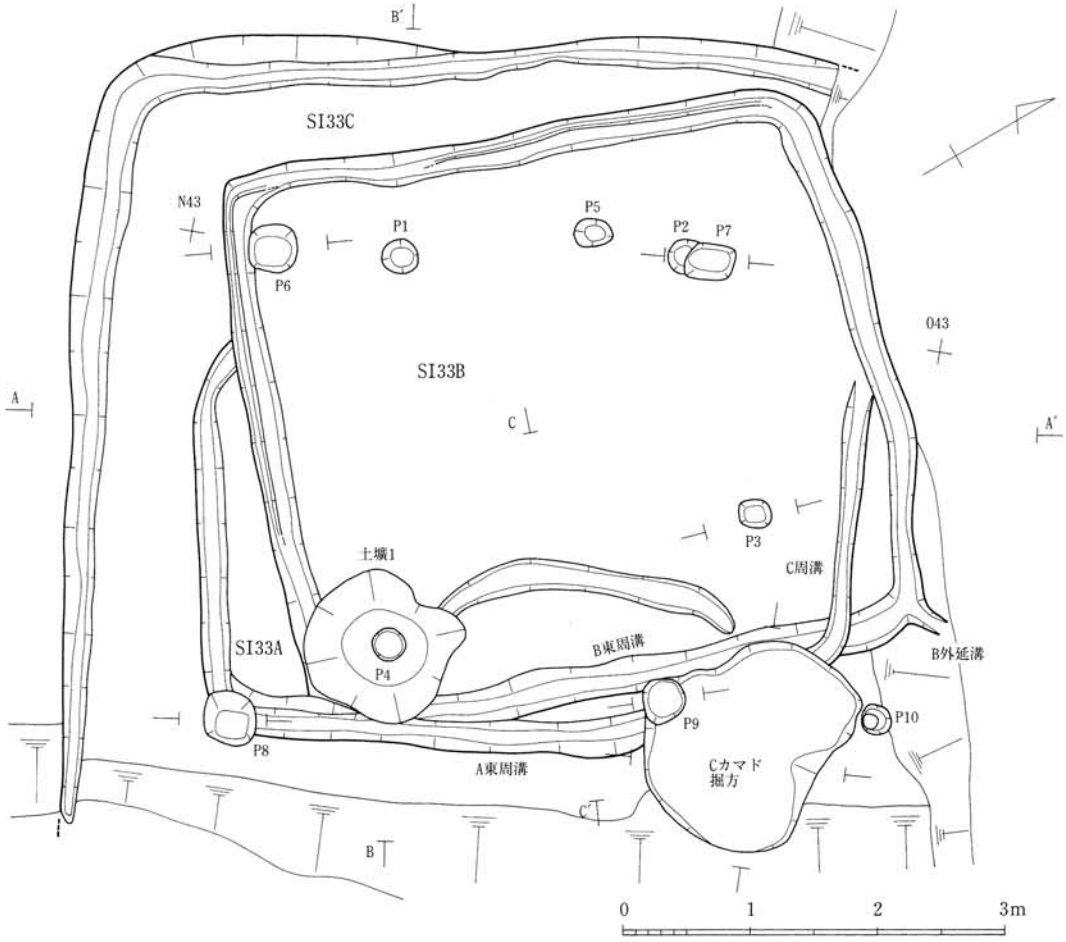
〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で4.8m、東西が北辺で4.5mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約21°偏る。

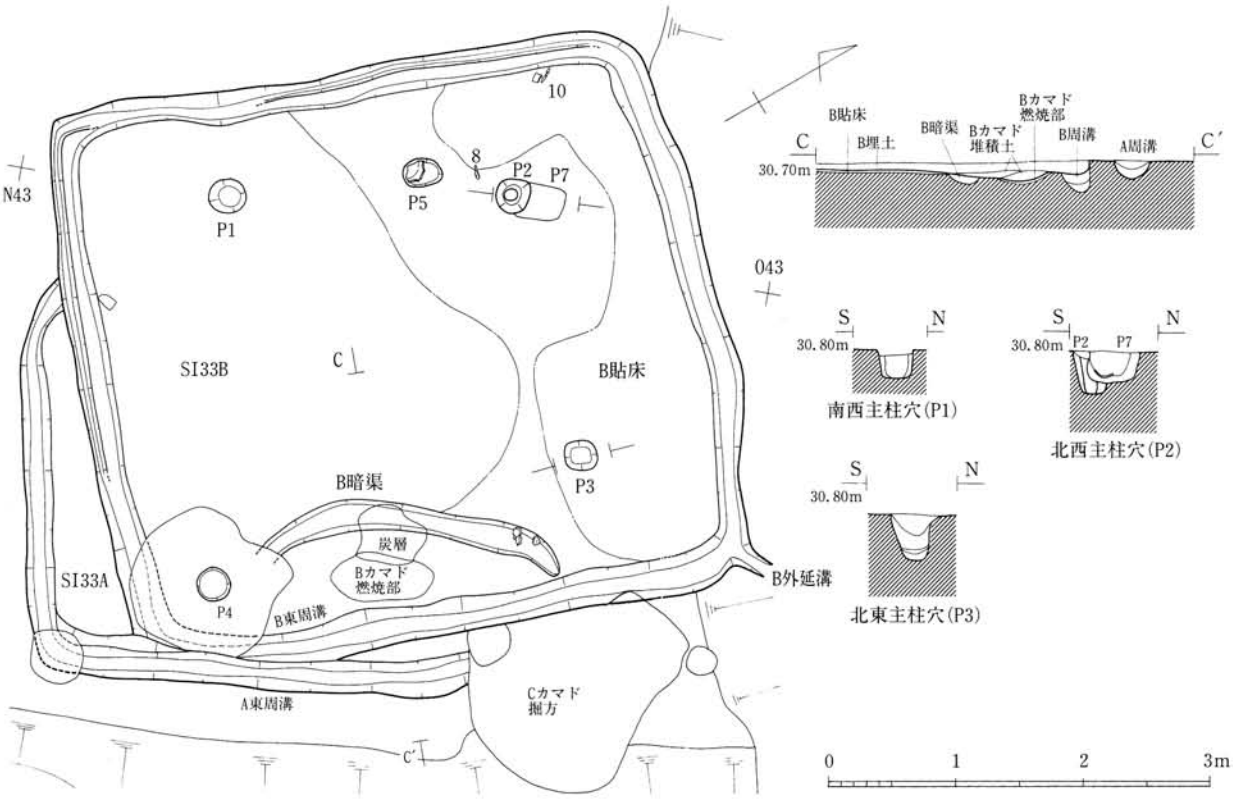
〔壁〕新しいＳＩ33Ｃ竪穴住居跡に壊され、南西隅付近で10cm前後残る以外、壁の高さはほとんどない。

〔Ｂ床面〕床面はほぼ平坦で、Ｂ貼床を床面とする。

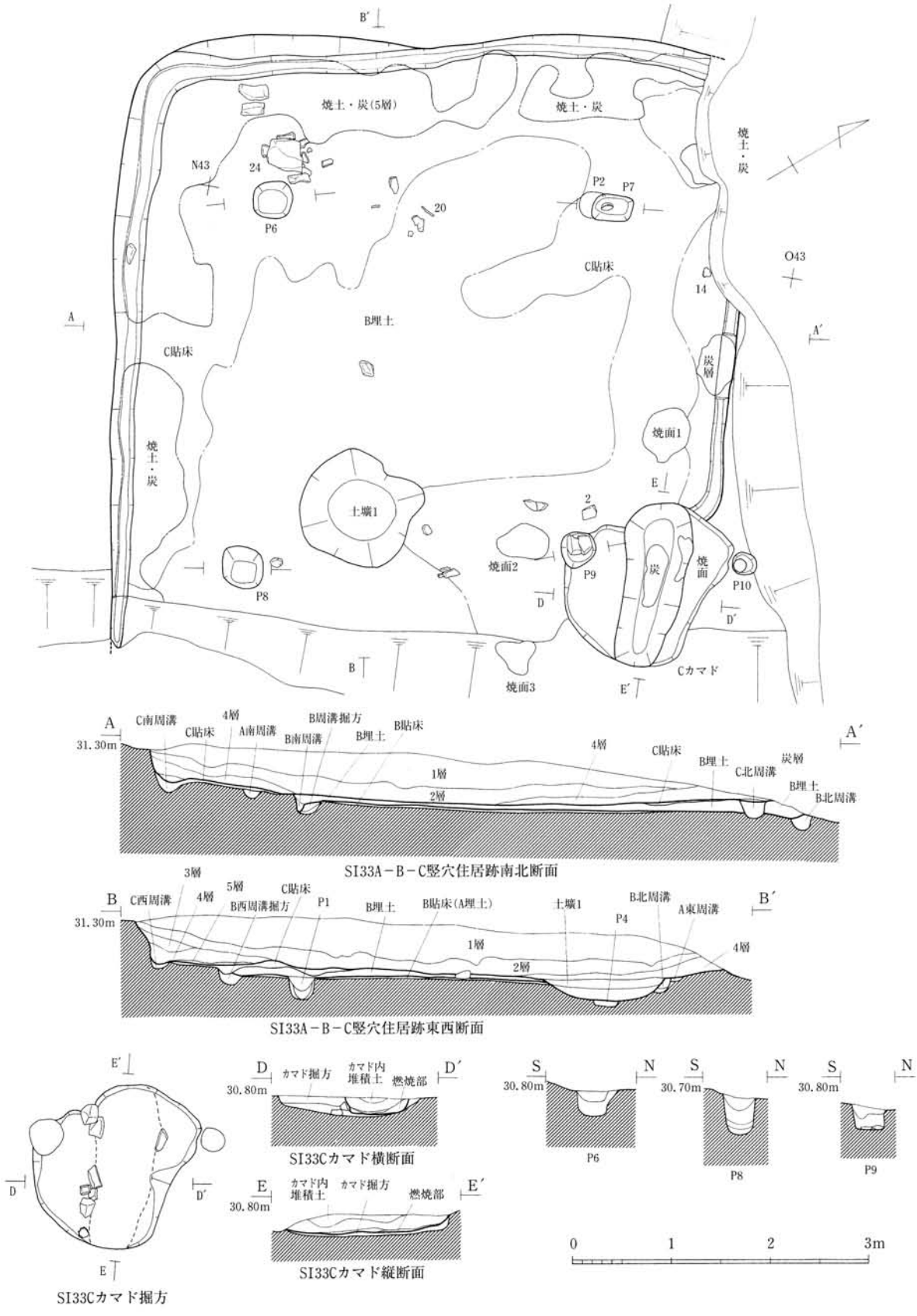
〔Ｂ主柱穴〕床面でＰ１～Ｐ４の柱穴を検出した。掘方はＰ１柱穴が径27cmの円形で、深さ23cm、Ｐ２柱穴が一辺27cmの隅丸方形で、深さ34cm、Ｐ３柱穴が一辺25cmの隅丸正方形で、深さ37cm、Ｐ４柱穴が径25cmの円形で、推定深さ25cm（上部を土壙１に壊され、５cm残存）である。Ｐ１・３・４柱穴は柱が抜き取られ、Ｐ２柱穴は柱が切り取られ、径10cmの円形の柱痕跡を検出した。層位的にはＰ１～Ｐ３柱穴の柱抜取穴がＢ貼床より新しく、Ｂ埋土に覆われるので、Ｐ１～Ｐ３柱穴はＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に伴う。Ｐ４柱穴は上部をＳＩ33Ｃ竪穴住居跡に伴う土壙１に壊されているので、ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に伴う。これらＰ１～Ｐ４柱穴を結ぶといびつな四辺形となるが、ほぼ対角線上にあるので、ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に伴う主柱穴とみられる。Ｐ５もＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に伴うとみられるが、深さ７cmと浅い。



第68図　ＳＩ33Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡平面図（１/60）



第69図　ＳＩ33Ａ・Ｂ竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）



第70図　ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡平面図、ＳＩ33Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡断面図（１/60）

住居跡	層　位	特　　徴
SI33A	A周溝	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。黄褐色(10YR5/6)土ブロック、炭化物を多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
SI33B	B貼床	にぶい黄褐色(10YR5/8)土。灰黄褐色(10YR4/2)土ブロックを全体的に含む。炭化物少量含む。しまり強く、粘性あり。人為堆積土。
	B周溝掘方	灰黄褐色(10YR5/2)～明黄褐色(10YR6/8)土。しまり・粘性あり。下部は一部グライ化。人為堆積土。
	B周溝	にぶ黄褐色(10YR4/3)土。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。A南周溝の一部で壁材の抜取りの可能性ある箇所を確認。
	B主柱穴掘方	黄褐色(10YR5/6)土。径4cm程の礫を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	B主柱穴柱抜取穴	褐色(10YR4/4)～黄褐色(10YR5/8)土。径4cm程の礫を含み、しまりがよい。人為堆積土。
	B主柱穴柱痕跡	褐色(10YR4/4)土。しまりあまりない。
	Bカマド燃焼部	赤褐(2.5YR4/6)土。焼土を多量に含む。
	Bカマド内堆積土	2層に分かれ、下部は焼土を多量に含み、上部は薄い炭層。
	Bカマド前暗渠	灰黄褐色(10YR4/2)土。しまりあり。人為堆積土。
	B埋土（C貼床）	暗褐色(10YR3/3)土。炭化物、地山土ブロックを多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
SI33C	C掘方	黄褐色(10YR5/6)粘質土ににぶい黄褐色(10YR4/3)土ブロックを不均一に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	C周溝	C掘方と一連に埋められている。
	C主柱穴掘方	明黄褐色(10YR6/6)土。径4cm程の礫を多く含み、しまりがよい。人為堆積土。
	C主柱穴柱抜取穴	にぶい黄褐色(10YR4/3)～黄褐色(10YR5/8)土。炭化物を含む。しまりあまりない。自然堆積土。
	C主柱穴柱痕跡	黄褐色(10YR5/6)土。炭化物を含む。しまりあまりない。自然堆積土。
	Cカマド掘方	2層に分かれる。下部はにぶい黄褐色(10YR5/4)土で明黄褐色土ブロックを含む。上部は褐色(10YR4/6)土で、明黄褐色土ブロック・炭化物を少量含む。
	Cカマド燃焼部	赤褐(2.5YR4/6)土。焼土を多量に含む。
	Cカマド内堆積土	自然堆積層で、3層に分かれる。下部は薄い炭化物層で、その上は焼土粒・炭化物をやや多く含む黒褐色(10YR3/2)土。上部は灰黄褐色(10YR3/2)土で、明黄褐色土ブロックを多く、焼土粒・炭化物を少し含む。
	土壙1	2層に分かれる。下部は灰黄褐色(10YR4/2)土で、径3cm程の地山ブロック・炭化物を多く含む。上部はにぶい黄褐色(10YR4/3)土で地山粒を少量含む。
	堆積土1層	黒褐色(10YR3/2)土。径5mmの地山土ブロックを比較的多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土2層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mmの地山土ブロックをやや多く、炭化物・焼土粒を少し含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
	堆積土3層	比較的均質な黄褐色(10YR5/6)土。しまりあり。粘性なし。北・西壁際に分布する崩落土。自然堆積土。
	堆積土4層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。黄褐色(10YR5/6)土ブロックを多く、径3mmの炭化物・焼土粒を少し含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土5層	西・南辺の壁際に沿って分布するC床面直上の薄い焼土・炭混じり層。

ＳＩ33Ａ・Ｂ・Ｃ竪穴住居跡土層一覧

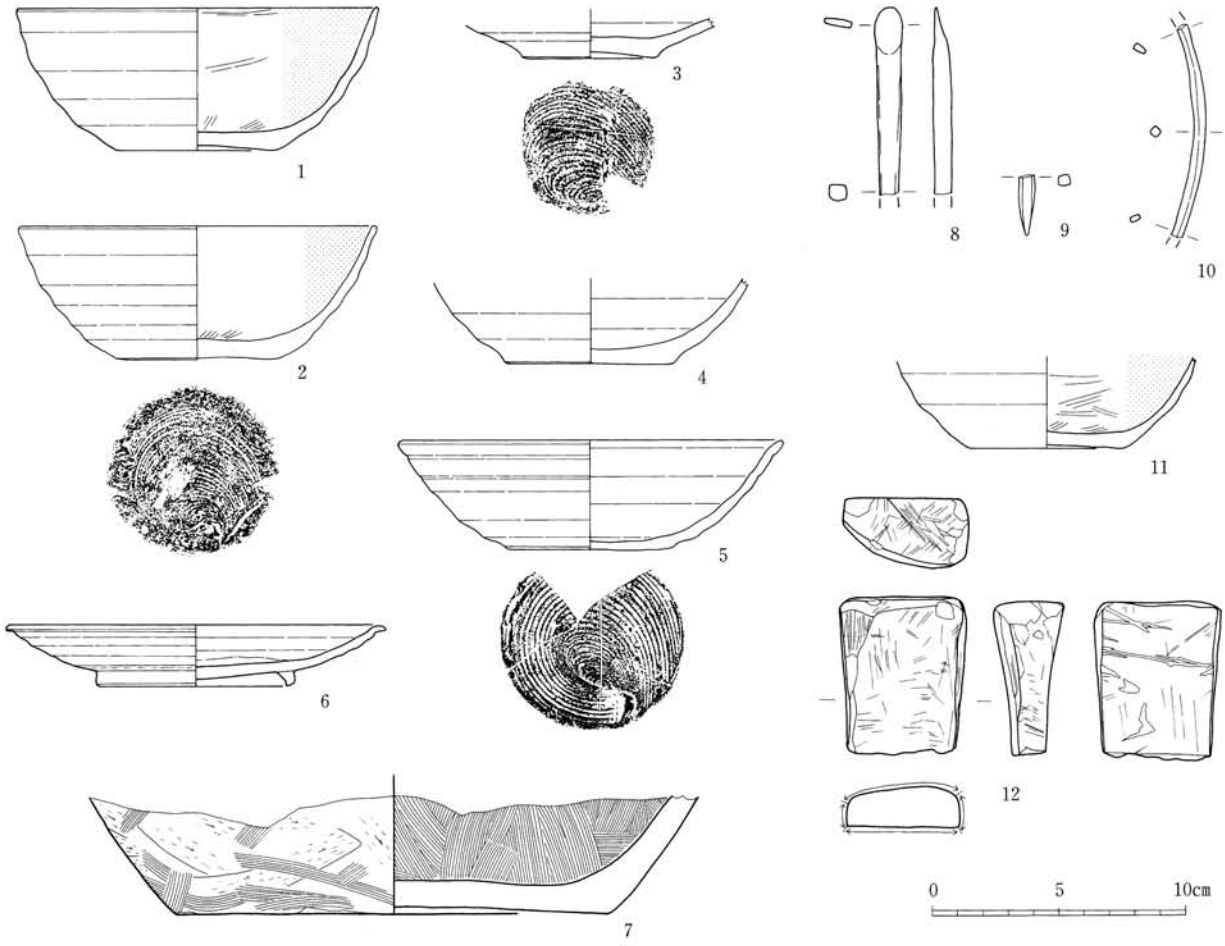
〔Ｂカマド〕東辺の中央南寄りで、カマド燃焼部とカマド前炭層を検出した。これらはＢ埋土に覆われていたことから、ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡に伴う。燃焼部は奥行き38cm、幅80cmで、中央がやや窪む。焼土が堆積し、被熱・赤変していた。カマドの両側壁・天井部・煙道は、ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡に壊され、検出されなかった。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ平行し、丘陵斜面下側に付設されている。

〔Ｂ周溝〕西辺と南辺の一部で、幅7～10cm、深さ10～15cmの壁材痕、幅20～25cmの周溝状となる壁材の掘方を検出した。壁材は抜き取られ、それ以外の各辺では幅15～30cm、深さ10～15cmの周溝状となり、四辺を巡っていた。南西隅はSI33C竪穴住居跡に伴う土壙１に一部壊されている。また、南西隅から丘陵斜面下方に向けて、外延溝が約30cm延びている。

〔Ｂカマド前暗渠〕カマド燃焼部を迂回するように、弧状となって東辺に接続していたとみられる幅15～25cm、深さ５cm前後の暗渠を検出した。人為的に埋め戻され、機能時にはやや窪んでおり、カマド前炭層が覆っていた。南西隅の連結箇所はＳＩ33Ｃ竪穴住居跡に伴う土壙１に壊されている。

〔堆積土〕ＳＩ33Ｃ竪穴住居の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕構築時の遺物として、掘方・貼床からロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（４）の破片が少数出土した。このうち須恵器坏破片（４）は底部が回転糸切り無調整のものである。機能時または廃絶時の遺物として、床面から残存率の高い須恵器坏１点（５）、鉄鏃１点（８）、不明鉄製品２点（９・10）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・甕（７）・壷の破片、周溝から完形または残存率の高い土師器坏２点（１・２）の他、土師器坏・甕、須恵器坏（３）・甕、灰釉陶器皿（６）の破片、主柱穴の柱抜取穴から土師器坏・甕の破片、埋土から土師器坏（11）・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・甕の破片、砥石（12）などが少数出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整のもので、土師器坏（１・２・11）と須恵器坏（３・５）は底部が回転糸切り無調整のもの、灰釉陶器皿（６）は黒笹90号窯式２型式の猿投窯製品である。



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ⅡB	周溝	1/2	口径14.2cm。底径6.4cm。器高5.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-1	013
2	土師器坏	ⅡB	周溝	完形	口径14.2cm。底径6.4cm。器高5.3cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-2	013
3	須恵器坏	D1	周溝	破片	体下部～底部破片。底径5.4cm。外面：底部回転糸切り無調整、焼成前ヘラ記号「－」。著しく焼け歪む。焼成良好。	28-7	013
4	須恵器坏	D1	掘方	破片	底径6.6cm。外面：底部回転糸切り無調整。両面：摩滅。焼成不良。	28-8	013
5	須恵器坏	D1	床面	5/6	口径14.2cm。底径6.4cm。器高5.3cm。外面：底部回転糸切り無調整。焼成前ヘラ記号「‖」。焼成不良。	28-9	013
6	灰釉陶器皿		周溝	1/3	口径15.0cm。高台径7.8cm。高台高6mm。器高2.4cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→定形化した三日月高台。内面：口縁～体部灰釉刷毛塗り。猿投窯製品。黒笹90号窯式２型式。	28-13	013
7	須恵器甕	A	床面	破片	体下部～底部破片。底径17.0cm。外面：体下部手持ちヘラケズリ→ナデ、底部ナデ、窯壁が熔着。内面：ナデ。	28-10	013
8	鉄鏃		床面	破片	鏃身～頸部破片。鑿箭式。鏃身長1.5cm、幅1.1cm。現存長7.4cm。頸部断面7mm方形。	37-10	029
9	不明鉄製品		床面	破片	鉄釘または鉄鏃などの破片。軸部断面6×5mm方形。	38-12	029
10	不明鉄製品		床面	破片	緩やかに弧状に曲がる棒状鉄製品。両端欠損。現存長8.5cm。両端断面4×2mm方形。中間部断面4mm方形。	38-27	029
11	土師器坏	ⅡB	埋土	破片	体部～底部破片。底径6.0cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。摩滅。	28-3	013
12	砥石		埋土	完形	極細粒砂岩製。直方体状。５面研磨・擦痕。長さ6.3cm。幅5.0cm。厚さ2.8cm。	38-4	035

第71図　ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡出土遺物

《ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡》（平面図：第68～70図、断面図：第70図、遺物：第72・73図）

〔平面形・規模〕平面形はほぼ隅丸正方形とみられ、規模は南北が西辺で6.1m以上、中央で約6.4m、東西が南辺で6.1m以上である。

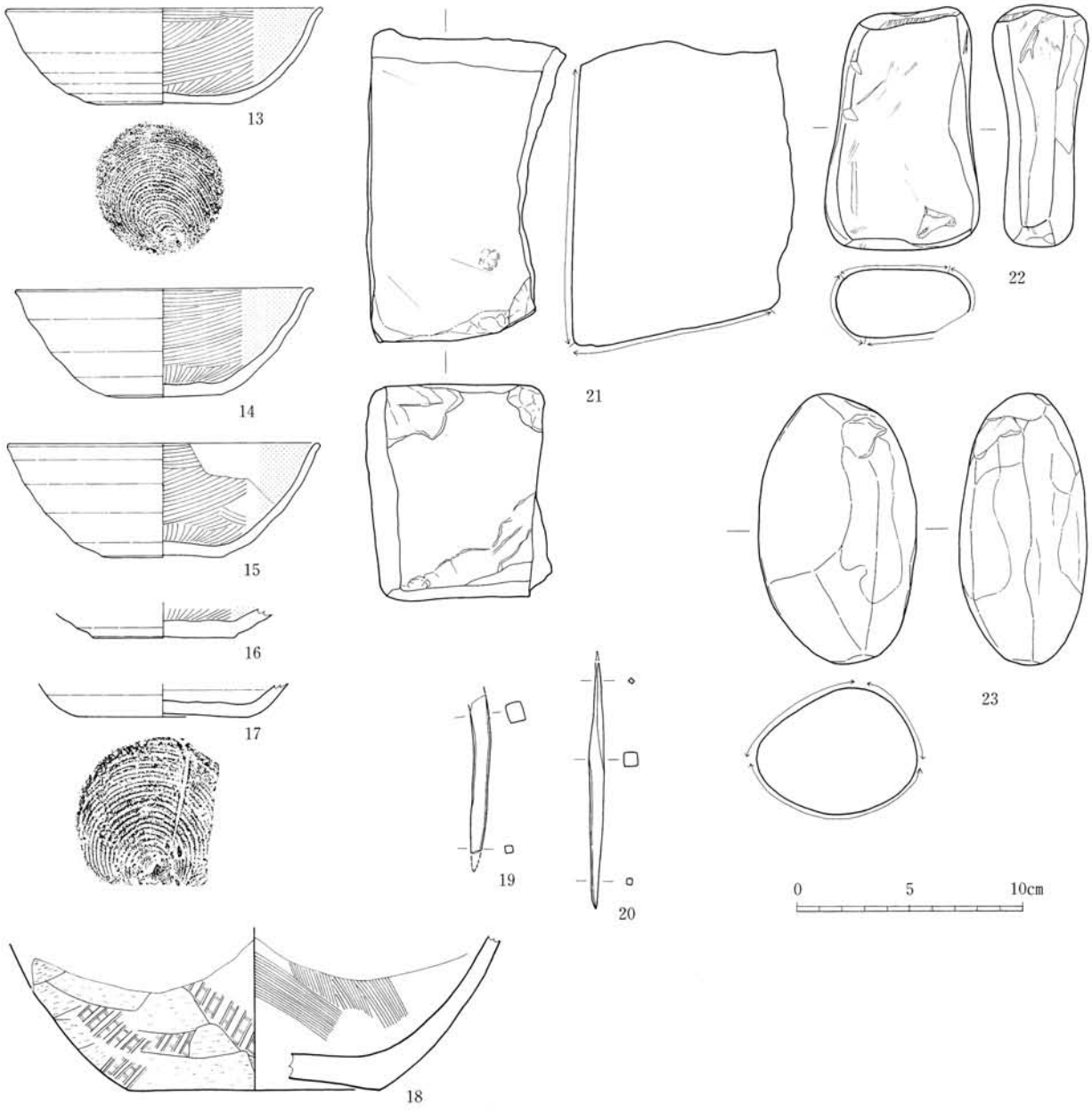
〔方向〕西辺でみると北で東に約28°偏る。

〔Ｃ床面〕ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡の埋土、および拡張部分を中心とする貼床の上面を床面としている。周溝に接した箇所と比べると、床面の中央は８cmレベルが低く、中央がやや窪んでいる（第70図断面Ａ－Ａ'）。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で53cm、西辺中央で50cm前後、残りのやや悪い北西隅で26cm、残りの悪い南東隅で９cmある。北辺では壁が削平されてない。壁は西辺

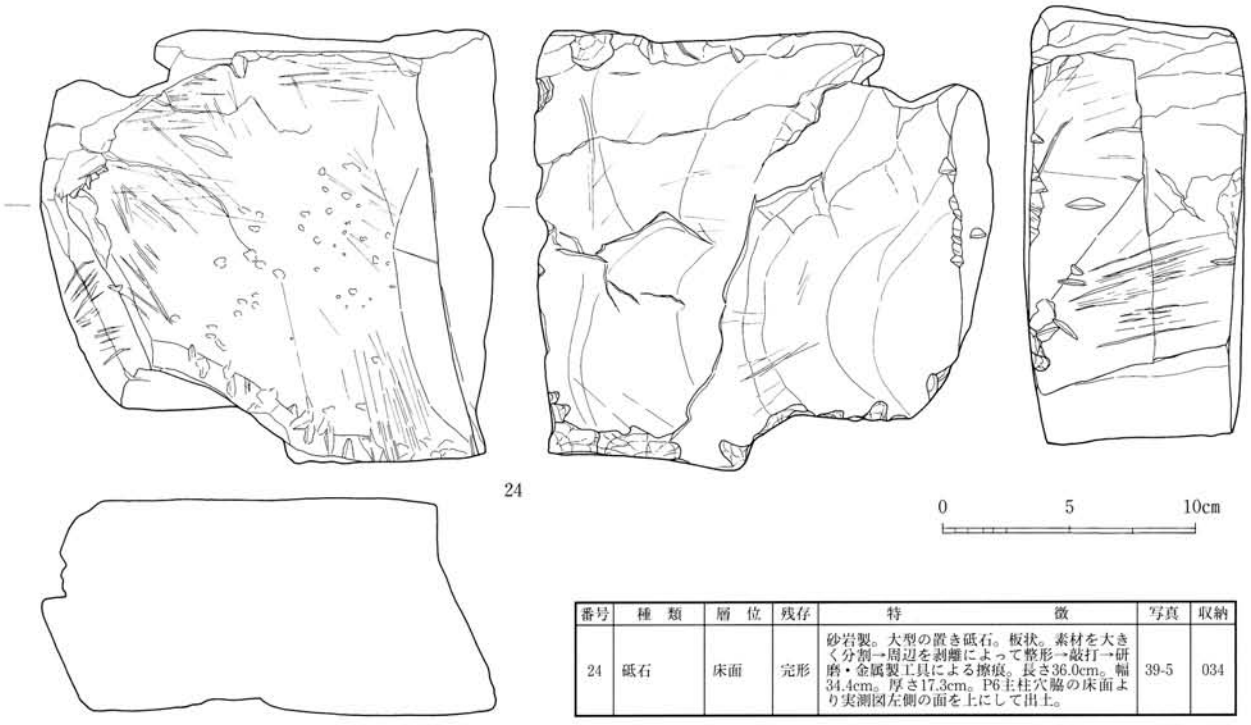
中央で約100°、南辺中央で約110°の傾きでやや斜めに立ち上がる。また、西辺の南半では壁の上部が廃絶後に崩れている。

〔C主柱穴〕本竪穴住居の対角線上の位置で4箇所の主柱穴を検出した。P6南西主柱穴は一辺約



番号	種類	分類	層位	残存	特徴	写真	収納
13	土師器坏	ⅡB	北西主柱穴柱抜取穴	完形	口径14.0cm。底径6.0cm。器高4.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	28-4	013
14	土師器坏	ⅡB	床面	7/8	口径13.2cm。底径5.4cm。器高4.8cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-5	013
15	土師器坏	ⅡB	床面	1	口径13.8cm。底径5.4cm。器高5.1cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-6	013
16	土師器坏	ⅡB	堆積土2層	破片	底径6.2cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		013
17	須恵器坏	D1	土壙1	破片	底径7.6cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：手擦れ痕。	28-12	013
18	須恵器甕	A	カマド内	破片	体下部～底部破片。底径11.0cm。外面：体下部平行叩き目→手持ちヘラケズリ。底部ナデ、窯壁が熔着。内面：ナデ。	28-11	013
19	不明鉄製品		床面	破片	鉄釘または鉄鏃などの破片か。軸部断面9×7mm方形。		029
20	鉄製刺突具		床面	完形	単式のヤスか。両端が尖り、一端がわずかに欠損。現存長11.0cm。軸部断面6mm方形。	37-28	029
21	砥石		床面	破片	砂岩製。直方体状。2面研磨・擦痕。長さ13.9cm。幅9.7cm。厚さ8.9cm。	39-3	035
22	砥石		堆積土4層	完形	細粒砂岩製。丸味のある直方体状。各面研磨・擦痕。表裏両面の中央窪む。長さ10.8cm。幅6.8cm。厚さ4.2cm。		035
23	磨石		土壙1	完形	砂岩製。平面・断面楕円形。球状。長さ12.1cm。幅7.0cm。厚さ5.7cm。		035

第72図　S I 33C竪穴住居跡出土遺物(1)



番号	種　類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
24	砥石	床面	完形	砂岩製。大型の置き砥石。板状。素材を大きく分割→周辺を剥離によって整形→敲打→研磨・金属製工具による擦痕。長さ36.0cm。幅34.4cm。厚さ17.3cm。P6主柱穴脇の床面より実測図左側の面を上にして出土。	39-5	034

第73図　ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡出土遺物(2)

40cmの隅丸正方形で深さ25cm、Ｐ７北西主柱穴は長辺40cm、短辺27cmの長方形で深さ24cm、Ｐ８南東主柱穴は一辺約40cmの隅丸正方形で深さ35cm、Ｐ９北東主柱穴は一辺約35cmの歪んだ隅丸方形で深さ20cmある。Ｐ９北東主柱穴は底面に粘板岩板状礫片２点を敷いて礎板としている。いずれも廃絶時に柱が抜き取られ、柱痕跡を検出できなかった。

柱穴の中心でみると、柱間寸法はＰ６南西主柱穴－Ｐ８南西主柱穴間が約3.8mと他よりやや大きく、Ｐ７北西主柱穴－Ｐ９北東主柱穴間、Ｐ６南西主柱穴－Ｐ７北西主柱穴間、Ｐ８南東主柱穴－Ｐ９北東主柱穴間はいずれも約3.5mである。また、各柱穴を結んだ線は歪んだ四辺形となるが、削平されて未検出の東辺を除けば、いずれも各辺と約1.5m離れてほぼ平行している。

〔その他の柱穴〕カマドを挟んでＰ９北東主柱穴と対になる屋外の位置で、Ｐ10柱穴を検出した。Ｐ10柱穴は掘方が径24cmのほぼ円形で、径14cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔Ｃカマド〕北東隅でカマドの燃焼部、奥壁、掘方、カマド内堆積土を検出した。カマド側壁は上部を大きく削平され、燃焼部と接した内側だけが高さ約15cm残っている。煙道の有無は不明である。残りが悪いが、北辺の北東隅付近にカマドが付設されていたとみられる。カマドの向きは丘陵尾根の中軸線とほぼ平行し、丘陵斜面下側にあたる。燃焼部は奥行き約70cm、幅60cmで、焼土・炭が堆積し、被熱・赤変していた。奥壁は高さ約18cmあり、斜めになだらかに立ち上がる。カマドの掘方は平面形が径約1.7mの不整形で、深さ20cmある。そして、粘板岩板状礫片を入れた黄褐色土でこの掘方を埋め戻してから、掘方の中央やや右寄りに、長さ約1.6m、幅60cmの長楕円形の掘方を掘り直して、奥壁－燃焼部－焚き口としている。カマド両脇に設置されたＰ９北東主柱穴とＰ10柱穴、及びカマド掘方からみて、カマド両側壁外面の幅は1.6m程と考えられる。また、長楕円形の掘方の左壁が焼けており、この位置からみてカマド左側壁の長さは1.3m程あったと考えられる。

〔C周溝〕西辺、南辺、及び北辺の一部で幅20～35cm、深さ10cm前後の周溝を検出した。東辺は削平されて残っていないが、後述の焼面3に隣接した位置にあったと考えられる。周溝は人為的に埋め戻され、わずか窪んだ状態で機能しており、その上面に焼土・炭を多く含む堆積土5層が堆積していた。

〔土壙〕南東部のＰ８南東主柱穴の近くで、平面形が径約1.3mの不整円形で、深さ20cmの土壙１を検出した。

〔焼面〕カマドを取り囲むようにして、床面上の３箇所で焼面を検出した。焼面１は径約50cmの不整円形、焼面２は長径50cm、短径35cmの楕円形、焼面３は一辺45cmの三角形状である。

〔堆積土〕５層に分けられ、自然堆積層とみられる。

〔出土遺物〕出土遺物は破片を中心にやや多く、床面から残存率の高い土師器坏２点（14•15）、鉄製刺突具１点（20）、不明鉄製品１点（19）、砥石　２点（21・24）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・　甕の破片、北西主柱穴柱抜取穴から完形の土師器坏１点（13）、カマド内から土師器坏、須恵器甕（18）の破片、土壙１から土師器坏・甕、須恵器坏（17）・高台坏・甕の破片、磨石１点（23）、堆積土から土師器坏（16）・高台坏・甕、須恵器坏・　高台坏・蓋・甕・壷の破片、砥石１点（22）など　が出土した。このうち土師器はいずれもロクロ調整で、土師器坏（13～16）、須恵器坏（17）は底　部が回転糸切り無調整である。大型の置き砥石（24）はＰ６南西主柱穴の脇、砥石（21）はカマド手前の床面から出土した。

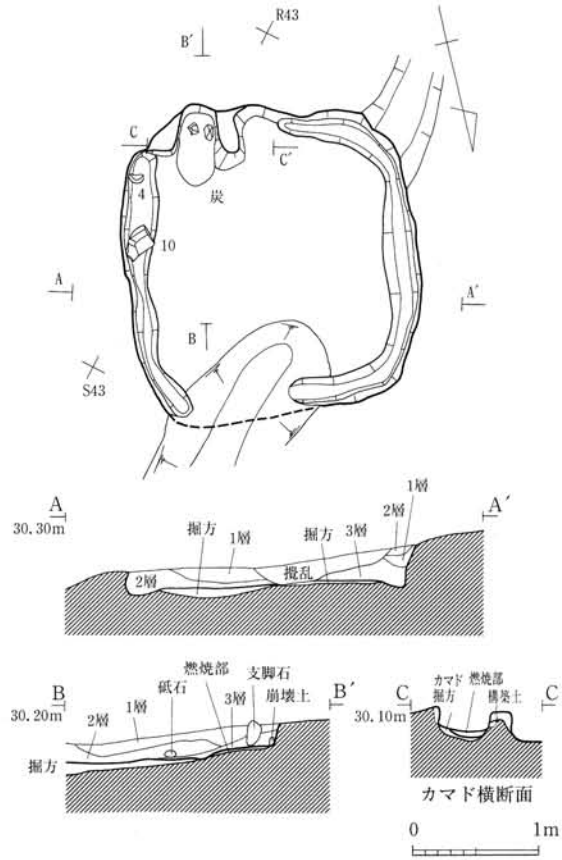
【ＳＩ53竪穴住居跡】（平面図・断面図：第74図、遺物：第75図、図版15－２）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高30.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。北辺が攪乱によって床面下まで大きく削平されている。SI34竪穴住居跡と近接する。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で約2.2m、東西が南辺で約2.2mと小さい。

〔方向〕東辺でみると北で西に約７°偏る。



層　位	特　　徴
掘方	褐色(7.5YR5/6,7.5YR3/4)土。径1～5cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。"
カマド掘方	褐色(7.5YR5/6,7.5YR3/4)土。径1～5cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。"
カマド構築土	明褐色(7.5YR5/6)土。径4cm以下の粘板岩礫片を多く含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
カマド燃焼部	暗赤褐色(2.5R3/6)土。焼土を多量に含む。
カマド崩壊土	明褐色(7.5YR5/6)土。しまり・粘性あり。
埋土１層	黒褐色(7.5YR3/2)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片、焼土粒、炭片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
埋土２層	明黄褐色(10YR6/8)粘質土を主に黒褐色(7.5YR3/2)土を不均一に含む。径1～2cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
埋土３層	暗褐色(10YR3/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片、炭片を少量含む。しまりよい。人為堆積土。

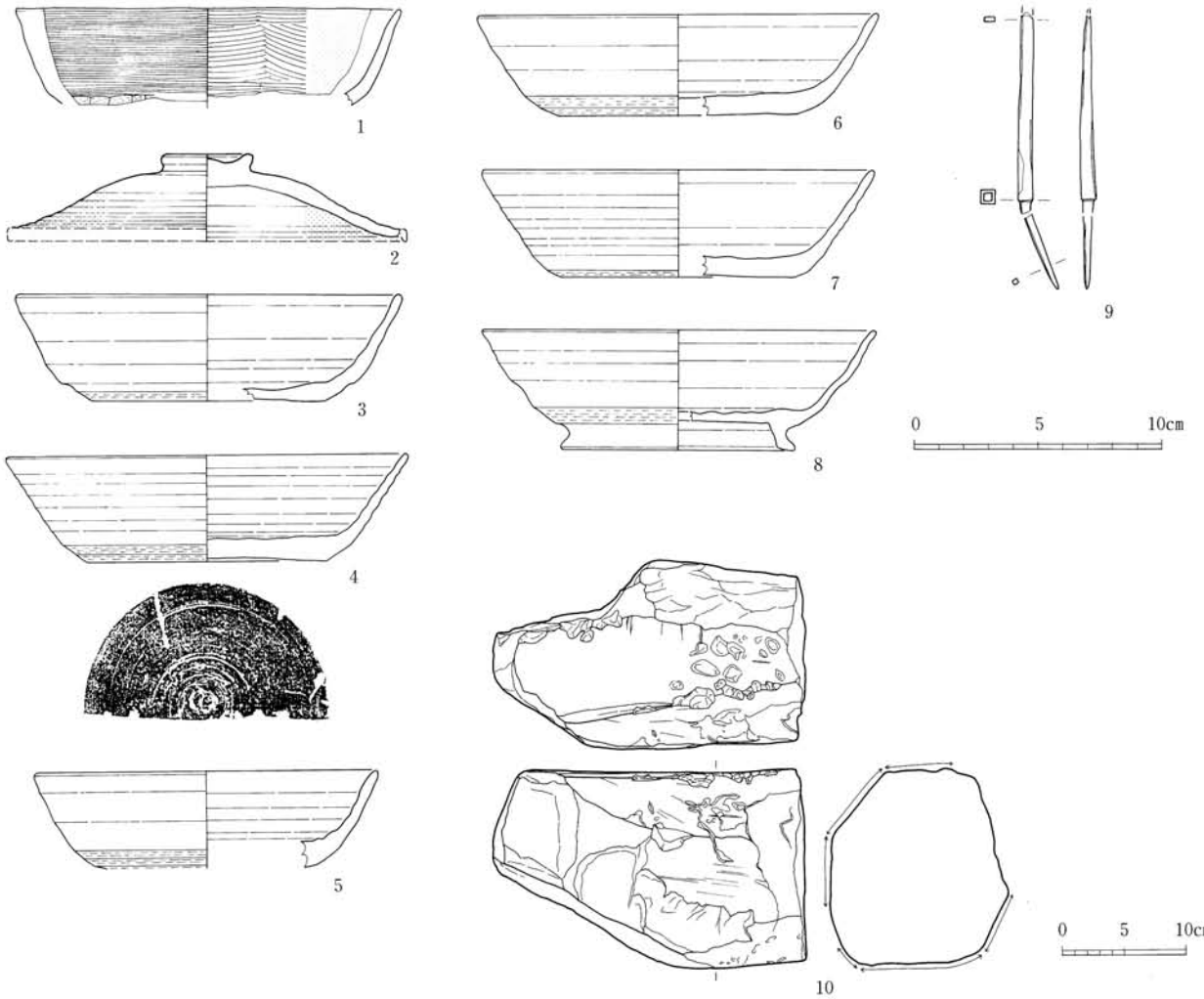
第74図　ＳＩ53住居跡平面図・断面図（１/60）

〔床面〕床面はほぼ平坦で、ほぼ全面に広がる掘方埋土上面を床面とする。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南西隅で30～40cm、残りの悪い北西隅で16cm前後、東辺で10cm以下である。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕丘陵尾根に直交せず、等高線に沿うように、南辺の南東隅に寄せて付設されている。廃絶時にカマド天井部が壊されていたが、カマドの側壁、奥壁、燃焼部、掘方が残っていた。周辺の残存状況からみて、煙道は長く延びていないものとみられる。左側壁は長さ32cmで、高さは奥で20cm、焚き口で10cm、右側壁は長さ45cmで、高さは奥で20cm、焚き口で15cm残存していた。



番号	種類	分類	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真	収納
1	土師器坏	I B2?	埋土1層	15.5			1/4	口縁～体下部破片。非ロクロ調整。外面：口縁～体部ヨコナデ、体下部手持ちヘラケズリ。内面:ヘラミガキ→黒色処理。		022
2	土師器蓋		南周溝				2/5	つまみ完形～体部破片。口縁欠損。口径約16.2cm。器高約3.6cm。ロクロ調整→両面黒色処理。焼成不良。	33-21	022
3	須恵器坏	A3	埋土1層	15.6	9.4	4.3	1/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。		022
4	須恵器坏	A3	周溝底面	16.2	9.6	4.3	1/2	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。	33-20	022
5	須恵器坏	A3	周溝	13.8	9.0	3.9	破片	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。		022
6	須恵器坏	A3	埋土1層	16.2	9.6	4.1	1/2	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成やや不良。	33-19	022
7	須恵器坏	A3	埋土1層	15.8	9.4	4.4	1/2	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。両面に火襷痕。		022
8	須恵器高台坏	A2	埋土1層	16.0		4.9	1/2	高台径9.4cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台→再びロクロナデ。焼成不良。断面サンドイッチ状。	33-22	022
9	鉄鏃		埋土1層				破片	箆被～茎部破片。鏃身大きく欠損するが一部残存する。鑿箭式か。箆被に両関。現存長11.3cm。箆被断面6mm方形。茎断面3.5mm方形。茎部で折れ曲がる。茎部長約3.8cm。	37-12	031
10	砥石		周溝				完形	砂岩製。6面研磨・擦痕。中砥。長さ25.2cm。幅14.2cm。厚さ14.5cm。	39-3	036

第75図　S I 53竪穴住居跡出土遺物

両側壁外面の幅は下部で80cmある。両側壁の内側は被熱のため著しく赤色硬化していた。カマドの左側壁は地山削り出しで、右側壁は黄褐色粘質土を用いている。焚き口は下部幅32cmで、高さは15cm以上である。燃焼部は奥行き44cm、幅30cmで、奥壁から焚き口にかけてわずかに傾斜し、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。奥壁は高さ18cmで、ほぼ直に立ち上がる。

カマド奥壁から13cm手前、2対の支脚石が立てられていた。支脚石は燃焼部から約20cmほぼ直に立ち上がる。この付近で、天井部の高さは少なくとも20cmあったことが知られる。支脚石は長さ約20cm、幅13cm、厚さ7cmと長さ約20cm、幅10cm、厚さ7cmの粘板岩板状礫片を用いている。

〔周溝〕各辺で幅15～25cm、深さ6～10cmの周溝を検出した。周溝はカマドの両側壁の際で途切れ、カマドの下を暗渠となって通らない。堆積状況からみて、機能時には開渠であったと考えられる。

〔堆積土〕3層に分けられ、廃絶時に人為的に埋められている。

〔出土遺物〕周溝から土師器坏・蓋（2）・甕、須恵器坏（4・5）の破片、大型の砥石（10）、埋土から土師器坏（1）・甕、須恵器坏（3・6・7）・高台坏（8）・蓋・甕、鉄鏃（9）の破片などが少数出土した。いずれも廃絶時の遺物である。このうち土師器蓋（2）は須恵器蓋を模倣したもので、ロクロ調整後に両面黒色処理しており、特異である。これ以外の土師器坏（1）・甕はいずれも非ロクロ調整である。須恵器坏（3～7）・高台坏（8）は体下部～底部を回転ヘラケズリしている。

【ＳＩ34竪穴住居跡】（平面図：第76・77図、断面図：第78図、遺物：第79～88図、図版16・17）

〔位置〕調査区中央部、丘陵尾根上の北寄り、標高29.5m付近に位置する。

〔重複〕3回建て直されている。古いものから順にＳＩ34Ａ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｃ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡とする。ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡、ＳＩ34Ｃ竪穴住居跡、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡は東辺、北辺、南辺を踏襲しながら西へ拡張している。ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡は火災にあって焼失し、再建されていない。南東隅は肥溜めと思われる現代の攪乱で壊されている。

《ＳＩ34Ａ竪穴住居跡》（平面図：第76図、断面図：第78図）

〔平面形・規模〕北西部と南西部、掘方がわずかに残るのみで、残りが悪い。平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.5m、東西はＡ掘方の範囲からみて約4.1mと考えられる。

〔方向〕西辺はほぼ北を向く。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい北西隅で36cmである。他は拡張されたＳＩ34Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡に大きく壊され、残っていない。

〔床面〕拡張されたＳＩ34Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡に大きく壊され、北西隅にほんのわずか残るのみである。ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡のＤ貼床面の下層に掘方がある。Ｂ・Ｃ・Ｄ周溝、Ｃ土壙１・２、Ｄ土壙がこの掘方よりも新しいことから、この掘方はＳＩ34Ａ竪穴住居跡の掘方とみられる。

〔主柱穴〕残存状況からみて、主柱穴はないと考えられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔Ａ周溝〕北西隅で幅10～18cm、深さ6～9cmの周溝を検出した。周溝は人為的に埋め戻され、その上に薄く生活層が堆積している。機能時には暗渠であったと考えられる。

〔堆積土〕ＳＩ34Ｂ竪穴住居の構築に伴い、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器坏（1）・甕（2）、須恵器坏・高台坏・甕の破片が少数出土した。このうち土師器坏（1）は丸底で、須恵器坏・高台坏は体下部～底部が回転ヘラケズリされている。

《ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡》（平面図：第76図、断面図：第78図）

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.7m、東西が約3.2mと推定される。

〔方向〕西辺でみると北で西に約14°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ34Ｃ竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。また、ＳＩ34Ａ竪穴住居跡と床面レベルをほぼ同じくして位置を東にずらしているため、西辺はＳＩ34Ａ竪穴住居跡の埋土を壁としていたものとみられる。

〔Ｂ床面〕床面レベルはＳＩ34Ａ竪穴住居跡とほぼ同じとみられ、ＳＩ34Ａ竪穴住居跡の貼床を床面としていたものと考えられる。

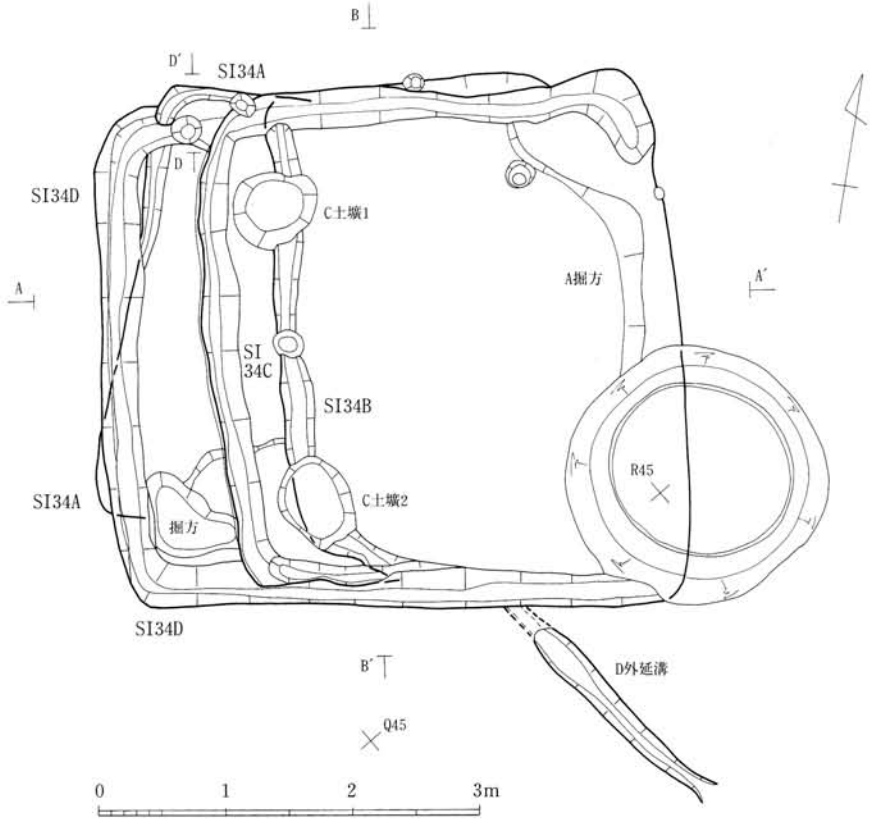
〔主柱穴〕残存状況からみて、主柱穴はないと考えられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔Ｂ周溝〕西辺と南西隅で、幅16～24cm、深さ５cmの周溝を検出した。SI34C竪穴住居跡に拡張する際に人為的に埋められている。

〔堆積土〕人為的に埋められた周溝以外に、堆積土は残っていない。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。



第76図　ＳＩ34Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡平面図

《ＳＩ34Ｃ竪穴住居跡》（平面図：第76図、断面図：第78図）

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で約3.9m、東西が約3.8mと推定される。床面レベルを同じくしてＳＩ34Ｂ竪穴住居跡を西に約60cm拡張している。

〔方向〕西辺でみると北で西に約13°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ34Ｄ竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔Ｃ床面〕床面レベルはＳＩ34Ｂ竪穴住居跡とほぼ同じとみられ、ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡の床面を踏襲していたものと考えられる。

〔主柱穴〕主柱穴の有無は不明確である。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔Ｃ周溝〕西辺、南東隅で幅25cm前後、深さ10cm前後の周溝を検出した。西辺は奥に抉るように掘り込まれている。ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡への拡張に伴い、人為的に埋められている。北辺、南辺はＳＩ34Ｄ竪穴住居跡とほぼ一致するとみられる。

〔Ｃ土壙〕西辺際の西周溝に沿って土壙１、土壙２を検出した。土壙１は長径70cm、短径58cmの不整楕円形で深さ15cm、土壙２は長径70cm、短径57cmの楕円形で深さ６cmある。ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡への拡張に伴い、人為的に埋められている。対角線上の位置にあり、主柱穴の抜取穴の可能性もあるが、大きく浅いため土壙と考えた。

〔堆積土〕ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡への拡張に伴い、周溝と土壙１・２が人為的に埋められている。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡》（平面図：第76図、断面図：第78図、遺物：第79～88図）

〔廃絶の原因〕火災による焼失。

〔平面形・規模〕平面形はほぼ正方形で、規模は南北が西辺で4.0m、東西が北辺で4.3mである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約13°偏る。

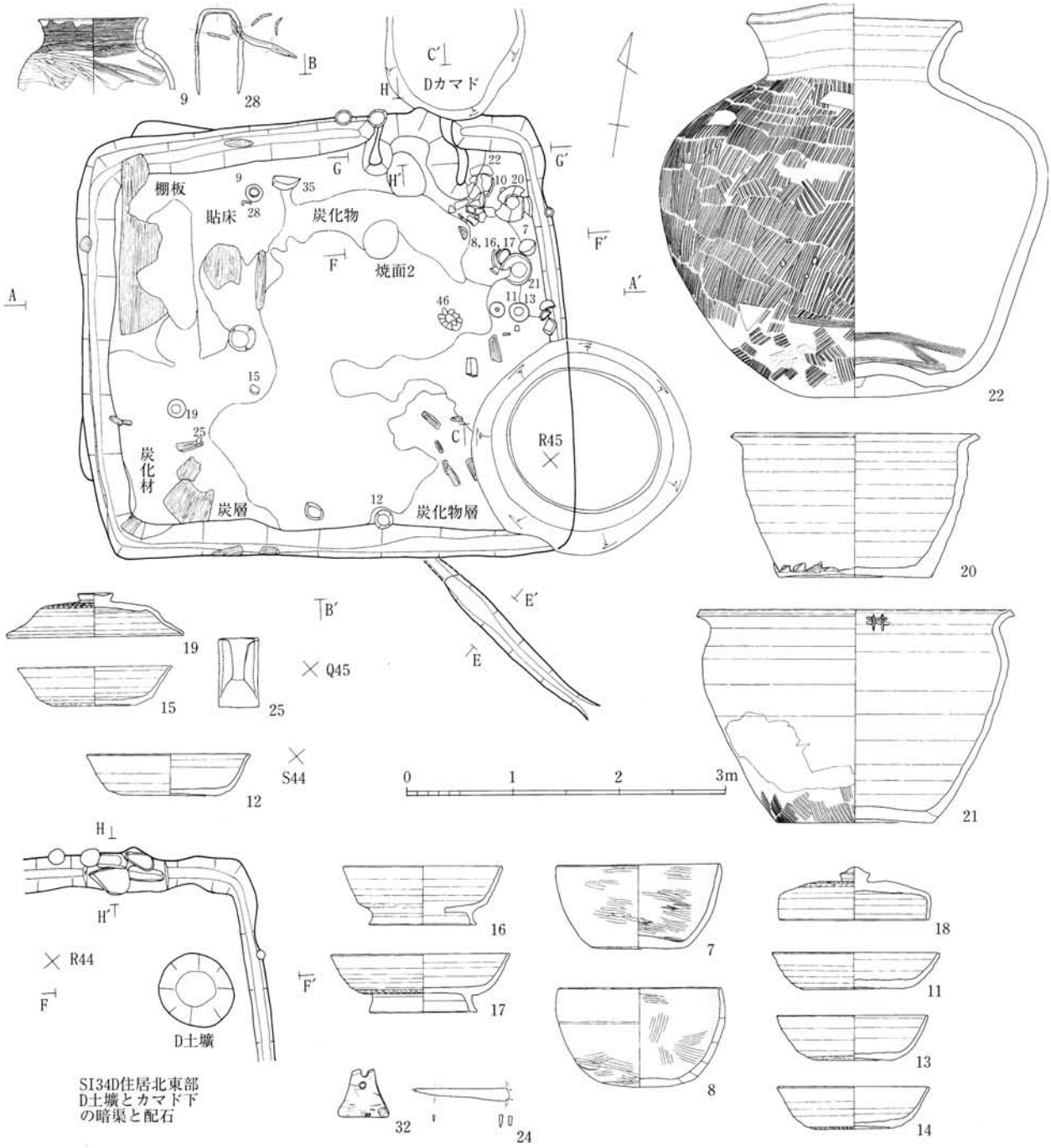
〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、最も残りのよい西辺中央で56cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。北辺では30cm前後、南辺では20cm前後あり、ほぼ直に立ち上がる。残りの悪い東辺では８cm以下である。

〔Ｄ床面〕ほぼ全面に貼床され、その上面を床面としている。床面はほぼ平坦だが、斜面上方にあたる西側から下方にあたる東側に向けてやや傾斜する。西周溝際と東周溝際では16cmのレベル差がある（第78図断面Ａ－Ａ'）。これに対し、南北方向のレベル差はさほどない。西辺と平行するように、北西部床面の上に長さ1.7m、幅45cm、厚さ２cmの炭化した板材（クリ材）があった（付章１）。脆弱で取り上げることができなかった。西辺との位置関係からみて、床から高い位置に床と平行に設置されていた棚板が焼け落ちたものと考えられる。北西部・南東部を中心に床面上には炭化材が14点あった。火災住居にも関わらず、床面上には薄炭層があるものの炭化材は少なかった。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。コナラ節、クヌギ節、ケヤキ、クリ、ムクノキ近似種などがある（付章１）。

〔Ｄカマド〕北辺の中央から約90cm東寄りに付設されている。カマドの天井部は崩壊し、カマドの

上部も削平されていたが、カマドの両側壁の下部、奥壁、燃焼部が残されていた。また、カマドの北に接して大きな攪乱があったが、それに壊されていない箇所からみると、煙道は長く延びてはいないと判断される。左側壁は長さ58cm、高さは6cm、右左側壁は長さ75cm、高さは6cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.15mある。カマド両側壁はにぶい黄褐色土を用いている。燃焼部は奥行き55cm、幅40cm、奥壁高18cmで、奥壁から焚き口にかけてなだらかに傾斜し、焼土・炭が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部の下にはカマド掘方と暗渠があった。暗渠の掘方は幅27cm、深さ10cmで、カマド両側壁外側の周溝へと続いていた。暗渠・掘方は人為的に埋め戻され、その上部に長さ27～38cm、幅12～25cm、厚さ4～6cmの粘板岩板状礫片4点を据えてさらに整地し、燃焼部としていた。

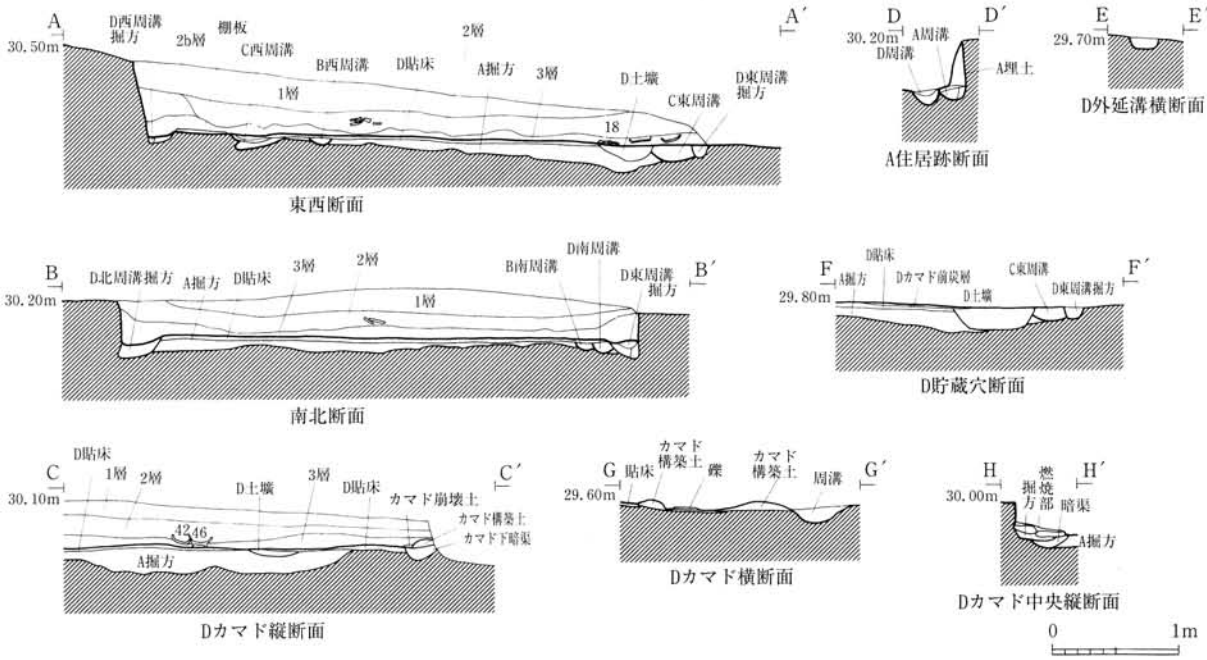


第77図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡平面図（1/60）と床面の遺物出土状況

〔D周溝〕各辺で周溝を検出した。周溝の掘方は北・西・南周溝が幅25～35cm、深さ10～16cmで、奥に抉り込むように掘り窪められた箇所もあった。東周溝は幅18cmと他辺よりも狭い。各辺の周溝は深さの半分程度が人為的に埋め戻され、火災時にはやや窪んだ半暗渠状態であった。

〔D外延溝〕南辺中央の80cm東寄りの位置から、斜面下方に向けて斜めに幅15～25cmの外延溝が長さ2.2m延びていた。外延溝の入り口は、南辺の側壁から斜めに刳り貫かれ、長さ32cmにわたってトンネル式で、厚さ2cmの天井部が残っていた。この箇所で深さ15cmあり、以下は上部が削平され、次第に浅くなっていた。

〔床下土壙〕カマド右手前の床面下から土壙が1基検出された。平面形は径70cmの円形で、深さ15cmある。火災前に人為的に埋め戻され、その上に土師器椀1点（8）、須恵器高台坏2点（16・17）、



住居跡	層位	特徴
SI34A	A掘方	明赤褐色(2.5YR5/6)地山土と粘板岩風化礫小片を多量に含む褐色(7.5YR4/4)土が混じり合う人為堆積土。
	A周溝掘方	2層に分かれる。外壁側は褐色(7.5YR4/3)土で、径1cm以下の粘板岩風化礫片をやや多く含む。内側は明赤褐色(2.5YR5/6)土に褐色土ブロックをわずか含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	A生活層	褐色(7.5YR4/3)土。径3cm以下の粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土。
	A埋土	褐色(7.5YR4/3)土。径3cm以下の粘板岩風化礫片を多く含み、径5mm以下の炭化物を含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
SI34B	B周溝	褐色(7.5YR4/3)土。径1cm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。炭化物をわずかに含む。人為堆積土。
SI34C	C土壙1	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。径3cm以下の焼土ブロック、炭化材、地山土ブロック、粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	C土壙2	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径3cm以下の粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりなし。粘性あり。人為堆積土。
	C周溝	褐色(7.5YR4/4)土。径1～3cmの暗褐色(7/5YR5/6)土ブロック、粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
SI34D	D貼床	明赤褐色(2.5YR5/6)地山土と炭化物・焼土・粘板岩風化礫小片を含む褐色(7.5YR4/4)土が混じり合う人為堆積土。
	Dカマド下暗渠	褐色(7.5YR4/4)土。しまりよい。人為堆積土。
	Dカマド掘方	褐色(10YR4/4)土。径2cm以下の炭化物・焼土・地山土ブロックを多く含む。しまりあり。粘性なし。カマド下暗渠の上に扁平な粘板岩礫を敷き、これらの土で人為的に埋めて燃焼部とする。
	Dカマド構築土	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。地山土ブロックを多く、炭化物・焼土を少し含む。しまりあり。粘性ややあり。人為堆積土。
	Dカマド燃焼部	赤褐色(2.5YR4/6)土。焼土を多量に含む。
	Dカマド崩壊土	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。炭化物・焼土をわずかに含む。しまりあまりない。粘性なし。自然堆積土。
	D周溝掘方	しまりのある人為堆積土で、3層に分かれる。1層が褐色(7.5YR4/4)土、2層が褐色土をわずかに含む明赤褐色(2.5YR5/6)地山土、3層が炭・焼土粒を少し含む褐色(7.5YR4/4)土。
	D外延溝	褐色(7.5YR4/3)粘質土。径2～3cmの粘板岩風化礫片、黄褐色地山粘土ブロックを多く含む。人為堆積土。
	D土壙	暗赤褐色(5YR3/6)土。径1～2cmの炭片、径1～4cmの焼土ブロックを多く含む。上面にはカマド前炭薄層と完形の須恵器甕・鉢があり、火災時にはすでに人為的に埋められていた。
	堆積土1層	褐色(7.5YR4/4)土。径5mm程の粘板岩風化礫片をやや多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土2層	褐色(7.5YR4/4)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片、径5mm程の炭片・焼土粒を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土2b層	褐色(7.5YR4/4)土。径2～5cmの明黄褐色(10YR6/8)粘質土ブロック、径5mmの炭片・焼土粒を多く含む。しまり・粘性なし。西片壁際に分布する自然堆積土。
	堆積土3層	暗赤褐色(5YR3/4)土。固く焼き締まった焼土塊、焼土、炭片を多量に含む。しまりあり。粘性なし。自然堆積土で、屋根に葺かれていた葺土が火災にあって焼け落ちたとみられる。上面に土器を廃棄した集中箇所がある。

第78図　SI34A・B・C・D竪穴住居跡断面図（1/60）

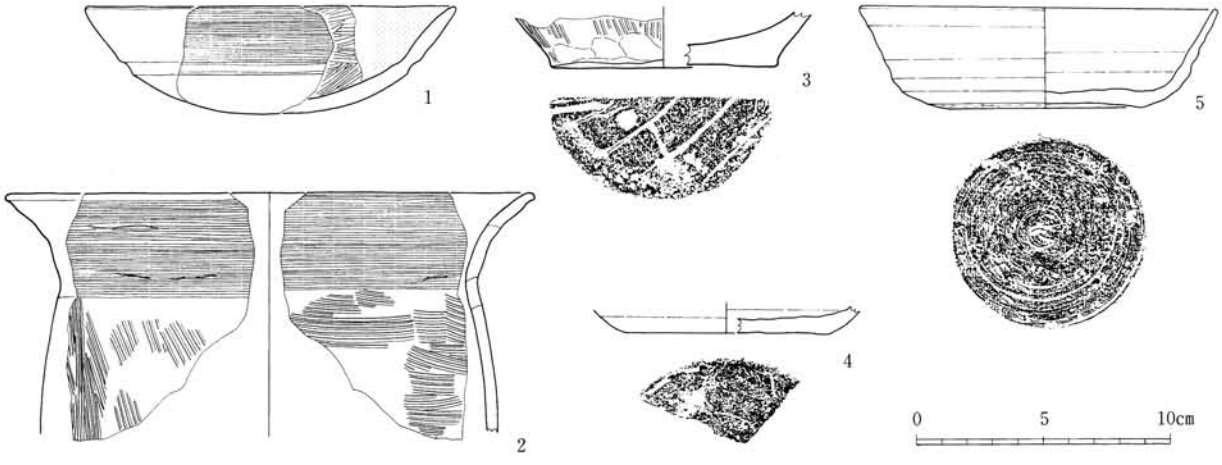
須恵器鉢１点（21）が置かれていた。貯蔵穴と呼ばれることの多い床面の土壙と位置・形態が類似するが、機能時には埋め戻されていたことがわかる。

〔焼面〕床面上に２箇所の焼面がある。北東部の焼面１は長さ約1.2m、幅約70cmで、焼け落ちた棚板に隣接する。焼面２は長径40cm、短径30cmの楕円形で、カマド手前に位置する。いずれも赤色硬化が著しい。火災によるものとは考えにくく、機能時に何らかの焼成を行ったことによるものと思われる。

〔堆積土〕堆積土は１・２ａ・２ｂ・３層の４層に分かれ、いずれも本竪穴住居の火災以後の自然堆積層である。このうち最下層の堆積土３層は、拳大～人頭大の固く焼き締まった焼土塊、焼土、炭片を多量に含む。床面全面に広がり、壁際に20～25cmと最も厚く堆積し、中央部の厚い箇所では12cm前後あり、薄い箇所では３cmと薄い。堆積土３層上面は起伏に富む。堆積土３層の堆積は約1.7m（4.3m×4.0　m×0.1m）で、一般に埋蔵文化財関係で用いられているテンバコ（内法54cm×34cm×15cm、0.0275m ）に換算すると約67箱分に相当する。拳大～人頭大の固く焼き締まった焼土塊はスサを含ない。詳細は考察で論述するが、拳大～人頭大の固く焼き締まった焼土塊が床面全面に分厚く広がり、上面が起伏をなすような堆積状況からみて、本竪穴住居跡の屋根に葺かれていた葺土が焼失して崩れ落ちたものと推定される。

〔床面の遺物出土状況〕中央部での遺物の分布は希薄で、各辺の壁から幅約１ｍの帯状の部分から遺物は主に出土していた。遺物は北東部に特に集中し、その他の箇所では散在的であまり集中していなかった。

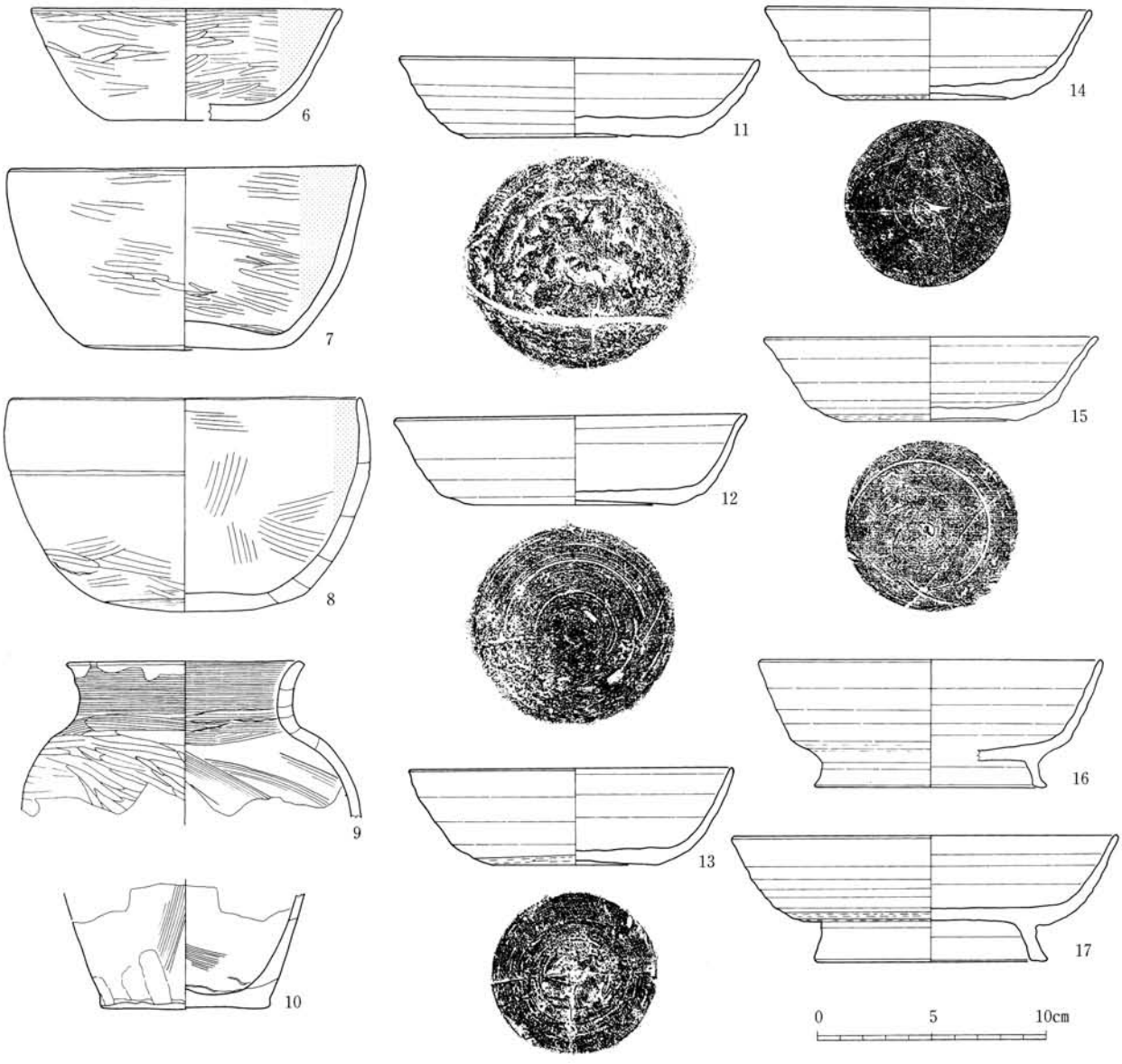
北東部では、カマドの右脇に須恵器甕１点（22）、須恵器鉢１点（20）が置かれていた。その南側に置かれた須恵器鉢１点（21）を中心に、３枚重ねにされた土師器埦（８）、須恵器高台坏（16・17）、２枚重ねにされた須恵器坏（11・13）、須恵器短頸壺蓋１点（18）、土師器埦１点（７）、刀子



番号	種　類	分類	遺構	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ＩA1	SI34A	掘方	14.6		4.3	破片	非ロクロ。丸底。外面：口縁ヨコナデ、沈線、底部ヘラケズリ→ナデ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		014
2	土師器甕	ＩA	SI34A	掘方	20.8			破片	非ロクロ。外面：口縁ヨコナデ、胴部ハケメ。内面：口縁ヨコナデ、胴部ハケメ。		014
3	土師器甕	ＩA	SI34D	貯蔵穴		9.0		2/5	非ロクロ。外面：底部木葉痕。内面：ナデ、摩滅。		014
4	須恵器坏	A1	SI34D	貼床		8.0		1/4	底部：ヘラ切り。		014
5	須恵器坏	A3	SI34D	貯蔵穴	14.1	7.5	4.0	1	底部：切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。火襷痕。	28-19	014

第79図　ＳＩ34Ａ竪穴住居跡出土遺物、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(1)－火災前の遺物

1点（24）、提げ砥石1点（32）が置かれていた。北周溝際の中央西寄りでは、置き砥石1点（35）、土師器甕口縁～体上部破片を転用した器台1点（9）、馬具1点（28）が出土した。南西部では須恵器坏1点（15）、須恵器蓋1点（19）、鉄斧1点（25）が出土した。南周溝中央際では須恵器坏1点（12）が出土した。



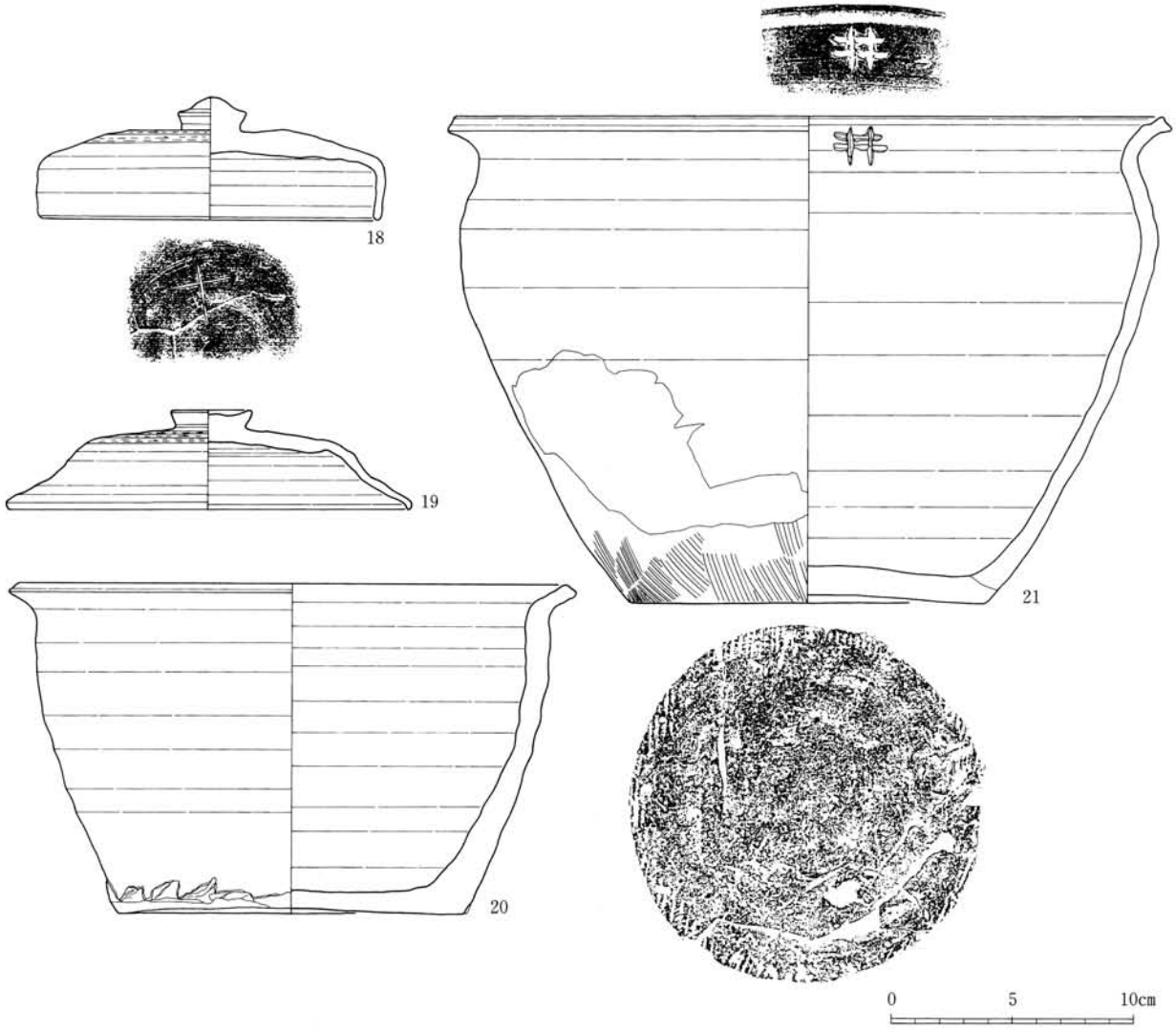
番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　徴	写真	収納
6	土師器坏	I C1	外延溝	13.6	6.8	4.9	1/4	非ロクロ。平底。外面：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-14	014
7	土師器椀	I B	床面	13.5	8.9	8.0	完形	非ロクロ。平底。外面：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-15	014
8	土師器椀	I A	床面	15.4	8.7	9.4	7/8	非ロクロ。丸底気味。外面：ヘラミガキ、沈線状段。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-16	014
9	土師器甕	I B2	床面	10.4				非ロクロ。外面：口縁ヨコナデ、頸下部ヘラナデ、胴部ヘラミガキ。内面：口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。器台に転用。	28-17	014
10	土師器甕	I A	床面		7.4		1	非ロクロ。外面：胴部ナデ、指オサエ、底部ナデ。内面：ハケメ、ナデ。		014
11	須恵器坏	A1	床面	15.8	9.4	3.5	完形	底部：ヘラ切り。二次加熱を受け、器面が全体的に荒れている。	28-20	014
12	須恵器坏	A2	床面	15.3	8.7	3.9	1	底部：切り離し不明→底部のみ回転ヘラケズリ。	28-21	014
13	須恵器坏	A3	床面	14.2	7.2	4.3	完形	底部：切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕。	28-22	014
14	須恵器坏	A3	床面	14.3	7.2	4.1	完形	底部：切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕。	29-1	014
15	須恵器坏	A3	床面	14.6	7.5	3.7	1	底部：切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕。底部に焼成前ヘラ書き「×」	29-2	014
16	須恵器高台坏	A1	床面	15.1		5.6	>1/2	高台径10.1cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。	29-9	014
17	須恵器高台坏	A2	床面	16.8		5.5	完形	高台径10.2cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。二次加熱を受け、にぶい橙色に変化し、器面一部剥落。	29-10	014

第80図　S I 34D竪穴住居跡出土遺物(2)－火災時の土器

〔火災直後の遺物廃棄〕堆積土３層は火災時に屋根に葺かれていた葺土が崩れ落ちたと考えられ、その上面に完形に近い土器（38～48）の集中する箇所が南東部と中央部に各１箇所あった。このうち須恵器坏（39・43）・高台坏（44）は二次加熱を受け、器面が荒れている。火災で不要となったものを火災直後に廃棄したものと考えられる。

〔出土遺物〕火災前の遺物は少なく、Ｄ貼床とＤ土壙から少数の遺物が出土した。Ｄ貼床からは非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（４）・鉢の破片、炭化した種子（モモ）が少数出土した。Ｄ土壙からは非ロクロ調整の土師器甕（３）破片、須恵器坏（５）が出土した。

火災時の遺物は比較的多く、しかも完形のものや残存率の高いものが多い。火災時の遺物は主に床面から出土し、他に周溝や外延溝からも少数出土した。床面からは土師器埦２点（７・８）、土師器甕破片を転用した器台１点（９）、須恵器坏５点（12～15）、須恵器高台坏２点（16・17）、須恵器

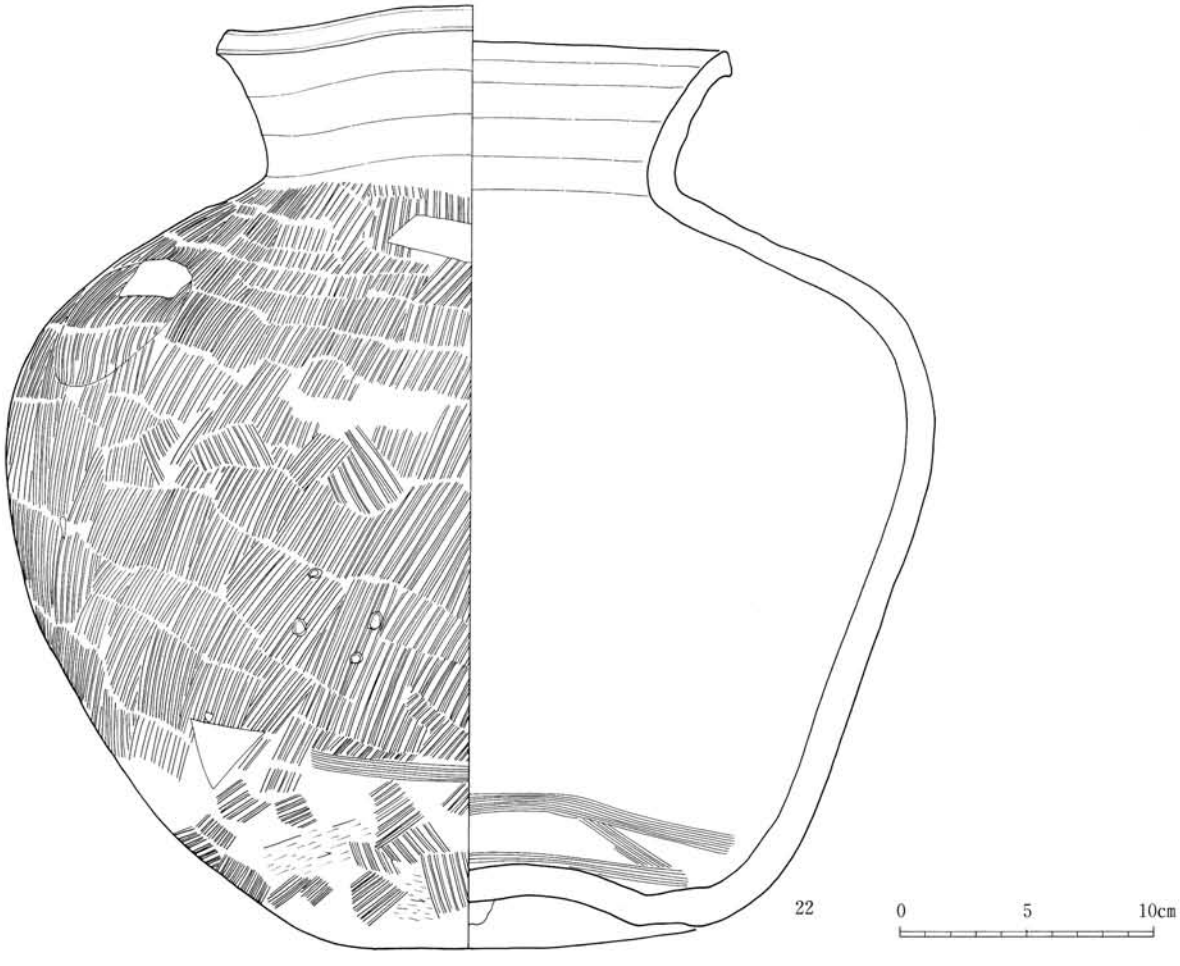


番号	種　類	分類	層位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
18	須恵器蓋	B	床面	14.3		5.1	完形	宝珠つまみ。外面：天井部回転ヘラケズリ。内面：焼成前ヘラ書き「×」	29-15	014
19	須恵器蓋	A1d	床面	16.8		4.1	完形	窪んで低い宝珠状つまみ。外面：天井部回転ヘラケズリ。両面火襷痕。	29-14	014
20	須恵器鉢	A1	床面	23.4	14.5	13.7	完形	外面：体下部ロクロナデ→指オサエ。粘土付着。底部ナデ。	30-2	016
21	須恵器鉢	A2	床面	29.9	14.6	20.2	完形	外面：口縁～体上部ロクロナデ。体下部平行叩き。底部ナデ。内面：ロクロナデ→口縁に焼成前ヘラ書き「井」。	30-1 35-9	016

第81図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(3)－火災時の土器

器蓋１点（19）、須恵器短頸壺蓋１点（18）、須恵器鉢２点（20・21）、須恵器甕１点（22）、刀子１点（24）、有袋鉄斧１点（25）、馬具（木製三角錐形壷鐙に取り付けられた鉄製の逆U字状吊手金具）１点（28）、提げ砥石１点（32）、置き砥石１点（35）、磨石１点（36）の他、土師器甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。周溝からは完形の刀子１点（23）、有袋鉄斧１点（26）、手持ち砥石１点（34）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、鉄鏃（27）、壷鐙の縁金具？（29～32）の破片、外延溝からは土師器坏１点（６）の他、土師器甕破片が少数出土した。カマド崩壊土からは土師器甕、須恵器坏・蓋の破片が少数出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器坏（６）・埦（７）は平底、土師器埦（８）は丸底である。須恵器坏にはヘラ切りのもの（11）、回転ヘラケズリのもの（12～15）があり、後者がやや多い。須恵器高台坏（16・17）、須恵器蓋（19）、須恵器短頸壺蓋（18）も回転ヘラケズリされている。須恵器鉢（21）は内面口縁に焼成前に「井」とヘラ書きされている。馬具（28）は鉄製の逆U字状吊手金具で、木製三角錐形壷鐙に取り付けられたものである。刀子（23）は刃部と茎部との境に鎺が装着されている。鎺を装着したまま遺存する例は数少ないものである。なお、土師器埦

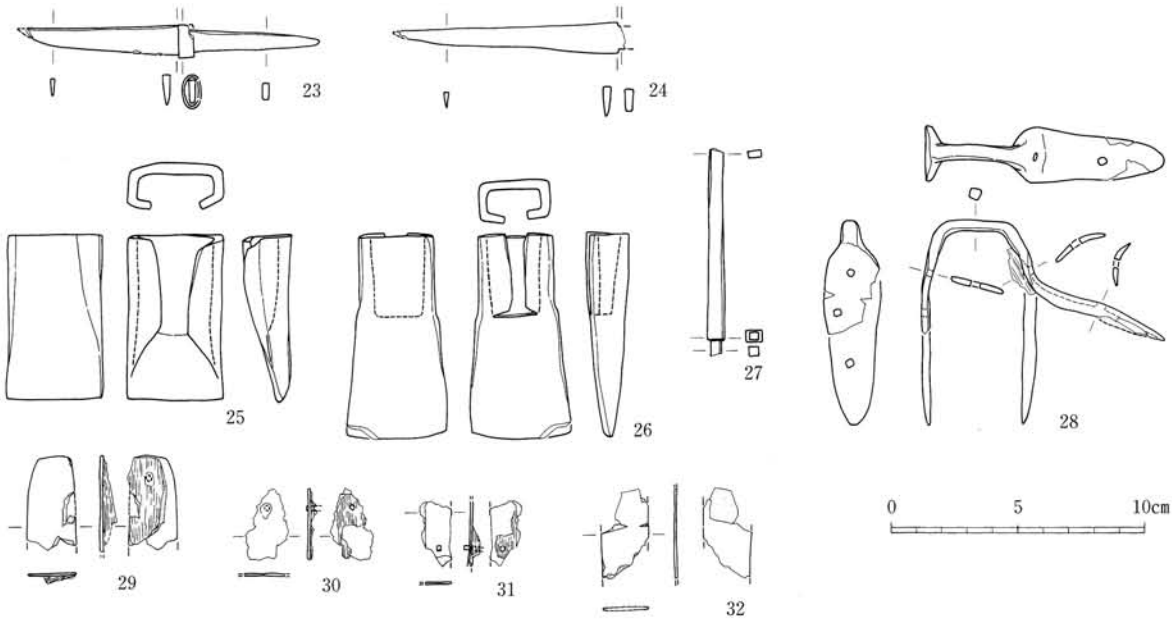


番号	種　類	分類	層位	口径	底径	器高	残存	特　徴	写真	収納
22	須恵器甕	B	床面	20.3		27.4	完形	最大径36.6cm。容量約20ℓ。著しく焼き歪み、外面胴部に焼き膨れ、焼けハジケ、底部に融着物あり。外面：口頸部ロクロナデ。胴下部手持ちヘラケズリ→胴部平行叩き目。底部ナデ。内面：口頸部ロクロナデ。胴部無文当て具痕。底部ナデ。	30-3	017

第82図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(4)－火災時の土器

（7・8）は二次加熱を受け、黒色処理が部分的に消失している。須恵器坏（11・12）・高台坏（16・17）も二次加熱を受け、器面が荒れている。これらは火災による焼失の影響と考えられる。

火災直後に堆積土3層上面に廃棄された遺物には、須恵器坏7点（37～43）、須恵器高台坏2点（44・45）、須恵器短頸壺1点（46）、須恵器甕2点（47・48）、鉄製紡錘車1点（49）、鉄鏃1点（50）、馬具の兵庫鎖1点（51）、環状金具1点（52）の他、非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕の破片がある。このうち須恵器坏は回転ヘラケズリされているもの（38～43）が10点と主体を占め、手持ちヘラケズリされたもの（37）は1点のみである。須恵器高台坏（44・45）、須恵器短頸壺（46）も回転ヘラケズリされている。また、須恵器高台坏（45）、須恵器短頸壺（46）は著しく焼け歪み、短頸壺は内部に熔着滓も付着しており、生産された須恵器窯からさほど離れていないことが窺える。また、須恵器蓋にはロクロ調整後に両面がヘラミガキされた体部破片が1点あり、土師器坏には有段坏の体部破片が1点ある。



番号	種　類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
23	刀子	周溝	完形	切先わずかに欠損。平造り角棟。切先はフクラややつく。両関（棟関・刃関）。茎胴部は中細で、関から茎尻にかけてやや幅を狭める。目釘は用いていない。現存長11.5cm。推定長11.9cm。推定刃身部長6.3cm。刃身部元幅1.1cm。切先棟厚2mm。刃身部棟厚3mm。茎部長5.6cm。茎元幅0.9cm。茎棟厚3mm。刃部と茎部との境に　装着。 は長さ3cm、幅6mm、厚さ1mmの鉄板を鍛接。と茎から推定される柄は長さ5.5cm以上、幅1.3cm、厚さ5mm。	37-16	030
24	刀子	床面	破片	刃身部～茎元部破片。切先わずかに欠損。切先はフクラややつく。平造り角棟。両関（棟関・刃関）。現存長8.8cm。刃身部推定長8.9cm。刀身部元幅1.2cm。切先棟厚2mm。刀身元部棟厚3mm。茎元幅0.9cm。茎部棟厚3mm。		030
25	有袋鉄斧	床面	完形	無肩。両刃。横斧。鍛造。全長6.5cm。刃部幅3.7cm。着柄部である袋部は横断面3.0×1.0cmの隅丸長方形で、深さ5.5cmの空洞となる。	37-19	030
26	有袋鉄斧	周溝	完形	無肩。両刃。横斧。鍛造。刃部一部欠損。全長8.1cm。刃部幅3.9cm。着柄部である袋部は横断面2.2×0.9cmの隅丸長方形で、深さ5.5cmの空洞となる。	37-18	030
27	鉄鏃	周溝	破片	篦被～茎部破片。鏃身部・茎部大きく欠損。篦被に両関。現存長8.2cm。篦被断面6×4mm長方形。茎断面4mm方形。	37-13	030
28	木製三角錐形壺鐙の鉄製吊手金具	床面	左脚部の一部欠損	馬具。木心鉄板張三角錐形壺鐙に釘留めされる鉄製U字形吊手金具。鐙鞦（みずお）が取り付けられる逆U字状の鐙鞦受け金具と木製三角錐形壺鐙に釘留めされる脚部金具からなる。鐙鞦受けは断面4mm方形の棒状金具を逆U字形に折り曲げている。そしてその両端に板状の柳葉形の脚部金具を鍛接している。脚部の横断面は壺鐙との接着面が凹面、その外側が凸面となって半凸レンズ形に湾曲している。左脚部に3箇所、右脚部に2箇所の釘孔が残り、壺鐙とは2本の釘で留められる。左右の脚部内側には木質が銹着している。全長8.1cm。鐙鞦受け幅3.8cm、鐙鞦受け高1.1cm。脚部長7.0cm、脚部幅2.2cm、脚部厚2mm。なお鐙鞦は、鐙鞦受けに兵庫鎖を揺めてその先端に鈕具を付けたものと類似品より推定され、これが力革で鞍に取り付けられていたと考えられる。	37-2	030
29	木製三角錐形壺鐙の縁金具か	カマド西脇の北周溝	同一個体の破片4点。	厚さ約1mmと薄い板状鉄製品。30・31には径2～3mmの方形の釘孔に断面2mm方形の釘が入れ込まれ、29には径2～3mmの方形の釘孔がある。29～31には木質が銹着している。釘孔はいずれも鉄板の幅に対して中央に穿たれている。木心鉄板張三角錐形壺鐙に釘留めされる鉄製U字形吊手金具(28)も床面から出土していることから、これらは木製三角錐形壺鐙の縁金具の可能性が高いと考えられる。29が現存長3.8cm、幅2cm。30が現存長2.8cm、現存幅1.7cm。31が現存長2.5cm、現存幅1.2cm。32が現存長3.5cm、幅1.9cm。	38-36	030
30					38-37	030
31					38-35	030
32					38-38	030

第83図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(5)－火災時の鉄製品

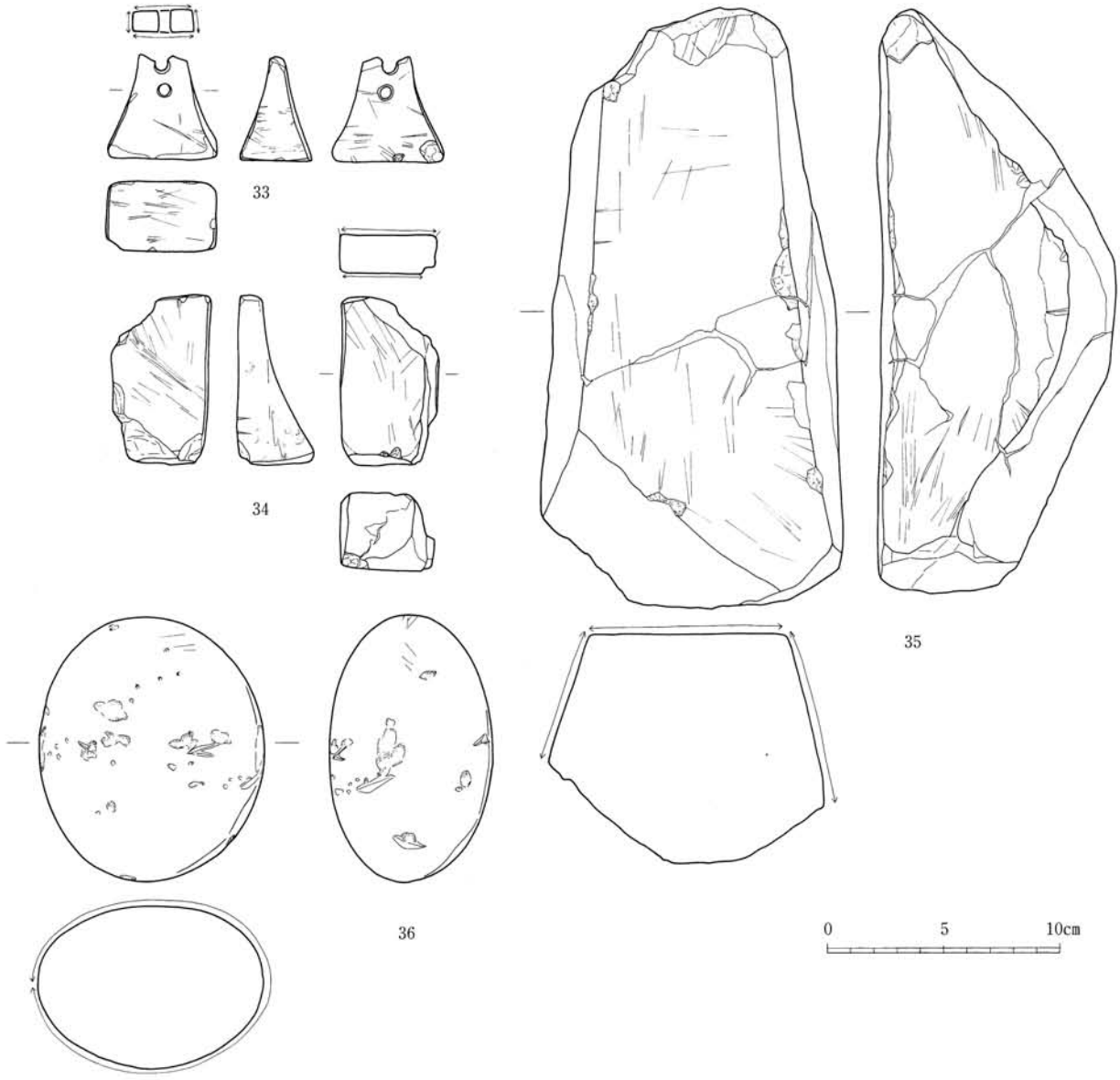
火災以後に廃棄ないし流入した遺物として、堆積土２ｂ・２・１層、検出面から土師器坏（53）・甕（54）、須恵器坏（55～59）・高台坏（60・61）・蓋（62・63）、丸瓦（64）、鎹（65）、砥石（66）、壁土の破片など少数の遺物が出土した。

【ＳＩ45竪穴住居跡】（平面図・断面図：第10図）

〔位置〕調査区南半、丘陵尾根上部西寄りの標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＫ７土壙と重複し、これよりも古い。この土壙に床面下まで大きく削平され、４箇所の主柱穴のみを検出した。

〔主柱穴〕北東・南東・南西・北西主柱穴を検出した。北東主柱穴以外は残りが悪い。掘方は長辺30cm



番号	種　類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
33	提げ砥石	床面	破片	砂岩製。四角錐状。５面研磨・擦痕。中砥。上部を一部欠損。上部２箇所に金属製工具により径6mmの円孔を表裏両面より穿つ。火災にあって全体的に変色。現存長4.5cm。幅4.8cm。厚さ3.1cm。66と同一個体の可能性がある。	38-1	035
34	手持ち砥石	周溝	完形	細粒砂岩製。角柱状。３面研磨・擦痕。中砥。長さ7.3cm。幅4.2cm。厚さ3.4cm。	38-11	035
35	砥石	床面	完形	砂岩製。不整な角柱状。３面研磨・擦痕。中砥。長さ24.0cm。幅11.9cm。厚さ10.0cm。	39-4	035
36	磨石	床面	完形	細粒砂岩製。平面・断面楕円形。球状。全面軽く研磨。長さ11.4cm。幅9.7cm。厚さ7.0cm。		035

第84図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(6)－火災時の石製品

前後、短辺25cm前後の隅丸長方形で、北東主柱穴で径10cmの円形の柱痕跡を検出した。柱間寸法は北西主柱穴―北東主柱穴間が約2.0m、北東主柱穴－南東主柱穴間が約1.9mある。

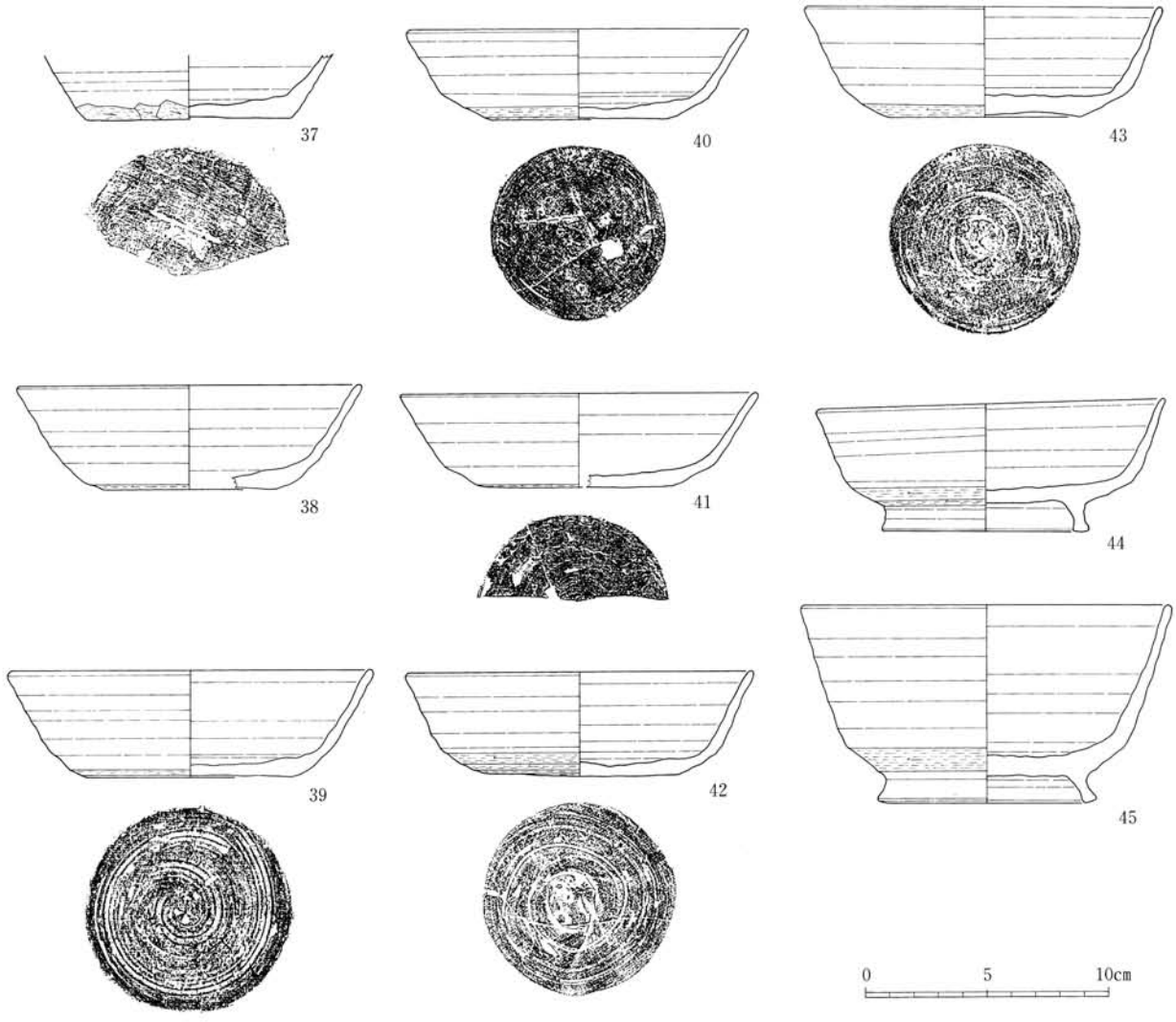
〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【ＳＩ31竪穴住居跡】（平面図・断面図：第89図、遺物：第90図、図版13－１）

〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上の標高31.0m付近に位置する。

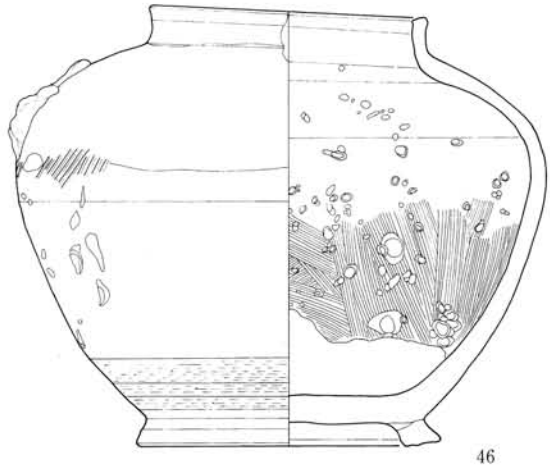
〔重複〕主要遺構との重複はない。西隣のＳＢ５掘立柱建物跡東妻とは約２m離れている。方向は同じだが、同時には存在しえないと考えられる。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で3.4m、東西が南辺で3.9mである。

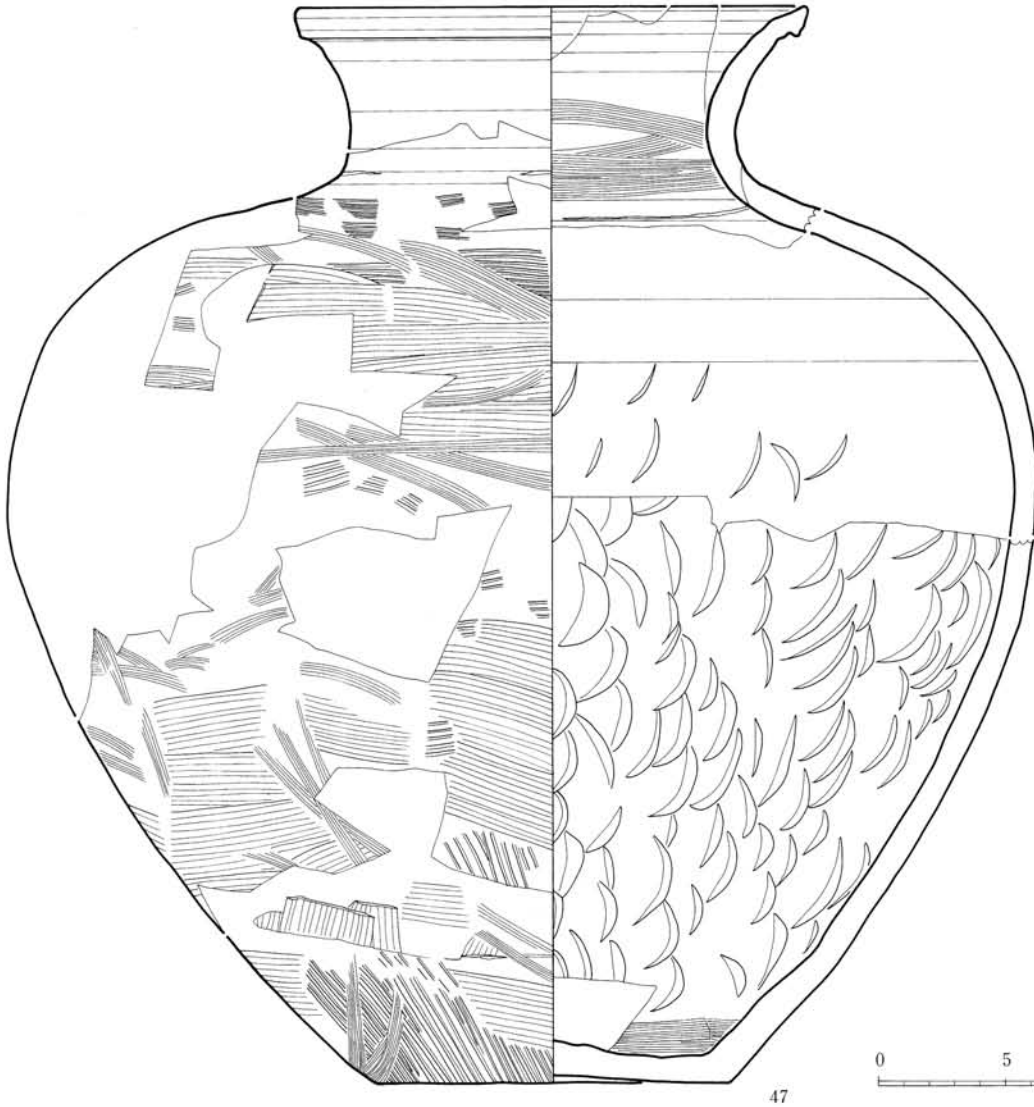


番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
37	須恵器坏	B4	3層上面		8.4		1/2	外面:底部ヘラ切り→体下部～底部手持ちヘラケズリ。底部焼成前ヘラ書き「一」。両面に火襷痕。	35-15	015
38	須恵器坏	A3	3層上面	14.2	7.0	4.3	1/4	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成やや不良。		015
39	須恵器坏	A3	3層上面	15.0	8.4	4.4	2/3	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕・重ね焼き痕。	29-3	015
40	須恵器坏	A3	3層上面	14.1	7.2	3.7	完形	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕・重ね焼き痕。	29-4	015
41	須恵器坏	A3	3層上面	14.7	7.6	3.9	1/2	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕。	29-5	015
42	須恵器坏	A3	3層上面	14.3	8.0	4.3	完形	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕。	29-6	015
43	須恵器坏	A3	3層上面	14.7	7.8	4.6	完形	外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕・重ね焼き痕。	29-7	015
44	須恵器高台坏	A1	3層上面	14.4		5.3	2/3	高台径8.5cm。外面体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。外面火襷痕。二次加熱を受ける。	29-11	015
45	須恵器高台坏	B2	3層上面	15.2		8.2	2/3	高台径8.2cm。外面：底部ヘラ切り→体下部～底部回転ヘラケズリ→高台接合→再びロクロナデ。外面火襷痕。口縁～体部が楕円形に著しく焼き歪む。高台接地面に重ね焼き痕。	29-12	015

第85図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(7)－火災直後の廃棄



46



47

0　5　10cm

番号	種　類	分類	層　位	口径	底径	器高	残存	特　　徴	写真	収納
46	須恵器壺（短頸壺）	B1	3層上面	11.0		17.5	完形	高台径12.0cm。高台高1.1cm。体部最大径20.9cm。外面：体部平行叩き→ロクロナデ→体下部回転ヘラケズリ→付高台→底部ナデ内面：体下部ナデ、口縁～体上部ロクロナデ。焼成堅緻。外面口縁～体上部に自然釉厚くかかり、窯壁片が小塊となって熔着している。両面の体部に焼成時の剥落痕が多数ある。その上に崩落した拳大程の窯壁片が熔着している。中央東辺寄りで正立で押しつぶされた状態で出土。	29-16	016
47	須恵器甕	A	3層上面	20.2	14.0	42.6	1/2	胴上部中央寄りに最大径がある。最大径40.5cm。容量約29ℓ。外面：口頸部ロクロナデ、胴部平行叩き→ナデ、底部ナデ。内面：口縁部ロクロナデ、頸部ナデ、胴部無文当て具痕→胴上部ロクロナデ、底部ナデ。焼成堅緻。住居内中央より押しつぶされた状態で一括して出土。	30-5	018

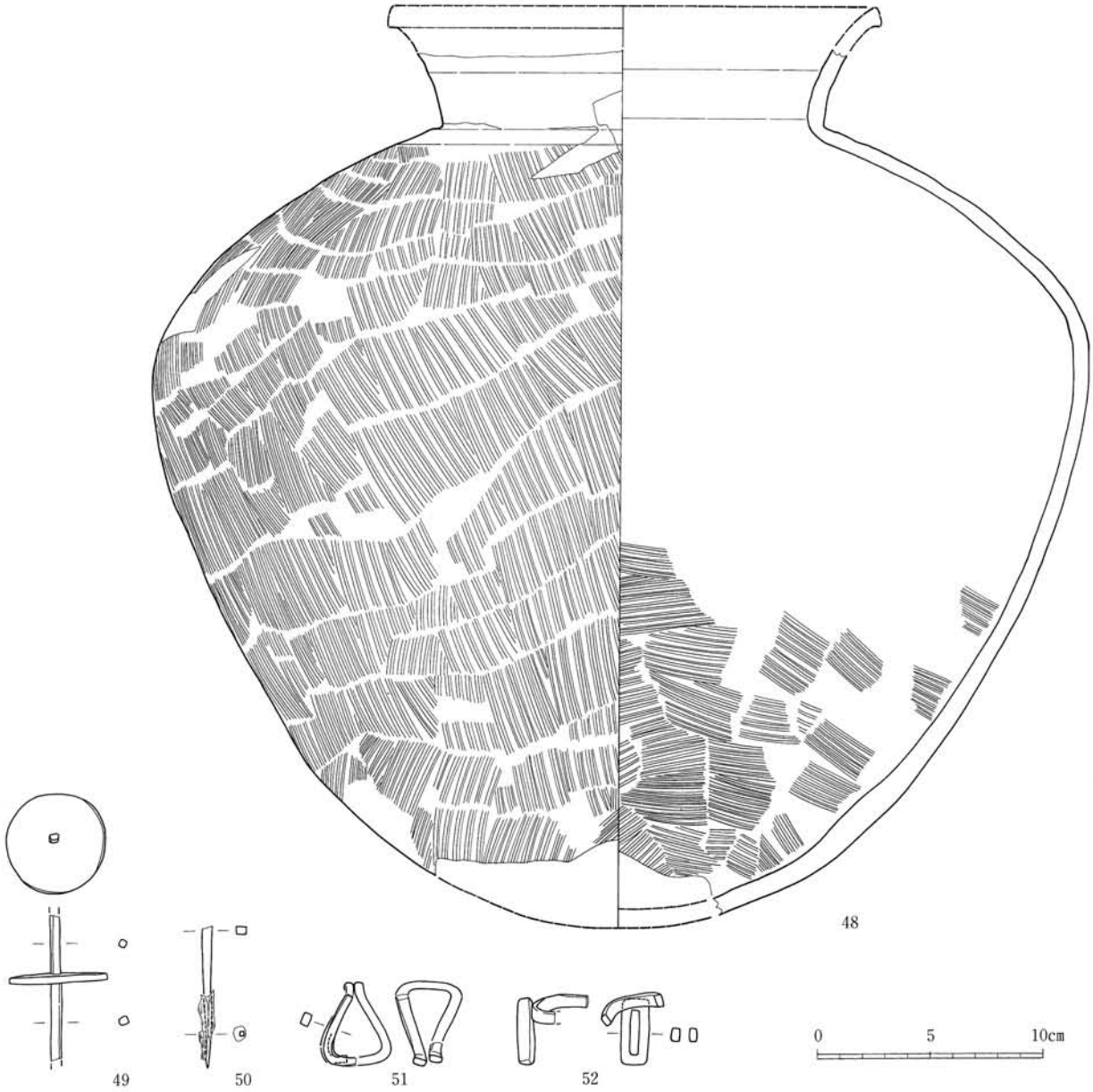
第86図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(8)－火災直後の廃棄

〔方向〕西辺で見ると北で東に約3°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい南西隅で41cm、南辺中央で35cmあり、約100°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。西辺中央では35cmあり、ほぼ直に立ち上がる。北東部では15cm以下と残りが悪い。

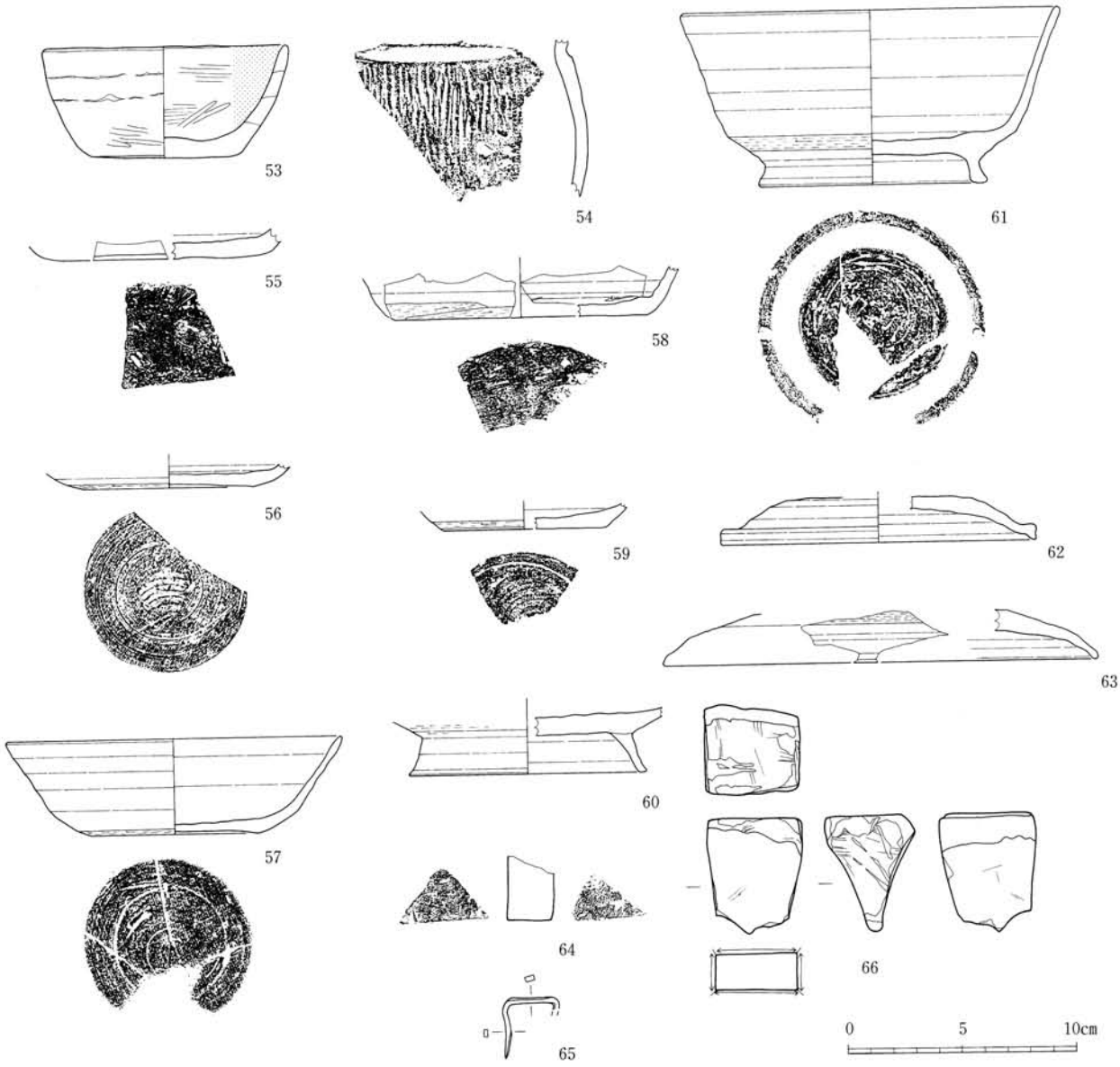
〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められなかった。



番号	種　類	分類	層　位	特　　徴	写真	収納
48	須恵器甕	B	3層上面	口縁部・底部欠損。頸部～胴下部7/8残存。丸底。推定器高41.2cm前後。胴上部中央寄りに最大径がある。最大径41.4cm。容量約29.5ℓ。外面：胴部～底部平行叩き、頸部ロクロナデ。内面：口頸部ロクロナデ、胴部平行当て具痕→ナデ。焼成堅緻。南西部よりつぶれた状態で出土。	30-4	019
49	鉄製紡錘車		3層上面	紡輪・紡軸とも鉄製。紡軸の両端が欠損。紡輪直径4.4cm。紡輪厚3mm。紡軸径4mm。紡茎の挿入される孔径4.5mm。	37-21	030
50	鉄鏃		3層	茎部破片。木質残存。現存長。断面4.5×3.5mm長方形。	37-18	030
51	兵庫鎖		3層	馬具。28の壺鐙の吊手金具に取り付く鐙鞦の兵庫鎖、もしくは未検出の轡の立聞に取り付く兵庫鎖か。鎖1個分の部分。現存長3.2cm。断面5×4mmの鉄棒を鍛接。	37-5	030
52	環状金具		3層	長方形状の環状金具と兵庫鎖の断片と思われる金具2点が銹着。環状金具は完形で、長さ3.0cm、幅1.2cm、厚さ6mm。	37-6	030

第87図　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土遺物(9)－火災直後の廃棄

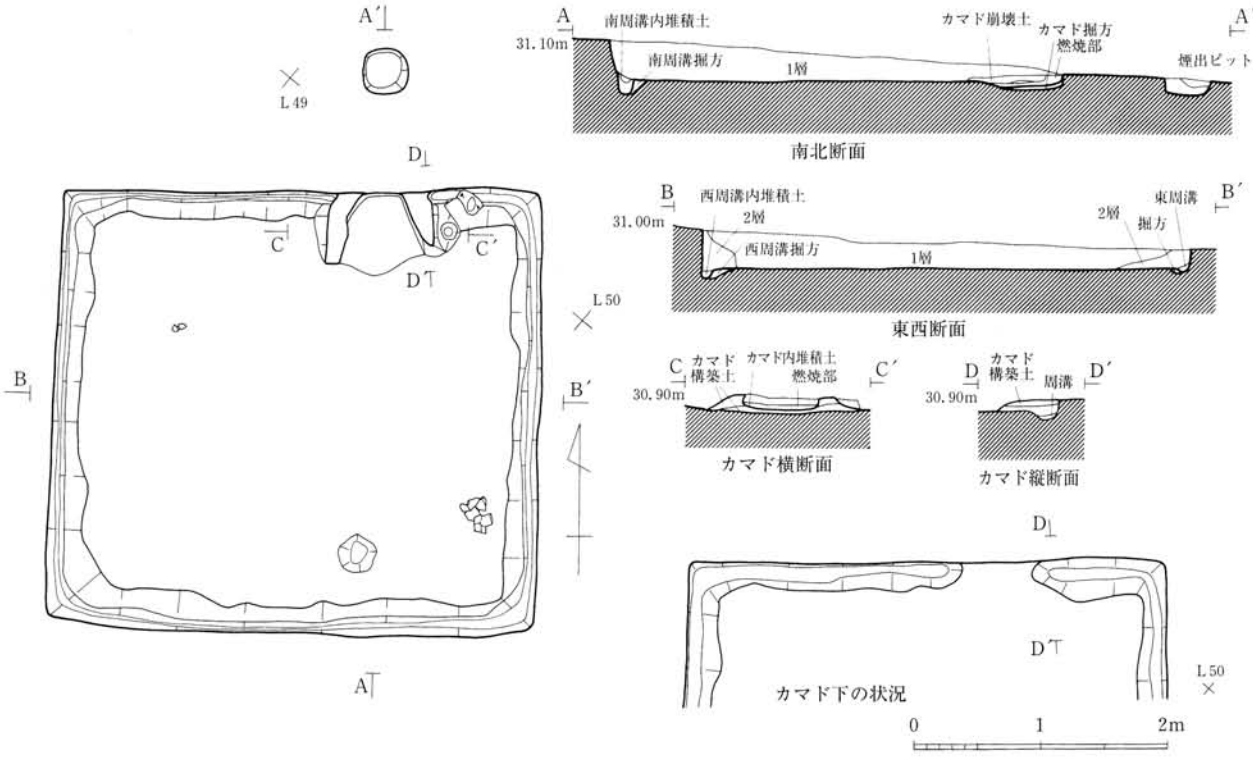


番号	種　類	分類	層　位	特　　徴	写真	収納
53	土師器坏	I C1	2層	3/4残存。口径10.9cm。底径6.5cm。器高4.9cm。非ロクロ調整。平底。外面：口縁～体部ヘラミガキ、摩滅、粘土紐積み上げ痕。底部摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	28-18	015
54	土師器甕	I A	検出面	頸下部～胴部破片。非ロクロ調整。外面：ハケメ。内面：ナデ。		015
55	須恵器坏	A1	2層	底部破片。底径10.1cm。外面：ヘラ切り。焼成堅緻。		015
56	須恵器坏	A3	2層	底部3/4破片。底径11.0cm。外面：底部静止糸切り→体下部～底部外周回転ヘラケズリ。焼成良好。両面に火襷痕。		015
57	須恵器坏	A3	2層	2/3残存。口径14.7cm。底径7.3cm。器高4.2cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成不良。	29-8	015
58	須恵器坏	A5	1層	底部破片。底径11.0cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部手持ちヘラケズリ。内面：見込みにヘラ記号「ヽ」。焼成堅緻。		015
59	須恵器坏	B3	検出面	底部1/4破片。底径7.0cm。外面：底部回転糸切り→体下部～底部外周回転ヘラケズリ。焼成堅緻。		015
60	須恵器高台坏	AorB2	2層	底部～高台部1/4破片。高台径10.4cm。高台高1.7cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台や再びロクロナデ。焼成堅緻。		015
61	須恵器高台坏	B2	2層	口縁～高台2/3残存。口径16.6cm。高台径10.0cm。高台高1.3cm。器高7.7cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台→再びロクロナデ。胎土に海綿骨針含む。焼成良好。外面に重ね焼き痕。	29-13	015
62	須恵器蓋	A1d	検出面	口縁～体部1/4破片。つまみ欠損。口径13.8cm。両面：ロクロナデ、重ね焼き痕。焼成堅緻。		015
63	須恵器蓋	A1b	1層	口縁～体部小破片。口径約19cm。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成堅緻。		015
64	丸瓦		2層	広端部中央小破片。広端面：ケズリ。凸面：ナデ。凹面：布目→広端縁ケズリ。		027
65	鎹		2層	片方の脚部欠損。打込部長2.5cm。打込部断面4×2mm長方形。脚部長2.7cm。脚部断面3×2mm長方形。	37-26	030
66	砥石		2 b層	砂岩製。四角錐状。一端欠損。5面研磨・擦痕。中砥。火災にあって全面煤付着。現存長4.5cm。幅4.7cm。厚さ3.1cm。33と同一個体の可能性がある。	38-2	030

第88図　S I 34D竪穴住居跡出土遺物(10)－火災後の遺物

〔カマド〕北辺中央から60cm東寄りに付設されている。カマドの向きは丘陵尾根中軸線ではなく、等高線にほぼ沿っている。カマドの上部が大きく削平され、煙道は完全に削平されていたが、カマドの両側壁と奥壁の下部、燃焼部、煙出しピットが残存していた。左側壁は長さ56cm、高さは奥で12cm、焚き口で10cm、右側壁は長さ52cm、高さは奥で8cm、焚き口で7cm残存していた。両側壁外面の幅は下部で1.15cmある。両側壁はにぶい黄褐色～褐色土を用いて構築され、粘板岩板状礫片を芯材に用いていなかった。焚き口は下部幅約95cm、高さ10cm以上である。燃焼部は奥行き60cm、幅65cm、奥壁高5cmで、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。煙道は削平されていたが、径35cm、深さ13cmの煙出しピットが残されていたことから、長さは80cmあったとみられる。周溝は右側壁の下まで延び、その部分が暗渠となっていた。また、左側壁の際で周溝は途切れていた。そして、燃焼部の下はカマド構築土と一連の整地が続き、暗渠にはなっていなかった。

〔周溝〕各辺で幅20～30cm、深さ5～12cmの周溝状の掘方、およびその中にある壁材の抜取痕跡と思われる幅8～10cm、深さ5～12cmの溝を検出した。周溝状の掘方はカマドの左側壁際とカマド右側壁下で途切れ、カマド燃焼部の下は暗渠となっていなかった。



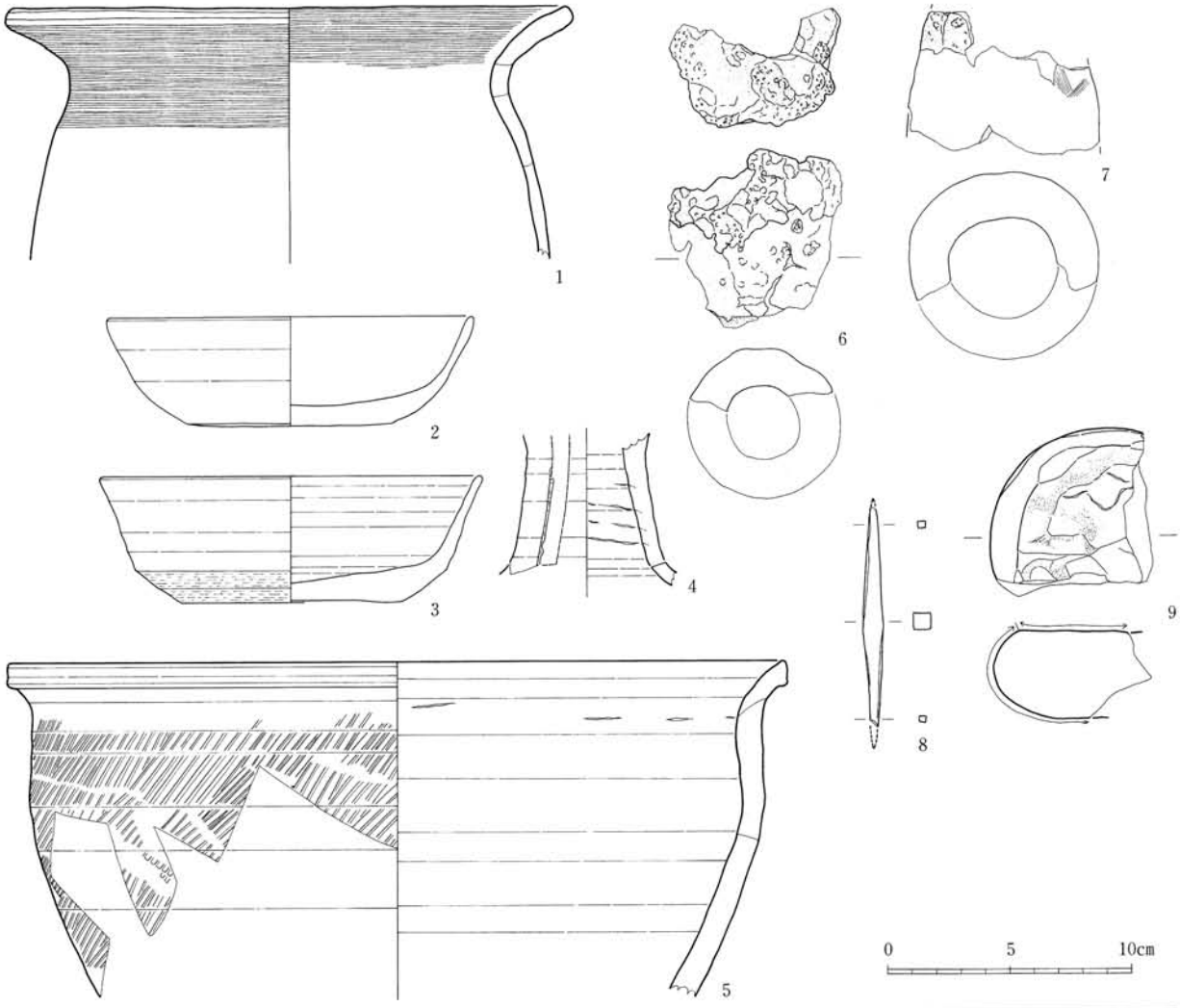
層　位	特　　徴
周溝掘方	黄褐色(10YR5/6)土。径1～4cmの粘板岩風化礫片を含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
周溝内堆積土	明黄褐色(10YR6/6)～にぶい黄褐色(10YR4/3)土。地山粒・炭を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。壁材の抜取りか。
カマド掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1cm以下の地山粒を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
カマド構築土	2層に分かれる。下部はにぶい黄褐色(10YR5/3)土で、径0.3～1cmの地山粒・粘板岩風化礫片を多く含み、しまりよい。上部は黄褐色(10YR5/6)土で、径0.2～1cmの粘板岩風化礫片、暗褐色土ブロックを少し含み、しまりよい。
カマド燃焼部	灰黄褐色(10YR4/2)土。炭・焼土を多量に、地山粒を少量含む。しまりなし。粘性あり。自然堆積土。
カマド内堆積土	明褐色(7.5YR5/8)土。しまり・粘性あり。カマドを埋め戻した人為堆積土。
煙出しピット	2層に分かれる。下部は暗褐色(10YR3/3)土で、径1cm程の炭化物・地山粒を多く含み、しまりよい。上部は地山由来の明黄褐色(10YR6/6)土で、径2cmほどの地山粒を含み、しまりよい。
埋土1層	暗褐色(10YR3/3)土。粘板岩風化礫小片を多量に含む。しまりなし。人為堆積土。
埋土2層	黒褐色(10YR3/2)～暗褐色(10YR3/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片をやや多く含む。しまりなし。粘性あり。壁際に分布する。

第89図　ＳＩ31住居跡平面図・断面図（1/60）

〔堆積土〕 2層に分かれる。壁際の堆積土2層は自然堆積の可能性もあるが、大部分を占める堆積土1層は人為堆積土である。

〔出土遺物〕床面から土師器坏・甕の破片、堆積土から土師器坏・高坏・甕（1）、須恵器坏（2・3）・高坏（4）・鉢（5）・甕・壷、鞴羽口（6・7）の破片、鉄製刺突具（8）、鉄滓（椀形精錬砂鉄系鍛冶滓・椀形鍛錬鍛冶滓・粒状鉄滓・鍛造薄片）、磨石（9）などが少数出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整で、土師器坏には丸底気味のものがある。須恵器坏には回転ヘラケズリのもの（3）とヘラ切り（?）のもの（2）とがある。鉄製刺突具（8）は単式モリの可能性がある。鉄滓については、付章2に分析結果を掲載した。鉄滓は堆積土中から出土したが、本竪穴住居内かこの付近で鉄精錬鍛冶～鉄鍛錬鉄鍛冶まで行なわれていたことを示している。



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕	ＩA	埋土1層	1/4	口縁1/4～胴上部破片。口径23.2cm。非ロクロ調整。外面：ヨコナデ、摩滅。内面：ヨコナデ、摩滅。焼成不良。		012
2	須恵器坏	A1	埋土1層	1/2	口径15.0cm。底径8.4cm。器高4.5cm。外面：底部ヘラ切り？、摩滅。内面：摩滅。焼成不良。二次加熱を受けている。		012
3	須恵器坏	A3	埋土1層	3/5	口径15.6cm。底径9.0cm。器高5.2cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→底部部分的にナデ。焼成不良。	27-9	012
4	須恵器高坏		埋土1層	破片	脚部1/4破片。両面ロクロナデ→縦長長方形透かし3箇所。内面に粘土紐積み上げ痕。焼成堅緻。		012
5	須恵器鉢	A2	埋土1層	1/4	口径32.0cm。口縁凸帯縁状。外面：平行叩き目→ロクロナデ。内面：粘土紐積み上げ痕→無文？当て具痕→ロクロナデ。焼成堅緻。	27-8	012
6	鞴羽口		埋土1層	破片	先端部破片。先端部に熔着滓が分厚く付着。残存長7.4cm。先端部外径6.2cm。先端部内径3.0cm。		028
7	鞴羽口		埋土1層	破片	6と同一個体と思われる破片。熔着滓が一部付着。残存長5.7cm。外径7.8cm。内径4.5cm。外面ナデ。		028
8	鉄製刺突具		埋土2層		単式の小型ヤスか。両端がわずかに欠損するが、両端が尖ると推定される。現存長9.0cm。軸部中央断面7mm方形。	37-27	029
9	磨石		埋土1層	破片	細粒砂岩製。扁平な楕円体状。破損面以外研磨。長さ6.9cm。幅6.7cm。厚さ3.7cm。		033

第90図　ＳＩ31竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ37竪穴住居跡】（平面図・断面図：第91図、遺物：第92図、図版５－２、15－１）

〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.0～30.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ２遺物包含層２層と重複し、これよりも新しい。ＳＢ12掘立柱建物跡（桁行３間、梁行２間の南北棟）と重複し、これよりも古い。

位置関係からみて、東に位置するＳＩ50竪穴住居跡と重複する。両者の床面レベルはほぼ同じで、ＳＩ50竪穴住居跡の堆積土が残っていなかったため、新旧関係は不明である。ＳＩ50竪穴住居跡西周溝が検出されず、それがＳＩ37Ｂ竪穴住居跡東周溝付近に位置すると考えられることから、ＳＩ50竪穴住居跡がＳＩ37竪穴住居跡よりも古いと考えられる。

ＳＩ37竪穴住居跡は一度建て替えられ、北辺・東辺をほぼ踏襲し、西に2.2m、南に2.0m拡張している。古い竪穴住居跡をＳＩ37Ａ竪穴住居跡、新しい竪穴住居跡をＳＩ37Ｂ竪穴住居跡とする。

《ＳＩ37Ａ竪穴住居跡》（平面図・断面図：第91図）

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形で、規模は南北が西辺で4.4m、東西が北辺で3.5mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約38°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ37Ｂ竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（黄褐色粘質土）と掘方埋土上面を床面としている。掘方は0.7～1.4mの幅で北辺に沿っている。この位置は斜面下側に当たる。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置で４箇所の主柱穴を検出した。掘方は長辺40cm前後、短辺25cm前後の隅丸長方形、または一辺30cm前後の隅丸長方形である。深さは比較的残りのよい南西・北西主柱穴が30cm前後、残りの悪い南東・北東主柱穴が10cm以下である。各柱穴の柱はＳＩ37Ｂ竪穴住居跡への拡張に伴って切り取られているとみられ、径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

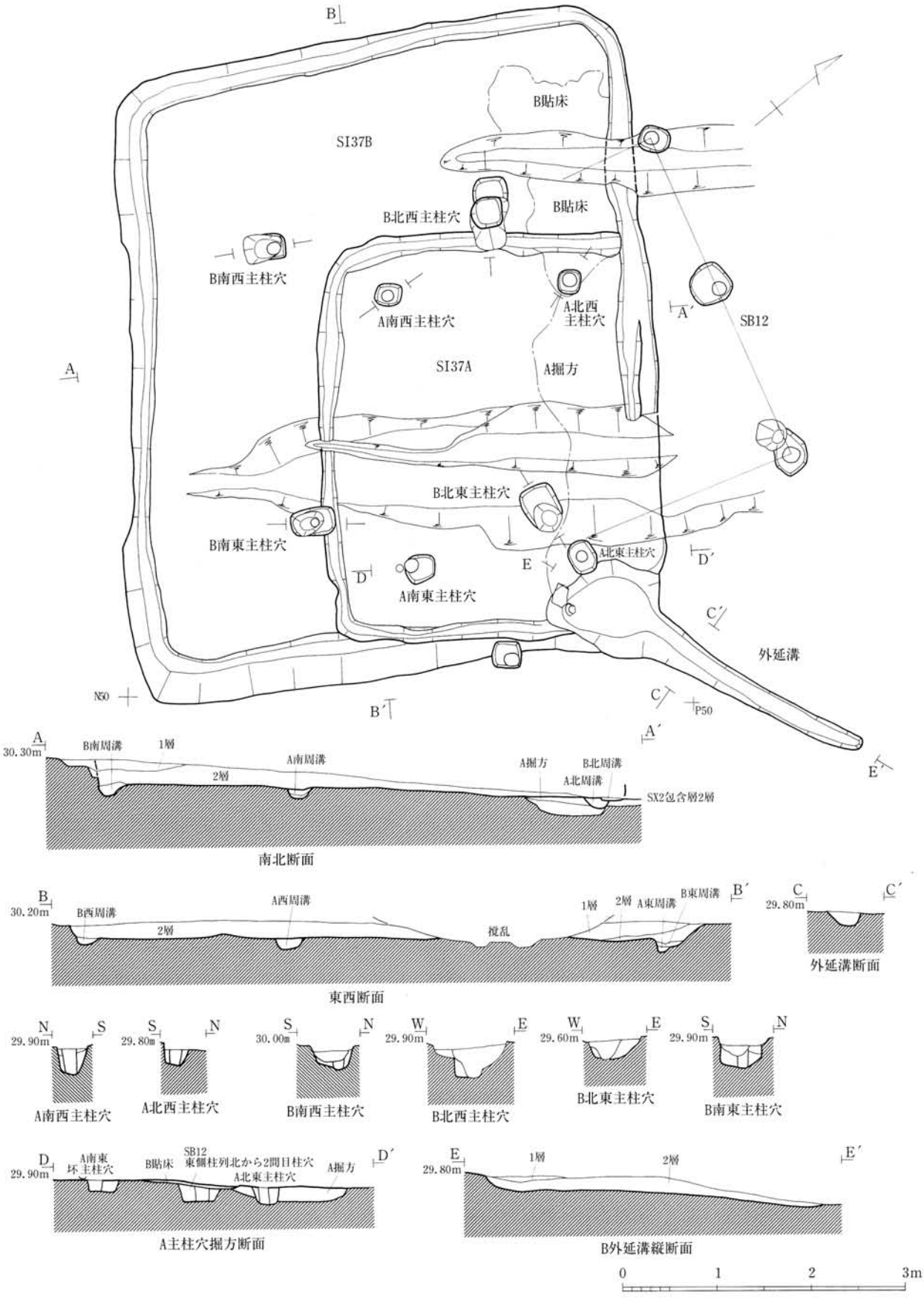
柱痕跡の位置でみると、南西主柱穴は西辺から65cm、南辺から70cm、北西主柱穴は西辺から50cm、北辺から70cm、南東主柱穴は南辺から85cm、東辺から85cm、北東主柱穴は東辺から85cm離れている。柱間寸法は南西主柱穴－南東主柱穴間が2.9m、北西主柱穴－北東主柱穴間が3.0m、南西主柱穴－北西主柱穴間が1.9m、南東主柱穴－北東主柱穴間が1.8mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕各辺に幅13～30cm、深さ10cm前後の周溝が巡る。北辺は攪乱、北東隅はＳＩ37Ｂ竪穴住居

住居跡	層　位	特　　徴
SI37A	A掘方	灰黄褐色(10YR4/2)土。砂混じりのにぶい黄褐色(10YR5/3)地山土ブロックを含む。しまりあり。人為堆積土。
	A主柱穴掘方	暗褐色(10YR3/3)土。径2cm以下の地山粒を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
	A主柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。炭・焼土粒・地山粒を少量含む。しまりなし。
	A周溝	灰黄褐色(10YR4/2)土。径2cm程のにぶい黄褐色(10YR5/3)砂混じり地山土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。
SI37B	B貼床	暗褐色(10YR3/3)土。砂、地山ブロックを多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	B主柱穴掘方	にぶい黄橙色(10YR7/4)～明黄褐色(10YR6/6)土。にぶい黄褐色土ブロック、径2cm以下の粘板岩風化礫片を含む。しまり・粘性あり。人為堆積土。
	B主柱穴柱痕跡	にぶい黄褐色(10YR5/3)土。地山粒を少量含む。しまりなし。
	B主柱穴柱抜取穴	灰黄褐色(10YR5/2)土。径5mm程の地山粒を少量含む。しまりなし。
	B周溝	灰黄褐色(10YR4/2)土。径2cm程のにぶい黄褐色(10YR5/3)砂混じり地山土ブロックを少し含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	B外延溝	2層に分かれ、いずれもしまりのない自然堆積土。1層はにぶい黄褐色(10YR4/3)土で、径0.5～2cmの地山土ブロックを少し含む。2層は暗褐色(10YR3/3)で、径0.3～1cmの炭・焼土粒・地山粒を少し含む。
	堆積土1層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mm程の地山粒を含む。しまりややあり。粘性なし。自然堆積土。
	堆積土2層	暗褐色(10YR3/3)土。炭・焼土粒、径0.3～3cmの地山土ブロックを少し含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。

ＳＩ37Ａ・Ｂ住居跡土層一覧



第91図　ＳＩ37Ａ・Ｂ竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

された暗渠であったのか不明である。

〔堆積土〕床面レベルをほぼ同じくしてＳＩ37Ｂ竪穴住居跡に拡張されているため、堆積土は掘方、周溝、主柱穴にあるのみで、床面の上にはない。

〔出土遺物〕周溝からロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏の破片が少数出土した。

《ＳＩ37Ｂ竪穴住居跡》（平面図・断面図：第91図、遺物：第92図）

〔平面形・規模〕平面形はやや歪んだ隅丸長方形で、規模は南北が西辺で5.6m、東西が南辺で6.7mである。

床面レベルをほぼ同じくし、ＳＩ37Ａ竪穴住居跡を西に2.2m、南に2.0m拡張している。北辺・東辺は外側にわずか拡張しているが、位置はほぼ踏襲している。

〔方向〕西辺でみると北で東に約27°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南東隅で30～42cm、南西隅で26～35cmある。残りの悪い北西隅、南東隅、北辺では10cm以下である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、多くは地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。北西部は貼床上面を床面としている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡のほぼ対角線上の位置で４箇所の主柱穴を検出した。掘方は長辺45cm前後、短辺30cm前後の隅丸長方形、または一辺35cm前後の隅丸長方形である。深さはいずれも30cm前後ある。ＳＩ37Ｂ竪穴住居跡の廃絶時に、北西・北東主柱穴の柱は抜き取られている。南西・南東主柱穴の柱は切り取られ、その下から径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

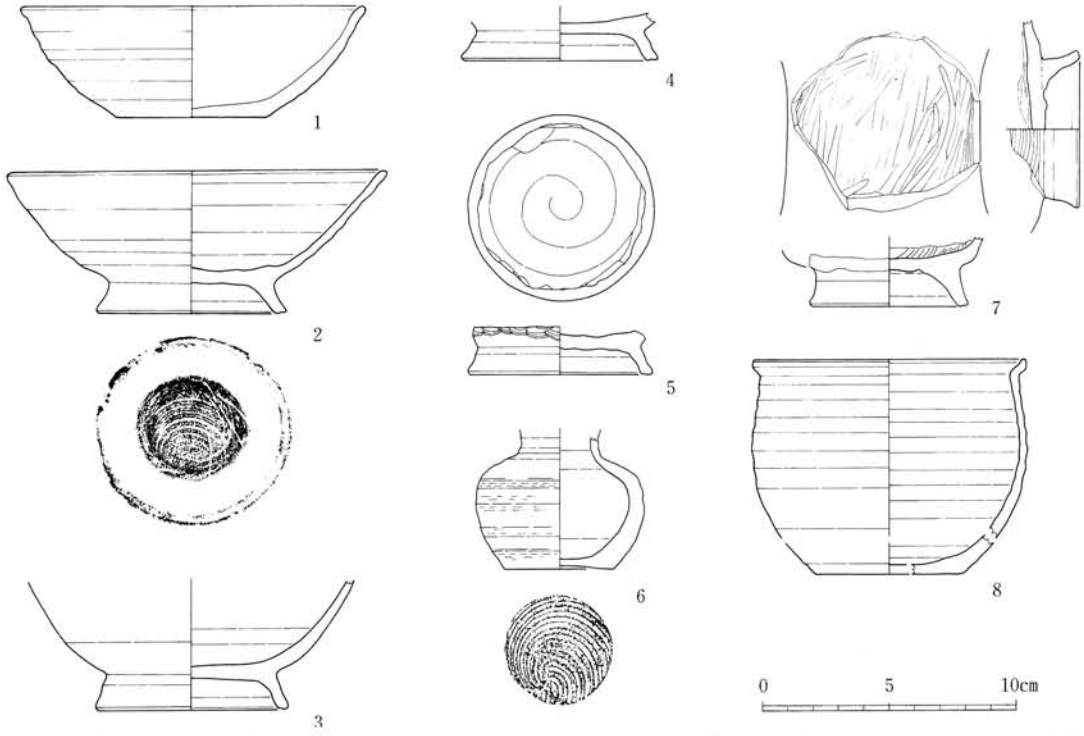
柱痕跡と柱抜取穴の位置でみると、南西主柱穴は西辺から2.1m、南辺から1.6m、北西主柱穴は西辺から2.1m、北辺から1.6m、南東主柱穴は南辺から2.1m、東辺から1.8m、北東主柱穴は東辺から1.4m、北辺から1.2m離れている。柱間寸法は南西主柱穴－南東主柱穴間が3.0m、北西主柱穴－北東主柱穴間が3.3m、南西主柱穴－北西主柱穴間が2.3m、南東主柱穴－北東主柱穴間が2.5mである。

〔カマド〕カマドの位置は不明確だが、新しい溝に壊されている北辺中央東寄りに付設されていたとみられる。

〔周溝〕各辺で幅25～55cm、深さ8cm前後の周溝を検出した。北東隅の周溝から東北東に向けて、幅30～40cm、深さ10cm前後の外延溝が長さ約2.8m延びている。周溝、外延溝内は自然堆積土である。

〔堆積土〕床面上の堆積土は２層に分けられ、いずれも廃絶以降に自然堆積している。

〔出土遺物〕床面からは完形に近い須恵系土器高台坏１点（１）、須恵系土器高台坏高台部破片を転用した円盤状土製品１点（５）の他、須恵系土器坏・高台坏（３）、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壷の破片が少数出土した。主柱穴抜取穴からはロクロ調整の土師器坏・甕の破片、周溝からは完形率の高い須恵系土器坏１点（１）、須恵器小型壷１点（６）の他、須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕（８）、須恵器坏・甕などの破片が少数出土した。堆積土からはロクロ調整後に両面をヘラミガキ・黒色処理した土師器耳皿１点（７）の他、須恵系土器坏、ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壷などの破片が少数出土した。



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	須恵系土器坏		周溝底面	3/4	口径13.6cm。底径6.0cm。器高4.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。赤色粒・砂粒を少量含む。焼成不良。	31-6	015
2	須恵系土器高台坏	A	床面	7/8	口径15.0cm。高台径7.5cm。高台高1.2cm。器高5.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→再びロクロナデ。橙色。細かい白色粒・赤色粒を少量含む。焼成不良。	31-7	015
3	須恵系土器高台坏	A	床面	破片	体部～底部・高台部完形破片。高台径7.6cm。高台高1.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→再びロクロナデ。にぶい橙色。細かい砂粒を中量含む。焼成不良。	31-8	015
4	須恵系土器高台坏	A	床面	破片	体部～底部・高台部完形破片。高台径7.8cm。高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→再びロクロナデ。にぶい黄橙色。砂粒を多く含む。焼成不良。	31-9	015
5	円板状土製品	A	床面		須恵系土器高台坏の体下部～底部の周縁を打ち欠いて転用。高台径7.3cm。高台高1.1cm。高さ1.9cm。ロクロ調整。ロクロ調整→付高台→再びロクロナデ。赤色粒を多く含む。焼成不良。	31-10	015
6	須恵器壺	B2	周溝		口縁～頸部のみ欠損。底径4.3cm。最大径6.6cmで、最大径は体部中央にある。外面：底部回転糸切り→体上部～体下部回転ヘラケズリ。胎土緻密。焼成堅緻。外面頸下部～体上部に灰がかかる。	31-11	015
7	土師器耳皿	ⅡA	堆積土	破片	口縁欠損。体部～底部・高台完形破片。高台径6.2cm。高台高1.5cm。ロクロ調整→付高台→再びロクロナデ→両面口縁～底部ヘラミガキ→両面黒色処理。細かい砂粒を中量含む。焼成良好。	31-12	015
8	土師器甕	Ⅱ	周溝上面	1/3	口径10.8cm。底径5.8cm。器高8.5cm。口縁部短く外反して直立。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。にぶい橙色。焼成不良。	31-13	015

第92図　ＳＩ37Ｂ竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ50竪穴住居跡】（平面図・断面図：第93図）

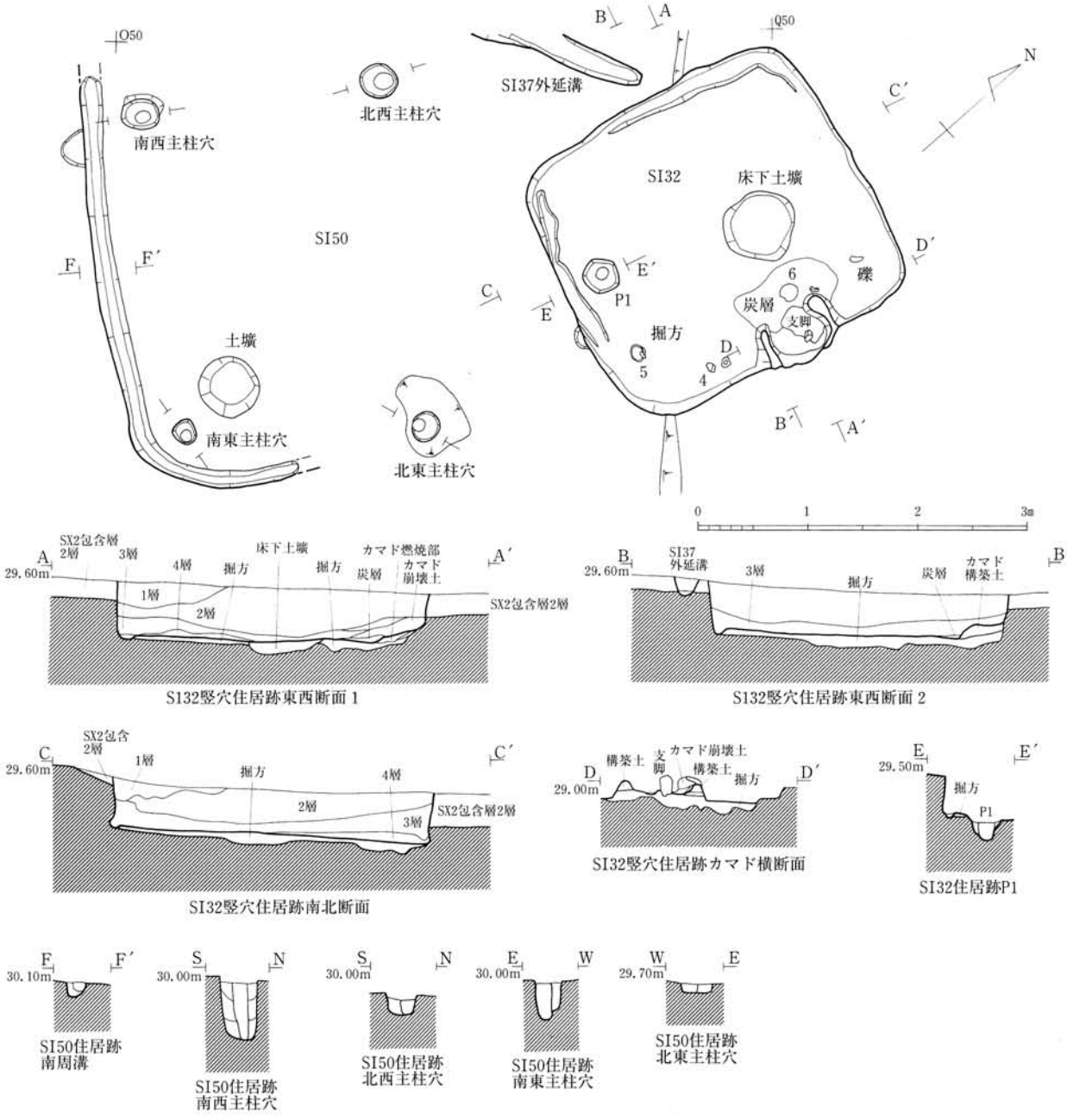
〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ２遺物包含層２層と重複し、これよりも新しい。また、位置関係からみて、西に位置するＳＩ37竪穴住居跡と重複する。両者の床面レベルはほぼ同じで、ＳＩ50竪穴住居跡の堆積土が残っていなかったため、新旧関係は不明である。ＳＩ50竪穴住居跡西周溝が検出されず、それがＳＩ37Ｂ竪穴住居跡東周溝付近に位置すると考えられることから、ＳＩ50竪穴住居跡がＳＩ37竪穴住居跡よりも古いと考えられる。また、北側のＳＩ32竪穴住居跡と近接しているため、これとは同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形とみられ、規模は東西が南辺で3.9m以上、南北が南周溝と北西主柱穴からみて3.0m以上である。

〔方向〕南辺でみると北で西に約58°偏ることから、東辺は北で東に約32°偏ると推定される。

〔壁〕床面まで削平され、壁の高さはない。



S132竖穴住居跡東西断面 1

S132竖穴住居跡東西断面 2

SI32竖穴住居跡南北断面

SI32竖穴住居跡カマド横断面

SI32住居跡P1

住居跡	層　位	特　　徴
SI32	掘方	暗褐色(10YR3/4)土。径1cm以下の粘板岩風化礫片・焼土・炭化物、径5cm以下の地山ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	床下土壙	暗褐色(10YR3/4)土。径3cm以下の地山土ブロックを多く、焼土ブロック、炭片を含む。しまり・粘性ややあり。人為堆積土。
	Ｐ１柱穴掘方	灰黄褐色(10YR4/2)土。径1cm以下の地山土ブロックを多く含む。人為堆積土。
	Ｐ１柱穴柱痕跡	黒褐色(10YR3/2)土。径2cmの地山土ブロックを多く含む。自然堆積。
	カマド構築土	人為堆積土で、しまりあり、粘性なし。２層に分かれる。下部はにぶい黄褐色(10YR4/3)土で、3mm以下の粘板岩風化礫片・焼土・炭化物を含む。上部は褐色(10YR4/4)土で、5mm以下の粘板岩風化礫片を多く含む。
	カマド支脚石	長さ20cm、幅11cm、厚さ10cmの粘板岩礫片。
	カマド燃焼部	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。焼土を多量に含む。
	カマド前炭層	住居の機能時にカマド前に掻き出された炭化物が灰褐色(7.5YR4/2)土に多量に混じる薄い層。
	カマド崩壊土	褐色(7.5YR4/4)土。径2～5cmの焼土ブロック、径0.5～2cmの炭片、にぶい黄褐色土ブロックを多く含む。しまり・粘性あり。
	埋土１層	黒褐色(10YR3/2)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を少し含む。南辺・西辺際の窪みに自然堆積。
	埋土２層	暗褐色(10YR3/4)土。径4～10cmのにぶい黄褐色地山土ブロック、径1～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。やや粘性。人為堆積土。
	埋土３層	暗褐色(10YR3/4)土。径2～5cmのにぶい黄褐色～にぶい黄橙色地山土ブロック、径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。砂質。しまりあり。人為堆積土。
	埋土４層	にぶい黄褐色(10YR5/4)地山土と極暗褐色(7.5YR2/3)土が混じる。固くしまる人為堆積土。
SI50	主柱穴掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)～褐色(10YR4/4)土。径0.5cmの地山粒を多く含む。しまりよく、粘性なし。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。しまり・粘性なし。
	周溝	人為堆積土で、２層に分かれる。しまり強く、粘性なし。下部は径0.5cmの地山粒を多く含むにぶい黄褐色(10YR5/4)土、上部は褐色(10YR5/4)土。

第93図　ＳＩ32・50竖穴住居跡平面図・断面図（1/60）

〔床面〕北半部は床面下まで削平されているが、床面はほぼ平坦とみられ、地山面（黄褐色粘質土）を床面としている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上の位置にあるとみられる４箇所で主柱穴を検出した。掘方は径25～35cmの楕円形または円形である。深さは最も深い南西主柱穴で57cm、最も浅い北西主柱穴が９cmである。北西・北東主柱穴の上部が大きく削平されているため、底面レベルはほぼ同じである。各柱穴で径12cm前後の円形の柱痕跡を確認した。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕南辺と南東隅で幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝を検出した。周溝内は人為的に埋められている。

〔堆積土〕床面まで削平されているため、床面上に堆積土はない。

〔出土遺物〕北西主柱穴掘方から摩滅した土師器甕破片、検出面から非ロクロ調整の土師器甕破片が少数出土した。

【ＳＩ32竪穴住居跡】（平面図・断面図：第93図、遺物：第94図、図版13－２、14－１）

〔位置〕調査区南東部の中央、丘陵尾根上北寄りの標高29.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ２遺物包含層２層と重複し、これよりも新しい。また、西側のＳＩ50竪穴住居跡、西側のＳＩ37竪穴住居跡と近接するため、これらとは同時には存在しえない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で2.8m、東西が南辺で2.6mと小さい。

〔方向〕西辺でみると北で東に約10°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りのよい南辺・西辺で60cm前後あり、ほぼ直に立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、掘方の埋土上面を床面としている。掘方は地山面（粘板岩岩盤）まで凸凹に掘り下げられ、南西部を除く全面が埋め戻されている。

〔柱穴〕南辺中央際から約40cm離れた位置で、Ｐ１柱穴を検出した。掘方は径30cmのほぼ円形で、深さは20cmある。径11cmの円形の柱痕跡を確認した。他に組み合う柱穴がないが、人為的に埋められた埋土３層の下、床面上で検出されたことから、本竪穴住居跡に伴うものとみられる。

〔カマド〕東辺中央から30cm北寄りに付設されている。カマドの方向は丘陵中軸線ではなく、等高線にほぼ沿っている。カマドの天井部は住居廃絶時に壊されていたが、両側壁、奥壁、燃焼部、支脚石が残されていた。残存状況からみて、煙道は外に延びないとみられる。

左側壁は長さ40cm、高さは奥で17cm、焚き口で６cm、右側壁は長さ42cm、高さは奥で12cm、焚き口で10cmある。両側壁外面の幅は下部で94cmある。両側壁はにぶい黄褐色～褐色土を用いて作られており、内側は被熱のために著しく赤色硬化していた。カマド構築土の下部に炭片・焼土粒が含まれることから、作り直されている可能性もある。奥壁はカマド両脇の東辺から外側に約15cm張り出し、高さ10cmで、ほぼ直に立ち上がる。焚き口は下部幅約60cm、高さ10cm以上である。

燃焼部は奥行き45cm、幅48cmで、奥壁から焚き口にかけてなだらかに傾斜する。焼土が堆積し、被熱・赤変していた。燃焼部中央やや左寄りには支脚石が燃焼部に深さ２cm埋め込んで直に立てら

れていた。支脚石は長さ20cm、幅11cm、厚さ10cmの粘板岩角柱状礫片を用いている。燃焼部上面から支脚石の天端までの高さは18cmであった。この箇所での天井高は18cm以上ということになる。

カマド焚き口より手前には、掻き出された炭が薄く堆積していた。

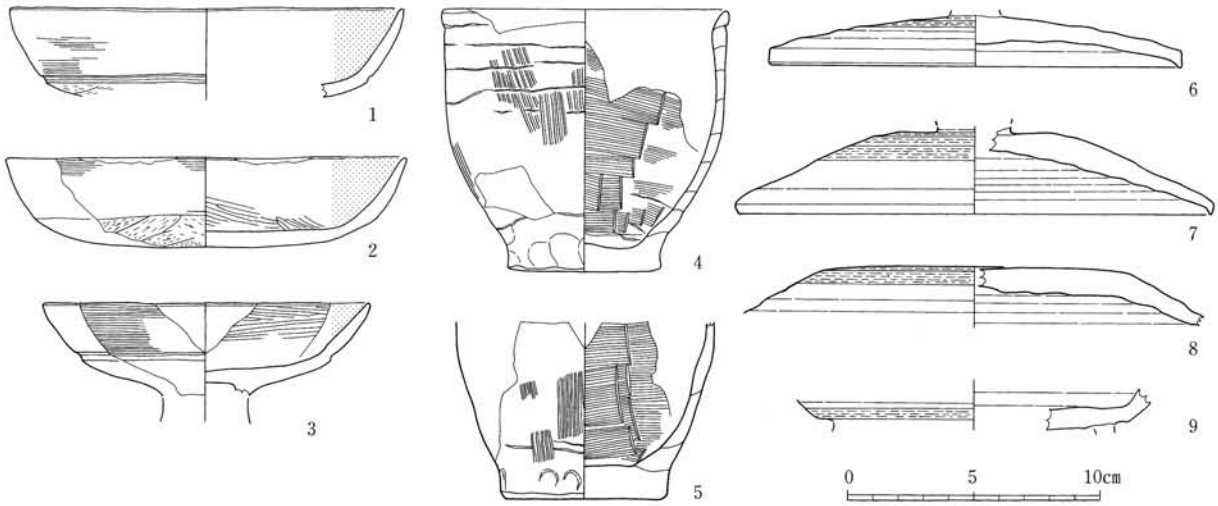
〔床下土壙〕カマド手前の中央やや北寄りの床下で、平面形が径70cmのほぼ円形で、深さ12cmの土壙1基を検出した。人為的に埋め戻されている。

〔周溝〕西辺の北半と南辺の西半で幅10～20cm、深さ5cmの周溝を検出した。周溝は各辺を巡らない。開渠の状態で機能していたとみられ、廃絶時に床面とともに人為的に埋められている。

〔堆積土〕4層に分けられる。下層の埋土4層～2層は竪穴住居廃絶時に人為的に埋められた層であり、最上層の堆積土1層は窪みに自然堆積したものである。

〔出土遺物〕掘方から土師器坏（1）・甕、須恵器坏などの破片、床面から土師器坏・甕・鉢（4・5）、須恵器蓋（6）などの破片、カマド崩壊土から土師器甕などの破片、埋土3・2層から土師器坏（2）・甕、須恵器坏・蓋（7）などの破片、堆積土1層から土師器甕、須恵器坏などの破片、検出面（堆積土1層または埋土2層）からは須恵器高台坏（9）・平頂蓋（9）などの破片が少数出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、土師器坏（1・2）・高坏（3）は丸底気味で、体下部に横位沈線が1条巡る。土師器鉢（4・5）はいずれも小型で、底部に木葉痕が残る。須恵器高台坏（9）・蓋（6・7）・平頂蓋（8）はいずれも回転ヘラケズリされている。また、須恵器平頂蓋（8）は、頂部が平らでつまみのつかない特異な器形である。



番号	種類	分類	層位	残存	特徴	写真	収納
1	土師器坏	I B1	掘方	破片	口縁～体下部破片。口径15.6cm。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁～体部ヨコナデ、摩滅。体下部横位沈線1条、手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理、摩滅。	27-11	012
2	土師器坏	I B1	埋土3層	破片	口縁～体下部破片。口径15.6cm。器高3.6cm。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁～体部ヨコナデ、摩滅。体下部横位沈線1条、手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理、摩滅。		012
3	土師器高坏		検出面	破片	口縁～底部1/3破片。高台欠損。口径13.0cm。非ロクロ調整。外面：口縁～体部ヨコナデ。体下部横位沈線1条、摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理、摩滅。	27-10	012
4	土師器鉢	I B1	床面	1/2	口径11.4cm。底径6.0cm。器高10.4cm。体部中央から口縁にかけて内傾気味に直立し、口縁が短く外反する。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕→ナデ、体部粘土紐積み上げ痕→ハケメ・ナデ、摩滅。内面：体部辺土紐積み上げ痕→ヘラナデ、底部ナデ。	27-12	012
5	土師器鉢	I B1	床面	破片	体下部～底部完形破片。底径6.0cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕、体部ハケメ、ナデ、摩滅。内面：ヘラナデ。	27-13	012
6	須恵器蓋	A1c	床面	8/9	体部～口縁部完形破片。つまみ欠損。口径16.3cm。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成不良。床面（カマド前炭層）出土。		012
7	須恵器蓋	A1c	埋土2層	1/2	体部～口縁部完形破片。つまみ欠損。口径19.0cm。外面：体部回転ヘラケズリ。焼成良好。重ね焼き痕。外面周縁・内面全体灰かぶり。	27-14	012
8	須恵器蓋	A2	検出面	1/4	平頂蓋体部破片。口縁わずかに欠損。つまみはつかず、頂部が平ら。頂部径12.0cm。口径約18.4cm。体部回転ヘラケズリ。	27-15	012
9	須恵器高台坏	AorB2	検出面	破片	体下部～底部破片。高台欠損。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。高台両側を沈線状に深くナデ。	27-16	012

第94図　S I 32竪穴住居跡出土遺物

【ＳＩ38竪穴住居跡】（平面図・断面図：第95図、遺物：第96・97図）

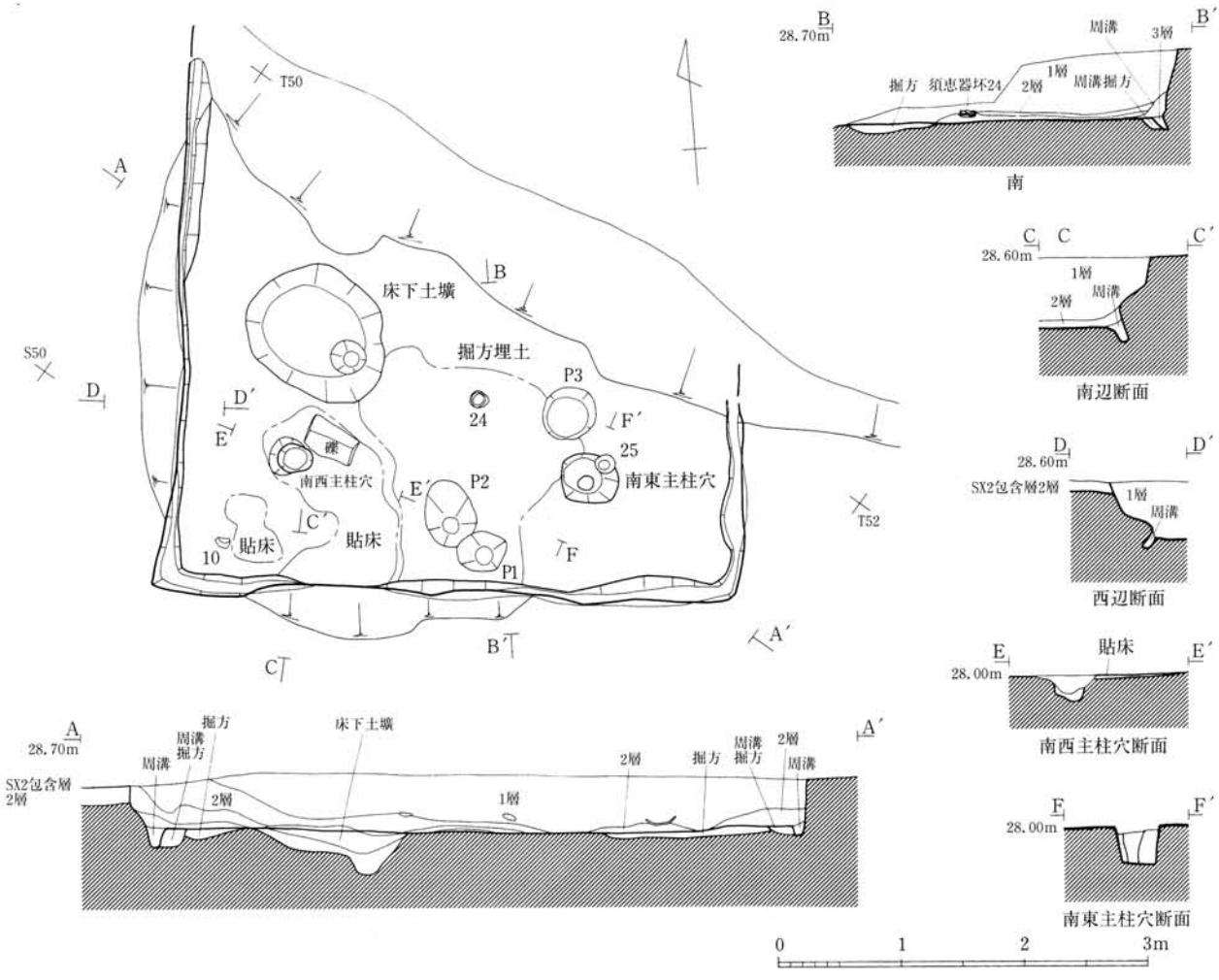
〔位置〕調査区南東部の北斜面落ち際、丘陵尾根上北寄りの標高28.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ２遺物包含層２層と重複し、これよりも新しい。また、東側のＳＩ39竪穴住居跡と近接し、これとは同時には存在しえない。北部～北東部が床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で4.4m以上、東西が南辺で4.2mである。

〔方向〕西辺でみると北で東に約６°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、残りのよい南辺で60～68cm、西辺の南半で50～64cmあり、



層　位	特　　徴
掘方	暗褐色(10YR3/4)土。径1cmの炭片、径2～8cmの黄褐色(10YR5/6)地山粘土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土
主柱穴掘方	暗褐色(10YR6/6)粘質土。しまりあり。人為堆積土
主柱穴柱痕跡	黒褐色(10YR2/3)土。
主柱穴柱抜取穴	暗褐色(10YR3/4)土。黄褐色地山粘土ブロックを多く含む。しまりあり。人為堆積土。
床下土壙	3層に分かれ、しまりのよい人為堆積土。1層は明黄褐色(10YR7/6)土を主に褐色(10YR4/4)土を含む。2層は暗褐色(7.5YR3/3)土で、炭片、明黄褐色(10YR7/6)土ブロックを含む。3層は暗赤褐色(5YR3/4)土で、炭片・焼土粒を含む。
Ｐ１	暗褐色(10YR3/4)土。径5mm以下の炭、岩片を多く含む。人為堆積土。
Ｐ２	暗褐色(10YR3/3)土。径5mm以下の炭、岩片を多く含む。人為堆積土。
Ｐ３	暗褐色(10YR3/3)土。径5mm以下の炭、岩片を多く含む。人為堆積土。
周溝掘方	黒褐色(2.5Y3/2)土。径1cm以下の地山粒を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
周溝	黒褐色(2.5Y3/2)土。炭・焼土粒を多く、径1cm以下の地山粒を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
埋土１層	暗褐色(7.5YR3/3)土。炭化物、径1cm以下の地山粒を少し含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
埋土２層	黒褐色(7.5YR3/2)～暗褐色(10YR3/4)土。径2～3cmの地山土ブロック、1cm以下の地山粒を多く含む層と少ない層など５層に細分される。人為堆積土。
埋土３層	黒褐色(10YR2/3)土とにぶい黄褐色(10YR6/4)土、径2～4cmの粘板岩風化礫片を不均一に含む南辺際の崩落土。

第95図　ＳＩ38竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

約105～110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。南辺中央、西辺では壁の上部が崩れている。東辺では25cm以下、西辺北半では15cm以下と残りが悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、掘方埋土上面および地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上と推定される位置で、南西・南東主柱穴を検出した。南西主柱穴の掘方は長径25cmの楕円形で、深さ20cmあり、柱が抜き取られていた。また、南東主柱穴は長辺48cm、短辺40cmの隅丸長方形で、深さは22cmあり、径12cmの円形の柱痕跡を確認した。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺または東辺に付設されていたものと考えられる。

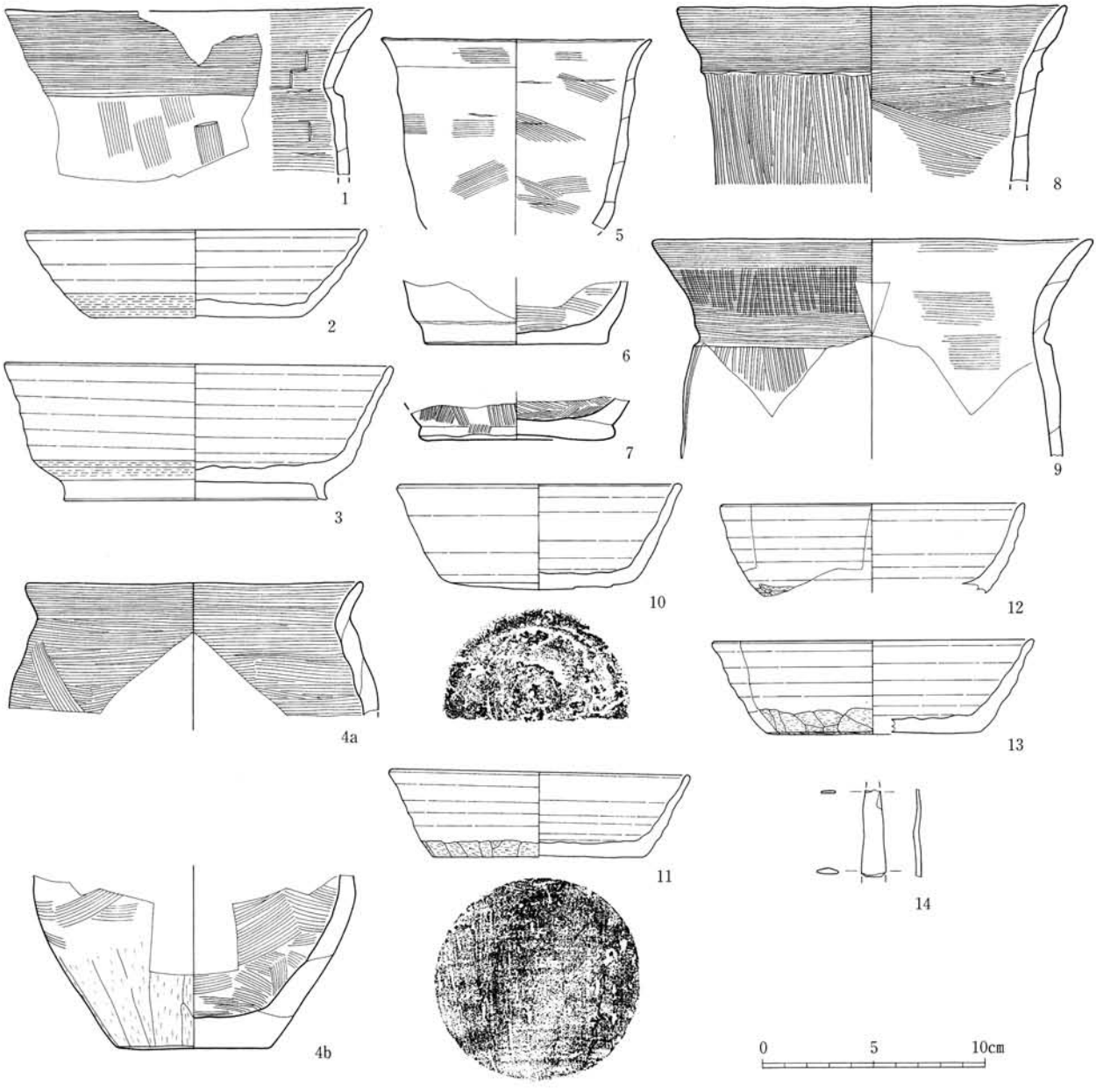
〔床下土壙〕床面中央西寄りで長径1.2m、短径1.0mの不整楕円形で、深さ36cmの土壙を床面下で検出した。また、南半部の床面上でP１～３のピットを検出した。Ｐ１は長径55cm、短径40cmの楕円形で、深さ８cm、Ｐ２は長径44cm、短径33cmの楕円形で、深さ６cm、Ｐ３は径約44cmのほぼ円形で、深さ11cmある。床下土壙とP１～３はいずれも人為的に埋め戻されている。

〔周溝〕西辺・南辺・東辺で、幅10～20cm、深さ10～15cmの周溝掘方を検出した。掘方は壁の奥に抉るように掘り込まれている箇所が多くみられた。壁に接した箇所を埋め戻さず、内側を埋め戻しており、開渠として機能していたとみられる。開渠の上幅は10cm前後、深さ10～15cmである。

〔堆積土〕３層に大別され、埋土３層が壁際の崩落土、埋土１・２層が人為堆積土である。

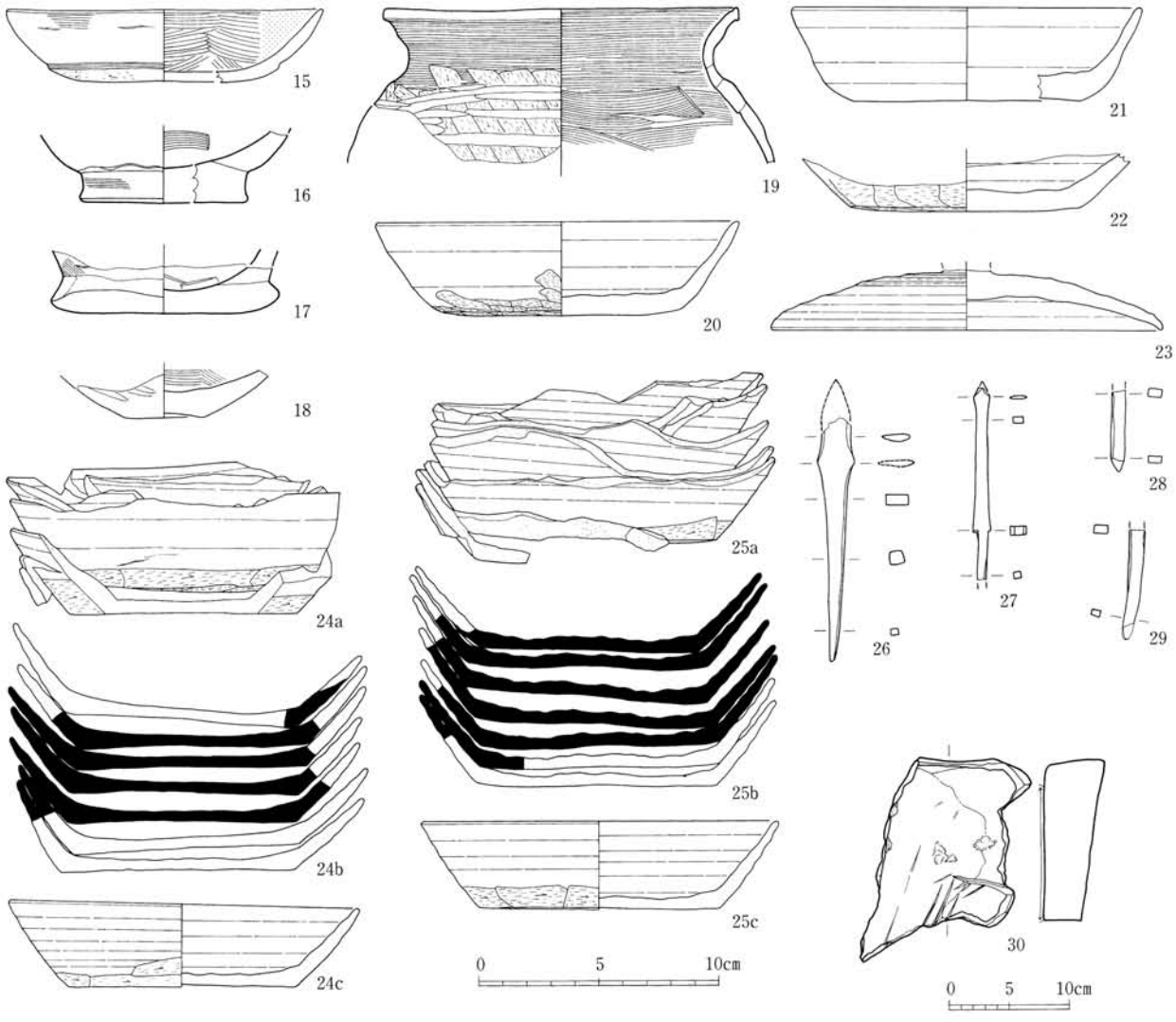
〔出土遺物〕床下土壙から完形の須恵器高台坏１点（３）の他、土師器坏・甕（１）などの破片が少数出土した。P２から須恵器坏１点（２）の他、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が出土した。床面から完形の須恵器坏１点（11）、板状鉄製品１点（14）の他、土師器坏・鉢（５）・甕（４・６～９）、須恵器坏（10～13）などの破片が少数出土した。南東主柱穴掘方上の床面からは、熔着した７枚重ねの須恵器坏１個体（25）が出土した。南西主柱穴柱抜取穴からは土師器甕（16）の破片が出土した。周溝からは鉄鏃？（28）の他、土師器甕の破片が少数出土した。廃絶時に埋められた埋土２層からは、熔着した７枚重ねの須恵器坏１個体（24）、完形率の高い須恵器坏１点（20）、鉄鏃１点（26）の他、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋（23）・甕などの破片が少数出土した。最上層に自然堆積した堆積土１層からは、鉄鏃（27）、鉄鏃？（29）、砥石（30）の他、土師器坏（15）・甕（17・19）、須恵器坏（21・22）・甕、塩釜式の土師器鉢（18）などの破片が出土した。

このうち熔着した７枚重ねの須恵器坏２個体（24・25）は、いずれも法量がほぼ等しく、体下部～底部が手持ちヘラケズリされている。内面に灰がかぶり、一番上の坏の内面に灰のかぶらない箇所が広く残されていることから、ほぼ同じ法量の須恵器坏を少なくとも８枚以上口縁を上にして重ね、須恵器窯で焼成したことがわかる資料である。このように熔着した須恵器坏は焼成失敗品であって、本来は須恵器窯の灰原に廃棄されるべきもので、消費地にはまったく搬出されないものである。熔着した須恵器坏の集落遺跡からの出土例は、これまで宮城県内をはじめ、東北地方で知られていない。全国的にみても類例は寡聞にして知らない。調査区内に須恵器窯が存在せず、調査区外の丘陵斜面や沢地にも須恵器窯灰原が認められず、本遺跡内に須恵器窯が存在しないとみられることから、本遺跡の近くに同時期の須恵器窯があることを窺わせる。したがって、これらは食膳具としてではなく、置き台などの２次的用途として本遺跡に持ち込まれたものと考えられる。



番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕	ＩA	床下土壙	破片	口縁～胴上部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面：ナデ、ヘラナデ。	31-14	020
2	須恵器坏	B3	P 2	1/2	口径15.4cm。底径9.5cm。器高4.0cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。両面火襷痕。器壁断面は流文構造（北野他, 1994；北野, 2001）。焼成良好。	32-1	020
3	須恵器高台坏	A2	床下土壙	完形	口径17.5cm。高台径11.8cm。高台高0.7cm。器高6.3cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。	32-7	020
4	土師器甕	ＩB1	床面	破片	同一非接合の口縁～体上部破片(4a)と体下部～底部破片(4b)。口径15.1cm。底径6.9cm。非ロクロ調整。外面：口縁～体下部ナデ、体下部ケズリ、底部摩滅。内面：口縁～体上部ヨコナデ、体下部～底部ナデ。	31-15	020
5	土師器鉢	ＩB1	床面	1/3	口縁～体下部破片。口径12.2cm。非ロクロ調整。外面：ナデ、摩滅。内面：ナデ、摩滅。	31-16	020
6	土師器甕	Ｉ	床面	3/4	胴下部～底部破片。底径8.2cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕、体部摩滅。内面：ナデ。		020
7	土師器甕	Ｉ	床面	1	胴下部～底部破片。底径8.8cm。非ロクロ調整。外面：底部ナデ、体部ハケメ、黒斑。内面：ナデ。		020
8	土師器甕	ＩA	床面	1/4	口縁～胴上部破片。口径17.5cm。非ロクロ調整。外面：胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面：口縁ヨコナデ、胴部ハケメ→ナデ。	31-17	020
9	土師器甕	ＩA	床面	1/2	口縁～胴上部破片。口径19.8cm。非ロクロ調整。外面：ハケメ→口頸部ヨコナデ。内面：ナデ、摩滅。	31-18	020
10	須恵器坏	C1	床面	1/2	口径12.8cm。底径8.0cm。器高4.8cm。外面：底部ヘラ切り。焼成不良。	32-3	020
11	須恵器坏	B4	床面	完形	口径13.5cm。底径9.5cm。器高3.9cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部手持ちヘラケズリ。両面火襷痕。焼成良好。	32-4	020
12	須恵器坏	A5	床面	1/4	口縁～体下部破片。口径13.6cm。外面：体下部手持ちヘラケズリ、重ね焼き痕。器壁断面は流文構造（北野他, 1994；北野, 2001）。焼成良好。		020
13	須恵器坏	B4	床面	1/4	口径14.4cm。底径9.6cm。器高4.2cm。外面：底部ヘラ切り→体下部～底部手持ちヘラケズリ。両面火襷痕。焼成良好。	32-2	020
14	板状鉄製品		床面	破片	現存長3.9cm。幅1.0cm。厚さ1.5mm。両端欠損。錆膨れ。曲がる。	37-34	030

第96図　ＳＩ38竪穴住居跡出土遺物(1)－床下土壙・ピット・床面の遺物



番号	種類	分類	層位	残存	特徴	写真	収納
15	土師器坏	I B1	埋土1層	1/4	口径13.1cm。器高3.0cm。丸底気味。非ロクロ調整。外面：口縁～体下部ヨコナデ、横位沈線1条、体下部～底部手持ちヘラケズリ、摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		020
16	土師器甕	I	主柱穴抜取穴	破片	胴下部～底部完形破片。底径9.5cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕、胴下部ナデ。内面：ヘラナデ。		020
17	土師器甕	I	埋土1層	破片	胴下部～底部1/3破片。底径7.0cm。非ロクロ調整。外面：底部木葉痕、胴下部ナデ、摩滅。内面：ナデ。		020
18	土師器鉢		埋土1層	破片	体下部～底部破片。底径3.2cm。非ロクロ調整。外面：ナデ。内面：ミガキ。塩釜式。		020
19	土師器甕	I B2	埋土1層	4/5	口径14.8cm。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ→体部ケズリ→部分的軽いヘラミガキ。内面：ヨコナデ、ヘラナデ。	31-19	020
20	須恵器坏	C2	埋土2層	4/5	口径15.2cm。底径10.0cm。器高3.9cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部手持ちヘラケズリ。焼成良好。	32-5	020
21	須恵器坏	A4	埋土1層	1/2	口径14.5cm。底径9.4cm。器高3.9cm。外面：底部切り離し不明→底部のみ手持ちヘラケズリ。器壁断面は流文構造。焼成不良。	32-6	020
22	須恵器坏	C2	埋土1層	破片	体下部～底部完形破片。底径9.6cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部手持ちヘラケズリ。黒斑。焼成不良。		020
23	須恵器蓋	A1a	埋土2層	1/2	体部～口縁破片。つまみ欠損。口径16.3cm。外面：切り離し不明→体部回転ヘラケズリ→つまみ接合→再びロクロナデ。焼成不良。		020
24	須恵器坏	B4	埋土2層		熔着した7枚重ねの須恵器坏。窯製品の不良品。高さ6.3cm。下から1枚目は口縁1/4残存。下から2枚目は口縁1/3残存。下から3枚目(24c)は口縁1/2～底部3/4残存。口径14.5cm、底径9.5cm、器高3.5cm。下から4枚目は口縁3/4～底部完形。口径14.5cm、底径9.5cm、器高3.5cm。下から5枚目は口縁>1/3～底部完形。口径14.8cm、底径9.5cm、器高3.3cm。下から6枚目は口縁1/6～底部完形。口径14.5cm、底径9.5cm、器高3.3cm。下から7枚目は体下部～底部1/4残存。調整のわかる下から3～6枚目はいずれも底部切り離し後に体下部～底部を手持ちヘラケズリ。いずれも他と重ならない両面口縁には灰がかぶり、下から6・7枚目は内面見込みにも部分的に灰がかかる。灰かぶりの状況からみて、口縁を上にしてほぼ同じ寸法の坏を少なくとも8枚重ねにして焼成したことがわかる。焼成良好。胎土に径0.5～3mmの砂粒・ガラス粒を多く含む。24cに下から3枚目を図示。	32-8	020
25	須恵器坏	B4	床面		熔着した7枚重ねの須恵器坏。窯製品の不良品。高さ6.5cm。下から1枚目は口縁1/8残存。下から2枚目は口縁1/4～底部1/6残存。下から3枚目(25c)は口縁1/4～底部完形。口径14.8cm、底径10.0cm、器高3.7cm。下から4枚目は口縁1/10～底部完形。口径14.8cm、底径10.0cm、器高3.7cm。下から5枚目は口縁<1/10～底部完形。口径14.8cm、底径10.0cm、器高3.7cm。下から6枚目は口縁1/10～底部完形。口径14.8cm、底径10.0cm、器高3.7cm。下から7枚目は口縁1/10～底部3/4残存。口径14.4cm、底径9.3cm、器高3.4cm。調整のわかる下から3枚目は底部ヘラ切り後に体下部～底部を手持ちヘラケズリ。下から2枚目は体下部～底部を手持ちヘラケズリ。いずれも他と重ならない両面口縁には灰がかぶり、下から6・7枚目は内面見込みにも部分的に灰がかかる。下から7枚目の内面体部にはこの上に重ねたもう一枚の坏の体部外面の一部がわずかに熔着している。灰かぶりの状況からみて、口縁を上にしてほぼ同じ寸法の坏を少なくとも8枚重ねにして焼成したことがわかる。焼成良好。胎土に径0.5～3mmの砂粒・ガラス粒を多く含む。25cに下から3枚目を図示。	32-9	020
26	鉄鏃		埋土2層	破片	長頸式柳葉鏃。先端欠。鏃身断面は両丸造。頸部は篦被による茎を作らない。鏃身関は撫関幅。現存長6.1cm。鏃身幅1.6cm。頸部長8.3cm。頸部断面6×6mm方形。	37-9	030
27	鉄鏃		埋土1層		長頸式圭頭鏃。茎末端欠損。鏃身断面は両丸造。頸部は篦被による茎を作らない。鏃身関は撫関幅。現存長6.1cm。鏃身幅1.6cm。頸部長8.3cm。頸部断面6×6mm方形。	37-11	030
28	鉄鏃？		西周溝	破片	鉄鏃または刀子の茎破片か。現存長3.9cm。断面5×3.5mm長方形。		030
29	鉄鏃？		埋土1層	破片	鉄鏃または刀子の茎破片か。現存長4.6cm。断面6×4mm長方形。		030
30	砥石		埋土1層	完形	細粒砂岩製。板状。1面研磨・擦痕。中砥。長さ17.2cm。幅14.2cm。厚さ5.1cm。	39-1	035

第97図　S I 38竪穴住居跡出土遺物(2)－堆積層などの遺物

須恵器坏（11・13）は体下部～底部が手持ちヘラケズリされ、体部が直線的に外傾し、ロクロナデや胎土・焼成もこの熔着した須恵器坏（24・25）と類似している。同一窯の製品とみられる。

この他、須恵器坏には体部～底部が手持ちヘラケズリされたもの（12・20・22）、底部が手持ちヘラケズリされたもの（21）、体下部～底部が回転ヘラケズリされたもの（２）、底部がヘラ切りのもの（10）がある。これらは熔着した須恵器坏（24・25）とは別の窯の製品とみられる。

また、土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、土師器坏には体下部に横位に１条の沈線が施された丸底気味のもの（15）がある。

【ＳＩ39竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第98図）

〔位置〕調査区南東部の北斜面落ち際、丘陵尾根上北寄りの標高28.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ2遺物包含層２層と重複し、これよりも新しい。また、西側のＳＩ38竪穴住居跡と近接し、これとは同時には存在しえない。南辺際が残るのみで、他は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は東西が南辺で3.5mある。

〔方向〕南辺の方向からみると、西辺・東辺は北で東に約25°偏るとみられる。

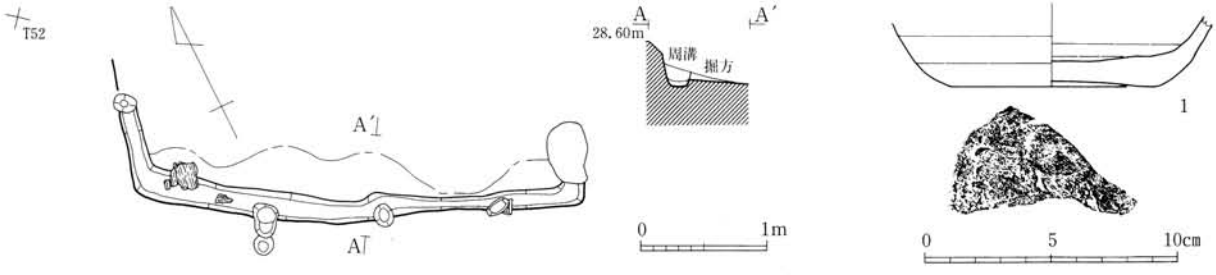
〔主柱穴〕主柱穴の有無は不明である。

〔カマド〕カマドの位置は不明であるが、南辺以外に付設されていたと考えられる。

〔周溝〕幅15～20cmの周溝を南辺、南西隅、南東隅で検出した。周溝内に火災時の炭化材や焼土、炭が落ち込んできたことから、開渠の状態で機能していたものと考えられる。

〔堆積土〕床面上は削平され、床面上には堆積土はなく、周溝内に火災時の自然堆積土がある。

〔出土遺物〕検出面から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（１）・甕などの破片が少数出土した。須恵器坏（１）は、底部がヘラ切りのものである。



層位	特　　徴
周溝	しまりややある黒褐色(7.5YR3/2)の人為堆積土。２層に分かれ、下部は径1cm程の地山粒を少し含み、上部は径1cm以下の地山粒・炭・焼土粒を少し含む。
掘方	暗褐色(7.5YR3/3)土。径1cm程の地山粒・炭・焼土粒を含む。しまりややあり。人為堆積土。

番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	須恵器坏	A1	検出面	破片	体下部～底部1/4破片。底径8.0cm。外面：底部ヘラ切り→底部ナデ。焼成良好		022

第98図　ＳＩ39竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

【ＳＩ35竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第99図、図版15－３）

〔壁〕検出面から床面までの壁の高さは、南辺で30～50cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。壁の上部は崩れている。

〔床面〕床面は削平されているが、掘方埋土上面を床面としている。床面の周溝際に炭化材、炭片、焼土があり、火災によって焼失したものとみられる。

〔位置〕調査区南東部東端の北斜面落ち際、丘陵尾根上北側の標高27.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。西辺際が残るのみで、他は床面下まで大きく削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺でｍである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約33°偏る。

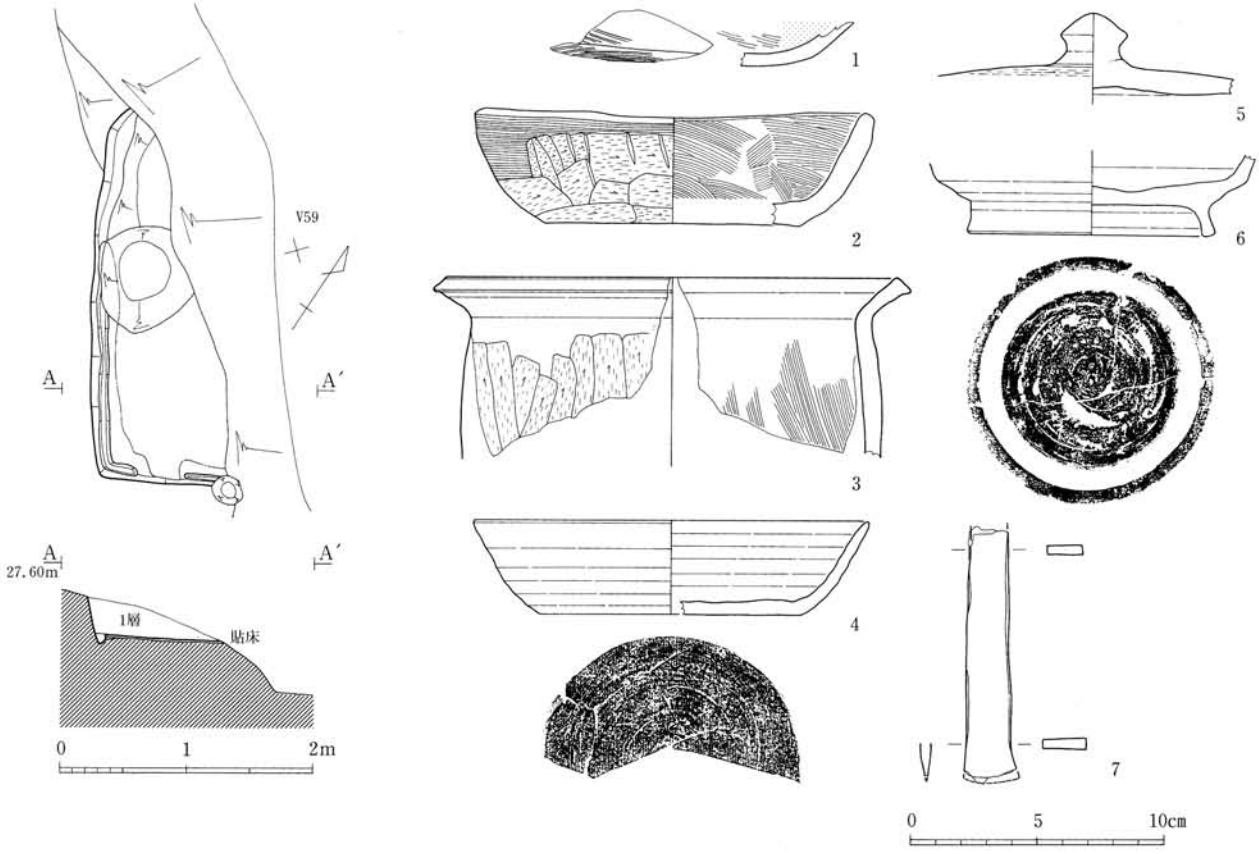
〔壁〕検出面から床面までの高さは、西辺で約30cmあり、約105°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、貼床上面を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴はないとみられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔壁材痕〕西辺で幅７cm、深さ５cmの壁材抜取痕跡と考えられる幅狭い溝とその脇の浅い掘方を検出した。いずれも人為的に埋められている。



層　位	特　　徴
周溝掘方	黒色(2.5Y2/1)土。地山粒、淡黄色粘土ブロックを含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
周溝	黒色(10YR2/1)土。径１cm以下の地山土ブロックを含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
貼床	黄褐色（10YR5/8）土。灰黄褐色（10YR6/2）粘土ブロックを多く含む。人為堆積土。
埋土１層	黒褐色(2.5Y3/1)土。径1cm程の地山土小ブロックを多く含む。炭粒を含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。

番号	種　類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ＩB2	埋土１層	破片	体下部～底部破片。非ロクロ調整。外面：ハケメ？、摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		013
2	土師器坏	ＩC2	床面	1/4	口径15.8cm。底径10.0cm。器高4.5cm。体部0.9cmと厚い。非ロクロ調整。外面：口縁～体部ヨコナデ→体部手持ちヘラケズリ。底部ナデ。内面：ナデ。内面全体に黒ずみ、黒色処理または燻し焼成されている可能性がある。外面に黒斑。焼成良好。	31-1	013
3	土師器鉢	Ⅱ	埋土１層	1/4	口縁～体上部破片。口径17.8cm。ロクロ調整。口縁短くひねり出し、凸帯縁とする。外面:ロクロナデ→体部手持ちヘラケズリ。内面：口縁ロクロナデ、体部ナデ。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。体部に漆状被膜付着。		013
4	須恵器坏	A2	床面	1/3	口径15.6cm。底径10.2cm。器高3.7cm。外面：底部切り離し不明→底部回転ヘラケズリ。両面に火襷痕・重ね焼き痕。焼成堅緻。	31-2	013
5	須恵器蓋		埋土１層	破片	つまみ完形～体部破片。口縁欠損。宝珠状つまみ。つまみ径2.6cm。つまみ高2.0cm。外面：体部回転ヘラケズリ。二次加熱を受け、全体的に摩滅。焼成不良。	31-3	013
6	須恵器高台坏	AorB2	床面	破片	体下部～底部・高台部完形破片。高台径9.8cm。高台高1.3cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。焼成堅緻。	31-4	013
7	鑿（ノミ）or 鑿（タガネ）		埋土１層	破片	刃先大きく欠損・一部残存、柄頭欠損。刃部撥状で、刃先がやや彎曲湾曲。両刃。刃部と柄部の境なし。刃先幅約2.1cm。刃部長1.5cm。現存長9.7cm。柄部は断面長方形で、最大幅1.7cm・厚さ4.5mm。柄頭を欠損し、古墳時代～古代の鑿・鑿の多くが両刃であるため、鑿か鑿か断定できない。茎・袋がなく、頭部が潰れていれば鑿の可能性が高く、茎または袋が付いて柄に装着されていれば鑿である。	37-23	030

第99図　ＳＩ35竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

〔堆積土〕床上の堆積土は１層で、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕床面から土師器坏（２）・甕、須恵器坏（４）・高台坏（６）などの破片、埋土から土師器坏（１）・鉢（３）・甕、須恵器坏・蓋（５）・甕などの破片、鑿（のみ）または鏨（たがね）（７）が少数出土した。このうち土師器は主体を占める坏・甕が非ロクロ調整で、１点のみある鉢がロクロ調整である。土師器坏には丸底気味のもの（１）、平底で器厚が厚く、内面が一般的なヘラミガキではなくナデ調整されている器形・調整が特異なもの（２）とがある。鑿か鏨（７）は、刃部が両刃で、撥状になるもので、柄頭を欠損しているため、鑿か鏨か区別できないものである。いずれにしても古代のものとしては、類例がきわめて少ないものである。

【ＳＩ22竪穴住居跡】（平面図：第100図、断面図：第101図、遺物：第102図、図版11－４・６）

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。東に隣接するSI23竪穴住居跡とは同時には存在しえない。床面レベルは、ＳＩ22竪穴住居跡がＳＩ23竪穴住居跡よりも25cm高い位置にある（第101図断面Ｂ－Ｂ'）。南東部は床面下、周溝底面下まで大きく削平されている。

〔廃絶の原因〕火災による焼失。

〔平面形・規模〕平面形は長方形で、規模は南北が西辺で5.9m、東西が北辺で5.1mである。

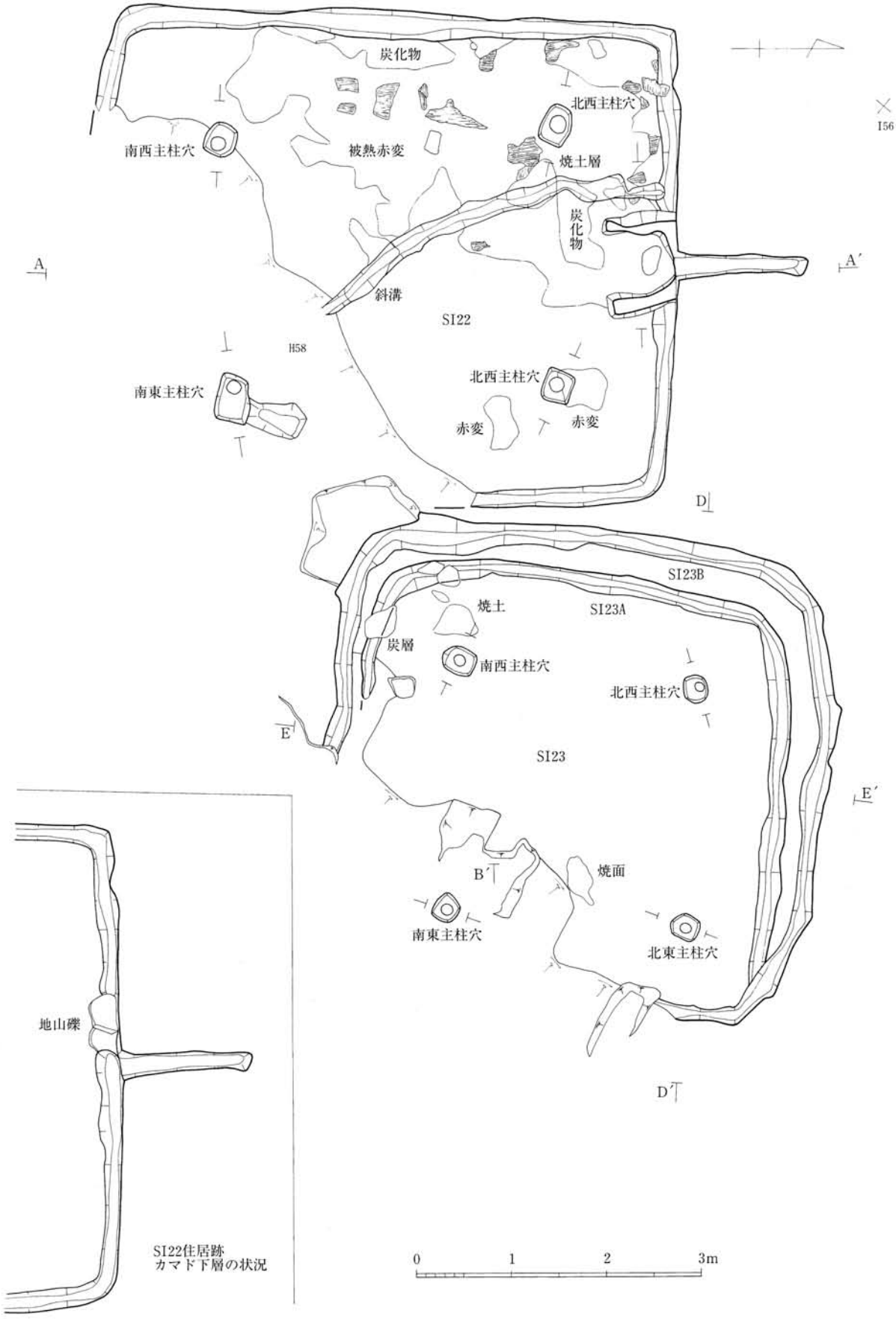
〔方向〕西辺でみると北で東に約３°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、最も残りのよい北西隅で42cmあり、西辺北半で30～35cm、北辺西半で30～40cmある。壁はほぼ直に立ち上がる。北辺東半では15～25cmとやや残りが悪く、東辺北半は３cm以下、南辺は８cm以下ときわめて残りが悪い。

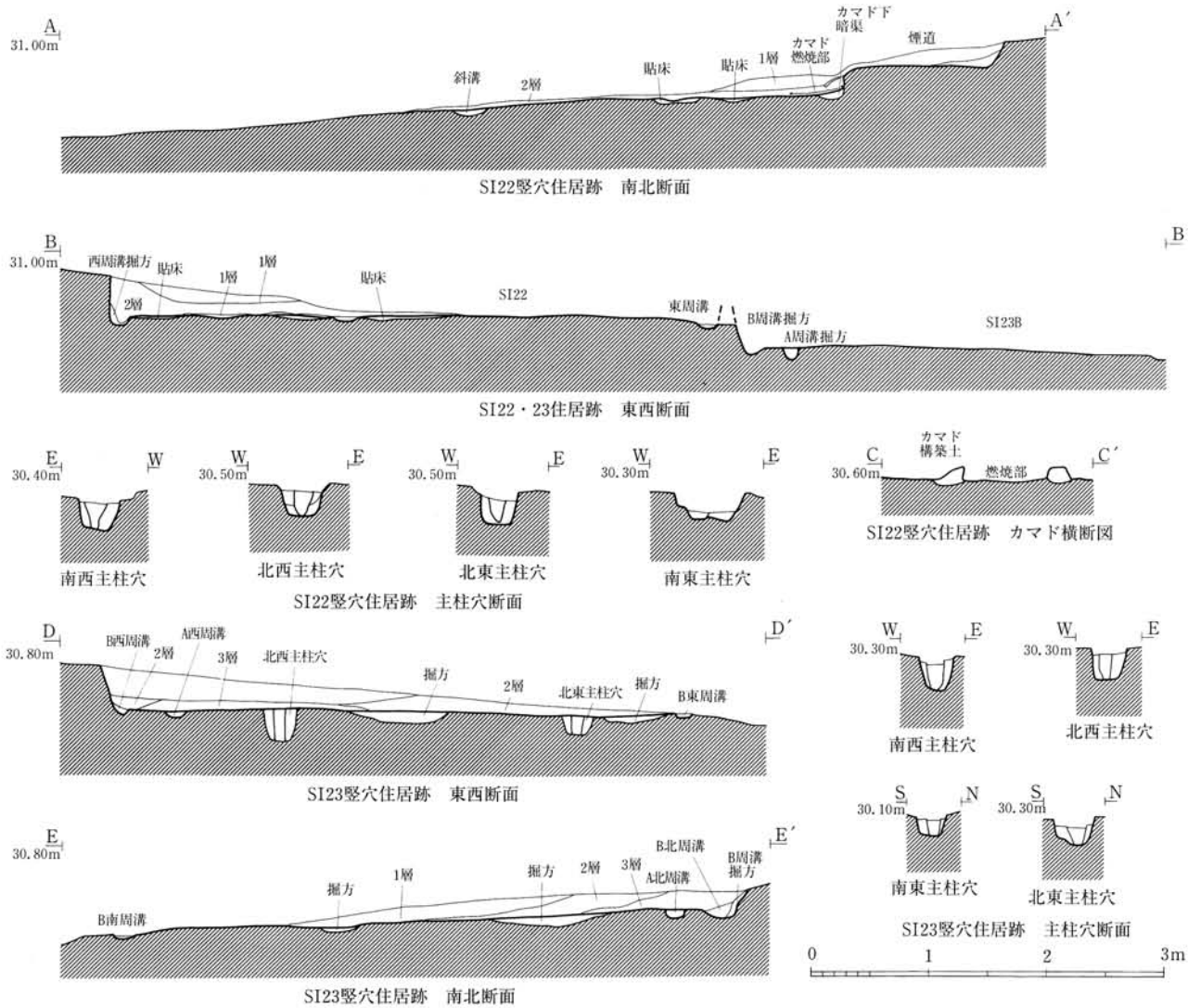
〔床面〕床面はほぼ平坦で、貼床上面と地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。床面上には火災によって生じた炭化物や炭化材、被熱赤変した箇所が特に北西部を中心に広く認められた。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上で、北西・北東・南西・南東主柱穴を検出した。北西主柱穴は長辺43cm、短辺30cmの不整長方形で、深さ27cm、北東主柱穴は長辺35cm、短辺30cmの長方形で、深さ32cm、南西主柱穴は長辺36cm、短辺33cmの隅丸長方形で、深さ34cm、南東主柱穴は長辺50cm、短辺37cmの長方形で、深さ22cmある。各主柱穴で径14cm前後の円形の柱痕跡を確認した。掘方には炭片・焼土粒を含まず、柱痕跡に炭片・焼土粒が多く含まれ、本竪穴住居跡の焼失を裏付けている。柱間寸法は北西主柱穴－南西主柱穴間が3.6m、北東主柱穴－南東主柱穴間が3.5m、北西主柱穴－北東主柱穴間が2.8m、南西主柱穴－南東主柱穴間が2.6mである。柱痕跡の位置でみると、北西主柱穴は西辺から約1.1m、北辺から約1.3m離れ、北東主柱穴は東辺から約1.3m、北辺から約1.2m離れ、南西主柱穴は西辺から約1.4m離れている。

〔カマド〕北辺ほぼ中央に付設されている。カマドの向きは丘陵尾根に対して約45°偏り、斜面上方のほぼ北を向く。カマドの天井部は崩壊していたが、両側壁、奥壁、燃焼部、煙道が残存していた。左側壁は長さ78cm、高さは奥で32cm、焚き口で７cm、右側壁は長さ75cm、高さは奥で24cm、焚き口で７cm残存していた。両側壁の内側は被熱のため著しく赤変硬化していた。両側壁外面の幅は下部で1.1mある。カマド側壁はにぶい黄橙色土で構築されている。燃焼部は奥行き70cm、幅



第100図　ＳＩ22・23Ａ・23Ｂ竪穴住居跡平面図（１/60）



住居跡	層　位	特　　徴
SI22	貼床	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～1.5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	主柱穴掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径1～5cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよい。粘性なし。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	暗褐色1(10YR3/3)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く、径4mm以下の炭・焼土粒を少し含む。
	カマド構築土	にぶい黄橙色(10YR6/4)土。径0.2～1cmと径3cmの粘板岩風化礫片を含む。しまりあり。人為堆積土。
	カマド燃焼部	にぶい赤褐色(5YR4/4)土。焼土を多量に含む。
	カマド下暗渠	カマド下中央に掘り残した扁平な地山粘板岩風化礫があり、表面が熱を受けて赤変。周溝より続く暗渠はこの礫の両側で止まる。暗渠埋土は暗褐色(10YR3/3)土で、径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含み、しまりあり。
	煙道	2層に分かれる。下部は黒褐色(10YR2/3)土で、炭化物・焼土粒・地山粒を少し含む。しまりややあり。粘性なし。上部は褐色(20YR4/4)土で、径0.5～2cmの粘板岩風化礫片と径4mm以下の焼土粒を少し含む。しまりややあり。粘性なし。
	周溝掘方	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	斜溝	黒褐色(10YR3/1)土。径0.5～1cmの炭片を多く含む。しまり・粘性なし。火災前の自然堆積土。
	堆積土1層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～4cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土2層	暗褐色(7.5YR3/4)土。赤変した径0.5～3cmの粘板岩風化礫片、焼土粒を多く含む。しまり・粘性なし。自然堆積土。
	堆積土3層	炭の薄い層。火災時の自然堆積土。
SI23A	主柱穴掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～3cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	主柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまり・粘性なし。
	A周溝	暗褐色(10YR3/3)土。径0.5～4cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
SI23B	B周溝掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	B周溝	黒褐色(10YR3/2)土。径0.2～2cmの粘板岩風化礫片を含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。
	埋土1層	暗褐色(10YR3/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片、径5～20cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。
	埋土2層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径5mm程と径3cm程の粘板岩風化礫片を含む。しまりややあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土3層	暗褐色(10YR3/3)土。径5mm程の粘板岩風化礫片、炭片を含む。しまり・粘性なし。人為堆積土。
SI23	掘方	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.2～2cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよく、粘性なし。人為堆積土。

第101図　ＳＩ22・23Ａ・23Ｂ竪穴住居跡断面図（１/60）

65cm、奥壁高13cmで、奥壁から焚き口にかけてなだらかに傾斜し、焼土が堆積し、被熱・赤変していた。

右側壁と燃焼部の下には人為的に埋め戻された暗渠があり、その掘方は周溝に続いていた。左側壁の下には地山に含まれていた粘板岩礫がそのまま掘り起こされずに残っていた。そして、地山掘り残しの礫の上に左側壁が構築され、周溝の掘方はこの礫の左際で途切れていた。

煙道はカマド奥壁より外に向かって長さ1.4m延びる。カマド奥壁から煙道入り口にかけてやや上向きに傾斜するが、それより先はほぼ水平に延びている。煙道入り口付近の側壁は、火熱のために赤色硬化していた。トンネル式の煙道の天井部は削平され、深さ18cm残存していた。煙道の最大幅は33cmで煙道入り口部あり、次第に先細りとなる。煙道の先端は若干窪められ、煙出しとなっている。煙出しは煙道先端の幅と同じで、ピット状となっていない。

〔周溝〕北辺・西辺、および東辺・南辺の一部で、幅15～25cm、深さ5cm前後の周溝掘方を検出した。東辺・南辺の多くは削平されていたが、周溝掘方は四辺を巡っていたとみられる。周溝掘方は浅く埋め戻され、その窪みに焼土・炭が堆積していた。中央が窪むような状態で機能していたことが窺える。なおカマド下では、地山に含まれる粘板岩礫を掘り残した箇所の両側で、周溝掘方が途切れている。

〔斜暗渠〕カマド左脇の北周溝掘方から住居中央に向けて斜めに暗渠が設けられている。掘方は幅14～25cm、深さ5cm前後で、火災前に人為的に埋め戻されていた。位置関係からみて、カマド前面の乾燥を意図した暗渠とみられる。中央から先は削平されて残存していないが、南東隅の周溝掘方に接続していた可能性がある。

〔堆積土〕床面上の堆積土は3層に分けられ、いずれも火災以降の自然堆積土である。

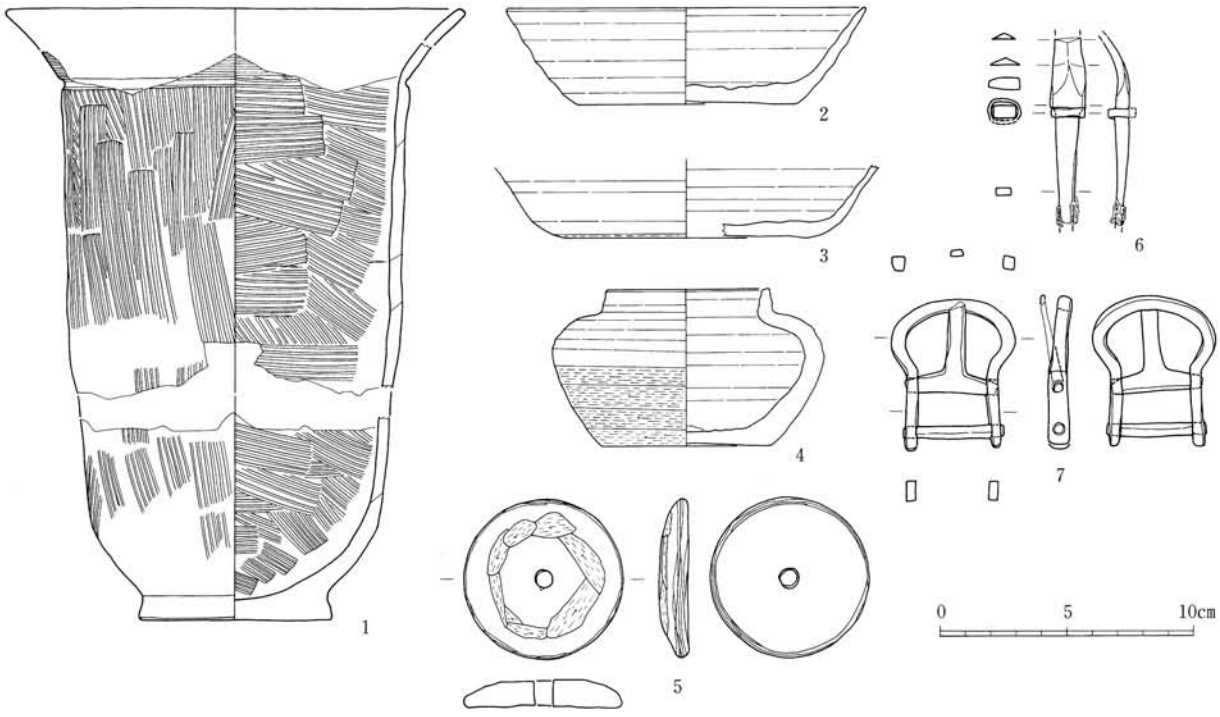
〔出土遺物〕焼失した竪穴住居跡であるにも関わらず、床面からの出土遺物はきわめて少なく、土師器甕破片が少数出土したにすぎない。火災直前に食膳具を含めた家財道具一式を持ち出したことが窺える。カマド内からは土師器甕1点（1）の他、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏破片が少数出土した。周溝からは体下部～底部が回転ヘラケズリされた須恵器坏底部破片1点、煙道からは土師器甕、須恵器甕の破片が少数出土した。埋土からは残存率の高い須恵器坏2点（2・3）、ほぼ完形で小型の須恵器短頸壺1点（4）、完形の土製紡錘車1点（5）と鉄製鉸具1点（7）、ほぼ完形の鉈（やりがんな）1点（6）の他、土師器甕、須恵器蓋・甕の破片が少数出土した。

このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、1の土師器甕はカマドで使用されていたかカマドの芯材に使用された可能性もある。鉄製鉸具（7）は馬具で、壷鐙の鐙鞋金具である兵庫鎖の先に取り付き、力革を通して鞍に下げられる鉸具か面懸・胸懸・尻懸の鉸具とみられる。鉈（6）は刃先・茎尻欠損する。刃部は平面形が鏝形、断面形が片鎬造の両刃で、内反りとなり、撫角の両関で茎部と区別される。関部には鎺（はばき）が装着されている。茎部には部分的に木質が残る。

【ＳＩ23竪穴住居跡】（平面図：第100図、断面図：第101図、遺物：第103図、図版11－５・６）

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。ＳＩ23竪穴住居跡は、床面レベルを同じくして一度建て替えられ、



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕	ＩＡ	カマド内２層	破片	口縁欠胴上部破片と非接合の胴下部～底部破片。底径7.5ｃｍ。器高約24cm。非ロクロ調整。外面：ハケメ→口縁ヨコナデ、頸下部沈線、底部木葉痕。内面：口縁ヨコナデ、胴部ハケメ。	26-24	010
2	須恵器坏	B1	埋土１層	1/2	口径14.2cm。底径8.6cm。器高3.8cm。外面：底部ヘラ切り。焼成不良。	27-1	010
3	須恵器坏	A3	埋土１層	1/2	底径9.5cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。両面に火襷痕。	27-2	010
4	須恵器壺	B1	埋土１層	9/10	口径6.5cm。底径6.7cm。器高6.2cm。最大径10.7cmで、体中央部に最大径が位置する。口頸部は高さ9mmと短く直立する。外面：ロクロナデ→底部切り離し不明→体下半部～底部回転ヘラケズリ。胎土緻密で、砂粒少量含む。焼成堅緻。外面口縁～体上部に灰がかかる。内面底部に熔着物がある。平城分類壺Ｃに相当。	27-3	010
5	土製紡錘車		埋土２層	完形	土製。須恵質。裁頭円錐形。断面薄台形。広径6.3cm。狭径3.4cm。厚さ1.1cm。軸孔径0.7cm。重量47ｇ。上面ケズリ・ナデ、下面ナデ、側面ナデ・ヘラミガキ。焼成良好。	36-12	026
6	鉈		埋土１層	破片	刃先・茎尻欠損。刃部は平面形が鍛形、断面形が片鎬造の両刃で、内反りとなり、撫角の両関で茎部と区別される。関部には箍が装着されている。茎部は茎尻に向かって幅・厚を減じ、部分的に木質が残る。現存長7.5cm。現存刃部長2.8cm。刃部最大幅1.3cm。刃部厚2.5mm。現存茎部長4.5cm。茎部断面長方形で、茎の最大幅・厚は箍装着部にあり、最大幅9.5mm、最大厚5mm。箍は幅3mm、厚さ1mmの鉄板を鍛接。箍の外径1.3cm、内径1.0cm。	37-20	029
7	鈴具		埋土１層	完形	馬具。壺鐙の鐙鞦金具である兵庫鎖の先に取り付き、力革を通して鞍に下げられる鈴具とみられる。長さ6.0cm。幅4.9cm。Ω形に曲げられた金具に力革に刺される刺金と兵庫鎖が取り付けられる横棒が鍛接されている。刺金は先端がわずかに欠損している。現存する刺金長2.9cm、断面5×3mm長方形。横棒長4.0cm、断面径5mm隅丸方形。兵庫鎖がつけられる部分の幅3.9cm。	37-4	029

第102図　ＳＩ22竪穴住居跡出土遺物

北辺・西辺・東辺が40～50cm外側に拡張されている。拡張前の古い住居をＳＩ23Ａ竪穴住居跡、拡張された新しい住居をＳＩ23Ｂ竪穴住居跡とする。いずれも南東部は床面下、周溝底面下まで大きく削平されている。また、西に隣接するＳＩ22竪穴住居跡とは同時には存在しえない。床面レベルは、ＳＩ22竪穴住居跡がＳＩ23竪穴住居跡よりも25cm高い位置にある（第101図断面Ｂ－Ｂ'）。

《ＳＩ23Ａ竪穴住居跡》

〔平面形・規模〕平面形は隅丸正方形で、規模は南北が西辺で4.4ｍある。東西は北辺で4.4ｍ前後と推定される。

〔方向〕西辺でみると北で西に約６°偏る。

〔壁〕床面レベルを同じくしてＳＩ23Ｂ竪穴住居跡に拡張されているため、壁の高さはない。

〔床面〕ＳＩ23Ｂ竪穴住居跡の床面とほぼ同じとみられる。床面下の掘方はＳＩ23Ａ竪穴住居跡かＳＩ23Ｂ竪穴住居跡の構築に伴うものだが、どちらか判断できない。

〔主柱穴〕後述するように、ＳＩ23竪穴住居跡の床面上の４箇所で主柱穴を検出した。これら４箇所

の主柱穴で柱痕跡を確認し、ＳＩ23Ｂ竪穴住居跡が人為的に埋められていることから、これらの主柱穴はＳＩ23Ｂ竪穴住居跡に伴い、柱材が床面近くで切り取られているとみられる。これら４箇所の主柱穴を断ち割り調査したが、いずれも重複は認められなかった。ＳＩ23Ａ竪穴住居跡に主柱穴があってこの新しい主柱穴と完全に重複していたか、主柱穴がなかったと考えられる。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、残存状況から南辺か東辺に付設されていたものと考えられる。

〔周溝〕検出された各辺で幅15～23cm、深さ約10cmの周溝を検出した。東辺・南辺の削平箇所にも本来は巡らされていたと考えられる。拡張された際に人為的に埋められている。

〔堆積土〕拡張されているため、周溝以外に堆積土はない。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《ＳＩ23Ｂ竪穴住居跡》

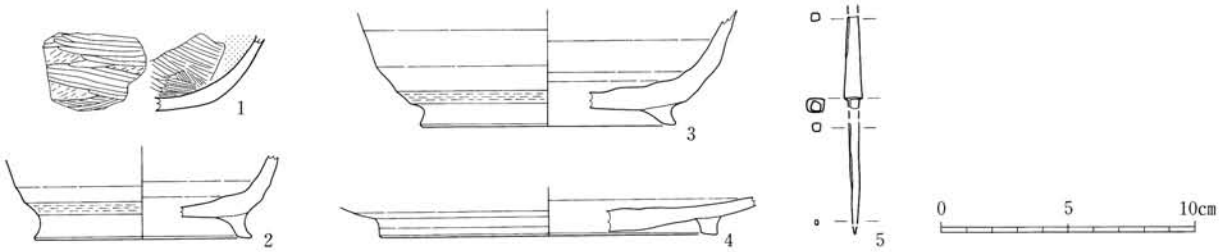
〔平面形・規模〕平面形はほぼ隅丸正方形で、規模は南北が西辺で5.2m、東西が北辺で4.9mである。

〔方向〕西辺でみると北で西に約４°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは、比較的残りのよい北西隅で39cmあり、約110°の傾斜でやや斜めに立ち上がる。北辺東半では10cm以下、東辺・南辺では２cm以下と残りは悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）と一部は掘方上面を床面としている。床面上には南西主柱穴の西隣と北東主柱穴の南側に小規模な焼面、南西隅付近に炭化物の多い箇所がある。

〔主柱穴〕竪穴住居跡の対角線上で、北西・北東・南西・南東主柱穴を検出した。北西主柱穴は長辺30cm、短辺25cmの隅丸長方形で、深さ26cm、北東主柱穴は長辺30cm、短辺25cmの隅丸長方形で、深さ26cm、南東主柱穴は長辺30cm、短辺27cmの不整方形で、深さ20cm、南西主柱穴は長辺35cm、短辺28cmの隅丸長方形で、深さ30cmある。各主柱穴で径13cm前後の円形の柱痕跡を確認した。SI23B竪穴住居跡が人為的に埋められていることから、柱材は床面近くで切り取られているとみられる。柱間寸法は、北西主柱穴－南西主柱穴間、北東主柱穴－南東主柱穴間、北西主柱穴－北東主柱穴間、南西主柱穴－南東主柱穴間が2.5～2.6mとほぼ等しい。柱痕跡の位置でみると、北西主柱穴は西辺から約1.1m、北辺から約1.3m離れ、北東主柱穴は東辺から約1.3m、北辺から約1.2m離れ、南西主柱穴は西辺から約1.4m離れている。



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ＩB2	埋土１層	破片	体部～底部破片。丸底気味。非ロクロ調整。外面：体部手持ちヘラケズリ→部分的ヘラミガキ、底部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		010
2	須恵器高台坏	B1	埋土２層	破片	体下部～底部・高台部1/4破片。高台径8.6cm。高台高1.0cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。		010
3	須恵器高台坏	AorB2	埋土２層	破片	体下部～底部・高台部1/4破片。高台径10.0cm。高台高0.9cm。外面：体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。		010
4	須恵器盤		埋土３層	破片	体下部～底部・高台部1/5破片。高台径13.4cm。高台高0.7cm。底部回転ヘラケズリ→付高台。		010
5	鉄鏃		床面	破片	鏃身欠損する柄部～茎部破片と同一非接合の茎部破片。長頸式。柄元断面7×6mm長方形。関部が直角となる。茎断面3mm方形。現存長8.2cm。	37-16	029

第103図　ＳＩ23Ｂ竪穴住居跡出土遺物

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、残存状況から南辺か東辺に付設されていたものと考えられる。

〔周溝〕検出された各辺で幅15～23cm、深さ５cm前後の周溝を検出した。東辺・南辺の削平箇所にも本来は巡らされていたと考えられる。北辺の一部に掘方埋土があり、機能時には一部埋め戻されて開渠の状態であったとみられる。廃絶時に人為的に埋められている。

〔堆積土〕床面上の堆積土は３層に分けられ、いずれも人為堆積土である。

〔出土遺物〕出土遺物は少なく、床面から鉄鏃破片１点（５）の他、土師器坏・甕の破片、主柱穴から土師器甕破片、埋土から土師器坏（１）・甕、須恵器坏・高台坏（２・３）・盤（４）の破片が少数出土した。このうち土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、須恵器高台坏（２・３）は体下部～底部の回転ヘラケズリ後に付高台され、須恵器盤（４）も底部回転ヘラケズリ後に付高台されている。

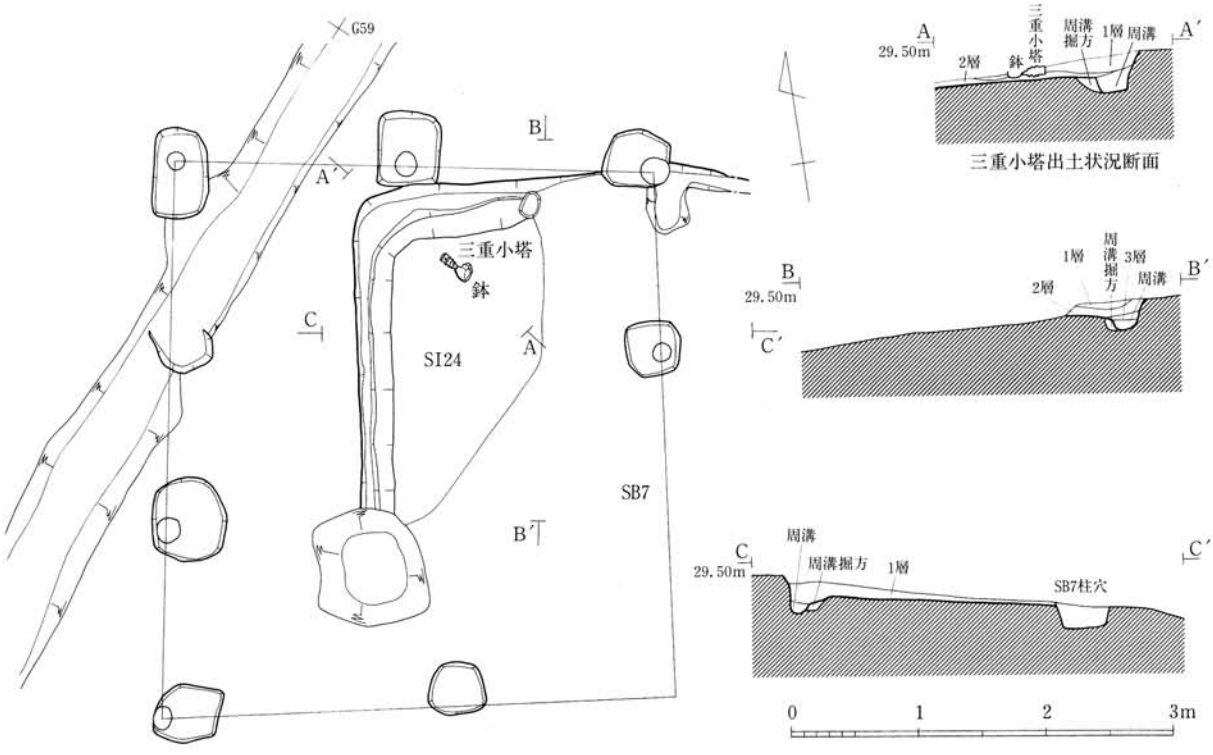
【ＳＩ24竪穴住居跡】（平面図・断面図：第104図、遺物：第105図、図版12）

〔位置〕調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高29.0m付近に置する。

〔重複〕ＳＢ７掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。北西部を残すのみで、それ以外は床面下と周溝底面まで大きく削平され、残りが悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で2.5m以上、東西が北辺で3.0m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約８°偏る。



SI24	周溝掘方	灰黄褐色(10YR5/2)土。径2cm程の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	周溝	にぶい黄褐色(10YR5/3)土。しまりあまりない。粘性なし。人為堆積土。
	埋土１層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径3cm程の粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。
	埋土２層	暗褐色(10YR3/3)土。径2cm程の粘板岩風化礫片、炭化物を多く、焼土粒を少し含む。しまりあり。粘性なし。人為堆積土。

第104図　ＳＩ24竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）

〔壁〕検出面から床面までの高さは、残りの比較的よい北西隅で20cmあり、約90°～110°の傾斜でほぼ直からやや斜めに立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔周溝〕西辺・北辺で幅23～40cm、深さ８cm前後の周溝掘方を検出した。周溝掘方は一部埋め戻され、中央が窪んだ開渠の状態で機能していたとみられる。

〔堆積土〕床面上の堆積土は３層に分けられ、人為的に埋められている。埋土の上に間層を挟まずにＳＢ７掘立柱建物跡が建てられていることから、SB7掘立柱建物跡を建てる際に埋められたものとみられる。

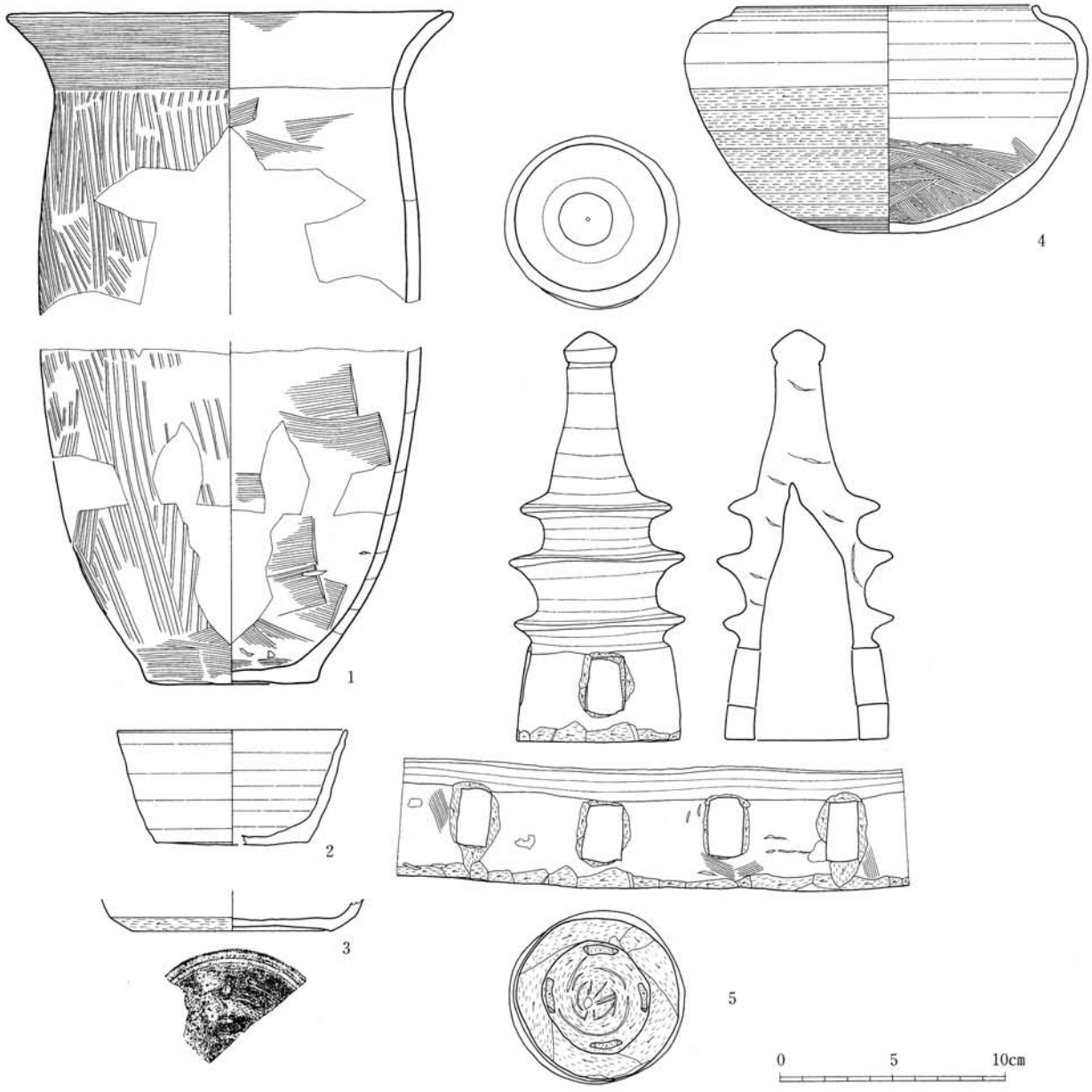
〔出土遺物〕出土遺物は少なく、埋土から土師器甕１点（１）、鉄鉢形の須恵器鉢１点（４）、須恵器質の三重小塔１点（５）の他、土師器坏・甕、須恵器坏（２）・高台坏の破片、検出面から須恵器坏（３）の破片が少数出土した。これらはいずれも本竪穴住居跡の廃絶時に人為的に埋められたものである。

三重小塔は完形で、本竪穴住居跡内の北西隅付近、床面から約５cm上で横倒しになり、その上に本来は完形であったとみられる鉄鉢形の須恵器鉢が被さった状態で出土した（第104図、巻頭図版２－２）。ピットなどの掘方はなく、人為的に埋め戻された埋土２層から出土したものである。きわめて特異な形態の完形の三重小塔を横倒しにして、さらにまた特異な器形の鉄鉢形の須恵器鉢で覆うといった特異な出土状況からみて、不要となったものが廃棄されたのではなく、ＳＢ７掘立柱建物跡を建てる直前に本竪穴住居跡を埋める過程で意図的に埋納されたものと考えられる。なお、内部の土を慎重に乾燥篩にかけたが、何も出土しなかった。

土師器はいずれも非ロクロ調整のもので、土師器坏には両面がヘラミガキされてから両面が黒色処理された口縁部破片が１点ある。須恵器坏（２）は口径に比して器高の深い（器高/口径比0.5）いわゆる「コップ形」のもので、底部がヘラ切り後に軽くナデられている。須恵器坏（３）・高台坏は体下部～底部が回転ヘラケズリされている。

鉄鉢形の須恵器鉢（４）は、底部が丸底気味で、体部中央上部寄り～底部が回転ヘラケズリされている。口縁部が短く内傾し、鉄鉢形の須恵器鉢の中ではやや特異な口縁部形態であるが、全体的なプロポーションは鉄鉢形の須恵器鉢の範疇に入る。出土状況からみて、欠損部分は削平を受け、本来は完形であったとみられる。

須恵器質の三重小塔（５）は完形で、高さ18.3cm、底径7.8cmある。内面は底径4.6cm、高さ11.4cmの円錐状に底面より刳り抜かれ、時計回り・螺旋状にヘラケズリされ、中空となっている。屋根は平面形が円形、断面が算盤玉状で、３重である。屋根に瓦は表現されていない。屋根の大きさは初重が径7.6cm、２重が径7.8cm、３重が径6.8cmある。軸部は初重が高さ4.3cm、径7.8cm、２重が高さ1.8cm、径5.4cm、３重が高さ1.3cm、径4.9cmある。軸部の初重には縦2.6cm前後、横1.64cm前後の縦長長方形の透かしが４箇所開けられている。透かしの外面周囲は透かし端より少し低くなるよ



番号	種　類	分類	層位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕	ＩA	埋土１層	3/4	口縁1/4～胴上部破片と非接合の胴下部～底部3/4破片。口径19.8cm。底径7.5cm。器高約30cm。非ロクロ調整。外面：ハケメ→口縁ヨコナデ、胴下部ナデ、底部ナデ。内面：口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ、胴下部～底部ナデ。		010
2	須恵器坏	E	埋土１層	1/4	口径10.3cm。底径6.8cm。器高5.1cm。外面：底部ヘラ切り→ナデ。		010
3	須恵器坏	A3	検出面	1/4	底径8.8cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。		010
4	須恵器鉢	B	埋土２層	3/4	鉄鉢形。口縁短く内傾。口縁端部は角張る。最大径は体上部にあり（最大径17.8cm）、体部は丸味を帯びる。丸底気味。口径13.4cm。器高10.1cm。外面：ロクロナデ→体中央部～底部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ→体下部～底部ナデ。	27-4	010
5	三重小塔		埋土２層	完形	須恵質。粘土紐積み上げ・ロクロ成形。高さ18.3cm。底径7.2cm。屋蓋は平面が円形、断面算盤玉状で、３層ある。初層屋蓋径7.6cm。２層屋蓋径7.8cm。３層屋蓋径6.7cm。初層の軸に縦長長方形（2.6×1.6cm前後）の透かしが４箇所開けられている。透かしの外面周囲は透かし端より少し低くなるように手持ちヘラケズリされ、表面から中に向けてヘラケズリされている。また、初層の底面に接した下端と底部は、右から左に向けて手持ちヘラケズリされている。また、初層外面は部分的にナデされ、粘土の付着が２箇所に認められる。内面は底径4.6cm、高さ11.4cmの円錐状に刳り抜かれ、時計回り・螺旋状にヘラケズリされている。相輪部は宝珠のみ表現され、九輪・伏鉢は表現されず、簡略化されている。相輪部高7.2cm。宝珠径2．4cm、高1.4cm。宝珠の方に沈線が１条水平に巡る。焼成堅緻。暗赤褐色。胎土に砂粒を少量含む。	巻頭図版2 36-1	011

第105図　ＳＩ24竪穴住居跡出土遺物

うに手持ちヘラケズリされ、表面から中に向けてヘラケズリされている。出入り口の扉を表現したものとみられる。また、初重の底面に接した下端と底部は、右から左に向けて手持ちヘラケズリされている。また、初重外面は部分的にナデされ、粘土の付着が2箇所に認められる。相輪部は高さ7.2cmある。宝珠・擦管のみ表現され、露盤・伏鉢・請花・九輪・水煙・竜車は表現されず、表現が簡略化されている。焼きは須恵器質で、窯で焼かれたものである。焼成は堅緻で、暗赤褐色から灰褐色を呈する。胎土には砂粒を少量含み、化粧土などは塗布されていない。粘土紐を積み上げてからロクロを用いて三重小塔形に成形し、内部を底面から中空に刳り抜き、軸部初重に長方形透かしを4箇所開けた後、軸部初重外面をヘラケズリし、さらにナデ調整している。

【ＳＩ26竪穴住居跡】（平面図・断面図：第106図）

〔位置〕調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高28.5m付近に置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。ＳＢ７掘立柱建物跡と近接するため、これと同時には存在しえない。西辺近くが残存するのみで、それ以外は床面下まで大きく削平され、残りがきわめて悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は東西が西辺で3.7m、南北は南辺で1.1m以上である。

〔方向〕西辺でみると北で西に約25°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは10cm以下と残りがきわめて悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

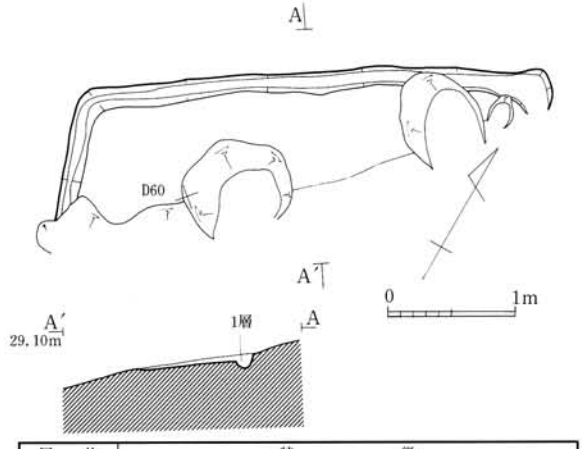
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、北辺以外に付設されたものと考えられる。

〔周溝〕北辺、および南辺の一部で幅13～18cm、深さ4cmの周溝を検出した。

〔堆積土〕床面上、周溝内とも廃絶以降に堆積した同じ自然堆積層である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕破片が少数出土した。



層　位	特　　徴
堆積土１層	暗褐色(7.5YR3/4)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多量含む。しまりあまりない。自然堆積土。

第106図　ＳＩ26竪穴住居跡平面図・断面図

【ＳＩ27竪穴住居跡】（平面図・断面図・遺物：第107図）

〔位置〕調査区南東部の端近く、丘陵尾根上の標高27.5m付近に置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。西辺近くがわずかに残るのみで、他は床面下まで大きく削平され、残りがきわめて悪い。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は南北が西辺で4.0m、東西は不明である。

〔方向〕西辺でみると北で東に約17°偏る。

〔壁〕検出面から床面までの高さは10cm以下と残りがきわめて悪い。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山面（粘板岩岩盤）を床面としている。

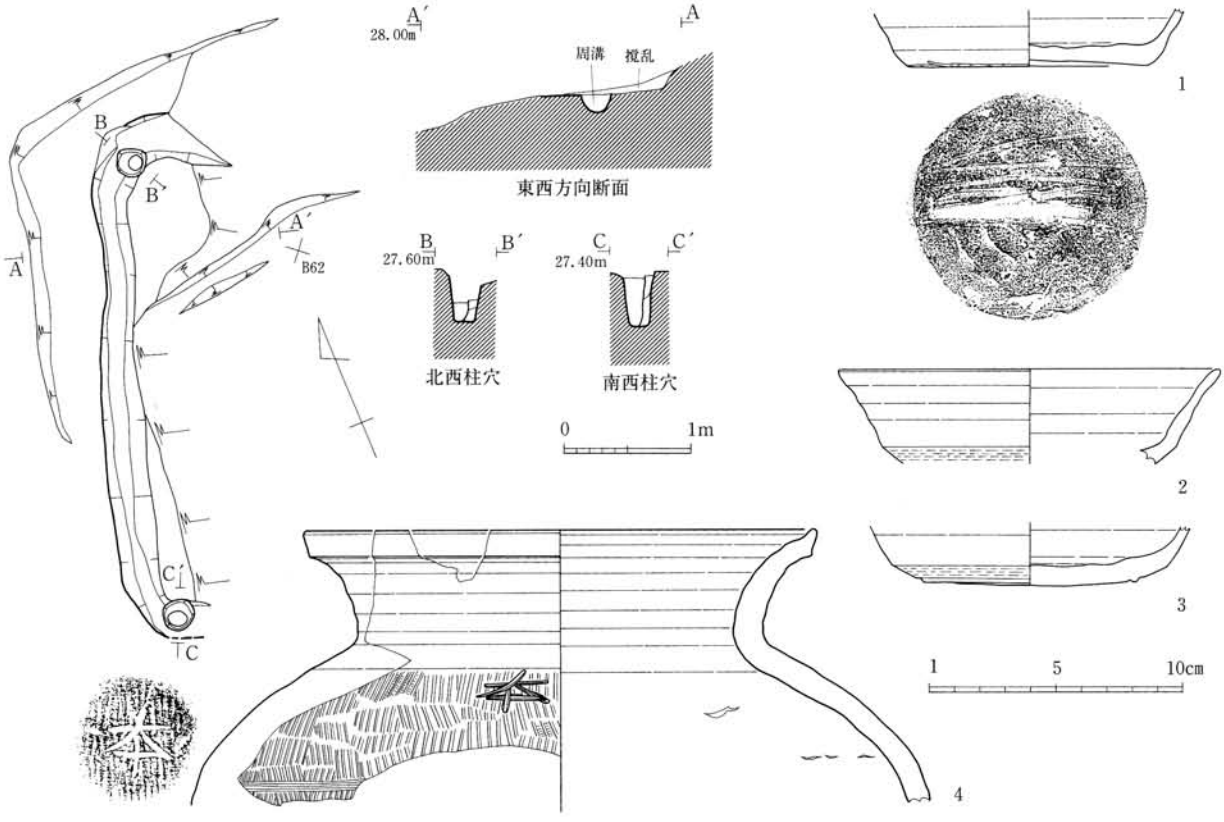
〔主柱穴〕主柱穴は認められない。

〔カマド〕カマドの位置は不明だが、西辺以外に付設されたものと考えられる。

〔周溝〕西辺で幅22～33cm、深さ７cm前後の周溝を検出した。周溝内は廃絶以降の自然堆積土である。周溝内の北西隅、南西隅で柱穴を検出した。北西隅柱穴の掘方は径24cmの不整円形で、深さ30cmあり、柱痕跡は径14cmの円形である。南西隅柱穴の掘方は径24cmのほぼ円形で、深さ44cmあり、柱痕跡は径14cmの円形である。

〔堆積土〕攪乱が床面上まで入り、堆積土は周溝内にのみあり、自然堆積土である。

〔出土遺物〕堆積土から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（１・２）・高台坏・甕（４）の破片、攪乱から須恵器高台坏（３）の破片が少数出土した。このうち須恵器坏には底部をヘラ切り後に体下部～底部を手持ちヘラケズリしたもの（１）、体下部を回転ヘラケズリしたもの（２）がある。須恵器高台坏（３）は、底部～底部を回転ヘラケズリした後に、体部下端にケズリ出し（きついロクロナデ）による低い疑似高台を作り出し、底部が疑似高台よりも下に突き出ている。これまでこうした特徴を持つ須恵器高台坏は県内で知られていない。類例は後述するが、北関東にみられる。また、須恵器甕（４）は外面体上部に「卒」（「本」の異体字）と焼成前に刻書されている。



層位	特徴
柱穴掘方	暗褐色(10YR3/3)～にぶい黄褐色(2.5YR6/4)土。径0.5～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあり。人為堆積土。
柱穴柱痕跡	暗褐色(10YR3/3)土。粘板岩風化礫小片を含む。しまりない。
周溝	黒褐色(10YR2/3)土。しまりない。自然堆積土。

番号	種類	層位	分類	層位	特徴	写真	収納
1	須恵器坏	堆積土	B4	堆積土	体下部～底部完形破片。底径9.4cm。外面：底部ヘラ切り→体下部手持ちヘラケズリ、底部粗雑な手持ちヘラケズリ。焼成不良。	27-5	012
2	須恵器坏	堆積土	A3	堆積土	口縁<1/4～体下部破片。口径15.0cm。体下部回転ヘラケズリ。焼成不良。		012
3	須恵器高台坏	攪乱	C	攪乱	体下部～底部2/3破片。高台径8.4cm。外面：底部摩滅、切り離し不明→体下部回転ヘラケズリ→削り出し（きついロクロナデ）による低い疑似高台。胎土に径0.5～1mmの砂粒・ガラス粒を多く含む。焼成不良。全体に摩滅。北関東系かその影響を受けたもの。	27-6	012
4	須恵器甕	堆積土		堆積土	口縁1/4～胴上部破片。口径20.2cm。外面：平行叩き→口頸部ロクロナデ→焼成前に胴上部に刻書「卒」（「本」の異体字）。内面：胴部不明当て具痕→胴部ナデ、口頸部ロクロナデ。焼成良好。	27-7 35-8	012

第107図　ＳＩ27竪穴住居跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

3．井戸跡

3基の井戸跡を検出した。

【ＳＥ１石組井戸跡】（平面図：第109・110図、断面図：第110図、遺物：第108図、図版21－１・５～７）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の沢頭、標高35.5m付近に位置する。

〔重複〕本井戸跡と一連の遺構であるＳＸ５平場は、ＳＢ10掘立柱建物跡、ＳＩ８・９・17・19・40・41・43・56竪穴住居跡、ＳＥ２・３井戸跡、ＳＸ５・６焼成遺構、ＳＫ12・13土壙、ＳＸ１遺物包含層と重複し、いずれよりも新しい。

〔関連遺構〕丘陵尾根の北側斜面にＳＸ５平場を造成した後、その裾部にＳＤ１暗渠を設け、そこで集めた水をＳＤ１暗渠でＳＸ１石組井戸跡に導水している。ＳＤ１暗渠の脇にある環状積石もこれらに伴う。

〔構造〕掘方は下底が直径90cm、上底が直径1.6mの円筒状で、板状・角柱状の粘板岩礫片を壁面に沿って23段前後積み上げ、壁面と石組との間に裏込め土を入れている。そして、石組の最上段には、やや大きめの扁平な板状の粘板岩礫片並べている。また、ＳＤ１暗渠から導水される水口には、長さ40～50cmと特に大きな角柱状の粘板岩礫片を縦長に置いている。

〔堆積土〕５層に分けられ、板状・角柱状の粘板岩礫片や粘板岩巨礫を一緒に叩き込みながら、人為的に埋めている。

〔出土遺物〕井戸内堆積土、井戸裏込め土からは遺物は出土しなかった。

《ＳＸ５平場》（平面図：第109・110図、断面図：第110図、第121図断面Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'、図版21－１）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の北側、東斜面に位置する。

〔規模と構造〕東に約13°傾斜する沢に面した斜面で、南北が約40m、東西が26m以上に及ぶ範囲を大規模に造成している。斜面上方にあたる箇所を切り取って、その裾部にＳＤ１暗渠を設け、その上と斜面下方を整地し、平坦面を造成している。整地は明黄褐色粘質土大ブロックを多量に含む暗褐色土と明黄褐色土の互層で、東側の厚い箇所では厚さは1.4mにも及ぶ。

〔出土遺物〕近世に使用された火縄銃の鉄砲玉１点（註１）の他、古代の土師器・須恵器などの破片が少数出土した。

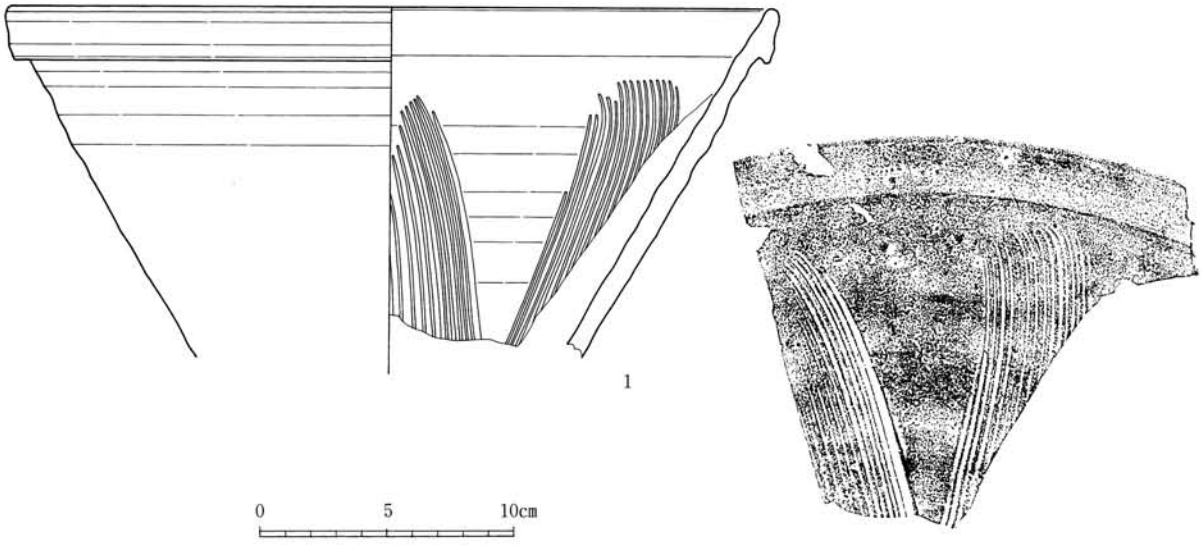
《ＳＤ１暗渠・開渠》（平面図：第109・110図、断面図：第110図、遺物：第108図、図版21－１・２）

〔規模と構造〕ＳＸ５平場の造成に際して切り取った裾部を弧状に巡るように、幅0.6～2.2m、深さ10cm前後の溝を掘削している。そして、ＳＥ１石組井戸跡から長さ約18mにわたって幅50cm前後の石組暗渠とし、石組暗渠と接続する北側のL字状に曲がった箇所では開渠としている。掘方の幅は石組暗渠では50cmと狭いが、開渠では1.2～2.2mと広くなっている。また、ＳＸ５平場の裾部に集まった雨水などがＳＥ１石組井戸跡に導水されるように、ＳＤ１開渠からＳＤ１暗渠へと向かって底面がわずかに傾斜している。

ＳＤ１石組暗渠は、溝状の掘方内に側石を縦長に密接して敷き並べ、その上に蓋石をし、側石と

掘方、側石と蓋石との隙間に裏込め土を詰め、蓋石の上をさらに整地して構築されている。石組暗渠の内法断面は、幅10cm前後、深さ６cm前後の長方形で、幅と深さがほぼ一定している。暗渠内部には下部には砂層、上部にはシルト質土が自然堆積していた。石組暗渠に用いられたのはいずれも粘板岩礫片で、側石が長さ20～45cm、幅６cm前後、厚さ６cm前後の角柱状で、蓋石は長さ20～30cm、幅10～20cm、厚さ６cm前後の扁平な板状である。

〔出土遺物〕ＳＤ１暗渠上の覆土から、擂鉢破片１点（１）が出土した。18世紀前葉頃の瀬戸窯の製品で、両面に錆釉がかけられている（註１）。暗渠内部からは遺物は出土しなかった。



番号	種類	層位	残存	特徴	写真	収納
1	擂鉢	SD1暗渠覆土	破片	口縁1/4～体下部破片。18世紀初め頃の瀬戸製陶器。口径30.4cm。口縁部～体部が直線的に外傾する。ロクロ調整。口縁部を外折させて外面に幅2.2cmの縁帯を作り、口縁部の内面を2.4cm幅でやや窪むようにヨコナデして軽い稜を作る。内面体部に16条の縦方向の擂目（幅4.4cm）を放射状に施す。擂目の間隔は上端で6.5cmあり、擂目は全面に施されない。外面体下部はロクロナデ後に回転ヘラケズリされている。両面に鉄錆釉。胎土は微細で、精良。焼成良好。井上（1994）の登窯Ｖ期、藤沢（1998の）の瀬戸窯第２段階第６小期に相当する。	35-7	023

第108図　ＳＤ１暗渠出土遺物

《環状積石》（平面図・断面図：第109図、図版21－３）

〔位置〕ＳＥ１石組井戸跡から約15m、SD1開渠の屈曲部から約11m離れた位置にあり、ＳＤ１暗渠の段掘りされた掘方の上段際に設けられている。

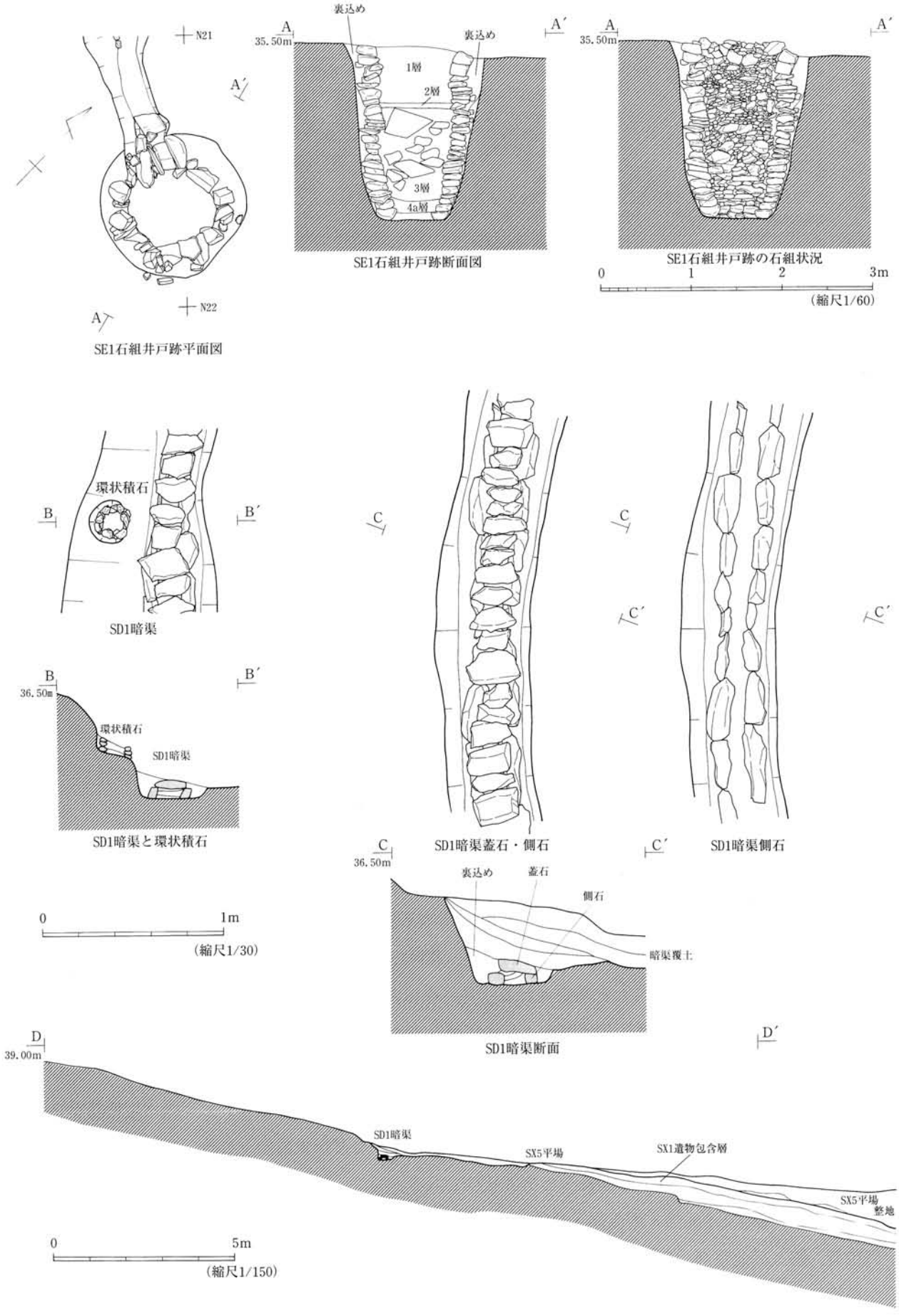
〔規模と構造〕円形ピット状の掘方の中に、拳大前後の粘板岩礫片を環状に３段積み重ねている。環状の外径は20cm、内径は10cmで、深さ６cmある。掘方は積石の外傾よりやや大きく、径24cm、深さ14cmある。掘方と積石との間は黄褐色粘質土で裏込めされ、積石内部には自然堆積土が堆積していた。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

《ＳＸ５平場の柱穴》（平面図：第109図、断面図：第111図、図版21－４）

ＳＸ５平場の北半部に柱穴が９つある。これらの柱穴はいずれもＳＸ５平場の造成に伴う整地層の上から掘り込まれており、ＳＥ１石組井戸跡、ＳＤ１暗渠・開渠、ＳＸ５平場と同時期またはこれらよりも新しい。掘方はＰ１～Ｐ４が長辺１ｍ前後、短辺0.8m前後の長方形を基調とし、Ｐ５～Ｐ９が長辺50cm前後、短辺40cm前後の隅丸長方形を基調としている。掘方埋土はＰ１～Ｐ４がＳ

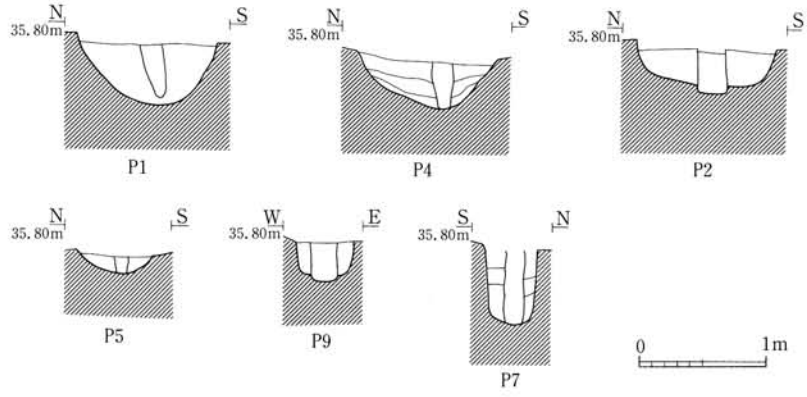
第109図　ＳＥ１石組井戸跡、ＳＤ１暗渠、ＳＸ５平場平面図（１/150）



第110図　ＳＥ１石組井戸跡、ＳＤ１暗渠、環状積石の細部と断面（１/150、１/60、１/30）

遺構	層位	特徴
SE1 石組井戸跡	裏込め	石組の裏込め土。しまりのよい人為堆積土で、2層に分かれる。下層はにぶい黄褐色(10YR6/4)粘質土で径2～5cmの粘板岩礫片を多く含む。上層は黒褐色(7.5YR3/2)土。
	井戸内埋土1層	灰黄褐色(10YR4/2)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多量に含む。しまりよい。人為堆積土。
	井戸内埋土2層	黄褐色(10YR5/8)粘質土を主に灰黄褐色(10YR4/2)土を不均一に含む。しまりよい。人為堆積土。
	井戸内埋土3層	暗褐色(7.5YR3/3)土。拳大～径60cmの粘板岩礫片を多量に含む。しまりあり。人為堆積土。
	井戸内埋土4a層	褐灰色(7.5YR4/1)粘質土。グライ化。人為堆積土。
	井戸内埋土4b層	褐灰色(7.5YR4/1)粘質土。グライ化。径1～2cmの黄色砂質土ブロックを多く含む。人為堆積土。
SD1 暗渠	裏込め	黄褐色(10YR5/6)土。粘質。しまり強い。人為堆積土。
	暗渠覆土	にぶい黄褐色(10YR4/3)～黄褐色(10YR5/8)。粘質。しまり強い。人為堆積土。
	暗渠内堆積土	自然堆積土で、3層に分かれる。下層はしまりのない暗褐色(10YR3/3)砂質土、中層はしまりの強い黄褐色(10YR5/6)土、上層はしまりのある灰黄褐色(10YR5/2)土。
環状積石	裏込め	黄褐色(10YR5/6)土。粘質。しまり強い。人為堆積土。
	環状積石内堆積土	2層に分かれる。下部は黄褐色(10YR5/3)土、上部はにぶい黄橙色(10YR6/3)土。いずれも径2～3cmの地山粒を少し含み、しまりあり。
SX5 平場	SX5平場整地	明黄褐色(10YR6/6)粘質土大ブロックを多量に含む暗褐色(10YR3/3)土と明黄褐色(10YR6/6)土の互層。しまり強い。人為堆積土。

ＳＥ１石組井戸跡、ＳＤ１暗渠、ＳＸ５平場の土層一覧



第111図　ＳＸ５平場の柱穴断面図（１/60）

Ｘ５平場整地土に由来する明黄褐色粘質土を多量に含み、Ｐ５～Ｐ９がオリーブ褐色土を多量に含む。これら大型の柱穴と小型の柱穴は、大きさ・埋土に違いがあることから、複数の時期に分かれると考えられるが、いずれも建物跡とは考えにくく、組み合わせなど詳細は不明である。いずれの柱穴から、遺物は出土しなかった。

【ＳＥ２井戸跡】（平面図・断面図・遺物：第112図、図版19－１）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢の沢頭、標高37.0m付近に位置する。

〔規模と構造〕掘方は平面形が長径2.5m、短径2.1mの不整楕円形、断面が漏斗状で、深さ1.4mある。井戸枠は廃絶時にほとんど抜き取られていたが、井戸枠の最下部の横組み枠材が残存しており、長方形の板組み井戸枠であったと推定される。井戸枠の内法は長辺約1.5m、短辺約1.0mで、材痕から縦方向に立てられた四隅柱が井戸枠より外に張り出すような構造と考えられる。

〔堆積土〕一部に裏込め土が残り、他は井戸廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕掘方から非ロクロ調整の土師器甕（１）、須恵器坏（２）の破片、井戸内の堆積層から非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏（３）・蓋・甕・壺の破片などが少数出土した。このうち須恵器坏（２・３）は体下部～底部を回転ヘラケズリしている。

【ＳＥ３井戸跡】（平面図・断面図・遺物：第113図、図版19－２）

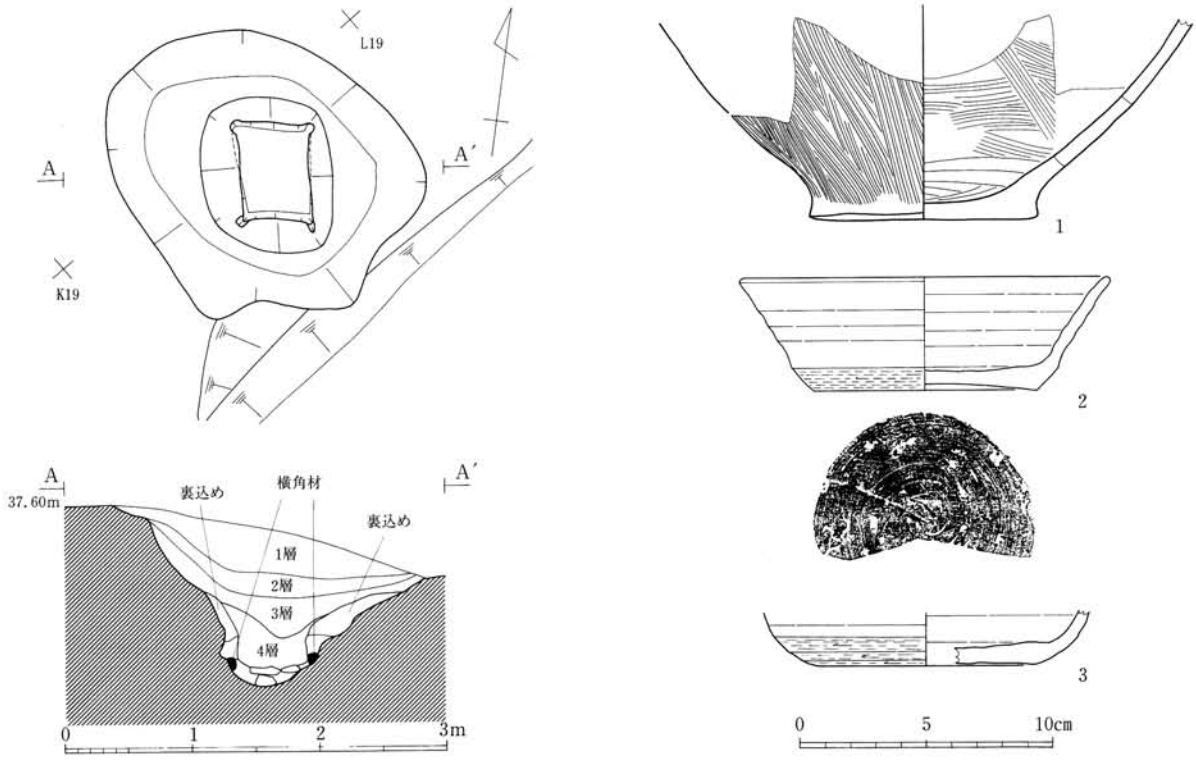
〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対し東に入る小さな沢の沢頭に面し、標高36.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ１遺物包含層、ＳＸ５平場と重複する。ＳＸ１遺物包含層よりも新しく、ＳＸ５平場よりも古い。

〔規模と構造〕掘方は平面形が長径3.1m、短径2.3mの不整円形、断面が漏斗状で、深さ80cmある。掘方の北側は段掘りされている。掘方の中央は平面形が長径75cm、短径60cmの楕円形で、深さ30cm段掘りされている。井戸枠は廃絶時に完全に抜き取られていたが、ここに円筒状の木製井戸枠が設置されていたと考えられる。

〔堆積土〕4層に分けられ、井戸廃絶以降の自然堆積土である。このうち、下部の堆積土3層は、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰である。裏込め土は残っていない。

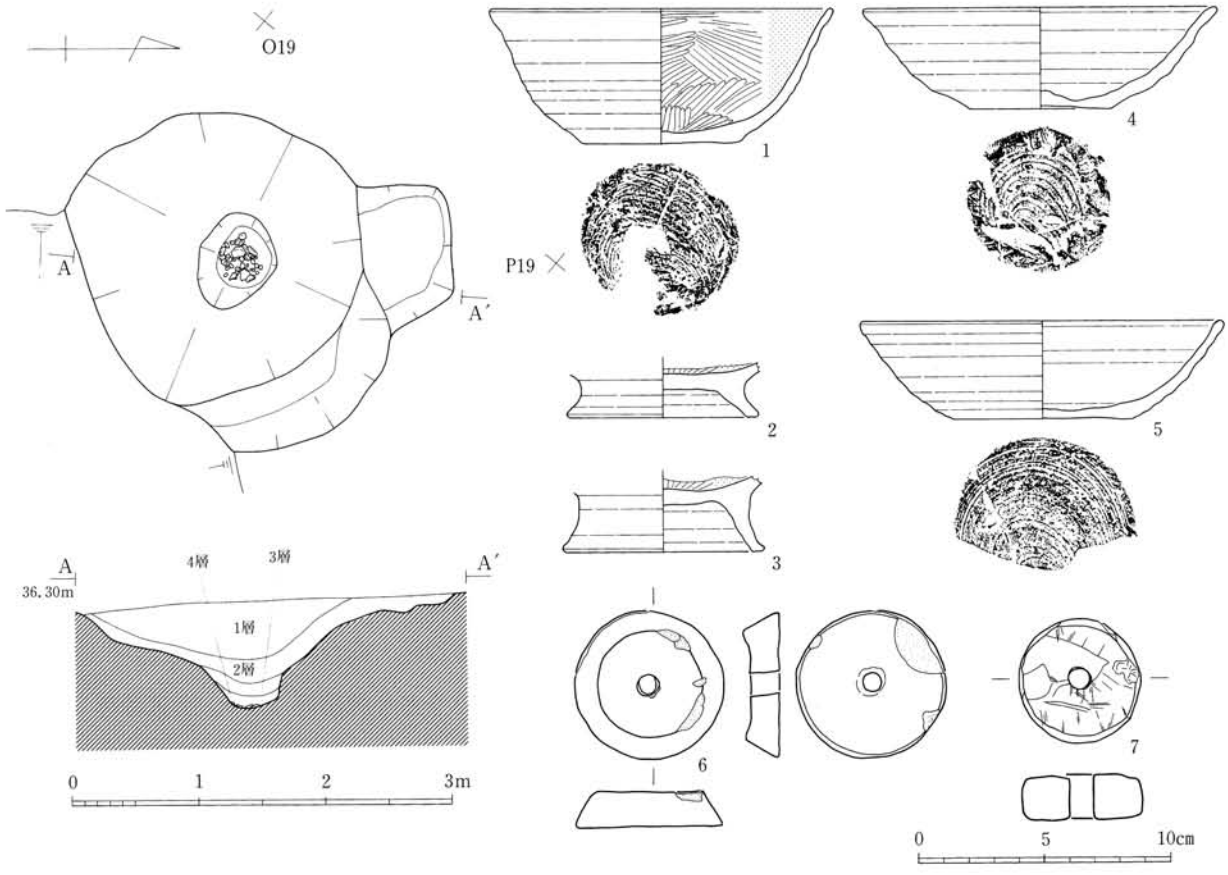
〔出土遺物〕掘方からの出土遺物はなく、井戸廃絶以降の堆積土からやや多くの遺物が出土した。灰白色火山灰の下層の堆積土4層からはロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。灰白色火山灰の堆積土3層からは、完形の土製紡錘車1点（6）、残存率の高いロクロ調整の土師器坏（1）、須恵器坏（4・5）の他、ロクロ調整の土師器坏・高台坏（2・3）・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕などの破片が出土した。堆積土2層からは完形の石製紡錘車1点（7）の他、ロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・甕・壺などの破片が少数出土した。堆積土1層からはロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕、縄文時代前期の縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。このうち土師器坏（1）、須恵器坏（4・



層　位	特　　徴
裏込め	しまりのある人為堆積土で、4層に分かれる。1層はにぶい黄褐色(10YR7/4)砂質土に明褐色土ブロックが不均一に混じる。2層は灰黄色(2.5Y6/2)粘質土、3層は褐色(7.5YR5/8)粘質土、4層は地山土ブロックを多く含む灰褐色(2.5YR5/2)粘質土で、横角材と隅柱が一部に残る。
井戸内堆積土	井戸枠を抜き取られて廃絶した後、中に堆積した自然堆積土で、4層に分かれる。1層はにぶい黄褐色(10YR4/3)土で、しまりあまりない。地山粒を少し含む。2層はにぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土で、しまりある。3層はにぶい黄褐色(10YR5/3)土で、しまりある。4層は灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土で、全体的にグライ化。

番号	種類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器甕		掘方	破片	胴下部～底部破片。底径9.0cm。球胴。外面：胴下部ハケメ、底部ハケメ→ナデ。内面：ナデ。古墳時代前期、塩釜式か。		023
2	須恵器坏	A3	掘方	2/5	口径14.6cm。底径8.8cm。器高4.5cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成堅緻。	34-6	023
3	須恵器坏	D2	堆積土1層	破片	体下部～底部1/4破片。底径8.6cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。焼成良好。		023

第112図　ＳＥ２井戸跡平面図・断面図（1/60）、出土遺物



層　位	特　　徴
堆積土１層	褐色土(10YR4/4)土。しまりあまりない。自然堆積土。
堆積土２層	にぶい黄褐色(10YR5/4)土。しまりなし。自然堆積土。
堆積土３層	10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰。しまりなし。自然堆積土。
堆積土４層	灰黄褐色(10YR5/2)土。しまりなし。粘性ややあり。自然堆積土。

番号	種類	分類	層　位	残存	特　　徴	写真	収納
1	土師器坏	ⅡB	堆積土３層	1/3	口径13.6cm。底径6.3cm。器高5.4cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	34-7	023
2	土師器高台坏	Ⅱ	堆積土３層	2/3	底部～高台部破片。高台径7.6cm。高台高1.5cm。外面：底部切り離し不明→付高台。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	34-8	023
3	土師器高台坏	Ⅱ	堆積土３層	9/10	底部～高台部破片。高台径8.0cm。高台高2.2cm。外面：底部切り離し不明→付高台。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		023
4	須恵器坏	D1	堆積土３層	3/5	口径14.0cm。底径5.6cm。器高4.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。焼成良好。	34-9	023
5	須恵器坏	D1	堆積土３層	1/3	口径14.4cm。底径7.1cm。器高3.9cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：平滑なロクロナデ。焼成良好。	34-10	023
6	土製紡錘車		堆積土３層	完形	土製。土師質。故頭円錐形。断面薄台形。上面を皿状に窪める。頂部・底面一部剥落。全体的に摩滅。ミガキか。広径5.9cm。狭径4.2cm。厚さ1.4cm。軸孔径0.8cm。重量49ｇ。焼成良好。両面に大きく黒斑。胎土に微細なガラス・長石粒を多く含む。	36-10	026
7	石製紡錘車		堆積土２層	完形	極細粒砂岩製。円盤形。断面長方形。直径4.8cm。厚さ1.8cm。軸孔径0.9cm。重量58ｇ。	36-9	026

第113図　ＳＥ３井戸跡平面図・断面図（１/60）、出土遺物

５）はいずれも底部が回転糸切り無調整のものである。他の土師器坏・須恵器坏破片で底部が残存するものは、土師器坏に回転糸切り無調整の他、手持ちヘラケズリされたものが含まれるものの、須恵器坏はすべて回転糸切り無調整である。

４．炉跡

炉跡１基を検出した。竪穴住居跡に伴う炉跡の可能性も残されているが、確証はないので、屋外炉跡として扱うことにする。

【ＳＸ６炉跡】（平面図・断面図：第114図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高33.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ１遺物包含層よりも新しく、ＳＸ５平場よりも古い。

〔平面形・規模〕長径24cm、短径21cmの不整楕円形で、深さ６cmある。底面・壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化している。赤変は掘方よりも５cm奥まで及んでいる。

〔出土遺物〕通常の鉄滓１点の他、発泡して土を多く巻き込んだ鉄滓10点が出土した。

５．焼成遺構

焼成遺構２基を検出した。

【ＳＸ７焼成遺構】（平面図・断面図：第114図、図版19－８）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高33m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ１遺物包含層、ＳＸ５平場と重複し、これらよりも古い。

〔特徴〕長辺98cm、短辺42cmの隅丸長方形で、深さ14cmある。長軸は等高線に平行する。堆積土は２層に分かれ、下部には炭層が薄く自然堆積している。底面・壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化している。赤変は掘方よりも５cm奥まで及んでいる。

〔出土遺物〕発泡して土を多く巻き込んだ鉄滓が１点出土した。

【ＳＸ８焼成遺構】（平面図：第６・114図、断面図：第114図、図版19－７）

〔位置〕調査区中央部南寄りの西際、丘陵尾根上やや西側の標高31.0m付近に位置する。

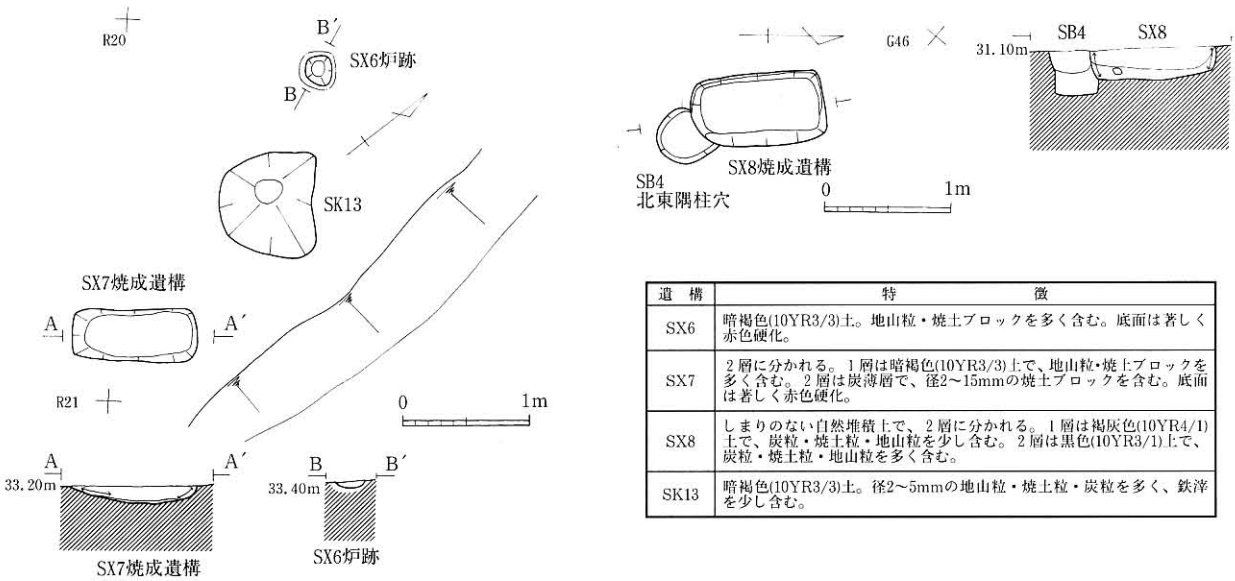
〔重複〕ＳＢ４掘立柱建物跡北東隅柱穴と重複し、これよりも新しい。

〔特徴〕長径103cm、短径55cmの隅丸長方形で、深さ25cmある。堆積土はしまりのない自然堆積土で、２層に分かれる。壁面全体が被熱を受けて赤変・硬化し、掘方よりも２cm奥まで及んでいる。底面はさほど赤変・硬化していない。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

６．土壙

土壙11基を検出した。



遺　構	特　　徴
SX6	暗褐色(10YR3/3)土。地山粒・焼土ブロックを多く含む。底面は著しく赤色硬化。
SX7	２層に分かれる。１層は暗褐色(10YR3/3)土で、地山粒・焼土ブロックを多く含む。２層は炭薄層で、径2～15mmの焼土ブロックを含む。底面は著しく赤色硬化。
SX8	しまりのない自然堆積土で、２層に分かれる。１層は褐灰色(10YR4/1)土で、炭粒・焼土粒・地山粒を少し含む。２層は黒色(10YR3/1)土で、炭粒・焼土粒・地山粒を多く含む。
SK13	暗褐色(10YR3/3)土。径2～5mmの地山粒・焼土粒・炭粒を多く、鉄滓を少し含む。

第114図　ＳＸ６炉跡、ＳＸ７・８焼成遺構、ＳＫ13土壙平面図・断面図（１/60）

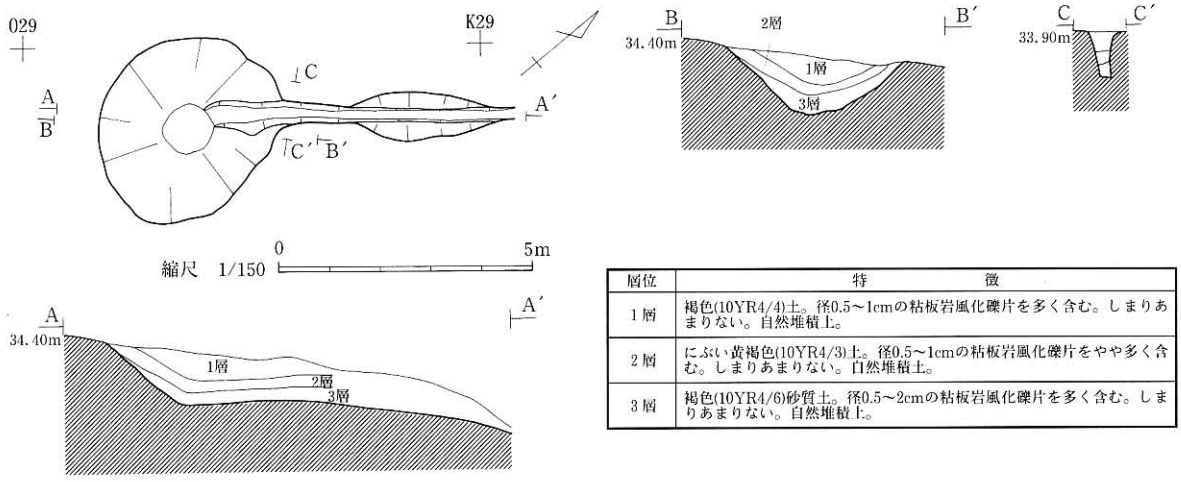
【ＳＫ１土壙】（平面図・断面図：第115図、図版19－３・４）

〔位置〕調査区ほぼ中央部、丘陵尾根上やや北寄りの標高34.0m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ12竪穴住居跡と重複するが、堆積土の重複がないため、新旧関係は不明である。

〔特徴〕平面形は長径3.9m、短径3.5mの楕円形、断面形は擂鉢状で深さ1.5mある。北東方向に傾斜する斜面に向けて、幅45cm、深さ90cmの箱掘りの溝が長さ6.3m延びている。堆積土は３層に分けられ、いずれも廃絶以降の自然堆積土である。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・鉢・甕の破片が少数出土した。



層位	特　　徴
1層	褐色(10YR4/4)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあまりない。自然堆積土。
2層	にぶい黄褐色(10YR4/3)土。径0.5～1cmの粘板岩風化礫片をやや多く含む。しまりあまりない。自然堆積土。
3層	褐色(10YR4/6)砂質土。径0.5～2cmの粘板岩風化礫片を多く含む。しまりあまりない。自然堆積土。

第115図　ＳＫ１土壙平面図・断面図（１/150）

【ＳＫ３土壙】（平面図・断面図：第116図、出土遺物：第117図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ４掘立柱建物跡の東約1.5m、丘陵尾根上の標高31.0m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。

〔特徴〕平面形は長径2.0m、短径1.5mの楕円形で、深さ20cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏の破片が少数出土した。このうち須恵器坏（５）は体部外面に90°右横向きに「富」と墨書されている。

【ＳＫ４土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土遺物：第117図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ６掘立柱建物跡の北約2.2m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。

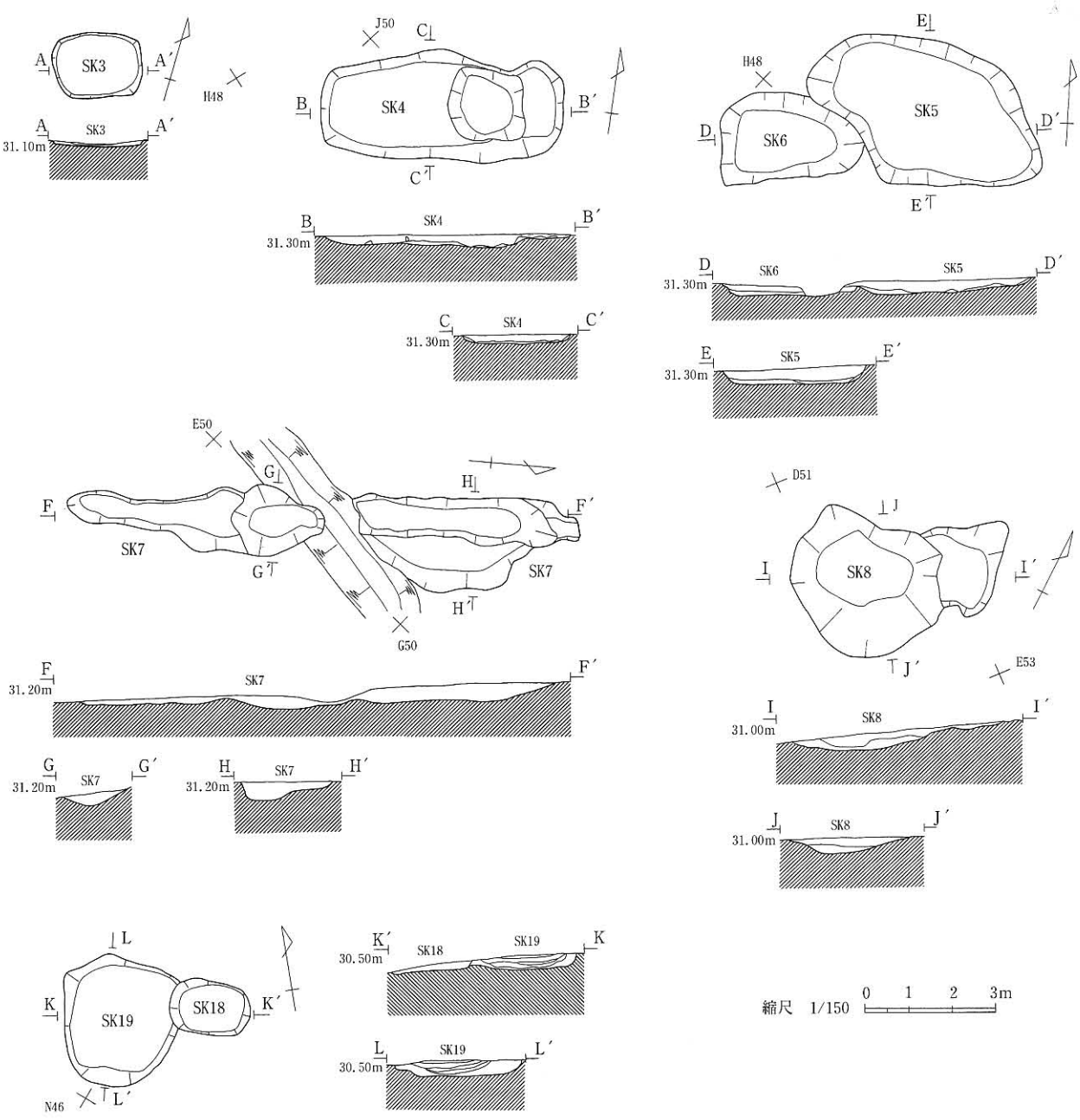
〔特徴〕平面形は長径5.5m、短径2.5mの不整楕円形で、深さ30cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕ガラス小玉１点（10）の他、非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋（３）・甕、縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。このうち土師器坏には平底気味の底部破片、須恵器坏には手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリの底部破片が各１点ある。

【ＳＫ５土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土遺物：第117図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ５掘立柱建物跡の南約1.0m、ＳＢ６掘立柱建物跡の北約2.5m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＫ６土壙と重複し、これよりも新しい。



遺構	特徴
SK3	しまりのある人為堆積土で、2層に分かれる。1層は黒褐色(10YR3/1)土で、地山小ブロック・炭粒を含む。2層は黄灰色(2.5Y4/1)土で、地山小ブロック・炭粒を含む。
SK4	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5～1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。2層はにぶい黄褐色(10YR5/4)土で、径2～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK5	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5～1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。2層はにぶい黄褐色(10YR5/4)土で、径2～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK6	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5～1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。2層はにぶい黄褐色(10YR5/4)土で、径2～5cmの粘板岩風化礫片を多く含む。
SK7	暗褐色(10YR3/4)土。径0.5～1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。しまり強い。人為堆積土。
SK8	しまりの強い人為堆積土で、2層に分かれる。1層は暗褐色(10YR3/4)土で、径0.5～1cmの地山粒を多く、炭化物を少し含む。2層はにぶい黄褐色(10YR5/4)土で、径10cm程の粘板岩礫片を多く含む。
SK18	黒褐色(10YR3/2)土。径0.5cmの地山粒を少し含む。しまり弱い。自然堆積土。
SK19	しまりの強い人為堆積土で、5層に分かれる。1層は褐色(10YR4/4)土で、炭化物・焼土粒・地山粒を少し含む。2層はにぶい褐色(10YR4/3)土で、炭化物を少し含む。3層は暗褐色(10YR3/4)土で、炭化物を少し含む。4層は黒褐色(10YR3/2)土で、炭化物・焼土粒を多く含む。5層は褐色(10YR4/6)土。

第116図　ＳＫ３～８・18・19土壙平面図・断面図（1/150）

〔特徴〕平面形は長径5.7m、短径3.5mの不整円形で、深さ40cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器高坏（2）・甕、須恵器坏・高台坏（4）・蓋・甕、刀子？（7）、縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。

【ＳＫ６土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ５掘立柱建物跡の南約2.5m、丘陵尾根上の標高31.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＫ５土壙と重複し、これよりも古い。

〔特徴〕平面形は長径3.3m、短径2.0mの不整円形で、深さ30cmある。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・甕、縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。このうち土師器坏には体下部に段のある体部破片が１点ある。

【ＳＫ７土壙】（平面図：第10・116図、断面図：第116図、出土遺物：第117図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ６掘立柱建物跡の西約4.0m、丘陵尾根上の標高30.8m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ45竪穴住居跡と重複し、これよりも新しい。

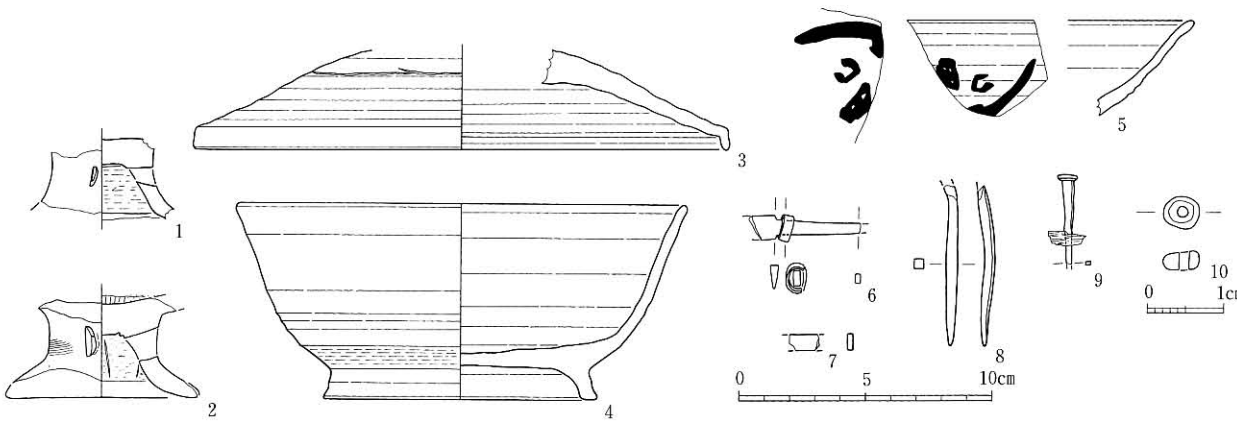
〔特徴〕平面形は長さ11.6m、幅0.9～2.1mの溝状で、深さ40cmあり、土壙が連続したような状態で段掘りされている。人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器坏・高坏（1）・甕、須恵器坏・蓋・鉢・甕などの破片が出土した。このうち土師器坏には体下部に段のある体部破片が１点ある。

【ＳＫ８土壙】（平面図・断面図：第116図）

〔位置〕調査区南東部、ＳＢ６掘立柱建物跡の南西約3.0m、丘陵尾根の標高30.8m付近に位置する。

〔重複〕主要遺構との重複はない。



番号	種類	分類	遺構	特　　徴	写真	収納
1	土師器高坏		SK7	底部ほぼ完形～脚部破片。脚部の裾が開く。非ロクロ調整。脚部に刺突による縦長レンズ状の透かし３箇所。外面：摩滅。内面：底部ヘラミガキ→黒色処理。脚部内面手持ちヘラケズリ→ヨコナデ、摩滅。焼成不良。	34-11	023
2	土師器高坏		SK5	底部～脚部2/3破片。脚部の裾が開く。脚部径7.6cm。脚部高3.3cm。非ロクロ調整。脚部に刺突による縦長レンズ状の透かし２箇所。外面：ナデ、摩滅。内面：底部ヘラミガキ→黒色処理。脚部内面手持ちヘラケズリ→ヨコナデ、摩滅。焼成不良。	34-12	023
3	須恵器蓋	A1c	SK4	体部～口縁1/4破片。つまみ欠損。口径21.2cm。焼成堅緻。	34-13	023
4	須恵器高台坏	B2	SK5	口縁わずか～底部・高台部1/4破片。口径17.8cm。高台径10.8cm。高台高1.2cm。器高7.8cm。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→付高台。焼成堅緻。	35-23	023
5	須恵器坏		SK3	口縁～体部破片。ロクロ調整。外面：体部に墨書「富」（90度右横向き）。焼成不良。		023
6	刀子		SB10周辺	身部～茎部破片。刃先・茎尻欠損。平造り角棟。棟関・刃関。茎胴部は中細となる。茎元に　装着。現存長4.4cm。刃元幅0.9cm。棟厚3mm。茎元幅6mm、厚3.5mm。　は幅4mm、厚1mmの鉄薄板を鍛接し、外径10×8mm、内径8×5.5mm。		031
7	刀子？		SK5	刀子の茎部破片か。平造り角棟。現存長1.2cm、幅7mm、厚2mm。		031
8	鉄釘		SK13	頭部欠損。現存長6.3cm、断面4mm方形。		031
9	鉄釘		SK18	頭部～足破片。現存長3.7cm。頭部8mm方形。釘足断面4mm方形。釘足に木質付着。木質の木目は釘足と直交する。		031
10	ガラス小玉		SK4	アルカリガラス。透明で深い青緑色。直径4.5mm。厚さ2.6mm。直径／厚み比1.7。孔径1mm。古墳時代のものと推定。	36-15	031

第117図　ＳＫ３～５・７・13・18土壙出土遺物

〔特徴〕平面形は長径5.0m、短径3.6mの不整円形で、北東部が段掘りされている。深さ36cmで、人為的に埋められている。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器甕などの破片が少数出土した。

【ＳＫ12土壙】（平面図：第33・39図、断面図：第34図、出土遺物：第118・119図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根上東寄り、標高36m付近に位置する。

〔重複〕ＳＩ４０Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡、ＳＸ１遺物包含層と重複し、これらよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径3.6m、短径1.5mの不整円形で、深さ40cmある。堆積土は１層で、自然堆積した暗褐色土である。

〔出土遺物〕出土遺物は比較的多く、須恵系土器坏（１～４）・高台坏（５）、土師器坏（７～15・19）・高台坏（17～19）・耳皿（20・21）・高坏（22）・甕、製塩土器（23・24）、須恵器坏（25）・高台坏・蓋・甕、丸瓦の破片、須恵系土器土器高台坏高台部破片転用の円盤状土製品（６）などが出土した。このうち須恵系土器には胎土に砂粒を多く含むものとあまり含まないか細かい砂粒を含むものとがあり、前者が多い。また、内面はコテナデされていない。土師器は大多数がロクロ調整で（７～21）、非ロクロ調整のもの（22～24）は少ない。土師器坏はいずれもロクロ調整で、そのうち底部が回転糸切り無調整のもの（７・10～14）が主体を占め、他には底部を回転糸切り後に部分的に底部を手持ちヘラケズリしたもの（８・15）、底部を回転糸切り後に体下部～底部外周を手持ちヘラケズリしたもの（９）がある。土師器高台坏はいずれもロクロ調整で、内面をヘラミガキした後に内面を黒色処理した一般的なもの（16・17）の他、両面をヘラミガキした後に両面を黒色処理したもの（18・19）がある。土師器高坏（22）は非ロクロ調整で、脚部に透かしが３単位施されている。製塩土器（23・24）は非ロクロ調整のもので、口縁部が内傾気味に外傾し、器厚が厚く、粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。須恵器坏には底部が回転糸切り無調整のもの（25）がある。

【ＳＫ13土壙】（平面図：第114図、出土遺物：第117図）

〔位置〕調査区北東部、丘陵尾根に対して東に入る小さな沢に面した標高34.5m付近に位置する。

〔重複〕ＳＸ１遺物包含層、ＳＸ５平場と重複し、これらよりも古い。

〔特徴〕平面形は径90cmの不整円形で、深さ12cmある。

〔出土遺物〕土師器甕、鉄釘（８）などの破片が少数出土した。

【ＳＫ18土壙】（平面図：第114図、出土遺物：第117図、図版19－６）

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上北寄り、ＳＢ13掘立柱建物跡に近い標高30m付近に位置する。

〔重複〕ＳＫ19土壙と重複し、これよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径1.9m、短径1.3mの楕円形で、深さ20cmある。人為的に埋められている。

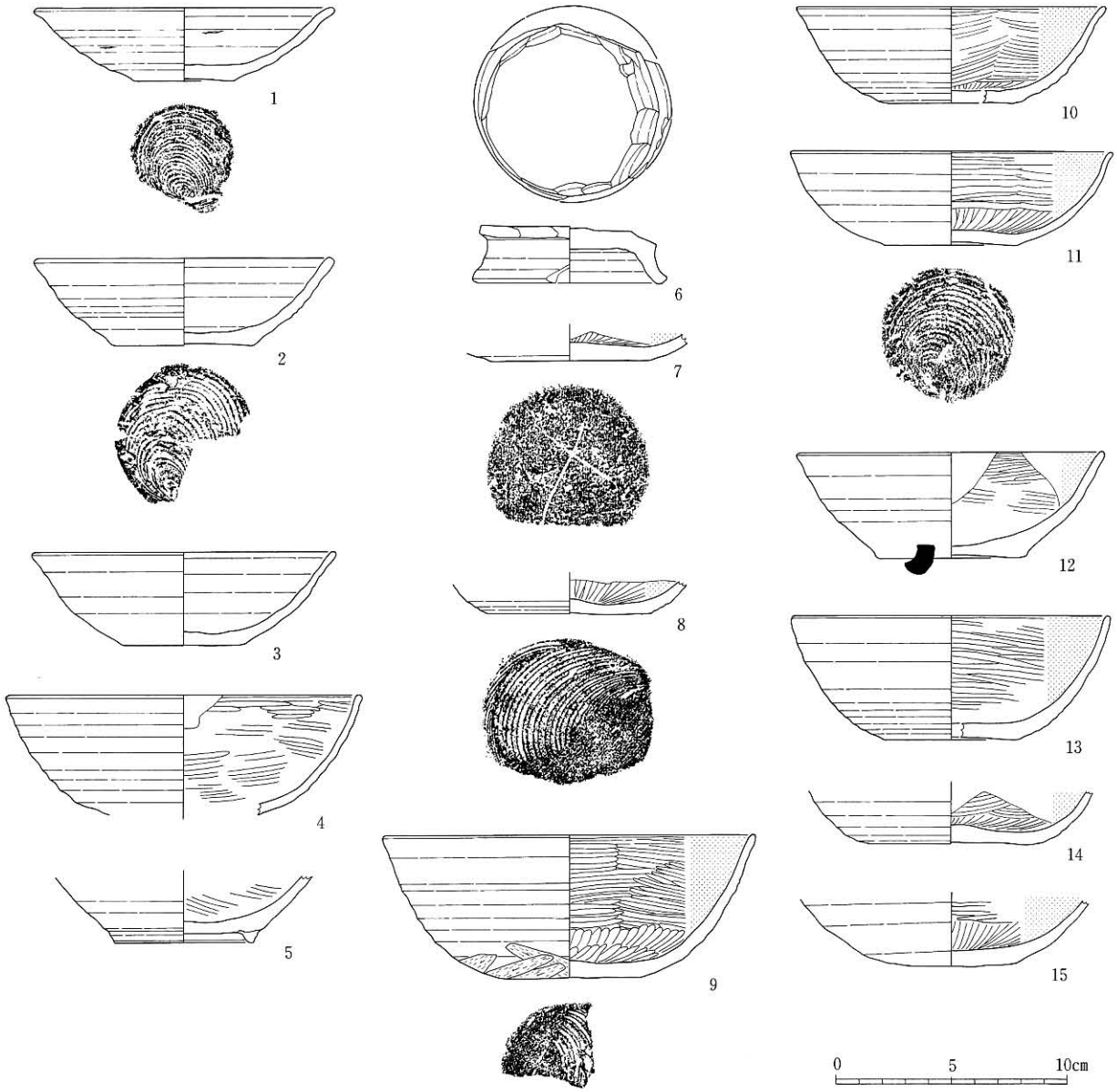
〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕、縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。

【ＳＫ19土壙】（平面図・断面図：第116図、出土遺物：第120図、図版19－５・６）

〔位置〕調査区南東部、丘陵尾根上北寄り、ＳＢ13掘立柱建物跡に近い標高30m付近に位置する。

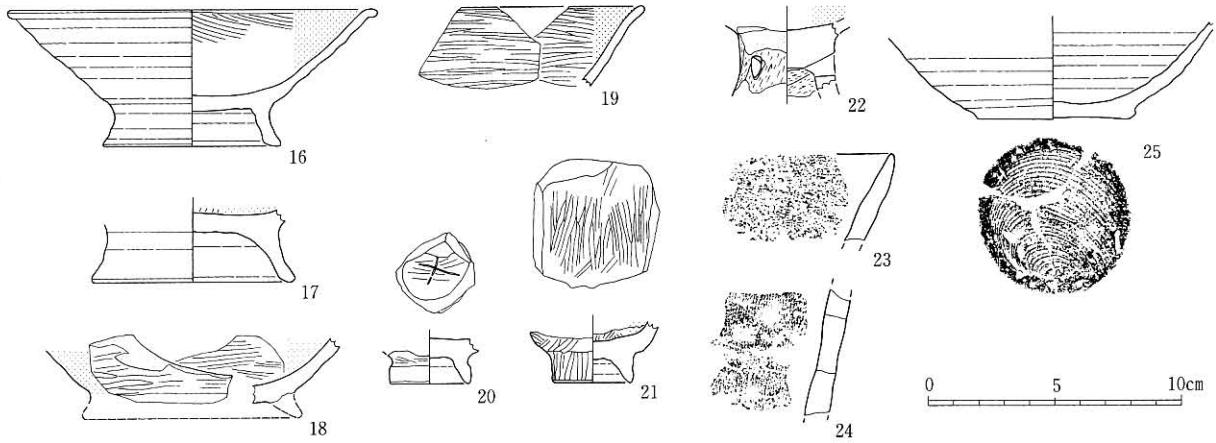
〔重複〕ＳＫ19土壙と重複し、これよりも新しい。

〔特徴〕平面形は長径3.0m、短径2.7mの不整円形で、深さ40cmある。人為的に埋められている。



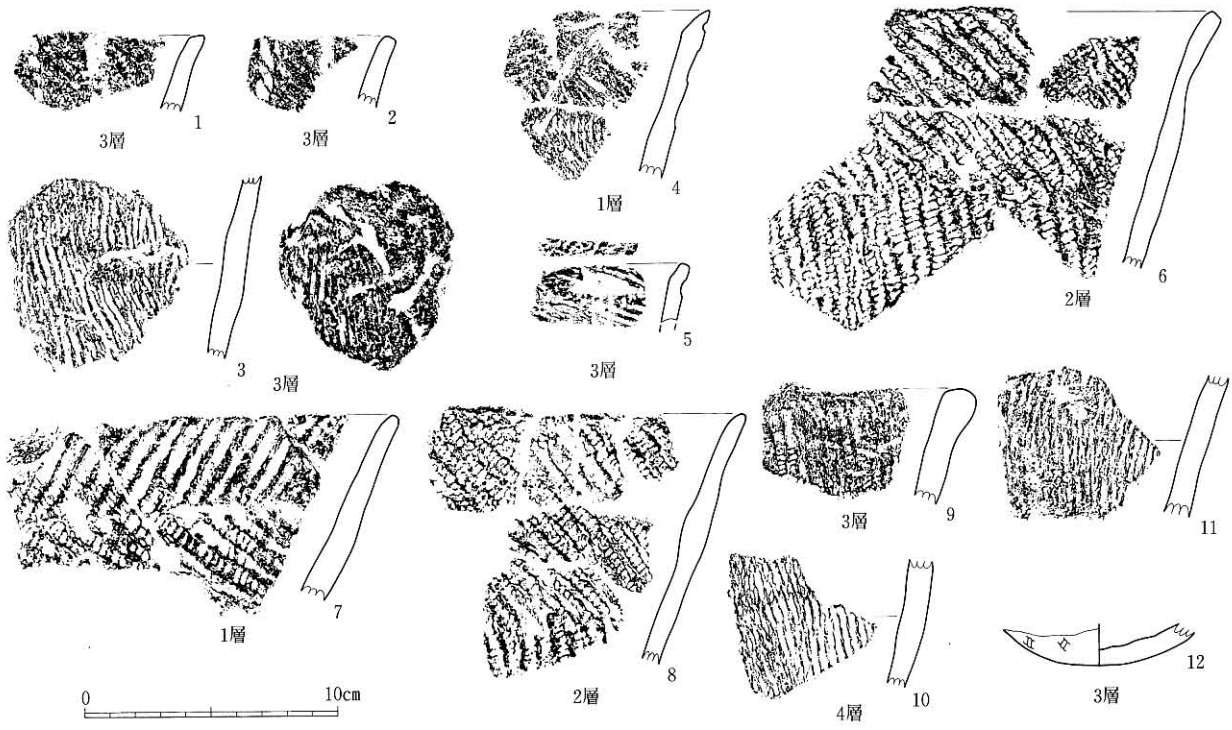
番号	種類	分類	口径	底径	器高	残存	特徴	写真	収納
1	須恵系土器坏		13.0	4.3	3.2	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。橙色。胎土に砂粒を含む。焼成不良。		024
2	須恵系土器坏		13.0	6.0	3.8	1/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。にぶい黄橙色。胎土に細かい砂粒を多く含む。焼成良好。		024
3	須恵系土器坏		13.2	5.3	4.1	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。明橙色。胎土に細かい砂粒を多く含む。焼成不良。		024
4	土師器高台坏?	ⅡB?	15.4			1/4	ロクロ調整。外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ→粗雑な粗いヘラミガキ。黒色処理しない。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		024
5	土師器高台坏	ⅡB					体部～底部・高台部1/3破片。高台径6.0cm。高台高5mm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→沈線を一条巡らせてから付高台。内面：ヘラミガキし、黒色処理しない。焼成不良。		024
6	円盤状土製品						須恵系土器高台坏の口縁～体下部を高台に沿って円形に打ち欠き、転用。直径8.5cm。高さ2.5cm。上面図左側の打ち欠き面摩耗。ロクロ調整。底部回転糸切り→付高台。にぶい橙色。胎土に細かい砂粒を含む。焼成良好。	34-14	024
7	土師器坏	ⅡB		7.0		破片	体下部～底部3/4破片。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整→底部に焼成前刻書「×」。内面：ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		024
8	土師器坏	ⅡA		7.2		破片	体下部～底部3/4破片。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→底部部分的手持ちヘラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に長石粒を含む。焼成良好。		024
9	土師器坏	ⅡA	16.2	6.0	6.2	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→体下部～底部外周手持ちヘラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かい砂粒含む。焼成不良。	34-15	024
10	土師器坏	ⅡB	13.4	5.4	4.2	1/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		024
11	土師器坏	ⅡB	14.0	5.8	4.1	3/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に微細なガラス粒を多く含む。焼成良好。	34-16	024
12	土師器坏	ⅡB	13.4	6.5	4.6	1/3	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。体下部～底部に墨痕。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。胎土に海綿骨針を少し含む。焼成不良。		024
13	土師器坏	ⅡB	13.8	5.8	5.4	1/4	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整→摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。胎土に砂粒を多く含む。焼成不良。		024
14	土師器坏	ⅡB		7.0		破片	体下部～底部4/5破片。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に海綿骨針を含む。焼成不良。		024
15	土師器坏	ⅡA		5.6		破片	体下部～底部1/3破片。外面：底部回転糸切り→底部部分的手持ちヘラケズリ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。胎土に砂粒を含む。焼成不良。		024

第118図　ＳＫ12土壙出土遺物(1)



番号	種類	分類	残存	特	徴	写真	収納
16	土師器高台坏	ⅡA	1/2	口径14.6cm。高台径7.0cm。高台高1.7cm。器高5.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		34-18	024
17	土師器高台坏	Ⅱ	破片	底部～高台部完形破片。高台径8.0cm。高台高2.0cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→付高台。内面：ヘラミガキ→底部黒色処理。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		34-20	024
18	土師器高台坏	Ⅱ	破片	体下部破片。口縁・高台欠損。ロクロ調整。両面ヘラミガキ→両面黒色処理。胎土微細。焼成不良。			024
19	土師器高台坏?	Ⅱ	破片	口縁～体部破片。ロクロ調整。両面ヘラミガキ→両面黒色処理。胎土微細。焼成不良。			024
20	土師器耳皿	ⅡA	破片	体部～底部完形・高台部1/2破片。高台径3.2cm。高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→付高台→ヘラミガキ→黒色処理。内面：坏部はヘラミガキ→黒色処理。高台部内面はロクロナデのまま。胎土に細かい砂粒を少し含む。焼成不良。		34-21	024
21	土師器耳皿	ⅡA	破片	底部・高台部2/3破片。高台径3.2cm。高台高1.0cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→付高台→ヘラミガキ→黒色処理。内面：坏部はヘラミガキ→黒色処理→底部に焼成前刻書「×」。高台部内面はロクロナデのまま。胎土に細かい砂粒を少し含む。焼成不良。		34-19	024
22	土師器高坏		破片	底部完形～足部破片。口縁～体下部、脚部裾欠損。非ロクロ調整。外面：体下部～脚部ヘラケズリ→脚部中位に縦長突レンズ状の透かし3単位。内面：底部ヘラミガキ→黒色処理。脚部ヘラケズリ。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		34-22	024
23	製塩土器		破片	口縁部破片。外面：指オサエ。内面：ナデ。器厚7～8mm。胎土に砂粒・ガラス粒・長石粒を多く含む。焼成やや良い。		35-2	026
24	製塩土器		破片	体部破片。外面：粘土紐積み上げ痕→指オサエ。内面：粘土紐積み上げ痕→ナデ。器厚7～10mm。胎土に砂粒・ガラス粒・長石粒を多く含む。焼成やや良い。		35-3	026
25	須恵器坏	D1	破片	体部～底部完形破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。胎土に細かい砂粒を含む。焼成不良。		35-1	024

第119図　ＳＫ12土壙出土遺物(2)



第120図　ＳＫ19土壙出土遺物

〔出土遺物〕縄文土器の口縁部・体部・底部破片が少数出土している。いずれも、胎土に繊維を含む深鉢形土器である。

1・2は同一個体で、斜行縄文（ＬＲ）に縦位の2段撚りの撚糸圧痕文が施され、内面にナデ調整されている口縁部破片である。3は外面に撚糸文（単軸絡条体L)、内面に貝殻条痕が施される体部破片である。これらの特徴をもつ土器は、吉田浜貝塚上層出土土器群（後藤，1968)、田柄貝塚貝層下土層出土土器群（相原，1986）に類例が認められ、縄文時代早期末に位置付けられる。

4は撚糸文に絡条体圧痕と折板状工具による山形沈線文が、5は口縁部と口唇部に絡条体圧痕が施される。いずれも内面にナデ調整が施される口縁部破片である。これらの特徴をもつ土器は上川名貝塚上層出土土器群（加藤，1951)、里浜貝塚梨木東地点土層出土土器群（東北歴史資料館，1994）に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

6～9は口縁部破片で、6は非結束羽状縄文、7・8は同一個体の斜行縄文・0段多条（ＲＬ)、9は斜行縄文（ＲＬ）である。10•11は撚糸文（単軸絡条体Ｒ）の体部破片、12は単節縄文（ＲＬ）が施される丸底の底部破片である。6～12はいずれも内面がナデ調整されている。これらの特徴をもつ土器は縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、この時期に位置付けられる。

7．遺物包含層

2箇所の遺物包含層（ＳＸ1遺物包含層、ＳＸ2遺物包含層）を検出した。

【ＳＸ1遺物包含層】（平面図：第3図、断面図：第121図、出土遺物：第122図、図版20－1・3）

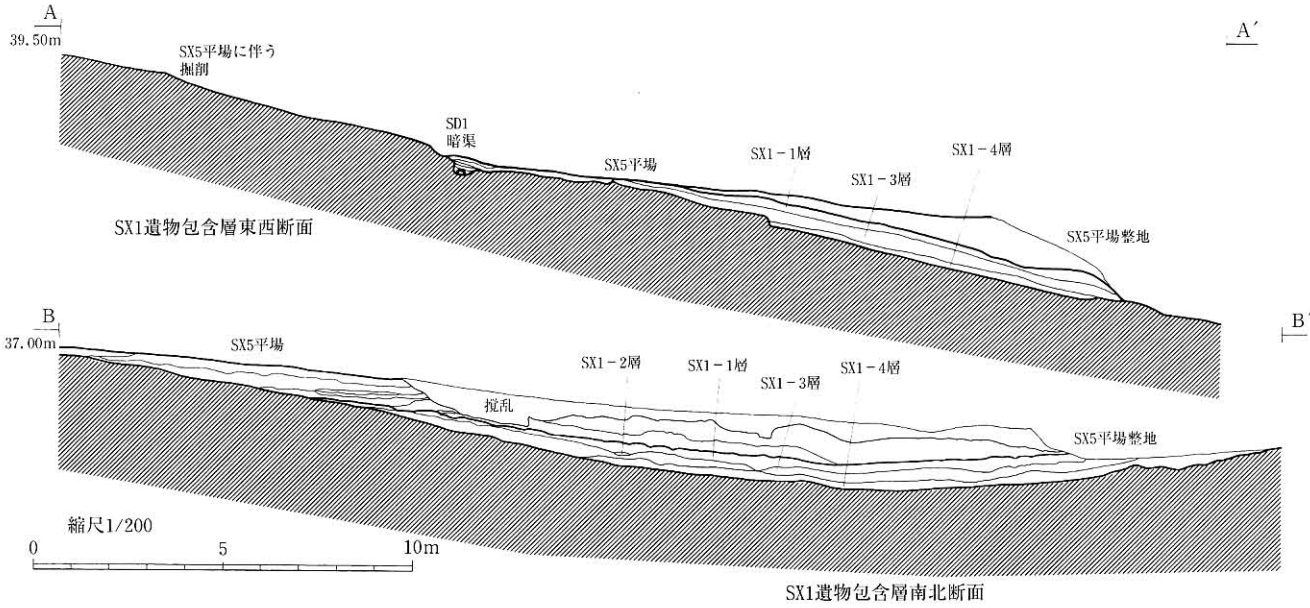
〔位置〕調査区北半部、丘陵尾根上の北東側に向かって傾斜する沢頭を中心に、標高34.0～36.5m付近に分布する。

〔重複〕ＳＩ9・19・40・41・43竪穴住居跡、SE1・3井戸跡、SX6炉跡、SX7焼成遺構、SK12・13土壙、ＳＸ5平場と重複する。ＳＩ9・19・40・41・43竪穴住居跡、ＳＥ3井戸跡、ＳＸ6炉跡、ＳＸ7焼成遺構、ＳＫ12・13土壙より新しく、ＳＥ1井戸跡、ＳＸ5平場より古い。

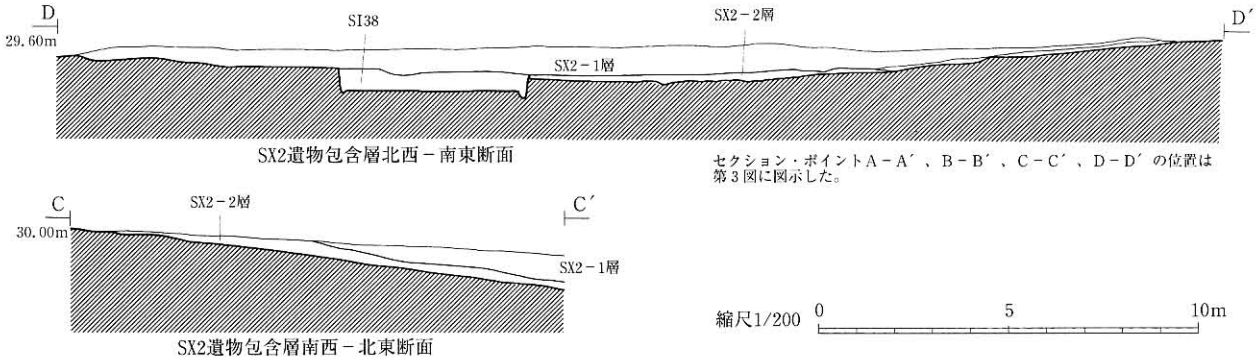
〔規模〕南北が約32m、東西が12m以上で、厚さは最大80cmある。

〔層位〕4層に分けられ、いずれも自然堆積層である。このうち第1層はＳＸ1遺物包含層第1層、第2層はＳＩ40Ｄ竪穴住居跡第2層、第4層はＳＩ40Ｄ竪穴住居跡第3層に相当する。したがって、ＳＸ1遺物包含層は、ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡の廃絶以降にＳＩ40Ｄ竪穴住居跡の窪みを含めた周辺に自然堆積した遺物包含層である。

〔出土遺物〕第4層からロクロ調整の土師器坏（2・4・5)・高台坏（6・7・9)・甕、製塩土器（11)、手捏ね土器（10)、須恵器坏（12•13)•甕などの破片が少数出土した。第3層から刀子（15）の破片1点の他、ロクロ調整の土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕などの破片が少数出土した。第2層からロクロ調整の土師器坏（3)・高台坏（8)・甕、須恵器坏・甕、土製紡錘車（14）の破片が少数出土した。第1層からロクロ調整の土師器坏（1)・高台坏・甕、須恵器坏・甕の破片が少数出土した。このうち土師器坏（1～5)、須恵器坏（12•13）は、いずれも底部が回転糸切り無調整のものである。

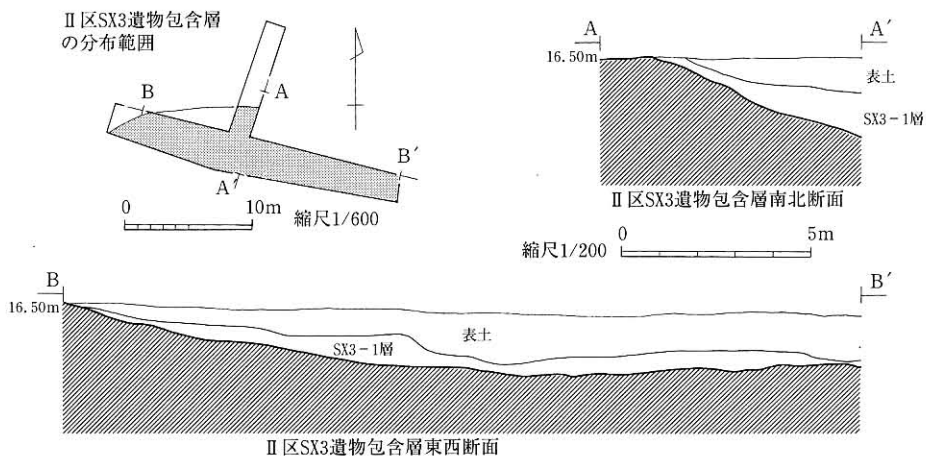


遺　構	層　位	特　　徴
SXI 遺物包含層	第１層	暗褐色(10YR3/3)土。径5mmの地山粒、炭化物を少し含む。古代の土器片を多く含む。自然堆積土。
	第２層	にぶい黄褐色(10YR5/3)土。10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰。低所にレンズ状に部分的に自然堆積。
	第３層	褐色(10YR4/4)土。径5mmの地山粒・炭化物と古代の土器片を多く含む。自然堆積土。
	第４層	暗褐色(10YR3/4)土。径5mmの地山粒・炭化物を多く含む。古代の土器片を少し含む。自然堆積土。
SX5平場	整地層	明黄褐色(10YR6/6)粘質土ブロックを多量に含む暗褐色(10YR3/3)土と明黄褐色(10YR6/6)土の互層。しまり強い。人為堆積土。
SD1暗渠		SE1石組井戸跡、SX4平場に伴う石組暗渠で、上部をにぶい黄褐色(10YR4/3)土で整地。人為堆積土。



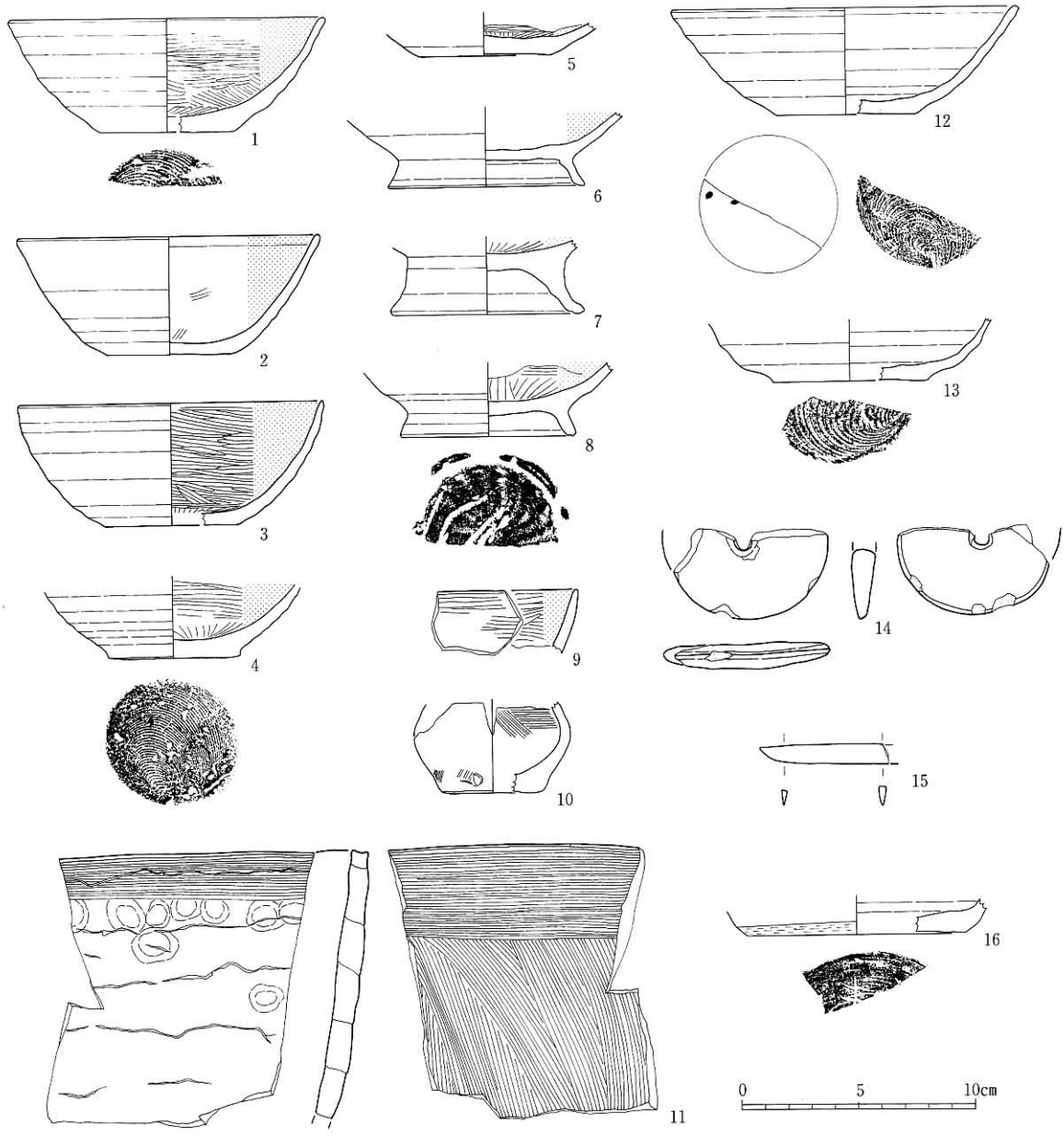
セクション・ポイントA－A′、B－B′、C－C′、D－D′の位置は第３図に図示した。

層　位	特　　徴
第１層	黒褐色(7.5YR3/2)土。径2～8mmの粘板岩風化礫片、古代の土器片を少し含む。古代以降の自然堆積土。
第２層	黒褐色(7.5YR3/2)土。径2～5mmの粘板岩風化礫片、縄文早期末～前期の縄文土器片を少し含む。縄文時代の自然堆積土。



層　位	特　　徴
第１層	黒褐色(10YR2/2)土。地山粒を多量に含む。しまり強い。古代の土器片、縄文土器片を含む。古代以降の自然堆積土。

第121図　ＳＸ１・２・３遺物包含層断面図（１/200）



番号	種類	分類	包含層	層位	特徴	写真	収納
1	土師器坏	ⅡB	SX1	第1層	口径13.6cm。底径5.8cm。器高4.9cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
2	土師器坏	ⅡB	SX1	第4層	口径13.0cm。底径5.4cm。器高5.1cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理→摩滅。	35-4	025
3	土師器坏	ⅡB	SX1	第2層	口径13.1cm。底径5.8cm。器高4.3cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
4	土師器坏	ⅡB	SX1	第4層	底径5.6cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
5	土師器坏	ⅡB	SX1	第4層	底径5.7cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
6	土師器高台坏	Ⅱ	SX1	第4層	高台径8.4cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台。内面：ヘラミガキ（摩滅）→黒色処理。		025
7	土師器高台坏	Ⅱ	SX1	第4層	高台径8.4cm。高台高1.2cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		025
8	土師器高台坏	Ⅱ	SX1	第2層	高台径7.9cm。高台高1.0cm。ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→付高台、菊花状オサエ。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
9	土師器高台坏?	Ⅱ	SX1	第4層	ロクロ調整。外面：ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。胎土に長石粒を含む。焼成不良。		025
10	手捏ね土器		SX1	第4層	底径4.4cm。最大径は6.7cmで、体中央部にある。非ロクロ調整。外面：ハケメ→ナデ→摩滅。内面：ナデ。塩釜式。		025
11	製塩土器		SX1	第4層	口唇部平坦、上面わずかに窪む。非ロクロ調整。外面：粘土紐積み上げ痕→指頭オサエ→口縁ヨコナデ。内面：口縁ヨコナデ、体部ヘラナデ。	35-6	026
12	須恵器坏	D1	SX1	第4層	口径14.9cm。底径6.0cm。器高4.6cm。外面：底部回転糸切り無調整、底部に墨痕。		025
13	須恵器坏	D1	SX1	第4層	底径6.6cm。外面：底部回転糸切り無調整。		025
14	土製紡錘車		SX1	第2層	土師質。約半分欠損。円盤状。軸孔内に軸と直交する横方向の擦痕がある。直径6.5cm。厚さ1.1cm。軸孔径0.8cm。全面ナデ？、摩滅。	36-13	026
15	刀子		SX1	第3層	刃先～身部破片。切先フクラややつく。平造り角棟。現存長5.6cm。刃部幅8.5mm。棟厚3mm。	37-35	031
16	須恵器坏	A3	SX3	第3層	外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ→底部に焼成前刻書□（「末」カ）。	35-12	025

第122図　ＳＸ１・３遺物包含層出土遺物

【ＳＸ２遺物包含層】（平面図：第３図、断面図：第121図断面Ｃ－Ｃ'・Ｄ－Ｄ'、遺物：第123・123図、図版20－４）

〔位置〕調査区南半部、丘陵尾根上の北東側に向かって傾斜する沢頭を中心に標高28.0m～30.0m付近に分布する。

〔重複〕ＳＢ12・13掘立柱建物跡、ＳＩ32・37～39竪穴住居跡と重複する。ＳＸ２遺物包含層第２層はこれらよりも古く、ＳＸ２遺物包含層第１層はこれらよりも新しく、その上を覆う。

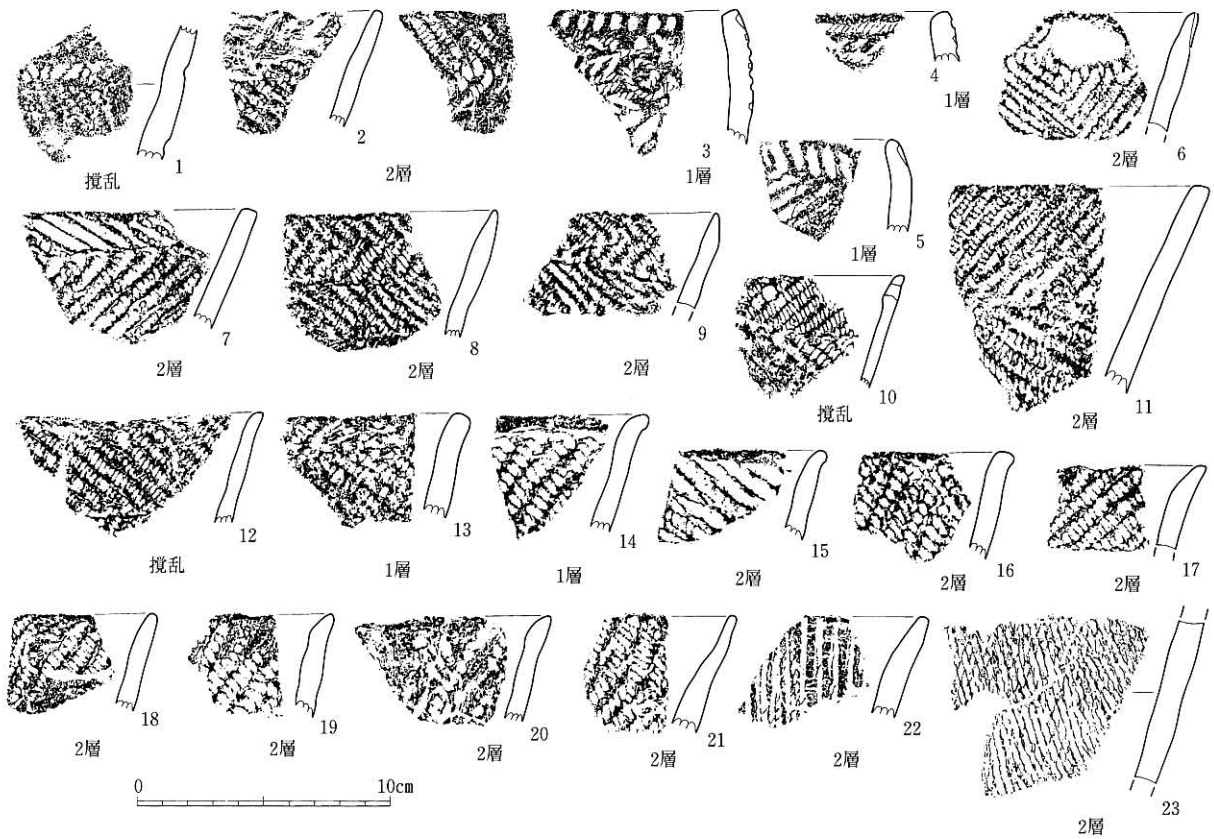
〔規模〕南北が約22m、東西が25mで、厚さは最大90cmある。

〔層位〕２層に分けられ、いずれも自然堆積層である。下位の第２層と上位の第１層とで、時期的に大きく異なる。

〔出土遺物〕縄文土器の口縁部・体部破片が少数出土した。いずれも胎土に繊維を含む深鉢形土器である。

１は斜行縄文（ＬＲ）に上下２段に撚糸圧痕文（ＬＲ）が施され、内面はナデ調整されている口縁部破片である。この特徴をもつ土器は、吉田浜貝塚上層出土土器群（後藤，1968）、田柄貝塚貝層下土層出土土器群（相原，1986）に類例が認められ、縄文早期末に位置付けられる。

２は内外面に結束第１種羽状縄文（０段多条ＲＬ・ＬＲ）が施される口縁部破片である。３・４は内湾気味の口縁部で、内面に丁寧なミガキ調整が施される。３は渦巻状の１段撚りの撚糸圧痕文（Ｒ）と縦位・斜位の沈線文、４は１段撚りの撚糸圧痕文（Ｒ）と斜位の沈線文が施される。５は内湾する口縁で、口縁端部に斜位の沈線文、体部には斜行縄文・０段多条（ＬＲ）が施される。６



第123図　ＳＸ２遺物包含層出土遺物

は菱形状の結束第１種羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）の施される口縁部である。これらの特徴をもつ土器は上川名貝塚上層出土土器群（加藤，1951）に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

７～22は口縁部、23は体部破片である。７・13は非結束羽状縄文（０段多条ＬＲ・ＲＬ）で、12・15・17・21は斜行縄文・０段多条、14・16・18～20は斜行縄文・単節、22・23は撚糸文（単軸絡条体Ｌ）が施される。11は焼成前に補修穴が穿孔されている。

これらの特徴をもつ土器は、縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、この時期に位置付けられる。

８．その他の出土遺物

古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙、遺物包含層、溝、攪乱、表土などから、縄文時代早期末～前期初頭頃の縄文土器片やその頃と考えられる石器、弥生土器片、続縄文土器片、古墳時代前期の塩釜式期の土師器片などが少数出土した。代表的な縄文土器、弥生土器片、続縄文土器片、古墳時代前期の塩釜式期の土師器を第125図、石器を第126・127図に掲載した。また攪乱や表土などからも奈良・平安時代の遺物が少数出土した。特に注目すべき奈良・平安時代の遺物を第124図に掲載した。

【奈良・平安時代の遺物】（第124図）

表土などから出土した奈良・平安時代の遺物には、土師器坏・高台坏・耳皿（１）・高坏（２）・甕、須恵器坏・高台坏・鉢（５）・甕（３）、円面硯（６）、丸瓦（７）、土製支脚（８）などの破片、砥石（11・12）、板状鉄製品、鉄滓などがある。須恵器甕破片（３）は外面体上部に「是」と焼成前に刻書されている。丸瓦（７）は隣接する桃生城跡出土の丸瓦１類に相当する。

【縄文土器】（第125図１～14）

１～13はすべて胎土に繊維を含んでいる深鉢形土器である。

１・２は菱形状の結束第1種羽状縄文（ＬＲ・ＲＬ）で、口唇部に刺突文（１）・撚糸押圧文（２）が施され、内面にナデ調整が施される口縁部破片である。３～５は内湾気味の口縁部破片で、外面には非結束羽状縄文（０段多条）に、渦巻状の１段撚りの撚糸圧痕文（Ｒ）と縦位・斜位の沈線文が施される。内面に丁寧なミガキ調整が施される。なお、７は３と同一個体である。これらの特徴をもつ土器は、上川名貝塚上層（加藤，1951）出土土器群に類例がみられ、縄文前期初頭の上川名式に位置付けられる。

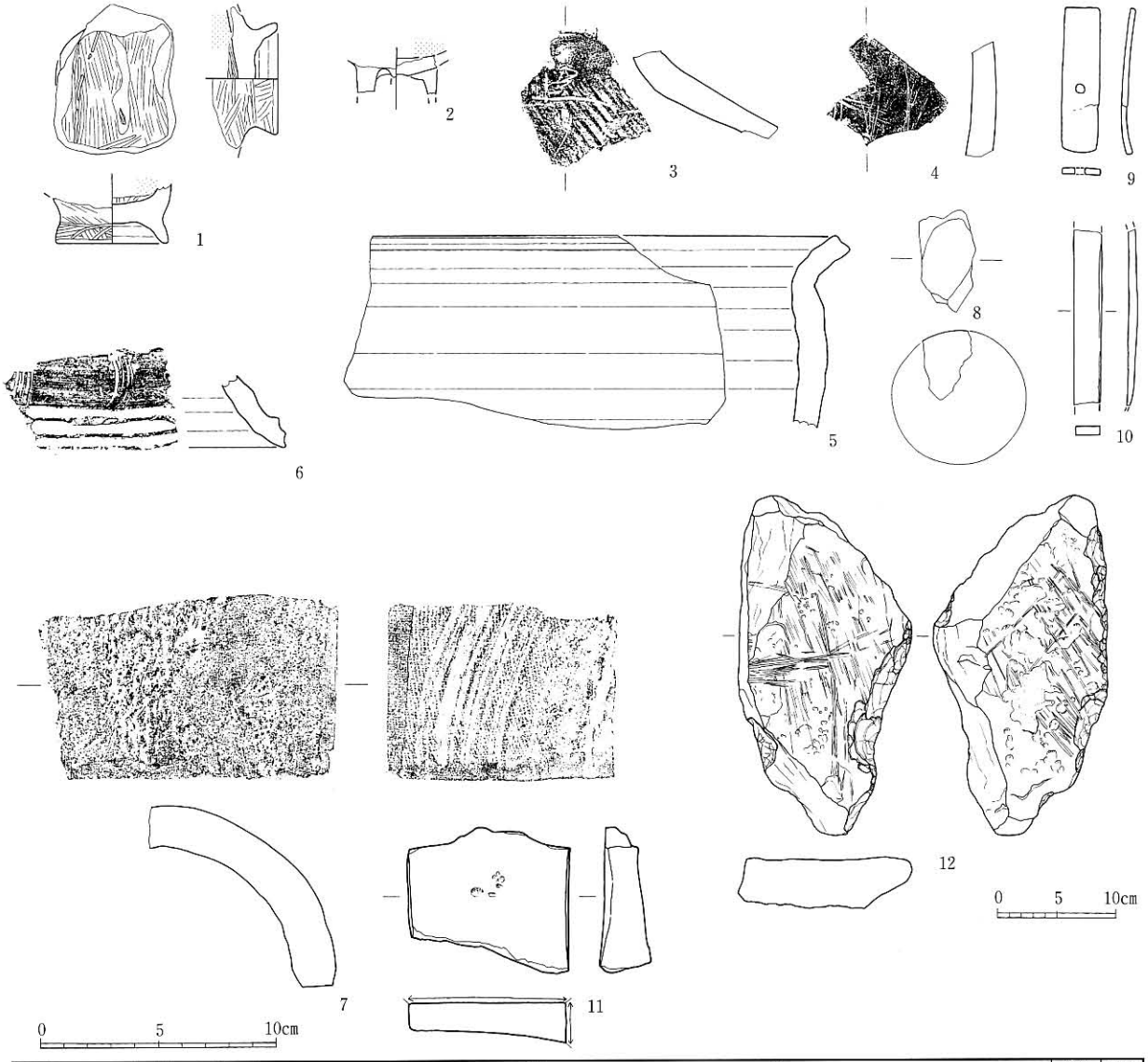
６・８・10・11は斜行縄文・０段多条が施される口縁部破片で、６は口唇部に回転縄文（ＬＲ）が施される。９・12は単節縄文が施される口縁部破片である。13は尖底の底部破片で０段多条（ＬＲ）が施されている。これらの特徴をもつ土器は、縄文早期末から前期の土器群に類例がみられ、当該期に位置付けられる。

14は２つの突起が付き、羊歯状文が施される深鉢形土器の口縁部破片で、縄文晩期前葉の大洞ＢＣ式に位置付けられる。

【弥生土器】（第125図15～24）

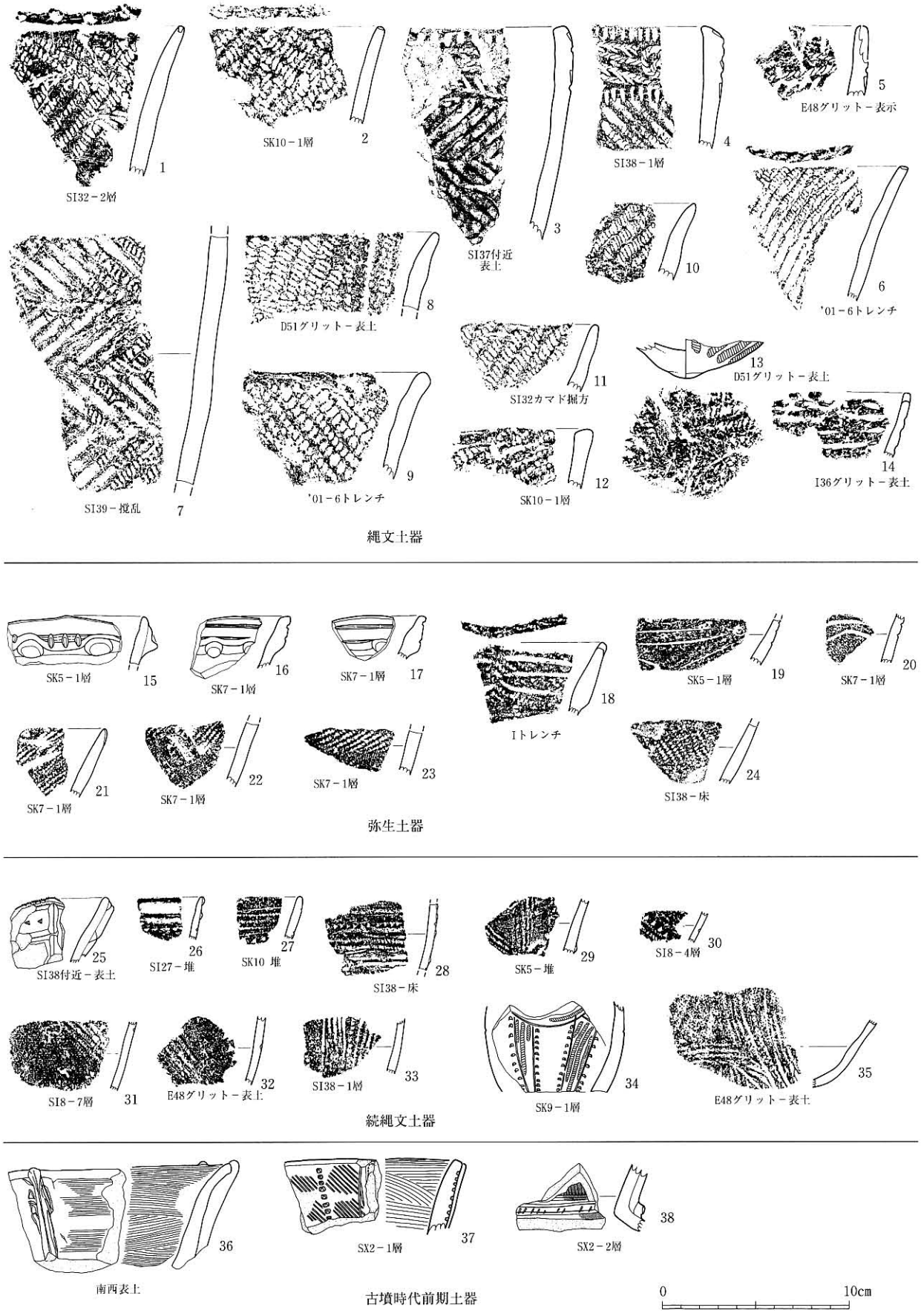
15～24は全体に鈍い黄褐色の胎土で、地文があるものは細かい縄文が施される。小破片のため器形

は不明である。15はやや内湾気味の肥厚する口縁で、棒状工具による１条の沈線文を施した後、口縁下端を指頭押圧し、沈線文上に連続刺突文を施している。16・17は同一個体でやや外反気味の肥厚する口縁である。先端の鋭い工具で２条の沈線文が施された後、口縁下端が指頭押圧される。18はやや外反気味の突起を有する肥厚する口縁で、口縁部には斜行縄文（ＲＬ）と工字状の沈線文、口唇部に



番号	種類	分類	層位	特	徴	写真	収納
1	土師器耳皿	ⅡA	SX1周辺表土	体部～底部・高台部3/5破片。口縁欠損。高台径4.8cm。高台高1.1cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→口縁～高台ヘラミガキ→黒色処理。内面：口縁～底部ヘラミガキ→黒色処理。		025
2	土師器高坏		表採	底部～脚部破片。残存悪く、全体的に摩滅し、透かしは１箇所のみ確認。非ロクロ調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		025
3	須恵器甕		SI6周辺表土	胴上部破片。外面：頸下部ロクロナデ、胴部平行叩き目→焼成前刻書「是」。内面：頸下部ロクロナデ、胴部無文当て具痕。焼成良好。	35-11	025
4	須恵器甕		表採	胴部破片。外面：浅い平行叩き目？→ナデ→焼成前不明刻画？、またはヘラ記号？。内面：無文当て具痕。		025
5	須恵器鉢	A2	SI6周辺表土	口縁～体上部破片。口縁「く」字状に外反。両面ロクロナデ。		025
6	円面硯		SI6南西表土	台脚破片。端部は嘴状にやや尖る。台脚外面：ロクロナデ、横位に平行する凸線→縦位に弧を描く４条の刻線。内面：ヘラミガキ→黒色処理。：ロクロナデ		025
7	丸瓦		北側表土	広端部・側端部の残る胴部破片。凸面：縄叩き目→ロクロナデ→側端部に沿って凸面を幅5～8mmで縦方向にヘラケズリ。凹面：糸切り痕→細かい布目→側端部に沿って凹面を幅8～10mmで縦方向にヘラケズリ→広端部に沿って凹面を幅8～10mmで横方向にヘラケズリ。暗灰色。胎土に長石粒・ガラス粒をやや多く含む。焼成ややあまい。桃生城跡分類の丸瓦１類（粘土板巻き作りによる有段丸瓦）に相当する。	36-6	027
8	土製支脚		SE1周辺表土	破片。摩滅のため調整不明。直径約5.7cm。		028
9	板状鉄製品		中央表土	平成12年度確認調査第10トレンチ北出土。板状。長さ6.1cm。幅1.6cm。厚さ2.5mm。ほぼ中央に径3mmの孔１箇所。	37-33	031
10	板状鉄製品		新溝（Ｄ６）	板状。両端欠損。現存長7.4cm。幅1.2cm。厚さ3.5cm。	37-32	031
11	砥石		SI16周辺表土	平成12年度確認調査第10トレンチ中央出土。粗粒砂岩製。板状。２面研磨。荒砥。長さ6.8cm。幅6.3cm。厚さ2.2cm。	38-10	036
12	砥石		表土	粘板岩製。板状。表裏２面研磨・擦痕。長さ28.9cm。幅14.8cm。厚さ4.4cm。		036

第124図　その他の出土遺物(1)－奈良・平安時代の遺物



第125図　その他の出土遺物(2)－縄文土器、弥生土器、続縄文土器、古墳時代前期土師器

回転縄文（ＲＬ）が施文される。19・20は先端の鋭い工具で工字状の沈線文が施される体部破片である。21～23は同一個体で斜行縄文（ＬＲ）、24も斜行縄文（ＲＬ）が施される。これらの特徴をもつ土器は、弥生後期・天王山式に類似するもので、天王山式の土器群の範疇に位置付けられる。

【続縄文土器】（第125図25～35）

25～35は全体に薄手で黒褐色の胎土である。25～33は甕形土器である。

25は外傾する口縁部で、端部に横位と縦位に垂下する隆起線文が施され、その間に細かな三角形の連続刺突文が施される。また、口唇部にも細かな刻みが施される。26はやや外反気味の口縁部で、横位の微隆起線文の下に細かな三角形の連続刺突文が施される。27はやや内湾気味の口縁部で、横位の細い沈線文にＬＲ帯縄文と連続刺突文が施される。28～33はいずれもＬＲ帯縄文が施文される体部破片で、28は２条の微隆起線文とＬＲ帯縄文の間に細かな三角形の連続刺突文、29は隆起線文と２条のＬＲ帯縄文、30～31は帯縄文と細かな三角形の連続刺突文が施される。33はいずれも縦位の沈線文・ＬＲ帯縄文・連続刺突文が施される。34は鉢形土器の体部下端から頚部にかけての体部破片で、縦位の沈線文・ＬＲ帯縄文・細かな弧状の連続刺突文による文様が施文される。35は浅鉢形土器の底部から体部にかけての体部破片で全体に摩滅している。沈線文・ＬＲ帯縄文・連続刺突文による弧状の文様が施文される。

これらの特徴をもつ土器は、①微隆起線文のほかに細い沈線文が施文され、②微隆起線文・沈線文に沿って連続刺突文が施文される点で特徴的である。後北Ｃ２・Ｄ式（佐藤，1984；相沢，1999）に位置付けられ、石巻市の小沢遺跡（石巻市教育委員会，1993）、新金沼遺跡（芳賀，1999）でも出土している。

【古墳時代前期の塩釜式期の土師器】（第125図36～38）

36は複合口縁大型壷形土器の口縁部破片である。外面にヨコナデ調整後、接合面をヘラ状工具で押さえた縦位の「棒状浮文」が貼付される。内面はヨコナデ調整される。

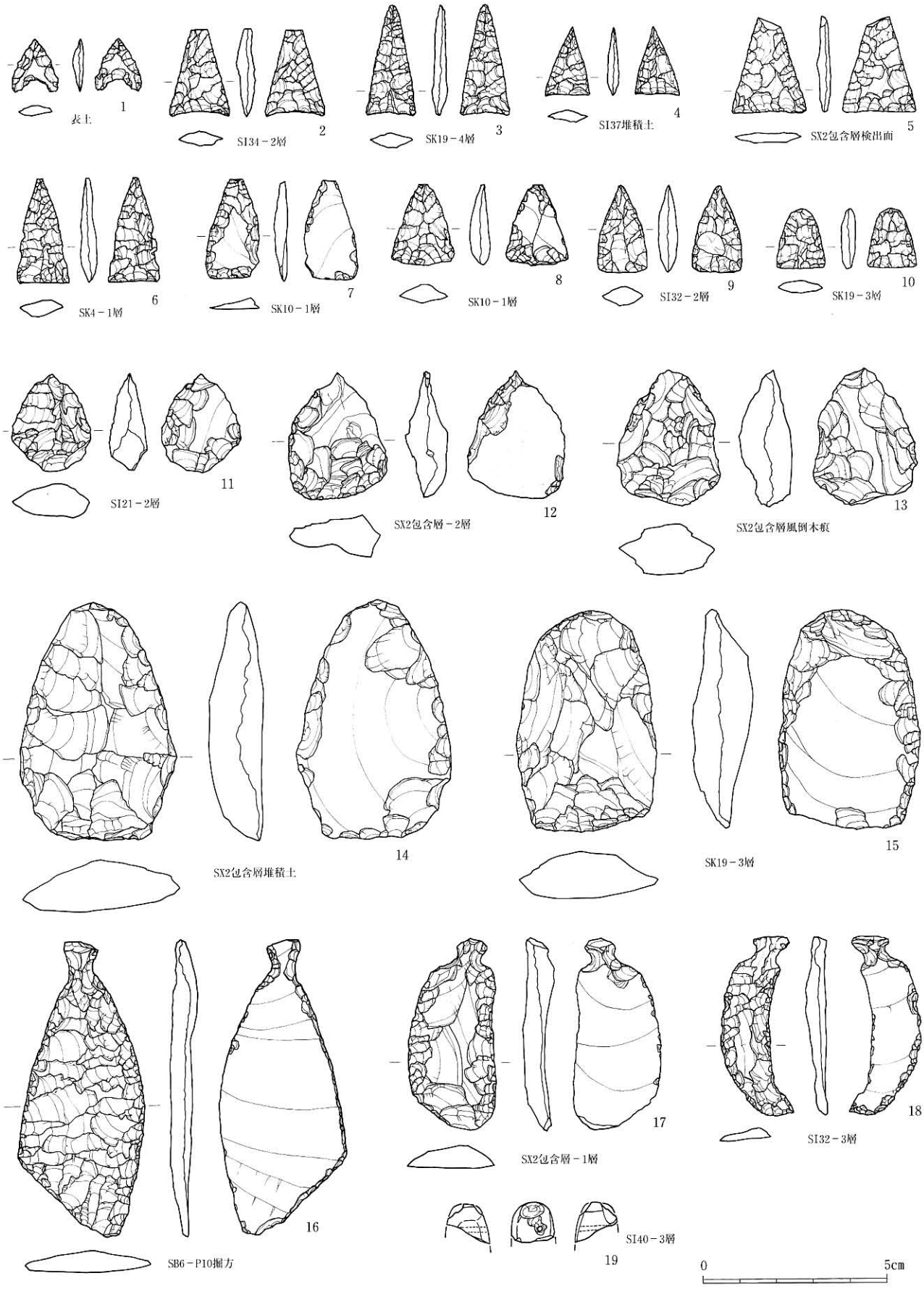
37は複合口縁壷形土器の口縁部破片である。外面に斜位のハケメ調整後、縦位の「棒状浮文」と連続刺突文が施文される。なお、「棒状浮文」は剥落している。内面はヨコナデ調整される。

38は壷形土器の頚部破片で、頚部に刻み目のある突帯が巡る。外面はミガキ調整後、朱彩されている。内面は摩滅のため、調整不明である。

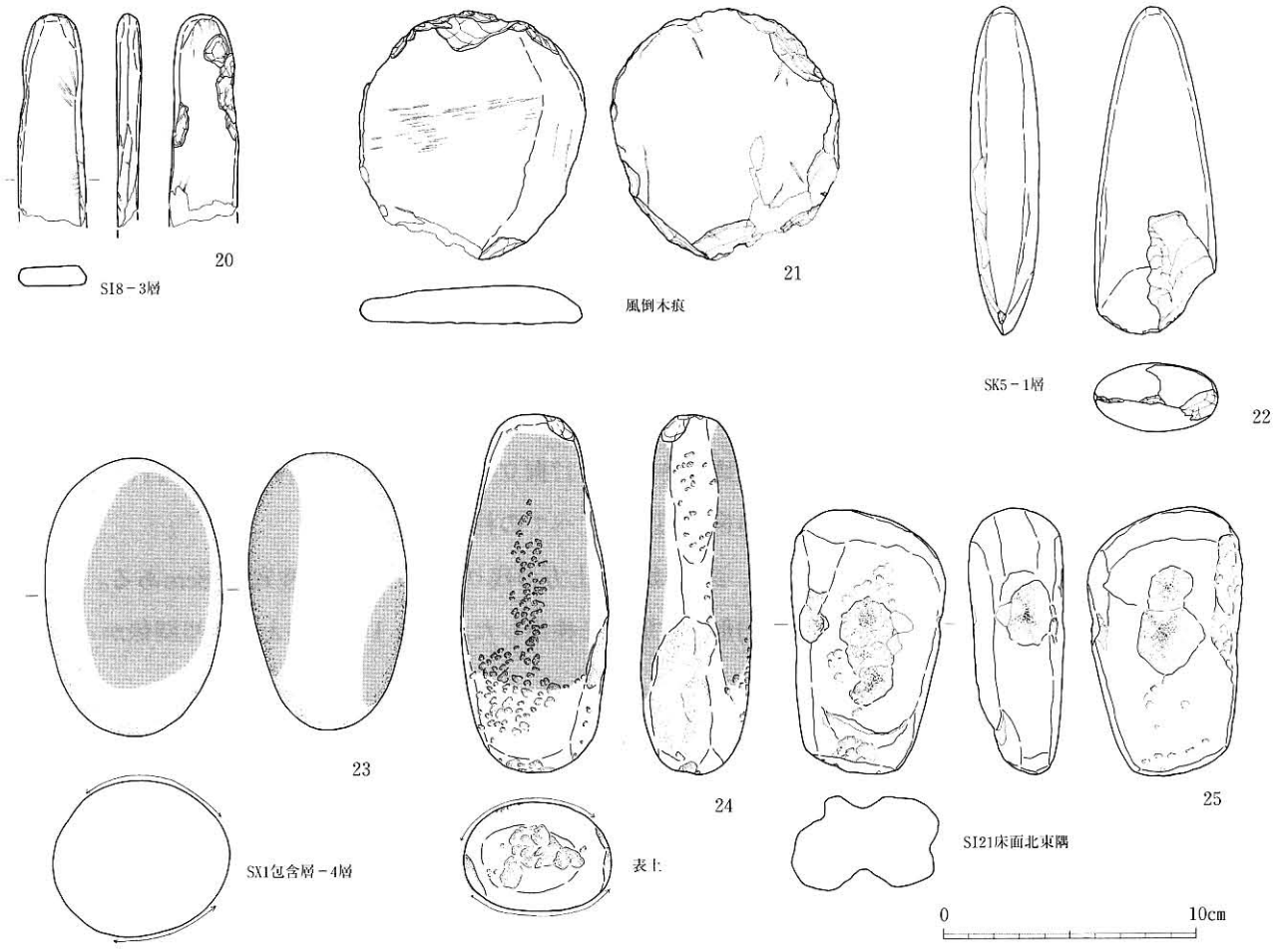
これらの特徴をもつ土器は、古墳時代前期の塩釜式に位置付けられる。

【縄文石器】（第126・127図）

縄文時代の石器には、石鏃（１～10）、尖頭器（11～13）、スクレイパー（14•15）、石匙（16～18）、不定形石器、二次加工ある剥片、剥片、チップ、石核などの剥片石器、石斧（22）、石剣（20）などの磨製石器、凹石（25）、敲石（24）、磨石（23）、円板状石製品（21）などの礫石器がある。他に時期不明の垂飾品（19）がある。このうち石鏃には凹基で両側辺の彎曲するもの（１）、わずかに凹基となる二等辺三角形状のもの（２・３）、平基で二等辺三角形状のもの（４・５・６）、わずかに凸基となる二等辺三角形状のもの（８・９）、先端が丸まる平基のもの（10）などがある。石匙はすべて縦長のものである。



第126図　その他の出土遺物(3)－縄文時代石器



第127図　その他の出土遺物(4)－縄文時代石器

第４章　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区で発見された遺構と遺物

１．Ⅱ区で発見された遺構と遺物

主要調査区であるＩ区の調査区の斜面下方に設定したⅡ区では、遺物包含層（ＳＸ３遺物包含層）の北西端部を検出した。このSX3遺物包含層はⅢ区とⅣ区までは広がらない。

【ＳＸ３遺物包含層】（平面図：第２・３図、断面図：第121図、出土遺物：第122図、図版20－２）

〔特徴〕表土の下が自然堆積した遺物包含層で、堆積土は１層である。

〔出土遺物〕非ロクロ調整の土師器甕、須恵器坏・蓋・甕、縄文時代早期末頃～前期初頭頃の縄文土器深鉢などの破片が少数出土した。遺物の多くは摩滅している。

２．Ⅲ区で発見された遺構と遺物

Ⅲ区は三陸自動車道計画路線内の民家の移転地であり、国庫補助の緊急調査費を用いて確認調査を行ったものである。Ⅲ区は丘陵斜面が大きく削平を受けた人為的な平坦面であったため、遺構は検出されなかった。表土からは古代の遺物が少数出土した。

3．Ⅳ区で発見された遺構と遺物

Ⅳ区は三陸自動車道計画路線内の民家の移転地であり、国庫補助の緊急調査費を用いて確認調査を行ったものである。Ⅳ区では掘立柱建物跡２棟、柱列跡２条、竪穴住居跡３棟、遺物包含層１箇所を検出した（第２・128図）。遺構検出の際に地権者と協議し、遺構面を土盛り保存した後に民家の移転を許可するよう指導し了承が得られたため、遺構の掘り下げは掘立柱建物跡、柱列跡について必要最小限に留め、竪穴住居跡、遺物包含層の掘り下げは行わなかった。

【ＳＢ16掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第128図、図版６－１）

〔重複〕ＳＡ１柱列跡と重複し、これよりも古い。また、ＳＢ17掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。しかし、ＳＢ17掘立柱建物跡の方向がＳＡ１柱列跡とほぼ同様であり、これらが同時に存在した可能性が高く、ＳＢ16掘立柱建物跡がＳＢ17掘立柱建物跡よりも古いと考えられる。

〔柱間数・棟方向〕桁行２間、梁行２間の南北棟で、すべての柱穴を検出した。

〔柱穴〕一辺40～60cmの方形を基調とし、深さは斜面上方の残りのよい北西隅柱穴で28cmある。

〔柱痕跡〕すべての柱穴で径16cm前後の円形の柱痕跡を検出した。ＳＡ１柱列跡との重複関係からみて、廃絶時に柱が切り取られているとみられる。

〔平面規模〕桁行総長は西側柱列で約4.0m、柱間寸法は北から2.0m・2.0mである。また、東側柱列で約4.0m、柱間寸法は北から1.9m・2.1mである。梁行総長は北妻で約3.8m、柱間寸法は西から1.9m・1.9mである。また、南妻で約3.8m、柱間寸法は西から2.0m・1.8mである。

〔方向〕西側柱列でみると北で西に約10°偏る。

〔出土遺物〕掘方から摩滅した土師器甕と縄文土器深鉢の体部破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕と縄文土器深鉢の体部破片が少数出土した。

【ＳＢ17掘立柱建物跡】（平面図・断面図：第128図、図版６－１）

〔重複〕ＳＢ16掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。前述のように、ＳＢ17掘立柱建物跡の方向がＳＡ１柱列跡とほぼ同様であり、これらが同時に存在した可能性が高いので、ＳＢ17掘立柱建物跡がＳＢ16掘立柱建物跡よりも新しいと考えられる。

〔柱間数・棟方向〕桁行３間、梁行２間の東西棟とみられ、調査区外に位置する南側柱列をのぞく柱穴６箇所を検出した。

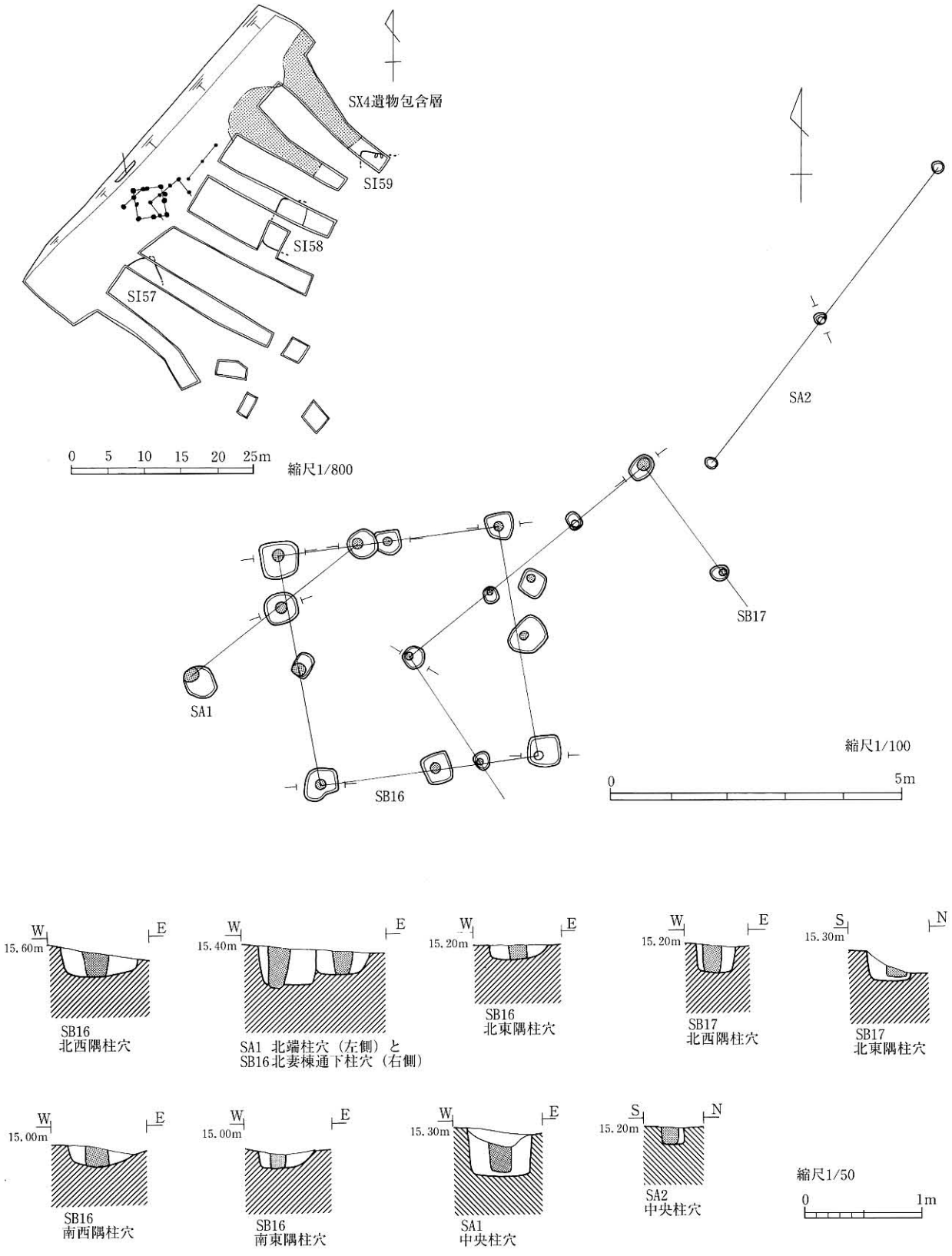
〔柱穴〕一辺30～45cmの方形を基調とし、深さは斜面上方にあたっていて残りの比較的よい北西隅柱穴で24cmある。

〔柱痕跡〕６箇所すべての柱穴で径14cm前後の円形の柱痕跡を検出した。

〔平面規模〕桁行総長は北側柱列で約5.2m、柱間寸法は東から1.5m・1.9m・1.8mである。また、東妻で柱間寸法は北から2.3mである。

〔方向〕東妻でみると北で西に約37°偏る。北側柱列でみると北で東に約52°偏り、ＳＡ１柱列跡の方向とほぼ一致する。

〔出土遺物〕掘方から摩滅した土師器甕体部破片、柱痕跡から非ロクロ調整の土師器甕体部破片、須恵器坏口縁部破片が各１点出土した。



第128図　Ⅳ区検出の主要遺構平面図（1/100）、断面図（1/50）

【ＳＡ１柱列跡】（平面図・断面図：第128図、出土遺物：第129図）

〔重複〕ＳＢ16掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。

〔柱間数・方向〕柱間２間で、柱穴３箇所を検出した。方向は北で東に約53°偏り、ＳＢ17掘立柱建物跡の方向とほぼ一致する。

〔柱穴〕一辺50～60cmの方形を基調とし、深さは中央柱穴で40cmある。

〔柱痕跡〕各柱穴で径15cm前後の円形の柱痕跡を検出した。中央柱穴では柱切取穴の下から柱痕跡を検出し、廃絶時に解体されている。

〔出土遺物〕中央柱穴の柱柱切取穴から回転糸切り無調整の須恵器坏底部破片（１）が１点出土した。

【ＳＡ２柱列跡】（平面図・断面図：第128図）

〔重複〕主要遺構との重複はないが、ＳＢ17掘立柱建物跡の北妻と約1.0m離れている。

〔柱間数・方向〕柱間２間で、柱穴３箇所を検出した。方向は北で東に約38°偏る。

〔柱穴〕径20cm前後の円形を基調とし、深さは中央柱穴で15cmある。

〔柱痕跡〕中央柱穴で径11cmの円形の柱痕跡を検出した。

〔出土遺物〕遺物は出土しなかった。

【ＳＩ57竪穴住居跡】（平面図：第128図、出土遺物：第129図）

〔重複〕主要遺構との重複はない。南半は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は北辺で４m以上、東辺で４m以上ある。

〔方向〕東辺でみると北で西に約13°偏る

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔出土遺物〕検出面から土師器坏・甕（５）などの破片が少数出土した。土師器はいずれも非ロクロ調整で、坏には体下部に段を持つ口縁～体部破片が１点ある。

【ＳＩ58竪穴住居跡】（平面図：第128図、出土遺物：第129図）

〔重複〕主要遺構との重複はない。東半は床面下まで削平されている。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は西辺で6.4m、北辺で４m以上ある。

〔方向〕西辺でみると北で東に約20°偏る

〔カマド〕カマドの位置は不明である。

〔出土遺物〕検出面からロクロ調整の土師器坏（２）・椀（４）・甕、須恵器坏（３）・甕・壷などの破片が少数出土した。このうち土師器坏（２）と須恵器坏（３）は底部が回転糸切り無調整である。また、土師器椀（４）は、ロクロ調整で、底部が回転糸切り後に付高台と両面がヘラミガキされ、内面が黒色処理されている。

【ＳＩ59竪穴住居跡】（平面図：第128図）

〔重複〕主要遺構との重複はない。

〔平面形・規模〕平面形は方形とみられ、規模は北辺で3.8m以上ある。

〔方向〕北辺の方向からみて、西辺は北で東に約13°偏るとみられる。

〔カマド〕北辺に付設されている。

〔出土遺物〕検出面から非ロクロ調整の土師器坏・甕体部破片、須恵器坏口縁部破片・甕体部破片が少数出土した。

【ＳＸ４遺物包含層】（平面図：第128図）

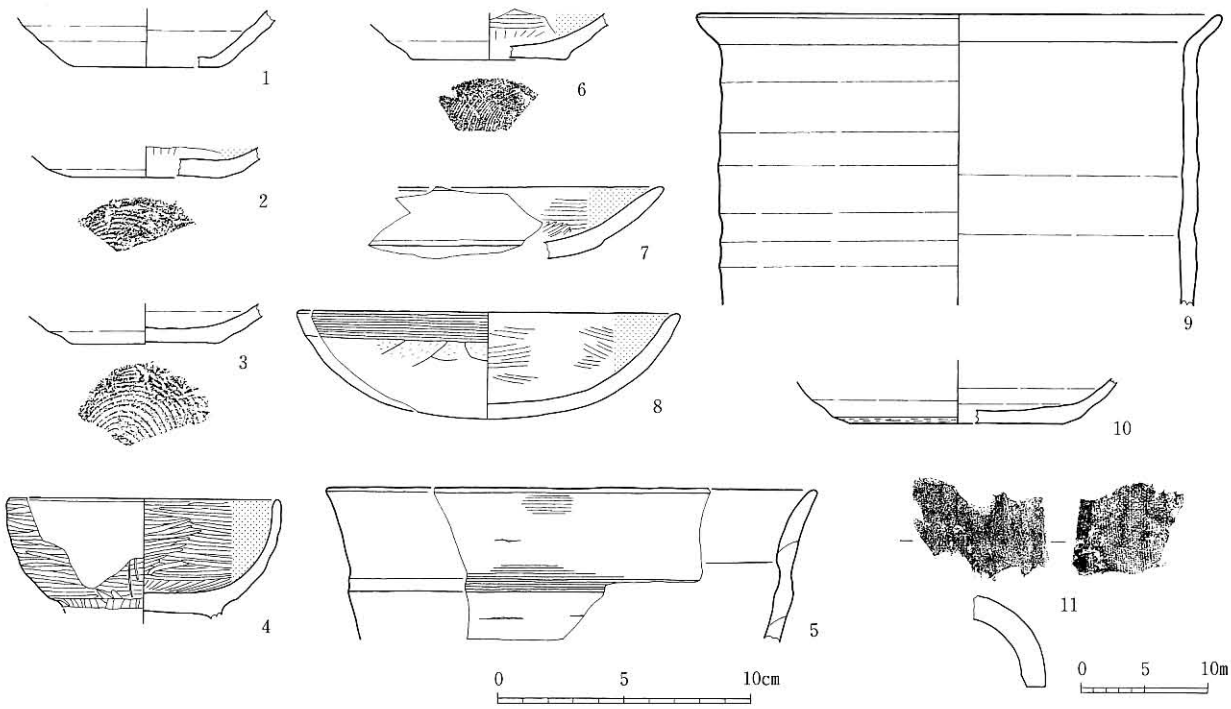
〔位置〕Ⅳ区の北部に位置する。

〔規模〕規模は南北が20m以上、東西が19m以上である。

〔出土遺物〕土師器坏（６・７・８）・甕（９）などの破片が少数出土した。土師器には非ロクロ調整のものとロクロ調整のものがあり、前者の土師器坏には体下部に段を持ち、丸底気味のもの（６）、段がない丸底のもの（７）、後者の土師器坏には底部が回転糸切り無調整のもの（６）がある。

【表土の出土遺物】（出土遺物：第129図）

表土から土師器坏・甕、須恵器坏（10）・甕の破片が少数と丸瓦破片１点（11）が出土した。このうち土師器にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものとがある。非ロクロ調整の土師器坏には体下部に段を持つものと丸底気味のものとがある。須恵器坏には底部～体下部が回転ヘラケズリされたもの（10）がある。丸瓦破片（11）は桃生城跡出土の丸瓦２類に相当する行基丸瓦である。



番号	種類	分類	遺構	特徴	写真	収納
1	須恵器坏	D1	SA1柱列中央柱穴	体下部～底部1/6破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。		025
2	土師器坏	ⅡB	SI58住居跡検出面	体部～底部1/5破片。底径6.0cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		025
3	須恵器坏	D1	SI58住居跡検出面	体下部～底部1/4破片。底径5.8cm。外面：底部回転糸切り無調整。		025
4	土師器高台坏	ⅡC	SI58住居跡検出面	口縁1/3～底部完形・高台部欠損破片。口径10.8cm。ロクロ調整。外面：底部回転糸切り→付高台→ヘラミガキ（一部にロクロナデを残す）→体部にヘラ記号「‖」。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。	35-5	025
5	土師器甕	ⅠA	SI57住居跡検出面	口縁1/5～胴上部破片。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部摩滅。内面：口縁ヨコナデ？、胴部摩滅。		025
6	土師器坏	ⅡB	SX4遺物包含層	体部～底部1/4破片。底径6.2cm。外面：底部回転糸切り無調整。内面：放射状ヘラミガキ→黒色処理。		025
7	土師器坏	ⅠB1	SX4遺物包含層	口縁1/6～底部破片。丸底。口径20.8cm。器高4.3cm。非ロクロ調整。外面：口縁ヨコナデ、体部～底部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		025
8	土師器坏	ⅠA2	SX4遺物包含層	口縁～体下部破片。体下部に段。丸底気味か。非ロクロ調整。外面：摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。		025
9	土師器甕	Ⅱ	SX4遺物包含層	口縁1/6～胴部破片。口径20.8cm。口縁短く外反。ロクロ調整。		025
10	須恵器坏	A3	表土	体下部～底部1/4破片。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ、火襷痕。焼成不良。		025
11	丸瓦		表土	破片。右側端部残存。凸面：縦方向ヘラケズリ。凹面：布目→側端縦方向ヘラケズリ。灰色。胎土に砂粒を含むが、緻密。焼成堅緻。桃生城跡分類の丸瓦２類（行基丸瓦）に相当。	36-4	027

第129図　Ⅳ区出土遺物

第５章　考察

１．古代の土器類の分類

本遺跡から出土した古代の土器類には、土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器、灰釉陶器がある。このうち主体を占めるのは土師器、須恵器で、他は少量である。土師器には古墳時代前期の塩釜式が少量含まれるものの、土師器の多くと須恵器は奈良・平安時代のものである。

これら奈良・平安時代の土師器、須恵器、及びこれらとともに少量出土した須恵系土器について分類を行い、製塩土器、灰釉陶器については記載のみ行う。なお、古墳時代前期の塩釜式の土師器については、量が少ないので、以下の分類からは除外する。

（１）土師器（第130・131図）

土師器には製作にロクロを使用しないもの（以下、「非ロクロ調整」とする）とロクロを使用するもの（以下、「ロクロ調整」とする）とがある。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

非ロクロ調整の土師器Ⅰ類には、坏・椀・高坏・鉢・甕・壷がある。ロクロ調整の土師器Ⅱ類には、坏・椀・高台坏・耳皿・壷・鉢・甕・甑・蓋がある。これらの中には、器形、調整手法の違いなどによってさらに細分されるものがあり、以下のように分類した。

【坏】非ロクロ調整の坏Ⅰ類とロクロ調整の坏Ⅱ類とがある。

《非ロクロ調整の坏Ⅰ類》

底部の形状によって以下のように分類される。

〔ＩＡ類〕丸底のもの。外面の体下部の段や横方向の沈線の有無によって以下のように細分される。

ＩＡ１類：外面体下部に段や沈線が巡るもの。大きさは口径14.6cm、器高4.3cm、器高／口径比0.29である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は口縁部がヨコナデされ、体部から底部は摩滅して調整不明である。

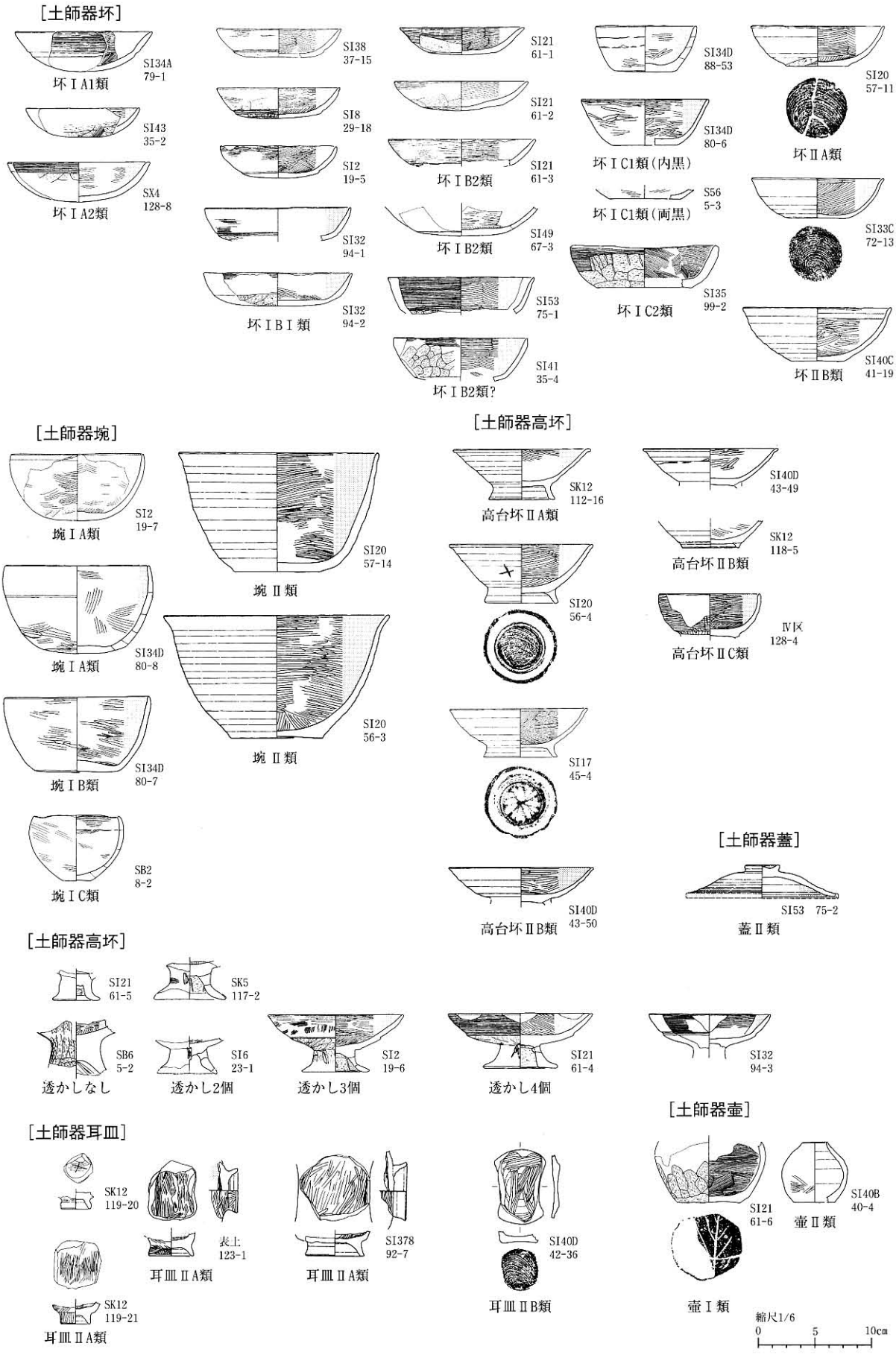
ＩＡ２類：外面体下部に段や沈線のないもの。大きさは口径12～15cm、器高３～５cm、器高／口径比0.25～0.28である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は口縁部がヨコナデされ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

〔ＩＢ類〕丸底気味のもの。外面体下部の段や横方向の沈線の有無によって以下のように細分される。

ＩＢ１類：外面体下部に段や沈線が巡るもの。大きさは口径12～17cm、底径７～13cm、器高３～４cm、器高／口径比0.22～0.27、底径／口径比0.63～0.81である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面の口縁部はヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

ＩＢ２類：外面体下部に段や沈線のないもの。口径13～16cm、底径７～11cm、器高３～４cm、器高／口径比0.22～0.27、底径／口径比0.50～0.65である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面の口縁部はヨコナデ、体部から底部は手持ちヘラケズリされている。

〔ＩＣ類〕平底のもの。器厚と作りによって以下のように細分される。



第130図　土師器の分類(1)

ＩＣ１類：器厚が薄く丁寧な作りのもの。大きさは口径10～14cm、底径６～７cm、器高約５cm、器高／口径比0.36～0.45、底径／口径比0.50～0.60である。器高／口径比がやや大きい。両面ともヘラミガキされている。その後に内面が黒色処理されるもの（第80図６、第88図53）と両面とも黒色処理されるもの（第５図３）とがある。

ＩＣ２類：器厚が厚く粗雑な作りのもの。大きさは口径15.8cm、底径10.0cm、器高4.5cm、器高／口径比0.29、底径／口径比0.63、器厚９mmである。口径、底径はＩＣ１類よりも大きく、器高／口径比が小さい。内面は口縁部から底部がナデされ、その後に黒色処理されていない。外面は口縁部がヨコナデされ、その後に体上部から底部が手持ちヘラケズリされている。

《ロクロ調整の坏Ⅱ類》

平底で、体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がそのまま外傾するかわずかに外反する。内面はロクロナデ後にヘラミガキされ、その後に黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りである。その後の外面の体部下端から底部への再調整の有無によって以下のように分類される。

〔ⅡＡ類〕外面の底部外周または体部下端～底部外周が手持ちヘラケズリで再調整されているもの。大きさは口径14～17cm、底径５～７cm、器高４～７cm、器高／口径比0.30～0.38、底径／口径比0.37～0.45である。

〔ⅡＢ類〕再調整されていないもの。大きさは口径13～16cm、底径５～８cm、器高３～６cm、器高／口径比0.29～0.40、底径／口径比0.36～0.43である。

【椀】非ロクロ調整の椀Ⅰ類とロクロ調整の椀Ⅱ類とがある。

《非ロクロ調整の椀Ⅰ類》

底部の形状・大きさ、口縁部から体部の形状によって以下のように分類される。

〔ＩＡ類〕丸底で、口縁部が直立またはわずかに内彎するもの。大きさは口径14～16cm、器高７～10cm、器高／口径比0.51～0.59である。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。外面は全面がヘラミガキ、または口縁部から体下部がヘラミガキ、体下部から底部が手持ちヘラケズリされている。

〔ＩＢ類〕平底で底径が大きく、口縁部が外傾するもの。大きさは口径13.5cm、器高8.9cm、底径８.0cm、器高／口径比0.59、底径／口径比0.66である。両面ともヘラミガキされ、その後に内面が黒色処理されている。

〔ＩＣ類〕平底で底径が小さく、体部が強く膨らみ、口縁部が内彎するもの。大きさは口径９.1cm、器高７.0cm、底径３.0cm、器高／口径比0.77、底径／口径比0.33で、ＩＡ類、ＩＢ類よりも小型である。内面は口縁部がヨコナデ、体部から底部がナデされ、黒色処理されていない。外面は口縁部から底部までヘラミガキされている。

《ロクロ調整の椀Ⅱ類》

平底で、体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。大きさは口径21～24cm、底径９～10cm、器高13cm前後と大型で、器高／口径比0.55～0.60、底径／口径比0.40～0.42である。内

面はロクロナデ後にヘラミガキされ、その後に黒色処理されている。底部の切り離しのわかるもの（第57図14）は回転糸切りで、その後に底部の一部がナデまたは手持ちヘラケズリされている。

【高坏】非ロクロ調整の高坏Ⅰ類がある。

全形のわかるもの（第19図６、第61図４）は、坏部が丸底で、外面の体下部に段や沈線が巡り、脚部が外に彎曲しながら開くか、厚みを増しながら外に開く。脚部には縦長凸レンズ状の透かしが外面側からあけられている。透かしは第119図６が３個、第61図４が４個である。大きさは口径15cm前後、器高６cm前後、脚部径７～８cm、脚部高2.5cm前後、坏部高３～４cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。坏部の外面は口縁～体上部がヨコナデまたはヘラミガキ、ナデされ、体下部から底部が手持ちヘラケズリされている。脚部の内面は手持ちヘラケズリされ、外面は手持ちヘラケズリまたはナデされている。

脚部破片には脚部径５～８cm、脚部高２～３cmのものが多い。脚部下部が欠損して大きさが不明確だが、これらよりも大型のものもある（第５図２）。また、脚部に透かしのあるものとないものとがある。透かしは縦長凸レンズ状で、外側からあけて貫通するものを基本とするが、中には１個が貫通し、それと組み合う孔が貫通していないもの（第48図１）や両側からあけたもの（第23図１）もある。透かしのあるものには２個、３個、４個のものがある。

【高台坏】ロクロ調整の高台坏Ⅱ類がある。坏部の形状によって以下のように分類される。

〔ⅡＡ類〕体部が直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反するもの。底部は回転糸切りで切り離され、その後に外に開く高台が付けられている。大きさは口径14.6cm、器高5.4cm、高台径7.0cm、高台高1.7cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理され、坏部・高台部の外面と高台部の内面はロクロナデのままである。

〔ⅡＢ類〕体部が膨らみながら立ち上がり、口縁部がそのまま外反するかわずかに外反するもの。底部の切り離しがわかるものはいずれも回転糸切りで（第43図49・50、第56図４）、その後に外に開く高台が付けられている。底部の切り離しが不明なものの中に、付高台された後で底部が菊花状にオサエられるもの（第45図４）もある。大きさは口径14～16cm、器高４～７cm、高台径7～８cm、高台高２cm前後である。坏部の高さは４cm前後のものが多いが、中には５cm程とやや深いもの（第56図４）もある。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されるものが基本であるが、ヘラミガキ後に黒色処理されないもの（第43図49）もある。坏部・高台部の外面と高台部の内面はロクロナデのままである。

〔ⅡＣ類〕体部が強く膨らみながら立ち上がり、口縁部が直立するもの。高台を欠損し、全体の大きさは不明だが、底部の切り離しは回転糸切りで、その後に高台が付けられている。口径10.8cm、坏部高4.6cmである。坏部の内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。坏部の外面はロクロナデ後にヘラミガキされ、一部にロクロナデ痕を残す。

この他、全体形状が不明の破片で、底部が回転糸切りされた後、内傾する低い高台が付けられ、内面がヘラミガキされるが黒色処理されないもの（第118図５）、ロクロナデ後に両面がヘラミガキされた後、両面とも黒色処理されるもの（第40図２、第119図18）がある。

【耳皿】ロクロ調整の耳皿Ⅱ類がある。高台の有無によって以下のように分類される。

〔ⅡA類〕高台の付くもの。皿部を大きく欠くものが多く、全体の大きさは不明確だが、高台径が3～4cmと小型なもの(第19図20・21、第23図1)と6.2cmと大型のもの(第92図7)とがある。底部の切り離しは不明で、底部に外に開くか直立する高台が付けられている。皿部はロクロナデ後に両面ともヘラミガキされている。高台部は内面がロクロナデのままである。高台部の外面がロクロナデのままのもの(第92図7、第119図20)とヘラミガキされるもの(第229図21、第123図1)とがある。皿部・高台部の両面とも黒色処理されている。

〔ⅡB類〕高台の付かないもの。底径4.2cmで、口縁を欠き、大きさが不明確だが、口径約8cm、器高約2cmと推定される。平底で、高台が付けられていない。底部が回転糸切りで切り離されたままで、内面のみロクロナデを残して粗くヘラミガキされ、その後に両面とも黒色処理されている。

【蓋】ロクロ調整の蓋Ⅱ類がある。天井部が膨らみ、体部が内彎しながら口縁部にいたる。口縁部をわずかに欠くが、折り返されると推定される。つまみはリング状で、中央がやや突出する。両面ともロクロナデ後に黒色処理されている。

【壷】非ロクロ調整の壷Ⅰ類とロクロ調整の壷Ⅱ類がある。

《非ロクロ調整の壷Ⅰ類》

胴上部から口頸部を欠損し、全体の形状は不明である。底部は平底で木葉痕があり、底径6.6cmである。胴部中央が強く膨らむ。外面は手持ちヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。

《ロクロ調整の壷Ⅱ類》

平底で小型の無頸壷で、口径2.6cm、底径4.4cm、器高6.5cm、胴部最大径6.9cmある。胴部中央が強く膨らんでここに最大径があり、口縁部が強く内傾する。外面はロクロナデ後にヘラミガキされ、内面はロクロナデのままである。底部は摩滅し、調整不明である。

【鉢】非ロクロ調整の鉢Ⅰ類とロクロ調整のⅡ類とがある。

《非ロクロ調整の鉢Ⅰ類》

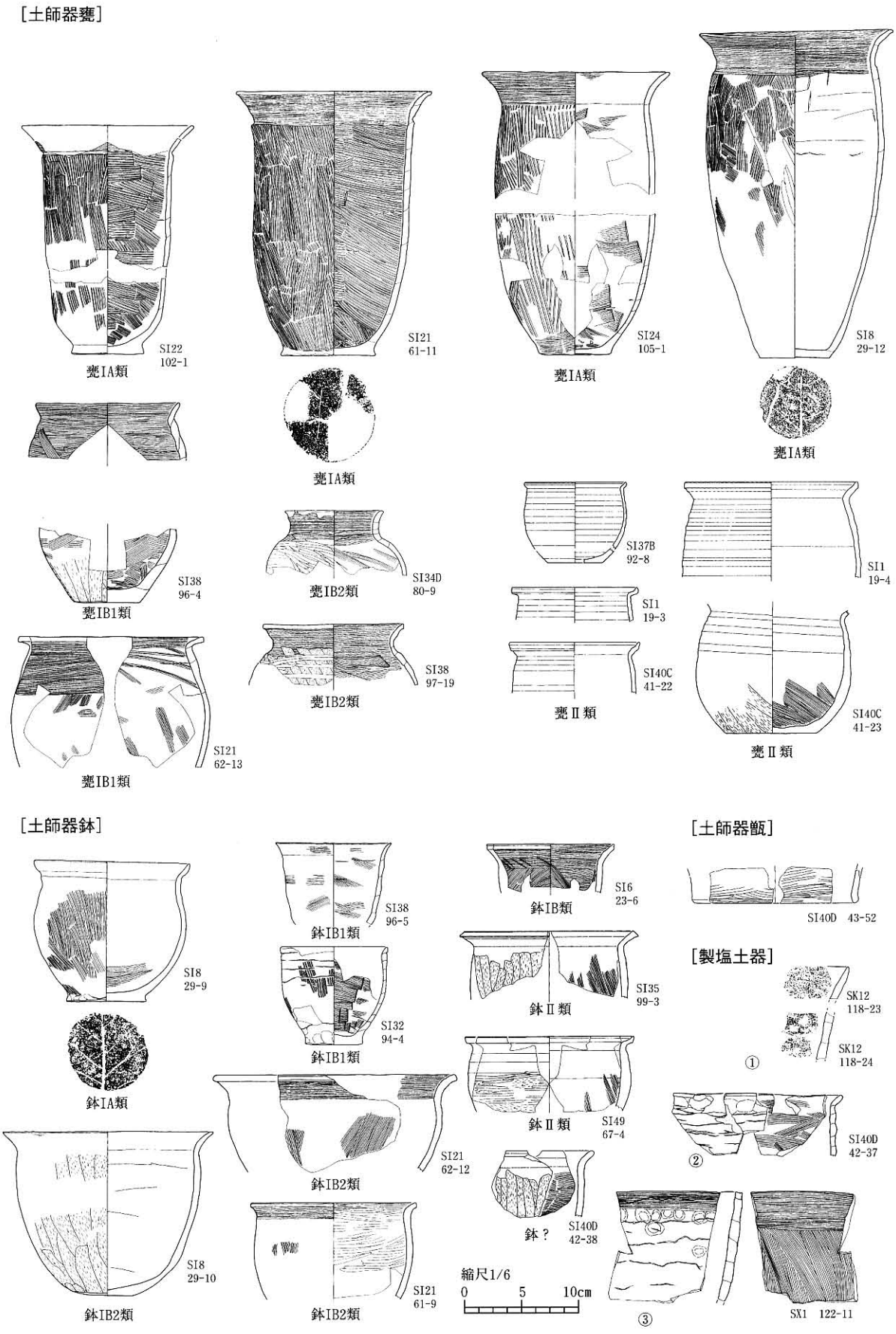
体中央部の膨らみと大きさによって以下のように分類される。

〔ⅠA類〕体中央部が強く膨らみ、体中央部径が口縁部径とほぼ等しいもの。口縁部は短く外反し、口縁端部はすぼまる。大きさは口径16.4cm、底径8.4cm、器高14.8cm、器高／口径比0.90である。外面は、口縁部がヨコナデ、体部が縦方向のハケメ、体下部が指オサエで調整され、底部には木葉痕が残る。内面はナデで調整されている。

〔ⅠB類〕体中央部が強く膨らまないもの。大きさによって細分される。

ⅠB1類:口径12cm前後、器高10cm前後、底径6cm前後の小型品で、器高／口径比0.91である。口縁部が長く外反するか、わずかに外反し、口縁端部がすぼまる。外面は、口縁部がヨコナデまたは軽いナデ、体上部がナデ、体下部がオサエ、内面がナデで調整されている。

ⅠB2類:口径17～25cm、器高10cm以上の大型品で、器高／口径比0.78である。口縁部が長く外反



第131図　土師器の分類(2)

するか短く外反し、口縁端部はすぼまるか、突帯状となる。外面は口縁部がヨコナデ、体部が手持ちヘラケズリまたはナデされ、内面はナデまたはヘラミガキされている。

《ロクロ調整の鉢Ⅱ類》

口径17～19cmで、口縁部に最大径がある。体下部から底部を欠き、全体の形状が不明確だが、器高20cm以下とみられ、器高／口径比が0.5以上、1.0未満と考えられるので、鉢に分類した。口縁部は体上部と「く」字状となるように外反する。口縁端部は突帯状で、稜をなす。ロクロナデ後に外面を手持ちヘラケズリし、内面をナデで再調整している。

【甕】非ロクロ調整の甕Ⅰ類とロクロ調整の甕Ⅱ類とがある。

《非ロクロ調整の甕Ⅰ類》

胴部の形状と最大径の位置によって以下のように分類される。

〔ⅠA類〕長胴甕で、口縁部に最大径があり、口縁部が長く外反するもの。大きさは口径18～24cm、器高24～35cm、底径6～11cm、器高／口径比1.33～1.68である。外面は口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向にハケメで調整されている。底部は木葉痕のもの（第29図12、第61図11、第102図1）が多く、他にナデのもの（第105図1）がある。内面は口縁部がヨコナデ、胴部から底部がハケメ、またはヘラナデ・ナデで調整されている。胴下部にくびれのあるもの（第61図11、第102図1）とくびれのないもの（第29図12、第105図1）とがある。

〔ⅠB類〕球胴甕で、胴部ほぼ中央に最大径があり、口縁部が外反するもの。胴部と口縁部の形状によって以下のように細分される。

ⅠB1類：胴部が膨らむ球胴形で、口縁部が短く外反するもの。胴中央部や胴下部から底部を欠き、全体の大きさは不明だが、口径15～24cmである。口縁端部がすぼまるもの（第96図4）と突帯状となるもの（第62図13）とがある。前者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデ、ナデ、胴下部が縦方向の手持ちヘラケズリ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部から底部がヨコナデ、ナデで調整されている。後者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデで調整されている。

ⅠB2類：胴部が特に強く膨らむ球胴形で、口縁部が長く外彎気味に外反するもの。胴下部から底部を欠き、全体の大きさは不明だが、口径10～15cmである。口縁端部がすぼまるもの（第80図9）と突帯状となるもの（第97図19）とがある。前者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部がヨコナデ後にヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がナデで調整されている。後者は外面の口縁部がヨコナデ、胴部が縦方向の手持ちヘラケズリ後に粗いヘラミガキ、内面の口縁部がヨコナデ、胴部がヘラナデ、ナデで調整されている。

《ロクロ調整の甕Ⅱ類》

胴上部から口頸部がく字状に外反し、口縁部は短く直立し、端部は面取りされている。口径は10～19cmである。胴下部から底部を欠くものが多い。底部の調整のわかるものはいずれも回転糸切りされたままである。外面の胴下部は手持ちヘラケズリされるもの（第41図23）とされないもの（第92図

8）とがある。

【甑】ロクロ調整の甑Ⅱ類がある。底部から胴下部破片で、全体の形状など詳細は不明である。底径は17.4cmと大きい。ロクロナデ後に両面をヘラミガキしている。

（2）須恵器（第132・133図）

須恵器には坏・高台坏・盤・蓋・鉢・甕・壺がある。他に、特殊器形として須恵器質の円面硯と三重小塔がある。以下、器種ごとに分類と細分を行う。

【坏】主に底部と体部の形状によって以下のように分類される。

〔A類〕体部下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離しの後の外面の再調整によって、以下のように細分される。

A 1 類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径13～16cm、底径 7 ～10cm、器高 3 ～ 5 cm、器高／口径比0.22～0.34、底径／口径比 0 56～0.57である。

A 2 類：底部のみ回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径14～16cm、底径 7 ～10cm、器高 3 ～ 4 cm、器高／口径比0.24～0.26、底径／口径比0.52～0.65である。底部の切り離しは不明である。

A 3 類：体部下端から底部が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径13～17cm、底径 7 ～11cm、器高 3 ～ 5 cm、器高／口径比0.22～0.33、底径／口径比0.49～0.65である。底部の切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第85図42・43）が多いが、回転糸切りのもの（第 5 図 1 、第62図25）、静止糸切りのもの（第43図53、第62図18）が少数ある。

A 4 類：底部のみ手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径14.5cm、底径9.4cm、器高3.9cm、器高／口径比0.27、底径／口径比0.65である。底部の切り離しは不明である。

A 5 類：体部下端から底部が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径13.6cm、底径10～11cmである。底部切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第 8 図 3 、第62図16）がある。

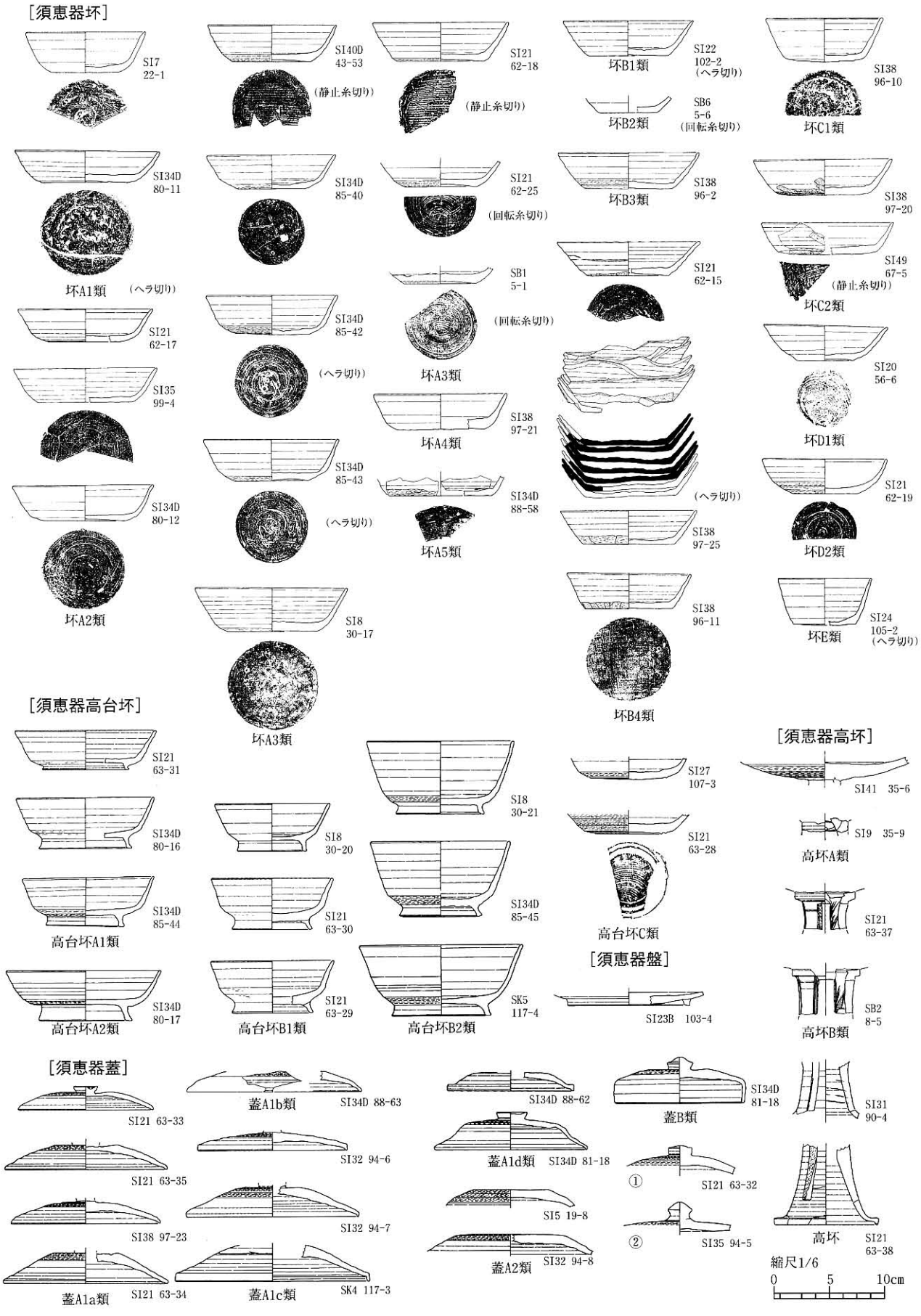
〔B類〕体部下端から口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

B 1 類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径14.2cm、底径 8 .6cm、器高3.8cm、器高／口径比0.27、底径／口径比0.61である。

B 2 類：再調整されずに、底部が回転糸切りされたままのもの。大きさは底径6.4cmである。

B 3 類：体部下端から底部、または体部下端が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径12～16cm、底径 8 ～10cm、器高 4 ～ 5 cm、器高／口径比0.26～0.38、底径／口径比0.62～0.66である。底部の切り離しのわかるものにはヘラ切りのもの（第 5 図 4 ）、回転糸切りのもの（第88図59）がある。

B 4 類：体部下端から底部、または体部下端が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径13～16cm、底径 8 ～10cm、器高 3 ～ 4 cm、器高／口径比0.22～0.29、底径／口径比0.56～0.70



第132図　須恵器の分類(1)

である。底部の切り離しがわかるものにはヘラ切りのものがある（第23図８、第85図37、第96図13、第97図24・25、第107図１）。

〔Ｃ類〕体部下端と底部外周が丸みをもち、体下部から口縁部が直線的に外傾するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

Ｃ１類：再調整されずに、底部がヘラ切りされたままのもの。大きさは口径12.8cm、底径8.0cm、器高３～４cm、器高／口径比0.38、底径／口径比0.63である。

Ｃ２類：体下部から底部が手持ちヘラケズリされているもの。大きさは口径14～15cm、底径10～11cm、器高３～４cm、器高／口径比0.24～0.26、底径／口径比0.66～0.75である。底部切り離しのわかるものには静止糸切りのものがある（第67図５）。

〔Ｄ類〕体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外傾ないしわずかに外反するもの。底部切り離し後の再調整によって、以下のように細分される。

Ｄ１類：再調整されずに、底部が回転糸切りされたままのもの。大きさは口径13～15cm、底径５～８cm、器高３～６cm、器高／口径比0.26～0.37、底径／口径比0.40～0.49である。底径／口径比が他の坏各類よりも小さい。

Ｄ２類：体部下端から底部が回転ヘラケズリされているもの。大きさは口径13.6cm、底径7.0cm、器高3.8cm、器高／口径比0.28、底径／口径比0.52である。底部切り離しは不明である。

〔Ｅ類〕体部下端から口縁部が直線的に外傾し、器高が深く口径も小さいいわゆる「コップ形」のもの。大きさは口径10.3cm、底径6.8cm、器高5.1cm、器高／口径比0.50、底径／口径比0.67である。他の坏各類よりも口径が小さく、器高がやや深く、器高／口径比も大きい。底部の切り離しはヘラ切りで、再調整されていない。

【高台坏】高台の作り方、器高／口径比、坏部高／口径比によって、以下のように分類される。

〔Ａ類〕付高台で、坏部が浅いもの。体部下端から底部が回転ヘラケズリされてから断面方形状で外に開く高台が付けられている。大きさは口径14～18cm、高台径８～12cm、器高４～７cm、坏部高３～６cm、器高／口径比0.28～0.37、坏部高／口径比0.21～0.30である。大きさに大小の区別があり、以下のように細分される。

Ａ１類：口径15cm前後のもの。

Ａ２類：口径17cm前後のもの。

〔Ｂ類〕付高台で、坏部が深いもの。外面の体部下端から底部が回転ヘラケズリされてから断面方形状で外に開く高台が付けられている。底部の切り離しがわかるものにはヘラ切りのもの（第31図21、第53図８、第85図45）がある。大きさは口径12～18cm台、高台径７～11cm、器高５～９cm、坏部高４～８cm、器高／口径比0.42～0.54、坏部高／口径比0.32～0.47である。大きさに大小の区別があり、以下のように細分される。

Ｂ１類：口径13cm前後のもの

Ｂ２類：口径17cm前後のもの

〔Ｃ類〕削り出し高台によるもの。外面の体部下端が回転ヘラケズリされてから、削り出しによって

低い高台が作り出されている。口縁部から体下部を欠損し、全体の大きさは不明で、高台径は8～9cmである。底部の切り離しがわかるものには回転糸切りのもの（第63図28）がある。

なお、A類またはB類の高台部破片で底部の切り離しのわかるものに、回転糸切りのもの（第32図26）、ヘラ切りのもの（第53図8）がある。

【盤】口縁部から体部を欠き、全体の形状・大きさは不明である。高台径13.4cmと大型で、底部回転ヘラケズリ後に断面箱形の高台が付けられている。

【高坏】坏部と脚部との接合方法によって以下のように分類される。

〔A類〕坏部と底部との間に円盤を入れないもの。破片で、全体の形状・大きさは不明である。坏部と脚部との接合面には接合をしやすくするために沈線が巡っている。坏部の外面の体下部は回転ヘラケズリされている。

〔B類〕坏部と底部との間に円盤を入れ、底部が2段構成となるもの。破片で、全体の形状・大きさは不明である。脚部には縦長長方形の透かしが4個あけられている。坏部と脚部との接合面には接合をしやすくするために沈線が巡っている。

この他、透かしが3個ある脚部中央破片が2点ある（第63図38、第90図4）。

【蓋】天井部から口縁部にいたる形態によって以下のように分類される。

〔A類〕天井部から口縁部が斜めに外傾するもの。つまみの有無と天井部から口縁部にかけての形状、口縁部の折り返しの有無によって、以下のように細分される。

A1類：つまみの付くもの。

A1a類：体部が直線的に外傾し、口縁部に折り返しをもたず、口縁端部が丸みをもつもの。つまみの残るもの（第63図33）は、中央がやや突出するリング状のつまみで、つまみの径は2.6cm、高さは7mmである。大きさは口径14～19cm、器高2～4cm、天井高2～4cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A1b類：体部が緩やかに内彎し、口縁部に折り返しをもたず、口縁端部が丸みをもつもの。つまみの形状は不明である。大きさは、口径約19cm、天井高約2cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A1c類：体部が直線的に外傾し、口縁口縁端部が短く折り返されるもの。大きさは口径16～22cm、天井高2～5cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A1d類：天井部と体部が「く」字状に屈曲し、体部から口縁部がやや内彎し、口縁端部が短く折り返されるもの。つまみの残るもの（第81図19）は、中央がやや突出するリング状のつまみで、つまみの径は5.0cm、高さは7mmである。大きさは口径13～17cm、器高2～4cm、天井高2～4cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

A2類：つまみが付かず、天井部が平らなもの（いわゆる「平頂蓋」）。口縁部を欠損し、全体の形状、大きさは不明である。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

〔B類〕天井部と体部がほぼ直角に屈曲するもの。つまみは高い宝珠形である。大きさは口径14.8cm、器高5.1cm、天井高3.6cm、つまみの径2.7cm、つまみの高さ1.3cmである。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

この他、つまみが残るものの残存が悪く、分類できなかった破片が2点ある。このうち①（第63図32）は頂部がやや盛り上がる扁平な擬宝珠形のつまみ、②（第99図5）は高い宝珠形のつまみである。A1a類、A1d類のつまみとは形態が異なり、②はB類のつまみと類似している。外面の天井部は回転ヘラケズリで再調整されている。

【鉢】底部の形状、最大径の位置によって以下のように分類される。

〔A類〕平底で、口縁部に最大径があり、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状または「く」字状に外反するもの。底径・器高の大きさ、口頸部と体部の形状によって細分される。

A1類：口径に比べ底径が大きく、器高がやや低く、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状に外反するもの。大きさは口径23.4cm、器高13.7cm、底径14.5cm、器高／口径比0.59、底径／口径比0.62である。両面ともロクロナデされ、外面の体部にロクロナデ前の平行叩き目痕を残さない。

A2類：口径に比べ底径がやや小さく、器高が高く、体上部から口頸部が緩やかな「S」字状に外反するもの。大きさは口径30～33cm、器高20cm前後、底径14cm前後、器高／口径比0.68、底径／口径比0.49である。外面の体部にロクロナデ前の平行叩き目痕を残し、両面がロクロナデされている。

A3類：口径に比べ底径がやや小さく、器高が高く、体上部から口頸部が「く」字状に外反し、口頸部と体上部との境が内面で稜となるもの。大きさは口径29.3cm、器高20.6cm、底径13.1cm、器高／口径比0.70、底径／口径比0.45である。外面の体下部がロクロナデ後に手持ちヘラケズリされ、内面はロクロナデされている。

〔B類〕丸底で体部が強く膨らみ、体上部に最大径があり、口縁部が短く屈曲して内傾するもの。大きさは口径13.4cm、器高10.1cm、器高／口径比0.75である。外面はロクロナデ後に体下部が回転ヘラケズリ、内面がロクロナデ後にナデで再調整されている。

【壺】大小の区別があり、大きさによって以下のように分類される。

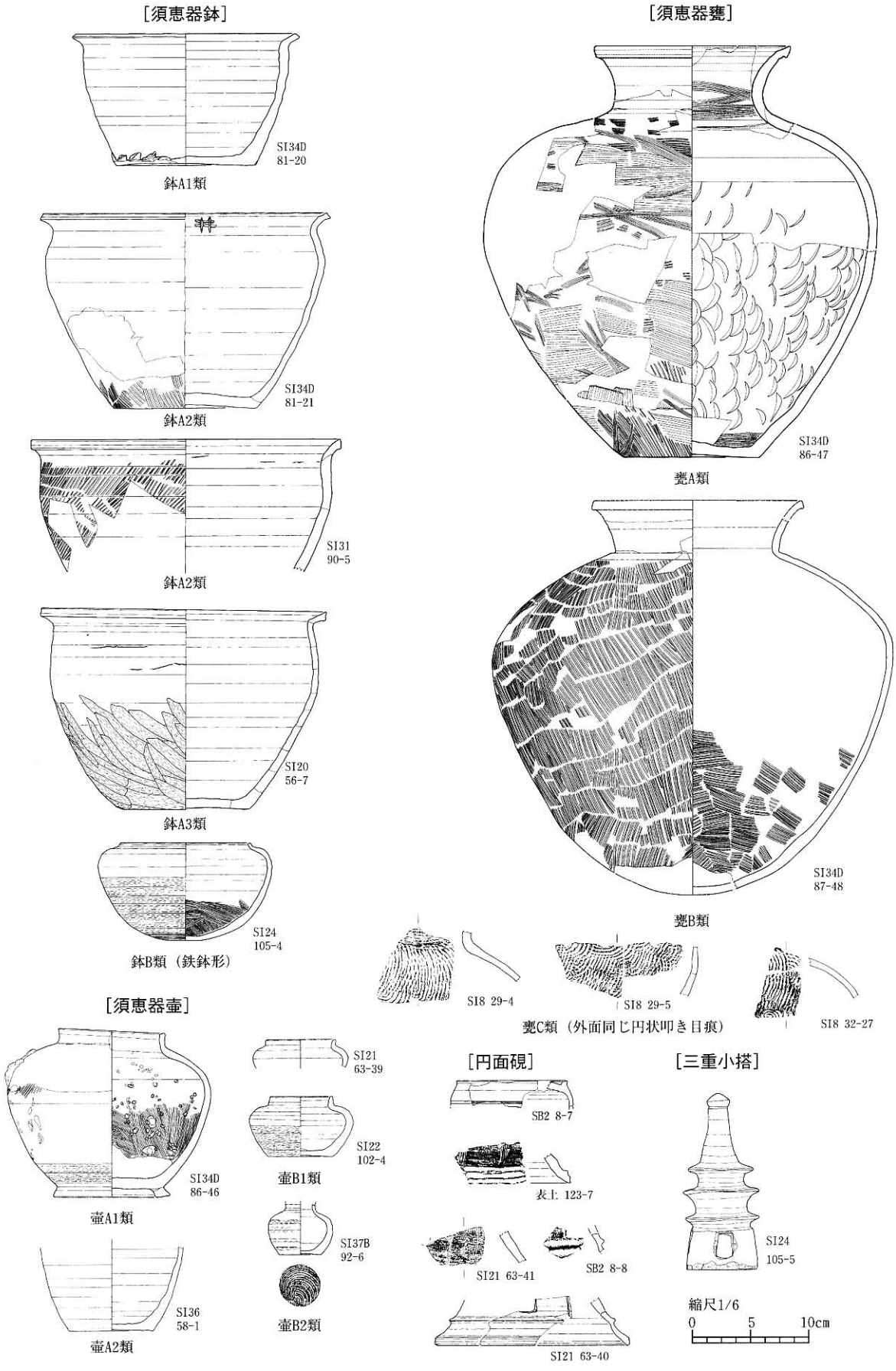
〔A類〕大型なもの。高台の有無によって細分される。

A1類：高台が付き、口頸部が短く直立するもの（大型短頸壺）。大きさは口径11.0cm、高台径12.0cm、器高17.5cm、最大径20.9cm、器高／最大径比0.84である。両面ともロクロ調整で、外面の体下部は回転ヘラケズリ、内面の体下部はナデで再調整されている。

A2類：高台の付かない平底のもの。底径8.6cm。口頸部から体上部を欠損し、口頸部の形状は不明である。両面ともロクロ調整で、外面の底部はナデで再調整されている。

〔B類〕小型なもの。高台は付かず、平底である。器形と口頸部の形状によって細分される。

B1類：最大径に対し器高が低い扁平な器形で、口頸部が短く直立し、体部の中央が強く膨らむもの（小型短頸壺）。大きさは口径6.5cm、底径6.7cm、器高6.2cm、最大径10.7cm、器高／最大



第133図　須恵器の分類(2)

径比0.58である。両面ともロクロ調整で、外面の体下部は回転ヘラケズリで再調整されている。

B 2 類：口縁部を欠くが、器高と最大径がほぼ等しく、口頸部の長い長頸壺と推定されるもの。大きさは底径4.3cm、最大径6.6cmである。底部は回転糸切りで切り離され、外面の体部は回転ヘラケズリで再調整されている。

【甕】底部の形状と外面の胴部の叩き目によって、以下のように分類される。

〔A類〕平底で、外面の胴部に平行叩き目痕、ナデを残すもの。口頸部が外反し、胴部が球胴でその上部に最大径が位置する。口縁端部は断面三角形状の突帯となる。外面の口頸部はロクロナデされている。大きさのわかるものは、口径20.2cm、底径14.0cm、器高42.6cm、胴部最大径40.5cm、容量29㍑である（第86図47）。外面は口頸部がロクロナデ、胴部が平行叩きとその後にナデ、内面は口頸部がロクロナデとナデ、胴下部がナデで調整されている。

〔B類〕丸底で、外面の胴部に平行叩き目痕を残すもの。口頸部が外反し、胴部が球胴でその上部に最大径が位置する。口縁端部は断面三角形状の突帯となる。外面の口頸部はロクロナデされている。大きさのわかるものは、口径20～22cm、器高27～42cm、胴部最大径36～42cm、容量20～29.5㍑である（第82図22、第87図48）。外面は口頸部がロクロナデ、胴部が平行叩き、底部が平行叩きまたは平行叩き＋手持ちヘラケズリ、内面は口頸部がロクロナデ、胴下部がナデで調整されている。

〔C類〕外面の胴部に同心円状叩き目痕を残すもの。口頸部・底部形状は不明である。

（3）須恵系土器（第134図）

須恵系土器には坏・小型坏・高台坏がある。以下、器種ごとに分類と細分を行う。

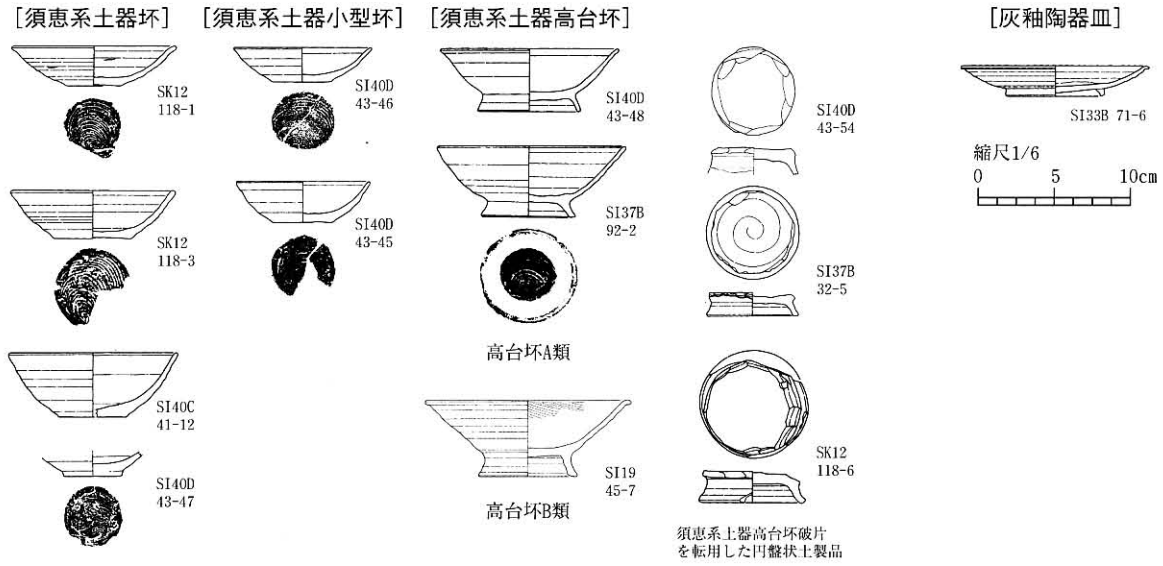
【坏】体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は体部からそのまま直線的に外傾するか、やや外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。大きさは口径13cmを中心とし、底径 4 ～ 6 cm、器高 3 ～ 5 cm、器高／口径比0.25～0.32、底径／口径比0.33～0.46である。器高は 3 ～ 4 cmのものが多い。中には器高5.1cmと器高のやや深いもの（第41図12）や底部円柱作りの疑似高台状となるもの（第43図47）がある。

【小型坏】体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部は体部からそのまま直線的に外傾するか、やや外反する。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。大きさは口径11cm前後、底径 5 cm前後、器高約 3 ～ 4 cm、器高／口径比0.26～0.31、底径／口径比0.43～0.47である。

【高台坏】体部の形状、高台部の高さによって以下のように分類される。

〔A類〕坏部は体下部が丸みをもち、体上部から口縁部が直線的なもの。大きさは口径14～16cm、高台径 7 ～ 8 cm、器高 5 ～ 6 cmである。底部は回転糸切りで切り離され、その後に外に開く高台が付けられている。

〔B類〕体下部から口縁部が直線的で、高台が高いもの（いわゆる「足高高台坏」）。大きさは口径約16cm、高台径7.8cm、器高約 5 cmで、須恵系土器坏よりも口径が 2 ～ 3 cm大きい。底部の切り離しは不明で、その後に外に開く高台が付けられている。



第134図　須恵系土器・灰釉陶器の分類

（4）製塩土器（第131図）

非ロクロ調整で、粘土紐積み上げ痕が明瞭に残り、器厚が6～10mmと分厚く、黄褐色～赤褐色で胎土に砂粒を多く含む。焼成はよい。破片資料のため全形は不明である。口縁部破片を3点図示した。口縁端部は、①丸みをもちながらすぼまり、外傾するもの、②わずかに外反し、口縁端部が丸みをもつもの、③外傾し、口縁端部が面取りされているものがある。

（5）灰釉陶器（第134図）

皿が1点ある。体下部～底部が回転ヘラケズリされてから、定形化した三日月高台が付けられ、内面の口縁～体部に灰釉が刷毛塗りされている。猿投窯製品の黒笹90号窯式第2型式のものである。

2．土器群の設定と年代的位置付け

（1）基準資料による土器群の設定

主要遺構から出土した土器をみると、ＳＩ８・20・21・33Ｂ・33Ｃ・34Ｄ・38・40Ｃ・40Ｄ・53竪穴住居跡の床面、土壙、周溝、主柱穴抜取穴、嵩上げ整地、廃絶時の人為的埋土などから比較的多くの土器が出土している。これらから出土した土器は一括性の高いものであり、それぞれ共伴関係にあるものとみることができる。

各遺構・層位ごとに類型の組み合わせをみると、表１のようになる。この表において、類型の組み合わせの相異に着目して土器群を設定すると、須恵器坏Ａ３類を含む**Ｉ群土器**、②土師器坏ⅡＢ類・甕Ⅱ類、須恵器坏Ｄ１類を含む**Ⅱ群土器**の２群に大別される。そして、Ⅱ群土器は須恵系土器を含まない**ⅡＡ群土器**、須恵系土器を含む**ⅡＢ群土器**に細分することができる。

遺構		層位	土器群	図示点数	土師器								須恵器								須恵系土器			製塩土器	灰釉
					坏	椀	高台坏	耳皿	蓋	鉢	壺	甕	坏	高台坏	高坏	蓋	鉢	壺	甕	硯	坏	小型坏	高台坏		Ⅲ
竪穴住居跡	SI8	床面(火災時)	Ⅰ群	15	ⅠB1					ⅠA, ⅠB2		ⅠA	A3	B1,B2		A1d									
	SI21	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群	42	ⅠB2,(ⅠB1)				(○)	ⅠB2	Ⅰ	ⅠA,ⅠB1	A1,A2,A3,A5,B4,D2	A1,B1,C	B,他	A1a	A2	B1	(○)	○					
	SI34D	床面(火災時)	Ⅰ群	17	ⅠC1	ⅠA,ⅠB						ⅠA,ⅠB1	A1,A2,A3	A1,A2		A1d,B	A1,A2		B						
		3層上面(火災直後の廃棄)	Ⅰ群	12									A3	A1,B2				A1	A,B						
	SI38	床面など(機能時)	Ⅰ群	13	(ⅠB1,ⅠC1)					ⅠB1		ⅠA,Ⅰ	A5,B3,B4,C1,(A3)	A2											
		人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群	22	ⅠB1							ⅠB2,Ⅰ	A1,A4,B4,C2,(A3)			A1a									
	SI53	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群	8	ⅠB2?				Ⅱ			(Ⅰ)	A3	A2		(A)									
	SI20	床面(火災時)	ⅡA群	7	ⅡA,ⅡB	Ⅱ	ⅡB					(Ⅱ)	D1			(○)	A3								
	SI33B	床面(機能時)	ⅡA群	2	(Ⅱ)							(Ⅱ)	D1					(○)	A						
		埋土・周溝(拡張時)	ⅡA群	5	ⅡB							(Ⅱ)	D1	(AorB)		(○)			(○)						○
	SI33C	床面・土壙(機能時)	ⅡA群	3	ⅡB							(Ⅱ)	D1						A						
		主柱穴抜取穴(廃絶時)	ⅡA群	1	ⅡB																				
	SI37B	床面(機能時)	ⅡB群	4	(ⅡB)							(Ⅱ)	(D1)					(○)	(○)		(○)		A		
	SI40C	床面・周溝など(機能時)	ⅡB群	14	ⅡB		Ⅱ					Ⅱ	(D1)			(A)		○	(○)		○				
	SI40D	C主柱穴抜取、嵩上げ整地など(構築時)	ⅡB群	9	ⅡB		Ⅱ	ⅡB				(Ⅱ)	(D1)			(A)		(○)	(○)		○	○		○	

表1　土器群を設定した遺構・層位から出土した土器の組成　　( ) 未掲載の底部破片、○あり

【Ⅰ群土器】

基準資料：ＳＩ８焼失竪穴住居跡床面、ＳＩ21竪穴住居跡人為的埋土（ＳＢ２建物建設時）、ＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡床面・３層上面、ＳＩ38竪穴住居跡床面・人為的埋土、ＳＩ53竪穴住居跡人為的埋土

須恵器坏Ａ３類が基準資料のすべてに含まれており、土師器坏ＩＢ１類、土師器鉢ＩＢ２類、甕ＩＡ・ＩＢ類、須恵器坏Ａ１・Ａ２・Ｂ４類、高台坏Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２類、蓋Ａ１ａ・Ａ１ｄ類、鉢Ａ２類、甕Ｂ類が複数の基準資料に含まれている。出土層位からみて、この他の類型も共伴関係にある。したがって、Ⅰ群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕坏ＩＢ１・ＩＢ２・ＩＣ１類、椀ＩＡ・ＩＢ類、蓋Ⅱ類、鉢ＩＡ・ＩＢ１・ＩＢ２類、壺Ⅰ類、甕ＩＡ・ＩＢ１・ＩＢ２類

〔須恵器〕坏Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ａ５・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ１・Ｃ２・Ｄ２類、高台坏Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ類、高坏Ｂ類、蓋Ａ１ａ・Ａ１ｄ・Ｂ類、鉢Ａ１・Ａ２類、壺Ａ１・Ｂ１類、甕Ａ・Ｂ類、円面硯

【ⅡＡ群土器】

基準資料：ＳＩ20焼失竪穴住居跡床面、ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡床面・人為的埋土・周溝、ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡床面・土壙・主柱穴抜取穴

土師器坏ⅡＢ類・甕Ⅱ類、須恵器坏Ｄ１類が基準資料のすべてに含まれ、出土層位からみてこの他の類型も共伴関係にある。したがって、ⅡＡ群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕坏ⅡＡ・ⅡＢ類、椀Ⅱ類、高台坏ⅡＢ類、甕Ⅱ類

〔須恵器〕坏Ｄ１類、高台坏、蓋、鉢Ａ３類、壺、甕Ａ類

〔灰釉陶器〕Ⅲ

【ⅡＢ群土器】

基準資料：ＳＩ37Ｂ竪穴住居跡床面、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡床面・周溝など、ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡Ｃ主柱穴抜取穴・嵩上げ整地など

土師器坏ⅡＢ類・甕Ⅱ類、須恵器坏Ｄ１類が基準資料のすべてに含まれており、須恵系土器坏が複数の基準資料に含まれている。出土層位からみて、この他の類型も共伴関係にある。したがって、ⅡＢ群土器は以下のような類型で構成されているとみることができる。

〔土師器〕坏ⅡＢ類、高台坏ⅡＡ・ⅡＢ類、耳皿ⅡＡ・ⅡＢ類、甕Ⅱ類

〔須恵器〕坏Ｄ１、蓋Ａ類、壺、甕

〔須恵系土器〕坏、小型坏、高台坏Ａ類

〔製塩土器〕

（２）その他の主要遺構出土土器を含めた土器群の設定

前項の基準資料で設定したⅠ群土器、ⅡＡ群土器、ⅡＢ群土器において含まれている各類型は、出土状況からみてそれぞれ共伴関係にあるものである。

土器群を設定した竪穴住居跡で基準とした以外の層位から出土した土器、および土器群を設定した以外の主要遺構について、掲載した土器に未掲載の底部破片を含めてその組成をみることにする（表２・３）。そして、各土器群の基準資料に含まれている類型が複数含まれている主要遺構について、その類型を含む土器群に相当するものとして抽出する。なお、竪穴住居跡の掘方・床面出土資料のうち、点数が少ないものについては、その竪穴住居跡の埋土または堆積土から土器群の比定が可能な資料が出土した場合には、その土器群に相当するものと考えた。

こうした作業の結果、Ⅰ群土器、ⅡＡ群土器、ⅡＢ群土器は以下のように設定される。

１）Ⅰ群土器の設定

Ⅰ群土器の基準資料に、これに相当するとみられるＳⅠ２・５・６・７・９・23Ｂ・24・27・31・32・34Ａ・35・41・43・48・49竪穴住居跡、基準資料のＳⅠ８・21・34Ｄ竪穴住居跡の他の層位、ＳＢ１・２・６・９掘立柱建物跡掘方、ＳＫ４土壙から出土した土器を加えて検討すると、Ⅰ群土器は以下のような組み合わせになるとみられる（表２・３、註２）。

〔土師器〕坏ⅠＡ１・ⅠＡ２・ⅠＢ１・ⅠＢ２・ⅠＣ１・ⅠＣ２類、埦ⅠＡ・ⅠＢ類、高坏Ⅰ類、蓋Ⅱ類、鉢ⅠＡ・ⅠＢ１・ⅠＢ２・Ⅱ類、壺Ⅰ類、甕ⅠＡ・ⅠＢ１・ⅠＢ２類

〔須恵器〕坏Ａ１・Ａ２・Ａ３・Ａ４・Ａ５・Ｂ１・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ１・Ｃ２・Ｄ２・Ｅ類、高台坏Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ類、高坏Ａ・Ｂ類、盤、蓋Ａ１ａ・Ａ１ｂ・Ａ１ｃ・Ａ１ｄ・Ａ２・Ｂ類、鉢Ａ１・Ａ２・Ｂ類、壺Ａ１・Ｂ１類、甕Ａ・Ｂ・Ｃ類、円面硯

２）ⅡＡ群土器の設定

ⅡＡ群土器の基準資料に、これに相当するとみられるＳⅠ１・13・17竪穴住居跡、基準資料のＳⅠ20・33Ｂ・33Ｃ竪穴住居跡の他の層位、ＳＥ３井戸跡から出土した土器を加えて検討すると、ⅡＡ群土器は以下のような組み合わせになるとみられる（表２・３、註３）。

〔土師器〕坏ⅡＡ・ⅡＢ類、埦Ⅱ類、高台坏ⅡＡ・ⅡＢ類、甕Ⅱ類

〔須恵器〕坏Ｄ１類、高台坏、蓋、鉢Ａ３類、壺、甕Ａ類

〔灰釉陶器〕皿

遺構		層位	土器群	図示点数	土師器										須恵器										須恵系土器			製塩土器	灰釉
					坏	椀	高坏	高台坏	耳皿	蓋	鉢	壺	甕	瓶	坏	高台坏	高坏	盤	蓋	鉢	壺	甕	硯	坏	小型坏	高台坏		皿
竪穴住居跡	S I 1	人為的埋土(廃絶時)	ⅡA群	4	ⅡA,(ⅡB)			ⅡA																					
	S I 2	床面(機能時)	I群	4	IB1	IA	I						(I)																
	S I 3	自然堆積土(廃絶以降)			(I)								(I)								(○)								
	S I 5	自然堆積土(廃絶以降)	I群	2	(IB1)								(I)			AorB2			A2		(○)								
	S I 6	人為的埋土(廃絶時)	I群	9	(IB1?,IC1)		I				IB		IA		A3,B3,B4						(○)								
	S I 7	貯蔵穴(機能時)	I群	2											A1,A4														
	S I 8	掘方など(構築時)	I群	5									I						A1a		C								
		床面(火災時)	I群	15	IB1						IA,IB2		IA		A3	B1,B2			A1d										
		自然堆積土(火災以後)	I群	7									IA		A1	AorB2				(○)	A,C								
	S I 9	自然堆積土(廃絶以降)	I群	2	(I)								(I)		(A3)		A		A1d		(○)								
	S I 11B	床面											(I)																
		自然堆積土(廃絶以降)	I群?		(I)								(I)								(○)								
	S I 12	検出面(廃絶以降)					(I)														(○)								
	S I 13	自然堆積土(廃絶以降)	ⅡA群	2	ⅡB,(I)								(I,Ⅱ)			(AorB)					(○)								
	S I 15	人為的埋土(廃絶時)	ⅡA群					(Ⅱ)					(Ⅱ)								(○)								
	S I 17	自然堆積土(廃絶以降)	ⅡA群	4	ⅡB			ⅡB					(I,Ⅱ)			(AorB)					(○)								
	S I 18	自然堆積土(廃絶以降)											(I)																
	S I 19	人為的埋土(廃絶時)	ⅡB群	1	(I,ⅡB)			(Ⅱ)					(I,Ⅱ)		(D1)						(○)			(○)		B			
	S I 20	床面(火災時)	ⅡA群	7	ⅡA,ⅡB	Ⅱ		ⅡB					(Ⅱ)		D1				(○)	A3									
		自然堆積土(廃絶以降)	ⅡA群	11	ⅡA,ⅡB	Ⅱ							Ⅱ,(I)		D1,(A3)				(○)		(○)	(○)							
	S I 21	貼床(構築時)	I群										(I)		(○)						(○)								
		床面(機能時)	I群		(I)								(I)		(○)														
		人為的埋土(廃絶時)	I群	42	IB2					(○)	IB2	I	IA,IB1		A1,A2,A3,A5,B4,D2	A1,B1,C	B,他		A1a	A2	B1	(○)	○						
	S I 22	床面(火災時)	I群										(I)																
		自然堆積土(火災以降)	I群	4									IA		A3,B1				(○)		B1	(○)							
	S I 23B	床面(機能時)	I群										(I)																
		人為的埋土(廃絶時)	I群	4	IB2								(I)		(○)	B1他		○			(○)								
	S I 24	人為的埋土(廃絶時)	I群	4	(I)								IA		A3,E	(AorB)				B	(○)								
	S I 26	自然堆積土(廃絶以降)											(I)								(○)								
	S I 27	自然堆積土(廃絶以降)	I群	4									(I)		A3,B4	C,(AorB)					(○)								
	S I 31	床面(機能時)	I群		(I)								(I)							(○)									
		人為的埋土(廃絶時)	I群	5	(I)								IA		A1,A3				(○)		(○)								
	S I 32	掘方(構築時)	I群	1	IB1								(I)		(○)														
		床面(機能時)	I群	3	(IB1)						IB1		(I)						A1c										
		人為的埋土(廃絶時)	I群	5	IB1		I						(I)		(A3)				A1c,A2										
	S I 33B	掘方(構築時)	ⅡA群	1									(Ⅱ)		D1														
		床面(機能時)	ⅡA群	2	(Ⅱ)								(Ⅱ)		D1						(○)	A							
		埋土・周溝(拡張時)	ⅡA群	5	ⅡB								(Ⅱ)		D1	(AorB)			(○)			(○)							○
	S I 33C	床面・土壙(機能時)	ⅡA群	3	ⅡB								(Ⅱ)		D1							A							
		主柱穴抜取穴(廃絶時)	ⅡA群	1	ⅡB																								
		自然堆積土(廃絶以降)	ⅡA群	2	ⅡB			(Ⅱ)					(Ⅱ)		(D1)	(AorB)			(○)		(○)	(○)							
	S I 34A	掘方(構築時)	I群	2	IA1								IA		(A3)	(AorB)						(○)							
	S I 34D	掘方・貼床など(構築時)	I群	3									IA		A1,A3				(○)			(○)							
		床面(火災時)	I群	17	IC1	IA,IB							IA,IB1		A1,A2,A3	A1,A2			A1d,B	A1,A2		B							
		3層上面(火災直後の廃棄)	I群	12											A3	A1,B2					A	A,B							
		自然堆積土(火災後)	I群	11	IC1,(IB1)								IA		A1,A3	B2,AorB			A1b,A1d			(○)							
	S I 35	床面(機能時)	I群	3	IC2								(I)		(○)	(AorB)													
		人為的埋土(廃絶時)	I群	3	IB2						Ⅱ		(I)		(A3)	AorB2			○			(○)							
	S I 36	周溝											(摩滅)								A2	(○)							
	S I 37A	周溝	Ⅱ群		(Ⅱ)								(Ⅱ)		(○)														
	S I 37B	床面(機能時)	ⅡB群	4	(ⅡB)								(Ⅱ)		(D1)						(○)	(○)		(○)		A			
		主柱穴抜取穴(廃絶時)	ⅡB群		(Ⅱ)								(Ⅱ)																
		自然堆積土(廃絶以降)	ⅡB群	4	(ⅡB)				ⅡA				Ⅱ		(D1)						B2	(○)		○					
	S I 38	床面など(機能時)	I群	13	(IB1,IC1)						IB1		IA,I		A3,B1,B2,C1,(A3)	A2													
		人為的埋土(廃絶時)	I群	22	IB1								IB2,I		A1,A4,B4,C2,(A3)				A1a										
	S I 39	検出面	I群?	1									(I)		A1							(○)							
	S I 40A	周溝・主柱穴抜取穴	Ⅱ群	1	Ⅱ								(Ⅱ)		(○)							(○)							
	S I 40B	主柱穴掘方(構築時)	Ⅱ群		(Ⅱ)								(Ⅱ)																
		周溝	ⅡB群	3	ⅡA,(ⅡB)							Ⅱ	(Ⅱ)							(A)		(○)		○					
	S I 40C	貼床、カマド整地など(構築時)	ⅡB群	2	ⅡB								(Ⅱ)		(○)							(○)		○					
		床面・周溝など(機能時)	ⅡB群	14	ⅡB			Ⅱ					Ⅱ		(D1)				(A)		○	(○)		○					
	S I 40D	C主柱穴抜取、嵩上げ整地など(構築時)	ⅡB群	9	(ⅡA),ⅡB			Ⅱ	ⅡB				(Ⅱ)		(D1)				(A)		(○)	(○)		○	○			○	
		自然堆積土(廃絶以降)	ⅡB群	8	(ⅡB)			ⅡB					Ⅱ	Ⅱ	A3	(AorB)			(A)	(A)	(○)	(○)		○	○	A		(○)	
	S I 41	人為的埋土(廃絶時)	I群	3	IB2?										A3		A					(○)							
	S I 43	人為的埋土(廃絶時)	I群	2	IA2,IB2								(I)																
	S I 44	人為的埋土(廃絶時)			(I,Ⅱ)								(I)																
	S I 46	人為的埋土(廃絶時)											(摩滅)																
	S I 48	床面(機能時)	I群										(I)																
		人為的埋土(廃絶時)	I群	2											A3	B1													
	S I 49	人為的埋土(廃絶時)	I群	4	IB2						Ⅱ				C2,(A3)	B1			(A)		(○)	(○)							
	S I 50	主柱穴掘方(構築時)											(I)																
	S I 51	自然堆積土(廃絶以降)	I群?	2									(I)		A1	B1						(○)							
	S I 52	床面(火災時)											(I)		(○)							(○)							
		自然堆積土(火災以後)			(IAorIB1)								(I)		(A3)				(A)			(○)							
	S I 53	人為的埋土(廃絶時)	I群	8	IB2?					Ⅱ			(I)		A3	A2			(A)										
	S I 55	周溝(廃絶時)			(IC1)																								

表2　竪穴住居跡出土土器の組成

□土器群設定の基準となる遺構　（　）未掲載の底部破片　○あり

遺構		層位	土器群	図示点数	土師器										須恵器									須恵系土器			製塩土器	灰釉
					坏	椀	高坏	高台坏	耳皿	蓋	鉢	壺	甕	甑	坏	高台坏	高坏	盤	蓋	鉢	壺	甕	硯	坏	小型坏	高台坏		皿
掘立柱建物跡	SB1	掘方(建設時)	Ⅰ群	1	(ⅠA or ⅠB1)									(Ⅰ)	A3													
		柱痕跡(廃絶以降)	Ⅰ群?		(Ⅰ)									(Ⅰ)						(A)		(○)						
	SB2	掘方(建設時)	Ⅰ群	8	ⅠB2									(Ⅰ)	A5,B3		B		(A)	B		C	○					
		柱痕跡(廃絶以降)	Ⅰ群?		(Ⅰ)									(Ⅰ)	(○)				(A)			(○)						
	SB3	掘方(建設時)	Ⅰ群?		(ⅠA or ⅠB1)									(Ⅰ)	(○)							(○)						
		柱痕跡(廃絶以降)	Ⅰ群?	1	(ⅠC1)									(Ⅰ)	B2							(○)						
	SB4	掘方(建設時)	Ⅰ群?		(Ⅰ)									(Ⅰ)	(A3)							(○)						
		柱痕跡(廃絶以降)	Ⅰ群?											(Ⅰ)	(○)													
	SB5	掘方(建設時)	Ⅰ群?		(Ⅰ)									(Ⅰ)														
		抜取穴(廃絶時)	Ⅰ群?											(Ⅰ)														
	SB6	掘方(建設時)	Ⅰ群	3	ⅠC1		Ⅰ							(Ⅰ)	(A3)	AorB2						(○)						
		抜取穴(廃絶時)	Ⅰ群?	1										(Ⅰ)	B4													
		柱痕跡(廃絶以降)	Ⅰ群?		(ⅠA or ⅠB1)									(Ⅰ)														
	SB7	掘方(建設時)	Ⅰ群?	1										ⅠA														
		柱痕跡(廃絶以降)																				(○)						
	SB8	掘方(建設時)	Ⅰ群?											(Ⅰ)														
	SB9	掘方(建設時)	Ⅰ群	2	ⅠB2									ⅠA	(B4?)													
		柱痕跡(廃絶以降)			(Ⅰ)									(Ⅰ)	(A5orB4)				(A)									
	SB10	掘方(建設時)	Ⅰ群?											(Ⅰ)	(○)							(○)						
		抜取穴(廃絶時)													(○)													
	SB11	抜取穴(廃絶時)	Ⅰ群?	1	ⅠB1									(Ⅰ)								(○)						
	SB12	掘方(建設時)	Ⅰ群?											(Ⅰ)								(○)						
		抜取穴(廃絶時)												(Ⅰ)														
	SB14	掘方(建設時)	Ⅰ群?											(Ⅰ)								(○)						
井戸跡	SE2	掘方(構築時)	Ⅰ群	1											A3													
		自然堆積土(廃絶以降)	Ⅰ群	1										(Ⅰ)	D2				(A)		(○)	(○)						
	SE3	自然堆積土(廃絶以降)	ⅡA群	5	ⅡB			ⅡA						(Ⅰ,Ⅱ)	D1						(○)	(○)						
土壙	SK1	自然堆積土(廃絶以降)												(Ⅰ)	(○)					(A)		(○)						
	SK3	人為的埋土(廃絶時)		1										(Ⅰ)	墨書「富」													
	SK4	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群	1	(ⅠC1)									(Ⅰ)	(A3,A5orB4)				A1c			(○)						
	SK5	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群?	1			Ⅰ							(Ⅰ)	(○)	B2						(○)						
	SK6	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群?		(ⅠA or ⅠB1)									(Ⅰ)	(○)							(○)						
	SK7	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群?	1	(ⅠA or ⅠB1)		Ⅰ							(Ⅰ)	(A3)					(A)		(○)						
	SK8	人為的埋土(廃絶時)	Ⅰ群?		(Ⅰ)									(Ⅰ)								(○)						
	SK12	自然堆積土(廃絶以降)	ⅡB群	25	ⅡA,ⅡB		(Ⅰ)	ⅡA,ⅡB	ⅡA					(Ⅱ)	D1							(○)		○		○	○	
	SX1	遺物包含層	ⅡA群	15	ⅡB,(Ⅰ)			ⅡA							D1													

表3　掘立柱建物跡、井戸跡、土壙など出土土器の組成　□土器群設定の基準となる遺構　( )未掲載の底部破片　○あり

3）ⅡB群土器の設定

ⅡB群土器の基準資料に、これに相当するとみられるS40B竪穴住居跡、基準資料のSⅠ37B竪穴住居跡の他の層位、SK12土壙から出土した土器を加えて検討すると、ⅡB群土器は以下のような組み合わせになるとみられる（表2・3、註4）。

〔土師器〕坏ⅡB類、高台坏ⅡA・ⅡB類、耳皿ⅡA・ⅡB類、甕Ⅱ類、甑Ⅱ類

〔須恵器〕坏D1類、蓋A類、壺、甕

〔須恵系土器〕坏、小型坏、高台坏A・B類

〔製塩土器〕

（3）Ⅰ群土器の特徴

前項で設定したⅠ群土器の基準資料とその相当資料のうち、竪穴住居跡から出土したものについて、掲載した土器と未掲載の底部・高台部破片を各遺構・層位別に集計した（表4―1・2）。また、Ⅰ群土器を第136～139図に遺構別に集成した。

これらの竪穴住居跡から出土した土器は、出土層位の特徴からみて以下のような分類が可能である。

A群　焼失せずに人為的に埋め戻された竪穴住居跡の床面・埋土、焼失した竪穴住居跡の掘方・貼床などから出土した土器：SⅠ8・21・34A・34D竪穴住居跡掘方・貼床、SⅠ2・21・23B・32・35・38・48竪穴住居跡床面、SⅠ7竪穴住居跡貯蔵穴、SⅠ6・21・22・23B・

24・31・32・35・38・41・43・48・49・53竪穴住居跡埋土

B群　焼失した竪穴住居跡の床面などから出土した土器：ＳＩ８・34Ｄ竪穴住居跡床面、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡３層上面

C群　自然堆積した竪穴住居跡から出土した土器：ＳＩ５・８・９・27・39竪穴住居跡堆積土

こうした分類からみて、土器の特徴に相違があるかどうか検討するため、表４ではこの分類に応じた集計をした。結果は、①土師器では坏ＩＡ１・ＩＡ２・ＩＢ２・ＩＣ２類、高坏、鉢ＩＢ１・Ⅱ類、甕ＩＢ類、須恵器では坏Ａ４・Ｂ１・Ｃ１・Ｃ２・Ｃ２・Ｅ類、蓋Ａ１ａ類、盤、高坏Ｂ類、鉢Ｂ類、

竪穴住居跡	層位	位置付け		土師器 坏 ＩＡ１	ＩＡ２	ＩＢ１	ＩＢ２	ＩＢ？？	ＩＣ１	ＩＣ２	椀 ＩＡ	ＩＢ	高坏	蓋 Ⅱ	鉢 ＩＡ	ＩＢ１	ＩＢ２	Ⅱ	甕 ＩＡ	ＩＢ１	ＩＢ２	Ⅰ	壺	計
ＳＩ２	床面	機能時	Ａ群			1					1		2											4
ＳＩ５	堆積土	廃絶以降	Ｃ群			2																1		3
ＳＩ６	埋土	廃絶時	Ａ群			1			1				3			1			1					7
ＳＩ７	貯蔵穴	機能時	Ａ群																					0
ＳＩ８	掘方など	構築時	Ａ群																			3		3
	床面他	火災時	Ｂ群			1									1		1		2					5
	堆積土	火災以後	Ｃ群																1			4		5
ＳＩ９	堆積土	廃絶以降	Ｃ群																					0
ＳＩ21	埋土	廃絶時	Ａ群			2	3						2				2		4	1		6	1	21
ＳＩ22	埋土	廃絶時	Ａ群																1					1
ＳＩ23Ｂ	床面	機能時	Ａ群																			2		2
	埋土	廃絶時	Ａ群				1															1		2
ＳＩ24	埋土	廃絶時	Ａ群																1					1
ＳＩ27	堆積土	廃絶以降	Ｃ群																			1		1
ＳＩ31	埋土	廃絶時	Ａ群																1			2		3
ＳＩ32	掘方	構築時	Ａ群			1																		1
	床面	機能時	Ａ群			1										2								3
	埋土	廃絶時	Ａ群			2							1									1		4
ＳＩ34Ａ	掘方	構築時	Ａ群	1															1					2
ＳＩ34Ｄ	掘方など	構築時	Ａ群																1			1		2
	床面など	火災時	Ｂ群						1		1	1							1		1	2		7
	３層上面	火災直後	Ｂ群																			1		1
	堆積土	火災後	Ｃ群						1										1			3		5
ＳＩ35	床面	機能時	Ａ群							1														1
	埋土	廃絶時	Ａ群				1											1				1		3
ＳＩ38	床面など	機能時	Ａ群			2			2							1			3	1		2		11
	埋土	廃絶時	Ａ群			3															1	3		7
ＳＩ39	検出面	廃絶以降	Ｃ群																					0
ＳＩ41	埋土	廃絶時	Ａ群					1																1
ＳＩ43	埋土	廃絶時	Ａ群		1		1																	2
ＳＩ48	床面	機能時	Ａ群																			1		1
	埋土	廃絶時	Ａ群																					0
ＳＩ49	埋土	廃絶時	Ａ群				1											1						2
ＳＩ53	埋土	廃絶時	Ａ群					1						1								2		4
合計				1	1	16	7	2	5	1	2	1	8	1	1	4	3	2	18	2	2	37	1	115
桃生城存続期（構築・廃絶時）			Ａ群	1	1	13	7	2	3	1	1	0	8	1	0	4	2	2	13	2	1	25	1	88
桃生城廃絶期（火災時）			Ｂ群	0	0	1	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	1	0	3	0	1	3	0	13
桃生城廃絶期以降（廃絶以降）			Ｃ群	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	9	0	14
合計				1	1	16	7	2	5	1	2	1	8	1	1	4	3	2	18	2	2	37	1	115

表４－１　遺構別にみたＩ群土器の組成　―土師器―

掲載資料に未掲載の破片資料を併せて集計

未掲載資料は、坏類については底部破片、甕については口縁部破片、底部破片を集計。

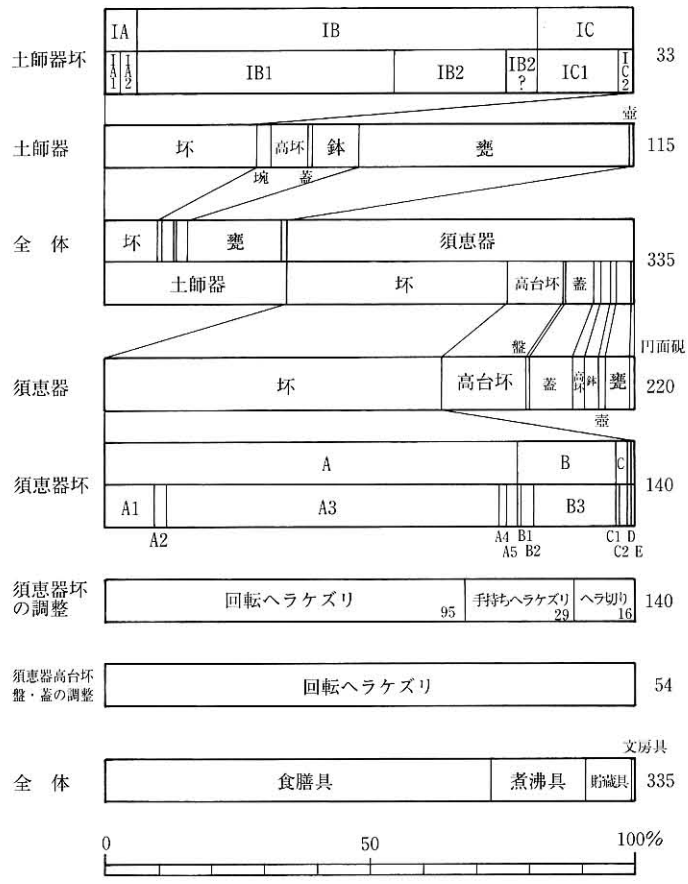
□ 土器群設定の基準となる遺構

竪穴住居跡	層位	位置付け		須恵器 坏 A1	A2	A3	A4	A5	B1	B3	B4	C1	C2	D2	E	高台坏 A1	A2	B1	B2	C	A or B	盤	蓋 A1a	A1b	A1c	A1d	A2	B	他	高坏 A	B	他	鉢 A1	A2	B	壺 A1	B1	甕 A	B	C	他	硯	計	土師器・須恵器合計
ＳＩ２	床面	機能時	Ａ群																																									0	4
ＳＩ５	堆積土	廃絶以降	Ｃ群																		1						1																	2	5
ＳＩ６	埋土	廃絶時	Ａ群			4				1	1																														1			7	14
ＳＩ７	貯蔵穴	機能時	Ａ群	1			1																																					2	2
ＳＩ８	掘方など	構築時	Ａ群			1																	1																	2			4	7
	床面他	火災時	Ｂ群			6												2	1							1								1									11	16
	堆積土	火災以後	Ｃ群	3		4															3																	1		2			13	18
ＳＩ９	堆積土	廃絶以降	Ｃ群			1																				1				1													3	3
ＳＩ21	埋土	廃絶時	Ａ群	1	1	19		1			2			1		1		2		1	1		3			1			1		1	1		1			1					2	41	62
ＳＩ22	埋土	廃絶時	Ａ群			1			1																																			3	4
ＳＩ23Ｂ	床面	機能時	Ａ群																																									0	2
	埋土	廃絶時	Ａ群															1			1	1																						3	5
ＳＩ24	埋土	廃絶時	Ａ群			2									1						1														1									5	6
ＳＩ27	堆積土	廃絶以降	Ｃ群			1					1									1	1																				1			5	6
ＳＩ31	埋土	廃絶時	Ａ群	1		1																										1		1										4	7
ＳＩ32	掘方	構築時	Ａ群																																									0	1
	床面	機能時	Ａ群																						1																			1	4
	埋土	廃絶時	Ａ群			3															1					1		1																6	10
ＳＩ34Ａ	掘方	構築時	Ａ群			2															1																							3	5
ＳＩ34Ｄ	掘方など	構築時	Ａ群	1		1																																						2	4
	床面など	火災時	Ｂ群	1	1	3										1	1									1		1					1	1					1					12	19
	３層上面	火災直後	Ｂ群			10					1					1			1																	1		1	1					16	17
	堆積土	火災後	Ｃ群	3		13		1		1									1		5				1		1																	26	31
ＳＩ35	床面	機能時	Ａ群		1																1																							2	3
	埋土	廃絶時	Ａ群			1															1								1															3	6
ＳＩ38	床面など	機能時	Ａ群			2		1		1	2	1					1																											8	19
	埋土	廃絶時	Ａ群	1		2	1				15			1									1																					21	28
ＳＩ39	検出面	廃絶以降	Ｃ群	1																																								1	1
ＳＩ41	埋土	廃絶時	Ａ群			1																										1												2	3
ＳＩ43	埋土	廃絶時	Ａ群																																									0	2
ＳＩ48	床面	機能時	Ａ群																																									0	1
	埋土	廃絶時	Ａ群			1												1																										2	2
ＳＩ49	埋土	廃絶時	Ａ群			2							1					1																										4	6
ＳＩ53	埋土	廃絶時	Ａ群			7												1																										8	12
合計				13	3	88	2	3	1	3	22	1	2	1	1	3	3	7	3	2	17	1	5	1	2	5	2	1	2	2	1	2	1	4	1	1	2	2	2	4	2	2	220	335
桃生城存続期（構築・廃絶時）			Ａ群	5	2	50	2	2	1	2	20	1	2	1	1	1	2	5	0	1	7	1	5	0	2	1	1	0	2	1	1	2	0	2	1	0	2	0	0	2	1	2	131	219
桃生城廃絶期（火災時）			Ｂ群	1	1	19	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1	2	2	0	0	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	2	0	1	0	1	2	0	0	0	39	52
桃生城廃絶期以降（廃絶以降）			Ｃ群	7	0	19	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	10	0	0	1	0	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	0	50	64
合計				13	3	88	2	3	1	3	22	1	2	1	1	3	3	7	3	2	17	1	5	1	2	5	2	1	2	2	1	2	1	4	1	1	2	2	2	4	2	2	220	335

表４－２　遺構別にみたＩ群土器の組成　―須恵器―

種類	器種		点数		土器総数に対する割合		土師器・須恵器別の割合	
土師器	坏	ＩＡ１	1	33	0.3	9.9	0.9	28.7
		ＩＡ２	1		0.3		0.9	
		ＩＢ１	16		4.8		13.9	
		ＩＢ２	7		2.1		6.1	
		ＩＢ２？	2		0.6		1.7	
		ＩＣ１	5		1.5		4.3	
		ＩＣ２	1		0.3		0.9	
	椀	ＩＡ	2	3	0.6	0.9	1.7	2.6
		ＩＢ	1		0.3		0.9	
	高坏	Ⅰ	8	8	2.4	2.4	7.0	7.0
	蓋	Ⅱ	1	1	0.3	0.3	0.9	0.9
	鉢	ＩＡ	1	10	0.3	3.0	0.9	8.7
		ＩＢ１	4		1.2		3.5	
		ＩＢ２	3		0.9		2.6	
		Ⅱ	2		0.6		1.7	
	甕	ＩＡ	18	59	5.4	17.6	15.7	51.3
		ＩＢ１	2		0.6		1.7	
		ＩＢ２	2		0.6		1.7	
		Ⅰ	37		11.0		32.2	
	壺	Ⅰ	1	1	0.3	0.3	0.9	0.9
	計			115		34.3		100.0
須恵器	坏	Ａ１	13	140	3.9	41.8	5.9	63.6
		Ａ２	3		0.9		1.4	
		Ａ３	88		26.3		40.0	
		Ａ４	2		0.6		0.9	
		Ａ５	3		0.9		1.4	
		Ｂ１	1		0.3		0.5	
		Ｂ３	3		0.9		1.4	
		Ｂ４	22		6.6		10.0	
		Ｃ１	1		0.3		0.5	
		Ｃ２	2		0.6		0.9	
		Ｄ２	1		0.3		0.5	
		Ｅ	1		0.3		0.5	
	高台坏	Ａ１	3	35	0.9	10.4	1.4	15.9
		Ａ２	3		0.9		1.4	
		Ｂ１	7		2.1		3.2	
		Ｂ２	3		0.9		1.4	
		Ｃ	2		0.6		0.9	
		ＡorＢ２	17		5.1		7.7	
	盤		1	1	0.3	0.3	0.5	0.5
	蓋	Ａ１ａ	5	18	1.5	5.4	2.3	8.2
		Ａ１ｂ	1		0.3		0.5	
		Ａ１ｃ	2		0.6		0.9	
		Ａ１ｄ	5		1.5		2.3	
		Ａ２	2		0.6		0.9	
		Ｂ	1		0.3		0.5	
		他	2		0.6		0.9	
	高坏	Ａ	2	5	0.6	1.5	0.9	2.3
		Ｂ	1		0.3		0.5	
		他	2		0.6		0.9	
	鉢	Ａ１	1	6	0.3	1.8	0.5	2.7
		Ａ２	4		1.2		1.8	
		Ｂ	1		0.3		0.5	
	壷	Ａ１	1	3	0.3	0.9	0.5	1.4
		Ｂ１	2		0.6		0.9	
	甕	Ａ	2	10	0.6	3.0	0.9	4.5
		Ｂ	2		0.6		0.9	
		Ｃ	4		1.2		1.8	
		他	2		0.6		0.9	
	円面硯		2	2	0.6	0.6	0.9	0.9
	計			220		65.7		100.0
合計				335		100.0		
食膳具		土師器	45	244	13.4	72.8		
		須恵器	199		59.4			
煮沸具		土師器	59	59	17.6	17.6		
貯蔵具		土師器	11	30	3.3	9.0		
		須恵器	19		5.7			
文房具		須恵器	2	2	0.6	0.6		
合計				335		100.0		

表５　Ⅰ群土器の組成比



第135図　Ⅰ群土器の組成比

円面硯がＡ群に含まれている、②土師器では椀ＩＢ類、鉢ＩＡ類、須恵器では高台坏Ｂ２類、蓋Ｂ類、鉢Ａ１類、壺Ｂ１類、甕Ａ・Ｂ類がＢ群に含まれているなど若干の相違も認められた。しかし、これらの出土点数が少ないので、こうした相違が時期差につながるかどうか断定できない。

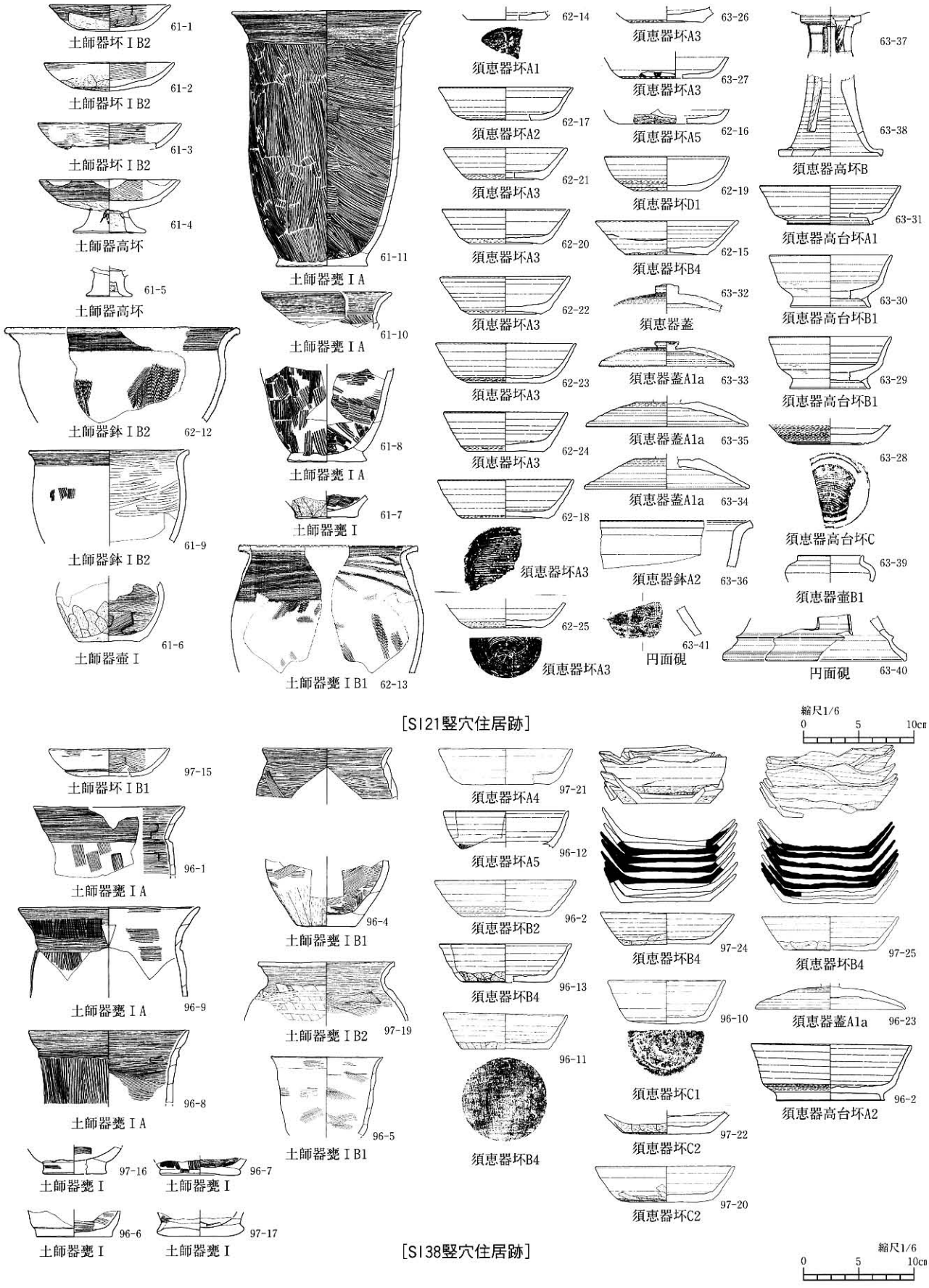
そこで、これらＡ群・Ｂ群・Ｃ群をさらに集計し、Ⅰ群土器全体の特徴の傾向性をつかむことにしたい（表５、第135図）。

Ⅰ群土器は土師器・須恵器で構成され、須恵器が約2/3、土師器が約1/3を占める。

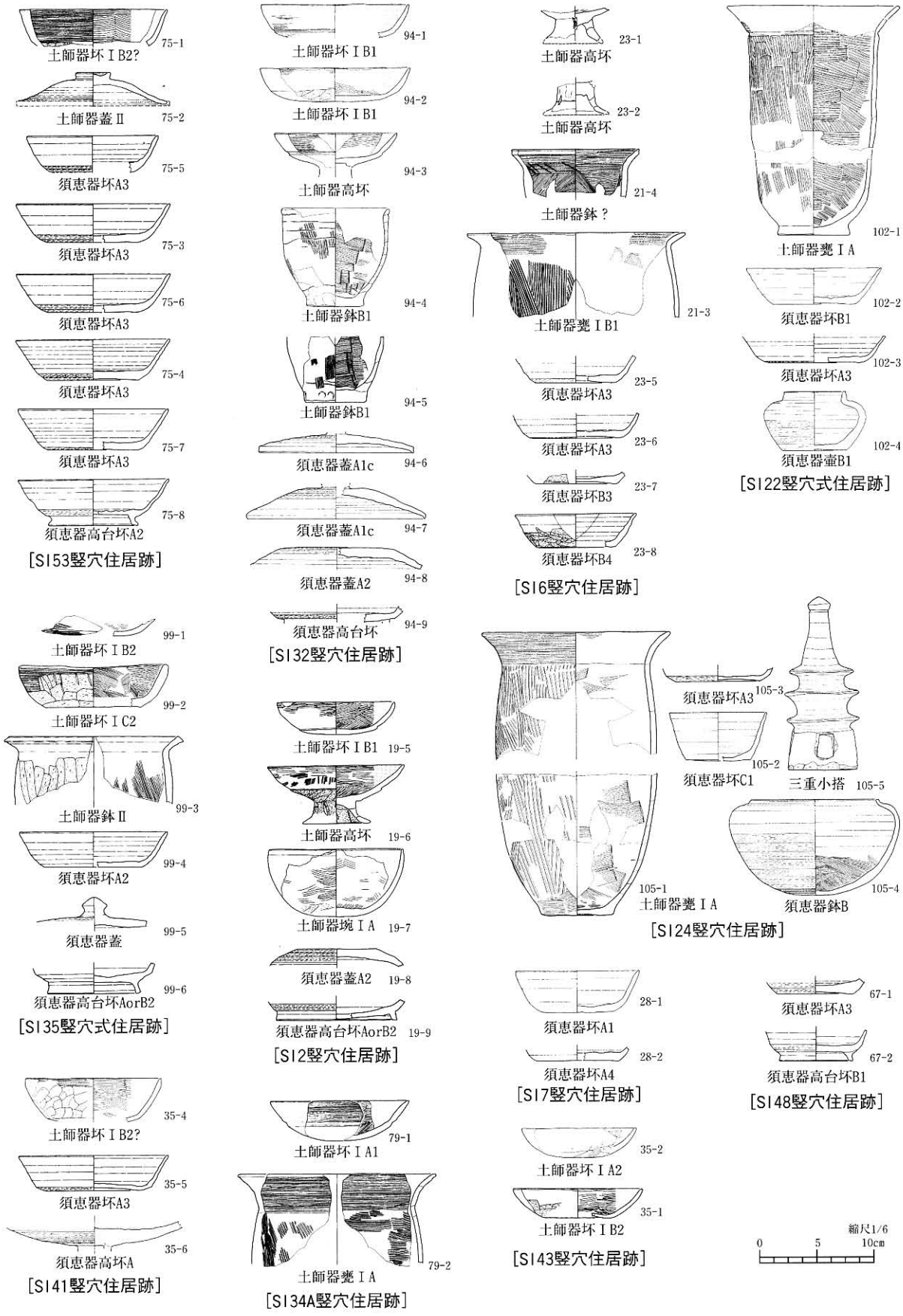
このうち土師器は非ロクロ調整のⅠ類が主体を占め、ロクロ調整のⅡ類がごく少数ある。

土師器Ⅰ類には坏・椀・高坏・鉢・甕・壷、土師器Ⅱ類には蓋・鉢がある。

土師器のうち甕が約半数、坏が1/3近くを占める。次いで、鉢、高坏がやや多く、椀、蓋、壺が少ない。坏の中で



第136図　Ⅰ群土器（1）―桃生城造営～存続期の基準資料



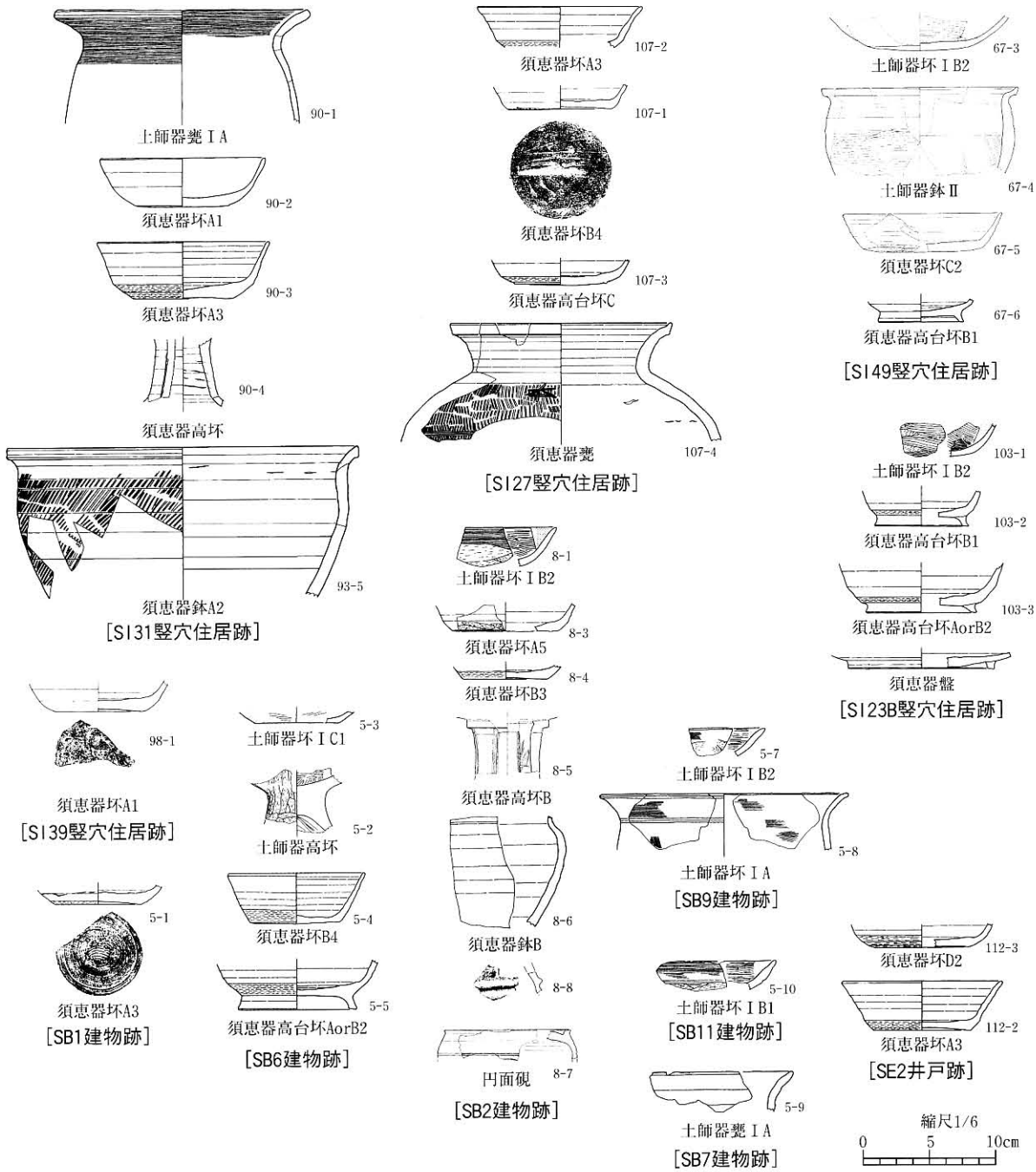
第137図　Ⅰ群土器（２）―桃生城造営～存続期と推定される資料

は丸底気味のＩＢ類が主体を占め、丸底のＩＡ類、平底のＩＣ類は少ない。甕では長胴のＩＡ類が主体を占め、球胴のＩＢ類が少ない。

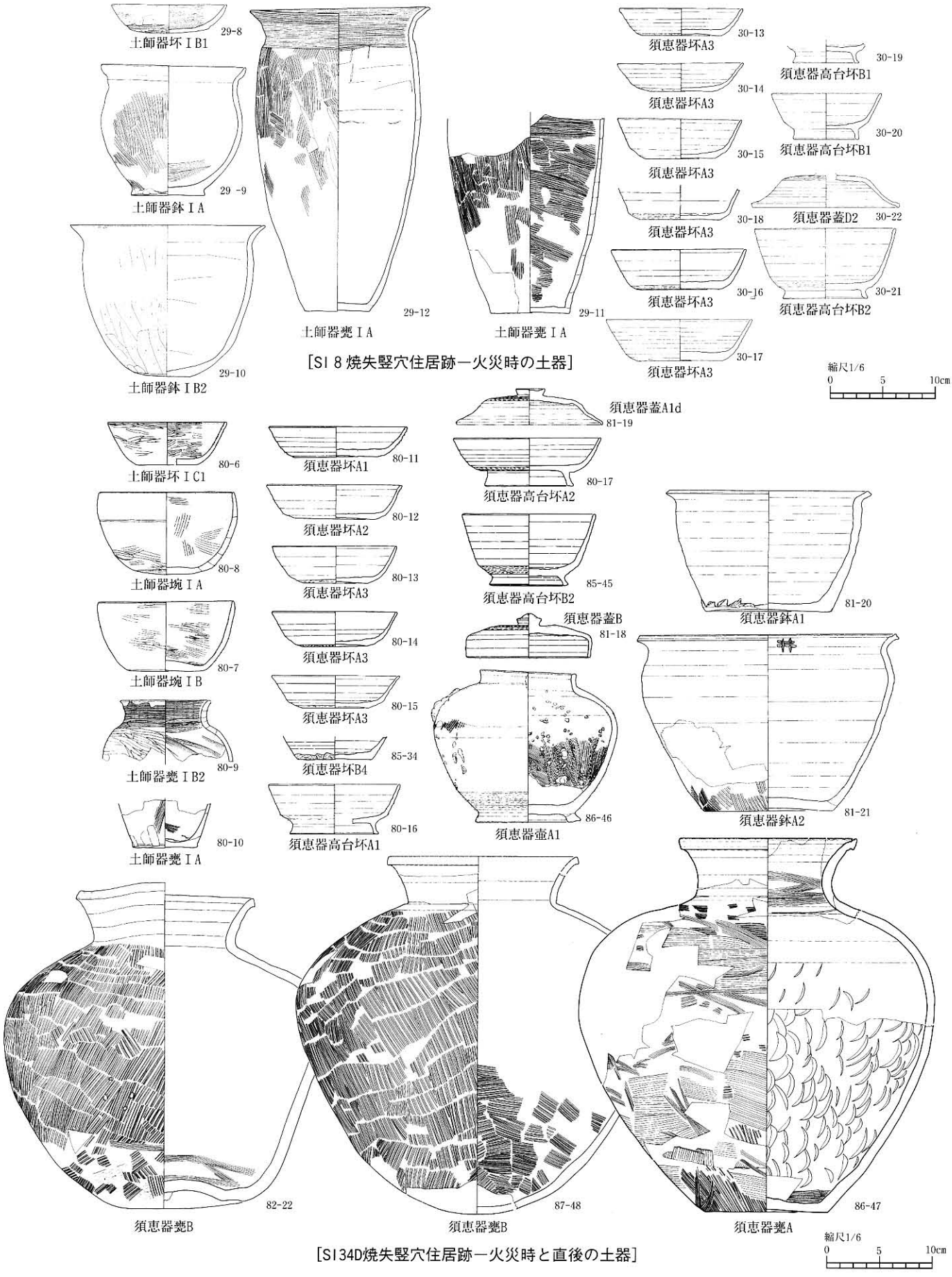
須恵器には坏・高台坏・盤・蓋・高坏・鉢・壺・甕がある。このうち坏が約2/3と主体を占め、次いで高台坏、蓋がとやや多く、盤・高坏・鉢・壺・甕・円面硯は少ない。

須恵器坏の中で点数が多いのは坏Ａ３類で、体下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が回転ヘラケズリで再調整されている。次に多いのが坏Ｂ４類で、体部下端から口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が手持ちヘラケズリで再調整されている。

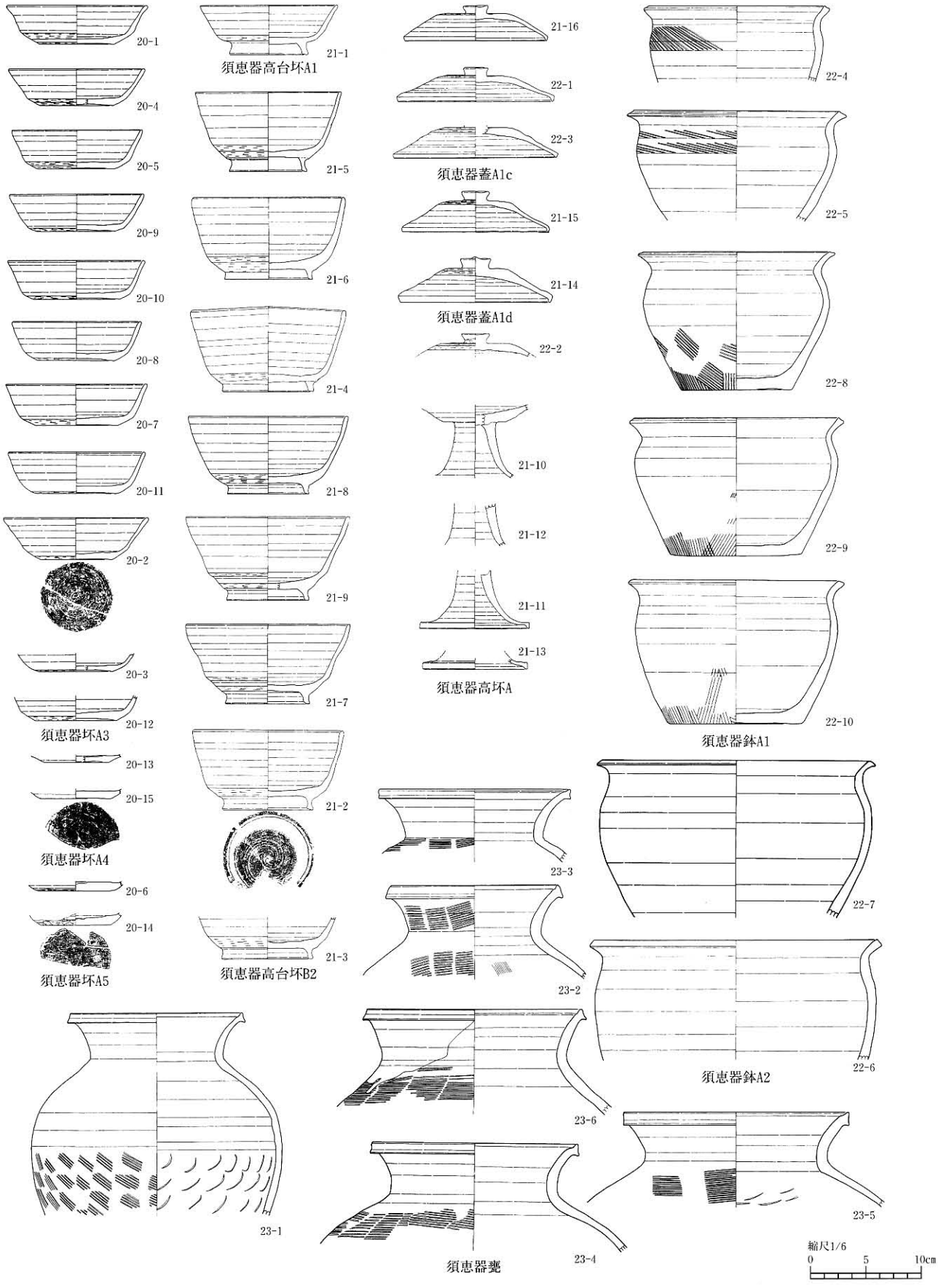
須恵器の再調整に回転ヘラケズリを用いるものは、この他には坏Ａ２・Ｂ３・Ｄ２類、高台坏Ａ１・



第138図　Ｉ群土器（３）―桃生城造営～存続期と推定される資料



第139図　Ⅰ群土器（4）—桃生城廃絶期の基準資料



※宮城県多賀城跡調査研究所，1995，『桃生城跡Ⅲ』をもとに作成

第140図　宝亀５年（774）７月に焼失した桃生城跡政庁ＳＢ17西脇殿跡出土の須恵器

Ａ２・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ類、盤、蓋Ａ１・Ｂ類、高坏Ａ類、鉢Ｂ類、壺Ａ１・Ｂ１類がある。須恵器の大多数が回転ヘラケズリで再調整されている、というのが最大の特徴となっている（第135図）。

また、須恵器坏・高台坏で底部の切り離しがわかるものはヘラ切りのもの（第32図１、第80図1、第85図42・43、第97図24・25など）が多く、静止糸切りのもの（第43図53、第62図18）、回転糸切りのもの（第5図１、第62図25、第63図28）が少数であるというのも特徴の一つである。

土師器・須恵器を食膳具（土師器坏・椀・高坏、須恵器坏・高台坏・盤・蓋・高坏）、煮沸具（土師器甕）、貯蔵具（土師器鉢、須恵器鉢・壺・甕）、文房具（硯）に分けると、食膳具が土師器・須恵器とも主体を占め、煮沸具、貯蔵具が土師器・須恵器とも少なく、文房具はきわめて少ない（表６、第135図）。

このように、Ｉ群土器は土師器が非ロクロ調整のものを主体とし、土師器坏では丸底気味のＩＢ類、須恵器坏では体下端が屈曲してから体部と口縁部が直線的に外傾し、体部下端から底部が回転ヘラケズリで再調整されている坏Ａ３類が主体を占め、須恵器の大多数が回転ヘラケズリで再調整されていることなどで特徴付けられる。

（４）Ｉ群土器の年代

Ｉ群土器と類似する資料に、本遺跡のすぐ西に隣接する桃生城跡の政庁ＳＢ17西脇殿跡から出土した土器群がある（阿部・佐藤編，1995；第140図）。この土器群は、土師器は出土していないものの須恵器が比較的多く出土しており、宝亀５年（774）７月の海道蝦夷の攻撃によって焼失した頃の一括土器群として位置付けられている。下限年代は宝亀５年（774）７月、上限年代は桃生城が造営され始めた天平宝字２年（758）頃であり、宮城県内における８世紀第３四半期頃の基準土器群である。

前述の分類にあてはめると、桃生城跡ＳＢ17西脇殿出土土器群の須恵器には、坏Ａ３・Ａ４・Ａ５類、高台坏Ａ１・Ｂ２類、高坏Ａ類、蓋Ａ１ｃ・Ａ１ｄ類、鉢Ａ１・Ａ２類、甕Ａ類または甕Ｂ類があり、本遺跡のＩ群土器と同様に坏・高台坏・高坏・蓋の調整に回転ヘラケズリが主に用いられている（註５）。量的に最も多い須恵器坏では、Ｉ群土器と同様に回転ヘラケズリされたＡ３類が主体を占め、本遺跡出土のＡ３類と器形・大きさも近似する（註６）。高台坏ではＢ２類、鉢ではＡ１類が多く、特徴的である。高台坏・蓋・鉢も本遺跡のものと器形・法量が近似し、調整技法も同様である。

桃生城跡ＳＢ17西脇殿出土土器群は、本遺跡のＩ群土器の須恵器と種類・大きさ・調整技法などがよく似ているとみなせる。

Ｉ群土器の基準資料の一つであるＳＩ34Ｄ竪穴住居跡は、拡張された4番目のものであり、それが火災にあって再建されていない。出土した須恵器の特徴は桃生城跡政庁ＳＢ17西脇殿跡出土土器群（阿部・佐藤編，1995；第140図）のものと酷似する。当初のＳＩ34Ａ竪穴住居跡もＩ群土器に相当し、３回建て直されたＳＩ34竪穴住居跡（ＳＩ34Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）が存続した間にＩ群土器が使用され続けられている。

ＳＩ34Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡が存続した時間幅がどの程度であったか知ることはできないが、本遺跡が桃生城跡と密接な関連をもっていることから、ＳＩ34Ａ竪穴住居跡は桃生城が造営され始め

た天平宝字２（758）年頃よりは古くはならないとみられる。したがって、ＳＩ34Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ竪穴住居跡は、桃生城存続期〔天平宝字２（758）年頃～宝亀５（774）年７月〕の時間幅の範囲内に収まるとみられる。

以上のことから、Ｉ群土器は桃生城存続期〔天平宝字２年（758）頃～宝亀５年（774）７月〕のもので、８世紀第３四半期頃に位置付けられる（註７）。

（５）ⅡＡ群土器の特徴

ⅡＡ群土器の基準資料とその相当資料について、掲載した土器と未掲載の底部・高台部破片を各遺構・層位別に集計した（表６）。また、ⅡＡ群土器を第142図に遺構別に集成した。

ⅡＡ群土器を出土した遺構のうち、ＳＩ20竪穴住居跡は火災で焼失した竪穴住居跡であり、火災時の床面から出土した土器は良好な一括資料である。土師器は坏ⅡＡ・ⅡＢ類、椀Ⅱ類、高台坏ⅡＢ類、須恵器は坏Ｄ１類、鉢Ａ３類からなる。ＳＩ20竪穴住居跡の堆積土から出土した土器は火災後のものだが、本来はこの竪穴住居跡に帰属した可能性が高く、よく似た組成を示している。土師器は坏ⅡＡ・ⅡＢ類、椀Ⅱ類、高台坏ⅡＢ類、甕Ⅱ類、須恵器は坏Ｄ１類からなる。

ⅡＡ群土器を出土した遺構を通してみると、ⅡＡ群土器は土師器、須恵器、灰釉陶器で構成されている。このうち土師器が1/2強と主体を占め、次いで須恵器が多く、灰釉陶器はごく少数である（表７、第143図）。Ｉ群土器の約2/3が須恵器で土師器が約1/3であること（表５、第135図）と比べると、須恵器と土師器の比率が逆転し、わずかであるが灰釉陶器が含まれている。

土師器はすべてロクロ調整のⅡ類で、坏ⅡＡ・ⅡＢ類、椀Ⅱ類、高台坏ⅡＢ類、甕Ⅱ類がある。このうち坏が過半数以上を占め、次いで高台坏が多く、椀・甕は少ない（表７、第142図）。

土師器坏は坏ⅡＢ類が主体を占める。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。22点の平均値でみると、口径13.7cm、底径６.1cm、器高4.9cm、底径／口径比0.436で、口径に比べ底径が小さい。土師器坏には他にⅡＡ類がわずかに含まれる。これは底部が回転糸切りで切り離された後、手持ちヘラケズリで再調整されている。高台坏ⅡＢ類も特徴的な器形で、坏ⅡＢ類を用いて「ハ」字状に外に開く高台を付けている。

須恵器には坏Ｄ１類、高台坏Ａ類またはＢ類、鉢Ａ３類、甕Ａ類がある。これらのうち量的に最も多いのは坏Ｄ１類である（表11、第142図）。底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整がされていない。10点の平均値でみると、口径14.0cm、底径６.1cm、器高4.2cm、底径／口径比0.430で、口径に比べ底径が小さい。法量・器形は土師器坏ⅡＢ類と似ている。

灰釉陶器には猿投窯窯製品の黒笹90号窯式第２型式のⅢが１点ある。

土師器・須恵器・灰釉陶器を食膳具（土師器坏・椀・高台坏、須恵器坏・高台坏、灰釉陶器Ⅲ）、煮沸具（土師器甕）、貯蔵具（須恵器鉢・甕）に分けると、食膳具が主体を占め、煮沸具、貯蔵具がきわめて少ない（表７、第142図）。

このように、ⅡＡ群土器は土師器が過半数を占め、いずれもロクロ調整であること、土師器坏では回転糸切り無調整の坏ⅡＢ類が主体となるものの、手持ちヘラケズリで再調整された坏ⅡＡ類もわず

かに含まれること、土師器に埦・高台坏が含まれること、須恵器坏も回転糸切りで底部が切り離されたままの坏D１類のみからなること、須恵系土器を含まないことなどで特徴付けられる。

土器群	遺構	層位	位置付け	土師器 坏		埦	高台坏			耳皿		壺	甕		甑	須恵器 坏		高台坏	鉢	壺		甕	須恵系土器 坏	小型坏	高台坏			製塩土器	灰釉 皿	計
				IIA	IIB	II	IIA	IIB	II	IIA	IIB	II	I	II	II	A3	D1	AorB	A3	A	B2				A	B	不明			
IIA群土器	SI1	埋土	廃絶時	1	2				2				(1)	3																8
	SI13	堆積土	廃絶以降		4								(1)					1												5
	SI17	堆積土	廃絶以降		1			2	2				(1)					1				1								7
	SI20	床面	火災時	1	1	1		1									2		1											7
		堆積土	廃絶以降	1	2	1		2	1				(2)	3		(1)	5					2								17
	SI33B	掘方	構築時														1													1
		床面	機能時														1					1								2
		埋土・周溝	拡張時		3									1			1	1											1	7
	SI33C	床面・土壙1	機能時		2												2					1								5
		主柱穴抜取穴	廃絶時		1																									1
		堆積土	廃絶以降		7				1					3			3	2				1								17
	SE3	堆積土	廃絶以降		11				5								11													27
	小計			2	27	2		3	7				(5)	7		(1)	26	5	1			5							1	86
IIB群土器	SI19	埋土	廃絶時		7				1								1						5			1				15
	SI37B	床面	機能時		1																				4					5
		堆積土	廃絶以降		3					1				1		(1)					1		2							8
	SI40B	周溝・埋土	拡張時	1	1							1													1					4
	SI40C	貼床、カマド整地など	構築時	1	4				1					3									1							10
		床面、周溝など	機能時		11									3			3			1			3							21
	SI40D	嵩上げ整地	構築時	1	19				2		1			3		(2)	4					1	11	1			1	2		46
		堆積土	廃絶以降	1	30			2	3					3	1	(5)	1	(1)				2	16	2	1		6	2		70
	SK12	堆積土	廃絶以降	3	30		1		3	2				5			4						10				1	4		63
	小計			7	106		1	2	10	3	1	1		18	1		13			1	1	3	48	3	6	1	8	8		242
合計				9	133	2	1	5	17	3	1	1	(5)	25	1	(10)	39	5	1	1	1	8	48	3	6	1	8	8	1	328

表６　II群土器の組成

掲載資料＋底部破片　（数字）はＩ群土器の混入。　□土器群設定の基準となる遺構

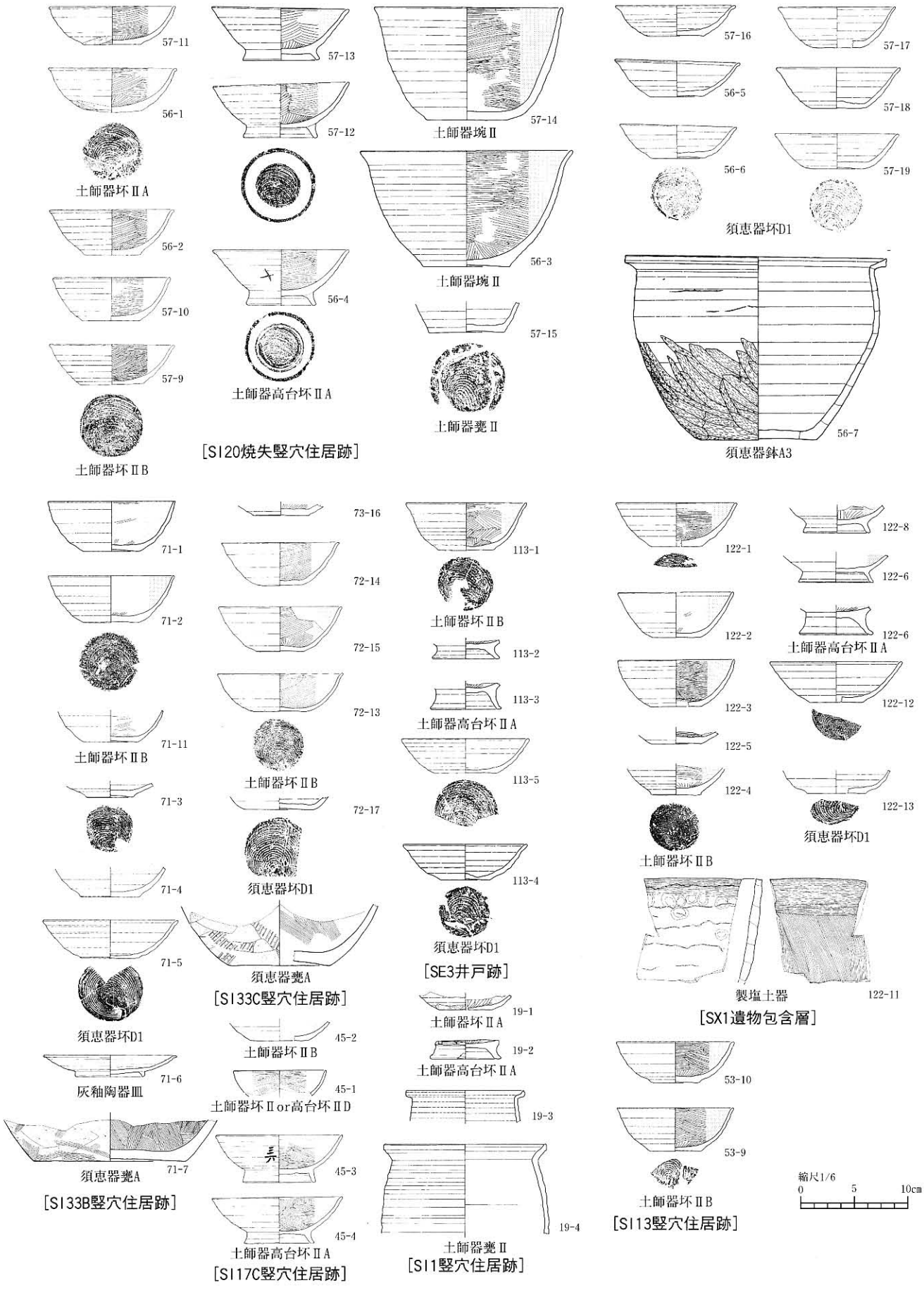
II A 群 土 器

種類	器種		点数		土器総数に対する割合		土師器・須恵器別の割合	
土師器	坏	II A	2	29	2.3	33.7	4.2	60.4
		II B	27		31.4		56.3	
	埦	II	2		2.3		4.2	
	高台坏	II B	3	10	3.5	11.6	6.3	20.8
	高台坏	II	7		8.1		14.6	
	甕	II	7		8.1		14.6	
	計		48		55.8		100.0	
須恵器	坏	D 1	26		30.2		70.3	
	高台坏	AorB	5				13.5	
	鉢	A 3	1		1.2		2.7	
	甕	A	5		5.8		13.5	
	計		37		43.0		100.0	
灰釉陶器皿		K90	1		1.2			
合計			86		100.0			
食膳具	土師器		41	73	47.7	84.9		
	須恵器		31		36.0			
	須恵系土器							
	灰釉陶器		1		1.2			
煮沸具	土師器		7		8.1			
	製塩土器							
貯蔵具	土師器			6		7.0		
	須恵器		6		7.0			
合計			86		100.0			

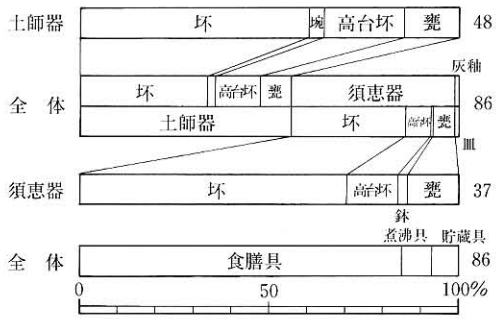
II B 群 土 器

種類	器種		点数		土器総数に対する割合		土師器・須恵器別の割合	
土師器	坏	II A	7	113	2.9	46.7	4.7	75.3
		II B	106		43.8		70.7	
	高台坏	II A	1	13	0.4	12.9	0.7	8.7
		II B	2		0.8		1.3	
		II	10		11.6		6.7	
	耳皿	II A	3	4	1.2	1.7	2.0	2.7
		II B	1		0.4		0.7	
	壺	II	1		0.4		0.7	
	甕	II	18		7.4		12.0	
	甑	II	1		0.4		0.7	
	計		150		62.0		100.0	
須恵器	坏	D 1	13		5.4		72.2	
	壺	A	1	2	0.4		5.6	
		B 2	1		0.4		5.6	
	甕	A	3		1.2		16.7	
	計		18		7.4		100.0	
須恵系土器	坏		48		19.8		72.7	
	小型坏		3		1.2		4.5	
	高台坏	A	6	15	2.5	6.2	9.1	22.7
		B	1		0.4		1.5	
		他	8		3.3		12.1	
	計		66		27.3		100.0	
製塩土器			8		3.3			
合計			242		100.0			
食膳具	土師器		130	209	53.7	86.4		
	須恵器		13		5.4			
	須恵系土器		66		27.3			
	灰釉陶器							
煮沸具	土師器		19	27	7.9	11.2		
	製塩土器		8		3.3			
貯蔵具	土師器		1	6	0.4	2.5		
	須恵器		5		2.1			
合計			242		100.0			

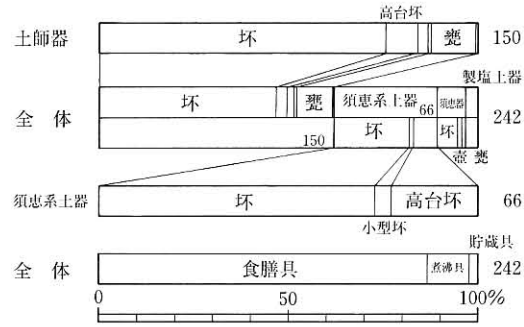
表７　II群土器の組成比



第141図　ⅡA群土器－9世紀後葉頃の土器



第142図　ⅡA群土器の組成比



第143図　ⅡB群土器の組成比

（6）ⅡA群土器の年代

ⅡA群土器に含まれる須恵器坏はD1類で、体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外傾ないしわずかに外反し、底部は回転糸切りで切り離されたままのものである。これと特徴が類似し、法量も近似する須恵器坏は、仙台市五本松窯跡第6・10・15号窯（小川編，1987）で焼成されている。この窯は、多賀城跡政庁第Ⅳ期〔貞観11年（869）の陸奥国大地震の復興期〕の瓦を焼成した瓦陶兼業窯で、貞観11年（869）以降の9世紀後半頃に位置付けられている。体部が直線的に立ち上がる点は本遺跡のⅡA群土器のD1類とやや異なるものの、須恵器坏の底部は回転糸切りで切り離されたままのもので、法量も類似する（註8）。

また、9世紀第4四半期頃を中心とする頃に位置付けられている多賀城跡出土の土器群に、多賀城跡平成6年度現状変更SK2270土壙出土土器群（丹羽，1995）がある。須恵系土器高台鉢を少量含むなど組成にやや異なる点もあるが、土師器を主体としている点は本遺跡のⅡA群土器と共通している。また、土師器坏はⅡB類を主体にⅡA類を含む点も共通しており、法量も近似している。破片のため全体の形状は不明であるが、土師器高台坏を含むことも共通している。本遺跡のⅡA群土器はこれと年代的に近いとみられる。

また、ⅡA群土器には1点のみであるが、灰釉陶器皿が共伴する。猿投窯製品で、黒笹90号窯式第2型式に相当する。平安京などでの出土傾向からみて、9世紀後半頃に盛行したものと考えられている（齋藤，1994）。

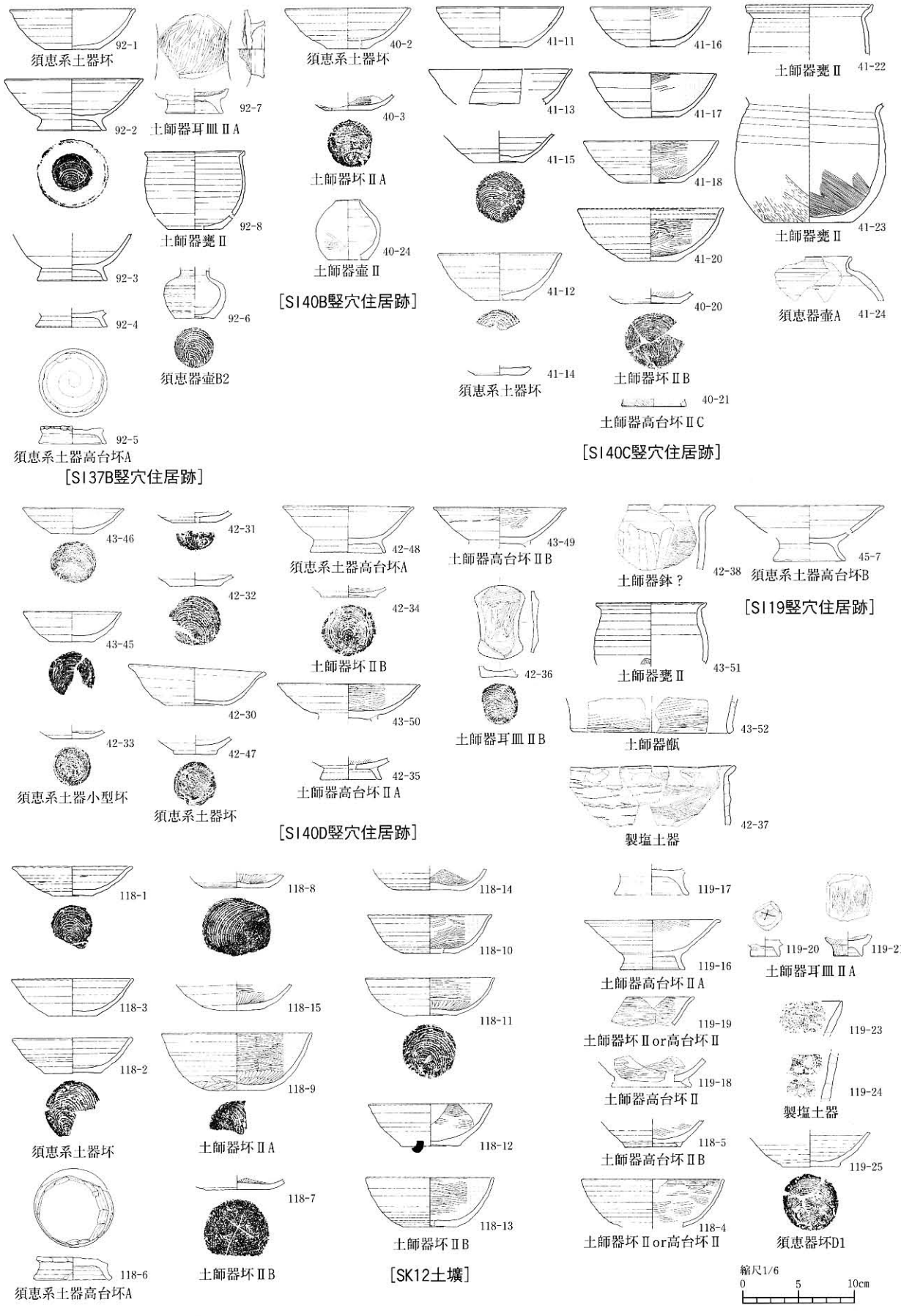
以上のことから、本遺跡のⅡA群土器は9世紀後葉頃のものと考えることができる。

（7）ⅡB群土器の特徴

ⅡB群土器の基準資料とその相当資料について、掲載した土器と未掲載の底部破片、高台部破片を各遺構・層位別に集計した（表6）。また、ⅡB群土器を第144図に遺構別に集成した。

ⅡB群土器は土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器からなる。このうち土師器が主体を占め、次いで須恵系土器が多く、須恵器、製塩土器が少ない（表7、第143図）。

土師器はすべてロクロ調整のⅡ類で、坏ⅡA・ⅡB類、高台坏ⅡA・ⅡB類、耳皿ⅡA・ⅡB類、壺Ⅱ類、甕Ⅱ類、甑Ⅱ類がある。このうち坏が約3/4と主体を占め、次いで甕、高台坏がやや多く、それ以外の耳皿・壺・甑は少ない（表7、第143図）。



第144図　ⅡB群土器－10世紀前葉頃の土器

須恵器には坏、壺、小壺がある。坏はⅡA群土器と同様のD1類で、須恵器の主体を占める。

須恵系土器には坏、小型坏、高台坏A・B類がある。このうち坏が主体を占め、次いで高台坏がやや多く、小型坏は少ない（表7、第143図）。坏、小型坏の底部の切り離しは回転糸切りで、その後に再調整されていない。

土師器・須恵器・須恵系土器を食膳具（土師器坏・高台坏・耳皿、須恵器坏、須恵系土器坏・小型坏・高台坏）、煮沸具（土師器甕・甑、製塩土器）、貯蔵具（須恵器壺）に分けると、食膳具が主体を占め、煮沸具、貯蔵具が少ない（表7、第143図）。

このように、ⅡB群土器は土師器がいずれもロクロ調整で、約6割と主体を占めること、土師器では底部が回転糸切りで切り離されたままの坏ⅡB類が主体を占めること、土師器に高台坏・耳皿が含まれること、須恵器坏も底部が回転糸切りで切り離されたままの坏D1類のみからなること、土師器に次いで須恵系土器がやや多く含まれること、須恵系土器は坏・小型坏・高台坏からなり、小型坏は量的に少ないことなどで特徴付けられる。

（8）ⅡB群土器の年代

ⅡB群土器と同様の土器群は、陸奥国府・多賀城跡の城内・城外で基準となる資料が蓄積されている。これらは多賀城跡終末までの間に4段階にわたって変遷していることが指摘されている（柳澤・白崎編，1998）。このうち、第2段階の第2群土器（註9）は、10世紀前葉頃に降灰した灰白色火山灰層およびその前後の層から出土したもので、10世紀前葉頃に位置付けられている。土師器、須恵系土器などからなり、土師器が約3割、須恵系土器が6～7割を占める。土師器はいずれもロクロ調整で、坏が主体を占め、高台坏も少数含まれる。土師器坏は底部が回転糸切りで切り離されたものが大多数を占める。須恵系土器には坏・小型坏・高台坏・皿があり、坏が主体を占める。

須恵系土器の含まれる比率は、多賀城跡が6～7割と多いのに対し、本遺跡のⅡB群土器は約2割と少ない。しかし、須恵系土器に坏・小型坏・高台坏があること、土師器坏では底部が回転糸切りで切り離されたままの坏ⅡB類が主体を占め、土師器に高台坏が含まれること、須恵器坏は底部が回転糸切りで切り離されたままの坏D1類であるなど、共通点が数多く認められる。

そこで、本遺跡のⅡB群土器と多賀城跡の2群土器の両者に含まれ、それぞれの土器群を特徴付けている須恵系土器坏・小型坏の法量を平均値で比較することにする。

須恵系土器坏は、本遺跡のⅡB群土器が口径13.6cm、底径5.5cm、器高4.3cm、器高／口径比0.312で、多賀城跡の第2群土器が口径13.4～13.7cm、底径5.2～5.8cm、器高4.2～4.5cm、器高／口径比0.309～0.329である。須恵系土器坏は本遺跡のⅡB群土器では少ないが、法量は量の多い多賀城跡の第2群土器の範囲内にある。

また、須恵系土器小型坏は本遺跡のⅡB群土器、多賀城跡の第2群土器とも少ないが、本遺跡が平均すると口径10.8cm、底径4.7cm、器高3.1cm、器高／口径比0.284で、多賀城跡の第2群土器では多賀城市高崎遺跡第11次調査SX1080土器廃棄土壙出土土器群（高野，1991）に口径10.3cm、底径4.9cm、器高3.7cm、器高／口径比0.359のものが1点あり、近似している。

土師器坏ⅡＢ類、須恵器坏ＤⅠ類の法量も、本遺跡のⅡＢ群土器と多賀城跡の２群土器では近似している。

以上のことから、本遺跡のⅡＢ群土器は多賀城跡の城内・城外の第２群土器に相当し、年代的には10世紀前葉頃に位置付けられるとみられる。

３．遺構期の設定と集落の変遷

（１）遺構期の設定

縄文時代～弥生時代の土器などが表土や遺物包含層、古代の遺構などから少数出土したが、竪穴住居跡がないため、当該期の集落の実態は不明である。

前述のように、本遺跡から出土した奈良・平安時代の土器は、８世紀第３四半期頃のⅠ群土器、９世紀後葉頃のⅡＡ群土器、10世紀前葉頃のⅡＢ群土器に分けられた。

この他に主な遺構として、古墳時代前期の塩釜式期のＳⅠ16竪穴住居跡、近世以降のＳＥ１井戸跡、ＳＤ１暗渠・開渠、ＳＸ５平場がある。

これらを含めて以下のように本遺跡における遺構期を設定する。

なお、年代的位置付けができなかったＳⅠ３・４・12・14・18・26・36・44・45・46・47・50・51・55・56竪穴住居跡（15棟）については、ここから除外した。また、遺物点数は少ないが、建て替えられた前後の竪穴住居跡で時期のわかるものについては、その前後の遺構と同じ時期に含めた。

【Ａ期】古墳時代前期の塩釜式期の集落（第145図左側）・・・・竪穴住居跡１棟（ＳⅠ16竪穴住居跡）からなる。本期における遺構の分布は極めて希薄である。

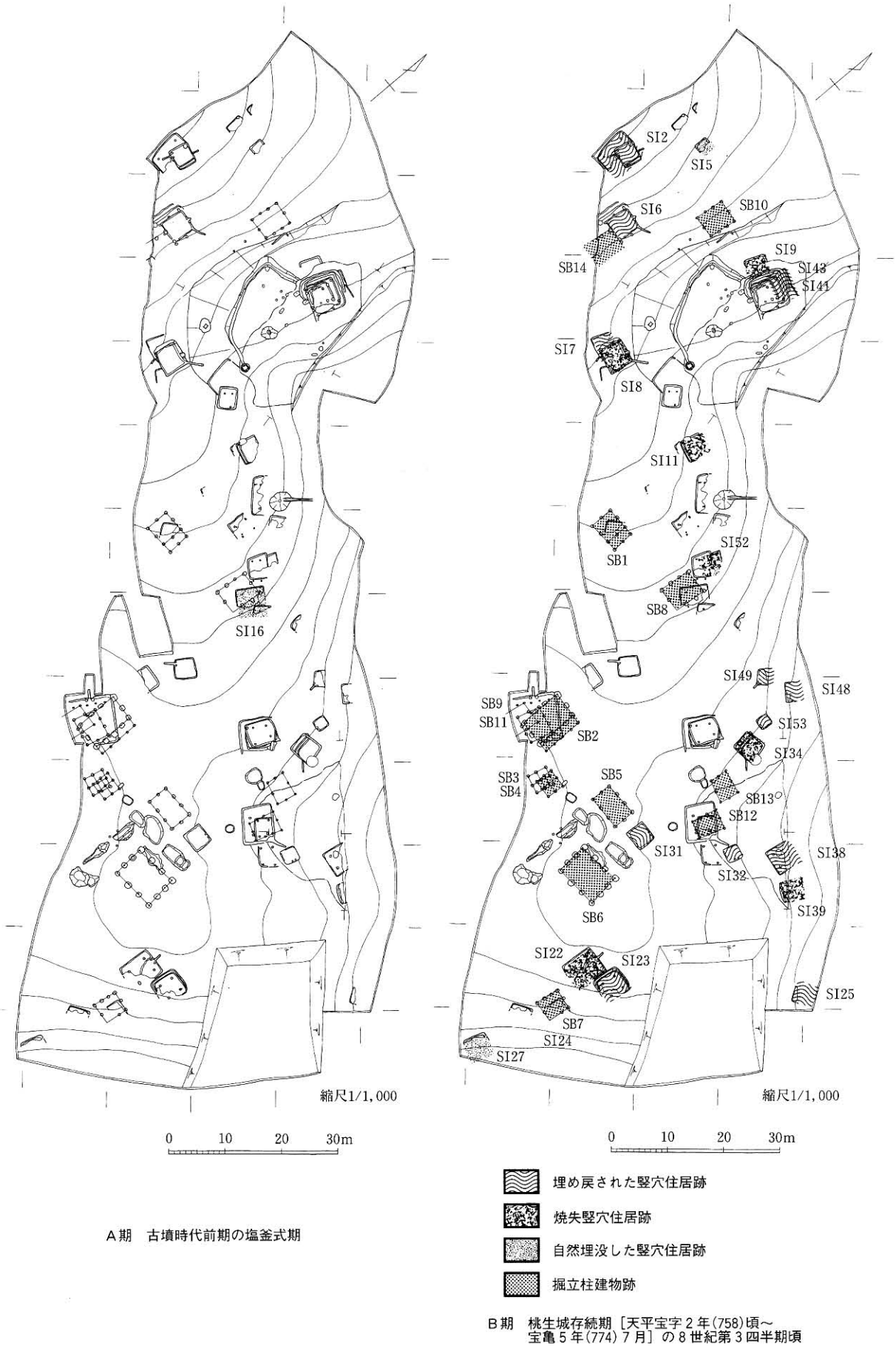
【Ｂ期】８世紀第３四半期頃（Ⅰ群土器）の集落（第145図右側）・・・・ＳＢ１・２・（３・４・５）・６・（７・８）・９・（10・11・12・13・14）掘立柱建物跡（14棟）、ＳⅠ２・５・６・７・８・９・（11Ａ・11Ｂ）・21・22・23Ａ・23Ｂ・24・27・31・32・34Ａ・34Ｂ・34Ｃ・34Ｄ・35・38・39・41・43・48・49・52・53竪穴住居跡（29棟）、（ＳＥ２井戸跡）。

【Ｃ－１期】９世紀後葉頃（ⅡＡ群土器）の集落（第146図左側）・・・・ＳⅠ１・13・（15）・17・20・（33Ａ）・33Ｂ・33Ｃ竪穴住居跡（８棟）、ＳＥ３井戸跡、ＳＸ１遺物包含層。

【Ｃ－２期】10世紀前葉頃（ⅡＢ群土器）の集落（第146図左側）・・・・ＳⅠ19・37Ａ・37Ｂ・40Ａ・40Ｂ・40Ｃ・40Ｄ竪穴住居跡（７棟）、ＳＫ12土壙。

【Ｄ期】近世以降の遺構（第146図右側）・・・・ＳＥ１井戸跡、ＳＤ１暗渠・開渠、ＳＸ５平場

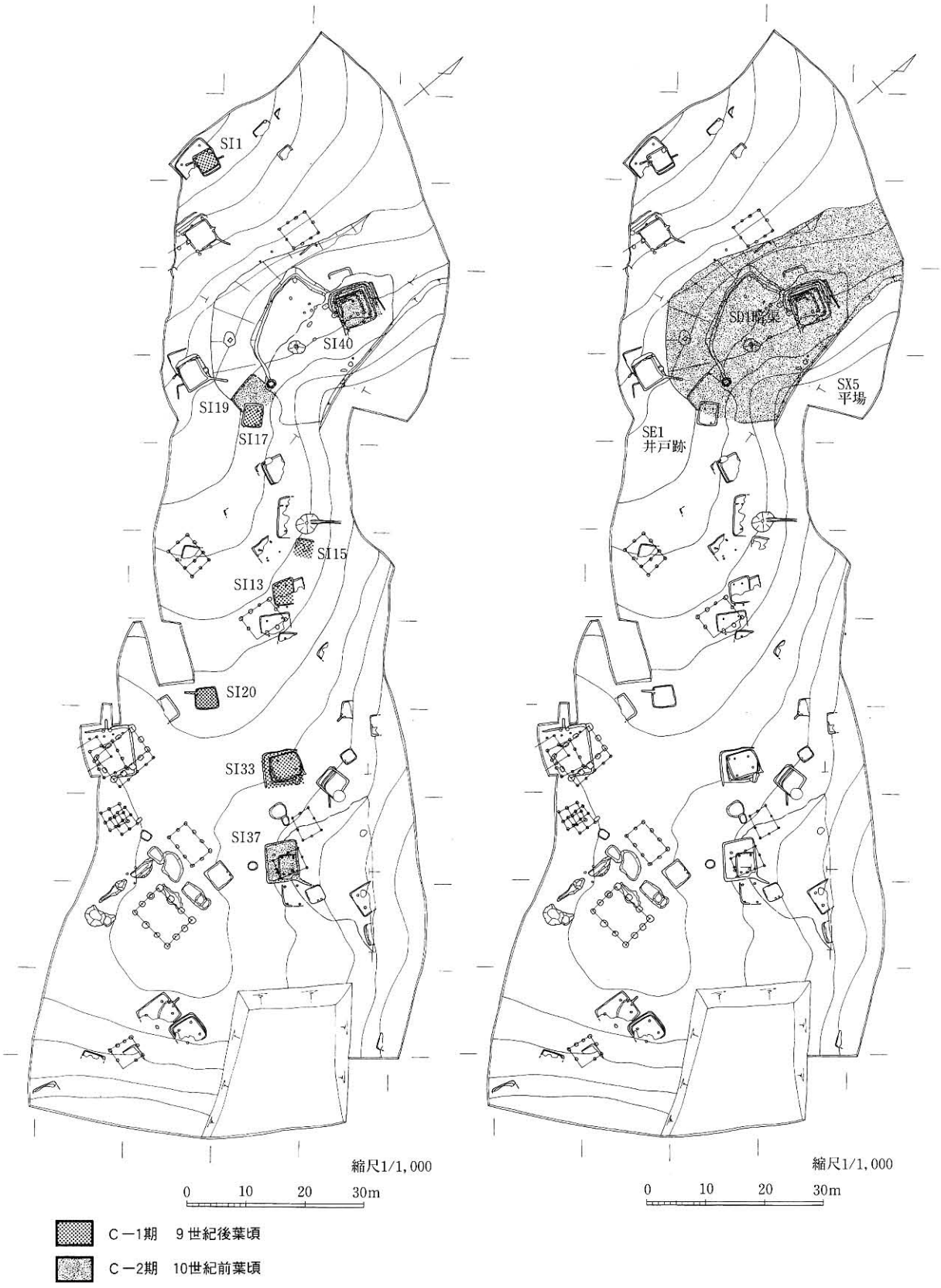
ＳＥ１井戸跡、ＳＤ１暗渠・開渠、ＳＸ５平場は、大規模な造成を伴って構築された一連の遺構である。ＳＤ１暗渠覆土から出土した擂鉢（第110図１）は、井上喜久男氏のご教示によれば、井上（1994）の登窯Ｖ期、藤沢（1998）の瀬戸窯第２段階第６小期に相当する18世紀前葉頃の瀬戸窯製品であるという。また、ＳＸ５平場に伴う整地からは火縄銃の鉛製鉄砲玉が出土している。笠原信男氏の御教示によれば、火縄銃の鉛製鉄砲玉は、桃生郡では江戸時代以降に民間で使用されたという。したがって、Ｄ期については近世以降に位置付けられると考えられる。



A期　古墳時代前期の塩釜式期

B期　桃生城存続期［天平宝字２年(758)頃～宝亀５年(774)７月］の８世紀第３四半期頃

第145図　集落の変遷(1)　A期（古墳時代前期）、B期（８世紀第３四半期頃）



第146図　集落の変遷(2)　C期（平安時代）、D期（近世以降）

（２）Ｂ期の集落の様相

１）竪穴住居跡のカマド

Ｂ期の竪穴住居跡29棟（同一竪穴住居跡の拡張を除外すれば24棟）のうち、カマドのわかる竪穴住居跡は８棟ある。このうち煙道が外に長く延びる在地のタイプのカマドをもつものが４棟（ＳＩ２・７・22・49竪穴住居跡）、煙道が外に延びない関東系のカマドをもつものが４棟（ＳＩ６・８・32・34Ｄ竪穴住居跡）ある。

本遺跡に隣接する同時期の城柵・桃生城の造営にあたり、『続日本紀』天平宝字２年（758）12月８日条に坂東の騎兵・鎮兵・役夫と夷俘、『続日本紀』天平宝字３年（759）９月26日条には鎮兵がみえ、坂東の騎兵・鎮兵・役夫が動員されたことが知られている。

関東系のカマドをもつ竪穴住居跡は、関東からの鎮兵または柵戸が構築して居住したものと考えられる。在地の柵戸と関東からの鎮兵や柵戸が集落を構成していた可能性が高いと考えられる。

２）須恵器の供給元

ＳＩ38竪穴住居跡から、７枚重ねで焼成されたまま融着した須恵器坏Ｂ４類が２組計14点出土した（第97図24･25）。このように融着した須恵器坏は須恵器窯の窯内や灰原でよくみかけるが、明らかな失敗品であって、本来は消費地に流通しないものである。消費地から出土した例としてはおそらく初めてで、２次的な用途として搬入されたものとみられる。また、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡から出土した須恵器甕Ｂ類（第82図22）は著しく焼け歪み、須恵器壷Ａ１類（第86図46）は外面体部に窯壁片が熔着し、内面底部には拳大の窯壁片が熔着している。これらも失敗品であって、本来は消費地には流通しないものである。

これらの例は、本遺跡のすぐそばに須恵器窯があることを示唆している。本遺跡の北北西約２kmには太田窯跡があり、桃生城に瓦と須恵器を供給したとみられている（第１図27;阿部･佐藤編，1995）。本遺跡の須恵器の多くは太田窯から供給された可能性がある（註10）。

３）搬入土器

遠隔地から搬入されたとみられる土器に、北関東系の削り出し高台の須恵器高台坏、体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕とがある。

削り出し高台の須恵器高台坏は、ＳＩ21･27竪穴住居跡から各１点出土した（第63図28、第107図３）。削り出し高台による須恵器高台坏は、全国的にみても数少なく、貼り付け高台が主流である。８世紀代のものとして関東では群馬県・栃木県・千葉県などに類例が知られている（千葉県文化財センター，1994）。

体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕は、ＳＢ２掘立柱建物跡、ＳＩ８竪穴住居跡から出土した（第８図10、第28図４・５、第31図27・28）。体部外面に同心円状叩き目痕のある須恵器甕は、茨城県新治窯跡群のある下総北半部を中心に分布している（酒井，1981；川井，1988；山口，1994）。

これら北関東系の須恵器高台坏・甕が出土したことは、桃生城の造営に動員された関東からの柵戸や鎮兵が携えてきた土器もわずかながらあったことを示唆している。

なお、ＳＢ２掘立柱建物跡、ＳＩ21・31竪穴住居跡から出土した脚部に透かしのある須恵器高坏

（第８図５、第63図37・38、第90図４）も県内ではあまり例のないもので、８世紀中葉頃の松山町次橋２号窯跡（東北学院大学考古学研究部，1983）と８世紀第４四半期頃とみられる大衡村亀岡遺跡第３号土壙（東北学院大学考古学研究部，1979）から各１点出土している。また、ＳＢ２掘立柱建物跡、ＳＩ21竪穴住居跡から出土した底部が２段構成で脚部に透かしのある須恵器高坏（第８図５、第63図37）もあまり例のないものである。福島県会津大戸窯跡群上雨屋83号窯跡（石田，1994）に透かしのない２段構成の須恵器高坏が認められる。これらの高坏の供給元については今後の課題であるが、本遺跡への人の移動や物資の供給について知る手がかりの一つになりうるものである（註11）。

４）土葺き屋根をもつ竪穴住居跡

残りが特によいＳＩ８・34Ｄ焼失竪穴住居跡の床面の上には、焼土塊・焼土・炭片・小礫片を多量に含む土層が自然堆積していた。この土層は壁際では20～25cmと最も厚く、中央部の厚い箇所では12cm前後で、薄い箇所では3cmであった。平均の厚さは12cm程である（註12）。焼土塊にスサを含まず、地山に含まれる小礫片を多く含んでいたことから、この土層は竪穴住居跡を掘削した際の掘削土を屋根の上に葺いたものが焼け落ちたもので、これらの竪穴住居跡は土葺き屋根であったとみられる（註13）。

また、この土層の上に炭層がないことから、葺土の上には草など焼失しやすいものは被せていなかったとみられ、屋根の上から火がついたとは考えにくい。床面の上に多くの土器・石製品・鉄製品などが残されていたことから、家財道具を持ち出した後に焼却処分されたような竪穴住居跡ではない。火もとは竪穴住居跡の内部であり、放火または失火とみられる。

そして、建築部材がほとんど焼失し尽くして残っていないことから、竪穴住居跡の焼失実験（石守，1995・2001）で指摘されたように、建築部材が灰になるまですべて燃え尽きた後、屋根に葺かれていた葺土が焼け落ちたものと推定される（註14）。

後続する竪穴住居跡や掘立柱建物跡がないこと、この他に同時期とみられる焼失した竪穴住居跡が複数あることなどから、ＳＩ８・34Ｄ竪穴住居跡などＩ群土器を出土し、焼失した竪穴住居跡は、桃生城跡と同様に宝亀５年（774）７月の海道蝦夷の攻撃によって焼失した可能性が高い。

５）鉄製品（第147図）

Ｂ期の遺構から出土した鉄製品には、馬具（第147図１～10）、武具〔柳葉鏃（第147図11）、圭頭鏃（第147図12）、長三角形鏃（第147図13）などの鉄鏃〕、工具〔刀子（第147図25～35）、鉋（やりがんな）（第147図36）、鑿（のみ）または鏨（たがね）（第147図37）、有袋鉄斧（第147図38・39）〕、農具〔曲刃鎌（第147図40）〕、漁労具〔釣針（第147図42・43）、刺突具（第147図44）〕、その他〔鉄釘（第147図21～23）、鎹（かすがい）（第147図24）、紡錘車（第147図41）など〕がある。これらのうち、特に出土例の少ない馬具（註15）と鑿または鏨を取り上げる。

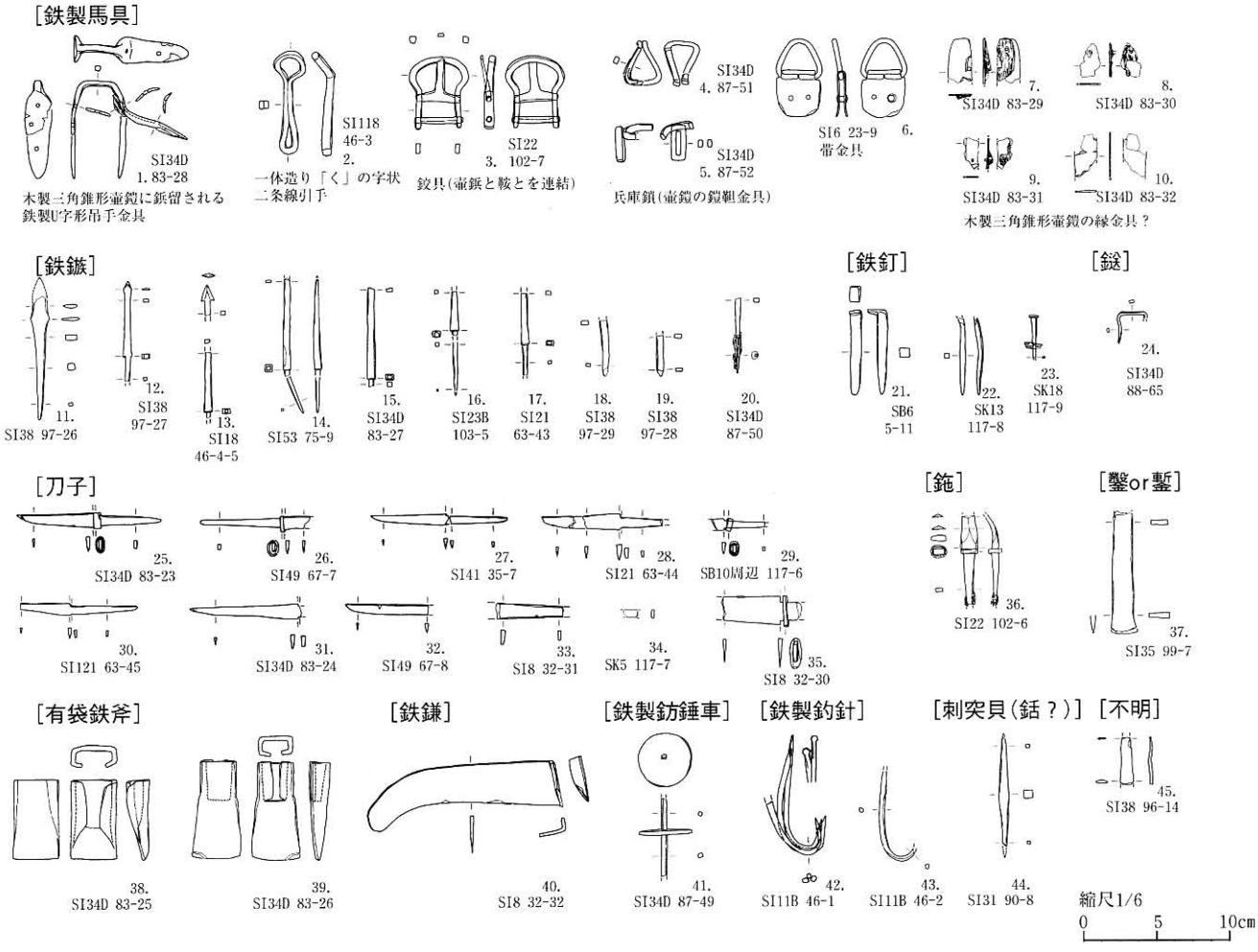
【馬具】（第147図１～10）

馬具にはＵ字状吊手金具（第147図１）、引手（ひきて）（第147図２）、鉸具（かこ）（第147図３）、兵庫鎖（第147図４・５）、辻金具（第147図６）、縁金具？（第147図７～10）がある。いずれもＢ期の竪穴住居跡から出土した。

鉄製U字状吊手金具（第147図１）は、木心金属張三角錐形壷鐙（斎藤，1986）に鋲留されるもので、斎藤編年（斎藤，1986）によるⅣ期（６世紀末）～Ⅵ期（７世紀中頃）のものに類似している。本例により木心金属張三角錐形壷鐙が少なくとも８世紀第３四半期頃まで残ることが判明した（註16）。

引手（第147図２）は、轡（くつわ）の一部をなす鉄製金具で、銜先（はみさき）・鏡板（かがみいた）に取り付けられて手綱（たづな）を連結させるためのものである。直線的で捩（ねじ）りのない２本線の柄の一端に鏡板に取り付けられる引手先、もう一端に手綱が付けられる引手壷を一体となって造りだした鍛造品で、「一体造くの字状引手壷無捩二条線引手」と呼ばれる型式（岡安，1984・1998）である。実用的な環状鏡板付轡に取り付けられる引手と考えられており、県内では多賀城跡第66次調査ＳＫ2321土壙第10層から出土した８世紀後葉頃～９世紀初頭頃の双環状鏡板付轡（柳澤・白崎編，1996）にこれと同型式の引手が取り付けられている。奈良時代の轡の出土例は全国的にみてもきわめて少ない（大谷，1984；瀧瀬，1994；小島，1997）。

鈒具（第147図３）は、横棒に巻き付けた革帯を責金具で留め、Ｔ字状刺金（さすが）で別の革帯をこれに連結する構造のものである。正倉院所蔵品（正倉院事務所編，1976・1994、冨永，2002）や古墳出土馬具からみて、こうした鈒具は、力革が取り付けられて壷鐙と鞍とを連結する鈒具、または面懸（おもがい）・胸懸（むながい）・尻懸（しりがい）の鈒具と考えられる。



第147図　Ｂ期の遺構から出土した鉄製品の集成

兵庫鎖（第147図４・５）は、壷鐙の鐙靻（みずお）金具か轡の立聞（たちぎき）または引手とみられる。これが出土したＳＩ34Ｄ竪穴住居跡からは壷鐙金具なども出土しており、これらとセットとなる馬具とみられる。

また、辻金具（第147図６）は、古墳出土馬具にも例をみないものである。径4mmの鉄棒を三角形状に曲げ三叉状に鍛接して縁金とし、その一脚に薄い鉄板（長さ8cm、幅3.5cm、厚さ1mm）を二つ折りにしたを鈎板（かぼん）２箇所鋲留めにして幅3.5cmの革帯を取り付け、他の２脚にほぼ同じ幅の革帯を責金具で取り付け、３方向に革帯を引っ張る構造のものである。本例は正倉院例（註20）よりも簡略的なものだが、三叉状に帯革が取り付けられて三方向に引っ張るとみられる点で、構造的には正倉院例と同様である。馬具の胸懸または面懸の辻金具とみられる。

縁金具？（第147図７～10）は、木心金属張三角錐形壷鐙に取り付くＵ字状吊手金具（第147図１）と共伴したことから、この壷鐙の縁金具の可能性がある。

Ｂ期の竪穴住居跡から出土したこれらの馬具は、本遺跡のＢ期集落に騎兵や騎乗の武官が駐屯していたことを示し、『続日本紀』の記事（註18）を一部裏付けている。平安時代のＣ期の竪穴住居跡からはこれらの馬具は出土せず、前述したような遺跡の性格の違いを示していると考えられる。

【鑿（のみ）または鏨（たがね）】（第147図37）

鑿または鏨は、ＳＩ35竪穴住居跡から出土したものである。刃部が両刃で、撥状になるもので、柄頭を欠損しているため、鑿か鏨か区別できない（註19）。鑿、鏨のいずれにしても、古代のものとしては類例がきわめて少ない（註20）。

6）鉄鍛冶生産

Ｂ期の竪穴住居跡などから出土した製鉄関連遺物には、鞴羽口・鉄滓・鍛造薄片がある。鞴羽口はいずれも破片で全体の形状・大きさが不明だが、外径７cm前後の小型品と外径８cm前後の大型品とがある。鉄滓類には通常の鉄滓の他、椀形滓、小球状滓、鍛造剥片がある（付章２参照）。量的にはテン箱１箱に満たない。

ＳＩ31竪穴住居跡からは鞴羽口（第90図６・７）と椀形砂鉄系精錬鍛冶滓、椀形鍛錬鍛冶滓、小球状滓などの鉄滓、鍛造剥片が出土した。精錬から鍛錬までの一連の鍛冶がこの竪穴住居跡内または付近で行われていたことを示し（付章２参照）、Ｂ期の集落で精錬鍛冶から鍛錬鍛冶までの鉄生産が行われた工房もあったことがわかる。

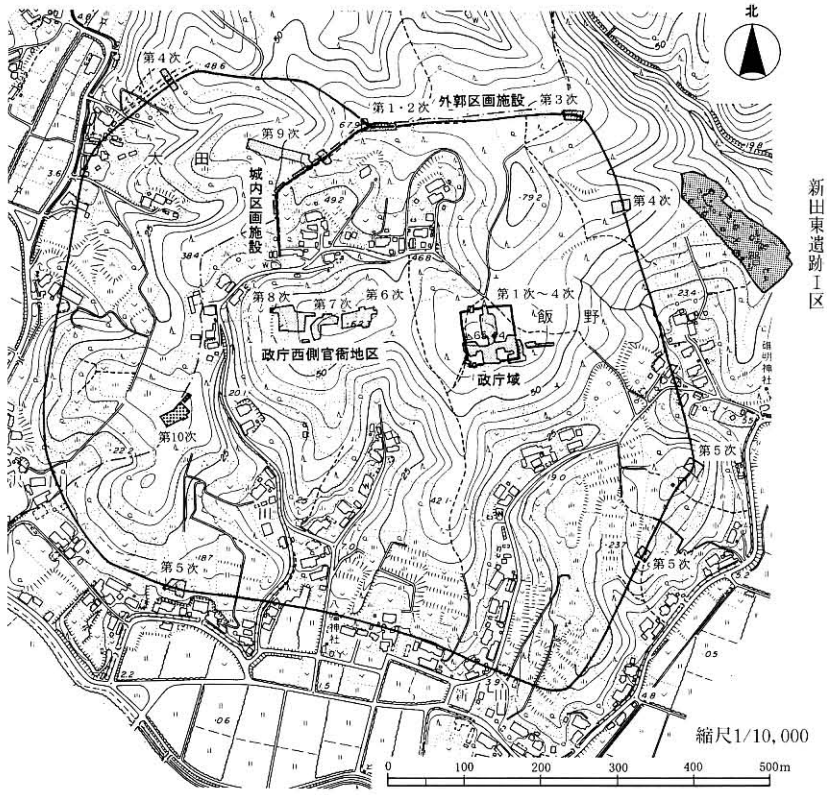
また、焼失したＳＩ34Ｄ竪穴住居跡からは鉄滓も少数だが出土した。床面には著しく焼けた焼面が２箇所あり、土器・鉄製品・砥石など家財道具が多く残されていた。この竪穴住居跡出土の鉄製品には、馬具、鉄鏃、鋏、刀子、有袋鉄斧、鉄製紡錘車があり、鉄製品が特に多い。これら鉄製品を製作・修理した鉄鍛冶工房の可能性が高い。

この他、ＳＩ51竪穴住居跡は椀形精錬鍛冶滓が出土し、鉄鍛冶工房の可能性がある。
また、ＳＢ５掘立柱建物跡掘方から鞴羽口（第５図12）、ＳＢ６竪穴住居跡掘方から鉄滓、ＳＢ10掘立柱建物跡掘方から椀形滓が出土した。

7）Ｂ期集落の性格と年代

本遺跡は桃生城の東に隣接し、本遺跡の立地する丘陵を尾根伝いに登って行けば、桃生城跡第４次

調査で検出した桃生城跡外郭東辺北部の土橋状の通路部分に至る（阿部・佐藤編，1996；第151図）。Ⅰ区西端からこの土橋状の通路部分まで約75mあるにすぎず、さらにそこから政庁北東隅築地塀まで約190mあるにすぎない。



第148図　新田東遺跡と桃生城跡の位置関係

桃生城の造営については、陸奥国内の郡司・軍毅（軍団の統括者）・浮浪人・夷俘、坂東諸国の騎兵・鎮兵・役夫などが従事し、天平宝字2年（758）頃から開始され、翌天平宝字3年（759）末頃までの1年余りで完成したことが『続日本紀』の記事から知られている。また、発掘調査の結果、桃生城跡では政庁区画築地塀と政庁内の主要殿舎（正殿・後殿・両脇殿）、政庁西側官衙、外郭北西隅築地塀、城内区画築地塀、櫓が宝亀5年（774）7月の海道蝦夷による桃生城襲撃によって焼失し、その後は再建されていないことが明らかとなってきた（岡田・進藤他1975；氏家・桑原・岡田他，1976；阿部・佐藤編，1995～1999；後藤・吾妻編，2000；柳澤・阿部編，2001；吾妻・阿部編，2002；柳澤，2001；白鳥他，2002；註21）。

Ⅰ群土器は桃生城跡のものと類似し、B期集落は桃生城と時期的に重複する。

B期集落は竪穴住居跡と掘立柱建物跡とからなり、中には桃生城政庁後殿跡に匹敵する主屋（SB2掘立柱建物跡）もあり、一般の集落ではない。

B期のSⅠ43竪穴住居跡埋土からは桃生城跡の平瓦1類が出土し、SⅠ8焼失竪穴住居跡では桃生城跡の丸瓦1類が施設瓦に用いられており、桃生城と同時期であることを裏付けている。

前述のように鉄製品を生産・修理したとみられる鉄鍛冶工房（SⅠ31・34D竪穴住居跡）もあり、馬具の存在から騎兵や騎乗の武官の駐屯が窺える。

また、カマドは在地のものと関東系のものとからなり、北関東系の須恵器高台坏・甕など北関東から搬入されたとみられる土器も出土している。在地の人々のみならず、関東出身者も居住したことが窺える。

桃生城には陸奥国内や関東諸国などから柵戸（移民）や鎮兵（坂東諸国から動員された常駐兵）などが動員・移住されたことが『続日本紀』に記されており、関東系のカマドや北関東系の須恵器の存在はこれらの記事を裏付けている。

以上のことから、本遺跡のＢ期集落は天平宝字２年（758）頃～宝亀５年（774）７月の間に存続した当時最北の城柵・桃生城の兵站基地としての役割を果たしたものと考えられ、桃生城と同時期のものとみられる。

桃生城跡のすぐ東に隣接する同時期の集落である本遺跡は、律令政府の辺境政策に基づいて動員され、桃生城を支えた柵戸や鎮兵などの人々の集落と位置付けることができる（註22）。

８）Ｂ期の細分

Ｂ期集落は、掘立柱建物跡14棟、少なくとも竪穴住居跡29棟（同一竪穴住居跡の拡張を除外すれば24棟）からなる（第145図右側）。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡との関係をみると、ＳＩ21竪穴住居跡、ＳＢ２・９・11掘立柱建物跡では、ＳＩ21竪穴住居跡が最も古く、これを埋め戻して直ちに主屋とみられるＳＢ２掘立柱建物跡が建てられ、次にＳＢ９掘立柱建物跡が建てられ、最後にＳＢ11掘立柱建物跡が建てられている。

これらの新旧関係を基準として、最も古いＳＩ21竪穴住居跡を**Ｂ－１期**、次のＳＢ２掘立柱建物跡を**Ｂ－２期**、３番目のＳＢ９掘立柱建物跡を**Ｂ－３期**、最後のＳＢ11掘立柱建物跡を**Ｂ－４期**としてまず設定する。

これら重複するＳＢ２・９・11掘立柱建物跡の方向は、最も古いＳＢ２掘立柱建物跡が北で西に約１°偏り、次に新しいＳＢ９掘立柱建物跡が北で東に約12°と大きく偏り、最も新しいＳＢ11掘立柱建物跡が北で東に約４°偏る。そこで、これら重複する掘立柱建物跡の方向を基準として、他の掘立柱建物跡を位置付けることにする。

本期の掘立柱建物跡14棟の時期、方向、規模、新旧関係は表８の通りである。

掘立柱建物跡	時　期	方　向	規　模	新旧関係
ＳＢ１掘立柱建物跡	Ｂ－２期	北で西に約３°偏る。	桁行３間、梁行２間の東西棟	ＳＩ18と重複、新旧不明。
ＳＢ２掘立柱建物跡	Ｂ－２期	北で西に約１°偏る。	桁行４間、梁行２間の東廂付南北棟	Ｂ－１期のＳＩ21より新しく、Ｂ－３期のＳＢ７、Ｂ－４期のＳＢ11よりも古い。
ＳＢ３掘立柱建物跡	Ｂ－３期	北で東に約10°偏る。	桁行２間、梁行２間の倉庫	ＳＢ４と重複。
ＳＢ４掘立柱建物跡	Ｂ－２期	北で東に約２°偏る。	桁行２間、梁行２間の倉庫	ＳＢ３と重複。
ＳＢ５掘立柱建物跡	Ｂ－２期	北で東に約１°偏る。		桁行３間、梁行２間の東西棟
ＳＢ６掘立柱建物跡	Ｂ－３期	北で西に約９°偏る。	桁行３間、梁行２間の東西棟	
ＳＢ７掘立柱建物跡	Ｂ－３期	北で東に約９°偏る。	桁行３間、梁行２間の南北棟	Ｂ－２期のＳＩ24よりも新しい。
ＳＢ８掘立柱建物跡	Ｂ－４期	北で東に約５°偏る。	桁行３間、梁行２間の南北棟	Ａ期のＳＩ16より新しい。
ＳＢ９掘立柱建物跡	Ｂ－３期	北で東に約12°偏る。	桁行３間、梁行２間の東西棟	Ｂ－１期のＳＩ21、Ｂ－２期のＳＢ２より新しく、Ｂ－４期のＳＢ11より古い。
ＳＢ10掘立柱建物跡	Ｂ－４期	北で東に約５°偏る。	桁行３間、梁行２間の南北棟	
ＳＢ11掘立柱建物跡	Ｂ－４期	北で東に約４°偏る。	桁行２間以上、梁行２間以上	Ｂ－１期のＳＩ21、Ｂ－２期のＳＢ２、Ｂ－３期のＳＢ９より新しい。
ＳＢ12掘立柱建物跡	Ｂ－３期	北で東に約16°偏る。	桁行３間、梁行２間の南北棟	Ｃ－２期のＳＩ37より古い。
ＳＢ13掘立柱建物跡	Ｂ－４期	北で東に約６°偏る。	桁行２間、梁行２間の東西棟	ＳＢ12と近接し、別時期。
ＳＢ14掘立柱建物跡	Ｂ－４期	北で東に約４°偏る。	桁行２間以上、梁行２間以上	Ｂ－１期～Ｂ－３期の間ＳＩ６より新しい。

表８　Ｂ期の掘立柱建物跡の一覧

重複するＳＩ24竪穴住居跡、ＳＢ７掘立柱建物跡では、ＳＩ24竪穴住居跡を埋め戻して直ちに北で東に大きく偏るＳＢ７掘立柱建物跡が建てられている。前述の遺構期設定の基準とした掘立柱建物跡の方向からみると、ＳＢ７掘立柱建物跡はＢ－３期のＳＢ９掘立柱建物跡と同様であり、ＳＢ７掘立柱建物跡はＢ－３期に、その直前のＳＩ24竪穴住居跡はＢ－２期に位置付けられる。前述の例と併せてみると、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が重複する箇所では、竪穴住居跡が古く、次いで掘立柱建物跡が建てられたとみられる。

また、前述の遺構期設定の基準とした掘立柱建物跡の方向からみると、ほぼ磁北を向くＳＢ１・２・４・５掘立柱建物跡が掘立柱建物跡の中では最も古い一群と考えられ、**Ｂ－２期**に位置付けられる。その次に北で東に大きく偏るＳＢ３・７・９・12掘立柱建物跡が続くとみられ、**Ｂ－３期**に位置付けられる。そして、北で東に４～５°偏るＳＢ８・10・11・13・14掘立柱建物跡がこれに続くとみられ、**Ｂ－４期**に位置付けられる。

なお、北で西に約９°偏るＳＢ６掘立柱建物跡については、ＳＢ２掘立柱建物跡に次ぐ規模であり、別時期の主屋の可能性が考えられ、偏りの角度が西と東という違いがあるものの、ＳＢ９掘立柱建物跡に近いことから、これと同時期のＢ－２期に考えた。

また、各掘立柱建物跡の柱痕跡には焼土が含まれていないので、掘立柱建物跡は火災にあっていないとみられる。

これらＢ期の主要遺構の重複関係と掘立柱建物跡の方向による遺構期の設定を第149図に示した。

【Ｂ－１期】	【Ｂ－２期】 ほぼ磁北を向く	【Ｂ－３期】 北で東または西に大きく偏る	【Ｂ－４期】 北で東に４～５°偏る
ＳＩ21竪穴住居跡 →	ＳＢ２掘立柱建物跡 →	ＳＢ９掘立柱建物跡 →	ＳＢ11掘立柱建物跡
	ＳＩ24竪穴住居跡 →	ＳＢ７掘立柱建物跡	
	ＳＢ３掘立式倉庫跡（→	ＳＢ４掘立式倉庫跡）	
	ＳＢ１掘立柱建物跡	ＳＢ６掘立柱建物跡	ＳＢ８掘立柱建物跡
	ＳＢ５掘立柱建物跡	ＳＢ12掘立柱建物跡	ＳＢ10掘立柱建物跡
			ＳＢ13掘立柱建物跡
	ＳＩ６竪穴住居跡（Ｂ－１期～Ｂ－３期の間） →		ＳＢ14掘立柱建物跡

この他、
①ＳＩ34Ａ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｃ竪穴住居跡→ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡（焼失）
②ＳＩ23Ａ竪穴住居跡→ＳＩ23Ｂ竪穴住居跡〔→隣接して同時には存在しえないＳＩ22竪穴住居跡（焼失）〕
③ＳＩ７竪穴住居跡、ＳＩ46竪穴住居跡→ＳＩ８竪穴住居跡（焼失）
の新旧関係がある。これらの竪穴住居跡が上記のＢ－1期～Ｂ－４期のいずれに位置付けられるか明確ではない。ただし、焼失したＳＩ８・22・34Ｄ竪穴住居跡は、宝亀５年（774）７月の海道蝦夷の桃生城襲撃によって、桃生城と同時に焼失したものである可能性が高く、Ｂ期の最終末に位置付けられる。したがって、これら焼失竪穴住居跡はＢ－４期またはそれ以降に位置付けられるとみられる。

第149図　Ｂ期の主要遺構の重複関係と掘立柱建物跡の方向

次に、上記以外の竪穴住居跡について位置付けを行うことにしたい。

Ｂ期の焼失した竪穴住居跡７棟（ＳＩ８・９・11Ｂ・22・34Ｄ・39・52竪穴住居跡）はいずれも建て直されずに廃絶していることから、この火災は宝亀５年（774）７月の海道蝦夷による桃生城襲撃によるものとみられ、Ｂ期の終末期〔Ｂ－４期またはそれ以降〕に位置付けられる。

この他の焼失竪穴住居跡は、いずれも遺存状況が悪く、家財道具を残したまま焼失したのか検討できなかった。しかし、人為的に埋め戻された竪穴住居跡が20棟と多く、自然埋没した竪穴住居跡が２

棟と少ないことから、これらも桃生城存続期間中に焼却処分されたものではなく、宝亀５年（774）７月に焼失した可能性が高いと考えられる。

また、焼失竪穴住居跡以外の竪穴住居跡22棟のうち、自然堆積土が床面上に堆積している竪穴住居跡が２棟（ＳＩ５・27竪穴住居跡）ある。これらはＢ期の集落が廃絶した以降に自然埋没したと考えられる。

この他、竪穴住居跡20棟（ＳＩ２・６・７・11Ａ・21・23Ａ・23Ｂ・24・31・32・34Ａ・34Ｂ・34Ｃ・35・38・41・43・48・49・53）が人為的に埋め戻されており、床面上にあまり遺物を残さない。これらは存続期の中でも相対的に古いものと考えられることから、Ｂ－１期～Ｂ－４期の間に位置付けられると考えられる。桃生城造営期にはかなり多くの動員があったことが『続日本紀』の前述の記事から知られているので、これら人為的に埋め戻された竪穴住居跡の中にＢ－１期のものがかなりあると推定される。また、ＳＩ６竪穴住居跡については、前述のようにＢ－４期のＳＢ14掘立柱建物跡と重複してこれより古いことから、Ｂ－１期～Ｂ－３期の間に位置付けられる。また、３回建て直されているＳＩ34竪穴住居跡については、最後のＳＩ34Ｄ竪穴住居跡が前述のようにＢ－４期またはそれ以降に位置付けられる。当初のＳＩ34Ａ竪穴住居跡がＢ－１期、ＳＩ34Ｂ竪穴住居跡がＢ－２期、ＳＩ34Ｃ竪穴住居跡がＢ－３期に対応する可能性が考えられる。

以上のことから、Ｂ期は少なくとも４小期に分けられ（註23）、Ｂ－１期～Ｂ－４期の様相は以下のようにまとめられる。なお、竪穴住居跡の位置付けはその小期に確実に含められるもののみについて行った。竪穴住居跡が各期に多く存在したとみられる。

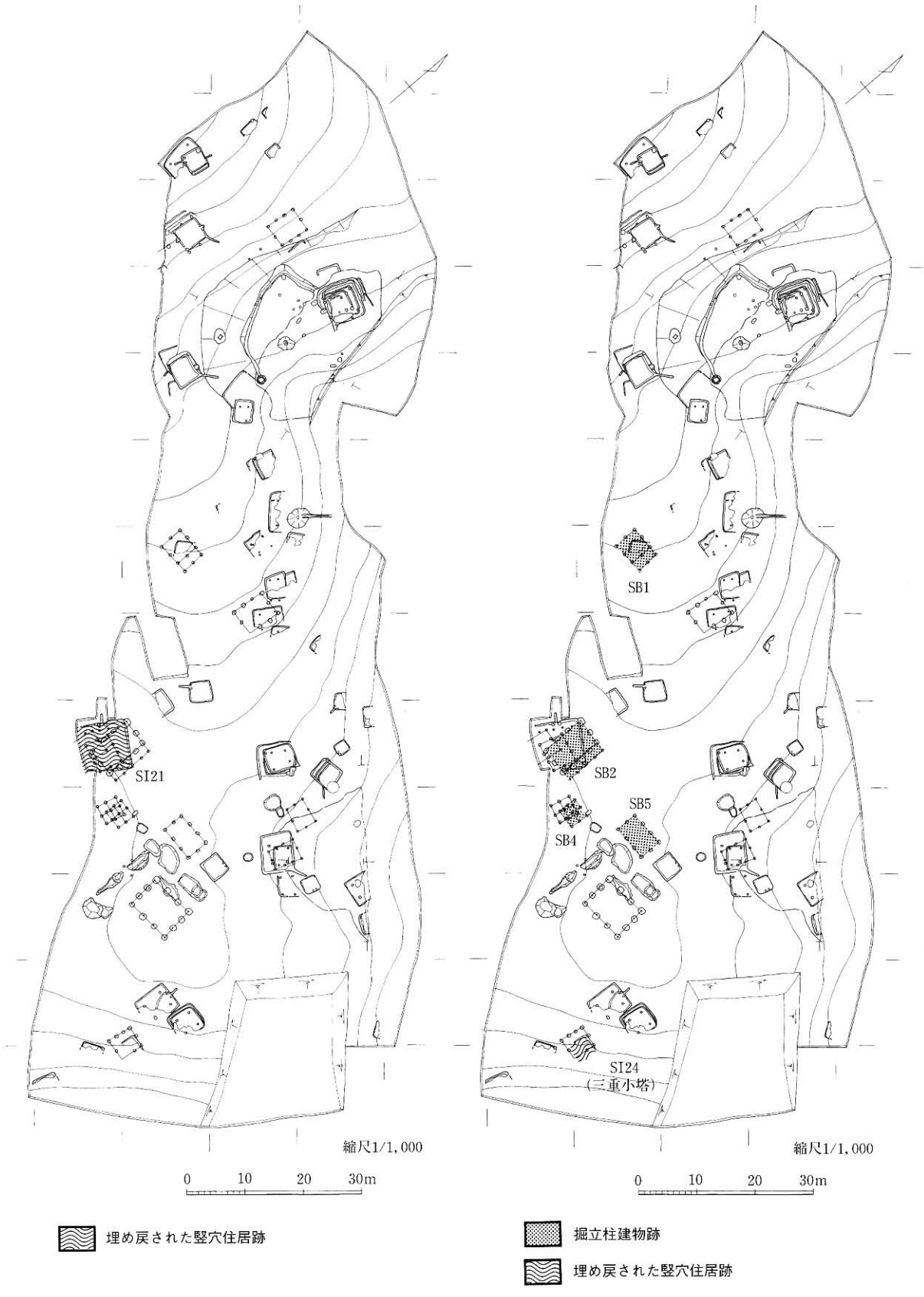
【Ｂ－１期】竪穴住居跡１棟（ＳＩ21竪穴住居跡）以上からなる（第150図左側）。人為的に埋め戻された竪穴住居跡20棟のうち、かなり多くが本期に位置付けられると推定されるが、特定できない。

ＳＩ21大型竪穴住居跡からは、在地の土器（第135図上段）の他、北関東系の削り出し高台の須恵器高坏（第62図25）、県内であまり類例のない透かしのある須恵器高坏（第63図37・38）、蓮花の蕾がヘラ書きされた円面硯（第63図41）、古墳時代前期の珠文鏡（第65図51）とガラス小玉（第65図50）など特殊な遺物が出土しており、注目される。ＳＩ21竪穴住居跡はＢ－２期に埋め戻され、ＳＢ２掘立柱建物跡が建てられている。

Ｂ－１期がＢ期の当初の小期であり、本遺跡のＢ期集落が律令政府の辺境政策に基づいて桃生城を支えるために陸奥国内や関東諸国などから動員・移住された柵戸や鎮兵の集落であるので、Ｂ－１期は天平宝字２（758）年頃よりは古くはならない。桃生城が翌天平宝字３年（759）末頃までの１年余りで完成したので、Ｂ－１期の下限年代がこの頃に位置付けられる可能性が考えられる。

【Ｂ－２期】ほぼ磁北を向いた掘立柱建物跡４棟（ＳＢ１・２・４・５掘立柱建物跡）と竪穴住居跡１棟（ＳＩ24竪穴住居跡）以上からなる（第150図右側）。他にＳＩ34Ｂ竪穴住居跡など他の竪穴住居跡の存在も推定されるが、特定できない。

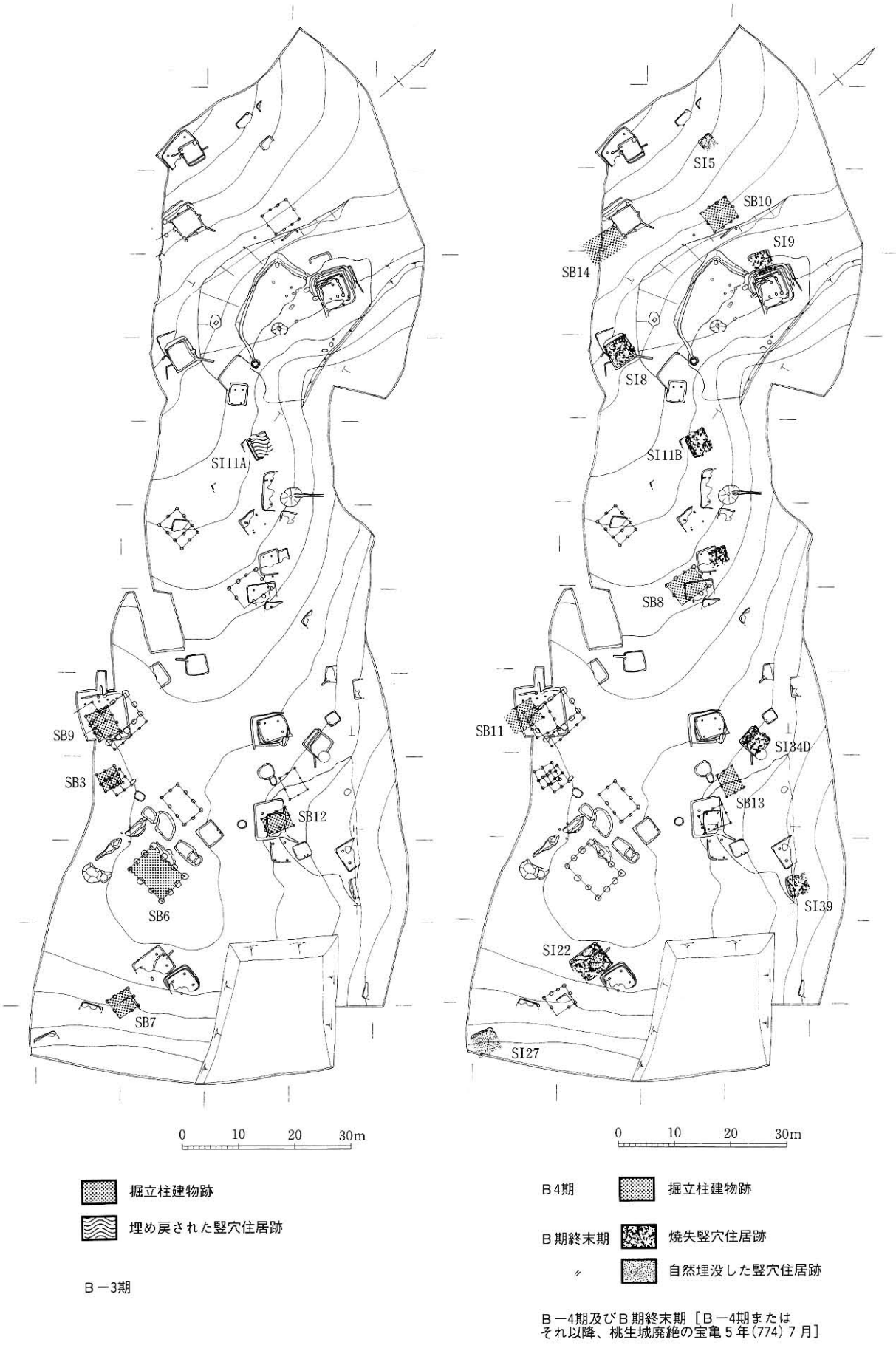
掘立柱建物跡のうち、ＳＢ２掘立柱建物跡は桁行総長約7.7m、梁行総長約4.7mと最も平面規模が大きな桁行４間、梁行２間のＳＢ２東廂付南北棟で、ほぼ北を向いて建てられている。隣接する桃生城政庁跡のＳＢ１正殿跡、ＳＢ２後殿跡、ＳＢ16東脇殿跡、ＳＢ17西脇殿跡の掘方の規模（阿部・佐



B－1期　桃生城造営期～
［天平宝字２年(758)］

B－2期

第150図　集落の変遷(3)　B－１期（左側）、B－２期（右側）



第151図　集落の変遷(4)　B－3期（左側）、B－4期、B期終末期（右側）

藤編，1995）には及ばないものの、掘方は一辺約1.1mとかなり規模が大きい。柱痕跡の大きさも径約30cmと大きい。ＳＢ１正殿跡の径50cm前後、ＳＢ16・17脇殿跡の径40cm前後には及ばないものの、ＳＢ２後殿跡の柱痕跡に等しい。一部の柱に礎盤も使用している。こうした規模の大きな格式の高い立派な建物であることから、Ｂ－２期の主屋とみられる。

このＳＢ２建物を建てる際には、Ｂ－１期のＳＩ21竪穴住居跡を埋め戻している。埋土からは古墳時代前期の珠文鏡とガラス小玉も出土している。後述のように、同型式の珠文鏡の分布状況から考えて、関東からの鎮兵や柵戸などが携えてきた先祖伝来の鏡を埋納した可能性が考えられる。

また、桁行２間、梁行２間の小規模な倉庫（ＳＢ４掘立柱建物跡）が１棟あり、注目される。

集落の性格は、竪穴住居跡のみからなるＢ－１期とは明らかに変質したものとみられる。

【Ｂ－３期】北で東または西に大きく偏る掘立柱建物跡５棟（ＳＢ３・６・７・９・12掘立柱建物跡）からなる。ＳＩ11Ａ•34Ｃ竪穴住居跡など竪穴住居跡の存在も推定されるが、特定できない（第151図左側）。

ＳＢ６掘立柱建物跡は桁行３間、梁行２間の東西棟で、柱間寸法・掘方・柱痕跡が大きく、主屋とみられる。ＳＢ３掘立柱建物跡は小規模な倉庫であり、Ｂ－２期のＳＢ４倉庫の位置をややずらして建て替えている。またＳＢ７掘立柱建物跡を建てる際には、Ｂ－２期のＳＩ24竪穴住居跡を埋め戻している。埋土からは三重小塔（第105図５）と鉄鉢形の須恵器鉢（第105図４）が出土した。後述するように、この三重小塔が天平宝字８年（764）９月の藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱直後に発願された百萬塔を模しているとみられることから、天平宝字８・９年（764・765）以降と考えられる

【Ｂ－４期】北で東に数度偏る掘立柱建物跡５棟（ＳＢ８・10・11・13・14掘立柱建物跡）からなる（第151図右側）。前述のように、焼失竪穴住居跡７棟（ＳＩ８・９・11Ｂ・22・34Ｄ・39・52竪穴住居跡）、自然埋没した竪穴住居跡２棟（ＳＩ５•27竪穴住居跡）は、本期またはそれ以降のＢ期集落の廃絶期に位置付けられる。本期にこれらの竪穴住居跡が存在した可能性がある。

（３）桃生城廃絶以降の平安時代の集落

【Ｃ－１期】９世紀後葉頃の集落（第146図左側）。

竪穴住居跡８棟（ＳＩ１・13・15・17・20・33Ａ・33Ｂ・33Ｃ竪穴住居跡）、井戸跡１基（ＳＥ３井戸跡）、遺物包含層１箇所（ＳＸ１遺物包含層）からなる。このうちＳＩ20竪穴住居跡は焼失住居跡で、床面に土器などが多く残されていた。前述のように、この時期には桃生城は廃絶してから約100年を経ており、桃生城とは関係のない一般集落とみられる。

【Ｃ－２期】10世紀前葉頃～中葉頃（第146図左側）の集落。

竪穴住居跡７棟（ＳＩ19・37Ａ・37Ｂ・40Ａ・40Ｂ・40Ｃ・40Ｄ竪穴住居跡）、土壙１基（ＳＫ12）からなる。このうちＳＩ40竪穴住居跡は３回建てなおされた大型竪穴住居跡で、３小期目のＳＩ40Ｃ竪穴住居跡と４小期目のＳＩ40Ｄ竪穴住居跡の内部にそれぞれ鍛冶炉をもち、ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡からは高チタニア系砂鉄系製錬滓などの鉄滓、ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡からは椀形精錬鍛冶滓などの鉄滓（付章２参照）も出土したことから、鉄精錬・製錬などの鉄鍛冶を行った工房跡とみられる。

4．特殊遺物

（1）三重小塔

ＳＩ24竪穴住居跡の埋土から、須恵器質の三重小塔が完全な状態で出土した（第105図５、巻頭図版２－１・２、図版12－１～３、36－１）。Ｉ群土器と共伴したことから、この三重小塔は桃生城存続期〔天平宝字２年（758）頃～宝亀５年（774）７月〕の８世紀第３四半期頃に位置付けられる。こうした完形の小塔が奈良時代の遺構から出土した例は、全国的にみて初めてのものである。以下、この三重小塔について、検討する。

1）円形小塔の集成

本例と同様に屋根・軸部が円形の古代の小塔を集成し、提示する（第152図；註24)。遺跡出土の須恵器質の小塔については、以下の８遺跡17例が集成できた。本遺跡と平城宮跡、窯跡を除けば、いずれも古代寺院跡から出土している。形態のみならず出土遺跡からみても、これら小塔が宗教的な遺物であることを裏付けている。なお、石川県七尾市能登国分寺跡から軸部が円形の多宝塔の瓦塔が出土している（七尾市教育委員会，1994)。しかし、軸部径が18.8cmと大きく、下記16例と明らかに大きさ・形態が異なるため、除外した。また、瓦塔・泥塔や中世以降に模倣されたものも除外した。

1．法隆寺伝世の百萬塔（第152図１、巻頭図版２－１左側、註25)

百萬塔は天平宝字８年（764）９月の藤原仲麻呂（恵美押勝）の乱直後に称徳天皇の発願で乱関係者の供養のために製作が開始され、宝亀元年（770）４月に完成し、法隆寺など十大寺に十万基ずつ分置された木造三重小塔で、法隆寺にのみ伝世している（金子，1991)。

2．法隆寺伝世の一萬節塔、十萬節塔

百萬塔と同時に作られた木造小塔で、一万基に１基ずつ一萬節塔、十万基に１基ずつ十萬節塔が作られ、それぞれ法隆寺に１基ずつ現存している。

3．宮城県河北町新田東遺跡ＳＩ24竪穴住居跡出土の三重小塔（第152図２、巻頭図版２－１右側)

4．平城宮跡第250・259次造酒司地区ＳＤ11600溝出土の三重小塔（第152図３）

概報（奈良国立文化財研究所，1996）では器蓋のつまみ部で火舎の蓋と推定されていたが、その後の検討から百萬塔を模倣した三重小塔の可能性が高いと考えられる（註26)。

相輪部と基壇部を欠損する。内部は中空となっている。現存高8.7cm。屋根径は初重が6.8cm、二重が6.6cm、三重が6.4cmで、初重屋根－二重屋根間が2.5cm、二重屋根－三重屋根間が2.1cmで、本遺跡の三重小塔に数値が近い。屋根の断面形状は百萬塔と酷似する。円筒状に軸部両面をロクロ成形した後、屋根を貼付し、ロクロナデ、タテナデしている。長頸壷の製作技法と類似し、初重の軸部が２段構成となっている。

5．千葉県袖ヶ浦町川原井廃寺跡出土の小塔（光江編，1986；第152図４）

瓦塔相輪部の九輪破片として提示されている（註27)。しかし、これまでに出土している瓦塔の相輪部とは形状・構造が異なる。小塔の初重破片とみることもできるかもしれない。屋根径7.6cm。川原井廃寺跡は、８世紀第４四半期～９世紀後半にかけて存続したとみられている。

6．岐阜県各務原市各務廃寺跡出土の小塔（各務原市教育委員会編，1983；第152図５～12）

８点出土している（註28）。泥塔として報告されているが、泥塔とは形態・焼成が異なる。いずれも須恵器質で、焼成やや甘く、灰白色を呈するもの（第152図５・７・９）、焼成が比較的よく、青灰色～灰色を呈するもの（第152図12）、その中間的なもの（第152図６・８・10・11）の３者がある。胎土は微細で、チャート小片をわずかに含み、各務廃寺趾出土の須恵器と同様である。美濃須衛窯跡の製品の特徴と一致する。いずれも破片で全形のわかるものはない。基壇をもつ七重小塔と推定される中実のもの（第152図９）が手捏ねで、それ以外の７点はロクロを用いている。ロクロを用いた７点のうち、基部の残る６点はいずれも中空で、層数不明のものが多い。中には五重以上のもの（第152図７・12）や四重以上のもの（第152図6）がある。

7．岐阜県各務原市出土の五重小塔（小川，1983；第152図12；註29）

泥塔として報告されているが、一般的な泥塔とは形態・焼成が異なる。須恵器質で、焼成やや甘く、灰白色を呈する。胎土は微細で、チャート小片をわずかに含み、各務廃寺趾出土の須恵器と同様である。美濃須衛窯跡の製品の特徴と一致する。相輪部を欠損し、五重小塔と推定される。基壇が表現され、中実である。大きさが異なるものの、岐阜県各務原市船山北５号窯跡出土の小塔（第152図13）と形態が類似する。

8．岐阜県各務原市美濃須衛窯跡群船山北５号窯跡出土の五重小塔（岐阜県文化財保護センター，2000；第152図13・14；註30）

相輪部を欠損するがほぼ完形の五重小塔（第152図13）と相輪部、基壇を欠損する中空で層数不明の小塔（第152図14）とがある。前者は中実で、現存高7.9cm、基壇径5.7cm、初重屋根径5.5cmと小型である。後者は現存高5.9cmで、最大屋根径7.8cmと前者よりやや大きい。須恵器

質だがいずれも生焼けで、灰白色をしている。泥塔と報告されているが、須恵器窯製品であり、形態的にみても泥塔とは異なる。８世紀末頃に位置付けられている。

9．岐阜県大垣市美濃国分寺跡出土の七重小塔（八賀，1972；第152図15）

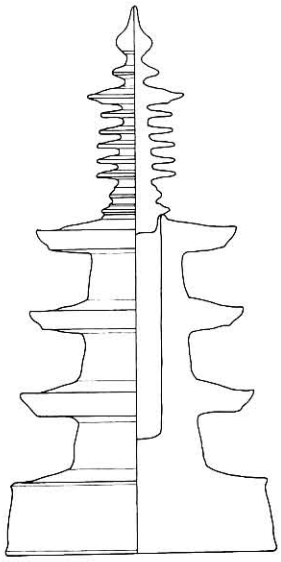
基壇をもつ七重小塔。総高22.9cm。基底部径14.1cm。一萬節塔を模倣したものともみられている。しかし、総高は一萬節塔の約1/2と小さいにもかかわらず、塔身部径は大きく、屋根径も大きい、基壇高が低く、基壇径が大きい、屋根間の高さが低い、相輪部の形態が似ていない、中空であるなど、一萬節塔とはかなり異なっている。

10．富山県立山町上末窯谷１号窯跡第５次操業出土の三重小塔（富山大学人文学部考古学研究室編，1989；第152図16）

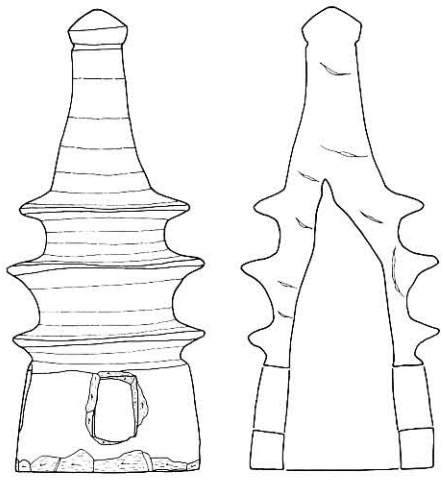
三重小塔と推定され、初重・二重に６単位の斗拱がT字形に表現されている。塔身部、屋根が円形である点は他の例と共通するが、組物が表現されている点は異なる。総高8.8cm以上、基部径7.3cm。初重屋根径12.2cm。８世紀末～９世紀初め頃に位置付けられている。

11．出土地不明、山形県鶴岡市致道博物館所蔵の三重小塔（石田，1969）

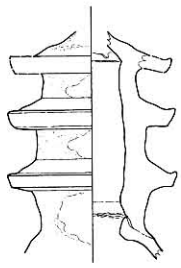
須恵器質の三重小塔で、相輪部と基壇部を欠損する。内部は中空となっている。現存高11.2cm。写真のみで、実測図は公表されていない。



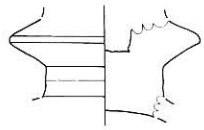
1.法隆寺　木造百萬塔



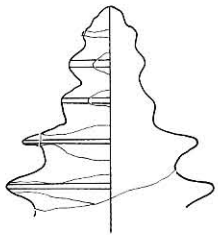
2.宮城県新田東遺跡　三重小塔



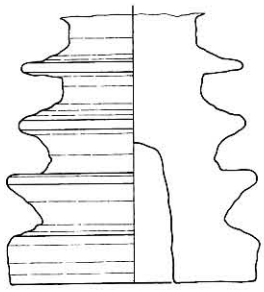
3.平城宮跡　三重小塔



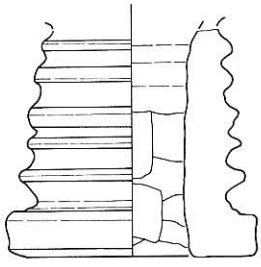
4.千葉県川原井廃寺跡



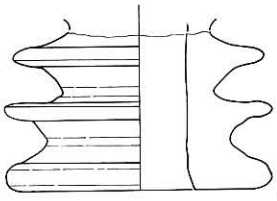
5



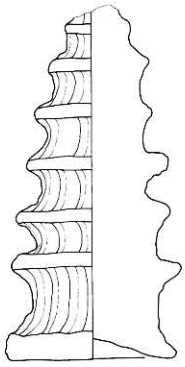
6



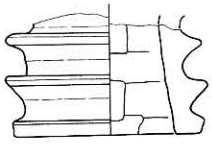
7



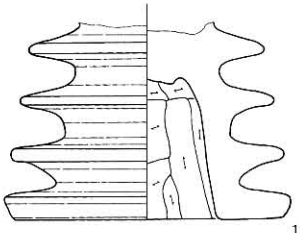
8



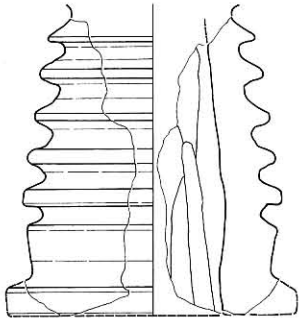
9



10

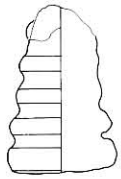


11

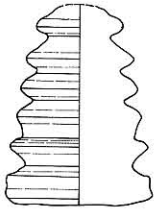


12

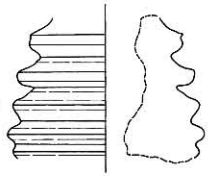
5～12：岐阜県各務廃寺跡



13.岐阜県山田寺跡

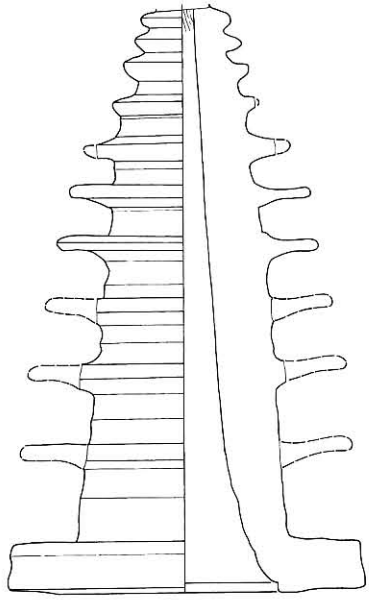


14

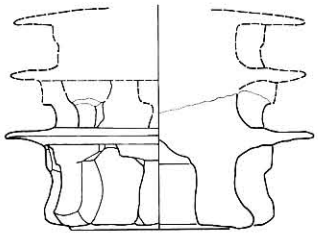


15

14・15：岐阜県船山北５号窯跡



16.岐阜県美濃国分寺跡



17.富山県上末窯谷１号窯跡

0　50　100%

縮尺1/3

第152図　三重小塔関連遺物の集成

		三　重　小　塔	百　萬　塔
製作契機		百萬塔の模倣と考えられる。	天平宝字8（764）年9月の藤原仲麻呂の乱直後、称徳天皇の発願による。
安置場所		新田東遺跡ＳＩ24竪穴住居の廃絶時に埋める。後続するＳＢ７建物の造営に伴う地鎮の可能性がある。	法隆寺など十大寺に10万基ずつ分置し、諸大寺では百萬塔を安置・供養するための小塔院などの施設を作る。法隆寺に塔身部が45,755基、相輪部が26,054余基現存する。平城宮の内裏東方幹線排水路SD2700からも１点出土し（奈良国立文化財研究所,1987・1988）、平城宮内裏内にも一部安置されていたとみられている。
製作年代		桃生城存続期〔天平宝字２（758）年頃～宝亀５（774）年７月〕の８世紀第３四半期頃。→百萬塔の模倣とみられることから、上限は天平宝字８（764）年９月よりやや遅れた頃。ＳＢ７建物との関係を考慮に入れると、760年代後半から770年代初め頃に製作されたものと考えられる。	法隆寺に現存する百萬塔は、天平神護３・神護景雲元（767）年～神護景雲２（768）年を主とする。上限は天平宝字８（764）年９月の藤原仲麻呂の乱直後、下限は宝亀元（770）年４月26日条の百萬塔完成の記事で、その間は約５年半。
材　質		須恵器質。	木製（塔身部はヒノキ、相輪部はサクラ属やサカキ、センダンを用いる）。
総　高		18.3cm。	＊平均総高21.5cm。
作り方		ロクロ成形による塔身部と相輪部の一体造。	木工用横軸轆轤を用いる。塔身部と相輪部を別々に作った組立式。
製作者		須恵器工人。	平城宮内などの官営工房の木工轆轤工人。墨書名された工人は250余人（金子，1994）。
仕上げ		胡粉（白土）を塗布していない。	胡粉（白土）を全面に塗布。
塔身部	塔身部高	10.9cm。	＊平均高13.21cm。
	基部最大径	7.8cm	10.5cm。
	屋根の数	三重〔太田（1984）、中川編（1990）に準じ、下から初重、二重、三重と呼ぶ〕。	三重〔太田（1984）、中川編（1990）に準じ、下から初重、二重、三重と呼ぶ〕。
	屋根の形状	平面は円形。断面は算盤玉状。瓦や組物は表現されていない。	平面は円形。断面は上が大きく、下が小さい扁平な台形状で、上面端部近くがやや窪んで端部が上に反る。瓦や組物は表現されていない。
	初重屋根径	7.8cm。	＊平均9.20cm。
	二重屋根径	7.9cm。	＊平均8.40cm。
	三重屋根径	6.8cm。	＊平均7.62cm。
	軸部断面の形状	円形。	円形。
	扉の表現	初重軸部の４箇所に長方形の透かしで表現。	扉は表現されていない。。
	初重軸部の大きさ	高さ4.3cm、最大径7.8cm。	高さ約1.8cm、最大径約5.4cm。
	二重軸部の大きさ	高さ1.8cm、最大径5.4cm。	高さ約1.8cm、最大径約4.7cm。
	三重軸部の大きさ	高さ1.3cm、最大径4.9cm。	高さ約1.8cm、最大径約4.0cm。
	基壇の有無、形状と大きさ	基壇は表現されていない。	基壇が表現されている。円錐台状。基壇基部平均径10.50cm、基壇平均高3.08cm、基壇上部平均径9.84cm。
	初重屋根までの高さ	5.1cm。	＊平均高3.30cm。計測表の（B-A）による。
	初重屋根－二重屋根間	2.9cm。	＊平均高3.20cm。計測表の（C-B）による。
	二重屋根－三重屋根間	2.1cm。	＊平均高3.21cm。計測表の（D-C）による。
	内部の孔の位置と大きさ	初重軸部底面から上方に向けて、下径4.5cm、深さ11.4cmの孔を円錐形に刳り抜く。	塔身部の第３層屋根上から下方に向けて、＊平均上径2.25cm、＊平均深さ8.33cmの経巻孔を円筒状に刳り抜く。
	内部への埋納	不明。中に入っていた土を慎重に掻き分け、篩にかけたが、何も入っていなかった。	印刷された無垢浄光大陀羅尼経（６種あるうちの根本、自心、相輪、六度の４種の陀羅尼）を経巻孔の内部に納め、別作りの相輪部で蓋をする。
	塔身部の作り方	粘土紐を巻き上げ、ロクロ成形している。初重軸部には長方形の透かしを入れ、透かし周辺と下部・底面を手持ちヘラケズリしている。	轆轤削りで製作されている。主に一木造だが、組立式のものもある。塔身部底面に横軸轆轤に取り付けた鉄爪痕跡あり。底面には轆轤削り痕を残すものと、轆轤削り後のノミ痕跡を残すものとがある。後者が時期的に古い。
相輪部	相輪部総高	7.2cm。	＊平均総高8.52cmで、相輪部に入れられる?を除いた高さは＊平均7.89cm。
	相輪部の細部表現	頂部の宝珠のみ表現され、請花、宝輪、伏鉢、露盤は表現されていない。	上から順に宝珠、小・大二重の請花、五重の宝輪（九輪を簡略化）、請花、伏鉢、露盤が表現されている。
	宝珠の形状と大きさ	低い宝珠形で、須恵器蓋の宝珠つまみと類似する。径2.4cm、高さ1.4cm。	宝珠の高さがあり、宝珠先端が尖って長く延びている。＊平均径1.34cm。高さ約2.0cm。
	相輪部基部径	3.9cm。	相輪部基部は露盤となる。＊露盤平均径2.59cm。
	宝珠直下の最上請花径	宝珠直下の最上請花にあたる箇所の径は1.9cm。	＊平均1.92cm。
	相輪部の作り方	ロクロ成形による塔身部と相輪部の一体造。	轆轤削りで製作されている。主に一木造だが、組立式のものもある。

表９　三重小塔と百萬塔の比較

＊は金子裕之，1991「百萬塔」『法隆寺の至宝　第５巻　百萬塔・蛇羅尼経』p.93の計測表による。

本遺跡の三重小塔と最も類似する資料は、法隆寺に伝世する木造百萬塔（第152図１）と平城宮跡から出土した須恵器質の小塔（第152図３）である。後者は屋根の形態が百萬塔と酷似するが、全体の形状が不明確である。上記遺跡出土の小塔の多くは、木造百萬塔とは形態・大きさが異なり、全体の形のわかるものも少ない。須恵器質の小塔では本遺跡から出土した三重小塔のみが完形で、最も百萬塔

に類似している。

2）三重小塔と百萬塔との比較検討

本遺跡の三重小塔（第152図２）と百萬塔（第152図１）とを比べると（表9)、屋根・軸部が円形の三重小塔であり、ロクロ成形されていること、瓦が表現されていないこと、法量が近似することなど類似点が多い。ただし、須恵器質の焼き物であること、相輪部の表現が簡略化されていること、屋根の大きさが初重・二重・三重と順に小さくならないこと、屋根の断面形が算盤玉状であること、初重の軸部に長方形の透かしが４箇所開けられていること、基壇が表現されずに、内部が基壇底面から中空に刳り抜かれていること、仕上げに胡粉（白土）が塗布されていないことなどは百萬塔と異なる。

須恵器質の焼き物で、須恵器窯で焼成されたとみられること、初重の軸部に長方形の透かしが４箇所開けられていることなどは瓦塔と共通している。しかし、瓦塔は総高が１m以上と大きく、法量がまったく異なるとともに、屋根・軸部が方形で、瓦や組物も表現され、木造塔をかなり忠実に小さくしたものである。本遺跡出土の三重小塔は瓦塔とは法量・形態が大きく異なる。

以上のように、本遺跡出土の三重小塔は百萬塔を模倣したものとみられるが、忠実には模倣していない。

桃生城存続期〔天平宝字２年（758）頃～宝亀５年（774）７月〕でも相対的に古いＢ－２期のＳＩ24竪穴住居跡から出土したことから、宝亀５年（774）7月よりも古いとみられる。また、百萬塔を模倣したものとみられることから、天平宝字８年（764）9月より古くはならない。

この三重小塔は、Ｂ－２期のＳＩ24竪穴住居跡埋土から、横倒しになった上に鉄鉢形の須恵器鉢Ｂ（第105図４）が被さった状態で出土した（第104図、巻頭図版２－２)。

鉄鉢形の須恵器鉢は、「仏供養具」とみられ、僧尼や仏教との関連の深い遺物である（中野，1976；雨宮，1983；兵，1997；考古学から古代を考える会，2000など)。

三重小塔が百萬塔を模倣したものとみられ、三重小塔と鉄鉢形の須恵器鉢がともに出土したことを考え合わせると、三重小塔と鉄鉢形の須恵器鉢を用いた何らかの供養（註31）が行われた可能性が高いと考えられる。

（２）珠文鏡

Ｂ－１期のＳＩ21竪穴住居跡埋土より珠文鏡が１点出土した（第65図51)。この鏡は錆が進行し、遺存状態はかなり悪い。大きさは直径約7cmで、約3/4残存している。文様は外側から素縁、外向鋸歯文、櫛歯文、二重圏線、一列に整然と配置された珠文、圏線となっている。鏡式は森下分類の珠文鏡２式、中山・林原分類、樋口分類の珠文鏡Ｉ類に相当し、古墳時代前期（４世紀代）に列島内で製作された倭鏡である（森下，1991；中山・林原，1994；樋口，1979、註32・33)。

ところが，この鏡が出土したＢ－１期のＳＩ21竪穴住居跡は、上限年代が桃生城造営期〔天平宝字２年（758）頃〕に位置付けられる。したがって、この珠文鏡は少なくとも300年間は伝世されてから埋められている。

本例のように、年代的にかけ離れた古墳時代の鏡が古代の竪穴住居跡から出土した例には、9世紀後半頃の埼玉県嵐山町大木前遺跡第5号竪穴住居跡から出土した仿製二神二獣鏡、9世紀前半頃の千葉県千葉市下田遺跡第49号竪穴住居跡から出土した珠文鏡など、全国的にみてもごく少数例しかない（埼玉県埋蔵文化財調査事業団，2001）。今回、奈良時代の竪穴住居跡から出土した珠文鏡は、かなり珍しいものと言える。

新田東遺跡に古墳時代前期に属する古墳があったとは、これまでの周辺地域の状況からみてとても考えられない。塩釜式の竪穴住居跡が1棟（ＳＩ16竪穴住居跡）のみ検出されたが、出土遺物は貧弱で、珠文鏡を保持していた集団に属していた可能性は低い。同型式の珠文鏡の北限である長野県を含めた中部・関東地方から、奈良時代になってもたらされたものとみる方がより自然な解釈である。この珠文鏡については、桃生城の造営にあたり、関東地方から強制移住させられた柵戸や鎮兵などが伝世してきた可能性が高いと考えておきたい。

なお、珠文鏡と同じくＳＩ21竪穴住居跡埋土からガラス小玉が1点出土したが、成分分析の結果からみて古墳時代のもので、珠文鏡とほぼ同年代のものとみられる。

第6章　まとめ

1．古墳時代、奈良時代、平安時代の集落が検出された。他に縄文時代前期の土壙1基、遺物包含層1箇所、近世以降の石組井戸跡1基、石組暗渠・開渠1条、平場1箇所が検出された。

2．奈良時代のＢ期集落は、西に隣接する城柵官衙遺跡の桃生城を支えるために、律令政府の辺境政策に基づいて陸奥国内や関東諸国などから動員・移住された柵戸や鎮兵の集落跡である。

3．奈良時代のＢ期集落は、桃生城造営期の天平宝字2年（758）年頃～廃絶期の宝亀5年（774）7月までのもので、掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡29棟以上からなる。竪穴住居跡29棟のうち、20棟は人為的に埋め戻されており、桃生城造営期または存続期のものである。また、焼失した7棟、自然堆積して廃絶した2棟は、桃生城廃絶期の宝亀5年（774）7月頃のものとみられる。掘立柱建物跡を中心にみると4小期の変遷がある。各小期には複数の竪穴住居跡の存在が推定されるが、特定できない。

4．Ｂ期の竪穴住居跡には関東系のカマドがもあり、北関東系の須恵器高台坏・甕も出土している。遺構・遺物から『続日本紀』にみえる関東からの鎮兵や柵戸の存在を裏付けることができた。

5．Ｂ期の竪穴住居跡から馬具が出土し、『続日本紀』にみえる騎兵や軍毅などの存在を裏付けることができた。

6．平安時代のＣ期の集落は、宝亀5年（774）7月の桃生城廃絶から約100年後の一般集落であり、2小期に分けられる。

註

註１　愛知県陶磁資料館主任学芸員の井上喜久男氏に御教示いただいた。器形・調整・胎土・鉄錆釉・焼成の特徴などからみて瀬戸窯製品であり、井上編年（1994）の登窯Ｖ期〔1716～1743年、享保～寛保年間〕、藤沢編年（1998）の瀬戸窯第２段階第６小期（18世紀前葉頃）のものであるという。御教示に感謝いたします。

註２　Ｉ群土器の可能性のある土器が出土した遺構・層位には、ＳＩ11Ｂ焼失竪穴住居跡堆積土、ＳＢ３・４・５・７・８・10・12・14掘立柱建物跡掘方、ＳＢ５・６・10・11・12掘立柱建物跡抜取穴、ＳＢ１・２・３・４・６・７・９掘立柱建物跡柱痕跡、ＳＥ２井戸跡掘方・自然堆積土、ＳＫ３・５・６～８土壙がある。また、Ｉ群土器を設定した基準資料に含まれていないが、Ｉ群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器坏ＩＡ１・ＩＡ２・ＩＣ２類、高坏Ｉ類、鉢Ⅱ類、須恵器坏Ｂ１・Ｅ類、高坏Ａ類、盤、蓋Ａ１ｂ・Ａ１ｃ・Ａ２類、鉢Ｂ類がある。

註３　ⅡＡ群土器を設定した基準資料に含まれていないが、ⅡＡ群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器高台坏ⅡＡ類がある。なお、土師器坏Ｉ類・甕Ｉ類、須恵器坏Ａ３類がこれらの一部から破片で少数出土したが、ⅡＡ群土器よりも古い時期のＩ群土器が混入したものとみられる。

註４　ⅡＢ群土器の可能性のある土器が出土した遺構・層位には、ＳＩ37Ａ竪穴住居跡周溝、ＳＩ40Ａ竪穴住居跡周溝・主柱穴抜取穴、ＳＩ40Ｂ主柱穴掘方、ＳＸ１遺物包含層がある。また、ⅡＢ群土器を設定した基準資料に含まれていないが、ⅡＢ群土器に相当する資料に含まれている類型には、土師器甑Ⅱ類がある。なお、土師器坏Ｉ類・甕Ｉ類、須恵器坏Ａ３類がこれらの遺構の一部から破片で少数出土したが、ⅡＡ群土器よりも古いＩ群土器が混入したものとみられる。

註５　本遺跡のＩ群土器に含まれていた須恵器のうち、桃生城跡ＳＢ17西脇殿出土土器群に含まれない須恵器の類型には、坏Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ３・Ｂ４・Ｃ１・Ｃ２・Ｄ２・Ｅ類、高台坏Ａ２・Ｂ１・Ｃ類、高坏Ｂ類、盤、蓋Ａ１ａ・Ａ１ｂ・Ａ２・Ｂ類、鉢Ｂ類、壺Ａ１・Ｂ１類、甕Ｃ類、円面硯がある。前述のように、これらの多くはＩ群土器の中で少数含まれていた類型であり（表５、第135図）、これらが含まれていないことは大きな差異ではないと考えられる。

註６　本遺跡出土の須恵器坏Ａ３類と桃生城跡西脇殿出土の須恵器坏Ａ３類について、Microsoft社のExcel2000を用いて口径、底径、器高、底径／口径比、器高／口径比、器高／底径比、外傾度の属性表を作成し、商用の汎用統計ソフトSTATISTICA　Version99j（開発元：米StatSoft社、日本法人：スタットソフト・ジャパン株式会社）の学習用機能限定版STATISTICA　BLUE BACKS　Special Version（新村秀一，2002）にその属性表を読み込んでデータ解析した。結果は下記の表のとおりである。この表の中央値（Q2）は測定値を小さい順に並べた時の中央の値、第１四分位点（Q1）は同様に25％の値、第３四分位点（Q3）は同様に75％の値を指す。中央値を中心とするQ1からQ3までの間に計測値の50％が入り、中央値がこれらの計測値を代表している。点数の少ない桃生城西脇殿の数値は、いずれも新田東遺跡の中央値を中心とする50％の範囲内に入り、両者の法量が類似していることがわかる。

須恵器坏Ａ３類	計測数	平　均	中央値（Q2）	最小値	最大値	第１四分位点（Q1）	第３四分位点（Ｑ３）	四分位点範囲	標準偏差
口　径	31点 9点	14.7cm 14.8cm	14.6cm 14.8cm	13.3cm 14.0cm	16.6cm 15.6cm	14.1cm 14.6cm	15.4cm 15.2cm	1.3cm 0.6cm	0.844349 0.516667
底　径	43点 12点	8.4cm 8.3cm	8.4cm 8.3cm	7.0cm 7.6cm	11.0cm 9.3cm	7.8cm 8.0cm	9.2cm 8.6cm	1.4cm 0.7cm	0.899021 0.487029
器　高	30点 9点	4.15cm 4.3cm	4.25cm 4.2cm	3.1cm 4.0cm	5.2cm 4.5cm	3.9cm 4.2cm	4.4cm 4.3cm	0.5cm 0.1cm	0.450861 0.166667
底径／口径	30点 9点	0.567 0.565	0.568 0.575	0.493 0.487	0.652 0.628	0.531 0.544	0.603 0.582	0.072 0.037	0.044904 0.040864
器高／口径	30点 9点	0.282 0.288	0.285 0.284	0.220 0.272	0.333 0.307	0.265 0.281	0.301 0.298	0.053 0.017	0.026396 0.012278
器高／底径	30点 9点	0.500 0.565	0.511 0.575	0.344 0.487	0.614 0.628	0.450 0.544	0.538 0.582	0.090 0.037	0.064945 0.040864
外傾度	30点 9点	52° 53°	52° 53°	46° 48°	59° 57°	51° 50°	55° 55°	4.5° 5°	3.525249 3.077016

新田東遺跡・桃生城西脇殿出土の須恵器坏Ａ３類の法量比較（上段：新田東遺跡、下段：桃生城跡西脇殿）

註７　Ｉ群土器を出土し、基準資料に用いた竪穴住居跡のうち、焼失したＳＩ８・34Ｄ竪穴住居跡は宝亀５年（774）７月の桃生城廃絶期に位置付けられ、Ｉ群土器を出土した他の遺構よりも年代的に新しいとみられる。

３回建て直されたＳＩ34竪穴住居跡のうち、当初のＳＩ34Ａ竪穴住居跡には丸底の土師器坏ＩＡ１類が含まれている（第137図下）。また、焼失した最後のＳＩ34Ｄ竪穴住居跡には丸底の土師器坏ＩＡ類が含まれず、平底の土師器器坏ＩＣ１類と土師器椀ＩＢ類が含まれている（第139図）。層位的関係からみて、土師器坏の丸底（ＩＡ類）から平底（ＩＣ類）への転換が新旧関係として把握される。これらＳＩ８・34Ｄ焼失竪穴住居跡出土土器をＩ群土器の中でも新しい土器様相としてみることができる。

一方、ＳＢ２・９・11掘立柱建物跡と重複してこれらより古いＳＩ21竪穴住居跡については、ＳＢ２・９・11掘立柱建物跡からもＩ群土器が出土したことから、Ｉ群土器を出土した遺構の中でより古い遺構であり、そこから出土した土器（第136図上段）はＩ群土器の中でも古い様相のものととらえることができる。土師器坏は丸底気味のＩＢ類に限られ、土師器高坏を含む。土師器高坏は新しい土器様相を示すＳＩ８・34Ｄ焼失竪穴住居跡に含まれず、土師器坏ＩＢ類はＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡に含まれていない。量的に少ないため、断定できないが、土師器坏ＩＢ類、土師器高坏もＩ群土器の中でより古い様相のものとみることができるかもしれない。

註８　底部が回転糸切りで切り離されたままの須恵器坏、土師器坏は宮城県内では９世紀後葉頃に一般化している。

註９　第２群土器の基準資料には、多賀城市高崎遺跡第11次調査ＳＸ1080土器廃棄土壙出土土器群（千葉・伊藤，1995；高野，1991）、多賀城市山王遺跡第９次千刈田地区ＳＸ543土器廃棄土壙出土土器群（石川・相沢，1991）がある。

註10　在地・関東系というカマドの相違に関わらず同じ土器様相であることを併せ考えると、この太田窯跡の製品が官給品として本遺跡に居住した人々に支給された可能性がある。その一方で、次項で述べるように、北関東系の須恵器高台坏・甕が両者のタイプの竪穴住居跡から若干出土している（ＳＩ２・８・21・27竪穴住居跡）。このことは竪穴住居の構築者と居住者が必ずしも一致していなかったことを示唆している。

註11　脚部に透かしのある須恵器高坏は、関東では茨城県新治窯跡群（赤井，1997ａ・ｂ）などで知られ、岐阜県美濃須衛窯跡群（斉藤・後藤編，1995）にも多く認められる。

註12　体積はＳＩ８竪穴住居跡では約2.5㎥、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡では約2.1㎥で、埋蔵文化財関係で一般的に用いられているテン箱（内法54cm×34cm×15cm）に換算すると、ＳＩ８竪穴住居跡では約92箱分、ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡では約76箱分となる。固く焼き締まった焼土塊にはスサを含んでいなかった。この層直下の床面上には炭化材があまり多く認められず、上部に炭化物の薄い層は認められなかった。そしてＳＩ８・34Ｄ竪穴住居跡とも壁際が周溝状に掘削され、その掘方が埋められ、上部が窪んだ状態で火災に遭っていた。また、ＳＩ８竪穴住居跡のカマド前には暗渠が設けられ、この暗渠も掘方が埋められて、上部が窪んだ状態で火災に遭っていた。

註13　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡の火災後に流入した堆積土からはスサを含まない焼けた壁土片が少量出土している。ＳＩ８焼失竪穴住居跡については、壁と土葺き屋根をもつ構造であったと考えられる。

註14　土葺き屋根をもつ古墳時代～平安時代にかけての竪穴住居跡については、群馬県下での検出例が多く、中筋遺跡・黒井峯遺跡・荒神前遺跡などの例が集成されている（深澤，1992）。また、竪穴住居跡の覆土モデルと上屋・埋没過程モデルについての論考もある（江口，1998）。本遺跡の焼失竪穴住居跡の構造を考える上で参考にさせていただいた。

註15　宮城県内では、①６世紀末～７世紀初頭頃の仙台市大年寺山第10号横穴の鐙・轡・引手・革金具（佐藤・菊地編，1990）、②利府町郷楽遺跡第107号住居跡出土の８世紀後半頃の鉄製Ｕ字状吊手金具（庄子他，1990）、③多賀城跡第66次調査ＳＫ2321土壙第10層出土の８世紀後葉頃～９世紀初頭頃の双環状鏡板付轡（柳澤・白崎編，1996）、④仙台市中田畑中遺跡第54号土坑出土の９世紀代と推定される壷鐙鐙靼金具（太田編，1994）、⑤多賀城市市川橋遺跡河川跡出土の10世紀前葉頃の鉄製壷鐙（多賀城市埋蔵文化財センター，2000）など、数遺跡から馬具が出土している。このうち、②の利府町郷楽遺跡第107号住居跡出土例は、本遺跡出土の壷鐙金具と形態が類似し、年代も本遺跡

に近い。また、③の多賀城跡第66次調査ＳＫ2321土壙第10層出土例に取り付けられている引手は本遺跡例と類似している。本遺跡の轡も同様の環状鏡板付轡であったとみられる。

註16　木心金属張三角錐形壷鐙については、古墳時代の出土例（斎藤，1986；花谷，1991；冨永，2002）が集成されている。奈良・平安時代のものは出土馬具自体きわめて少ない（大谷，1984；瀧瀬，1994・1997；小島，1997）。また、古代の木製鐙についても出土例が少ない（永井，1996）。鉄製Ｕ字状吊手金具は、平安時代などの遺構からの出土例も少数知られているが（大谷，1984；原他，1989；太田編，1994；瀧瀬，1997；山口編，1999など）、木製舌長鐙に取り付く金具と推定されており（原他，1989）、これらの共伴関係や年代、取り付けられる木製鐙の形態などについて、今後さらに検討する必要がある。

註17　３方向に革帯を引っ張る構造の辻金具には、正倉院中倉宝物の金銀泥絵鞍（第１号鞍）、素地牟久木鞍（第２号鞍）の胸懸の辻金具がある（正倉院事務所編，1976・1994；日本馬具大鑑編集委員会編，1991）。これらは水晶・琥珀が嵌装された金銅製の優品で、３本の革帯は先金具・平環・締金具でそれぞれの脚と結合され、鋲留めはされていない。馬形埴輪の例では面懸の辻金具は３方向ないし４方向に引っ張る構造のもので（増田，1960；太田，1999；徳江編，1998）、尻懸の辻金具は４～６方向に引っ張る構造のものである。

註18　本遺跡の隣接する桃生城の造営にあたり、『続日本紀』天平宝字２年（758）12月８日条には坂東の騎兵、『続日本紀』天平宝字３年（759）９月26日条と『続日本紀』天平宝字４年（760）１月４日条には軍団を統括した軍毅がみえ、騎兵や騎乗した武官が存在したことを示している。

註19　鑿であるならば、軍防令備戎具条には兵士10人ごとに備えるべき火具の一つとして鑿１点が規定されており、本遺跡の性格を考える上で注目される。

註20　群馬県松井田町愛宕山遺跡第４号焼失竪穴住居跡出土の８世紀末～９世紀初頭頃〔天平宝字４年（760）初鋳の万年通寶が共伴、土器からの年代推定〕の鑿（徳江，2000）、埼玉県上里町中堀遺跡出土の平安時代の鑿（瀧瀬，1997）など、少数例が知られているにすぎない。

註21　桃生城跡が宝亀５年（774）７月の後に再建されていないことについて、鈴木拓也氏はその直後の宝亀５年（774）10月に按察使兼鎮守将軍の大伴駿河麻呂が遠山村を攻撃して制圧し、宝亀７年（777）頃より海道蝦夷から山道蝦夷に律令政府の攻撃目標が絞られてくることから、宝亀５・６年の征討によって遠山村を中心とする海道蝦夷がほぼ制圧され、そこに桃生城に代わる海道蝦夷の支配の拠点として中山柵が設置されたと推定している（鈴木，1998）。桃生城より北に位置する中山柵の設置によって、桃生城は前進基地としての役割を終え、再建されなかったとみられる。そして、桃生城を支えた本遺跡のＢ期集落も廃絶したとみられる。

註22　Ｂ期集落の出現と廃絶のあり方は突然であり、隣接する当時最北の城柵・桃生城の存廃と同一歩調を取ったものとみられる。また、このことは桃生城を支えるために律令政府の辺境政策に基づいて陸奥国内や関東諸国などから動員・移住された柵戸や鎮兵の集落である本遺跡の性格をよく示している。

註23　Ｂ－１期の上限年代については、桃生城が造営された天平宝字２年（758）頃、Ｂ期の下限年代は桃生城が海道蝦夷の襲撃によって焼失した宝亀５年（774）７月とみられる。Ｂ期の存続年代は桃生城存続期〔天平宝字２年（758）頃～宝亀５年（774）７月〕の17年間とみられ、この間に少なくとも４小期の変遷があることになる。各小期を通じて存続した竪穴住居跡などもあると予想されるが、１小期は平均４年と短く、短期間のうちに変遷している箇所もあることがわかる。

註24　東海地方の出土品については、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏と岐阜県各務原市埋蔵文化財調査センターの渡辺博人氏に御教示いただいた。また、奈良国立文化財研究所の金子裕之には百萬塔全般にわたって御教示いただいた。御教示に感謝申し上げます。

註25　法隆寺百萬塔（第153図１）は金子（1991）掲載図を筆者が再トレースしたものである。誤りがあればすべて筆者の責任である。また、巻頭図版２-１左側の百萬塔は東北歴史博物館所蔵のもので、本遺跡出土の三重小塔と並べ

て撮影させていただくとともに、掲載を快諾していただいた。東北歴史博物館の御配慮に感謝申し上げます。

註26　平城宮跡出土資料（第153図３）については、須恵器の器蓋として概報（奈良国立文化財研究所，1996）に報告されたものである。資料調査にあたって奈良国立文化財研究所、金子裕之・巽淳一郎・金田明大氏の御配慮をいただき、ともに実見して本遺跡の三重小塔と同様の三重小塔の一部としてみた方がよいとの結論に達した。そして、後日に金田氏が改めて実測された実測図を提供していただき、柳澤がトレースしたものを提示した。誤りがあればすべて筆者の責任である。関係者各位の御配慮に感謝申し上げます。

註27　千葉県袖ヶ浦町川原井廃寺跡出土資料（第153図4）については、報告書掲載図を上下逆にみて裏トレースした。誤りがあればすべて筆者の責任である。

註28　岐阜県各務廃寺出土小塔（第153図5～12）は、各務原市埋蔵文化財調査センターで実見し、『各務原市史』掲載の図に一部加筆・修正して再トレースした。そのうち第153図11は未公表資料で、筆者が略測図をとらせていただいた。誤りがあればすべて筆者の責任である。各務原市埋蔵文化財調査センターの御配慮に感謝申し上げます。

註29　山田寺跡出土小塔（第153図13）は、各務原市埋蔵文化財調査センターで実見させていただき、『各務原市史』掲載の図に一部加筆・修正して再トレースした。各務原市埋蔵文化財調査センターの御配慮に感謝申し上げます。

註30　岐阜県文化財保護センターで実見させていただいた。御配慮に感謝申し上げます。

註31　百萬塔の造立根拠となった『無垢浄光大陀羅尼経』には、建立した仏塔の前に「方壇」を作って供養する呪法が述べられ、その際に「五色鉢」「五鉢」「供養鉢」「五供養鉢」が用いられている（新脩大正蔵経刊行会編，1928，pp.718～720；千早，1908）。

註32　大手前大学の森下章司氏に珠文鏡全般について御教示いただいた。感謝申し上げます。

註33　これまで見つかった珠文鏡は、1994年段階の集成によると、全国で約250例ある（中山・林原，1994）。珠文鏡には珠文が一列に並ぶもの、二列に並ぶもの、三列以上乱雑に配されるものなどがある（樋口，1979；小林，1979：森下，1991；今井，1991）。珠文鏡の北限は、福島県会津坂下町森北１号墳（吉田編，1999）と福島県原町市桜井古墳群上渋佐支群７号墳（鈴木編、2001）で、これらは珠文が二列に並ぶ型式である。今回見つかった珠文鏡と同様に珠文が一列に並ぶ型式の珠文鏡は、群馬県に２例、長野県に６例、東京都に１例、岐阜県１例、大阪府に１例、兵庫県に２例、広島県に１例、徳島県に３例、愛媛県に２例、福岡県に１例、熊本県に１例など21例以上がある（白石・設楽編，1994；今井，1991；西山，1997；中山・林原，1994）。このうち、長野県長野市川柳将軍塚古墳（森本，1929；後藤，1977；岩崎，1982）、同川田条里遺跡・篠ノ井遺跡群（西山，1997）、古墳時代前期の群馬県甘楽郡甘楽町天引向原遺跡20号住居跡（右島編，1994）、群馬県佐波郡赤堀町今井南原古墳群（群馬県立博物館，1980）がこれまで北限であった（白石・設楽編，1994；西山，1997；中山・林原，1994）。珠文鏡の分布を考える上でも、今回出土した珠文鏡は貴重である。

なお、宮城県内でこれまで見つかった古墳時代の鏡は９例（①四獣形鏡：伝古川市日光山古墳群、②重圏文鏡？：色麻町御山古墳、③六獣形鏡：仙台市一塚古墳、④乳文鏡：仙台市裏町古墳、⑤捩文鏡？：仙台市南小泉遺跡、⑥捩文鏡：角田市吉ノ内１号墳、⑦六鈴六獣形鏡：丸森町狐塚古墳、⑧六鈴七獣形鏡：丸森町台町20号墳、⑨内行花文鏡：丸森町台町20号墳）だが、珠文鏡はない（藤沢，1994）。

引用文献（あいうえお順）

相沢清利　1999　「東北地方縄文文化小考」『宮城考古学』第１号　pp.55～65

相原淳一　1986　「第Ⅰ群土器」『田柄貝塚』（宮城県埋蔵文化財調査報告書第111集）

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』76-1　pp.1～65

赤井博之　1997ａ　「新治窯跡群東城寺桑木窯跡採集須恵器の新資料」『茨城県考古学協会誌』第９号　pp.95～110
赤井博之　1997ｂ　「新治窯跡の基礎的研究－奈良・平安時代の須恵器編年について－」『土曜考古』第21号　pp.9～15
吾妻俊典・阿部恵編　2002　『桃生城跡Ｘ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第27冊）
阿部恵・佐藤和彦編　1995　『桃生城跡Ⅲ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊）
阿部恵・佐藤和彦編　1996　『桃生城跡Ⅳ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第21冊）
阿部恵・佐藤和彦他編　1997　『桃生城跡Ⅴ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第22冊）
阿部恵・佐藤和彦編　1998　『桃生城跡Ⅵ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第23冊）
阿部恵・佐藤和彦編　1999　『桃生城跡Ⅶ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第24冊）
雨宮龍太郎　1983　「古代村落と仏教磁鉢をめぐる人々－」『千葉県埋蔵文化財センター研究連絡紙』第２号　pp.9～15
石川俊英・相沢清利　1991　『山王遺跡―第９次発掘調査報告書―』（多賀城市文化財調査報告書題26集）
石田明夫　1994　『会津大戸窯－大戸窯跡群発掘調査報告書〔遺物編〕－』（会津若松市文化財調査報告第37号）
石田茂作　1969　『日本佛塔』
石巻市教育委員会　1993　「北海道系の土器（続縄文土器）が発見されました」『石巻市文化財だより』第22号
石守晃　1995　「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』12　pp.95～106
石守晃　2001　「復元住居を用いた焼失実験　再び」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』19　pp.95～104
井上喜久男　1994　「尾張陶磁(4)―江戸中期の瀬戸物編年―」『愛知県陶磁資料館研究紀要』13　pp.27～51
今井堯　1991　「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡－小型倭鏡の検討－」『古代吉備』第13集　pp.1～26
岩崎卓也　1982　「川柳将軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史考古資料編　全１巻　主要遺跡（北・東信）』　pp.340～347
氏家和典・桑原滋郎・平川南他　1976　『桃生城跡Ⅱ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第２冊
江口志麻　1998　「竪穴住居復元のための一考察」『新潟県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第２号　pp.103～124
岡田茂弘・進藤秋輝他　1975　『桃生城跡Ⅰ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第１冊
岡安光彦　1984　「いわゆる「素環の轡」について」『日本古代文化研究』創刊号（PHALANX―古墳文化研究会―）pp.95～120
岡安光彦　1998　「古墳文化における地域性－九州地方出土の環状鏡板付轡を中心に－」『駿台史学』第102号（駿台史学会）　pp.111～129
小川淳一編　1987　『五本松遺跡　都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書』（仙台市文化財調査報告書第99集）
太田昭夫編　1994　『仙台市中田南遺跡』（仙台市文化財調査報告書第182集）
太田博太郎　1984　『日本建築史基礎資料集成十一　塔婆Ⅰ』
太田博之　1999　「千葉県畑沢埴輪窯出土馬形埴輪に見る面懸の構造」『古代』第107号　pp.77～89
大谷猛　1984　「住居址出土の馬具」『東京都教育委員会学芸研究紀要』第１集　pp.53～67
各務原市教育委員会編　1983　「第三章　歴史時代の遺跡・遺物　第二節　古代の寺院跡」『各務原市史　考古・民俗編　考古』　pp.475～512
加藤孝　1951　「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』１　pp.183～199
金子裕之　1991　「百萬塔」『法隆寺の至宝－昭和資材帳－　第５巻　百萬塔・陀羅尼経』　pp.90～113

金子裕之　1994　「百萬塔の工房」『官営工房研究会会報１　百萬塔工房をめぐる諸問題』（奈良国立文化財研究所）pp.1～26
川井正一　1988　「外面に同心円文叩き目を有する須恵器について」『婆良岐考古』第10号　pp.51～66
鬼頭清明　1991　「陀羅尼経」『法隆寺の至宝－昭和資材帳－　第５巻　百萬塔・陀羅尼経』　pp.114～117
岐阜県文化財保護センター　2000　『船山北古墳群・船山北窯跡群・船山北遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第52集）
工楽善道・金子裕之　1983　「百萬塔の調査から」『伊珂留我　法隆寺昭和資材帳調査概要』１　pp.16～23
蔵中進　1988　「慶州仏国寺発見『無垢浄光大陀羅尼経』と『百万塔陀羅尼』」『水門』16（蔵中進1995『則天文字の研究』　pp.271～286再掲）
群馬県立博物館　1980　『企画展　群馬の古鏡』
考古学から古代を考える会　2000　『古代仏教系遺物集成・関東』
小島敦子　1997　「群馬県における集落出土の馬具」『荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第223集　pp.159～162
小林三郎　1979　「古墳時代初期倣製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿大史学』46　pp.78～96
後藤勝彦　1968　「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚（Ⅰ）」『仙台湾周辺の考古学的研究』　pp.１～20
後藤秀一・吾妻俊典編　2000　『桃生城跡Ⅷ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第25冊）
後藤守一　1977　『古鏡聚英　上編』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2001　『大木前／小栗北／小栗／日向遺跡』，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第259集
斎藤弘　1986　「古墳時代の壷鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　pp.47～53
齋藤孝正　1994　「東海地方の施釉陶器生産―猿投窯を中心に－」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東３―』（古代の土器研究会第３回シンポジウム）　pp.109～120
齋藤孝正・後藤健一編　1995　『須恵器集成図録　第３巻　東日本編Ⅰ』
酒井清治　1981　「房総における須恵器生産の予察(1)」『史館』第13号　pp.１～24
佐藤信行　1984　「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究Ⅰ　考古学扁』
佐藤則之・菊地芳朗編　1990　『大年寺山横穴群』（宮城県文化財調査報告書第136集）
庄子敦他　1990　『利府町郷絡遺跡Ⅱ－仙塩道路関連遺跡発掘調査報告書－』（宮城県文化財調査報告書第134集、利府町文化財調査報告書第５集）
正倉院事務所編　1976　『正倉院の金工』（日本経済新聞社）
正倉院事務所編　1994　『正倉院寶物４　中倉Ⅰ』（毎日新聞社）
白石太一郎・設楽博己編　1994　『国立歴史民俗博物館研究報告第56集　共同研究「日本出土鏡データ集成」２　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』
白鳥良一・阿部恵・後藤秀一・佐藤和彦・古川一明・吾妻俊典・白崎恵介　2002　「〈遺跡速報〉桃生城跡第１次～第10次発掘調査の概要」『考古学ジャーナル』No.494　pp.34～38
新村秀一　2002　『パソコン活用　３日でわかる・使える統計学　統計の基礎からデータマイニングまで　CD-ROM付』（講談社BLUE BACKS）
鈴木拓也　1998　「古代東北の城柵と移民政策」『古代東北の支配構造』　pp.271～302
鈴木文雄編　2001　『櫻井市古墳群上渋佐支群７号墳発掘調査報告書』（福島県原町市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集）
大正新脩大蔵経刊行会編　1928（1989普及版）　「No.1024 無垢浄光大陀羅尼経」『大正新脩大蔵経　第19巻　密教部

二』　pp.717～721
多賀城市埋蔵文化財センター　2000　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告２－』（多賀城市埋蔵文化財センター調査報告書第59集）
高野芳宏　1991　「高崎遺跡　井戸尻（今村氏）地区の調査」『多賀城市史　第４巻　考古資料』　pp.471～485
瀧瀬芳之　1994　「轡について」『川越市・日高市光山遺跡群』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第137集）　pp.296～301
瀧瀬芳之　1997　「Ｖ１(14)金属製品」『上里町中堀遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集）　pp.1237～1271
千葉県文化財センター　1994　『千葉県文化財センター研究紀要14　生産遺跡の研究３－須恵器－』
千葉孝弥・伊藤浩　1995　『高崎遺跡―第11次発掘調査報告書―』（多賀城市文化財調査報告書第37集）
千早正朝　1908　『無垢浄光陀羅尼経　訓貼和解　完』
東北学院大学考古学研究部　1979　「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号
東北学院大学考古学研究部　1983　「宮城県志田郡次橋須恵器窯跡発掘調査報告」『温故』第13号
東北歴史資料館　1994　『里浜貝塚Ⅸ』（東北歴史資料館資料集36）
徳江秀夫編　1998　『綿貫観音山古墳Ⅰ　墳丘・埴輪編』（群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集）
徳江秀夫編　2000　『愛宕山遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第276集）
冨永里菜　2002　「馬具の帯金具」『銙帯をめぐる諸問題』　pp.89～104
富山大学人文学部考古学研究室編　1989　『越中上末窯跡』（富山大学考古学研究報告第３冊）
永井宏幸　1996　「古代木製鐙小考－愛知県一宮市大毛沖遺跡出土例の位置付け－」『古代』第102号　pp.149～158
中川武編　1990　『日本建築みどころ事典』
中野政樹　1976　「供養具」『新版仏教考古学講座　第５巻　仏具』　pp.43～78
中山清隆・林原利明　1994　「小型倣製鏡の基礎的集成(1)－珠文鏡の集成－」『地域相研究』21　pp.95～125
七尾市教育委員会　1994　『史跡能登国分寺跡整備事業報告書』
奈良国立文化財研究所　1996　「Ⅰ平城宮の調査　１造酒司の調査」『1995年度　平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』　pp.４～21
西山克己　1997　「第４章第６節１　青銅鏡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16　－長野市内その４－　篠ノ井遺跡群　成果と課題編』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書22）　pp.91～100
日本馬具大鑑編集委員会編　1991　『日本馬具大鑑　第二巻古代下』（日本中央競馬会）
丹羽茂　1995　「Ⅲ．現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994　多賀城跡』　pp.55～110
花谷浩　1991　「鐙瓦考」『奈良国立文化財研究所研究論集Ⅸ』（奈良国立文化財研究所学報第49冊）　pp.95～115
八賀晋　1972　「第六章第四節　美濃国分寺」『岐阜県史　通史編　原始』　pp.415～423
原明芳他　1989　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　－塩尻地内－　吉田川西遺跡』（長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書３）
樋口隆康　1979　『古鏡』
深澤敦仁　1992　「「土葺屋根」構造を有する竪穴式住居址について」『群馬考古学手帳』vol.3　pp.35～44
藤沢敦　1994　「宮城県」『国立歴史民俗博物館研究報告第56集　共同研究「日本出土鏡データ集成」２　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成』　pp.12～15
藤沢良祐　1998　「第二章第六節　近世赤津村の窯業生産」『瀬戸市史　陶磁史篇六』　pp.266～280
兵ゆり子　1997　「Ｖ１(８)鉄鉢形土器」『上里町中堀遺跡』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集）　pp.1197～1207

増田精一　1960　「埴輪馬にみる頭絡の結構」『考古学雑誌』　pp.47～62
松村恵司　1988　「百萬塔調査の成果と課題」『伊珂留我　法隆寺昭和資材帳調査概要』8　pp.20～31
右島和夫編　1994　『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』〔群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第173集・関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集〕
光江章編　1986　『－千葉県袖ヶ浦町－東郷台遺跡（川原井廃寺）－南総ゴルフ場増設に伴う埋蔵文化財確認調査－』（君津郡市文化財センター発掘調査報告書第17集）
森下章司　1991　「古墳時代椀製鏡の変遷とその特質」『史林』72-5　pp.1～43
森本六爾　1929　『川柳村将軍塚の研究』
柳澤和明　1994　「Ⅱ．第64次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1993　多賀城跡』　pp.3～49
柳澤和明　2001　「桃生城跡の概要」『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』　pp.77～100
柳澤和明　2002　「宮城県桃生郡河北町新田東遺跡」『第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』　pp.65～74
柳澤和明・阿部恵編　2001　『桃生城跡Ⅸ』（宮城県多賀城跡調査研究所　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第26冊）
柳澤和明・白崎恵介編　1996　「Ⅱ．第66次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1995　多賀城跡』　pp.2～111
柳澤和明・白崎恵介編　1998　「Ⅱ．第68次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997　多賀城跡』　pp.7～77
山口耕一　1994　「北関東地域における茨城産須恵器について(上)－外面同心円状叩き目を有する須恵器を中心に－」『栃木県埋蔵文化財調査事業団・埋蔵文化財センター研究紀要』第２号　pp.109～130
山口耕一　1999　『多功南原遺跡』（栃木県埋蔵文化財調査報告第222集）
横田賢次郎　1983　「福岡県内出土の硯について」『九州歴史資料館研究論集』9　pp.1～42
吉田博行　1999　「放射状区画をもつ珠文・乳文鏡について」『森北古墳群』（福島県会津坂下町教育委員会・創価大学）　pp.139～150

付章１　新田東遺跡より出土した炭化材・種子の分析

吉川純子　（古代の森研究舎）

１．はじめに

新田東遺跡は、宮城県河北町にある桃生城跡の東に隣接し、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などで構成される大規模集落跡である。今回分析にあてた試料を出土した竪穴住居跡のうち、ＳＩ８・34Ｄ竪穴住居跡は屋根に土が葺かれている８世紀第３四半期頃、奈良時代の焼失竪穴住居跡、ＳＩ20竪穴住居跡は９世紀後葉頃、平安時代の焼失竪穴住居跡である。前者は桃生城跡が西暦774年に蝦夷により攻撃を受けた際に焼失したと推定されている。

同定に際しては、東北大学理学研究科教授鈴木三男氏にご指導を仰いだ。ここに記して感謝いたします。

２．炭化材同定結果

試料は自然乾燥させた後、カッターや剃刀を用いて横断面、放射断面、接線断面を割り出し、反射顕微鏡で観察、同定した。同定結果を表１にまとめた。全18試料で広葉樹８分類群が認められた。以下に同定した分類群の木材解剖学的記載を行う。

試料番号	遺構	遺構期	層　位	樹　種
1	ＳＩ２０	Ｃ－１期	３層	ネムノキ属
2	ＳＩ２０	Ｃ－１期	床面	ムクノキ近似種
3	ＳＩ２０	Ｃ－１期	３層	カエデ属
4	ＳＩ２０	Ｃ－１期	３層	クリ
5	ＳＩ８	Ｂ期終末	床	クリ
6	ＳＩ８	Ｂ期終末	床面	ケヤキ
7	ＳＩ８	Ｂ期終末	床面	コナラ節
8	ＳＩ８	Ｂ期終末	西周溝内	クリ
9	ＳＩ８	Ｂ期終末	？	クリ近似種
10	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	床面	ケヤキ
11	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	床面	コナラ節
12	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	床面	コナラ節
13	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	床面	ムクノキ近似種
14	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	南周溝竈際	コナラ節
15	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	北周溝内	モクレン属
16	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	？	クリ
17	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	？	クリ
18	ＳＩ34Ｄ	Ｂ期終末	？	クヌギ節

表１　炭化材の樹種同定結果

1）コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. Prinus　ブナ科

図版１－１ａ－ｃ（No.７）：No.７（ＳＩ8），No.11,12,14（ＳＩ34Ｄ）

早材部では大型で丸い単独管孔１－２列配列し、晩材部でごく小型、薄壁で角張った管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一で放射組織は同性、単列小型のものと複合で大型のものがある。この大型の複合放射組織のため、コナラ属の炭化材は放射方向の割れ目が沢山出来る。また、薄片状に放射方向に割れてしまうため、残りの薄片状の横断面では複合放射組織が全く見えず、クリと誤同定されることがある。コナラ節には、ミズナラ、コナラ、カシワ、ナラガシワなどの種類がある。

2）コナラ属クヌギ節（No.18）　*Quercus* sect. Aegilops　ブナ科

図版１－２ａ－ｃ（No.18）：No.18（ＳＩ34Ｄ）

早材部では大型で丸い単独管孔が１－２列配列し、晩材では厚壁で丸い小型の管孔が放射方向に比較的ルーズに配列する環孔材。道管は単一穿孔。放射組織は単列同性で小型と大型の複合放射組織がある。また道管の周りには周囲状仮道管がある。年輪幅の広いものでは年輪界近くで小道管がかなり小さくなり、コナラ節との区別が困難な場合がある。

3）クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科

図版１－３ａ－ｃ（No.16）：No.４（ＳＩ20）,No.５,８,９（ＳＩ８）,No.16,17（ＳＩ34Ｄ）

年輪のはじめに大型で丸い単独管孔が1－数列配列し、晩材にいくにつれ徐々に径が小さくなる小型薄壁管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、放射組織は同性で単列。試料のうちNo. 9は燃焼が激しかったらしく、保存が極めて悪い。

4) ムクノキ近似種　cf. *Aphananthe aspera*（Thunb.）Planch. ニレ科

図版１－４ａ－ｃ（No.13）　：No. 2（ＳＩ20）,No.13（ＳＩ34D）

やや大型で厚壁の管孔が単独及び放射方向に２－３列複合してまばらに散在する散孔材。年輪界に近づくと管孔径はやや小さくなる。木部柔組織は周囲状と帯状。放射組織は異性で１～４細胞幅。ムクノキは放射組織の端の直立細胞に結晶がみられることが多いが、ここの試料ではみられなかったため、近似種とした。

5) ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino ニレ科

図版２－５ａ－ｃ（No.10）　：No. 6（ＳＩ8）,No.10（ＳＩ34D）

大型の管孔が年輪のはじめに１－２列配列し、晩材では小型で薄壁の管孔が数個から十数個ずつ塊を作って斜め方向に連なる環孔材。道管の穿孔は単一で小道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で上下端が直立細胞、幅は１－８細胞ほど放射組織の周りには大型の結晶がみられる場合が多い。

6) モクレン属　*Magnolia*　モクレン科

図版２－６ａ－ｃ（No.15）　：No.15（ＳＩ34D）

小さい道管が放射方向に２－３個複合して散在する散孔材。道管は穿孔が単一で壁孔が階段状、炭化材では階段穿孔にみえる。年輪界にはターミナル柔組織がみられる。放射組織は１－２細胞幅で異性。道管はどちらかというと丸みが強く、ホオノキの可能性がある。

7) ネムノキ属　*Albizia*　マメ科

図版２－７ａ－ｃ（No.１）　：No.１（ＳＩ20）

大型で丸い管孔が単独または２個複合して２～数列集合し、晩材で徐々に径が小さくなりながら放射方向に２－３個複合して散在する環孔材。木部柔組織は年輪のはじめでは周囲状、晩材部では翼状から連合翼状。道管は単一穿孔。放射組織は同性で1－3細胞幅、きれいな紡錘形ではなくやや角張った感じである。

8) カエデ属　*Acer*　カエデ科

図版２－８ａ－ｃ（No.3）　：No.3（ＳＩ20）

小型で丸い管孔が単独または２、３個複合して散在する散孔材。道管は単一穿孔で内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は1－4細胞幅で同性。

３．炭化種実同定結果

新田東住居跡からは、若干の炭化種実が得られたため、ここに同定結果を記す。ＳＩ20（Ｃ－１期）からはモモ核及びクリ炭化種子を出土し、ＳＩ21（Ｂ－１期）からはモモ核及び不明草本の地下茎を出土した。またＳＢ6－Ｐ11（Ｂ－3期）及びＳＩ34Ｄ（Ｂ期終末）からはモモ核を出土した。

モモ炭化核の長さは最大19.7mmから最小13.3mm平均16.1mmと小さく、長さと幅の比は1:1.1でほぼ円形に近い。モモ核は緻密で細胞が詰まっているため、炭化しても収縮が激しくはなく、サイズとしては現在のものと比較するとかなり小さく外形も丸い。クリ炭化種子の高さは最大15.4mm最小11.6mm平均11.12mm、幅は最大16.2mm最小12.4mm平均11.3mmであった。クリの種子は生では水分をかなり含み、空隙が多いので炭化するさいの収縮が激しいが、本遺跡で出土した炭化種子を生の状態に復元すると20mm程度を超えないとみられ、現在の山野に生育しているような小さいクリと考えられる。

4．考察

焼失竪穴住居跡における出土炭化材はほとんどが柱材をはじめとした建築材と推定されている。分析にあてた18試料のうち最も多いのはクリで6試料、3試料がコナラ属コナラ節、ケヤキとムクノキ近似種が2試料ずつ、それにモクレン属とネムノキ属、カエデ属であった。8～11世紀の東北地方の建築材は、西日本のように針葉樹を利用せず、コナラ節、クヌギ節、クリなどの広葉樹材の利用が圧倒的に多い。8世紀以前から続く傾向としてこれらのブナ科樹種利用にくわえ、ケヤキ、あるいはモクレン属を利用する例もあるという（山田,1993）。おそらく本遺跡でもクリ、コナラ節などとともに周囲から調達しやすいケヤキやモクレン属などを加えて建築材として利用していたと考えられる。

図1に各竪穴住居跡の出土炭化材分布を示した。ＳＩ８竪穴住居跡ではクリ、コナラ節とケヤキで、いずれも建築材として利用度の高い樹種である。この竪穴住居跡もクリ、コナラ節、クヌギ節、ケヤキを使っており、周溝で出土したモクレン属も周囲の林野で手に入れやすい樹種であるため利用されたと考えられる。ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡では、No.16の棚板とみられる炭化材にはクリが使われていた。ＳＩ20竪穴住居跡ではクリ、カエデ属は比較的利用されやすい樹種であるが、ネムノキ属は耐久、保存性が低く、一般には建築材としては用いられず、ちょっとした道具に使われるか、燃料材などとして持ち込まれた可能性も考えられる。なお、ムクノキに近似する材がＳＩ34Ｄ及びＳＩ20竪穴住居跡で出土しているが、現在では関東地方以南にしか分布していない。

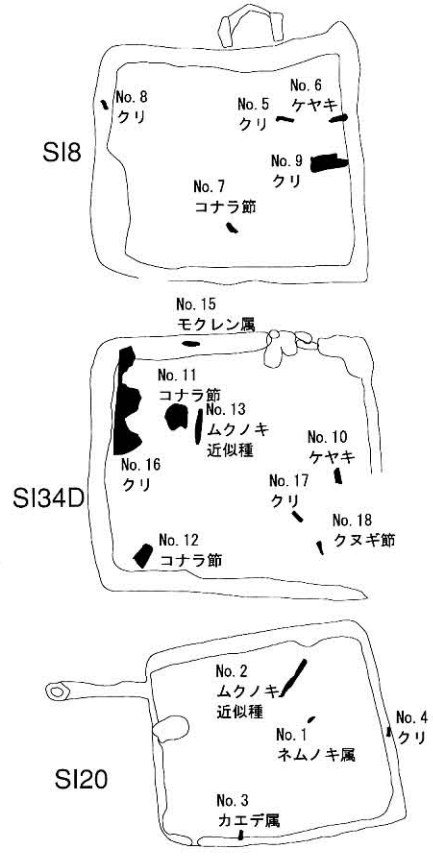
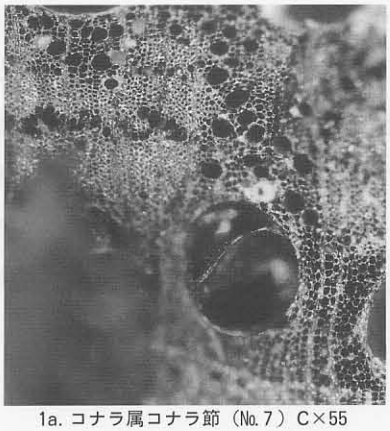
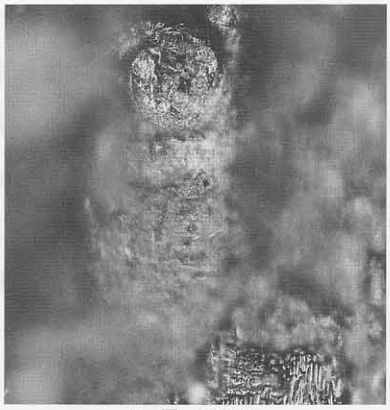


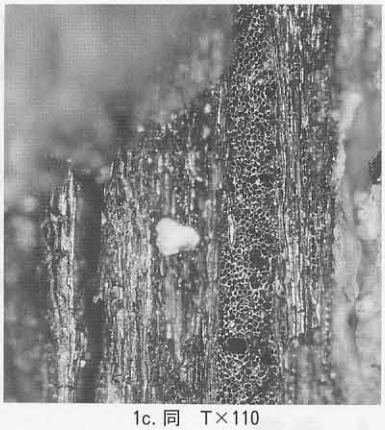
図1　新田東遺跡炭化材出土状況

引用文献

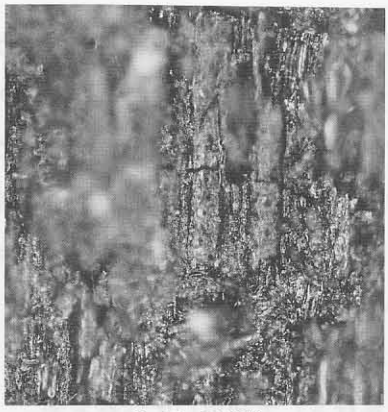
山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号　p. 242

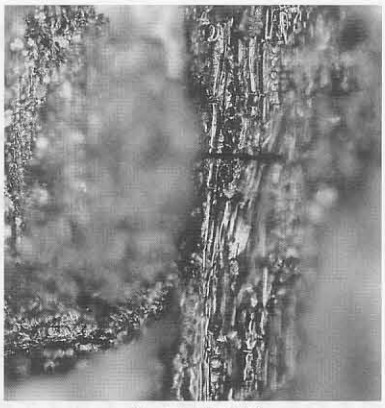

1a. コナラ属コナラ節（No.7）C×55

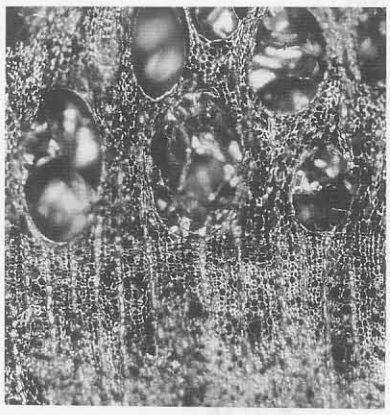

1b. 同　R×110

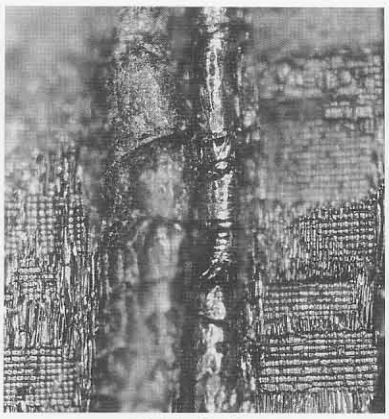

1c. 同　T×110

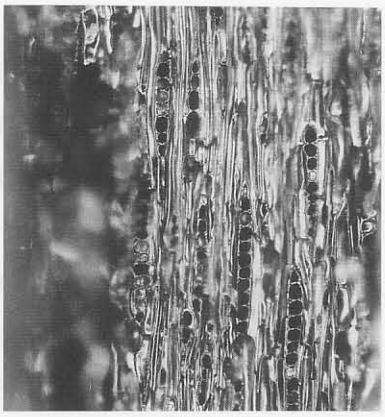
2a. コナラ属クヌギ節（No.18）C×55

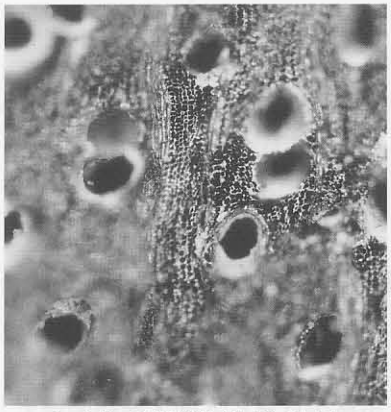

2b. 同　R×110

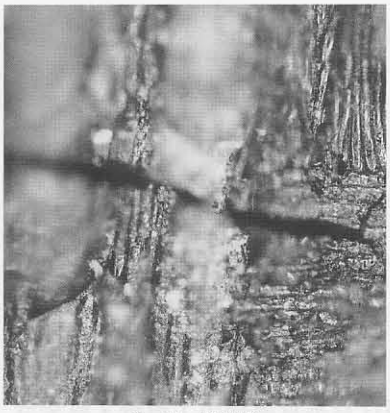

2c. 同　T×110

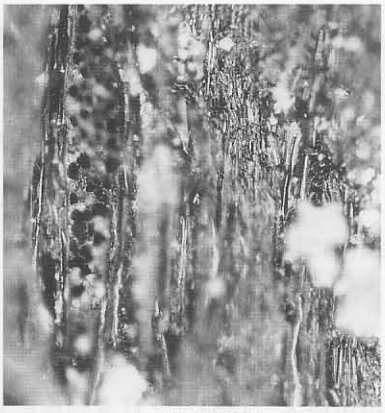

3a. クリ（No.16）C×55


3b. 同　R×55

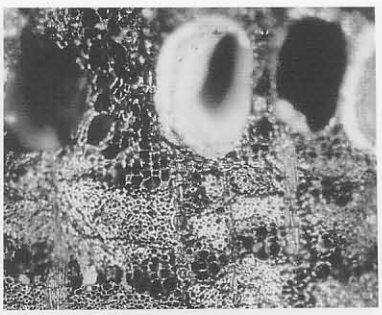

3c. 同　T×110

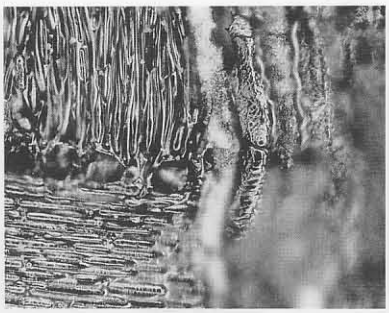

4a. ムクノキ近似種（No.13）C×55

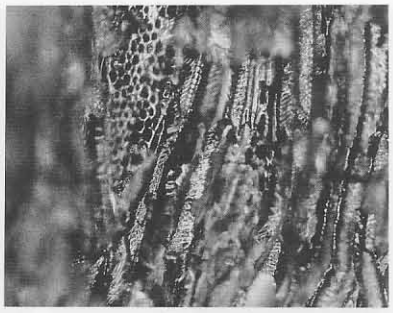

4b. 同　R×110

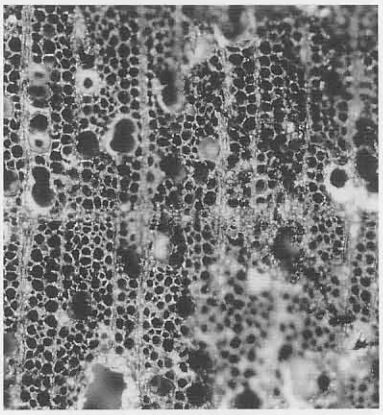

4c. 同　T×110

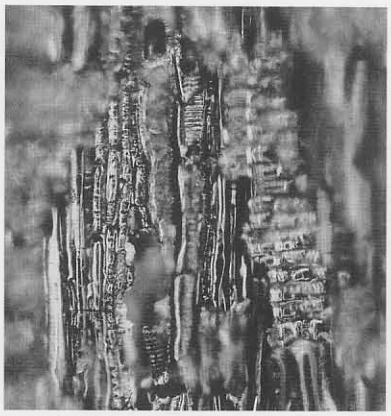
図版１　新田東遺跡より出土した炭化材（１）

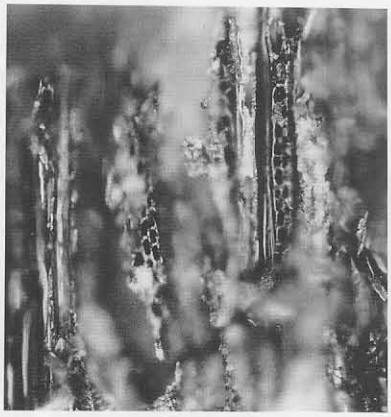

5a. ケヤキ（No.10）C×55

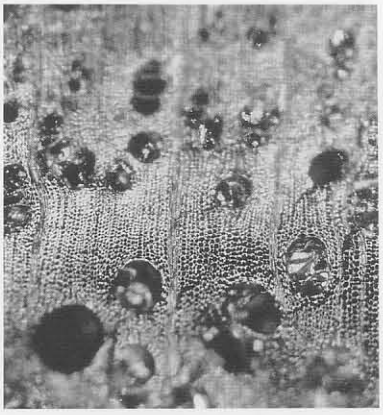

5b. 同　R×110


5c. 同　T×110

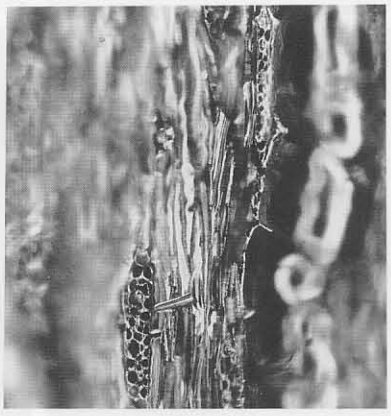

6a. モクレン属（No.15）C×55

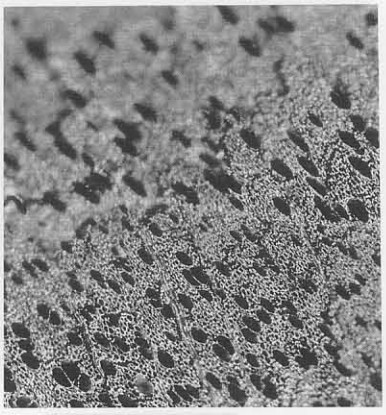

6b. 同　R×110

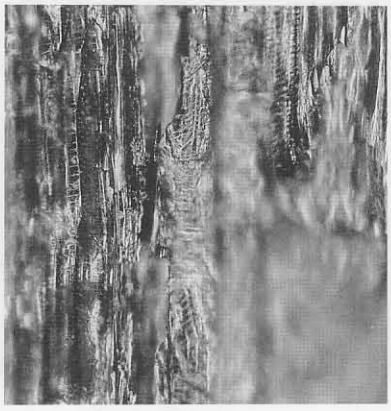

6c. 同　T×110

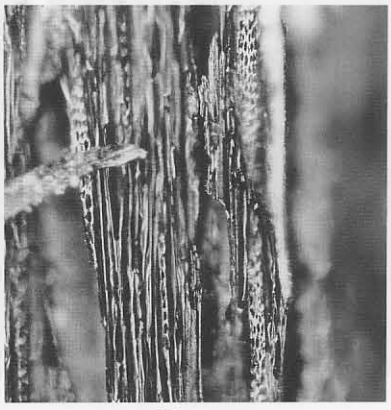

7a. ネムノキ属（No.1）C×55

7b. 同　R×220

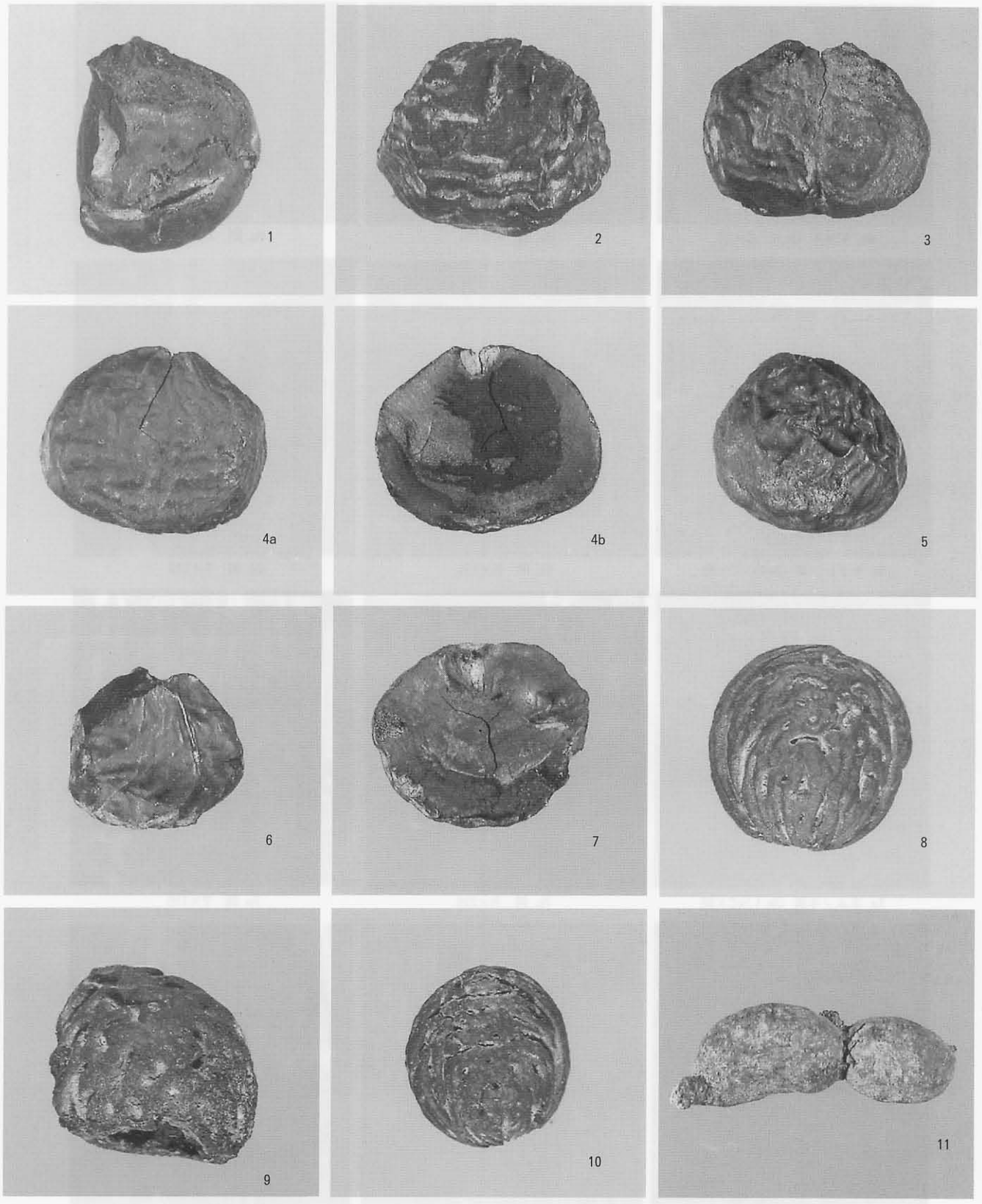

7c. 同　T×110


8a. カエデ属（No.3）C×55


8b. 同　R×110


8c. 同　T×110

図版２　新田東遺跡より出土した炭化材（２）



scale 10mm

1－7（クリ、炭化種子）1,8－10（モモ、炭化核）、11（草本、地下茎）
1,8（ＳＩ20－２層）;2,10（ＳＩ20－１層）;3－7（ＳＩ20－２層）
9（ＳＩ34Ｄ－４層）;11（ＳＩ21－３層）　４ｂは４ａの内面

図版３　新田東遺跡より出土した炭化種実

付章２　新田東遺跡出土製鉄関連遺物の分析・調査

川鉄テクノリサアーチ株式会社
分析・評価事業部埋蔵文化財調査研究室
岡原正明・天辰正義・小川太一・福田文二郎

１．はじめに

宮城県河北町新田東遺跡から出土した製鉄関連遺物（鉄滓・鍛造剥片・鞴羽口）について、自然科学的な観点での分析調査を依頼されたので、①鉄滓・鍛造剥片・鞴羽口の外観と切断面部分の顕微鏡観察による記録、②鉄滓の化学成分分析による製鉄工程上の位置付けを中心に以下報告する。

２．調査項目および試験・観察方法

（１）調査資料と調査項目

資料No.	出土遺構	層位	時期	資料種別	原材料	重量（g）	着磁力	MC反応	外観写真	化学成分	組織写真	EDX分析	X線回折
1	SI31居跡	埋土１層	B期	椀形砂鉄系精錬鍛冶滓	滓	134.4	稍強	無	○	○	○		○
2				椀形鍛錬鍛冶滓（含鉄）	滓	193.2	強	有	○	○	○		
3				粒状鉄滓	滓	0.2	無	無	○		○		
4				鍛造薄片	滓	0.7	無	無	○		○		
5	SI51住居跡	堆積土１層	B期	椀形砂鉄系精錬鍛冶滓（含鉄）	滓	401.1	強	有	○	○	○		○
6	SI1住居跡	堆積土１層	C-1期	砂鉄系精錬鍛冶滓	滓	23	弱	無	○	○	○		○
7	SI17住居跡	堆積土３層	C-1期	椀形精錬鍛冶滓	滓	173	稍強	無	○	○	○		○
8	SI40C住居跡	Ｃ南周溝	C-2期	高チタニア砂鉄系製錬滓	滓	26.8	弱	無	○	○	○		○
9	SI40D住居跡	堆積土３層	C-2期	椀形精錬鍛冶滓	滓	63.6	稍強	弱	○	○	○		
10	SK7土壙	堆積土１層	B期?	椀形精錬鍛冶滓	滓	272.8	稍弱	無	○	○	○		○
11	SI31住居跡	埋土１層	B期	鞴羽口	胎土	433	無	無	○		○	○	

註　ＭＣ反応はメタルチェッカーによる金属探知反応。時期は第５章３を参照。

表１　調査資料と調査項目及び資料の製鉄工程上の位置付け

（２）試験・観察方法

①重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点２位以下で四捨五入した。各種試験用試料を採取する前に資料を撮影し、試料採取時の特異部分についても撮影を行った。

着磁力調査については、直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し、官能検査により「強・やや強・中・やや弱・弱」の５ランクで、個別調査結果を表示した。金属探知機（ＭＣ：metal checker）を用いて残存金属の有無を調査した。

②化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するＪＩＳの分析法に準じて行った。

鉄滓中成分は、18成分（全鉄T.Fe、金属鉄M.Fe、酸化第一鉄FeO、酸化第二鉄Fe_2O_3、シリカSiO_2、アルミナAl_2O_3、ライムCaO、マグネシアMgO、酸化ナトリウムNa_2O、酸化カリウムK_2O、チタニアTiO_2、酸化マンガンMnO、酸化リンP_2O_5、化合水C.W.、炭素C、ヴァナジウムV、銅Cu、コバルトCo）を化学分析した。

③顕微鏡組織写真

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上）した。金属箇所はナイタール（５％硝酸アルコール液）で腐食後、顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、金属組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断した。原則として100倍および 400倍で撮影を行い、必要に応じて実体顕微鏡（５倍～20倍）でも観察した。

④ＳＥＭ－ＥＤＸによる観察

真空中で試料面の直径２μm程度の範囲に電子線を照射すると試料面から二次電子、反射電子、特性X線などが発生する。ＳＥＭ(走査型電子顕微鏡:Scanning Electron Microprobe Analysis)によって、二次電子または反射電子の発生程度を写真として撮影できる。さらにＥＤＸ（エネルギー分散型Ｘ線分析：Energy Dispersive X-ray spectroscopy）によって、試料に電子線を照射した際に放出される特性Ｘ線のエネルギーを検出し、試料表面層の元素分析を行うことができる。この両者を組込んだSEM/EDX （X線マイクロアナライザー付き走査型電子顕微鏡）を用いて観察した。

SEM-EDX装置の仕様；検出器：KEVEX社製Quantum、走査電子顕微鏡：日立製S-4100型、標準電子線加速電圧：15kV、標準蛍光X線積算時間：100秒間、元素マッピング分析（最大指定元素数：8、マッピング分析所要時間：約30分)。

⑤Ｘ線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、Ｘ線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性Ｘ線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。測定装置は理学電気株式会社製　ロータフレックス（RU-300型）を用いた。

３．調査結果および考察

資料１・２・５～10の鉄滓について、表２に化学成分分析結果、表３にＸ線解析結果、図１～３に成分解析結果を示した。以下、資料番号順に調査結果を述べる。

(１)資料番号No.1　椀形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版１－１・２）　長さ81.2mm×幅58.6mm×厚さ32.4mm。資料の重量は134.4gである。ＭＣ（金属探知）反応はない。大きな割欠部が一辺にある。上部は木炭痕の空洞や灰色の土の詰まった凹凸の激しい様相を呈し、細かな気泡痕が全体に見られる。底部は椀形を呈し、砂粒がかみ込まれ火床材や水酸化鉄とともに、細かな気泡痕が多い。砂礫の汚染の少ない緻密な部分から試料採取した。形状から炉内に放置された炉内滓に見える。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版２－22に示す。写真前面の灰白色四角状で中が三角形の空洞に見えるチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvospinel:$2FeO{\cdot}TiO_2$）結晶と中間面に灰青色で四角形がやや崩れた形状をしたマグ

ネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）およびやや小さいファイヤライト（Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$）結晶が観察される。したがって、本資料の主要組織は、ファイヤライト、マグネタイトおよびウルボスピネルから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ファイヤライト、ウルボスピネルとシリカ（Quartz: SiO_2）が検出された。顕微鏡組織とほぼ一致している。

No.	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	比率(%)	
									Fe_2O_3	FeO
1	43	0.18	47.6	8.32	24.5	6.26	1.67	1.29	14.9	85.1
2	52.9	0.33	32.6	39	16.3	4.16	0.37	0.33	54.5	45.5
5	51	0.33	55.6	10.7	21.1	4.99	1.09	0.75	16.1	83.9
6	59.6	0.17	64	13.8	13.8	3.51	0.4	0.5	17.7	82.3
7	57.5	0.12	61.1	14.1	12	3.49	0.84	0.92	18.8	81.3
8	30.9	0.22	28.5	12.1	23.5	6.21	1.12	3.64	29.8	70.2
9	59	2.66	15.8	63	3.47	1.12	0.39	0.5	79.9	20.1
10	54.8	0.28	57.9	13.6	17	4.19	0.57	0.54	19	81

No.	Na_2O	K_2O	TiO_2	MnO	P_2O5	C.W.	Co	C	V	Cu	造滓成分%
1	0.43	0.87	6.59	0.23	0.339	0.87	0.012	0.04	0.046	0.001	35
2	0.21	0.38	0.27	0.06	0.255	3.62	0.012	0.35	0.002	0.005	21.8
5	0.45	0.99	2.13	0.12	0.221	0.78	0.011	0.04	0.016	0.005	29.4
6	0.18	0.36	1.55	0.08	0.327	0.63	0.008	0.06	0.024	0.001	18.8
7	0.22	0.76	4.9	0.14	0.144	0.46	0.02	0.02	0.18	0.002	18.2
8	0.41	1.03	23	0.66	0.161	0.37	0.036	0.03	0.27	0.001	35.9
9	0.04	0.12	4.49	0.15	0.288	4.32	0.023	0.56	0.083	0.003	5.6
10	0.18	0.32	3.51	0.13	0.377	0.75	0.008	0.02	0.026	0.001	22.8

C.W.＝化合水、造滓成分＝SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋Na_2O＋K_2O

表2　分析鉄滓資料の化学成分分析結果（%）

資料　No.	鉱物成分							
	Wustite ｳｽﾀｲﾄ	Magnetite ﾏｸﾞﾈﾀｲﾄ	Hematite ﾍﾏﾀｲﾄ	Fayalite ﾌｧｲﾔﾗｲﾄ	Ulvospinel ｳﾙﾎﾞｽﾋﾟﾈﾙ	Ilmenite ｲﾙﾒﾅｲﾄ	Goethite ｹﾞｰｻｲﾄ	Quartz 石英
	A	B	C	D	E	F	G	H
1				◎1	○2			○3
2		○2		◎1			○3	
5	○3	○2		◎1				
6	◎1	○3		○2				
7	◎1	○3		○2				
8				○2	◎1	○3		
9		◎1	○3		○2			
10	○2	○3		◎1				

A：Wustite－FeO、B：Magnetite－Fe_3O_4、C：Hematite－Fe_2O_3、D：Fayalite－Fe_2SiO_4、
E：Ulvospinel－Fe_2TiO_4、F：Ilmenite － $FeTiO_3$、G：Goethite －FeO(OH)、H：Quartz －SiO_2

註　表中数字は検出強度順番

表3　分析鉄滓資料のX線解析結果

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄（T. Fe）43.0%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は47.6%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は8.3%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、15：85で、平衡状態図（註1）からウスタイトの存在領域に近い。反応ではウスタイト（FeO）と鉄（Fe）が生成していたであろう。また、金属鉄（M. Fe）は0.18%と少ないので、金属鉄は殆ど銹化したと推察される。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は35.0％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が6.59%で、バナジウム（Vanadium:V）を0.05%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper : Cu）は0.001%と少ない。したがって、低チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。なお、鉄滓中のチタニアは工程が進むほど外部に放出されるので、含有率は下がり最終工程（鍛錬鍛冶）では介在物に残る程度の微量になる傾向がある。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、図1に、全鉄（T.Fe）とチタニア（TiO_2）の関係を示す。図2には、T.Fe（%）と造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）（%）の関係を示す。本資料は、図1では砂鉄系製錬滓と砂鉄系精錬滓グループの境界領域に属し、図2では鉱石系製錬滓グループと砂鉄系製錬滓グループの中間位置に属している。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

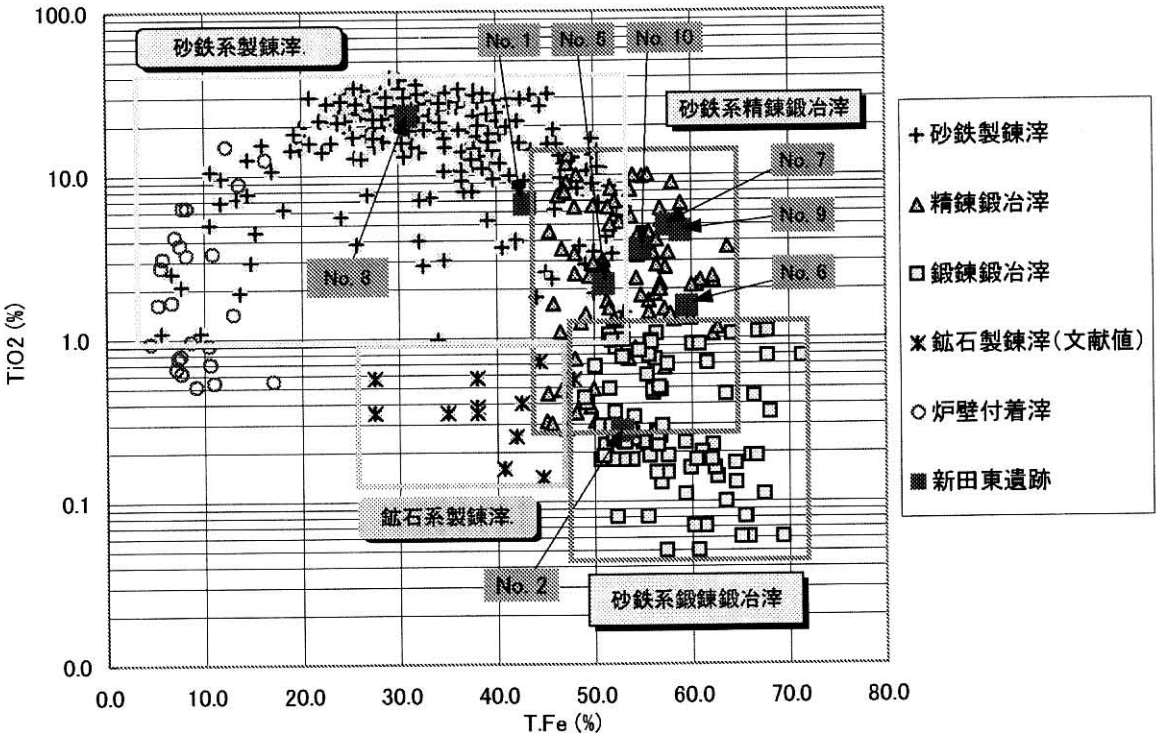


図1　出土鉄滓類の全鉄量（T.Fe）－チタニア（TiO２）量分布図

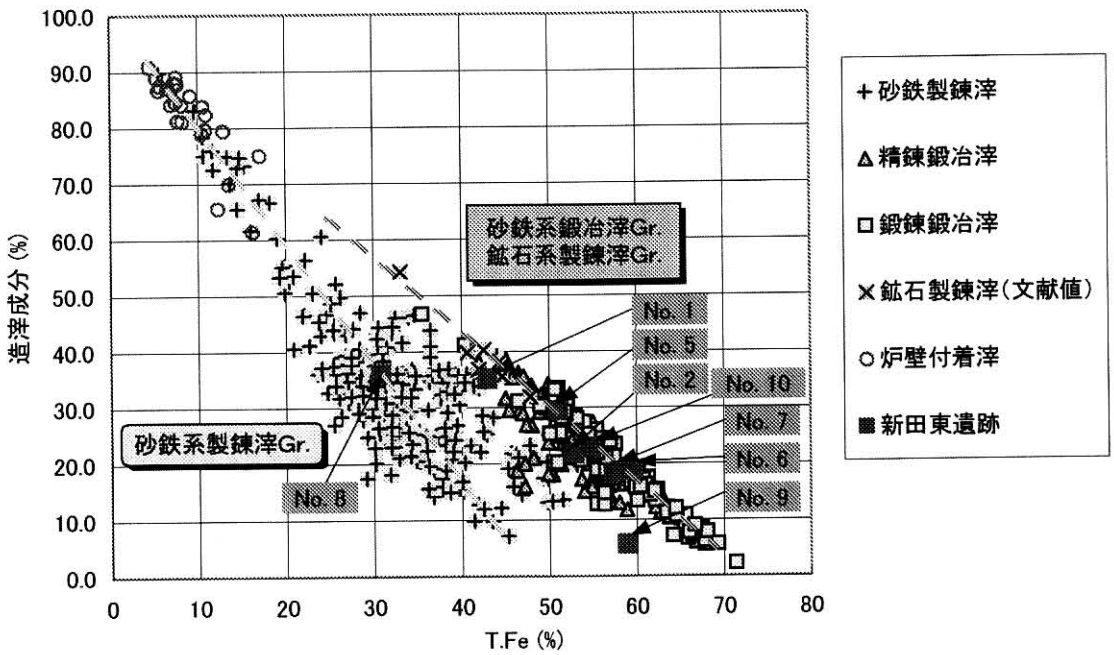


図2　製錬滓と鍛冶滓の分類

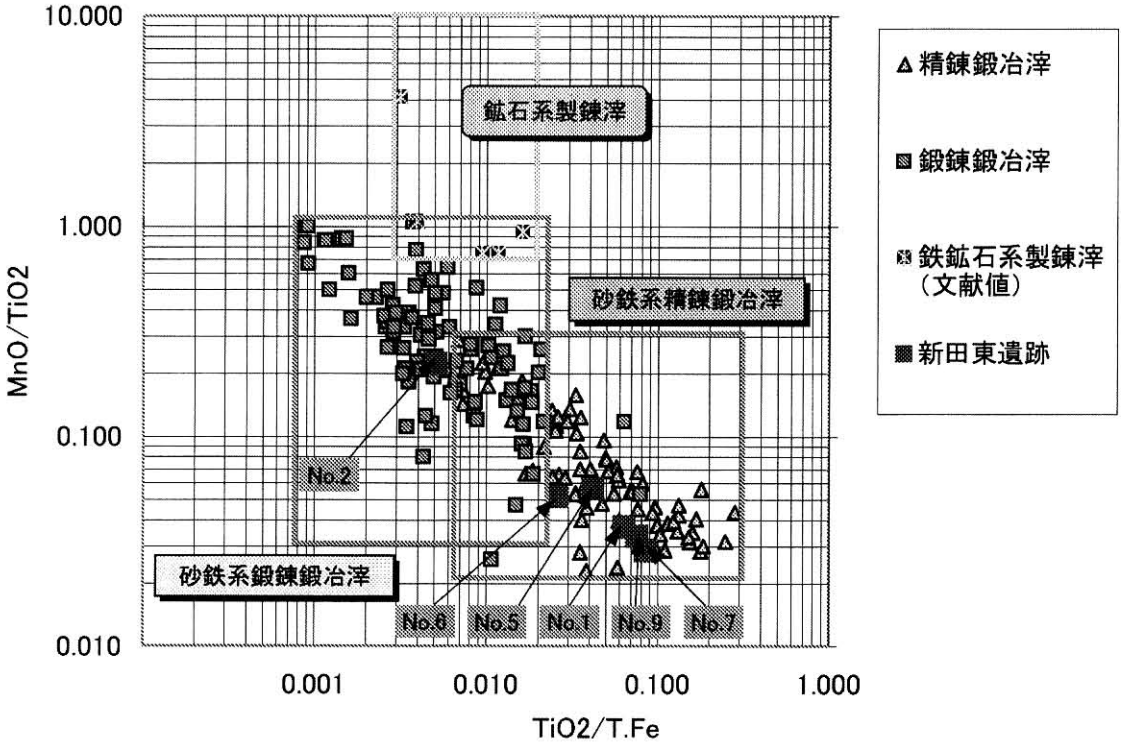


図３　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

以上の結果を総合すると、この資料は椀形砂鉄系精錬鍛冶滓（炉内滓）で、鉄源にはチタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(２)資料番号No.2　椀形鍛錬鍛冶滓（含鉄）

①外観観察（図版１－３～５）　長さ81.4mm×幅57.6mm×厚さ40.4mm。資料の重量は193.2gである。ＭＣ（金属探知）反応がある。重量感のある鉄滓で、全体が水酸化鉄と土砂に覆われ、黄土色になっている。胴部には細い割れが中心に向けて入っており、鉄が銹化中の状態である。底部には中央に水酸化鉄の瘤があり、割れが溝を通っている。茶褐色の割れ目や木炭（繊維）も観察される。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版２－23～25に示す。写真前面に樹枝状のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4)、その背面に大きな短冊状のファイヤライト(Fayalite: 2 FeO•SiO_2)結晶が観察される。一方、金属鉄が共存し、フェライト（Ferrite:α-Fe）の大きな結晶が観察された。したがって、本資料の主要組織は、ファイヤライトとマグネタイトならびに、金属鉄とその銹化物から構成されていると推察される。また、含鉄は加工されておらず、滓内に残存した状態である。

Ｘ線回折チャートのまとめを表３に示した。ファイヤライト、マグネタイトとゲーサイト（Goethite:α-FeOOH）が検出された。ゲーサイトは金属鉄の銹化物である。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表２）によると、全鉄（T. Fe）52.9%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は32.6%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は39.0%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、54：45で、平衡状態図からマグネタイトの存在領域に近い。滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は21.8％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタ

ニア（Titanium dioxide:TiO_2）が0.27%とかなり低い。バナジウム（Vanadium:V）を0.002%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅(Copper:Cu)は0.005%と少ない。化合水（C.W.）が3.62%と高いので、金属鉄の銹化物が多いと推定される。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、資料番号No.1と同様に、図１と図２をプロットし、図３には、砂鉄系と鉱石系を分類する（MnO/TiO_2とTiO_2/T.Fe）関係を示す。本資料は、図１では、砂鉄系鍛冶滓グループの範囲に属する。図２では、鉱石系製錬滓グループと砂鉄系鍛冶滓グループに近い位置に属する。図３では砂鉄系鍛冶滓に属する。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびＸ線回折の結果を考慮すると、本資料は、砂鉄系鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は含鉄鍛錬鍛冶滓で、含鉄は未加工の状態で滓内に残存していた鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(３)資料番号No.3　粒状鉄滓

①外観観察（図版１－３）　長さ3.9mm×幅2.3mm以下、φ4mm～φ1.5mmのもの４点が収集されている。資料の重量は0.2gである。ＭＣ（金属探知）反応はない。φ4mmのものは黒光りして微細気泡がある。中間のφ2.8mmのものには比較的大きな孔があり、中空になっているものと思われる。この２点について断面組織を観察した。

②鉱物組織分析　資料を樹脂に埋めこみ研磨した断面の20倍顕微鏡マクロ組織写真を図版２－26に示した。急冷され微細な結晶となり、全面に残存気孔が観察される。100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版２－27・28に示す。27には短冊状のファイヤライト、ウスタイト結晶、28には全面に樹枝状のファイヤライト結晶が観察される。したがって、鍛錬鍛冶または精錬鍛冶の初期工程で鉄滓が飛散して急冷凝固したファイヤライト結晶とウスタイト結晶と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は粒状鉄滓で、鍛錬鍛冶工程または精錬鍛冶工程で飛散して急冷凝固した可能性が高い、と推定される。

(４)資料番号No.4　鍛造剥片

①外観観察（図版１－８・９）　長さ5.3mm×幅3.6mm×厚さ1.0mm。大きいものは7mm四角、小さなものは1mm四角の剥片。資料の重量は0.7gである。ＭＣ（金属探知）反応はない。鍛造剥片とかさぶた状の薄い表皮状鉄滓片も含まれている。表面には薄く土が付着しているものが多いが、軽く研磨すると青鉄色の光沢のある表面が出てくる。肉厚の表皮状のものと鍛造の際に鉄の表面から酸化皮膜が剥離した極薄の試料を用いた。

②鉱物組織分析　資料を樹脂に埋めこみ研磨した断面の顕微鏡ミクロ組織写真を図版２－29・30に示す。29（鍛造剥片：大、厚さ800μm=0.8mm）には全面に白色で主にウスタイト相とゲーサイト相が観察される。黒色の気孔が見られるが、飛散過程では存在していた金属鉄が銹化してゲーサイトになり溶出した痕跡と推察される。30（鍛造剥片：小、厚さ200μm=0.2mm）には全面に白色で緻密なウスタイトが観察される。酸化皮膜（酸化鉄：ウスタイト）が剥離して飛散したものと推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は鍛造剥片で、鍛錬鍛冶工程で、鉄の酸化皮膜（厚さ800～200

μm）が剥離し飛散した、と推定される。

(5)資料番号No.5　椀形砂鉄系精錬鍛冶滓（含鉄）

①外観観察（図版1－10～12）　長さ104.0mm×幅78.0mm×厚さ36.9mm。資料の重量は401.1gである。3面に割欠面のある椀形鍛冶滓。上部は平坦で土と水酸化鉄が凹部を埋め、部分的に黒光りするガラス質滓が見える。木炭繊維痕が多い。重量感があり、上部にＭＣ（金属探知）反応があり、着磁力も強い。底部は2段滓状で、下部は黒色の滓。他は茶褐色をしている。黒色部の上にＭＣ反応があるのでここを切断調査した。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－31に示す。写真前面に樹枝状のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）、繭玉状のウスタイト（Wustite:FeO）およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト（Fayalite: 2 FeO•SiO_2）結晶が観察される。したがって、本資料の鉄滓組織は、ファイヤライト、マグネタイトとウスタイトから構成されていると推察される。一方、鉄滓中に金属鉄が観察された。金属鉄の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－32に示す。金属鉄の外周にはもやもやとした乳白色のゲーサイト（Goethite: α-FeOOH）組織、中心部に純鉄のフェライト（α-Fe）と炭素（0.5% C程度）を含むパーライト［Pearlite: セメンタイト（Cementite:Fe_3C）結晶とフェライト（Ferrite: α-Fe）結晶が層状に析出する］組織が観察される。鉄滓中に残存した銹化中の金属鉄である。

Ｘ線回折チャートのまとめを表3に示した。ウスタイト、ファイヤライトとマグネタイトとが検出された。鉄滓組織と一致している。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄（T. Fe）51.0%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は55.6%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は10.7%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、16：84で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は29.4％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が2.13%とバナジウム（Vanadium:V）を0.016%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.005%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした。本資料は、化学組成分析、顕微鏡観察およびＸ線回折の結果を考慮して、砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛冶滓で、金属鉄を含んでいる、銹化中の金属鉄が未加工のまま残存した資料で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(6)資料番号No.6　砂鉄系精錬鍛冶滓

①外観観察（図版1－13）　長さ38.9mm×幅31.0mm×厚さ13.4mm。資料の重量は23.0gである。ＭＣ（金属探知）反応はない。三方に割欠面のある肉薄偏平な黒色で細かく発泡した滓。両面とも凹凸が激しく、凹部には砂礫が入っているが、全体的に清浄な資料である。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－33に示す。写真前面に樹枝状のマグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4）、繭玉状のウスタイト

（Wustite:FeO）およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト（Fayalite: 2 FeO•SiO_2）結晶が観察される。したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイヤライトおよびマグネタイトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表5に示した。ウスタイト、ファイヤライトとマグネタイトとが検出された。鉄滓組織と一致している。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 59.6% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）64.0%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe 2 O_3）は13.8%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、18:82で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は18.8 % である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が1.5%となっており、バナジウム（Vanadium:V）を0.024%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.001%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(7) 資料番号No.7　椀形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版1－15）　長さ88.4mm×幅58.0mm×厚さ31.0mm。資料の重量は173.0gである。MC（金属探知）反応はない。割欠面が1ヶ所で半割されたような鉄滓。上部は黒色発泡し粗鬆な鉄滓で一部に茶色の水酸化鉄瘤が付いている。底部には水酸化鉄と土との瘤が生成され黄土色の盛り上がっている部分がある。比較的付着物の少ない肉厚幅広い部分から試料を採取した。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－34に示す。写真前面に繭玉状のウスタイト（Wustite:FeO)、樹枝状と多角形状のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト（Fayalite: 2 FeO•SiO_2）結晶やチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvospinel: 2 FeO•TiO_2）結晶が観察される。したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイヤライト、マグネタイトおよびウルボスピネルから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ウスタイト、ファイヤライトとマグネタイトとが検出された。鉄滓組織とほぼ一致している。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄（T. Fe）57.5% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）61.1%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は14.1%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、19：81で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は18.2 % である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が4.9%とやや高く、バナジウム

(Vanadium:V)を0.18%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅(Copper:Cu)は0.002%と少ない。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様にプロッタした結果と化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。資料No. 6と同様の傾向を示している。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(8)資料番号No.8　高チタニア砂鉄系製錬滓

①外観観察（図版1－16）　長さ31.6mm×幅27.1mm×厚さ23.2mm。資料の重量は26.8gである。MC(金属探知)反応はない。割欠面は鋭角に3方向にある。銀黒色をした流出滓状の資料である。割欠面は緻密で、キラキラと結晶が光って見える。表面には木炭繊維痕があり、流出滓特有の表面が滑らかな部分がある。付着物は少ないが、一部に砂礫をかみ込んでいる。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－35に示す。写真前面の白色針状で空洞があるチタン鉄酸化物のイルメナイト（Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$）または針状のプシュードブルッカイト（Pseudobrookite: $FeO \cdot 2\,TiO_2$）および大きい多角形状で空洞があるチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvospinel: $2\,FeO \cdot TiO_2$）結晶と写真の背面にファイヤライト（Fayalite: $2\,FeO \cdot SiO_2$）結晶が観察される。したがって、本資料の主要組織は、ウルボスピネル、イルメナイトまたはプシュードブルッカイトおよびファヤライトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。ウルボスピネル、イルメナイトおよびファヤライトが検出された。顕微鏡組織とほぼ一致している。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄（T. Fe）30.9%に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は28.5%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は12.1%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、30：70で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は35.9％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が23.0%と高い。バナジウム（Vanadium:V）を0.27%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.001%と少ない。したがって、高チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、図1に全鉄(T. Fe)とチタニア(TiO_2)の関係を示す。図2にはT. Fe(%)と造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$)（%）の関係を示す。本資料は、図1では、砂鉄系製錬滓グループの範囲に属する。図2では、砂鉄系製錬滓グループに属する。したがって、化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、高濃度含有チタニアの砂鉄系製錬滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系製錬滓で、鉄源には高チタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(9)資料番号No.9　椀形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版１－17）　長さ58.4mm×幅33.6mm×厚さ27.6mm。資料の重量は63.6gである。ＭＣ（金属探知）反応は弱。全体が土と水酸化鉄の固着物に覆われ瘤も生成された資料。水分の多いところに埋蔵されていたものか。黄土色や茶色の瘤が多く、やや細長い重量感のある資料。一部に茶褐色の水酸化鉄も見え、銹化進行中の鉄を含んでいるものと見られる。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した断面の100倍と400倍の顕微鏡ミクロ組織写真を図版３－36に示す。写真前面に針状で空洞があるチタン鉄酸化物のイルメナイト（Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$）または針状のプシュードブルッカイト（Pseudobrookite: $FeO \cdot 2\,TiO_2$）および多角形状で空洞があるウルボスピネル（Ulvospinel: $2\,FeO \cdot TiO_2$）結晶が溶融鉄滓（ガラス質）から晶出している。写真の上部と下部は、金属鉄が銹化したゲーサイト（Goethite: α-FeOOH）相が存在し、全体を白色化している。

したがって、本資料の主要組織は、ウルボスピネル、イルメナイトまたはプシュードブルッカイトおよびゲーサイトから構成されていると推察される。本来は、金属鉄が存在していたが、金属鉄は銹化進行中と推察される。

Ｘ線回折チャートのまとめを表５に示した。マグネタイト、ウルボスピネルおよびヘマタイトが検出された。マグネタイトはゲーサイトの銹化過程で生成したものと推察される。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表２）によると、全鉄(T. Fe) 59.0% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）は15.8%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は63.0%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、80：20で、平衡状態図からマグネタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は5.6％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が4.5%で、バナジウム (Vanadium:V) を0.08%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.003%と少ない。したがって、チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図１、図２と図３にプロットした結果と化学組成分析、顕微鏡観察およびＸ線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系初期精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系椀形精錬鍛冶滓で、共存していた金属鉄は全て銹化進行中、鉄源にはチタニア含有の砂鉄が使用された可能性が高い、と推定される。

(10) 資料番号No.10　椀形精錬鍛冶滓

①外観観察（図版１－18）　長さ74.2mm×幅58.6mm×厚さ48.5mm。資料の重量は272.8gである。ＭＣ（金属探知）反応はない。2方向に割欠面のある肉厚重量感のある資料。上部は気孔や木炭痕があり薄く水酸化鉄に覆われているが、中凹。底部は火床材が付着し、おにぎり状に膨らんでいる。黒色発泡粗鬆な鉄滓である。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版３－37に示す。写真前面に多角形のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）、繭玉状のウスタイト（Wustite : FeO）およびその背面に大きな短冊状のファイヤライト（Fayalite: $2\,FeO \cdot SiO_2$）結晶が観察される。

したがって、本資料の鉄滓組織は、ウスタイト、ファイヤライトおよびマグネタイトから構成されていると推察される。

X線回折チャートのまとめを表3に示した。マグネタイト、ウスタイトとファイヤライトとが検出された。鉄滓組織と一致している。

③化学組成分析　化学成分分析の結果（表2）によると、全鉄(T. Fe) 54.8% に対して、酸化第一鉄（ウスタイト:FeO）57.9%、酸化第二鉄（ヘマタイト:Fe_2O_3）は13.6%で、Fe_2O_3とFeOの比率は、19：81で、平衡状態図からウスタイトの存在領域に近い。

滓中成分の指標となる造滓成分（SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O）は22.8％である。砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタニア（Titanium dioxide:TiO_2）が3.5%で、バナジウム(Vanadium:V）を0.026%含有する。鉱石に含有される成分の一つである銅（Copper:Cu）は0.001%と少ない。したがって、チタニア含有の砂鉄を始発原料とした可能性が高い。

一方、本資料の製造工程の位置づけとして、これまでの組成分析結果（データ）を整理し、以上の資料と同様、図1、図2と図3にプロットした結果と化学組成分析、顕微鏡観察およびX線回折の結果を考慮すると、本資料は、チタニア含有の砂鉄系精錬鍛冶滓と推察される。

以上の結果を総合すると、この資料は砂鉄系椀形精錬鍛冶滓で、鉄源にはチタニア系砂鉄が使用された可能性が高い、ものと推定される。

(11) 資料番号No.11　鞴羽口

①外観観察（図版1－20・21）　長さ71.4mm×幅67.9mm×厚さ32.4mm。外径60mm、内径25～30mm。資料の重量は433.0gである。MC（金属探知）反応はない。外観写真を34頁に示す。やや肉薄の羽口で先端部には着磁力やや弱の黒色溶融鉄滓が付着している。内部の被熱影響部を避けて胎土も採取し分析を試みる。滓部はガラス質状光沢部もある。

②鉱物組織分析　資料を切断し、樹脂に埋めこみ研磨した鉄滓の顕微鏡ミクロ組織写真を図版3－38に示す。写真の溶融鉄滓（ガラス質）の前面に樹枝状のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）および多角形状で空洞があるチタン鉄酸化物のウルボスピネル（Ulvospinel: 2 FeO•TiO_2）結晶が観察される。したがって、本資料の組織は、溶融滓が羽口炉壁に付着して生成したもと推察され、精錬鍛冶に使用されていたものであろう。

③胎土組成・耐火度分析　表4に胎土成分のＥＤＸ分析結果を示す。シリカ（SiO_2）が66.1%で、通常の粘土（約60%程度）よりもやや高めで、耐化度を向上させるアルミナ（Al_2O_3）も18.7%で、通常の粘土における約15～18%に近い、耐火度は普通（1500℃程度）と推定される。

以上の結果を総合すると、この資料は羽口の一部で、溶融滓が付着していて、精錬鍛冶に使用されていたものと推定される。

No.	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	CaO	K_2O	ZrO_2	SrO	Rb_2O
11	66.1	18.7	11.4	1.37	0.47	1.61	0.043	0.018	0.009

定量値は、検出された化合物濃度の合計を100重量%として補正して求めた。

表4　蛍光X線による資料11（鞴羽口）の化学成分分析結果

4．まとめ

資料の調査結果および考察結果を以上に述べた、それらの結果を以下にまとめる。

①No. 1・2・5・6・7・9・10資料は砂鉄系鍛冶滓、No.1資料は鍛錬鍛冶滓、No. 2・5・6・7・9・10資料は精錬鍛冶滓と推定される。No. 2とNo. 9資料は、鉄滓中に金属鉄が共存している含鉄鉄滓である。いずれも加工処理を受けた形跡はない。

②No. 3資料は粒状鉄滓で、鍛冶工程（精錬または鍛錬）で発生したものと推定される。

③No. 4資料は鍛造剥片で、鍛冶鍛錬工程で発生した鉄の酸化皮膜（厚さ800～200μm）が剥離したものと推定される。

④No. 8資料はチタニア系砂鉄製錬滓で、高チタニア含有砂鉄を製鉄の始発原料としていると推定される。

⑤No.11資料は、鞴羽口の一部に溶融滓が付着した耐火材である。

参考文献

窪田蔵郎　1986　『鉄の考古学』

たたら研究会編1994　『日本製鉄史論集たたら研究会創立25周年記念論集』

佐藤知雄　1963　『炭素鋼の顕微鏡組織写真と解説』

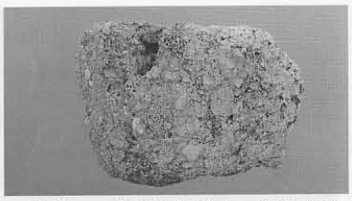
西沢泰二、佐久間健人　1979　『金属組織写真集 鉄鋼材料編』（日本金属学会）

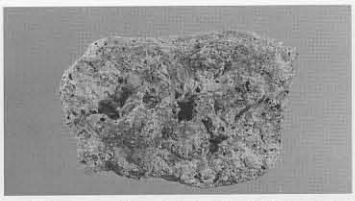
三辻利一　1989　「胎土分析による土器の産地推定－蛍光X線法」『考古学・美術史の自然科学的研究』（古文化財編集委員会編）

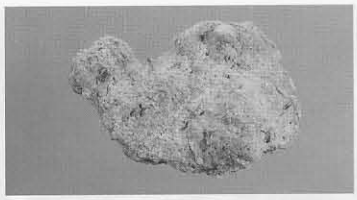
小川太一　2002　「分析側から見た鉄関連遺物発掘調査への期待」『鉄の歴史－その技術と文化フォーラム』論文集』（日本鉄鋼協会　鉄関連遺物分析評価研究会）

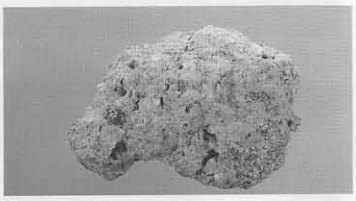
註

註1　FeO-Fe_2O_3-SiO_2系状態図（by Osborn and Muan）:Slag Atlas［ドイツ鉄鋼協会］(1981)［Verlag Stahleisen］Dusseldorf, Fig. 106, p,76を用いた。

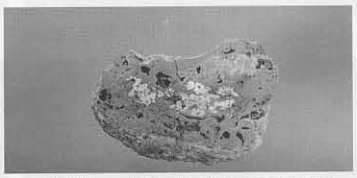

1. 資料No.1　椀形精錬鍛冶滓の外観（表）

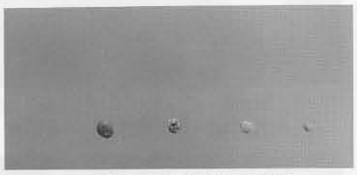

2. 資料No.1　椀形精錬鍛冶滓の外観（裏）

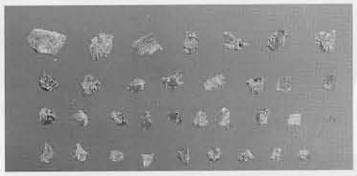

3. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の外観（表）


4. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の外観（裏）

5. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の切断面

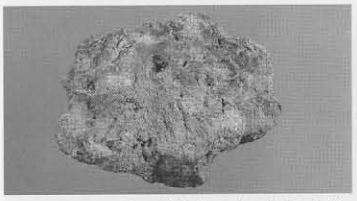

6. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の切断面

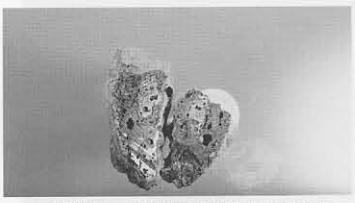

7. 資料No.3　粒状鉄滓の外観


8. 資料No.4　鍛造剥片の外観

9. 資料No.4　鍛造剥片の外観

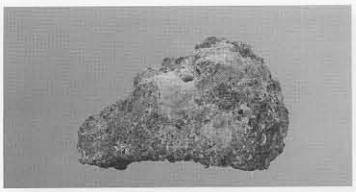
10. 資料No.5　椀形精錬鍛冶滓の外観（表）


11. 資料No.5　椀形精錬鍛冶滓の外観（裏）


12. 資料No.5　椀形精錬鍛冶滓の切断面

13. 資料No.6　精錬鍛冶滓の外観

14. 資料No.7　椀形精錬鍛冶滓の外観（表）

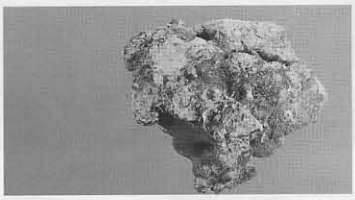

15. 資料No.7　椀形精錬鍛冶滓の外観（裏）

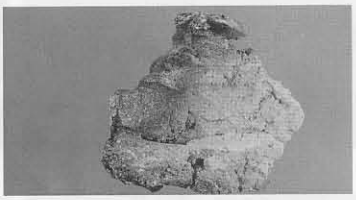
16. 資料No.8　精錬滓の外観

17. 資料No.9　椀形精錬鍛冶滓の外観

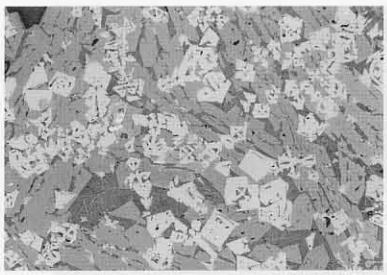
18. 資料No.10　椀形精錬鍛冶滓の外観（表）

19. 資料No.10　椀形精錬鍛冶滓の外観（表）

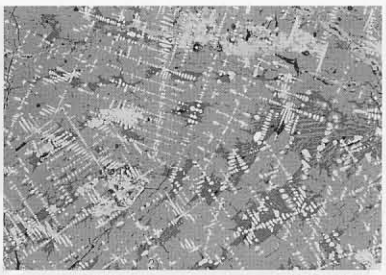

20. 資料No.11　鞴羽口の外観（上から）


21. 資料　鞴羽口の外観（横から）

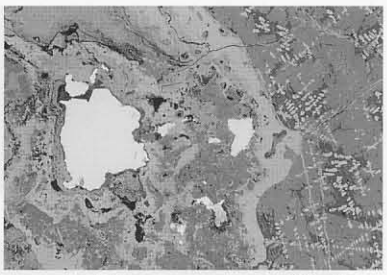
図版１　分析資料の外観（縮尺40%）



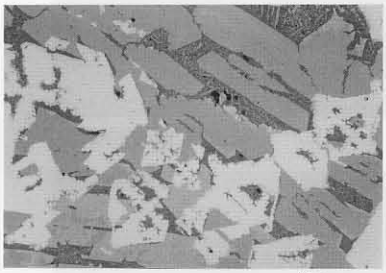
×100 ⟷:100μm



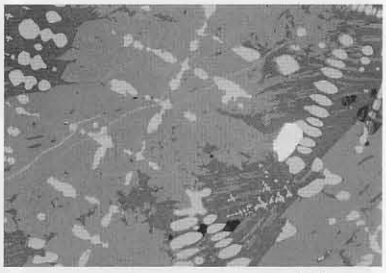
×100 ⟷:100μm



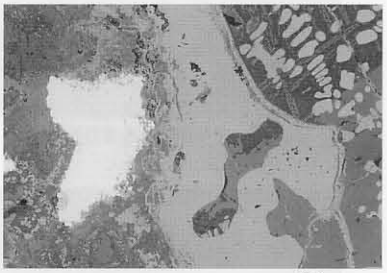
×100 ⟷:100μm



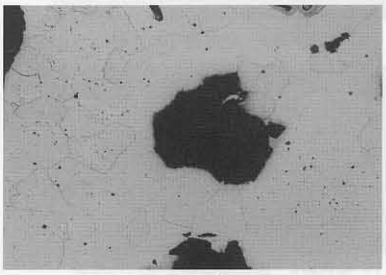
×400 ⟷:25μm
22. 資料No.1　椀形精錬鍛冶滓の組織



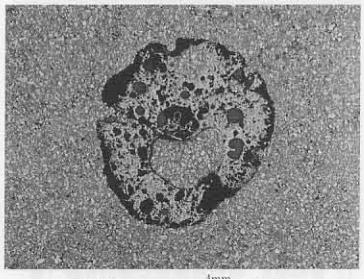
×400 ⟷:25μm
23. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の組織



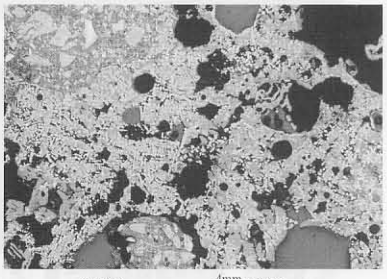
×400 ⟷:25μm
24. 資料No.2　椀形鍛錬鍛冶滓の組織



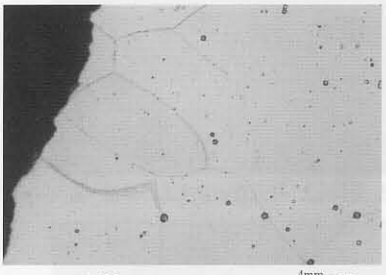
×100 ⟷:100μm



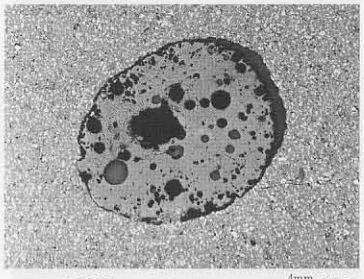
×100 ⟷:100μm



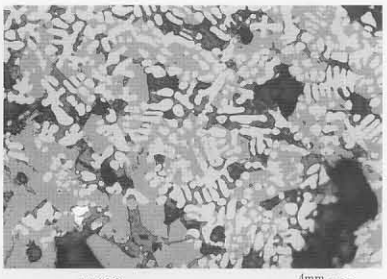
×100 ⟷:100μm



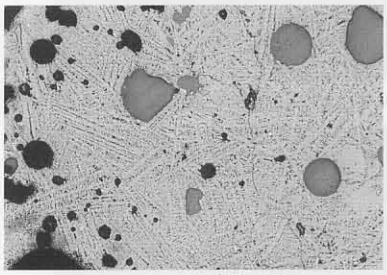
×400 ⟷:25μm
25. 資料No.2　椀形精錬鍛冶滓の組織



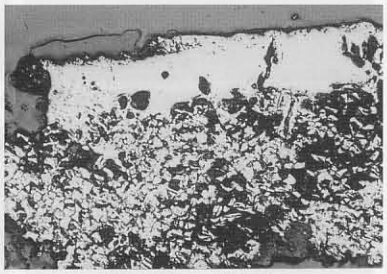
×400 ⟷:25μm
26. 資料No.3　粒状鉄滓の組織



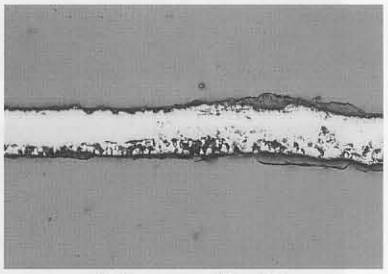
×400 ⟷:25μm
27. 資料No.3　粒状鉄滓の組織



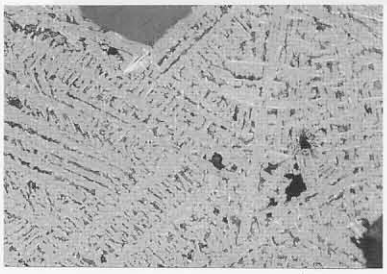
×100 ⟷:100μm



×100 ⟷:100μm

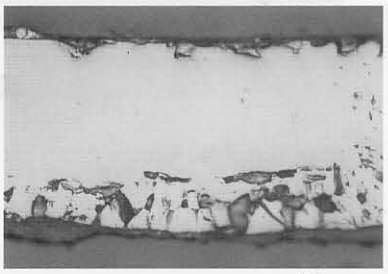


×100 ⟷:100μm



×400 ⟷:25μm
28. 資料No.3　粒状鉄滓の組織

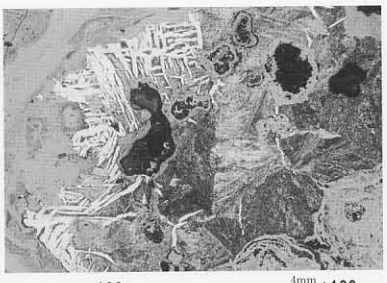
×400 ⟷:25μm
29. 資料No.4　鍛造剥片（大）の組織



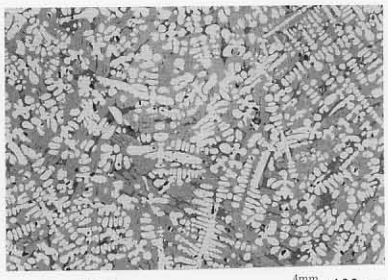
×400 ⟷:25μm
30. 資料No.4　鍛造剥片（小）の組織

図版２　分析資料の組織写真（１）

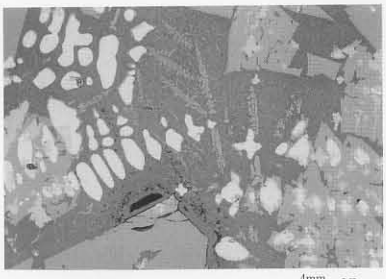
×100　4mm ⟷ : 100μm



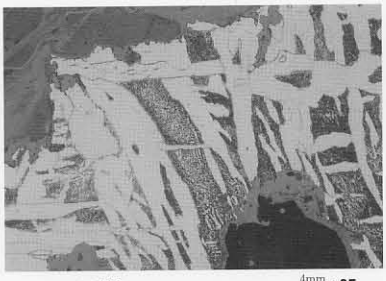
×100　4mm ⟷ : 100μm



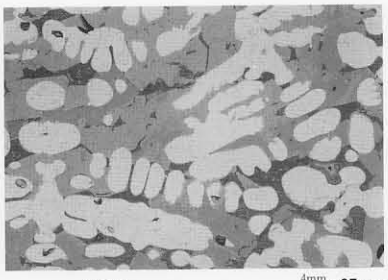
×100　4mm ⟷ : 100μm



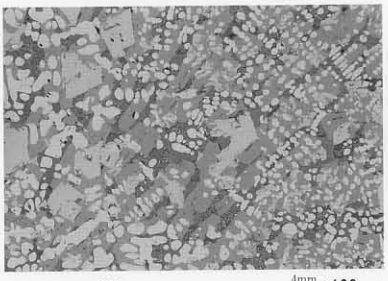
×400　4mm ⟷ : 25μm
31. 資料No.5　椀形精錬鍛冶滓の組織



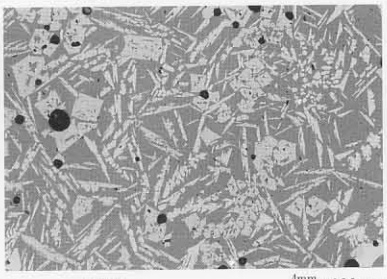
×400　4mm ⟷ : 25μm
32. 資料No.5　椀形精錬鍛冶滓の組織



×400　4mm ⟷ : 25μm
33. 資料No.6　精錬鍛冶滓の組織

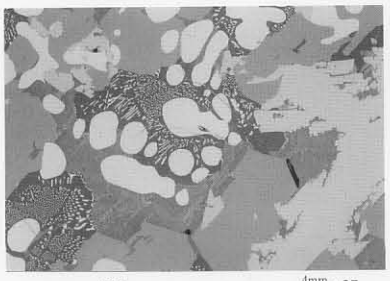


×100　4mm ⟷ : 100μm

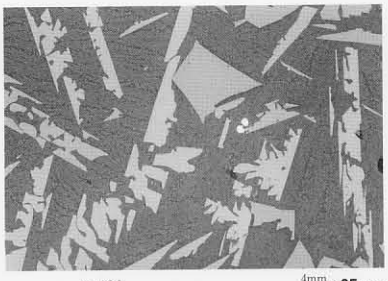


×100　4mm ⟷ : 100μm

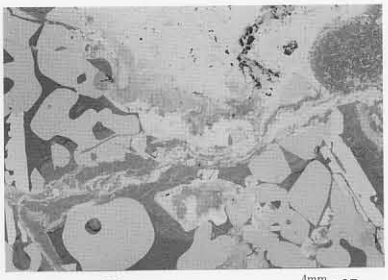
×100　4mm ⟷ : 100μm



×400　4mm ⟷ : 25μm
34. 資料No.7　椀形精錬鍛冶滓の組織

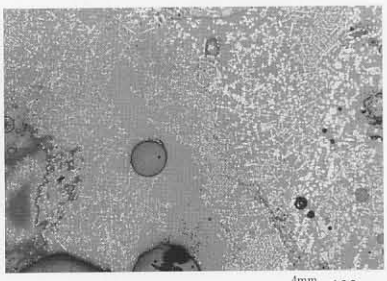


×400　4mm ⟷ : 25μm
35. 資料No.8　製錬滓の組織

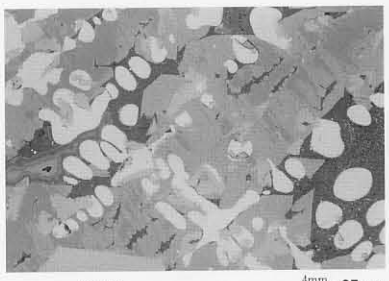


×400　4mm ⟷ : 25μm
36. 資料No.9　椀形精錬鍛冶滓の組織

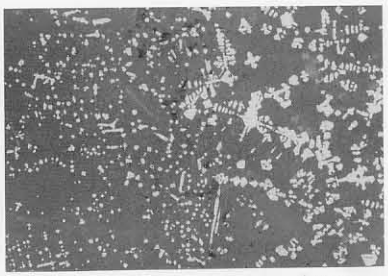
×100　4mm ⟷ : 100μm



×100　4mm ⟷ : 100μm



×400　4mm ⟷ : 25μm
37. 資料No.10　椀形精錬鍛冶滓の組織



×400　4mm ⟷ : 25μm
38. 資料No.11　鞴羽口の組織

図版 3　分析資料の組織写真（2）

写　真　図　版

1．調査区全景
（真上上空から）

2．調査区全景
（真上上空から）

3．調査区全景
（南東から）

図版 1

1．調査区北西部
（真上上空から）

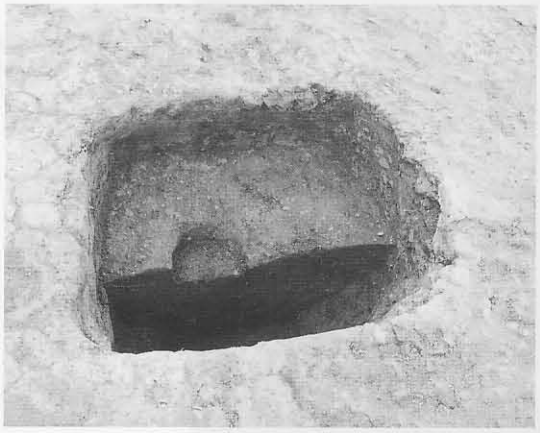
2．調査区中央部
（真上上空から）

3．調査区南東部
（真上上空から）

図版 2

1．ＳＢ１掘立柱建物跡
ＳＩ１８竪穴住居跡
（北から）

2．ＳＢ２・９・11
掘立柱建物跡
ＳＩ21竪穴住居跡
（東から）



3．ＳＢ２掘立柱建物跡南東隅柱穴断面

4．ＳＢ２掘立柱建物跡北東隅柱穴掘上状況

図版３　ＳＢ１・２・９・11掘立柱建物跡、ＳＩ21竪穴住居跡

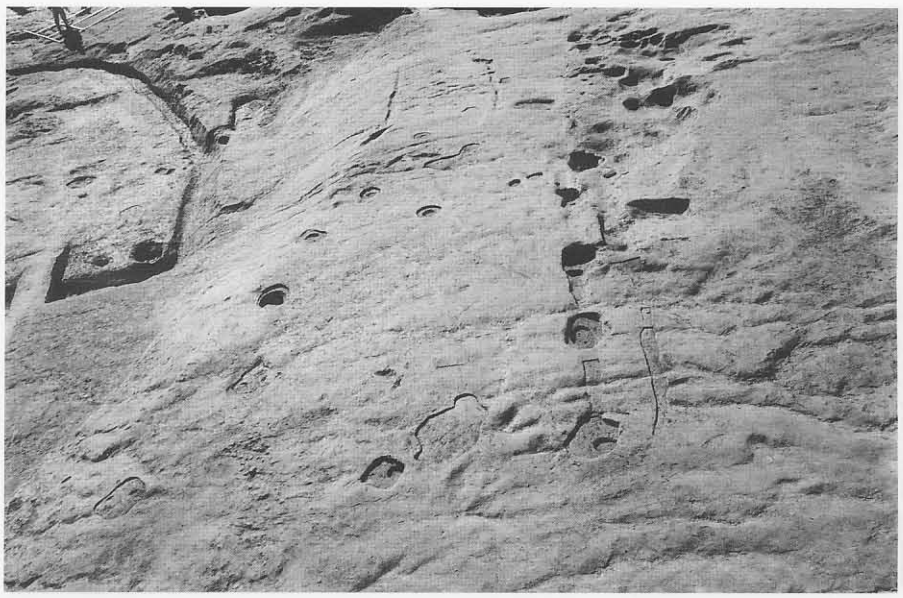
1．ＳＢ５掘立柱建物跡
（北から）

2．ＳＢ６掘立柱建物跡
（南から）

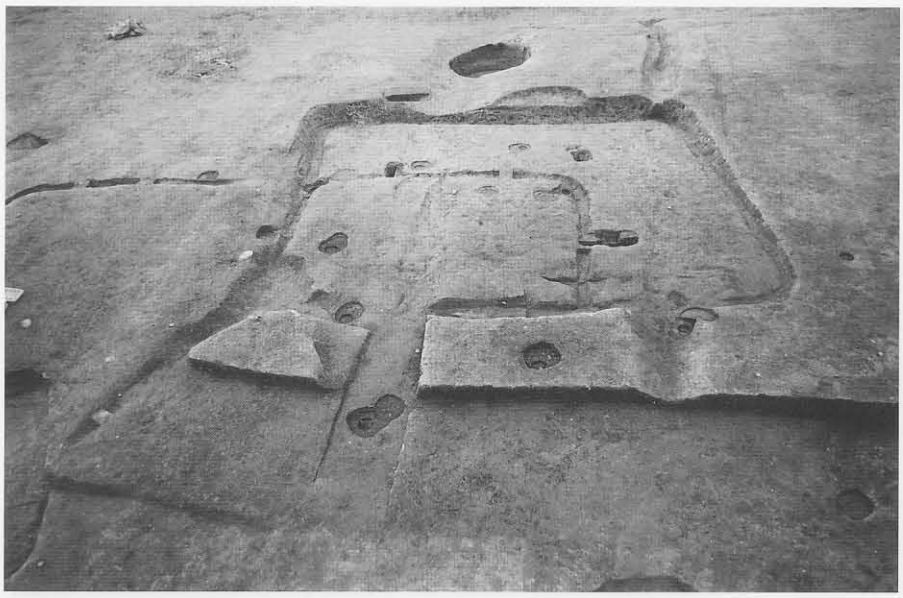
3．ＳＢ８掘立柱建物跡
ＳＩ16竪穴住居跡
（東から）

図版４　ＳＢ５・６・８・掘立柱建物跡、ＳＩ16竪穴住居跡

1．ＳＢ10掘立柱建物跡
（北から）



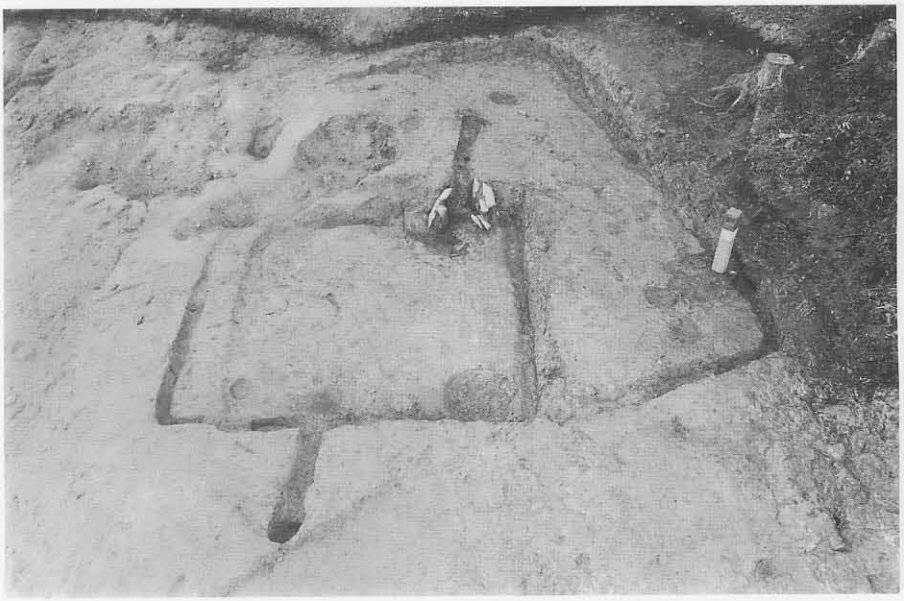
2．ＳＢ12掘立柱建物跡
ＳＩ37Ａ・Ｂ竪穴住居跡
（北東から）



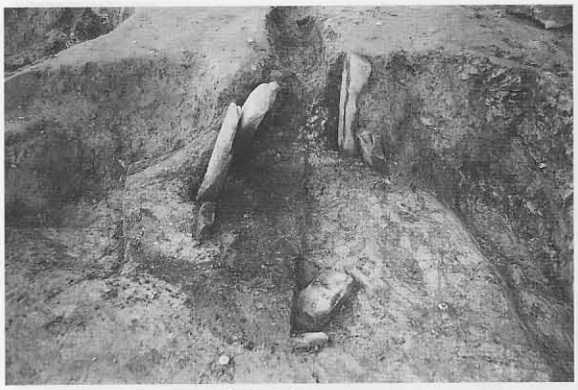
3．ＳＢ13掘立柱建物跡
（北東から）

図版５　ＳＢ10•12•13掘立柱建物跡、ＳＩ37Ａ・Ｂ竪穴住居跡

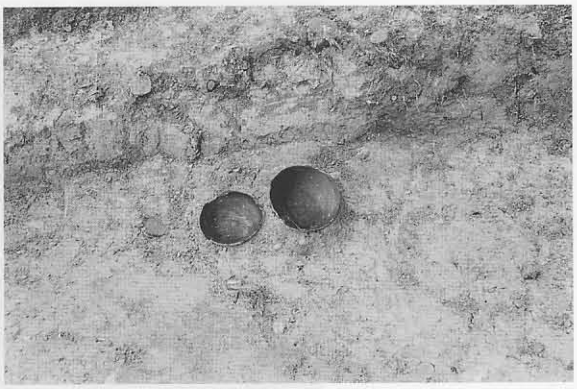
1．ＳＢ16・17
掘立柱建物跡
（北東から）



2．Ｓ11・２・44
掘立柱建物跡
（北から）



3．ＳＩ１竪穴住居跡カマド

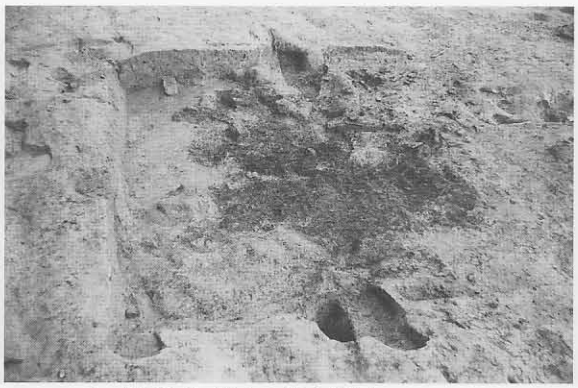


4．Ｓ12竪穴住居跡土器出土状況

図版６　ＳＢ１・２・９・11掘立柱建物跡、ＳＩ21竪穴住居跡

1．SI6掘立柱建物跡
（南から）

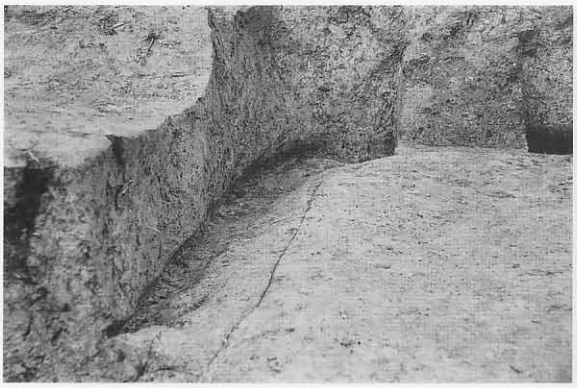
2．カマド



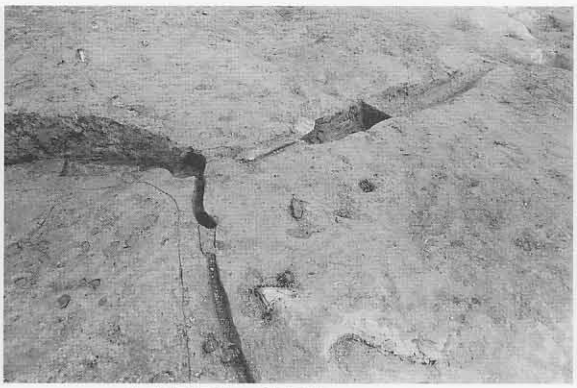
3．埋め戻し途中の焼土炭層

4．カマド燃焼部下の配石と暗渠

5．西周溝掘方



6．北西隅西周掘方

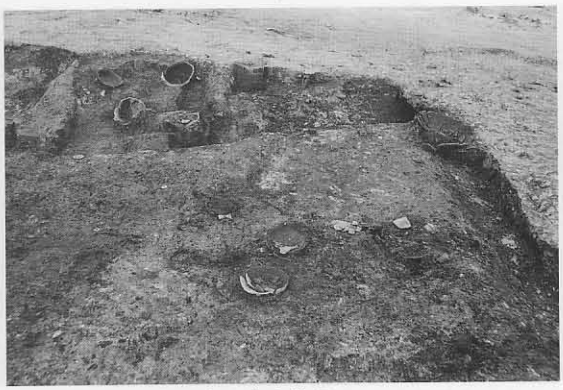


7．北東隅周溝・外延溝

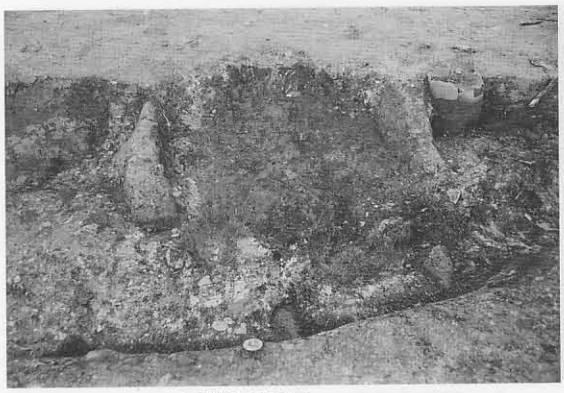
図版7　S I 6竪穴住居跡

1．S18竪穴住居跡
（焼失住居跡）
（南から）

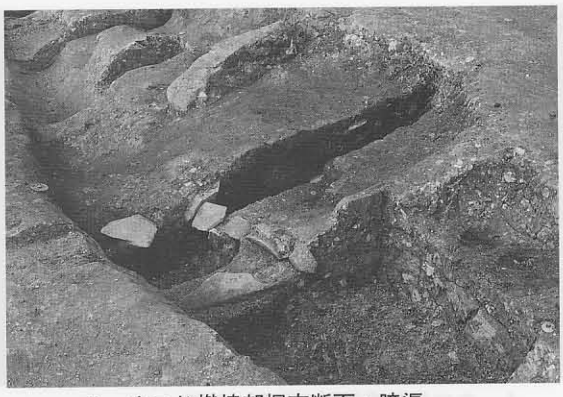
2．カマド内土器出土状況



3．北東隅土器出土状況



4．カマド燃焼部底面



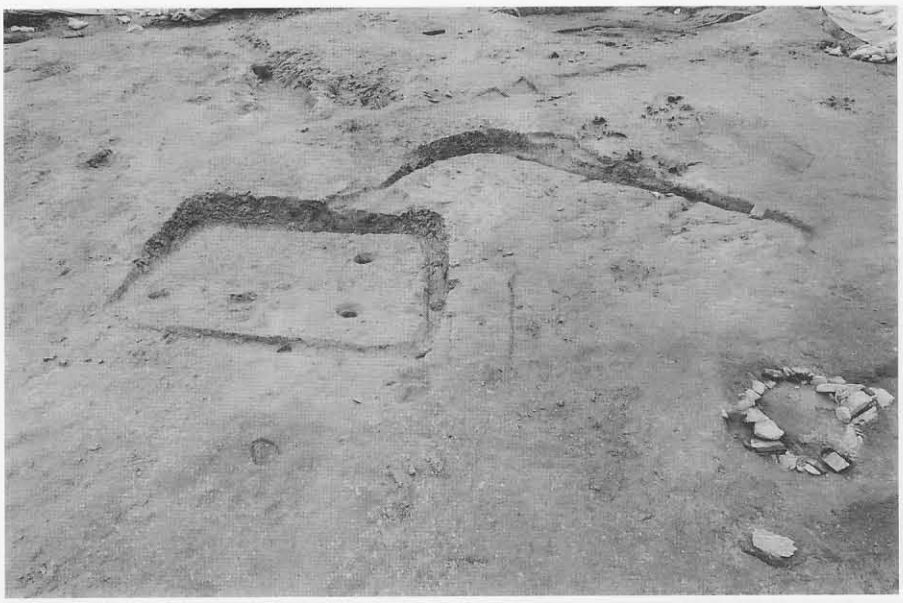
5．カマド燃焼部掘方断面・暗渠

6．カマド燃焼部下の配石

7．S18竪穴住居跡完掘状況

図版8　S I 8焼失竪穴住居跡

1．ＳＩ17･19竪穴住居跡
（東から）



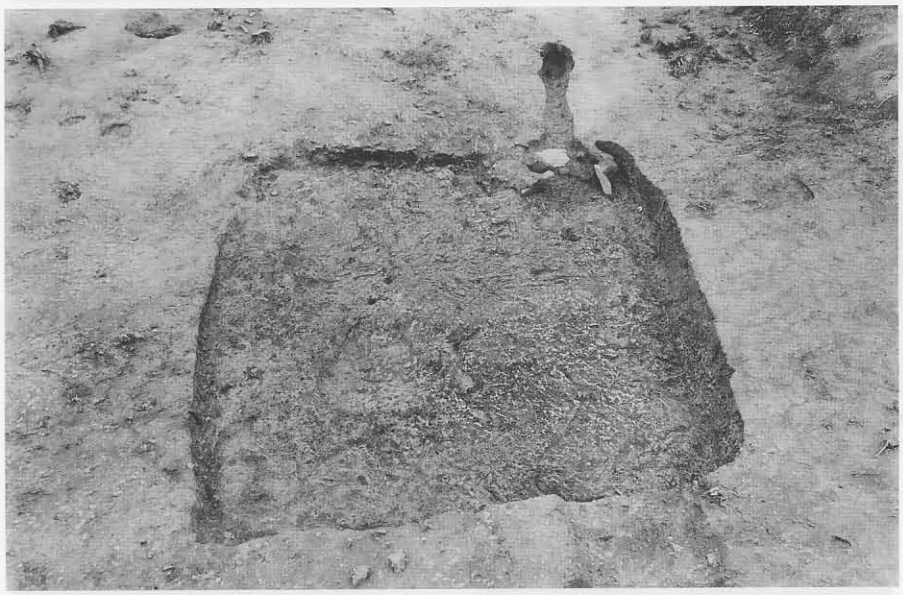
2．ＳＩ16竪穴住居跡土器出土状況（北東から）

3．ＳＩ16竪穴住居跡管玉出土状況（南から）

4．ＳＩ16・51竪穴住居跡
（南東から）

図版９　ＳＩ16･17･19･51焼失竪穴住居跡

1．ＳＩ20竪穴住居跡
床面の土器、炭化材
の出土状況
（北東から）



1．ＳＩ20竪穴住居跡
完掘状況
（北東から）

3．ＳＩ20竪穴住居跡南西部土器出土状況
（北東から）

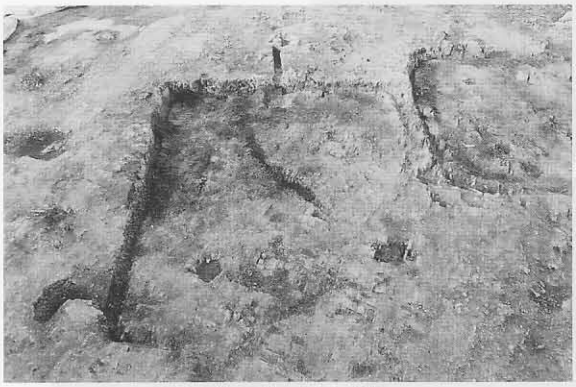
4．ＳＩ20竪穴住居跡カマド検出状況
（北東から）

図版10　ＳＩ20焼失竪穴住居跡

1．SI21竪穴住居跡
（東から）

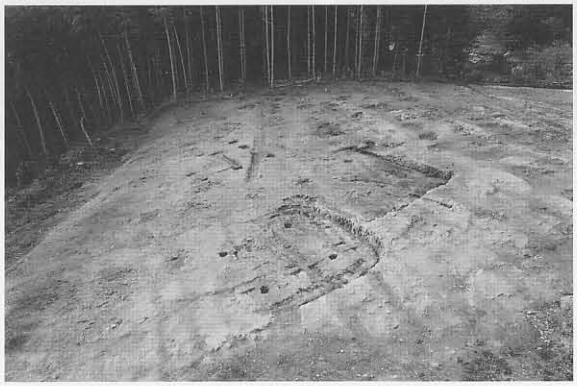
2．SI21竪穴住居跡カマド検出状況（東から）

3．SI21竪穴住居跡 珠文鏡出土状況（南から）



4．SI22竪穴住居跡（東から）

5．SI23竪穴住居跡（東から）



6．調査区南東端（SI22・23・24・竪穴住居跡）（北から）

図版11　ＳＩ21・22・23・24竪穴住居跡

1．ＳＩ24竪穴住居跡
ＳＢ７掘立柱建物跡
（南から）

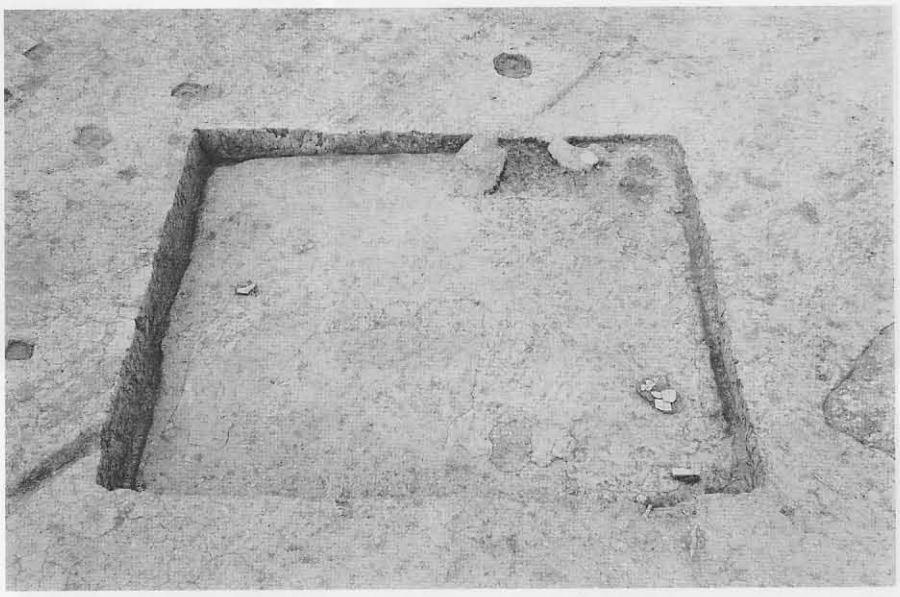
2．ＳＩ24竪穴住居跡
三重小塔出土状況
（南から）

3．ＳＩ24竪穴住居跡三重小塔出土状況
（西から）

4．ＳＩ24竪穴住居跡 三重小塔出土状況
（南から）

図版12　ＳＩ24竪穴住居跡、ＳＢ７掘立柱建物跡

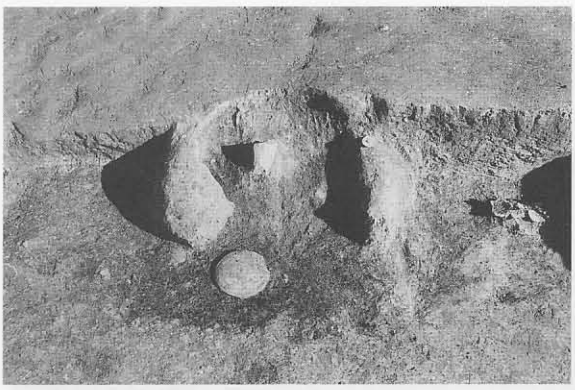
1．ＳＩ31竪穴住居跡
（南から）



2．ＳＩ32竪穴住居跡
（北から）

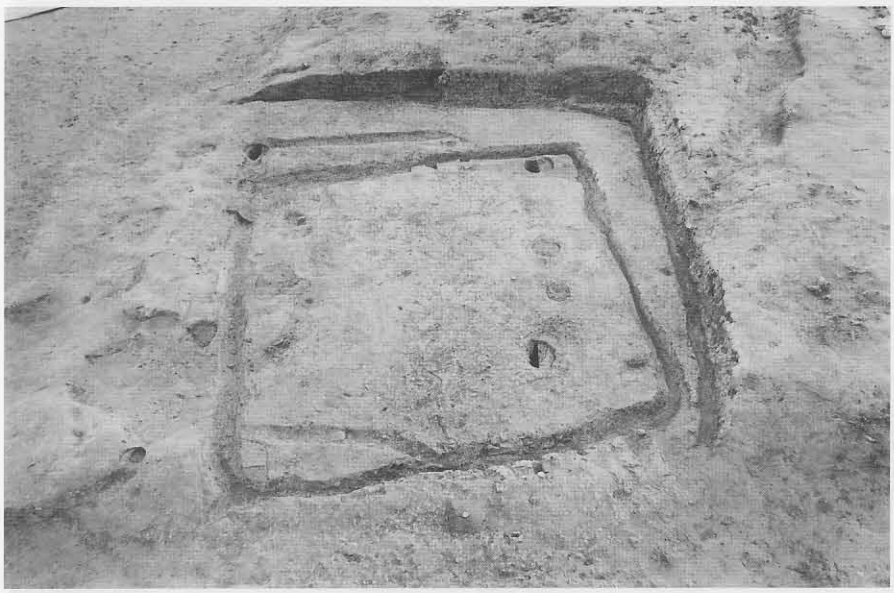
3．ＳＩ49竪穴住居跡
（北から）

図版13　ＳＩ31・32・49竪穴住居跡

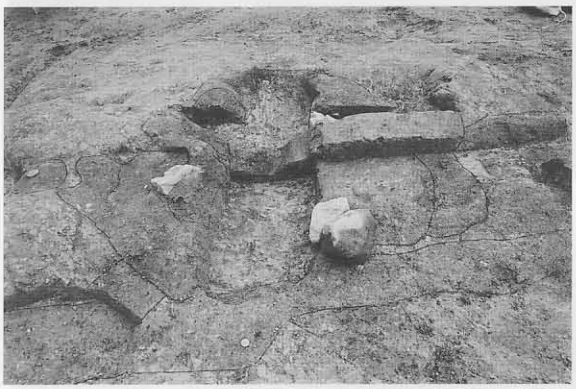


1．SI32竪穴住居跡・カマド検出状況

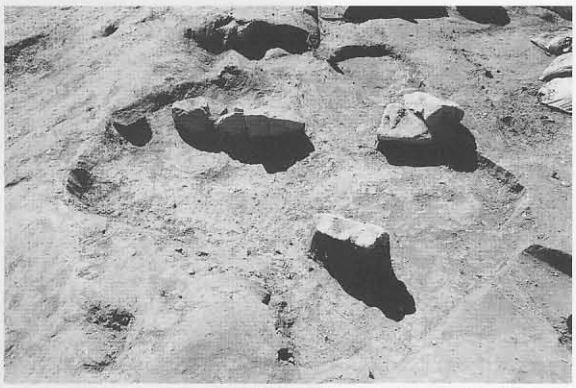
2．SI49竪穴住居跡カマド検出状況



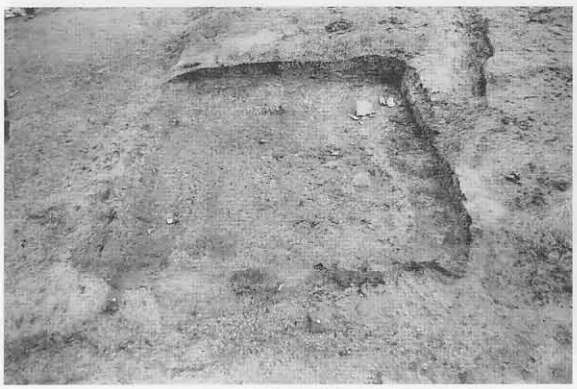
3．ＳＩ33竪穴住居跡（北から）



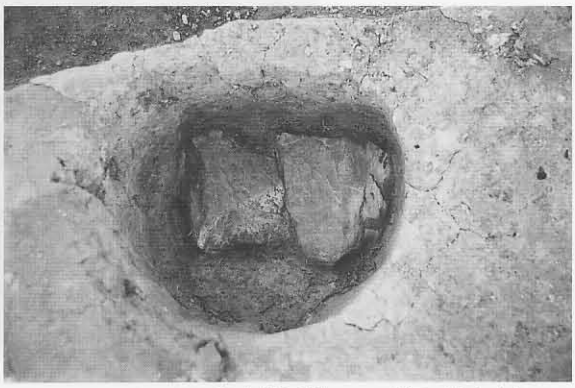
4．ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡カマド底面（北西から）



5．ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡カマド掘方（北から）



6．ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡床面（北から）



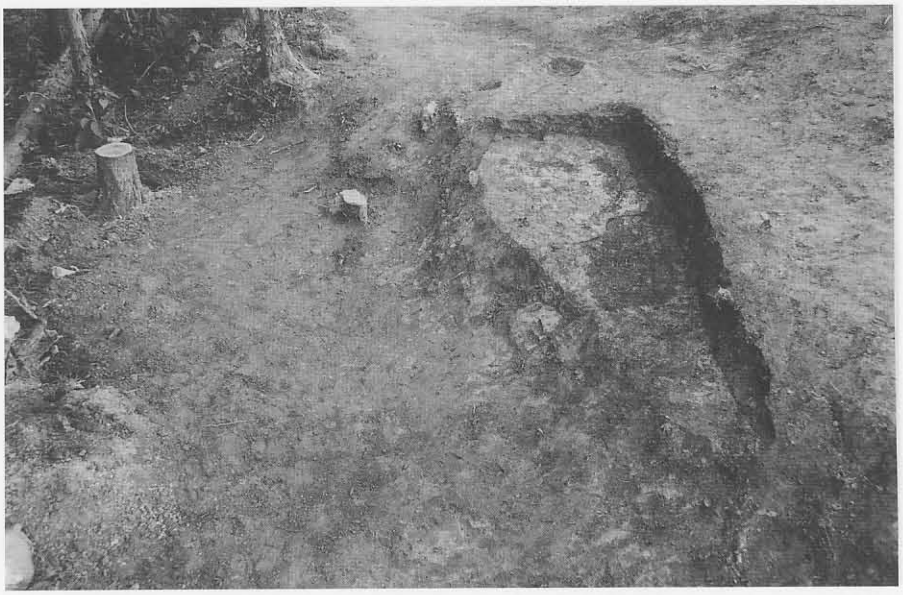
7．ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡pit 9 礎板（南から）

図版14　ＳＩ32・33・49竪穴住居跡

1．ＳＩ37竪穴住居跡
（北東から）

2．ＳＩ53竪穴住居跡
（北から）

3．ＳＩ35竪穴住居跡
（北から）



図版15　ＳＩ35・37・53竪穴住居跡

1．完掘状況（東から）

2．土器出土状況（3層上面）
（東から）

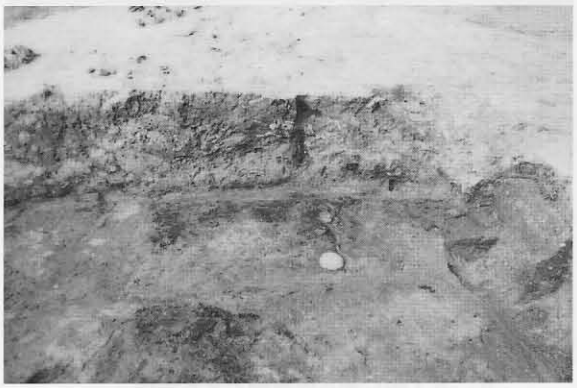
3．土器出土状況
（西から）

図版16　ＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡（1）

1．床面の土器出土状況
（東から）

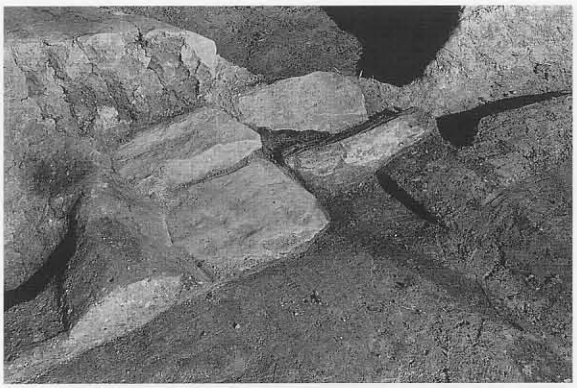
2．土器出土状況（3層上面）

3．土器出土状況（3層上面）



4．棚板検出状況

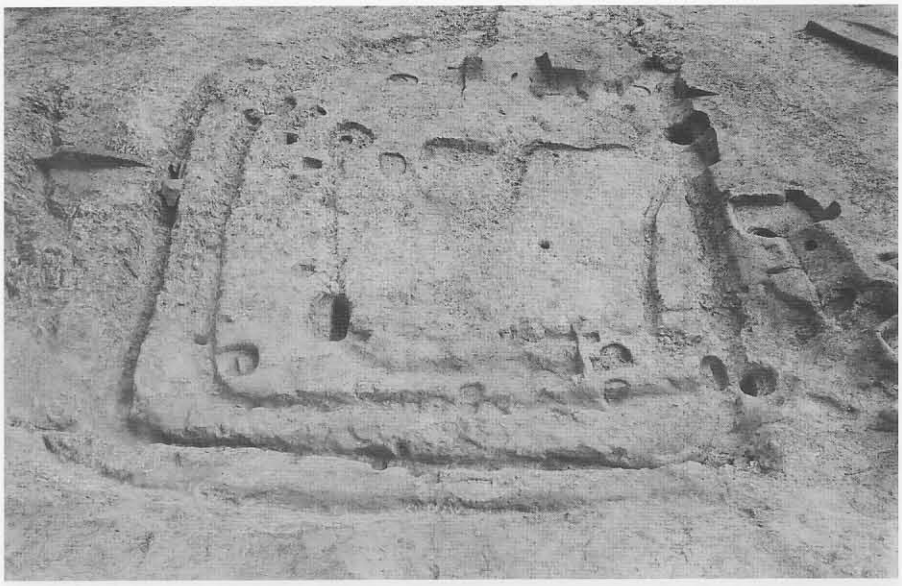
5．ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡カマド掘方



6．カマド掘方

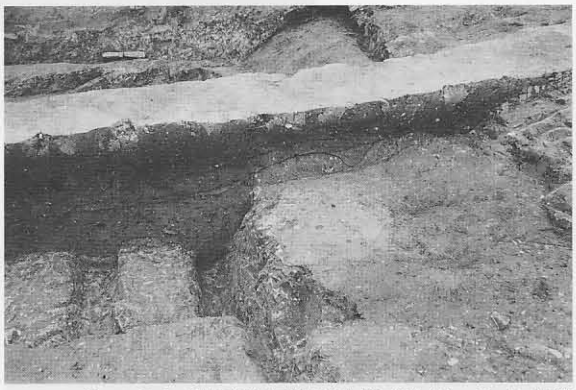
7．外延溝

図版17　ＳＩ34Ｄ焼失竪穴住居跡（2）



1．ＳＩ40Ａ～Ｄ竪穴住居跡完掘状況（北西から）

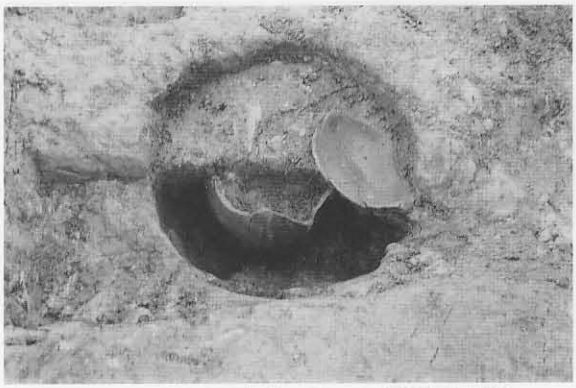
2．ＳＩ40竪穴住居跡東西断面西側 Ａ・Ｂ・Ｃ周溝



3．ＳＩ40竪穴住居跡南北断面北側　Ｃ・Ｄ周溝 ＳＩ43竪穴住居跡

4．ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡カマド検出状況

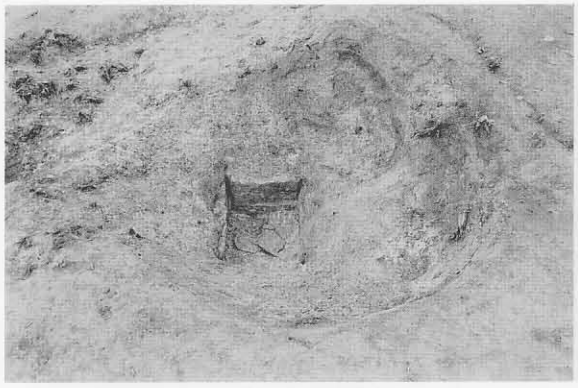
5．ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡カマド西側 Ｃ周溝・Ｌ字状暗渠



6．ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡pit4 土器出土状況（抜取穴）

7．ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡　鍛冶炉

図版18　ＳＩ40竪穴住居跡

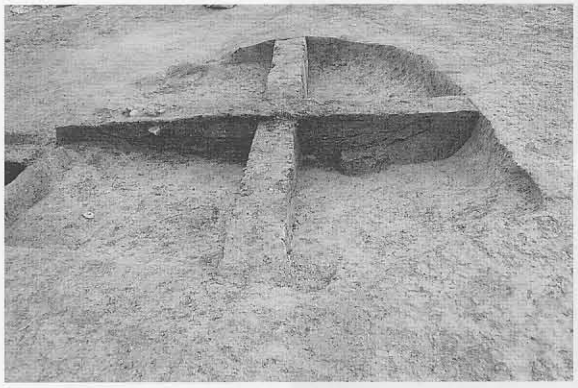


1．ＳＥ２井戸跡（北西から）

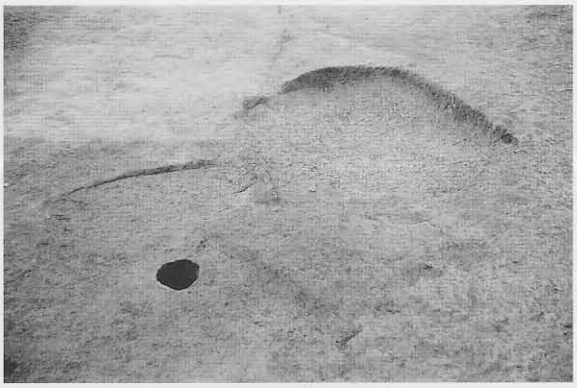
2．ＳＥ３井戸跡（北西から）

3．ＳＫ１土壙（北から）

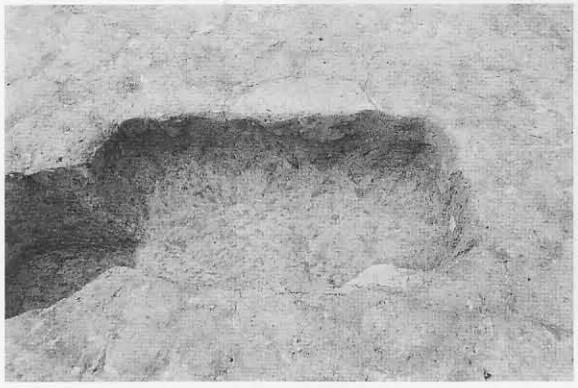
4．ＳＫ１土壙（南から）



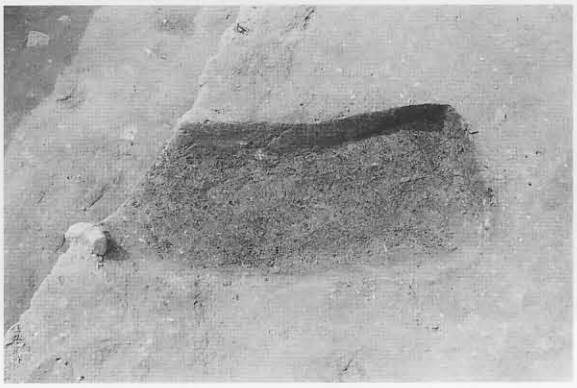
5．ＳＫ19土壙断面（北から）



6．ＳＫ18･19土壙（北から）

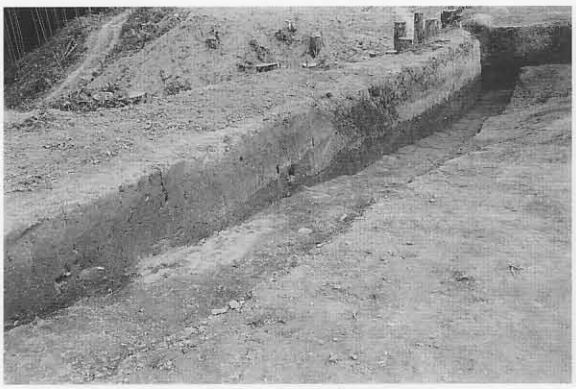


7．ＳＸ８焼成遺構（東から）

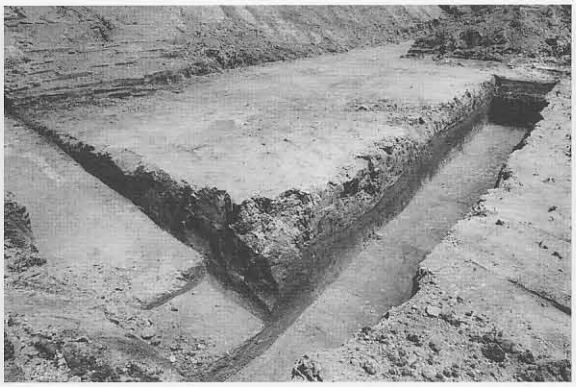


8．ＳＸ７焼成遺構（東から）

図版19　ＳＥ２・３井戸跡、ＳＫ１･18･19土壙、ＳＸ７・８跡焼成遺構



1．ＳＸ１遺物包含層南北断面（西から）

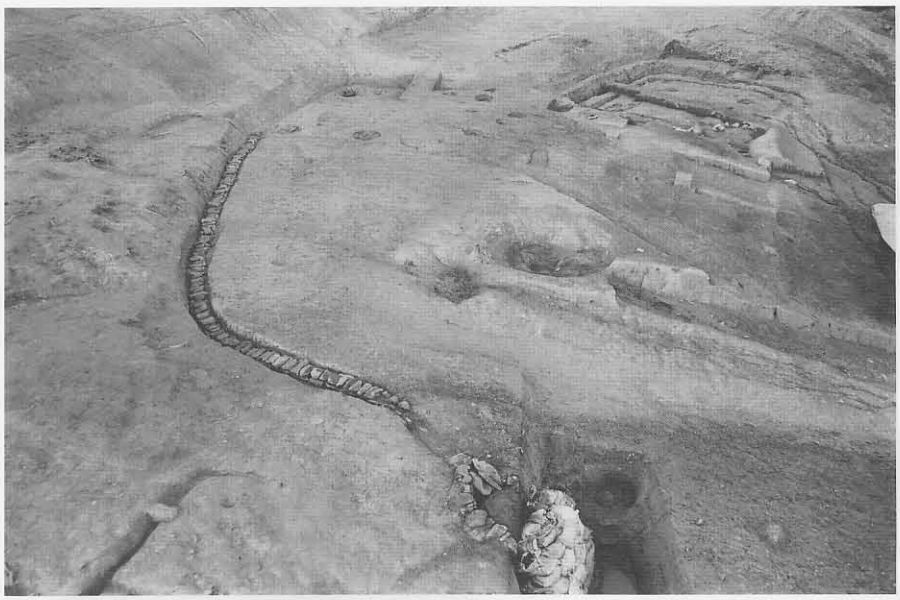


2．ＳＸ３遺物包含層東西断面（南から）

3．ＳＸ１遺物包含層
（西から）

4．ＳＸ２遺物包含層
（調査区南部遺構群）
（南から）

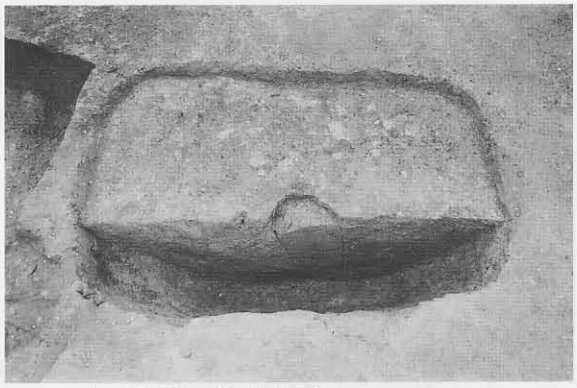
図版20　ＳＸ１・２・３遺物包含層



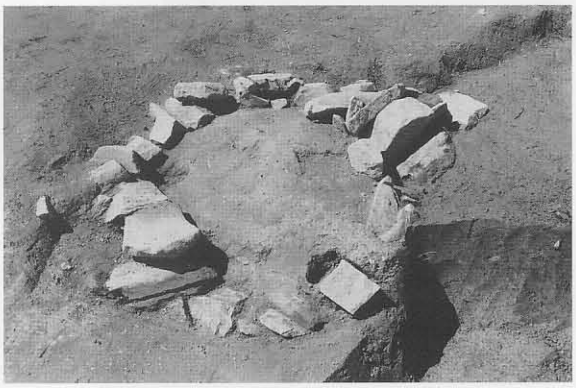
1．ＳＥ１石組井戸跡
ＳＤ１暗渠
ＳＸ５平場
（南東から）

2．ＳＤ１暗渠石蓋・側石

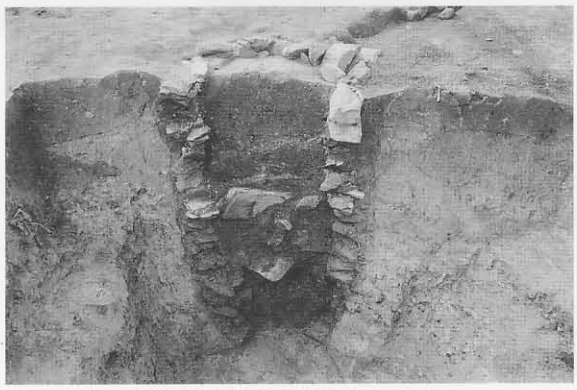
3．環状積石



4．ＳＸ５平場Pit１断面



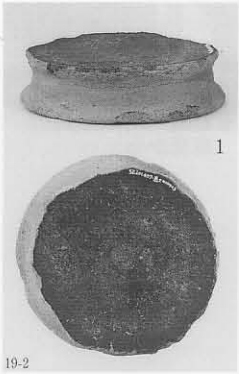
5．ＳＥ１石組井戸跡

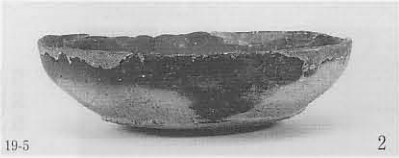


6．ＳＥ１石組井戸跡断面

7．ＳＥ１石組井戸跡石組状況

図版21　ＳＥ１石組井戸跡、ＳＤ１暗渠、ＳＸ５平場



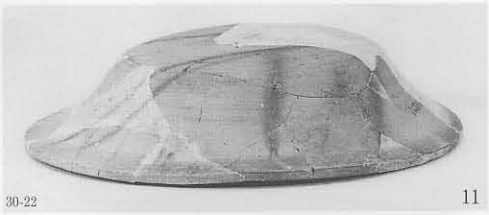


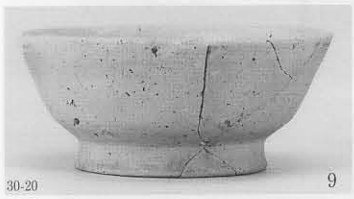
1．ＳＩ１竪穴住居跡
2・3．ＳＩ２竪穴住居跡
4・5．ＳＩ６竪穴住居跡
6．ＳＩ７竪穴住居跡
7～11．ＳＩ８竪穴住居跡

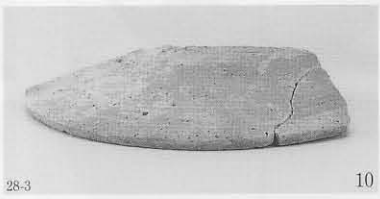
1．円盤状土製品
2・7．土師器坏
3～5．土師器高坏
6．須恵器坏
8・9．土師器甕
10・11．土師器鉢

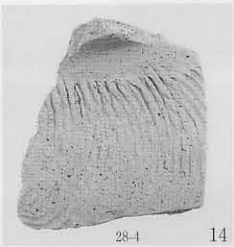
※左下の数字は、図面No.
（例、19-2 は第19図２を示す）

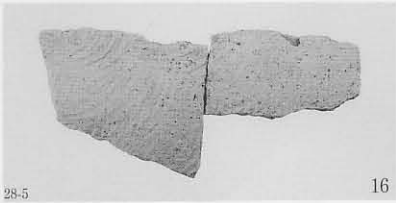
図版22　ＳＩ１・２・６・７・８竪穴住居跡出土土器

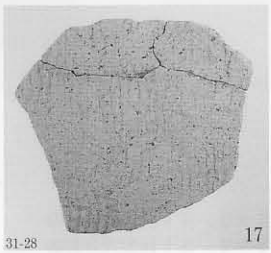


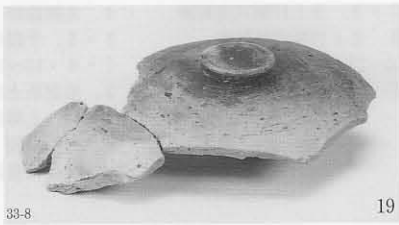








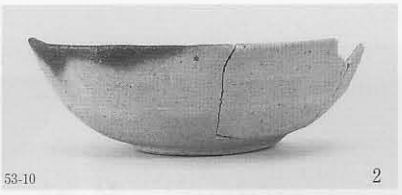


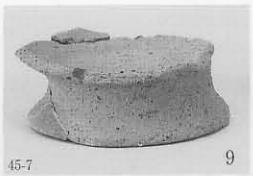


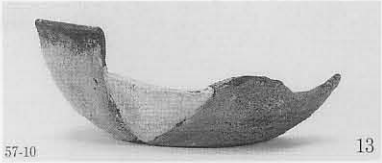
1～17. ＳＩ８竪穴住居跡
18・19. ＳＩ９竪穴住居跡

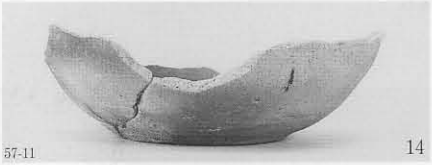
1～6. 須恵器坏
7～9・12. 須恵器高台坏
10・11・19. 須恵器蓋
13～17. 須恵器甕
18. 須恵器高坏

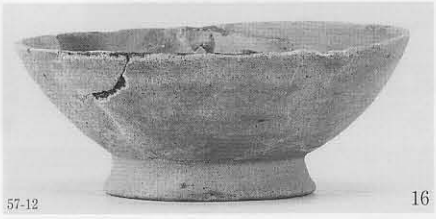
図版23　ＳＩ８・９竪穴住居跡出土土器







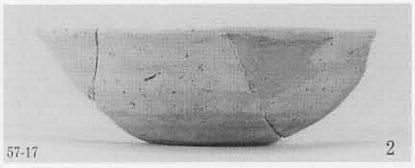


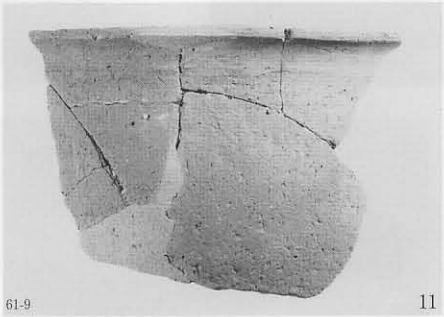


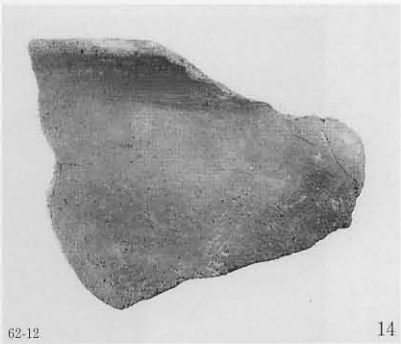
1・2．ＳＩ13竪穴住居跡
3～6．ＳＩ16竪穴住居跡
7・8．ＳＩ17竪穴住居跡
9．ＳＩ19竪穴住居跡
10～22．ＳＩ20竪穴住居跡

1・2・10～14．土師器坏
3．土師器坩
4．土師器鉢
5・6．手捏ね土器坏
7・8・15～17．土師器高台坏
9．須恵系土器高台坏
18・19．土師器埦
20．土師器甕
21・22．須恵器坏

図版24　ＳＩ13・16・17・19・20竪穴住居跡出土土器

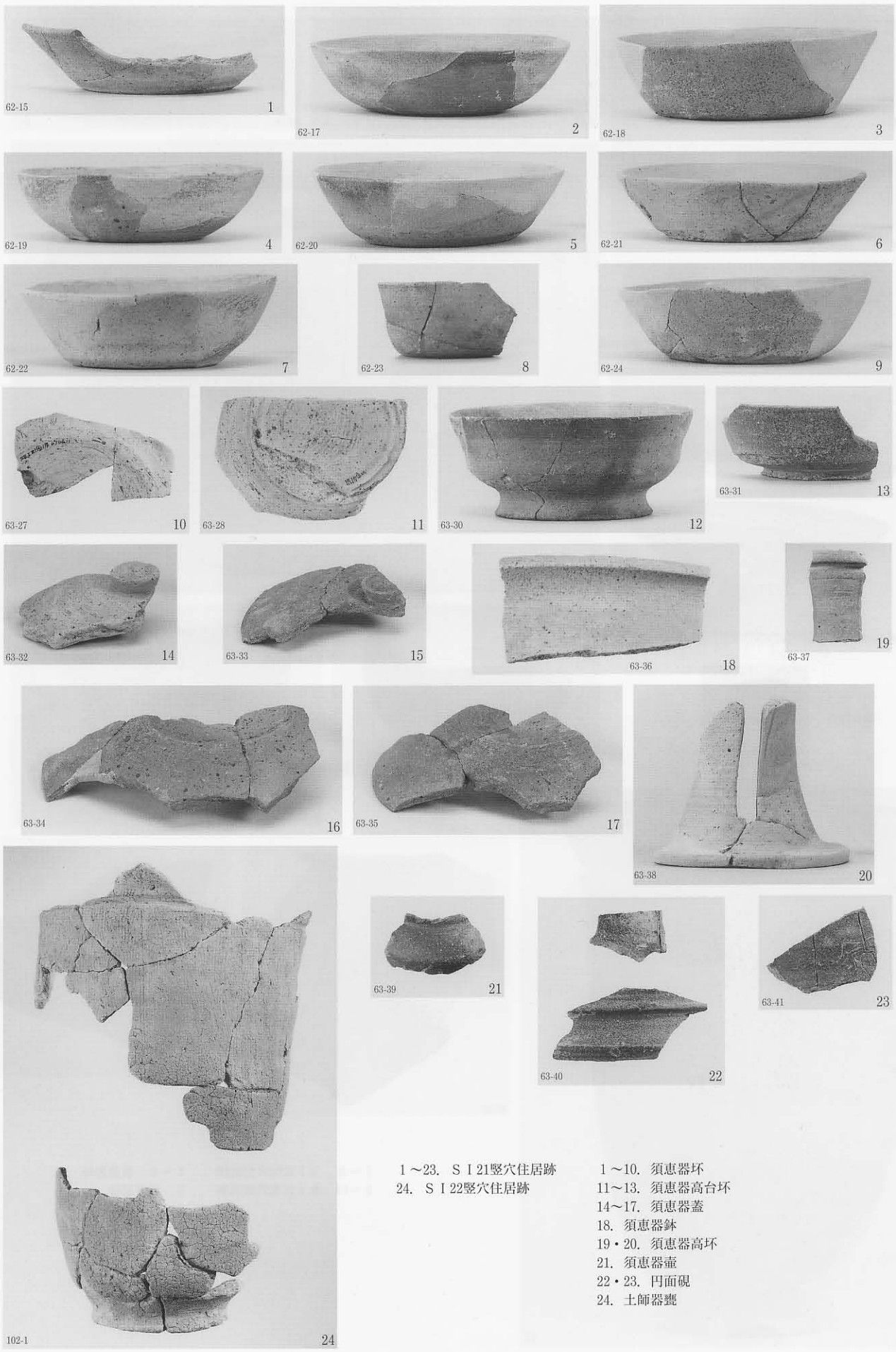






1～5．ＳＩ20竪穴住居跡　　1～4．須恵器坏
6～14．ＳＩ21竪穴住居跡　　5．須恵器鉢
6・7．土師器坏
8・9．土師器高坏
10．土師器壺
11・14．土師器鉢
12・13．土師器甕

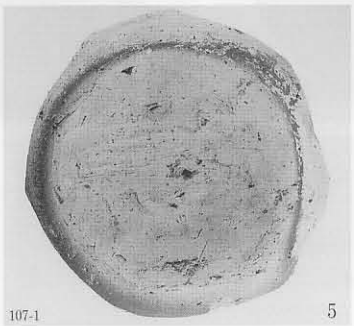
図版25　ＳＩ20・21竪穴住居跡出土土器

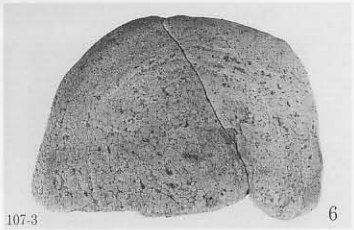


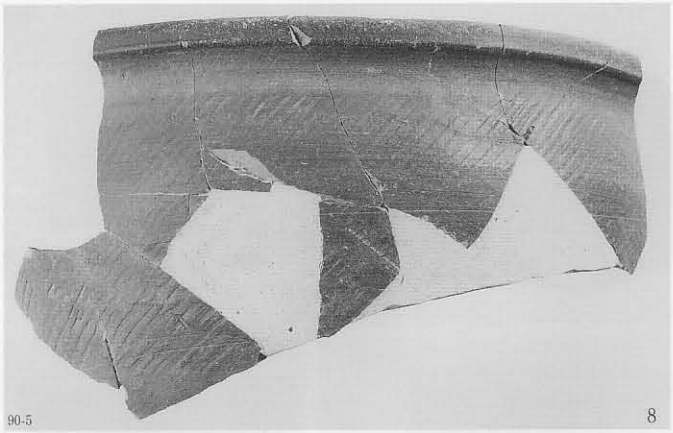
1～23. ＳＩ21竪穴住居跡
24. ＳＩ22竪穴住居跡

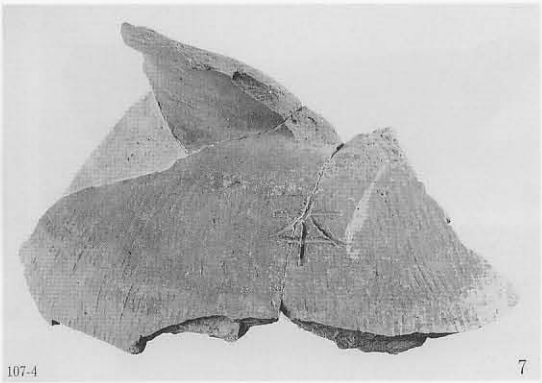
1～10. 須恵器坏
11～13. 須恵器高台坏
14～17. 須恵器蓋
18. 須恵器鉢
19・20. 須恵器高坏
21. 須恵器壷
22・23. 円面硯
24. 土師器甕

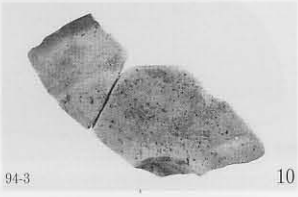
図版26　ＳＩ21・22竪穴住居跡出土土器

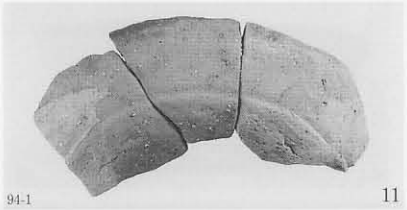


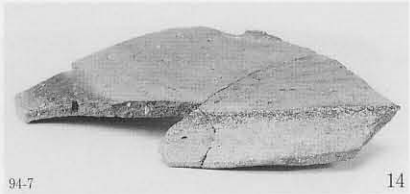


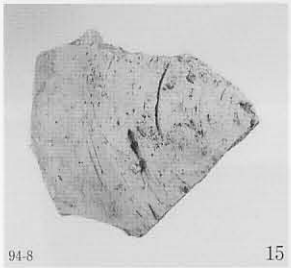


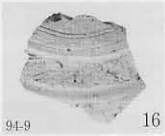


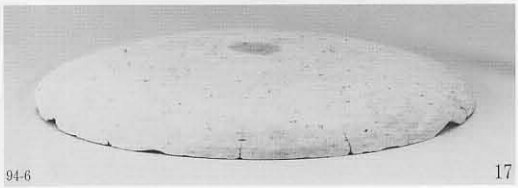












1～3．ＳＩ22竪穴住居跡
4．ＳＩ24竪穴住居跡
5～7．ＳＩ27竪穴住居跡
8・9．ＳＩ31竪穴住居跡
10～17．ＳＩ32竪穴住居跡

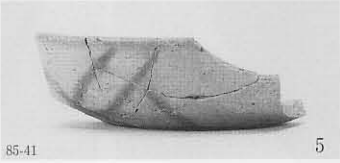
1・2・5・9．須恵器坏
3．須恵器壺
4．須恵器鉢
6．須恵器高台坏
7．須恵器甕
8．須恵器鉢
10．土師器高坏
11．土師器坏
12・13．土師器鉢
14・15・17．須恵器蓋
16．須恵器高台坏

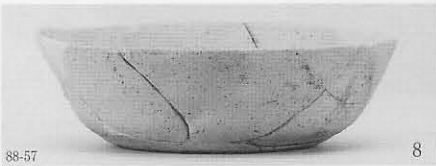
図版27　ＳＩ22・24・27・31・32竪穴住居跡出土土器

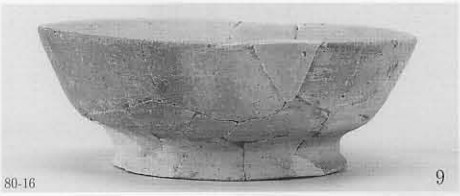
1～13. ＳＩ33竪穴住居跡
14～22. ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡

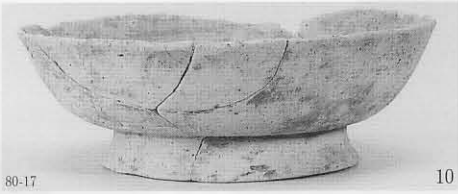
1～6・14・18. 土師器坏
7～9・12・19～22. 須恵器坏
10・11. 須恵器甕
13. 灰釉陶器皿
15・16. 土師器埦
17. 土師器甕

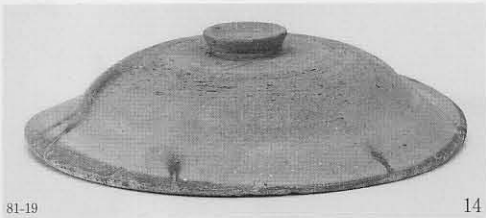
図版28　ＳＩ33・34Ｄ竪穴住居跡出土土器

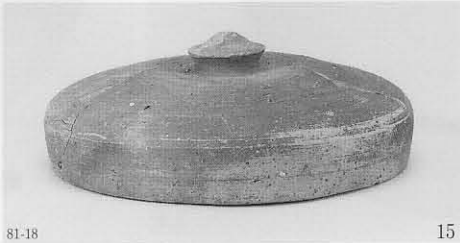






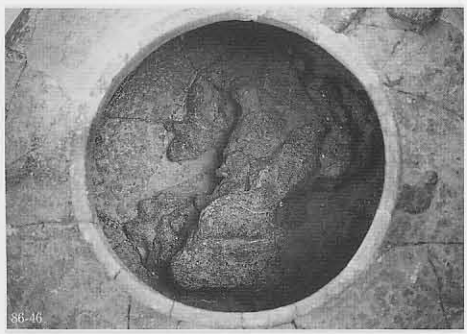






1～16. ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡

1～8. 須恵器坏
9～13. 須恵器高台坏
14・15. 須恵器蓋
16. 須恵器短頸壺



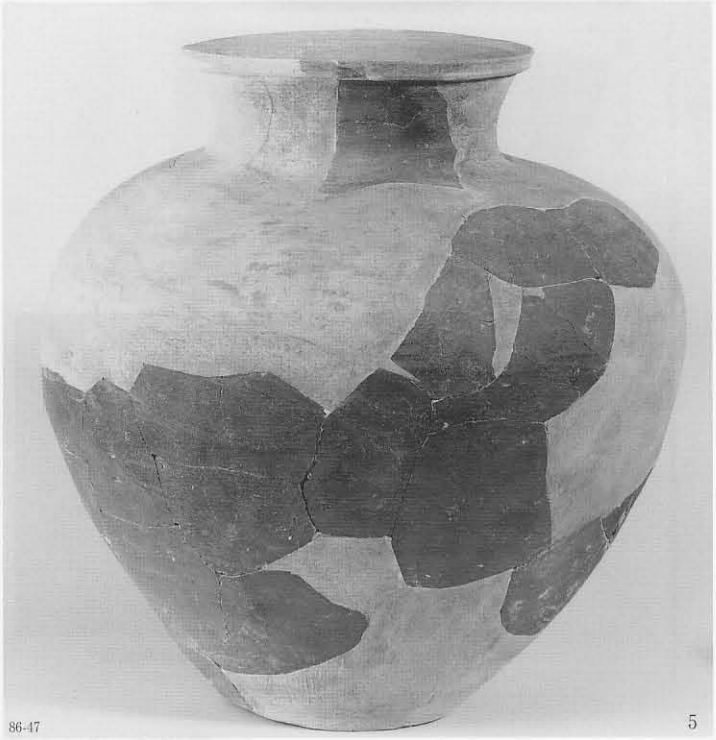
内面底面：崩落した窯壁片が溶着

図版29　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土土器

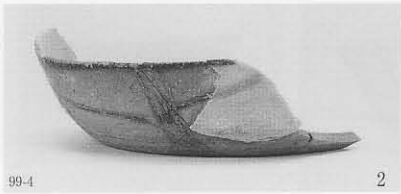
1～5．ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡

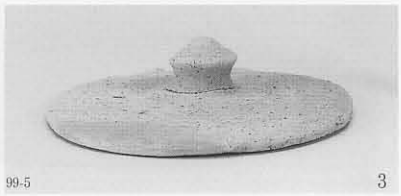
1・2．須恵器鉢
3～5．須恵器甕

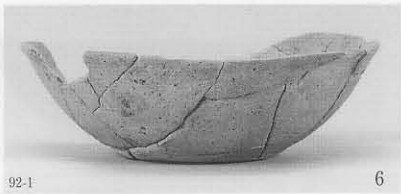
底部：融着物あり

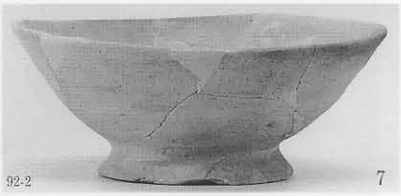


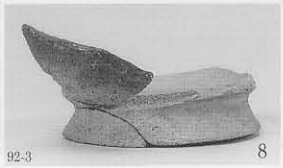
図版30　ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡出土土器

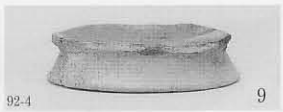


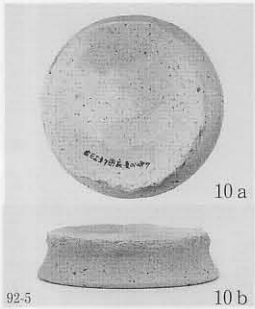


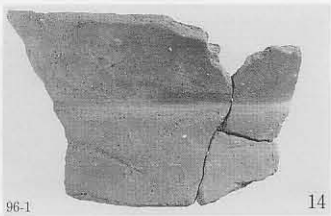


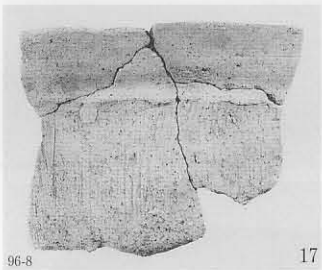


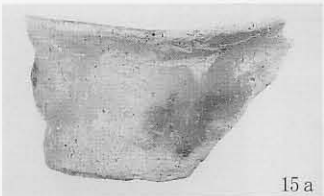


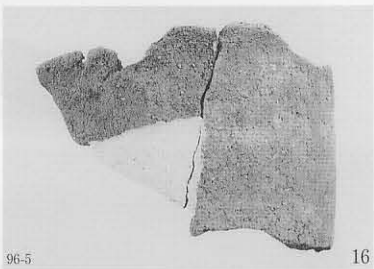


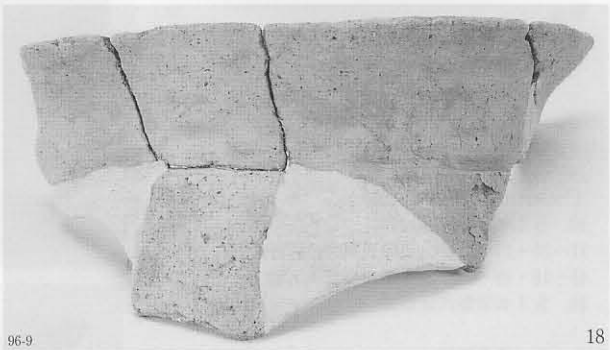


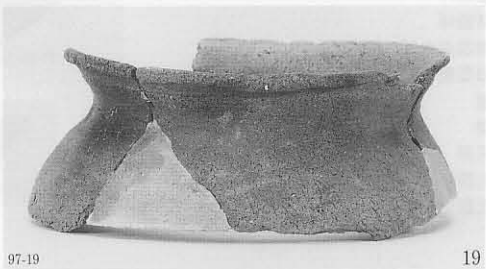












1～4．ＳＩ35竪穴住居跡
5．ＳＩ36竪穴住居跡
6～13．ＳＩ37Ｂ竪穴住居跡

1．土師器坏
2．須恵器坏
3．須恵器蓋
4．須恵器高台坏
5・11．須恵器壺
6．須恵器系土器坏
7～9．須恵器系土器高台坏
10．円盤状土製品
12．土師器耳皿
13～15．17～19．土師器甕
16．土師器鉢

図版31　ＳＩ35・36・37Ｂ竪穴住居跡出土土器

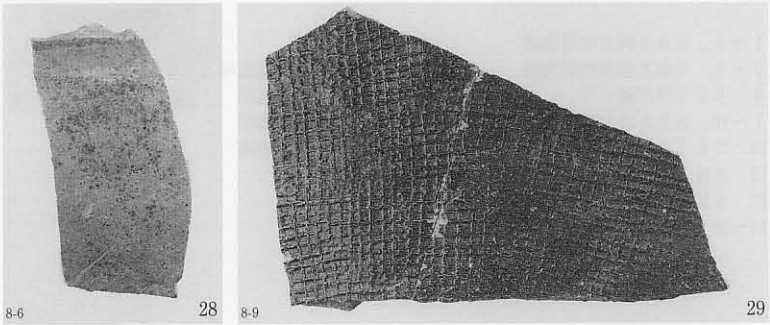
1～9．ＳＩ38竪穴住居跡
10．ＳＩ40Ａ竪穴住居跡
11～13・17・21．ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡
14～16・19・20．ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡
18．ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡

1～9．須恵器坏
10～13．土師器坏
14・20．土師器高台坏
15・17．土師器甕
16．土師器甑
18．土師器壺
19．土師器耳皿
21．須恵系土器坏
22．須恵系土器小型坏

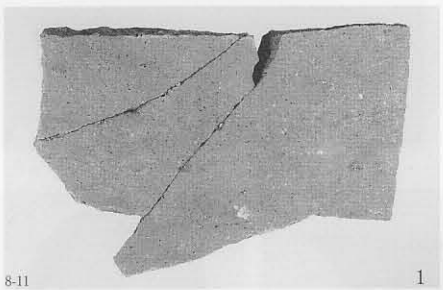
図版32　ＳＩ38・40Ａ・40Ｂ・40Ｃ・40Ｄ竪穴住居跡出土土器

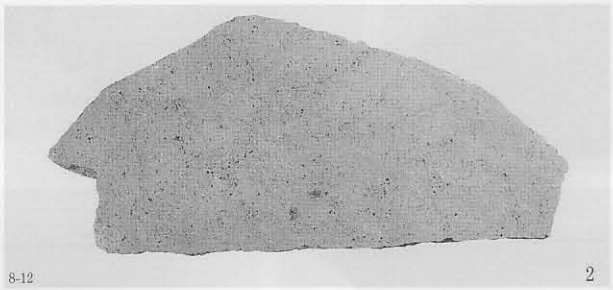
1．ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡
2・4～7・9．ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡
3・8．ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡
10～13・ＳＩ42竪穴住居跡
14．ＳＩ41竪穴住居跡
15・16．ＳＩ48竪穴住居跡
17・18．ＳＩ49竪穴住居跡
19～22．ＳＩ53竪穴住居跡
23．ＳＩ51竪穴住居跡
24～29．ＳＢ２掘立柱建物跡

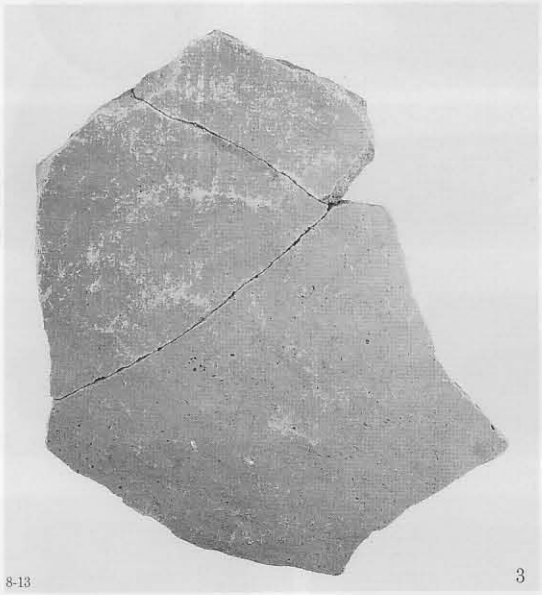
1・3・4．須恵系土器坏
2．須恵系土器小型坏
5．須恵系土器高台坏
6．円盤状土製品
7・12・15・19・20．須恵器坏
8．須恵器壷
9．製塩土器
10・11・14．土師器坏
13・25．須恵器高坏
16・17・22・23．須恵器高台坏
18・24．土師器鉢
21．土師器蓋
26．円面硯
27・29．須恵器甕
28．須恵器鉢

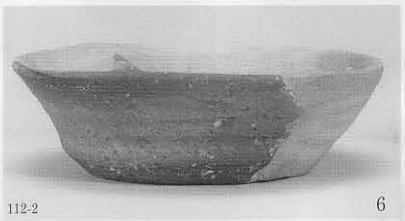


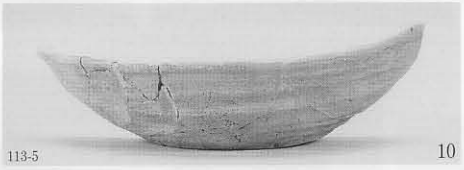
図版33　ＳＩ40Ｂ・40Ｃ・40Ｄ・41・42・48・49・51・53竪穴住居跡、ＳＢ２掘立柱建物跡出土土器

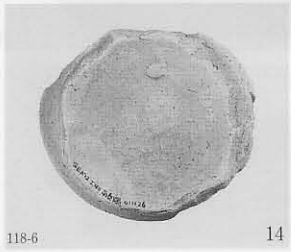


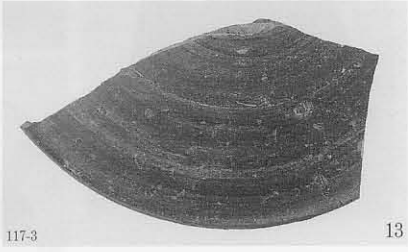


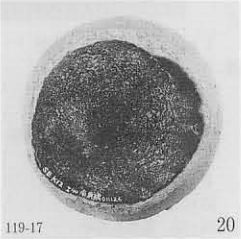












1～3．ＳＢ２掘立柱建物跡
4・5．ＳＢ６掘立柱建物跡
6．ＳＥ２井戸跡
7～10．ＳＥ３井戸跡
11．ＳＫ７土壙
12．ＳＫ５土壙
13．ＳＫ４土壙
14～22．ＳＫ12土壙

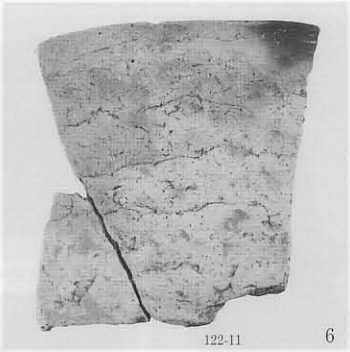
1～3．須恵器甕
4・11・12・22．土師器高坏
5・6・9・10．須恵器坏
7・15・16・17．土師器坏
8・18・20．土師器高台坏
13．須恵器蓋
14．円盤状土製品
17．須恵系土器坏
19・21．土師器耳皿

図版34　ＳＢ２・６掘立柱建物跡、ＳＥ２・３井戸跡、ＳＫ４・５・７・12土壙出土土器

119-25 1

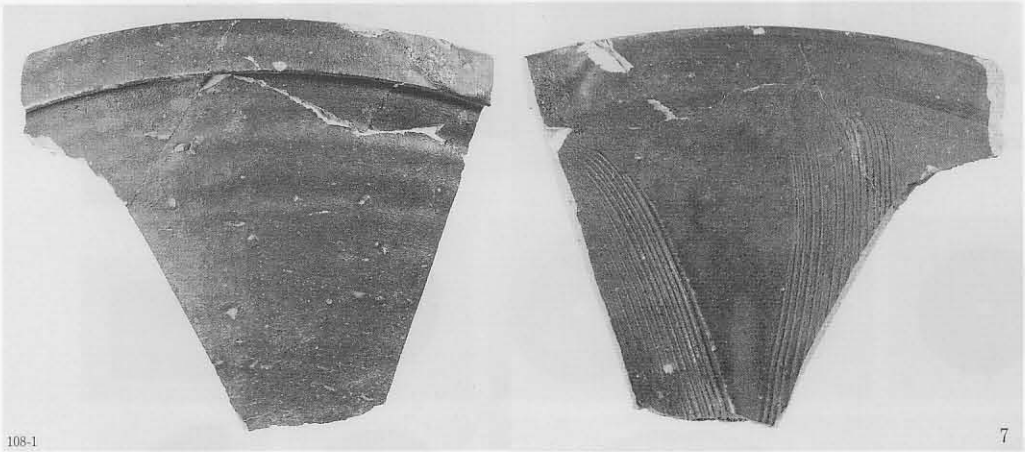
119-23 2

119-24 3


122-11 6

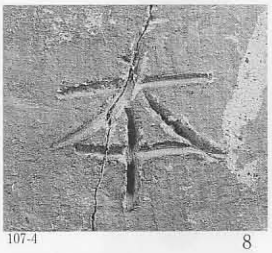
122-2 4

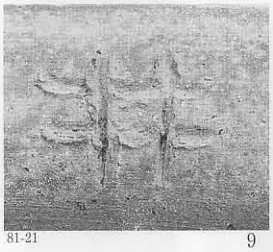
129-4 5

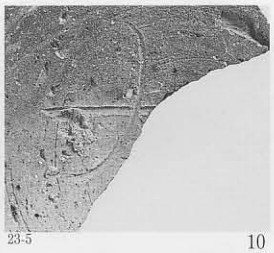

108-1 7

1～3．ＳＫ12
4．ＳＸ１
5．Ⅳ区
6・12．ＳＸ３
7．ＳＤ１暗渠
8．ＳＩ27
9・15・17・20．ＳＩ34D
10・13．ＳＩ６
11．表土
14・19．ＳＩ33B
16．ＳＩ20
18．ＳＩ21
21．ＳＩ41
22．ＳＫ17
23．ＳＫ３

1．須恵器坏
2・3・6．製塩土器
4．土師器坏
5．土師器高台坏
7．擂鉢
8～20．ヘラ書き土器
21～23．墨書土器


107-4 8

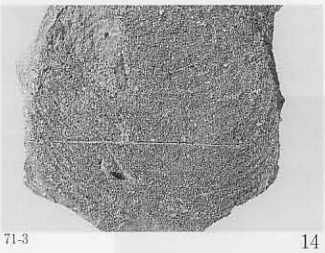

81-21 9


23-5 10

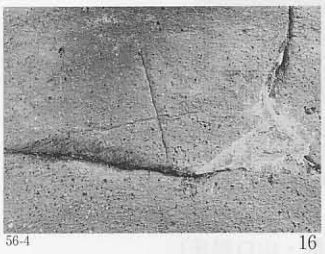
124-3 11

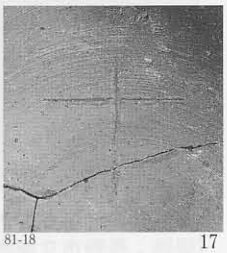
122-16 12

23-7 13

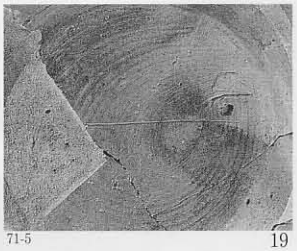

71-3 14

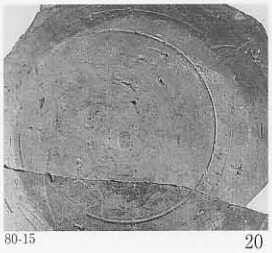
85-37 15

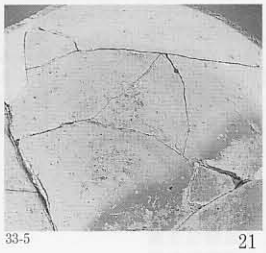

56-4 16


81-18 17

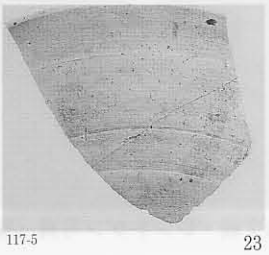
63-27 18


71-5 19

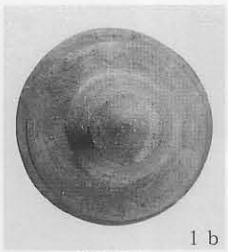

80-15 20


33-5 21

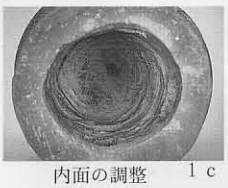
45-3 22


117-5 23

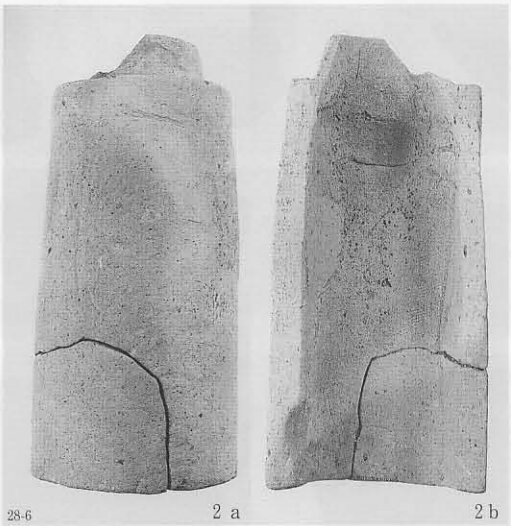
図版35　ＳＫ12土壙、ＳＸ１・３遺物包含層などの出土土器、ヘラ書き土器、墨書土器

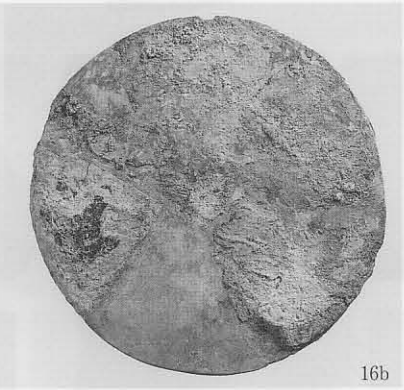


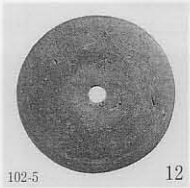
真上から



内面の調整







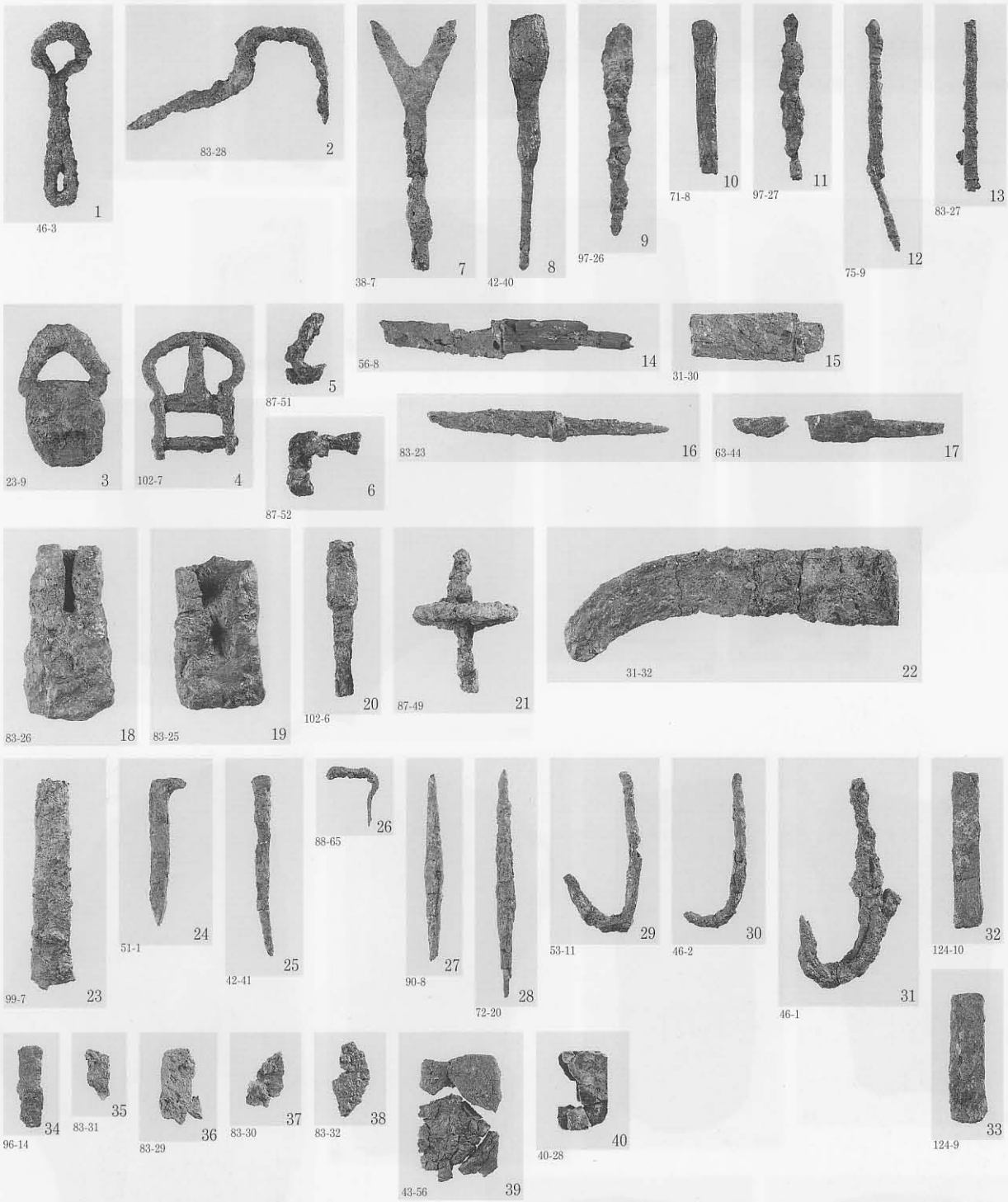
珠文鏡・レントゲン写真（提供：東北歴史博物館、実大）

長野県川柳将軍塚古墳出土珠文鏡
（提供：長野市立博物館・山口明氏）

1．ＳＩ24竪穴住居跡
2・3・5．ＳＩ８竪穴住居跡
4．Ⅳ区
6．表土
7・14・16．ＳＩ21竪穴住居跡
8．ＳＩ18竪穴住居跡
9・10．ＳＥ３井戸跡
11．ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡
12．ＳＩ22竪穴住居跡
13．ＳＫ１遺物包含層
15．ＳＫ４遺物包含層

1．三重小塔
2～6．丸瓦（縮尺１／６）
7・8・10～13．土製紡錘車
14・15．ガラス小玉（実大）
16・17．珠文鏡

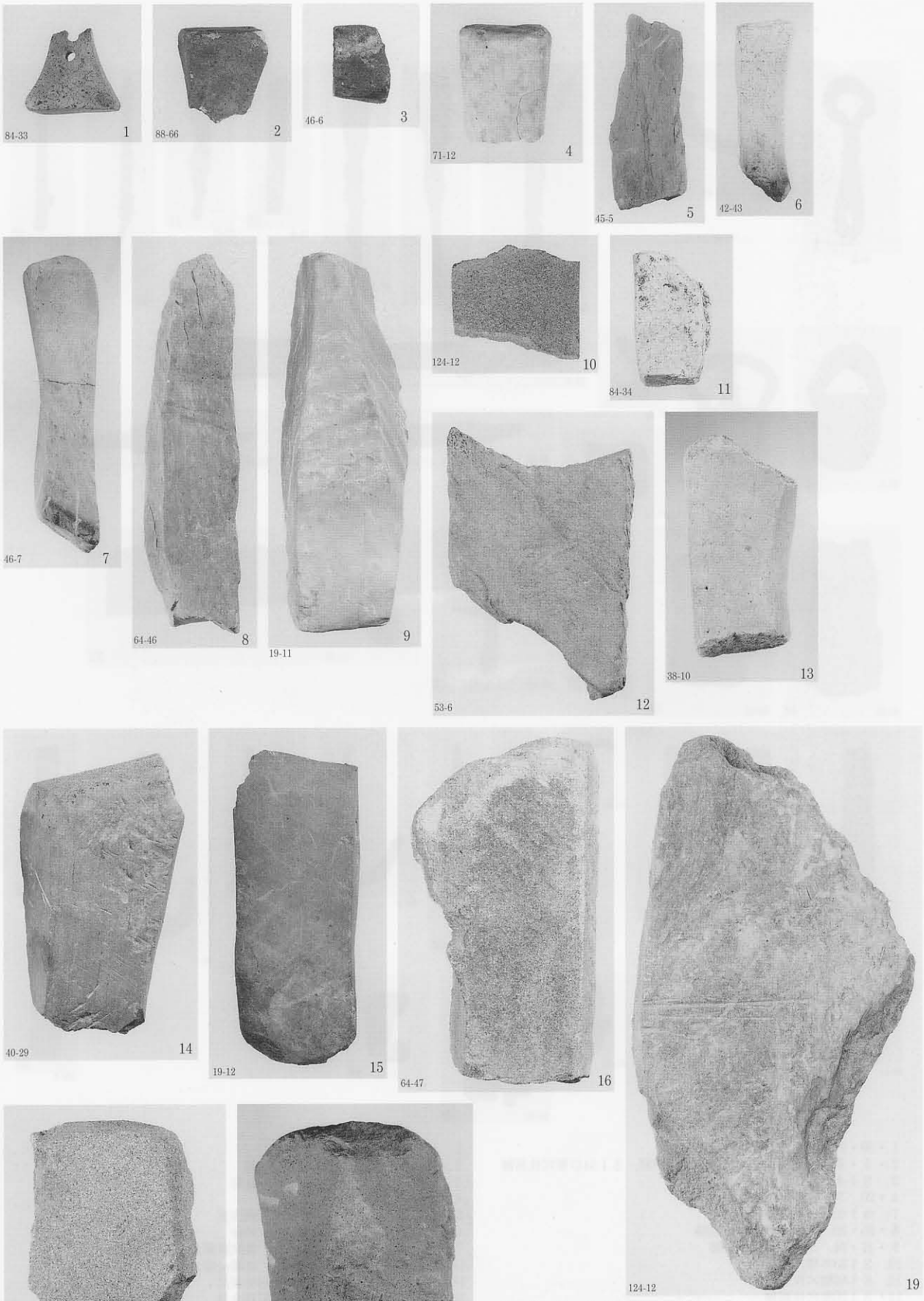
図版36　三重小塔丸瓦、土製紡錘車、ガラス小玉、珠紋鏡



1・30・31. ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡
2・5・6・13・16・18・19・26・35～37. ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡
3. ＳＩ６竪穴住居跡
4・20. ＳＩ22竪穴住居跡
7. ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡
8・25・39. ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡
9・11・34. ＳＩ38竪穴住居跡
10. ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡
12. ＳＩ53竪穴住居跡
14・ＳＩ20竪穴住居跡
15・20. ＳＩ22竪穴住居跡
17. ＳＩ21竪穴住居跡
22. ＳＩ８竪穴住居跡
23. ＳＩ35竪穴住居跡
24. ＳＢ６掘立柱建物跡
27. ＳＩ31竪穴住居跡
28. ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡
29. ＳＩ13竪穴住居跡
32・33. 表土
40. ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡

1. 引手
2. 壺鐙・吊手金具
3. 帯金具
4. 鉸具
5. 兵庫鎖
6. 環状金具
7～13. 鉄鏃
14～17. 刀子
18・19. 有袋鉄斧
20. 鉈
21. 紡錘車
22. 鎌
23. 鑿or鏨
24・25. 鉄釘
26. 鏃
27・28. 刺突具
29～31. 釣針
32～34. 板状鉄製品
35～38. 壺鐙or縁金具
39. 不明鉄製品
40. 銅製帯金具

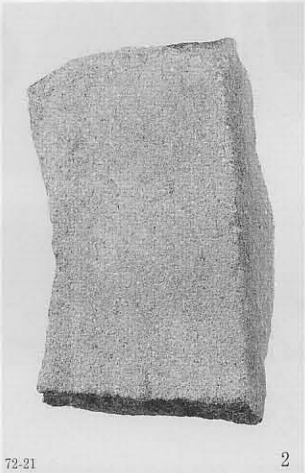
図版37　鉄製品（１～39）、銅製品（40）

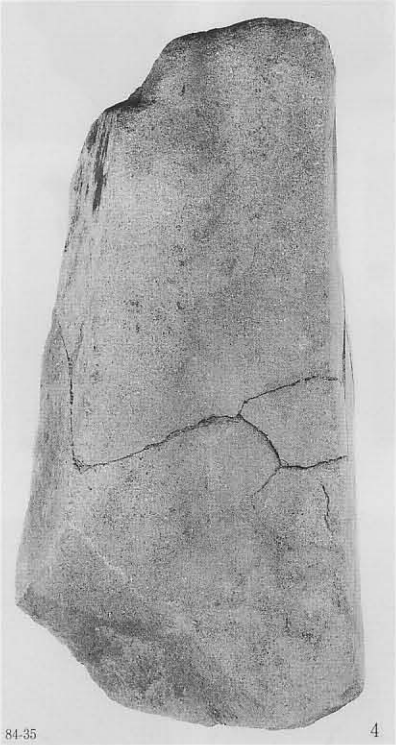


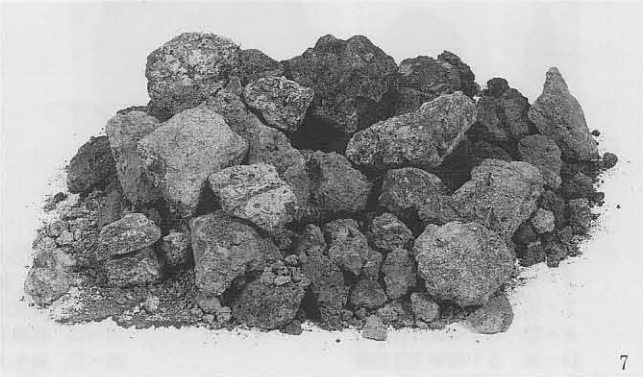
1・2・11. ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡
3・7. ＳＩ11Ｂ竪穴住居跡
4. ＳＩ33Ｂ竪穴住居跡
5. ＳＩ17竪穴住居跡
6. ＳＩ40Ｄ竪穴住居跡
8・16・17. ＳＩ21竪穴住居跡
9・15. ＳＩ１竪穴住居跡
10・19. 表土
12. ＳＩ16竪穴住居跡
13. ＳＩ40Ｂ竪穴住居跡
14. ＳＩ40Ｃ竪穴住居跡
18. ＳＩ15竪穴住居跡

1～19. 砥石

図版38 砥石



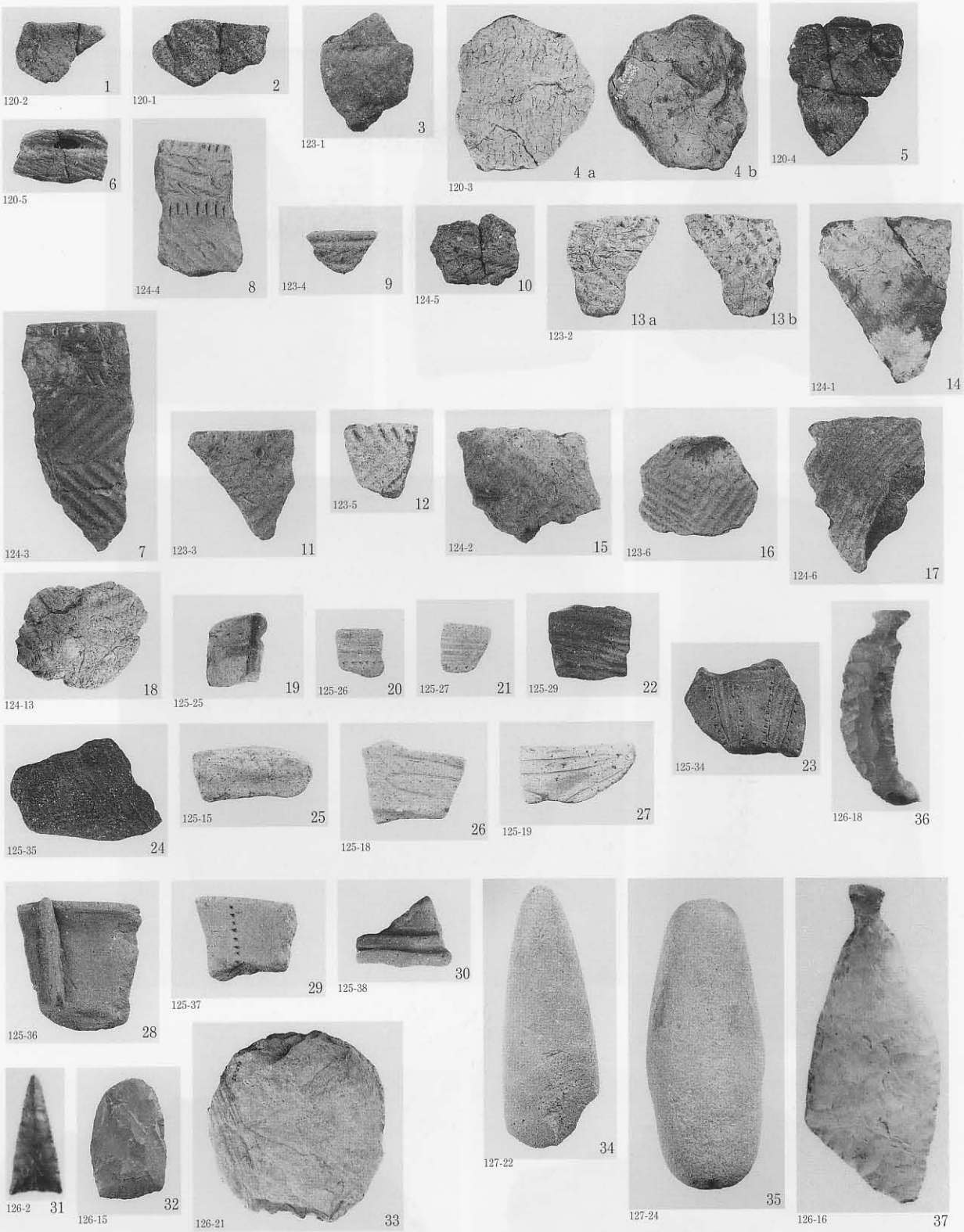




1．ＳＩ38竪穴住居跡
2・5．ＳＩ33Ｃ竪穴住居跡
3．ＳＩ53竪穴住居跡
4・6．ＳＩ34Ｄ竪穴住居跡
7．ＳＩ８竪穴住居跡

1～5．砥石
6・7．焼け落ちた葺土

図版39　砥石、葺土



1・2・4～6．ＳＫ19土壙
3・9・11～13・16・29・30．ＳＸ２遺物包含層
7・10・17～19・24・26・28・33・35．表土
8・22．ＳＩ38竪穴住居跡
14・36．ＳＩ32竪穴住居跡
15・21．ＳＫ10土壙
20．ＳＩ27竪穴住居跡
23．ＳＫ７土壙
25・27・34．ＳＫ５土壙
31・32．ＳＫ19土壙
37．ＳＢ６掘立柱建物跡

1～4．縄文土器（早期末）
5～15・16．縄文土器（前期初頭、上川名式）
17・18．縄文土器（早期末～前期）
19～24．続縄文土器（後北Ｃ２・Ｄ式）
25～27．弥生土器（天王山式）
28～30．土師器（古墳時代前期、塩釜式）
31．石鏃
32．スクレイパー
33．円盤状石製品
34．磨製石斧
35．磨石
36・37．石匙

図版40　縄文土器、続縄文土器、弥生土器、土師器、石器

報　告　書　抄　録

ふりがな	しんでんひがしいせきーさんりくじどうしゃどうけんせつかんれんいせきちょうさほうこくしょⅡー
書名	新田東遺跡－三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第191集
編著者名	柳澤和明・茂木好光・西村力
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町3-8-1　TEL022-211-3682
発行年月日	西暦　2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しんでんひがしいせき 新田東遺跡	みやぎけんものうぐんかほくまちいいのあざしんでん 宮城県桃生郡河北町飯野字新田	04561	66073	38度 31分 49秒	141度 16分 50秒	確認調査 2001.11.27～ 2001.12. 5 事前調査 2001. 4.23～ 2001.12.10	約8,500㎡	三陸自動車道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田東遺跡	散布地	縄文	土壙1基、遺物包含層1箇所	文土器、石器、弥生土器	縄文早～前期、弥生後期、続縄文
	集落跡	古墳	竪穴住居跡1棟	土師器	塩釜式期
	集落跡 西に隣接する桃生城（城柵）を支えた柵戸・鎮兵などの集落跡	奈良 桃生城存続期の天平宝字2年758）頃～宝亀5年774）7月	掘立柱建物跡14棟、竪穴住居跡29棟以上、井戸跡1基	土師器（坏・埦・高坏・蓋・鉢・甕）、須恵器（坏・高台坏・蓋・盤・高坏・鉢・短頸壺・甕）、墨書土器、焼成前ヘラ書き土器、北関東から搬入された須恵器、鉄製品（馬具・鉄鏃・刀子・鎌・斧・鉋・鑿または鑿・釣針・刺突具・紡錘車など）、土製品（百萬塔を模倣した須恵器質の三重小塔、紡錘車）、石製品（砥石・磨石・マド支脚石）、瓦（桃生城政庁で使用した丸瓦・平瓦を竪穴住居構築材に転用）	①西隣の城柵・桃生城を支えるために陸奥国内や関東諸国などから動員・移住させられた柵戸や鎮兵などの集落。②4小期の変遷がある。③上限年代が桃生城造営期の天平宝字2年（758）年頃、下限年代が桃生城廃絶の宝亀5年（774）7月。③B－1期は竪穴住居跡のみからなり、B－2期～B－4期は数棟の掘立柱建物跡と竪穴住居跡からなる。④B－2期の主屋を建てる際に永く伝世されてきた古墳時代前期の珠文鏡とガラス小玉を埋納。⑤B－3期の建物を建てる際の竪穴住居跡埋土から百萬塔を模した三重小塔と鉄鉢形の須恵器鉢が出土。⑥B期終末期の焼失住居跡7棟のうち2棟が土葺き屋根と判明。⑦竪穴住居跡は在地と関東系のものが混在。北関東系の須恵器も出土。遺構・遺物から『続日本紀』にみえる関東からの鎮兵や柵戸の存在を裏付けた。⑧馬具が出土し、『続日本紀』にみえる騎兵などの存在を裏付けた。⑨鉄鍛冶などの工房も存在。
	集落跡 一般集落	平安 9世紀後葉頃～10世紀中葉頃	竪穴住居跡16棟、井戸跡1期、土壙1基、遺物包含層1箇所	土師器、須恵器、須恵系土器、製塩土器、灰釉陶器、墨書土器、ヘラ書き土器、土製・石製紡錘車、砥石、鉄製品（鉄鏃・刀子・釘・釣針・刺突具など）、銅製帯金具、土製支脚	①2小期の変遷がある。C－1期は9世紀後葉頃、C－2期は10世紀中葉頃の集落。②桃生城存続期のB期集落とは性格が異なり、通常の一般集落となる。③C－1期の焼失竪穴住居跡1棟、C－2期の鉄鍛冶工房1棟がある。
	集落跡	近世以降	井戸跡1基、石組暗渠・開渠1条、平場1箇所	擂鉢、鉛製鉄砲玉	

宮城県埋蔵文化財調査報告書第191集

新　田　東　遺　跡

－三陸自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ－

平成15年３月31日印刷
平成15年３月31日発行

発　行　宮　城　県　教　育　委　員　会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号

印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24-24